
為漢夕叢取
晉劉生仿
明人意



大禮記念

昭和漢文叢書

日本外史新釋

利

文學士　賴成一　著



日本外史新釋　利册

目次

日本外史新釋利册　目次終

日本外史新釋 卷十

安藝　賴山陽先生原著　　賴成一解義

足利氏後記

後北條氏

叙説 本論は、我が國の形勢を論じ、形勢の地に據るものは成功し、そうでないものは滅んでゐる、だから天下の形勢は知らなければならぬことをいつてある。

外史氏曰、制馭天下、莫善於形勢。苟失形勢、不致分裂者鮮矣。昔在文武、因山海形便、以分七道、而王畿居中。桓武定鼎平安、四方環嚮。蓋亦盛矣。然王政之衰、方隅稍々有竊據不可制者。雖或速就討滅、而天下之勢漸趨分裂、以馴致鎌倉之覇。自是以

還、關東ノ形勢常ニ雄タリ二天下ニ一。而シテ京畿莫シ二之ニ能ク勝ツコト一。

訓讀 外史氏曰く、天下を制馭するは、形勢より善きはなし。苟も形勢を失へば、分裂を致さざる者鮮し。昔在、文武、山海の形便に因り、以て七道に分ち、而して王畿中に居れり。桓武、鼎を平安に定めて、四方環り嚮ふ。蓋し亦盛なるかな。然れども王政の衰ふる、方隅稍竊據して制す可からざる者あり。或は速に討滅に就くと雖も、而も天下の勢、漸く分裂に趨き、以て鎌倉の覇を馴致す。是より以還、關東の形勢、常に天下に雄たり。而して京畿、之に能く勝つことなし。

通釋 外史氏が曰ふのに、天下を取り押へ治めて行くには、土地の形勢が第一番で、それより善いものはない。もしも形勢といふ點に於て失敗すると、大抵其の國家は分裂を來すやうになる。（分裂しないものは少い）昔、文武天皇は山海の形勢便利なところを利用されて日本を七道に分けられ、そして、王畿は、その眞中に在つた。桓武天皇は都を平安に定められ、四方から取り卷いて之に向ふやうになされた。思ふに亦隨分盛んなことではあつた。併し王政が衰へて來ると片隅に土地を盜んで立て籠り、押へつける事の出來ぬ者が生じて來た。（安倍賴時）。早く討ち滅ぼされたのではあるけれども、併しこれからといふものは、天下の勢がだん／＼分裂して來て鎌倉幕府の覇業を成立させるやうな機運に立ち至らしめた。これから後は關東の形勢は常に天下にすぐれたものになつた。而して京畿方面は、之に勝つことは出來なかつたのである。

語釋 定レ鼎（夏の禹王、九州の金を集め九鼎を鑄て、國都に安置したことより、都を奠めることに用ふ。）

餘論 以上第一段、朝廷は形勢を失はれ、天下の形勢が關東に歸したことを叙ぶ。これ本論の主意。

余嘗歷遊東西、考其山河所起伏、以爲我邦地脈自東北而來、漸西漸小。譬之人身、陸奥・出羽其首也。甲斐・信濃其脊也。關東八州、及東海諸國、其胸腹、而京畿其腰臀也。至山陽・南海以西、則股耳、脛耳。故居其腰臀、可以制其股脛、不可以制其腹脊。且平安四戰之地、天下有事、必先被兵。不如鎌倉之獨以一面西制中原也。

訓讀 余嘗て東西に歷遊し、其の山河の起伏する所を考へ、以爲へらく、我が邦の地脈は、東北よりして來り、漸く西し、漸く小なり。之を人身に譬ふるに、陸奥・出羽は、其の首なり。甲斐・信濃は、其の脊なり。關東八州、及び東海の諸國は、其の胸腹、而して京畿は其の腰臀なり。山陽・南海以西に至つては、則ち股のみ、脛のみ。故に其の腰臀に居て、以て其の股脛を制す可きも、以て其の腹脊を制す可からず。且つ平安は四戰の地、天下事あれば、必ず先づ兵を被る。鎌倉の獨り一面を以て、西、中原を制するに如かざるなり。

通釋 自分は嘗て東西に遊歷して、その山河の起き伏しゝて居る樣を見て思ふのに、わが日本の地脈は、東北から來てゐて、西に行く程段々小さくなつてゐる。之を人の身體にたとへると陸奥・出羽は其の首である。甲斐・信濃は其の背である。關東八州及び東海道の國々は其の胸や腹に當り、そして京畿は腰尻である。山陽・南海から以西は股や脛に過ぎない。だからその腰や尻の所に居て、股や脛を押へつけることは出來るが腹や背を押へつけることは出來ないものである。それに平安城は地勢が平坦で、四方から攻め立てるのに都合のよい所で、天下に何か事件が起れば第一に兵を被る所である。鎌倉がたゞ一方口で西に中原を押へつけてゐるがやうな具合には行

かないのである。

語釋 中原（中國の意、ここでは畿内の總稱）

至於元弘之時、能一擧取北條氏者、由海内怨畔、禍起其腹心。非能以西勝東也。方其盛時、以鎌倉爲根本、而置府於京師・筑紫。其制天下、如臂使指。而足利氏反其所爲、舍彼居此謬矣。然亦有不得已也。彼慮於南朝、不能遠居鎌倉。故鎭以子弟、藩屛室町。而適啓爭端、又因其内訌、覆之。而室町遂自是亂矣。是其不能制馭四方、以襲王家之敗者、非失形勢故哉。

訓讀 元弘の時に至つて、能く一擧して北條氏を取れる者は、海内怨畔して、禍、其の腹心に起るに由る。能く西を以て東に勝つに非ざるなり。其の盛時に方り、鎌倉を以て根本と爲し、而して府を京師・筑紫に置く。其の天下を制する、臂の指を使ふが如し。而して足利氏は、其の爲す所に反し、彼を舍て此に居るは、謬れり。然れども亦已むを得ざる有るなり。彼れ南朝を慮り、遠く鎌倉に居る能はず。故に鎭むるに子弟を以てし、室町に藩屛たらしむ。而して適爭端を啓き、又其の内訌に因り之を覆す。而して室町遂に是より亂る。是れ其の四方を制御する能はずして、以て王家の敗を襲ぐ者は、形勢を失ふ故にあらずや。

通釋 元弘の際に一度で雜作なく北條氏を討ち取れたのは天下が北條氏に怨み反いてゐて、禍がその腹心、新

田・足利などから起つたからである。これは西を以て東に勝つことが出來たといふのではない。北條氏はその盛んな時に方つて鎌倉を根本となし、そして、役所を京都や筑紫に置いてゐた。當時、北條氏が天下を制御することは臂で指を使ふがやうなもので、容易なものであつた。（形勢の便を占めてゐたからそれが出來た）。しかるに、足利氏は北條氏のやつたことに反し、鎌倉を棄てて京都に居たのは間違ひであつた。しかし、これには止むを得ないこともあつたのである。彼れ足利氏は南朝方のことが心にかゝり、遠く鎌倉に離れて居ることが出來なかつたのである。だから鎌倉を鎭めるのには、その子弟（基氏）を以てし、室町（本家）の藩屏とならしめた。而してそのことが却つて爭の緒を開く本となり、又遂に鎌倉の內亂を利用して之を顚覆した。しかし、室町自身もこれから亂れたのである。かくの如く、四方を制御することが出來ないで、皇室の御失敗の跡を嗣いで、同じやうな失に陷つたのは、その形勢の便を失つて、鎌倉に居ないで京都に居たからではあるまいか。

語釋　元弘之時（後醍醐天皇の元弘三年、新田義貞が鎌倉を攻めた時をさす。）○腹心（義貞が上野から起つたことをさす。）○置府（兩六波羅・鎭西に探題府を置いた。）

餘論　以上第二段、平安の形勢は鎌倉に及ばない。だから源氏・北條が天下を制したのである。朝廷と足利とはそれが出來なかつた。足利の季世、戰亂となつたのは全く形勢を失つたからであることをいふ。

及其季世、七道豪傑更相吞噬、至元龜・天正之間、海內裂爲八九。其最大者四氏。曰北條氏、曰武田氏、曰上杉氏、曰毛利氏。毛利氏起於安藝、而幷山陽・山陰十三州、疆土尤廣。其次爲北條氏。北條氏取伊豆據之、遂幷關東八州。武田氏起於甲斐、幷信

濃・飛驒・駿河・上野、上杉氏起於越後、幷越中・能登・加賀、以及莊內・會津。皆爭務耕戰、帶甲數萬、積粟如山。龍驤虎視、角立東西、莫不有包擧宇內之心。

訓讀 其の季世に及び、七道の豪傑更相呑噬し、元龜・天正の間に至つて、海內裂けて八九と爲る。其の最も大なる者四氏あり。曰く北條氏、曰く武田氏、曰く上杉氏、曰く毛利氏なり。毛利氏は、安藝より起り、而して山陽・山陰十三州を幷せ、疆土尤も廣し。其の次を北條氏と爲す。北條氏は、伊豆を取り之に據り、遂に關東八州を幷す。武田氏は、甲斐より起り、信濃・飛驒・駿河・上野を幷せ、上杉氏は、越後より起り、越中・能登・加賀を幷せ、以て莊內・會津に及ぶ。皆爭つて耕戰を務め、帶甲數萬、積粟、山の如し。龍驤虎視、東西に角立し、宇內を包擧するの心有らざるはなし。

通釋 足利氏の末世になると、七道の豪傑がかはる〴〵呑み合ひ嚙み合ひをやり出し、元龜天正の頃になると天下は裂けて八九となつた。その中で、最も大きな國が四氏あつた。曰く北條氏、曰く武田氏、曰く上杉氏、曰く毛利氏。毛利氏は安藝から起つて山陽・山陰の十三ケ國を併せ、その領土は中でも一番廣かつた。その次が北條氏である。北條氏は伊豆を取つて、之に據り、遂に關東八州を併せ取つた。武田氏は甲斐から起つて、信濃・飛驒・駿河・上野を併せ、上杉氏は越後から起つて越中・能登・加賀を併せ、莊內・會津にまで及んだ。これ等の國は皆爭つて、平時は耕作し、戰時には戰ふといふやり方で、武裝の兵が數萬もあり、積んだ兵糧は山のやうであつた。皆龍のやうに擧がり、虎のやうに睨み、東西に並び立ち天下を一とくるめにしようといふ心の無いものはなかつた。

【語釋】元龜・天正（正親町天皇の年號。）○爲二八九一（下文の四氏の外に、九州に島津・大友、四國に三好、中國に大内・尼子、東海に今川、關東に千葉・里見。）○莊内（出羽）

【餘論】この節は四氏の強大なることをいふ。

夫北條氏據二天下之胸腹一、而不レ能下一出二其兵一以窺中中原上者、武田・上杉據二其脊一、以橫二塞其衝一也。而二氏勢力相敵、相持不レ決。又不レ暇レ圖二其西一。毛利氏疆土雖レ廣、以二其股脛一向二其腰臂一、固不レ能レ抗二衡中原一也。織田氏介二立四氏之中一、先二其西一而後二其東一、避レ強擊レ弱、舍レ險取レ夷。是以用レ力少而成レ功速。豐臣氏亦因二其遺謀一、遂得三以致二合一一焉。織田・豐臣之於二形勢一、如レ有レ察焉。而至二其所一レ居、與二足利氏一、未三嘗有二大異同一也。其所下以既合又裂、不レ能三久馭二天下一者上、亦出二於此一邪。

【訓讀】夫れ北條氏は、天下の胸腹に據り、而も一たび其の兵を出だして以て中原を窺ふ能はざる者は、武田・上杉其の脊に據り、以て其の衝を橫塞すればなり。而して二氏の勢力相敵し、相持して決せず。又其の西を圖るに暇あらず。毛利氏、疆土廣しと雖も、其の股脛を以て其の腰臂に向ふ、固より中原に抗衡する能はざるなり。織田氏、四氏の中に介立し、其の西を先にして其の東を後にし、強を避け弱を擊ち、險を舍て夷を取る。是を以て力を用ふる少く、而して功を成す速なり。豐臣氏も亦其の遺謀に因り、遂に以て合一を致すを得たり。織田・豐臣の形勢に於ける、察する有るが如し。而して其の居る所に至つては、足利氏と未だ嘗て大異同あらざるなり。

其の既に合して又裂け、久しく天下を馭する能はざる所以の者も、亦此に出づるか。

【通釋】夫れ北條氏が天下の胸や腹に當る所に據つて居りながら、而も一度として其の兵を繰り出して中原を窺ふことのなかつたのは、武田・上杉の二氏が其の脊のところに據つてゐて、中原に乘り出す通路を塞いで居たからである。そして武田・上杉二氏の勢力も相匹敵してゐて、互に持ち合ひ勝負が決まらなかつた。從つて二氏も西の方を圖る暇はなかつたのである。毛利氏は領土は廣いが股や脛に當る所を以て腰や尻に當る京畿に向つてゐたのであるから形勢上、とても中原の地で鎬を削り合ふことは出來なかつたのである。織田氏は上述の毛利・北條・武田・上杉四氏の間に挾まり立つて、攻め易い西を先きにして、東を後廻しにし、强きを避けて弱きを擊ち、險しい所を棄てゝ平かな所を取つた。だから力を費すことは少く、功を成すことは早かつたのである。豐臣氏も亦織田氏の殘した謀に從つて、遂に天下を合一することが出來たのである。織田・豐臣二氏の、形勢に對するやり方は隨分考へて居つたものゝやうである。しかし、その根據としてゐた處は矢張り京畿地方で、その點は足利氏とそんなに違ひがなかつたのである。二氏がそのやうに既に合した後、又分裂して、長い間天下を制馭することが出來なかつた譯も矢張り根據が京畿地方であつたといふことによるのであらう。

【語釋】舍レ險取レ夷（甲信を捨て、畿内中國の平地を取ること。）○所レ居（信長は岐阜・安土、秀吉は大阪。）

【餘論】此の節は四氏の形勢を論じて、織・豐の形勢に論及したのである。

夫織田・豐臣代ニ足利氏ニ者也。而其所レ有土地山河、不レ能三大過ニ四氏ニ。或大過レ之、而不レ能レ及ニ其久ニ也。要レ之此四氏者、乘ニ時衰亂ニ、各奮ニ智勇ニ、以雄ニ據一方ニ。一方之民、倚以享ニ一日

之安。不可與他小國庸主徒糜爛其民而莫所成者同日語矣。則其於天下非無功德。又不得以足利氏之叛臣也。若曰四氏所據、孰非王土。則時勢之變遷至於此。非一日之故、非所以咎於四氏也。至其經營一方、謀臣猛將之跡、有足紀者。吾故列叙之、詳其盛衰興壞之由、使有國家者有所鑑焉。而於天下形勢分合之際、又足以覽歟。

訓讀 夫れ織田・豐臣は、足利氏に代る者なり。而して其の有する所の土地、山河は、大に四氏に過ぐる能はず。或は大に之に過ぐるも而も其の久しきに及ぶ能はず。之を要するに、此の四氏は、時の衰亂に乘じ、各智勇を奮ひ、以て一方に雄據す。一方の民も侍つて以て一日の安きを享く。他の小國の庸主、徒に其の民を糜爛し、而して成す所なき者と日を同じうして語る可からず。則ち其の天下に於ける、功德なきに非ず。又目するに足利氏の叛臣を以てするを得ざるなり。若し四氏の據る所、孰れか王土に非ざると曰はば、則ち時勢の變、遂に此に至る、一日の故に非ず、四氏を咎むる所以に非ざるなり。其の一方を經營するに至つては、謀臣猛將の跡、紀するに足る者あり。吾れ故に之を列叙し、其の盛衰興壞の由を詳にし、國家を有する者をして鑑みる所有らしむ。而して天下の形勢、分合の際に於て、又以て覽るに足らんか。

通釋 一體織田・豐臣の二氏は足利氏に取つて代つて天下を掌握したものである。所がその實際に所有して居

た土地山河は四氏以上に廣大なものではあり得なかつた。（織田氏）。或は四氏以上廣大であり得ても久しく持ち傳へることは出來なかつた。（豐臣氏）。要するにこの四氏は當時の衰亂に付け込んで各〻智勇を奮ひ、一方に雄據したのである。又その一方の人民も之にたよつて、一時的の安穩を享受してゐたのである。その他の小さな國の凡庸の君主が無暗に戰爭をして、人民を苦しめ、何等成功する所もなかつたものとは同日の論ではない。して見れば此の四氏は天下に對して決して功德がなかつたといふ譯はない。又之を名づけて足利氏の叛臣といふ譯にも行かない。若し四氏の據るところは皆王土ではないか、（その王土を取つたことは不都合である）といつて彼等を皇室の賊臣として見て終へば見られるやうなものの、それは時勢の變遷といふもので、次第にそんな事に成つたので、決して昨日今日の問題ではなく、一概に四氏を咎める譯にも行かないのである。彼等は其の一方を經營した點に就て見ると、その部下の猛將謀臣の事蹟で隨分記錄に値するものがある。だから自分は彼等の家の盛になつたり衰へたり起つたり、亡んだりした來歷を明細に書き記して國家を所有する人君をして之を手本とし自ら戒めとさせようと思ふのである。その上又天下の形勢といふものはどんなものかといふことや、分裂合一はどんな時に起るものであるかといふことに就ても十分覽るに足るものがあるだらうと思ふのである。

語釋　糜爛（粥の煮え爛れたること。民を傷めることにいふ。）

餘論　以上第三段、四氏の形勢の得失を論じ、其の人民を安堵せしめた功の沒することの出來ないことを論じてある。

後北條氏ハ、舊ト稱ス二伊勢氏ト一。伊勢氏ハ出ヅ二於平維衡ヨリ一。維衡生ミ二正度ヲ一、正度生ム二季衡及ビ正衡ヲ一。正衡ハ

實太政大臣清盛之曾祖。季衡任上總介、子孫世居伊勢。其十一世孫貞行、除伊勢守、仕足利義滿爲奏者、掌出納。子貞國。孫貞親相繼任其職、甚有威權。貞親弟貞藤、除備中守、娶尾張人横井某女、生男于任處。稱新九郎。及長、命名曰長氏、爲足利義視近士。應仁中、從奔伊勢。及義視還京師、長氏獨留不從。

訓讀 後北條氏は、舊と伊勢氏と稱す。伊勢氏は平維衡より出づ。維衡・正度を生み、正度・季衡及び正衡を生む。正衡は實に太政大臣清盛の曾祖なり。季衡、上總介に任ぜられ、子孫世〻伊勢に居る。其の十一世の孫貞行、伊勢守に除せられ、足利義滿に仕へて、奏者となり、出納を掌る。子の貞國、孫の貞親相繼いで其の職に任ぜられ、甚だ威權あり。貞親の弟・貞藤、備中守に除せられ、尾張の人横井某の女を娶つて、男を任處に生む。新九郎と稱す。長ずるに及び、名を命じて長氏と曰ひ、足利義視の近士と爲る。應仁中、從つて伊勢に奔る。義視、京師に還るに及び、長氏獨り留つて從はず。

通釋 後北條氏はもと伊勢氏と稱した。伊勢氏は、平維衡から出た。維衡は正度を生み、正度は季衡及び正衡を生んだ。この正衡は、實に太政大臣清盛の曾祖である。季衡は上總介に任ぜられ、その子孫は代々伊勢に居た。季衡より十一世の孫貞行は伊勢守に叙せられ、足利義滿に仕へて取り次ぎ役となり、會計係を掌つた。その子は貞國、その孫は貞親で相繼いで奏者の職に任ぜられ、大層威權があつた。貞親の弟貞藤は備中守に任ぜられ、尾張の人横井某の娘を娶り、赴任先きの備中で男子を生んだ。新九郎といつた。これが長じて後長氏といひ、足

利義視の近習となつた。應仁中、義視に從つて、伊勢に走つた。義視は京都に還るやうになつたが、長氏だけは其の土地に留つて從はなかつた。

【語釋】十一世（季衡、盛光、盛行、頼宗、頼俊、俊經、俊繼、盛繼、貞繼、貞信、貞行。）

當是時、足利氏權臣、山名氏・細川氏、各樹私黨、鬪于京師。將軍義政不能制也。長氏聰明有大志、陰散財結豪傑。一日謂衆曰、「天下之事可知已。成功名、取富貴、舍今而何。顧關東八州、地勢高隆、士馬精強。古稱用武之地。而永亨以來無復定主。苟得割據于此、天下可圖也。吾欲與諸君偕東、因機制變、謀有所樹立。諸君豈有意乎」。衆奮從之。後土御門天皇文明八年、長氏與荒木兵庫・多目權平・山中才四郎・荒川又四郎・大導寺太郎・有竹兵衞六人、仗劍東行。

【訓讀】是の時に當り、足利氏の權臣山名氏、細川氏、各私黨を樹てて、京師に鬪ふ。將軍義政、制する能はず。長氏、聰明にして大志あり。陰に財を散じて、豪傑に結ぶ。一日、衆に謂つて曰く、「天下の事知るべきのみ。功名を成し富貴を取るは、今を舍てて何れぞや。顧ふに關東八州は、地勢高隆にして、士馬精強なり。古より武を用ふるの地と稱す。而して永享以來、復定主なし。苟も此に割據するを得ば、天下圖るべきなり。吾れ諸君と偕に東し、機に因り變を制し、謀つて樹立する所あらんと欲す。諸君豈に意ある乎」と。衆奮つて之に從ふ。

後土御門天皇の文明八年、長氏、荒木兵庫・多目權平・山中才四郎・荒川又四郎・大導寺太郎・有竹兵衛の六人と、劍に仗つて東行す。

【通釋】當時、足利氏の權臣、山名氏、細川氏は各々私の徒黨を組んで京都で戰つてゐた。將軍義政は之を制御することも出來なかつた。長氏は、性質さとく、頭腦明晰で大志があつた。だから、ひそかに金錢を散じて豪傑と結托してゐた。ある日、多勢の者に向つて曰ふには「天下の事たる、その成り行如何は、分かり切つてゐる。功名を成し、富貴を取るのは今の時を措いて他に又とない。思ふに關東八州は土地も高く、武士も馬もすぐれてゐて強い。昔から武を用ふる土地だといはれてゐる。永亨以來は、この地方にこれと云つて定まつた主君もなかつた。苟も此處に土地を取つて立て籠ることが出來たら天下を取ることは雜作のないことだ。自分は諸君と共に東に向ひ、機會を利用し、應變の處置を取つて、一家を起すことを謀らうと思ふ。諸君にはなんと之に同意する心はないか」と。多勢の者は奮つて之に從つた。後土御門天皇の文明八年、長氏は、荒木兵庫・多目權平・山中才四郎・荒木又四郎・大導寺太郎・有竹兵衛の六人と劍を杖ついて東へ向つた。

終ニ至リ二駿河一ニ、依ル二今川義忠一ニ。義忠ハ其ノ姉ノ夫也。會〻義忠卒シ、子氏親猶ホ幼ナリ。將士分離シ、各〻自ラ爭鬪ス。長氏ノ姉抱イテ二氏親一ヲ、逃ル二于山中一ニ。上杉政憲・上杉定正、以テ二足利政知之令一ヲ、發シテレ兵ヲ定ム二駿河一ヲ。長氏迎ヘ而說イテレ之ニ曰ク「國內ノ將士無シ二叛ク者一。特ダ以テ二主幼ナルヲ一、國疑ヒ、故ニ樹ツルレ黨ヲ耳。今二公辱クモ臨ンデ二於此一ニ、欲スレ定メント二今川氏一ヲ。僕雖モレ無シト二似タル一、願ハクハ宣ベ二公ノ意一ヲ、以テ戢メン二將士一ヲ。有ラバ二不ルレ聽カ者一、二公幸ニ爲メニ討テレ之ヲ」。政憲等曰ク「諾」ト。長氏會シテ二

將士誓焉、然後入山、奉氏親母子、歸入府第。政知兵乃引去。將士皆以長氏爲功、使居八幡山城。政知者、義政弟也。

訓讀 終に駿河に至り、今川義忠に依る。義忠は、其の姉の夫なり。會 義忠卒し、子の氏親猶ほ幼なり。將士、分離し、各自ら爭鬪す。長氏の姉、氏親を抱いて、山中に逃る。上杉政憲・上杉定正、足利政知の令を以て、兵を發して駿河を定む。長氏、迎へ之に說いて曰く、「國內の將士叛く者なし。特主幼に國疑ふを以て、故に黨を樹つるのみ。今二公、辱く此に臨んで今川氏を定めんと欲す。僕、無似と雖も、願はくは公の意を宣べ、以て將士を戢めん。聽かざる者有らば、二公、幸に爲めに之を討て」と。政憲等曰く、「諾」と。長氏、將士を會して誓はしめ、然る後に、山に入り、氏親母子を奉じ、歸つて府第に入る。政知の兵乃ち引いて去る。將士、皆長氏を以て功と爲し、八幡山城に居らしむ。政知は、義政の弟なり。

通釋 終に駿河に至り、今川義忠にたよつた。義忠は長氏の姉婿である。折から義忠は死んで、その子氏親は、まだ幼なかつた。將士は別々に離れて互に爭ひ鬪つてゐた。長氏の姉は氏親を抱いて山の中へ逃げ込んだ。上杉政憲・上杉定正は足利政知の命令によつて兵を繰り出して、駿河を平定すべくやつて來た。長氏は迎へて之に說いて曰ふには「國內の將士は誰も叛いた者はゐません。唯だ主君が幼少で國民が互に疑つて居るので、故ら徒黨を立てたに過ぎません。今、御兩所には辱くもこゝに御出張下さつて今川氏を平定しようとしてゐられる。私は不束な男ではありますが、御兩所の御考へを觸れ廻つて將士を取り鎭める樣に致しませう。若しいふ事を聽かぬものがありましたら、御兩所には何卒其の者を討つて下さいませ」と。政憲等はいふに「承知した」と。そこで

長氏は、今川氏の將士を呼び寄せて決して他心のないことを誓はしめ、しかる後に山に入つて氏親の母子を迎へ、屋敷に還つて來た。そこで政知の兵士も其處を引き上げた。今川氏の將士は皆長氏を以て功ありとなし、八幡山城に居らしめた。この政知といふのは將軍義政の弟である。

語釋 八幡山城（駿河）

初義政父義敎爲將軍、其族持氏世管領關東。永亨中、持氏爲其權臣上杉氏所滅。蓋義敎之志也。上杉氏有兩宗。曰山內、曰扇谷。兩宗請京師、奉政知爲主。然關東將士思持氏、不肯奉命。乃索持氏孤子成氏、立之。成氏既長、討上杉氏、不克。走保古河。號古河公方。山內族據上野平井、扇谷族據相模大場。皆陽尊政知、戴以爲君、置之伊豆。伊豆山內氏管國也。給政知以田、居于堀越。稱堀越御所。

訓讀 初め義政の父義敎、將軍と爲り、其の族持氏、世〻關東を管領す。永亨中、持氏、其の權臣上杉氏の滅す所と爲る。蓋し義敎の志なり。上杉氏、兩宗あり。山內と曰ひ、扇谷と曰ふ。兩宗、京師に請ひ、政知を奉じて主と爲す。然れども關東の將士、持氏を思ひて命を奉ずるを肯んぜず。乃ち持氏の孤子成氏を索めて之を立つ。成氏既に長じ、上杉氏を討つて、克たず。走つて古河を保つ。古河公方と號す。山內の族は上野の平井に據り、扇谷の族は相模の大場に據る。皆陽はに政知を尊び、戴いて以て君と爲し、之を伊豆に置く。伊豆は、山內

氏の管國なり。政知に給するに田を以てし、堀越に居らしむ。堀越御所と稱す。

通釋 はじめ、義政の父義敎は將軍となり、その一族の持氏が代々關東の管領となつて治めて居た。永享年間に持氏は、その權臣の上杉氏に滅されて終つた。それは義敎の考からであつた。上杉氏には二宗族があつた。山内といひ、扇谷といつた。兩家は京都に願ひ出て、政知を奉じて、主人とした。併し關東の將士は持氏を慕つて政知の命令を受けようとはしなかつた。そこで持氏の孤兒成氏を求めて、之を立てた。成氏はすでに成長し上杉氏を討つたが克てなかつた。走つて古河を保つた。そこで古河公方と稱へてゐた。山内の一族は、上野の平井に立て籠り、扇谷の一族は、相模の大場に立て籠つた。皆表面だけ、政知を尊び、奉戴して主君となし、之を伊豆に置いた。伊豆は、山内上杉氏の管轄して居た國であつたのである。政知に田を與へ堀越に居らせた。それで堀越御所と稱して居た。

語釋 上杉氏（憲實）○山内、扇谷（倶に鎌倉の地名、二氏の邸宅あり。）○堀越（伊豆）

長亨二年、長氏徙居高國寺城、陰窺伊豆、而未得間焉。乃修政令、輕賦稅、又出其所蓄、假貸遠近、收以薄息。遠近賴之。每朔望、相率來謁。謁數者或免其債。故士民稍稍來居城下、漸成聚落。長氏以荒木多目等、爲之首領、立七隊而服事政知。政知有二子。其長子曰茶茶、前妻出也。爲繼母所讒、囚之數年。茶茶憤怨、伺守者懈、出戕其繼母、遂聚其黨、弑政知、殺其大臣外山・秋山等、而自立。長氏聞之、乃佯稱有疾、浴伊豆

温泉、以レ詶レ之、曰「伊豆可レ取也」。歸聚レ衆議。衆咸曰「吾輩願三新九郎君爲二一國主一久矣。敢不レ效レ力」

訓讀 長亭二年、長氏徙りて高國寺城に居り、陰に伊豆を窺つて、未だ間を得ず。乃ち政令を修め、賦税を輕くし、又其の蓄ふる所を出して、遠近に假貸し、收むるに薄息を以てす。遠近、之に賴る。朔望每に、相率ゐて來り謁す。謁すること數する者は、或は其の債を免ず。故に士民稍稍來つて城下に居り、漸く聚落を成す。長氏、荒木、多目等を以て、之が首領と爲し、七隊を立てゝ、政知に服事せしむ。政知、二子あり。其の長子を茶茶と曰ひ、前妻の出なり。繼母の讒する所と爲つて、之を囚すること數年なり。茶茶、憤怨し、守者の懈るを伺ひ、出でて其の繼母を戕し、遂に其の黨を聚めて、政知を弑し、其の大臣外山・秋山等を殺して、自立す。長氏之を聞き、乃ち佯り疾ありと稱し、伊豆の温泉に浴し、以て之を詶つて曰く、「伊豆取るべきなり」と。歸り衆を聚めて議す。衆咸曰く「吾が輩、新九郎君を一國の主と爲さんことを願ふや久し。敢て力を效さざらんや」と。

通釋 長亭二年、長氏は徙つて高國寺城に居り、ひそかに伊豆を窺つてゐたが、まだ隙を見出さなかつた。そこで、政治法令を立派にし、租税を輕くし、又自分の貯へてゐた金や穀物を出して遠近の人民に貸し與へ、隨分利息を安くしてやつた。遠近の者は有り難く思ひ長氏にたよつてゐた。每月朔日、十五日にはつれだつて御目見えに來た。度々御目にかゝりに來た者にはその負債を帳消にしてやることもあつた。だから士民はだんだんやつて來て、城下に住ひ追々に村里を形づくるやうになつた。長氏は荒木・多目等をばその頭分となし、七隊を立てゝ、

政知に服從し事へさせた。政知には二人の子があつた。その長子を茶々といひ、前妻の生んだ子であつた。繼母の爲めに讒言せられ、それで數年間も之を押し込めて置いた。茶々は憤り怨み、番人が油斷して怠つてゐるのを窺ひ、牢からぬけ出て、その繼母を殺し、遂に其の一味の者を集め、父の政知を弑し、その大臣外山・秋山等をも殺して自ら立つた。長氏はそのことを聞いたのでわざと病氣だと言ひ立て、伊豆の溫泉に入湯して茶々を詗ひ、曰ふのに「此の際伊豆は取つて終ふことが出來る」と。そこで歸つて部下の衆を聚めて評議した。衆は皆曰ふのに「吾々はこれ迄長い間、新九郎君を一國の主としたいと願つて居た。どうして力を盡さないで居ませうや」と。

語釋　長亨（後土御門天皇の年號。）〇高國寺城（駿河）

延德三年四月、長氏勒七隊、幷今川氏援兵、凡五百人、夜、濟黃瀨川、旦抵堀越氏、縱火攻之。賊走自殺于成就院。伊豆人民畏其兵威、負擔奔竄。長氏號令嚴明、秋毫不犯。榜于路曰「吾所以來者、誅賊子而已。非有所暴掠。其各安乃堵、以俟我令。敢逃者蹈其稼、火其家。」時大疫、疫者不能奔、往往偃臥于家。長氏與以醫藥、拊循之。民更相告言、多來歸者。其豪族佐藤某、先衆屬長氏。長氏授以大見鄕地頭職、復其先邑、載印信焉。關戸某者、據深根城、以抗長氏。長氏移兵攻殺之。長氏恩威大行於國內。國內將士舊屬上杉氏者、聞之無不率歸長氏。

【訓讀】延德三年四月、長氏、七隊を勒し、今川氏の援兵を幷せて、凡そ五百人、夜、黃瀨川を濟り、旦に、堀越氏に抵り、火を縱つて之を攻む。賊走つて、成就院に自殺す。伊豆の人民、其の兵威に畏れて、貧擔奔竄す。長氏、號令嚴明、秋毫も犯さず。路に榜して曰く「吾が來る所以は、賊子を誅せんとするのみ。暴掠する所あるに非ず。其れ各乃の堵に安んじて、以て我が令を俟て。敢て逃るる者は其の稼を蹈み、其の家を火かん」と。時に大に疫し、疫する者奔る能はず、往往、家に偃臥す。長氏、與ふるに醫藥を以てし、之を拊循す。民吏相告げ言つて、來り歸するもの多し。其の豪族佐藤某、衆に先だつて長氏に屬す。長氏授くるに大見鄕の地頭職を以てし、其の先邑を復して、印信を載す。關戶某といふもの、深根城に據つて、以て長氏に抗す。長氏、兵を移して之を攻め殺す。長氏の恩威、大に國內に行る。國內の將士の、舊と上杉氏に屬せし者、之を聞いて、長氏に率ひ歸せざるは無し。

【通釋】延德三年四月、長氏はこの七隊を整へ、それに、今川氏の援兵を一緒にして、凡そ五百人となり、夜、黃瀨川を濟り、朝早く、堀越氏の邸に至り、火をつけて之を攻め立てた。茶々は逃げて成就院で自殺した。伊豆の人民は長氏の軍の威力を畏れて、荷物を負うて逃げ匿れた。長氏は號令がきびしくて、ちつとも人民に迷惑をかけない。道路に札を立てゝ曰ふには「自分が攻め來つたのは賊子茶々を殺したいだけの爲めである。亂暴したり掠奪したりするのではない。人民共は各〻、自分々々の家に安んじて、我が命令を待つて居よ。押し切つて逃げるものは、その作物を蹈み荒し、その家を燒いて終ふぞ」と。當時大に惡病が流行してゐたので、それに罹つたものは此の時出奔することが出來ないで、往々にしてその家に寢て居つた。長氏は之に藥を與へて、いたはり慰めてやつた。人民共はかはる〴〵告げ合つて來り附く者が多かつた。その豪族の佐藤某は衆に率先して長氏に

屬いた。長氏は之に大見郷の地頭職を與へ、その先代が持つてゐた土地を返してやり、朱印を押してやつた。闕戸某なる者が深根城に立て籠つて長氏に抵抗した。長氏は兵を向けて之を攻め殺した。かくて、長氏の恩惠威光は大に伊豆に行はれた。國内の將士でもと〳〵上杉氏に屬いて居たものは、之を聞いて長氏に屬き從はぬものとてはなかつたのである。

語釋　賊子（子にして父を弑する者、卽ち茶々丸。）○佐藤某（四郎兵衞）○闕戸某（吉信）○深江城（伊豆）

長氏以三十日略伊豆、以堀越氏邑自奉、其餘無所取。乃會父老豪傑、諭之曰「吾聞、人主視民猶子、民視人主猶父。是古之道也。及世之澆季、武人貪殘、剝民以自逞。而至胥而困蹶。吾甚憫之。吾以羇旅之人、來司牧是邦。吾爲汝爲君。汝爲吾爲民。生相爲君民。是豈偶然哉。吾獨願我民之富足也。自今著令減租稅五分之一、除諸雜課、諸將吏違令虐民者、聽其民來訴。」衆皆悅服、爭欲爲之用。

訓讀　長氏、三十日を以て伊豆を略し、堀越氏の邑を以て自ら奉じ、其の餘は取る所なし。乃ち父老、豪傑を會し、之を諭して曰く、「吾れ聞く、人主は民を視ること猶ほ子のごとく、民は人主を視ること猶ほ父のごとしと。是れ古の道なり。世の澆季に及び、武人貪殘民を剝いで自ら逞しくす。而して胥つて困蹶するに至る。吾れ甚だ之を憫む。吾れ羇旅の人を以て、來つて是の邦を司牧す。吾れ汝が爲めに君とならん。汝吾が爲めに民と爲れ。

生れて君臣と相爲る、是れ豈に偶然ならんや。吾れ獨我が民の富足を願ふ。今より令を著し、租稅五分の一を減じ、諸の雜課を除き、諸將吏の令に違つて民を虐するものは、其の民の來り訴ふるを聽かん」と。衆、皆悅服し、爭つて之が用を爲さんと欲す。

通釋　長氏はたつた三十日の間に伊豆を攻め取り、堀越氏の領土を自分のものにし、その外はちつとも取らなかつた。そこで年寄や豪傑を呼び集めて諭して曰ふには「聞く所によると、人君は民を視ること恰も子の如く、民は人君を視ること恰も父の如くするものであると。これが昔からの道である。世の中が衰へて末世となるに從つて、武人が强慾で殘忍をなし、人民から物を奪つて自分の思ふ儘にした　その內にとも〴〵に苦しみ倒れる樣になつて終つた。ほんとに氣の毒な事と思ふのである。余は他國者であるけれども、こうして來つて、この國を治めることとなつたのである。余はこれからお前等の爲めに君とならう。お前等は余が爲めに民となれよ。このやうに人間に生れ、お互に君臣の關係となつたのは緣あればこそである。（決して偶然ではない。）余はたゞ余の人民が十分に富まんことを願ふのみだ。今後掟書に書きしるし、租稅の五分の一を減らし、其の他の取り立てゐた者は止めて終ふことにし、萬一、諸の大將役人がこの掟に背いて人民を虐めるものがあつたら、人民は自由にやつて來て訴へ出よ」と。そこで大勢の者は皆悅び心服し、爭つて長氏の爲めに働かうと思つた。

語釋　澆季（人情の薄き末世。）○胥而困斃（相率ゐて躓き倒れること。）

長氏既ニ主トナリ二伊豆一ニ、居ル二韮山城一ニ。長氏ノ外家橫井氏ハ、北條氏ノ疏屬也。至ツテレ是ニ、韮山ニ有リ二北條氏トイフ者一。其ノ嗣絕ユ。乃チ養ヒ二長氏ヲ一、以テレ女ヲ妻ハスレ之ニ。長氏又爲ニ二長子氏綱ノ一、娶ル二其ノ孫女ヲ一、以爲ヘラク北條・伊勢、同ジク出ヅト二於

平姓遂自稱北條氏、用三鱗徽號。削髮號早雲。早雲日計復北條氏故業、以成其宿志、祈于三島神祠。夢有大杉二株、一鼠嚙其根、仆之、化爲虎。既覺、召卜人占之。卜人曰「公生歲次子。子爲鼠神。是公克兩上杉之兆也」早雲心竊喜焉。

訓讀 長氏、既に伊豆に主となり、韮山城に居る。長氏の外家横井氏は、北條氏の疏屬なり。是に至つて、韮山に北條氏といふもの有り。其の嗣絶ゆ。乃ち長氏を養ひ、女を以て之に妻はす。長氏、又長子氏綱の爲めに、其の孫女を娶る。以爲へらく、北條・伊勢、同じく平姓より出づと。遂に自ら北條氏と稱して、三鱗の徽號を用ふ。髮を削つて早雲と號す。早雲、日に北條氏の故業を復し、以て其の宿志を成さんと計つて、三島神祠に祈る。夢に大杉二株あり、一鼠、其の根を嚙み、之を仆し、化して虎と爲る。既に覺め、卜人を召して之を占はしむ。卜人曰く、「公の生歲、子に次す。子は鼠神たり。是れ公の兩上杉に克つの兆なり」と。早雲心竊に喜ぶ。

通釋 長氏は既に伊豆の國主となつて韮山城に居た。長氏の母方の横井氏は北條氏の遠緣であつた。丁度この時韮山にも北條氏があつた。その跡が絶えてゐた。そこで長氏を養子となし、其の家の娘を之に妻はせた。長氏は又長男の氏綱の爲めに其の家（韮山の北條）の孫女を娶つた。北條も、伊勢も同じやうに平氏から出たのであるから、元來緣故があるので、遂に自ら北條氏と名乘り、三鱗の紋所を用ひた。そして髮を剃つて早雲と號した。すると早雲は日日、北條氏の舊の事業を回復して、平素の大志を成しとげようと思つて、三島明神に祈念してゐた。すると大きな杉が二本あつて、一匹の鼠がその根を嚙んで倒し、それからその鼠が變化して虎となつたといふ夢を

見た。目が醒めて易者を召んで占つて貰つた。易者は曰ふのに「貴下は子年の生れであります。子といふのは鼠の神です。その鼠が杉を倒したのですからこれは、貴下が兩上杉氏に克つ前兆であります」と。早雲は心中竊に喜んだ。

語釋 韮山(伊豆)

當是時、上杉定正・上杉顯定、更相怨郤、兵結不解。早雲聞之曰「可以成吾事矣。」明應二年、使使定正、請助攻顯定。定正喜許之。其部將大森實賴爲小田原城主。謂定正曰「早雲梟雄也。無故親我。其意不測。然彼以好來、亦不可拒。宜以禮答焉。而重爲之備。」定正略不加意。三年十月、早雲與定正偕出兵高見原、與顯定夾荒川而陣。定正進而亂流、墮馬死。其子朝良走歸、保河越。早雲亦歸韮山。

訓讀 是の時に當り、上杉定正、上杉顯定、更相怨郤し、兵結んで解けず。早雲之を聞いて曰く、「以て吾が事を成すべし」と。明應二年、使を定正に使はし、助けて顯定を攻めんと請ふ。定正喜んで、之を許す。其の部將大森實賴、小田原城主たり。定正に謂つて曰く、「早雲は梟雄なり。故無くして我に親しむ。其の意測られず。然れども彼れ好を以て來る、亦拒む可からず。宜しく禮を以て答ふべし。而して重く之が備を爲せ」と。定正、略ぼ意に加へず。三年十月、早雲、定正と偕に兵を高見原に出だし、顯定と荒川を夾んで陣す。定正進み流を亂り、

馬より墮ちて死す。其の子朝良走り歸つて、河越を保つ。早雲も亦、韮山に歸る。

通釋 この當時上杉定正・上杉顯定はお互に怨み合つて、不仲で戰爭の絶え間がなかつた。早雲は之を聞いて曰ふには「これを機會に吾が事業を成し遂げることが出來る」と。明應二年、使を定正に遣つて加擔して、顯定を攻め度いと申し出た。定正は喜んで之を許した。定正の部下の將大森實賴は、小田原の城主であつた。定正に向つて曰ふには「早雲は凶惡な英雄であります。しかるに今譯もなく當方に親しんで來ました。その心の內は測り知られません。(何か野心があつてやるのでせう。)しかし彼は好意を以て來たので無暗に斷る譯にも行きません。禮儀を正しく返答をなされたらよろしいでせう。そして充分大切に之に對する用心をして置かれますように」と。しかし定正はそれ程氣にかけなかつた。三年十月、早雲は、定正と一緒に兵を高見原に出して、顯定と荒川を間にして相對陣した。定正は進んで、流を渡り、馬から落ちて死んで終つた。その子朝良は走り歸つて、河越に立て籠つた。早雲も韮山に歸つて行つた。

語釋 明應（後土御門天皇の年號。）〇小田原（相模）〇高見原・荒川・河越（武藏）

時實賴已死、子藤賴嗣。猶弱。早雲欲取其城。而難箱根之險、未發也。四年九月、早雲使人言藤賴曰「吾獵韮山、其獸逃箱根。願公以箱根假我。我得縱獮取焉」藤賴許之。早雲率兵百餘人、被獵衣裳、踰箱根、先縱牛數十頭、鼓螺隨之、憑高馳下、直入城內。藤賴惶駭、不知所爲。出奔三浦。早雲遂取小田原、遂取大場。

訓読　時に實頼已に死し、子の藤頼嗣ぐ。猶ほ弱し。早雲、其の城を取らんと欲す。而れども箱根の險を難りて、未だ發せざるなり。四年九月、早雲人をして藤頼に言はしめて曰く「吾れ韮山に獵せしに、其の獸、箱根に逃る。願はくは公、箱根を以て我に假せ。我れ縱に獵取するを得ん」と。藤頼、之を許す。早雲、兵百餘人を率ゐ、獵の衣裳を被て箱根を踰え、先づ牛數十頭を縱つて、鼓螺して之に隨ひ、高きに憑つて馳せ下り、直に城内に入る。藤頼、惶駭して、爲す所を知らず。三浦に出奔す。早雲、遂に小田原を取り、遂に大場を取る。

通釈　當時大森實頼はも早や死んで、その子の藤頼が相續してゐた。まだ至つて幼年であつた。早雲はその小田原城を取らうと思つた。併し箱根の險阻があるので、それに困つてまだ着手しなかつた。四年九月、早雲は人をやつて藤頼に言はせて曰ふのに「余は韮山で獵をしましたが、其處に居る獸が山づたひに箱根に逃げ込みました。貴公は何卒私に箱根を一寸貸して下さい。余は自由に狩り取るでありませう」と。藤頼は之を許した。そこで、早雲は兵百餘人を引きつれ、狩裝束を着て箱根を越え、先づ牛數十頭を放ち、太鼓や法螺を打ち鳴らしてその跡から遣り、高いところから、一齊に驅け下りていきなり小田原城に討ち込んだ。藤頼は吃驚して爲す所を知らなかつた。とう／＼三浦に出奔した。早雲は遂に小田原を取り、猶ほ進んで大場も取つて終つた。

語釈　三浦・大場（相模）

永正元年九月、上杉顯定來攻朝良。朝良求援于早雲。早雲與今川氏親、往援之、戰于立河原。二年、朝良遣使言顯定曰「吾聞、兩虎相闘、一狗乘隙。我族構兵數世、國内

費弊。而早雲窺其後、荐食關東。吾與公、莫乃爲兩虎乎。顯定然之、乃與朝良和。已而顯定與長尾氏戰信濃、敗死。子憲總嗣。定正・顯定、前後死亡。而早雲勢益張。相模人松田賴重等、皆來降。獨三浦義同不服焉。義同者、上杉高救子也。爲三浦時高所養。時高後生子、欲殺義同。義同奔、依大森氏、假其兵、襲時高弑之、據新井城、略取傍近。早雲欲討滅之、外示柔弱、不與爭也。義同立其子義意、而自居于岡崎城。

【訓讀】永正元年九月、上杉顯定來つて朝良を攻む。朝良、援を早雲に求む。早雲、今川氏親と、往いて之を援け、立河原に戰ふ。二年、朝良、使を遣はし、顯定に言はしめて曰く「吾れ聞く、兩虎相鬪へば、一狗隙に乘ずと。我が族、兵を構ふること數世、國内費弊す。而して早雲、其の後を窺つて、荐に關東を食む。吾と公と、乃ち兩虎たる莫からん乎」と。顯定之を然りとし、乃ち朝良と和す。已にして顯定、長尾氏と信濃に戰つて、敗死す。子の憲總嗣ぐ。定正・顯定、前後して死亡す。而して早雲、勢益張る。相模の人松田賴重等、皆來り降る。獨り三浦義同、服せず。義同は、上杉高救の子なり。三浦時高の養ふ所となる。時高、後、子を生み、義同を殺さんと欲す。義同奔り、大森氏に依り、其の兵を假り、時高を襲うて、之を弑し、新井城に據つて、傍近を略取す。早雲、討ちて之を滅さんと欲し、外に柔弱を示して、與に爭はず。義同、其の子の義意を立てゝ、自ら岡崎城に居る。

【通釋】永正元年九月、上杉顯定がやつて來て朝良を攻めた。朝良は援助を早雲に求めた。早雲は今川氏親と一

緒に往つて之を助け、立河原で戰つた。二年、朝良は使を遣はして顯定に言はせて曰ふには「二匹の虎が鬪ひ合つてゐると、一匹の狗が其の隙に乘じて勢を得るものであるといふことがある。我々一族は兵を結び相爭ふこと實に數代も續き、國内はその費用が多い爲めに衰へて終つてゐる。一方早雲は其の後をねらつて次ぎ〳〵に關東を食ひ取つて居る。余と貴公とはつまりその兩虎ではあるまいか」と。顯定も然うだと思ひ、そこで朝良と和睦をした。その内に顯定は、長尾氏と信濃で戰つて敗けて死んだ。その子の憲總が跡を相續した。斯く定正・顯定は前後に死亡した。一方早雲の勢は益々盛になつて來た。相模の人の松田賴重等も皆來つて降參した。たゞ三浦義同だけは服從しなかつた。義同は上杉高救の子である。後三浦時高の養子となつた人だ。所が時高が實子を生んだので義同を殺さうと思つた。義同は出奔して大森氏にたより、其の兵を借り、時高を襲擊して之を弑し、新井城に立て籠つて近傍の土地を掠め取つた。早雲は之を討ち滅さうと思ひ、表面はわざと弱い樣に見せかけ、與に爭ふことはしなかつた。義同は其の子義意を立てゝ、自分は岡崎城に居つた。

【語釋】永正（後柏原天皇の年號。）〇立川原（武藏）〇長尾氏（爲景）〇新井・岡崎（相模）

九年、早雲遽發兵襲岡崎、拔之。義同徙居住吉、與早雲戰連年。早雲終大破之于鎌倉、追擊至秋屋之險。義同據險、止戰。早雲乃引兵、踰佐原山、出其背。義同走、入新井城。早雲隨而攻之。城險食多、久而不拔。乃築長圍、圍之數年。是時、上杉朝良死、其子朝興在江戸。聞新井急、將兵來援。早雲兵七千人、乃留其二千當城、而自以五千邀

撃于甘縄、破走之。城内益困。大森・佐保田等、説義同曰「宜奔上總依丸谷氏」丸谷氏義意妻父也。義同曰「持氏之死、我父實爲之。而吾亦有弑父之罪。積惡之報、焉往而逃乎」早雲諜知之、十五年七月、鼓衆疾攻。城陷。誅義同父子、盡略相摸。

訓読 九年、早雲、遽に兵を發し、岡崎を襲うて、之を拔く。義同、徙つて住吉に居り、早雲と戰ふこと連年。早雲、終に大に之を鎌倉に破り、追撃して秋屋の隘に至る。義同、險に據つて止り戰ふ。早雲乃ち兵を引き、佐原山を踰えて其の背に出づ。義同走つて新井城に入る。早雲隨つて之を攻む。城險にして食多く、久しくして拔けず。乃ち長圍を築いて之を圍むこと數年なり。是の時、上杉朝良死し、其の子の朝興、江戸に在り。新井の急を聞いて、兵に將として來り援く。早雲の兵七千人、乃ち其の二千を留めて城に當て、而して自ら五千を以て甘繩に邀へ撃ち、破つて之を走らす。城内益困む。大森、佐保田等、義同に說いて曰く、「宜しく上總に奔つて丸谷氏に依るべし」と。丸谷氏は、義意の妻の父なり。義同曰く、「持氏の死は、我が父、實に之を爲す。而して吾も亦、父を弑するの罪あり。積惡の報、焉くに往いて逃れん乎」と。早雲、諜して之を知り、十五年七月、衆を鼓して疾く攻む。城陷る。義同父子を誅して、盡く相模を略す。

通釈 九年、早雲は急に兵を繰り出し、岡崎城を襲撃して攻め落した。義同は徙つて住吉に居り、毎年早雲と戰つてゐた。早雲は結局鎌倉で大に義同を打ち破り、秋屋の狹隘な處まで追ひつめて行つた。義同は、險阻な處に立て籠つて、ふみ留つて戰つた。そこで早雲は兵をつれて佐原山を越え、敵の背後へ出た。義同は逃げて新井

城に入り込んだ。早雲は後からつけて行つて之を攻めた。この新井城は要害險固で、おまけに兵糧も充分あつて、長い間かゝつて中々陷落しなかつた。そこで長圍を築いて數年間も之を取り圍んだ。この時に上杉朝良は、死んで其の子の朝興は丁度江戸に居つた。新井が危險だと聞いて朝興は兵を率ゐて、援けに來た。早雲の兵は七千人であつたが、朝興が來るといふので、その二千人を留めて城の攻撃に當らせ、そして、自分は五千人を率ゐて朝興を卄縄に迎へ撃ち、之を破つて走らせた。かくて、城内は一層苦しんだ。大森・佐保田等は義同に說いて曰ふには「上總へ逃げて、丸谷氏に依つたらよいでせう」と。丸谷氏は義意の妻の父である。義同がいふのに「持氏が死んだのは我が養父の時高の所爲である。そして余も亦養父を殺した罪がある。二代も惡を積んだ報いであるから、どこに住つたとても逃げられはせぬ」と。早雲は間者を遣つてゐたので之を窺ひ知り、十五年七月、多勢の者を鼓舞して激しく攻め立てた。とう〳〵城は陷つた。遂に義同父子を誅し、相模を皆攻め取つて終つた。

語釋 住吉・秋屋・佐原山・卄縄(相模)

十六年、早雲病卒于韮山。年八十八。子氏綱立。氏綱容貌岸傑、善用兵。早雲之興業、氏綱力居多。早雲臨終、遺言氏綱等曰「吾欲滅上杉氏、幷關東八州、而未成其志。子孫繼任其事、毋敢或懈。今我邑土不多。散吾所積財物、養四方之士、足以支二世矣。三世之後、莫復所事於財也。苟兩上杉而相釁隙、吾子孫可以坐大矣。吾視上杉氏、

其家法日衰。亡滅非遠。雖然、彼大族也。不可輒取。曠日彌久、以俟其弊。譬之癰疽、其毒之封、必三十許年乃成。及其成、則潰裂而毋救也。且立法訓二十一條、以頒將士。

訓讀 十六年、早雲病んで、韮山に卒す。年八十八なり。子の氏綱立つ。氏綱、容貌岸傑にして、善く兵を用ふ。早雲の業を興す、氏綱の力多きに居る。早雲、終に臨んで、氏綱等に遺言して曰く、「吾れ上杉氏を滅して關東八州を幷せんと欲す。而して未だ其の志を成さず。子孫繼いで其の事に任じ、敢て或は懈る毋れ。今我が邑士多からず。吾が積む所の財物を散じて、四方の士を養はば、以て二世を支ふるに足らん。三世の後は、復た財を事とする所なきなり。苟も兩上杉にして相釁隙せば、吾が子孫は以て坐ながらに大なるべし。吾れ上杉氏を視るに、其の家法、日に衰ふ。亡滅遠きに非ず。然りと雖も、彼は大族なり。輒く取るべからず。日を曠しくし久しきに彌つて以て其の弊るゝを竢て。之を癰疽に譬へんに、其の毒の封ずる、必ず三十許年にして乃ち成らん。其の成るに及べば、則ち潰裂して救ふ毋けん」と。且つ法訓二十一條を立てゝ、以て將士に頒つ。

通釋 十六年早雲は病氣で韮山で死んだ。年は八十八であつた。その子の氏綱が跡を嗣いだ。氏綱は容貌、目立つて勝れてゐて、而も兵を用ふることが上手であつた。早雲の事業を起したのは氏綱の働きが多分にあつたからだといふことである。早雲は死際に氏綱等に遺言して曰ふには「余は上杉氏を滅して、關八州を併呑しようと思つて居た。まだ其の志を成し遂げない内に今斯うして死ぬるのである。余の子孫たるものは余の志を繼いで其の事に當り、決して懈るやうな事があつてはならぬぞ。今余の領地はそれ程多くはない。併し余が貯へて置いた財産を撒いて四方の人物を養成するとせば、二代の間は持ちこたへて行ける。三代から後はもう財産などを

積むにも及ばない。もしも兩上杉氏が互に仲惡くなれば、余の子孫はぢつとしてゐて段々大きくなることが出來るであらう。上杉氏の樣子を見るのに、その家法は日に〳〵衰へてゐる。その滅亡するのは遠くあるまい。併し彼は、もと大きな〳〵一族である。さう容易に取ることは出來るものでない。ゆつくりと長い目をかけ、久しくかゝつてその敗れるのを待つて居れよ。之を腫物にたとへて見ると、その毒が積つて、うみ切るのは屹度三十年餘り後である。そのやうにうみ切ればその後は潰れて來て、どうにも救ふことも出來ないことになるのである」と。その上に掟二十一箇條を定めて、將士に頒布した。

語釋　岸傑(威望のある貌。)　○毒之封(毒が集まる意。)

氏綱守父遺訓、益修攻戰具、平定相摸、進與上杉朝興爭武藏。大永四年、氏綱遂拔江戸城。朝興走據河越。氏綱數攻之、未能下。乃遣使平井、約夾攻河越。憲總按兵、兩無所援。而朝興數爲氏綱所敗。氏綱又與足利高基婚。高基者成氏孫也。欲藉伊勢氏力以報上杉氏、則爲其子晴氏娶氏綱女。氏綱於是纂上杉氏累世不臣之罪、以諭關東將士。天文六年四月、朝興卒。遺言子朝定、益圖相摸。卒而未三月、朝定修深大寺城、以挑氏綱。氏綱將兵直赴河越、去城五十餘町而陣。朝定返兵自救。時七月十五夕。月光滿野。兩軍交縱。氏綱終大破朝定、取河越。朝定走松山。松山城主難波

田某迎而內レ之、稍收二敗軍一、出二陣城外一。氏綱又擊大破レ之。

訓讀 氏綱父の遺訓を守り、益攻戰の具を修め、相模を平定し、進んで上杉朝興と、武藏を爭ふ。大永四年、氏綱、遂に江戸城を拔く。朝興走つて、河越に據る。氏綱、數之を攻めて、未だ下す能はず。乃ち使を平井に遣はして、河越を夾み攻めんと約す。憲總、兵を按じて、兩ながら援くる所なし。而れども朝興、數氏綱の敗る所と爲る。氏綱、又足利高基と婚す。高基は、成氏の孫なり。伊勢氏の力を藉つて、以て上杉氏に報いんと欲し、則ち其の子晴氏の爲めに氏綱の女を娶る。氏綱、是に於て、上杉氏累世不臣の罪を暴し、以て關東の將士を諭す。天文六年四月朝興卒す。子の朝定に遺言して、益相模を圖らしむ。卒して未だ三月ならず、朝定、深大寺城を修め、以て氏綱に挑む。氏綱、兵に將として、直に河越に赴き、城を去ること五十餘町にして陣す。朝定、兵を返して自ら救ふ。時に七月十五夕なり。月光、野に滿つ。兩軍交縱す。氏綱、終に大に朝定を破つて、河越を取る。朝定、松山に走る。松山城主難波田某、迎へて之を內れ、稍く敗軍を收め、出でゝ城外に陣す。氏綱又擊つて、大に之を破る。

通釋 氏綱は、父の遺訓を守つて、益ゝ戰爭の攻め道具を整へ、その內に相模を平定し、進んで上杉朝興と武藏の取り合ひをやつた。大永四年、氏綱は、遂に江戸城を攻め落した。朝興は走つて、河越に立て籠つた。氏綱は、度々之を攻めたが中々落すことは出來なかつた。そこで使者を平井に派遣して、河越を夾み討ちにする約束をした。憲總は軍勢をとゞめて何ちらも援けなかつた。しかし朝興は度々氏綱に攻め敗られた。氏綱は又足利高基と婚姻した。高基は成氏の孫である。伊勢氏の兵力を借りて、上杉氏に對し返報をしようと思つて、其の子晴

氏の爲めに氏綱の娘を貰つたのである。そこで氏綱は、上杉氏が代々鎌倉の足利に對し、臣下としての道を踏まなかつた罪惡を曝露して、關東の將士に諭した。天文六年四月、朝興は死んだ。その子の朝定に遺言して益々相模を取らせようとした。朝興が死んでまだ三個月にもならぬ内に朝定は深大寺城を修覆して、氏綱に對し戰をしかけた。そこで氏綱は兵を率ゐて（深大寺には向はず）直ぐ樣河越に攻め寄せ、城を去ること五十餘町の處に陣取つた。朝定は兵を深大寺城から引き返し、自ら河越を救つた。この時は丁度七月十五日の夜であつた。月の光が野に一杯照つてゐた。兩軍は互に矢の打合ひをやつた。とう〳〵氏綱は大に朝定を破つて河越を取つた。朝定は松山に走つた。松山の城主難波田某は迎へて、之を城に入れ、追々敗軍を取りまとめ、又出でゝ城外に陣取つた。氏綱は又擊つて之をも大に敗つた。

語釋 大永（後柏原天皇の年號。）○天文（後奈良天皇の年號。）○深大寺城・松山（武藏）○難波田某（善銀）

是役也、相摸人平岩重吉虜朝定叔父朝成。氏綱隊將山岡某來奪朝成、效之麾下。重吉後至、爭功不決。氏綱乃密記二人鎧馬、而屬朝成于山角某、囚于河越。山角善視之。時置酒款語。嘗從容談鎌倉舊事。山角曰「僕聞之故老、右大將之東征也、陸奧勇將由利八郞、爲宇佐美實政所虜。而天野則景爭之。右大將令梶原景時・畠山重忠更質之八郞。八郞前默而後對。以重忠有禮也。勇士之不可犯以非禮也、如此。朝

成聞之慨然。山角曰「談偶渉觸犯。幸勿爲罪」朝成曰「噫、僕猶八郎也。嚮者之役、吾盡亡士卒、單騎走。黑甲赤馬者、追呼我。我回轡而鬪、皆墮馬。吾摶伏之、將拔刀。其人奮起居我上。而數人繼至。吾終爲所虜矣」山角以告氏綱。氏綱曰「黑甲赤馬者重吉也」乃賞重吉。氏綱賞罰明覈常類於此。

訓讀 是の役に、相摸の人平岩重吉、朝定の叔父朝成を虜にす。氏綱の隊將山岡某、來り朝成を奪つて、之を麾下に效す。重吉後れて至り、功を爭つて決せず。氏綱乃ち密に二人の鐙馬を記して、朝成を山角某に屬して、河越に囚す。山角善く之を視る。時に置酒して款語す。嘗て從容として鎌倉の舊事を談る。山角曰く、「僕、之を故老に聞く、右大將の東征するや、陸奥の勇將由利八郎、宇佐美實政の虜とする所と爲る。而して天野則景之を爭ふ。右大將、梶原景時、畠山重忠をして、更 之を八郎に質さしむ。八郎、前に默して後に對ふ。重忠、禮あるを以てなり。勇士の犯すに非禮を以てすべからざるや、此くの如し」と。朝成、之を聞いて慨然たり。山角曰く、「談 偶 觸犯に渉る。幸 に罪と爲す勿れ」と。朝成曰く、「噫、僕は猶ほ八郎のごときなり。嚮者の役に、吾れ盡く士卒を亡ひ、單騎にて走る。黑甲赤馬の者、追つて我を呼ぶ。我れ轡を回して鬪ひ、皆馬より墮つ。吾れ摶つて之を伏せ、將に刀を拔かんとす。其の人奮起して我が上に居る。而して數人、繼いで至る。吾れ終に虜とする所と爲る」と。山角以て氏綱に告ぐ。氏綱曰く、「黑甲赤馬の者は、重吉なり」と。乃ち重吉を賞す。氏綱、賞罰明覈なること、常に此に類す。

【通釋】この戰爭で相撲の人平岩重吉は朝定の叔父朝成を擒にした。氏綱の將山岡某がやつて來つて、朝成を奪ひ、之を氏綱の所へ送り届けた。重吉は後から來て自分が擒にしたのだと功を爭つたが中々決まらなかつた。そこで氏綱はこつそり二人の鎧と馬の形や色を記憶して置いて朝成を山角某に預け、河越に押込めて置いた。山角は丁寧に之を待遇した。時々酒を出して親しく物語をした。朝成はある時ゆつたりと鎌倉時代の古い事を話した。山角がいふのに「私が年寄から聞いたのでありますが頼朝公が奥州を征伐された時、陸奥の勇將由利八郎なるものが宇佐美實政に生捕られました。それを天野則景が自分が生捕つたのだといつて爭ひました。頼朝は梶原景時・畠山重忠をして更代に之を八郎に聞き質さしめました。八郎は前に景時には返事をしないで、後に重忠には答へたさうです。これは重忠が禮儀作法があつたからです。勇士といふ者は無禮な仕打ちで犯せないことは先づこんなものであります」と。朝成は之を聞いて嘆いた。山角がいふのに「圖らず御氣に障るやうな話をして終ひました。何卒お許し下さい」と。朝成がいふのに「あゝ私も丁度八郎の樣なものであります。此の間の戰爭で私は皆部下の士卒を失ひ、自分一騎で走りました。すると黑い鎧を着て赤い馬に乘つた者が後から追ひかけて私を呼びかけました。だから私は手綱を引き返して鬪ひ、二人とも馬から落ちたのです。私は組んでその敵を押し伏せ將に刀を拔かうとしました。其の人は力を奮つて、起き上り私の上になりました。その中に數人の者が繼いでやつて來ました。私はとう／＼擒にせられて終つたのであります」と。山角はこの事を氏綱に告げた。氏綱はいふのに「黑い鎧で赤い馬といふのは重吉である」と。そこで重吉に褒美をやつた。氏綱の賞罰が明で實際に當つてゐることはいつもこういふ具合であつた。

【語釋】右大將之東征（源頼朝が藤原泰衡を征伐したこと。）

氏綱威聲、益布遠近。武藏・下總諸城、往往降附。獨足利高基弟義明、在下總御弓、與氏綱爭强。義明初與高基相惡。亡依里見義弘、略其傍地、兵力稍張。高基害之、請氏綱圖之。先是、義明・義弘以兵艦數百艘抵鎌倉、毀鶴岡祠、抄掠寶物。氏綱曰「吾將代神行罰也。」將兵赴擊、郤之。七年、再發兵攻御弓。義弘擧安房・上總兵來救義明。十月、氏綱與義明・義弘戰于鴻臺、大破之、走義弘、獲義明、斬首二千餘級。九年、再造鶴岡祠。關東士民、望氏綱風、歸者日衆。畿內西國商賈、亦往往避亂來寓、小田原日益殷實、聲氣與上國相通。東國道士、歳詣大峯者、過界浦、見鳥銃于市、持歸獻之氏綱。關東之有鳥銃、自伊勢氏始。後益召致銃工及根來寺僧善銃者、以助兵威。十年、氏綱病卒。年五十五。嫡子氏康立。年甫十六。

訓讀　氏綱の威聲、益遠近に布く。武藏、下總の諸城、往往降り附く。獨り足利高基の弟義明、下總の御弓に在つて、氏綱と强を爭ふ。義明、初め高基と相惡し。亡げ里見義弘に依つて、其の傍地を略し、兵力稍く張る。高基、之を害とし、氏綱に請うて之を圖る。是より先き、義明、義弘、兵艦數百艘を以て、鎌倉に抵つて、鶴岡祠を毀ち寶物を抄掠す。氏綱曰く、「吾れ將に神に代つて罰を行はんとす」と。兵に將として赴き擊つて、之を郤

く。七年、再び兵を發して御弓を攻む。義弘、安房、上總の兵を擧げ、來つて義明を救ふ。十月、氏綱、義明・義弘と、鴻臺に戰ひ、大に之を破つて、義弘を走らせ、義明を獲、首を斬ること二千餘級。九年、再び鶴岡祠を造る。關東の士民、氏綱の風を望んで、歸する者日に衆し。畿内、西國の商賈も亦、往往亂を避けて來り寓し、小田原、日に益〻殷實にして、聲氣、上國と相通ず。東國の道士、歲ごとに大峯に詣づる者、界浦を過り、鳥銃を市に見、持ち歸つて之を氏綱に獻ず。關東の鳥銃ある、伊勢氏より始る。後益〻銃工、及び根來寺の僧の銃を善くするものを召致し、以て兵威を助く。十年、氏綱病んで卒す。年五十五。嫡子氏康立つ。年甫めて十六なり。

【通釋】氏綱の威勢名聲は益〻遠近に擴がつた。武藏・下總の諸城はあれこれと降參して來た。たゞ足利高基の弟の義明は下總の御弓に居て、氏綱と强を爭つた。義明はこれより以前高基と仲が惡るかつた。逃げて里見義弘に依り、その近くの土地を掠め取つて、其の兵力が段々盛になつて來た。高基は之を邪魔にして氏綱に賴んで之を亡さうと計畫した。これより前に義明・義弘は兵艦數百艘を率ゐて鎌倉に押し寄せ、鶴ケ岡八幡宮を打ち壞し、寶物を掠奪した。氏綱がいふのに「吾は神に代つて罰を行ふのだ」と。そこで兵を率ゐて行き、擊つて之を退けた。七年再び兵を繰り出して、御弓を攻めた。義弘は安房上總の兵をつれて、義明を救ひに來た。十月、氏綱は義明・義弘と鴻臺で戰つて、大に之を破り、義弘を走らし、義明を生捕り、その時斬つた首の數は二千餘級からあつた。九年鶴ケ岡八幡宮を再建した。關東の士民は氏綱の樣子を望み見て、之に從ひ來るものが日ましに多くなつた。畿内西國の商賣人も亦往々その地方の騷亂を避けて逃げ來つて寄寓し、小田原は日に〳〵賑はひ、その樣子が上方と相通じ似かよつた所があるやうになつた。關東地方の山伏で每年大和の大嶽に參詣するものが界浦を通つて、鐵砲を其の市で見て、珍らしい物だと思ひ之を持ち歸つて、氏綱に獻上した。關東地方で鐵砲を用ひるや

うになつたのは伊勢氏からである。その後、益鐵砲鍛治だの、紀州根來寺の坊主で鐵砲を扱ふことの巧い者を呼び寄せて兵の威力を助けた。十年、氏綱は死んだ。その時年は五十五。跡取りの氏康が立つた。年齢はやつと十六であつた。

語釋 鴻蒙（下總）○靜氣（聲音氣脈）○大峰（大和）○伊勢氏（北條氏の舊姓）

當是時、上杉朝定勢力削蹙、獨上杉憲政雄長東北、憲政、憲總孫也。今川氏親子義元、與甲斐國主武田信虎、皆通好於憲政。憲政驕惰、其嬖臣菅野信方・上原兵庫專其政、政多偏私。憲政獨耽遊宴、蓄舞妓數十人。國內成風、不復問武事。常徵伊勢氏。曰「彼小家耳。何能爲。」老臣長尾意玄獨以爲患。先是、本間某・井俣某、以卒長有戰功。憲政之嗣立也、令管內禁射鹿。菅野・上原犯禁。吏不敢告。本間・井俣邑其傍、相雜射獵。乃爲人所告、失邑屏居。意玄乃召之、授計、遣佯仕氏康、以伺察之。

訓讀 是の時に當り、上杉朝定、勢力削蹙し、獨り上杉憲政、東北に雄長たり。憲政は、憲總の孫なり。今川氏親の子義元、甲斐の國主武田信虎と、皆好を憲政に通ず。憲政、驕惰にして、其の嬖臣菅野信方、上原兵庫、其の政を專にし、政に偏私多し。憲政、獨り游宴に耽り、舞妓數十人を蓄ふ。國內、風を成し、復武事を問はず。常に伊勢氏を徵なりとして曰く、「彼は小家のみ。何をか能く爲さん」と。老臣長尾意玄、獨り以て患と

爲す。是より先き、本間某、井俣某、卒長を以て戰功有り。憲政の嗣いで立つや、管內に令して、鹿を射るを禁ず。菅野・上原、禁を犯す。吏敢て告げず。本間、井俣其の傍に邑し、相雜つて射獵し、乃ち人の告ぐる所と爲り、邑を失つて屛居す。意玄乃ち之を召し計を授け、遣はし佯り氏康に仕へて、之を伺察せしむ。

通譯 この當時上杉朝定の勢はだん／＼削られ縮まり、たゞ上杉憲政だけは東北に雄長となつてゐた。憲政は憲總の孫である。今川氏親の子義元は、甲斐國主武田信虎と皆好を憲政に通じた。憲政は心驕り、なまけ怠り、その氣に入りの菅野信方、上原兵庫兩人が政治を專斷し、偏頗依怙が多かつた。憲政は一向平氣で、ひとり酒盛をして遊ぶことに耽り、舞妓の數十人も抱へてゐた。國內までも皆その風が移つて、もう武事を問題にするものもなくなつた。憲政は、平生、伊勢氏を微々たるものだと侮つて曰ふには「あれは小さな家筋である。何とて事を仕出來さうや」と。家老の長尾意玄だけは伊勢氏を心配すべきものとして居た。これより前に本間某・井俣某は足輕大將となつて戰功があつた。憲政が先代の跡目を相續して立つたとき領分內に命令して、鹿を射ることを禁じた。所が嬖臣の菅野・上原はそれを犯した。役人は押し切つて申し立てることをしなかつた。本間・井俣兩人も菅野・上原の領地の近くに土地を持つて居たので一緒になつて鹿を獵したので、結局人の爲めに告訴せられ、土地を取り上げられて、蟄居することになつた。意玄は、之を呼び出し計略を授けて派遣し、佯つて、氏康に仕へてその樣子を伺はしめた。

二人赴二小田原一、因二多目氏一請曰「山內公疏レ忠近レ佞、臣等獲レ罪至レ此。縱令得レ免、不レ願レ仕也。願得レ仕二君公一」。多目頗疑レ之、且收充二行伍一。居歲餘、二人乃亡、歸二平井一、具レ狀告二意玄一曰

「臣等熟視氏康爲人、沈毅不測。剛柔兼濟。時而讀書、時而自用刀槍、能等禮節、威重自持。而錄功不畧下賤。其用士、無老無少、皆適其器。其子弟雖非嫡嗣、皆給俸充用、有功則進之。故其下畏而愛之、人人自奮、願爲效死。而上杉氏將士、皆陰通款。其不通者、九人而已。早雲遺言、兩上杉之亡在我三世後。其相隙則吾家之慶也。」意玄以二人所言告憲政。因與朝定和、令國內禁奢華、講武備、錄將士子弟乃復二人邑。

【訓讀】二人、小田原に赴き、多日氏に因り請うて曰く、「山内公、忠を疎んじ佞を近づけ、臣等、罪を獲て此に至る。縱令免さるゝを得るも、仕ふるを願はざるなり。願はくは君公に仕ふるを得ん」と。多日、頗る之を疑ひ、且く收めて行伍に充つ。居ること歲餘、二人乃ち亡げて、平井に歸り、狀を具し意玄に告げて曰く、「臣等、氏康の人と爲りを熟視するに、沈毅にして測られず。剛柔兼ね濟す。時として書を讀み、時として自ら刀槍を用ひ、能く禮節を等しくし、威重にして自ら持す。而して功を錄して下賤を略せず。其の士を用ふる、老となく少となく、皆其の器に適ふ。其の子弟は嫡嗣に非ずと雖も、皆俸を給して用に充て、功有れば則ち之を進む。故に其の下、畏れて之を愛し、人人自ら奮つて、爲めに死に效さんことを願ふ。而して上杉氏の將士、皆陰に款を通ず。其の通ぜざるものは九人のみ。早雲、遺言す、兩上杉の亡ぶるは、我が三世の後に在り。其の相隙するは、則ち吾が家の慶なり」と。意玄二人の言ふ所を以て憲政に告ぐ。因つて朝定と和し、國內に令して、奢華を禁じ、武

備を講じて、將士の子弟を錄し乃ち二人の邑を復す。

【通釋】本間・井俣の二人は小田原に行つて、重臣多目氏に賴んで願ひ出ていふには「山内殿は忠臣を疎略にして佞人を近づけられ、私等もそれが爲めに罪を得て、こんな事になりました。よし罪を赦されても、あんな者には仕へたいとは思ひません。何卒こちらに御奉公いたしたいものです」と。多目は隨分之を疑つたが、暫時取り入れて組下に入れ置いた。それから一年あまりも經つてから二人は逃げて平井に歸り、一々事狀を書きつらねて意玄に告げていふには、「私どもはよく〱氏康の人物を觀察しましたが、落き付き拂つてゐて勇氣があり、心の底の分らぬ位であります。剛いと柔らかいとを兼ねて萬事を成してゐます。時には書を讀み、時には自分で擊劍や槍術の稽古をなし、禮を程よくし、自ら威儀莊重にかまへて居ります。又手柄で取り立てるのには低いものでも決して疎略にしませぬ。士を用ふるのにも老人、子供皆それ〲その器量に協ふ役を云ひ付けます。將士の子弟は、たとひ惣領息子でも皆扶持を與へて用に充て、功があればどん〱進めて行きます。そんな風ですから其の部下の者は氏康を畏れてゐるが而かも之を愛し、人々皆自ら奮發して、氏康の爲めに生命を投げ出したいと願つて居ります。又我が上杉氏の將士等も皆こつそり敵に内通して居ます。内通しないものは、たつた九人だけであります。さきに早雲が遺言して、兩上杉の滅亡するのはわが後三代目の時にある。兩家の仲の惡いのは此方にとつては幸であるといつたさうです」と。意玄は二人の言葉を憲政に告げた。そこで、朝定と和睦をなし、國内に命令して奢侈の沙汰を禁じ、武備を整頓し將士の子弟を取り立て、そこで本間・井俣兩人の罪を赦しもとの領地を與へてやつた。

【語釋】山内公（憲政）○等二禮節一（家來を待遇するに身分に相應するやうに公平にすること。）

菅野・上原嫉之、與其族黨謀、上書於憲政曰「早雲伊勢丐兒也。倚今川氏之力、以攘伊豆。小國賤人之裔、何足爲慮。而我諸老過畏怖之。甚可笑也。天下右族、西有大內。而東有山內。山內公號令、遠及陸奧・出羽。麾下將帥、富三倍小田原者、可得五六人。而瞿瞿然丐兒子孫是怖、遣間諜、詗消息。獨不顧鄰近之嗤乎。本間・井俣背旨、獲罪、而遽復用之。世謂上杉氏無人也。臣聞、氏康喜歌詠、比頑童、不知武事。其將堪事者、獨根來法師耳。其下常相恐曰、管領命駕矣、北條氏立虀粉矣。關東將士、馴服我公威德、非一日。何必借人力爲。與扇谷和、所損甚多。君勿聽焉」

訓讀　菅野、上原、之を嫉み、其の族黨と謀り、憲政に上書して曰く、「早雲は伊勢の丐兒なり。今川氏の力に倚つて、以て伊豆を攘む。小國賤人の裔、何ぞ慮を爲すに足らん。而るに我が諸老、過つて之を畏怖す。甚だ笑ふべきなり。天下の右族、西に大內あり。東に山內あり。山內公の號令、遠く陸奧、出羽に及び、麾下の將帥、富・小田原に三倍するもの、五六人を得べし。而るに瞿瞿然として、丐兒の子孫を是れ怖れ、間諜を遣はして消息を詗ふ。獨り隣近の嗤を顧みざる乎。本間、井俣、旨に背き罪を獲、而るに遽に復、之を用ふ。世上杉氏に人無しと謂はん。臣聞く、氏康は歌詠を喜び、頑童に比ひ、武事を知らず。其の將、事に堪ふるものは、獨り根來法師のみ。其の下、常に相恐れて曰く、管領、駕を命ぜば、北條氏、立ちどころに虀粉せられんと。關東の將士、

我が公の威德に馴服する、一日に非ず。何ぞ必ずしも人力を借るを爲さん。扇谷と和せば、損する所甚だ多からん。君聽くこと勿れ」と。

通釋 菅野・上原の兩人は之を妬んで、その一族徒黨と相談して憲政に上書して曰ふには「早雲は元來伊勢こじきであります。今川氏の力に倚つて、伊豆を盜み取つたので御座います。さやうな小國で、且つ賤しいもの丶末(氏康)などをそんなに氣に懸けるにも及びませぬ。而るに我が家老どもは、見當違ひに恐れ過ぎてゐます。これは甚だ笑ふべきことであります。今天下の大族と申せば西に大內氏があります。東に山內氏があります。中でも我が山內公の號令は、遠く陸奧出羽のはて迄も屆き、その麾下の大將で小田原に三倍もする富を所持して居るものは五六人も御座いませう。それにびく〱して、乞食の子孫を怖れ、忍びの者まで派遣して、その樣子をお探ぐらせになりました。ひとり近隣の國々から笑を受ける位のことをお考へにはなりませんか。本間・井俣の兩人は御意に背いて、罪を得た者でありますのに俄に又元々通り之をお用ひになりました。世間では上杉氏に人物がゐないからだと申しませう。私等が聞いてゐます所では氏康は歌を詠むことが好きで、美目よい小姓を愛し、軍事を知りません。その大將の中で役立つのは鐵砲の射てる根來法師だけであります。ですから其の下々の者は常に相恐れて『管領が御出陣になれば北條氏は粉な微塵にせられて終ふだらう』といつて居ります。全體關東の將士が我が君の御威德になづき從つて居ることは決して昨日今日に始つたのではなく、隨分長い間のことで御座います。何も他に人の兵力を借りるやうなことが要りませうや。扇谷(朝定)と和睦するのは隨分損が多う御座います。我が君には之を御許しなさいますな」と。

語釋 比㆓頑童㆒(比は親しむこと。頑童は男色の爲めの童子。) ○管領(憲政をさす。)

憲政大喜曰「意玄誑我。」遊嬉如初。將士通款氏康者、爲二人所告、則大懼、賂菅野・上原、以求解免。菅野・上原說憲政、斥二人、從而毒殺之。又納諸家臣賂、建議曰「名族之嗣、弱者、宜各分邑於其家宰、則戴恩者衆矣。」憲政聽之。又擧高野僧善弓者、祿之曰「何遽下根來法師也。」憲政歲入漸減、其兵漸弱。而欲親往擊滅氏康、既命駕而旋止者再三。東人自是、稱猶豫者曰管領命駕也。

訓讀 憲政、大に喜んで曰く、「意玄、我を誑す」と。遊嬉すること初の如し。將士の、款を氏康に通ずる者、二人の告ぐる所と爲つて、則ち大に懼れ、菅野・上原に賂ひて、以て解免を求む。菅野・上原、憲政に說いて二人を斥け、從つて之を毒殺す。又諸家臣の賂を納れて、建議して曰く、「名族の嗣の弱き者は、宜しく各邑を其の家宰に分つべし。則ち恩を戴く者衆からん」と。憲政、之を聽す。又高野の僧の弓を善くする者を擧げ、之に祿して曰く、「何遽根來法師に下らん」と。憲政、歲入漸く減じ、其の兵漸く弱し。而して親ら往き、擊つて氏康を滅さんと欲し、既に駕を命じて、旋た止ること再三。東人、是より猶豫する者を稱して、管領の命駕と曰ふ。

通釋 憲政はこの書面を見て大層喜んで曰ふには「意玄は余をだましたのである」と。さう言つて遊戲娛樂することと以前の通りであつた。上杉氏の將士で氏康に內通してゐたものは本間・井俣兩人に言ひ立てられたので非常に懼れ、賄賂を菅野・上原の兩人に贈つて罪を免れようと取り成して貰つた。菅野・上原は憲政に說いて、本間・井俣を斥け、間も無く之を毒殺して終つた。此の菅野・上原は諸家の賄賂を取り込み、建議していふには、「家柄の繼

嗣でも、年の若い者は、各々、その領地を家老に分けてやる様にしたら宜いでせう（家を治めることが出來ぬから）さうすれば、君の恩を戴くものが多くなる譯です」と。憲政は之を許容した。又高野山の僧侶で弓の巧い者を擧げて之に扶持を與へて曰ふには「これさへ居ればどうして根來法師等に劣らうや、劣りはせぬ」と。けれども憲政は年々の收入がだん／＼に減じ、又その兵もだん／＼弱くなつた。彼は親ら大將となつて氏康を擊ち滅さうと思つて、既に出陣の用意をしながら、またそれを控へて止めたことが再三に及んだ。關東の人はそれ以來愚圖々々して不決斷なことを「管領の御出馬」といつた。

十三年、今川氏親使使與憲政約、發兵臨伊勢氏境上、圍長窪城。氏康親將且援之。會使者至自河越曰「兩上杉氏連和合兵、將來圍焉」。氏康還赴河越、不見敵。乃聚諸將議曰「河越當兩上杉之衝。是必爭之地也。以一勇將守焉、吾可以致敵而大克之」。衆推北條綱成。綱成、本福島氏、世爲今川氏將、守遠江土方城。父正成爲武田氏所殺。綱成猶幼、出奔相摸。氏綱愛之、賜北條氏及其偏諱、常爲軍鋒、其旗黃色、書八幡二字爲號。其戰也、每馳突敵陣、連呼勝矣。所嚮無不勝。當是時、黃八幡之名聞八州。於是、氏康授之三千騎、令守河越而還。長窪圍亦解。

訓読 十三年、今川氏親、使をして憲政と約せしめ、兵を發し伊勢氏の境上に臨んで、長窪城を圍む。氏康親ら將として、且に之を援けんとす。會使者河越より至る、曰く、「兩上杉氏、連和し、兵を合せて將に來り圍まんとす」と。氏康還つて河越に赴くに、敵を見ず。乃ち諸將を聚め、議して曰く、「河越は兩上杉氏の衝に當る。是れ必爭の地なり。一勇將を以て守らしめば、吾れ以て敵を致して大に之に克つ可し」と。衆議北條綱成を推す。綱成は、本福島氏、世今川氏の將となり、遠江の土方城を守る。父正成、武田氏の殺す所と爲る。綱成、猶ほ幼にして、相模に出奔す。氏綱、之を愛して、北條氏、及び其の偏諱を賜ふ。常に軍鋒となり、其の旗は黃色、八幡の二字を書して號と爲す。其の戰ふや、每に敵陣を馳突し、連に勝てりと呼ぶ。嚮ふ所勝たざるなし。是の時に當り、黃八幡の名、八州に聞ゆ。是に於て、氏康、之に三千騎を授け、河越を守らしめて還る。長窪の圍も亦解く。

通釈 十三年、今川氏親は使者をやつて憲政と約束をさせ、兵を繰り出して、伊勢氏の境界に打つて出で、長窪城を取り圍んだ。氏康は自ら大將として、之を援けようとした。其の時丁度使者が河越から來た。曰ふのに「兩上杉は和睦連合して兵を合せて來り、將に河越を圍まうとして居ます」と。氏康は還つて河越へ往つて見たが一向敵は見えなかつた。そこで諸將を聚めて評議して曰ふには「河越は兩上杉氏の打つて出る要路に當つてゐる。屹度爭ひ合ふ場所となる。若し、一人の勇將に守らせたら敵を引き寄せて大に之に勝つことが出來る」と。皆は北條綱成を推擧した。綱成は元來福島氏で、代々今川氏の大將となり、遠江の土方城を守つて居た、その父の正成は武田氏の爲めに殺された。綱成はまだ幼少で相模に逃げて來た、氏綱は之を可愛がり、北條氏といふ姓と名の一字綱の字を賜はつたのである。常に軍陣の先鋒となり、その旗は黃色で八幡の二字を書いて、旗記としてゐ

た。戰ふ時にはいつでも敵陣に驅け込み、衝き進んで「勝つた〳〵」と呼ばはつた。彼の向ふところ勝たぬこととてはなかつた。當時黄八幡の名は、關東八州に響いて居た。そこで氏康は綱成に三千騎を與へて河越を守らしめて置いて、自分は引き返した。長窪の圍も亦解けた。

語釋 長窪（駿河）

十四年、兩上杉氏大擧來攻。曰「此行必剪滅小田原。」至河越、圍城數重、意期必取。綱成固守不下。上杉氏使使古河、請晴氏來助。氏康又以爲請。晴氏欲其兩解、依違答之。上杉氏臣難波田某・小野某・往說晴氏曰「公以北條可親乎。」曰「然。」「伊豆・相摸非公所當領乎。」曰「然。」曰「早雲・氏綱、擅興甲兵、掠取伊豆・相摸、遂及武藏・下總邊傍、使公困蹙至此。其志不至盡取關東己爲公方、則不已也。彼今日亡上杉、明日必及古河。今之尊公者、乃挾以營其私焉耳。且北條之親於君也新也。上杉之仕於君也舊也。去舊就新、君何惑焉。今河越城當陷不陷。所患關東將士、觀望兩端、其心不一耳。君苟進大旆、辱臨軍陣、則衆知所嚮背、戮力決前、必舉河越。河越舉、則乘勢席卷、拔小田原、滅北條氏、復君於鎌倉、而駢首仕之、如往昔矣。願公熟計之。」晴氏曰「善。」乃盡

其士衆至河越。上杉氏大喜、號令諸將、攻擊越歲、四絶其饟道。

訓讀 十四年、兩上杉氏、大擧して來り攻む。曰く、「此の行必ず小田原を剪滅せん」と。河越に至つて、城を圍むこと數重、意に必ず取らんことを期す。綱成固く守つて下らず。上杉氏、使を古河に使はして、晴氏に來り助けんことを請ふ。氏康又以て請を爲す。晴氏其の兩つながら解かんことを欲して、依違として之に答ふ。上杉氏の臣難波田某、小野某往き晴氏に說いて曰く、「公、北條を親しむべしと以ふ乎」と。曰く、「然り」と。「伊豆・相模は、公の嘗て領せし所に非ず乎」と。曰く、「然り」と。曰く、「早雲、氏綱、擅に甲兵を興し、伊豆、相模を掠取し、遂に武藏、下總の邊傍に及んで、公をして困蹙此に至らしむ。其の志、盡く關東を取り、已れ公方と爲るに至らずんば、則ち已まざるなり。彼れ今日、上杉を亡さば、明日必ず古河に及ばん。今の公を尊ぶは、乃ち挾んで以て其の私を營まんとするのみ。且つ北條の君に親しむは、新しきなり。上杉の君に仕ふるは、舊きなり。舊きを去つて新しきに就く、君何ぞ惑へる。今、河越城當に陷るべくして陷らず。患ふる所は、關東の將士、兩端を觀望して、其の心一ならざるのみ。君、苟も大旆を進め、辱く軍陣に臨まば、則ち衆、嚮背する所を知り、力を戮せて決前し、必ず河越を擧げん。河越擧ぐれば、則ち勢に乘じ席卷し、小田原を拔き、北條氏を滅し、君を鎌倉に復し、而して首を駢べて之に仕ふる、往昔の如くせん。願はくは公、之を熟計せよ」と。晴氏曰く、「善し」と。乃ち其の士衆を盡して河越に至る。上杉氏、大に喜んで、諸將に號令し、攻擊して歲を越え、其の饟道を四絶す。

通釋 十四年、兩上杉氏は、大擧して攻めて來た。曰ふのに「今度の戰爭こそは、きつと、小田原を剪り滅ぼ

してやる」と。河越に來てからは城を三重四重に取り圍み、心に必ず攻め落すと決めてゐた。併し綱成が堅く守つてゐて中々落城しない。上杉氏は使者を古河に遣つて、晴氏に助けに來て貰ひ度いと賴ませた。氏康も亦同じやうに援けに來て吳れと請ふた。晴氏は兩方を和解させようと思つて、どつちつかずな返事をしてゐた。上杉の家來の難波田某・小野某が往つて晴氏に說いて曰ふには「貴公は北條氏をば親しむべきものと思つてゐられますかと。」晴氏は「さうだ」と答へた。「伊豆・相模は、貴方が以前領して居られた國では御座いませぬか」。「さうだ。」すると二人が曰ふのに「早雲・氏綱は勝手に軍を起して伊豆・相模を掠め取り、遂に武藏・下總の近傍にまで及び、こんなに迄貴公を困らせ蹙めてゐます。彼の志は全部關東を取つて自分が公方にならなければ止まないので御座います。彼れ、今日、上杉を亡ぼせば、明日はきつと古河に及ぶでせう。今北條氏が貴公を尊んでゐるのは、貴公を取り込んで自分の都合の宜いやうにしようといふのです。それに北條氏が貴公に親しんでゐるのは昨今の事です。上杉氏が貴公に事へてゐることは、ふるい事で御座います。故舊を去つて新知の者にお就きになるとは、君には何故そんなにお迷ひなされてゐるので御座いますか。今河越の城は落城すべくして落城しませぬ。今の場合愚ひとする所のことは關東の將士が二た心を持つて、その心が一つにならないといふ事で御座います。貴公が若し旗を押し進めて辱くも我が軍陣に御來臨下さらば、皆の者はその向ふべきところ、背くべきところを知つて、力を合せ、思ひ切つて進みますから、きつと、河越を攻め落すで御座いませう。河越を落せば勢に乘じて席を卷く如く進み、小田原を落して北條氏を亡ぼし、貴公を鎌倉へお戻り願ひ、皆が首をならべてお仕へすること、昔の樣に致しませう。貴公にはよく〳〵お考へ下さつてお計り下さい」と。晴氏は曰ふのに「宜しい」と。そこで、あらん限りの士卒を率ゐて、河越に出かけた。上杉氏は大層喜んで諸將に號令し、攻擊して年を越し、敵の兵糧

を運搬する道を四面からたち切つた。

語釋 觀望（勝つた方に附かうと形勢を觀ること。）

氏康聞之曰、「吾必赴援。獨恐城兵之不俟我而決死也。誰能往告我計者。」綱成弟辨千代、年甫十八、從在氏康左右。進請曰、「此事至要。臣請往焉。卽爲敵所捕、拷掠百端、至死無言矣。」氏康乃謂之曰、「往語乃兄。善爲吾守。吾克兩上杉、不出數月矣。女毋遽出決死也。」辨千代乃往、著上杉氏號、單騎入城。

訓讀 氏康、之を聞いて曰く、「吾れ必ず赴き援けん。獨だ城兵の我を俟たずして死を決せんことを恐る。誰か能く往いて我が計を告ぐる者ぞ」と。綱成の弟辨千代、年甫めて十八、從つて氏康の左右に在り。進み請うて曰く、「此の事至要なり。臣請ふ往かん。卽し敵の捕ふる所と爲らば、拷掠百端、死に至るも言ふ無けん」と。氏康乃ち之に謂つて曰く、往いて乃が兄に語げよ。善く吾が爲めに守れ。吾れ兩上杉に克つは、數月を出でず。女遽に出でて死を決すること毋れ」と。辨千代乃ち往き、上杉氏の號を著けて、單騎、城に入る。

通釋 氏康は之を聞いて曰ふのに「余は必ず援けに行く。たゞ案じられるは、城兵が余の行くのを待たないで、決戰して討死しはせぬかといふことである。誰れか往つて我が計略を告げて吳れる事の出來るものはゐないか」と。綱成の弟の辨千代はその時年やつと十八で、從つて氏康の側に居た、それが進み出て願つて曰ふには「こ

の事は非常に大切な使ひて御座います　何卒私が參り度う御座います。もし敵につかまりましたら、どんなにか拷問されることでせうが、私は死んでも決して申しませんからと、そこで氏康は辨千代に向つて曰ふには「そんなら往つてお前の兄に告げよ。余が爲めに善く城を守つて居れ、余が兩上杉氏に克つのは數ケ月以内の事である、汝は急いで出かけて死を決するやうなことがあつてはならぬぞ」と。そこで辨千代は出かけ、上杉氏の紋所をつけて、一騎で河越城に入つて行つた。

語釋　辨千代(廣勝)

當是時、氏康兵四守疆上諸城、在者裁八千餘人。乃自將赴援。憲政・朝定幷晴氏兵凡八萬騎。氏康計驕而襲之也。佯請和解。憲政等不聽。氏康出至入間河南。上杉氏兵來迎。氏康不戰而走、入小田原。問諜者。曰「敵中云何」。對曰「敵皆笑曰、豎子走矣」。居五六日、又出至河南。敵來又走。又問諜者。諜者曰「敵曰、豎子不能復出。即出走耳。莫復顧也」。氏康曰「可矣」。夜勒兵、親誓之曰「吾聞、戰道衆不必勝、寡不必敗。顧士心和否如何而已。古曰、怯於小敵、而勇於大敵。吾數與上杉氏戰、以我一人當敵十人、以寡敵衆、何必始於今日哉。勝敗之決、在此一戰。汝將士、其一心協力、唯吾所嚮是視。令

其兵皆尙白布於鎧上、約之曰、遇不白者、輒斫。勿取其首。令畢、乃引兵渡河、夜半、直衝上杉氏軍。軍大驚擾亂。我兵縱橫奮擊、莫不一當百。殺傷二萬餘人、虜朝定、走晴氏・憲政。八州豪傑、卽夜降氏康者、九十餘姓。時十五年四月二十日也。

訓讀 是の時に當り、氏康の兵、疆上の諸城を四守して、在る者裁に八千餘人。乃ち自ら將として赴き援く。憲政・朝定、晴氏の兵を幷せて、凡そ八萬騎なり。氏康、驕らせて之を襲はんと計る。佯つて和解を請ふ。憲政等聽かず。氏康出でて入間河の南に至る。上杉氏の兵來り迎ふ。氏康戰はずして走つて、小田原に入る。諜者に問うて曰く「敵中、何とか云ふ」と。對へて曰く「敵皆笑つて曰く、豎子走る」と。居ること五六日、又出でて河南に至る。敵來り、又走る。又諜者に問ふ。諜者曰く「敵曰く、豎子復出づる能はず。卽し出づるも、走らんのみ。復顧みる莫きなり」と。氏康曰く「可なり」と。夜、兵を勒し、親ら之に誓つて曰く「吾れ聞く、戰の道は、衆必ずしも勝たず。寡必ずしも敗れず。士心の和否如何を顧みるのみ。古曰く、小敵に怯れ、而して大敵に勇むと。吾れ數上杉氏と戰ひ、我が一人を以て、敵十人に當る。寡を以て衆に敵する、何ぞ必ずしも今日に始らんや。勝敗の決、此の一戰に在り。汝將士、其れ心を一にし力を協せて、唯吾が嚮ふ所を是れ視よ」と。其の兵をして、皆白布を鎧上に尙へしめ、之に約して曰く「白からざる者に遇へば、輒ち斫れ。其の首を取る勿れ」と。令畢り、乃ち兵を引いて河を渡り、夜半、直に上杉氏の軍を衝く。軍、大に驚いて擾亂す。我が兵、縱橫奮擊し、一、百に當らざる莫し。二萬餘人を殺傷し、朝定を虜にし、晴氏・憲政を走らす。八州の豪傑、卽夜、氏

康に降る者九十餘姓、時に十五年四月二十日なり。

通釋 この當時氏康の兵は、四方の國境の諸城を守つて居たので、小田原にゐたものは、わづかに八千餘人であつた。そこで自ら之に將として援けに行つた。憲政、朝定は晴氏の兵を一緒にして皆で八萬騎もゐた。氏康は敵を驕らせて其の不意を襲はうと計つた。そこで佯つて和睦して兵を罷めむことを請うた。憲政等は承知しなかつた。氏康は、小田原から出かけて、入間川の南まで來た。上杉氏の兵がそれを來り迎へた。氏康は戰はないで走つて小田原に逃げ込んだ。忍びの者に問うて曰ふには「敵中では何と申して居るか」と。その忍びの者は對へて曰ふに「敵は皆笑つて、小僧共は逃げ失せたと申して居ります」と。それから五六日たつて、氏康は又出かけて入間川の南まで來た。敵が來たので又走つた。又忍びの者に問うた。すると對へて曰ふには「敵は小僧共は、もう二度と出て來ることは出來ないだらう。よし出て來た所で逃げるだけの話だ、もう此の上問題にするにも當るまいと申して居ります」と。氏康が曰ふのに「宜しい」と。夜、勢揃ひをして親ら之に誓つて曰ふには「聞く所によると戰の道は多勢が必ずしも勝つといふのではない。又小勢だからとて負けるとも定まつてゐない。たゞ部下の士卒の心が和合して居るかどうかといふことが問題である。昔の言葉に小敵に對しては小心にして恐れ、大敵に對しては放膽にして勇むといふことがある。余は屢〻上杉氏と戰ひ、常に我が一人で敵の十人に當つてゐる。して見れば小勢で以て多勢に對することは何も今日に始まつた譯でもない。勝ち負けの決まるのはこの一戰に在るのである。汝等將士たちは心を一致し、力を合せ、たゞ余が向ふところに眼をつけて進めよ」と、その兵をして鎧の上に白い布を加へさせ、之に約束して曰ふには「白いものを着けてゐない者に出會つたら直ぐ切りつけよ。併しその首などは取つてはならぬ」と。令を傳へ終ると、そこで兵を引きつれ入間川を渡り、夜半直に上

杉氏の軍を衝いた。上杉氏の軍は非常に驚いて大混亂に陷つた。我が兵は之につけ込んで縱橫に奮ひ擊ち、一人が百人に當らないものはない程であつた。二萬人を殺傷し、朝定を生捕にし、晴氏・憲政を走らせた。八州の豪傑で、その夜、氏康に降參した者が、九十餘姓もあつた　時は天文十五年四月二十日であつた。

語釋 入間河（武藏）○古曰（昆陽の戰後、諸軍士が後漢の光武帝を評した語。）○勿取其首（手間取ることを恐れたから。）

是夜、難波田・小野皆死。本間某單騎止戰。本間軀幹魁偉、累九燈于竿、以爲背旗、曰「吾以燭闇主之闇也」。與我將大導寺某鬪、授之九燈曰「吾毋復用此也。子用爲標、好仕北條公」。乃死。大導寺自是、以九燈爲記幟云。

訓讀 是の夜、難波田、小野、皆死す。本間某、單騎止り戰ふ。本間、軀幹魁偉、九燈を竿に累ね、以て背旗と爲して曰く、「吾れ以て闇主の闇を燭すなり」と　我が將大導寺某と鬪ひ、之に九燈を授けて曰く、「吾れ復此を用ふる毋きなり。子、用ひて標と爲し、好く北條公に仕へよ」と。乃ち死す。大導寺、是より九燈を以て記幟と爲すと云ふ。

通釋 この夜難波田・小野などは皆討死した。本間某は一騎で踏み止まつて戰つた。本間は身體が大きく、九個の提燈を竿の先きに重ね懸けて、それを差物としてゐて、曰ふには「吾は之を以て闇君の心の闇を照らすのである」と。この本間は我が大將大導寺某と鬪ひ、大導寺にこの九個の提燈を與へて曰ふには「もう俺には不用だ。貴公に進上するから、之を用ひて差物となし、よく北條公にお仕へなされよ」と、さういつて切腹した。大導寺

はこれから九つの提燈を差物としたといふことである。

語釋 本間某（伴つて氏康に事へた人。）○大導寺某（重興）

天明、上杉氏麾下諸將、聞氏康兵寡、則大悔憤、欲乘其疲、再戰。返至河越、則氏康已入松山城矣。諸將聚議不決。綱成自城內瞰之、開門突出、身先士卒、呼曰「勝矣」。敵軍相驚曰「黃八幡也」。卽敗走。綱成往松山、見氏康、賀戰捷。氏康慰勞之、論功行賞、撫納降附。威振關東、關東諸國皆爭通好焉。

訓讀 天明、上杉氏の麾下の諸將、氏康の兵寡きを聞き、則ち大に悔い憤り、其の疲るゝに乘じて再び戰はんと欲す。返つて河越に至れば、則ち氏康已に松山城に入る。諸將、聚議決せず。綱成、城內より之を瞰、門を開き突出し、身、士卒に先だつて、呼んで曰く、「勝てり」と。敵軍相驚いて曰く、「黃八幡なり」と。卽ち敗走す。綱成、松山に往き、氏康を見て、戰捷を賀す。氏康、之を慰勞し、功を論じ賞を行ひ、降附を撫納す。威、關東に振ふ。關東の諸國、皆爭つて好を通ず。

通釋 夜明に、上杉氏の幕下の諸將は氏康の兵士の少數であつたことを聞いて大に後悔し憤り、氏康の方が疲れて居るのに付け込んでもう一度戰はうと思つた。引き返して河越まで來て見ると、氏康はもう松山城に入り込んでゐた。諸將は聚つて色々評議したが捗どらない。綱成は城內からその樣子を見下ろし、門を開いて突き出

で、自ら士卒に先き立つて「勝つた〳〵」と呼んだ。敵軍は相驚いて曰ふのに「そら黄八幡だ」と。早速敗走して終つた。綱成は松山に往つて、氏康に遇ひ、戰捷を賀した。氏康は之を慰めいたはり、功を論じ、賞を行ひ、降參したものを許し納れた。氏康の威勢は關東に振つた。關東の諸國は皆爭つて好を通じた。

語釋 松山（武藏）

於是、憲政獨有上野、寵菅野・上原不衰。將士益離心。二十年、氏康率八州兵、往擊憲政。七月、攻平井城拔之。憲政出奔越後、依長尾輝虎。其老臣藤田・小幡・三川・成田等六人、以憲政子龍稚來降。氏康命神尾某、誅龍稚、燒夷平井城。兩上杉氏於是皆亡、而東國盡歸於伊勢氏。

訓讀 是に於て、憲政、獨だ上野を有ち、菅野、上原を寵すること衰へず。將士益〻心を離す。二十年、氏康、八州の兵を率ゐ、往いて憲政を擊つ。七月、平井城を攻めて、之を拔く。憲政、越後に出奔して、長尾輝虎に依る。其の老臣藤田、小幡、三川、成田等の六人、憲政の子龍稚を以て來り降る。氏康、神尾某に命じて、龍稚を誅せしめ、平井城を燒夷す。兩上杉氏、是に於て皆亡び、而して東國、盡く伊勢氏に歸す。

通釋 そこで憲政はたゞ上野を領有するだけになつたが、依然として佞人、菅野・上原を寵することは衰へなかつた。將士は愈〻憲政から心を離した。二十年氏康は、八州の兵を率ゐて、憲政を擊つた。七月平井城を攻めて、之を陷れた。憲政は、越後に出奔して、長尾輝虎にたよつた。その家老の藤田・小幡・三川・成田等六人は憲政の

子の龍稺を伴れて降參して來た。氏康は神尾某に言ひつけて、龍稺を誅せしめ、平井城を燒き拂つた。斯くて兩上杉氏は共に滅亡し、關東は悉く伊勢氏のものになつて終つた。

獨足利晴氏率其餘黨、不與氏康通。氏康乃移書、讓之曰「臣父氏綱、與先公結婚姻、竭心翼戴、莫有貳心。以御弓氏之强武、氏綱御密旨、不日滅之。遠近稱其勳勞。而未幾何、將見誅其子孫。臣未知其說。河越之役、憲政促君之親臨也。臣乃白曰不敢請援。請兩　無所援。君已聽之矣。而又惑於讒臣、翻援憲政。臣又白曰、苟宥城兵死、則獻城而退。君又聽之。而攻擊不已。往事如此。其曲其直、天將鑑之。」氏康不復能戴君矣。二十三年十月、將兵攻陷古河城、執晴氏、放之波多野。已而釋之、老於關宿、立其子義氏、居于鎌倉葛西谷。弘治元年、氏康使使入奏京師曰「晴氏悖亂、不能統關東將士。臣謹與諸將士議、立其子義氏代之。」遂爲請其官爵。詔授左馬頭、以氏康爲左京大夫、叙從五位下。

訓讀　獨り足利晴氏、其の餘黨を率ゐて、氏康と通ぜず。氏康乃ち書を移し之を讓めて曰く、「臣が父氏綱、先

公と婚姻を結び、心を竭して翼戴し、貳心有る莫し。御弓氏の强武を以てするも、氏綱、密旨を啣んで、不日に之を滅し、遠近、其の勳勞を稱す。而るに未だ幾何ならずして、將に其の子孫を誅せられんとす。臣、未だ其の說を知らず。河越の役に、憲政、君の親ら臨むを促すや、臣乃ち白して曰く、敢て援を請はず。請ふ、兩つながら援くる所無かれと。君已に之を聽せり。而るに又、讒臣に惑ひ、翻つて憲政を援く。臣又白して曰く、苟も城氏の死を宥さば、則ち城を獻じて退かんと。君又、之を聽す。而るに攻擊已まず。往事、此くの如し。其の曲其の直は、天將に之を鑑みんとす。氏康、復君を戴くこと能はず」と。二十三年十月、兵に將として、攻め古河城を陷れ、晴氏を執へて、之を波多野に放つ。已にして之を釋して、關宿に老せしめ、其の子義氏を立て、鎌倉の葛西谷に居らしむ。弘治元年、氏康、使をして、入つて京師に奏せしめて曰く、「晴氏、悖亂にして、關東の將士を統ぶる能はず。臣、謹み諸將士と議し、其の子義氏を立てゝ之に代らしむ」と。遂に爲めに其の官爵を請ふ。詔して、左馬頭を授け、氏康を以て左京大夫と爲し、從五位下に叙す。

【通釋】たゞ足利晴氏は、その殘黨を率ゐて、氏康に從はなかつた。そこで氏康は書面をやつて、之を責めて曰ふには「私の父の氏綱は貴君の父公と婚姻を結び、心を盡して貴公を輔け推し戴き、決して二心はなかつたのであります。御弓氏のあれ程の强盛勇武を以てしても、氏綱は內命を承はつて間もなく亡して終ひましたが、當時遠近の者は皆その手柄を稱揚しました。然るにその事あつてまだ間もないのに、氏綱の子孫たる私を誅せられようとなさつた。私にはその理由が薩張り分りません。河越の戰爭で憲政が貴公の御出陣を催促しました時、私は援助をお願ひしません。何卒中立してどちらも援けないで下さいと申し上げました。貴公はすでにそれを御承諾なされた。それを又讒言する家來の言に惑はされ、反つて憲政をお援けなされました。私は重ねて申しました、

もし河越城中の兵士の死をお赦し下さるならば、城を貴公に獻じて退却しませうと。貴公は又之をも御承諾なされました。而るに河越城を攻擊して止められなかつた。これまでの事は先づこんなもので御座いました。どちらが正しいか不正かはお天道樣が御照覽になつて居ります。私はもう貴公を君として戴くことは出來ないのであります」と。二十三年十月、氏康は兵を率ゐて攻めて古河城を陷れ、晴氏を生捕つて之を波多野に追放した。間もなく之を赦して關宿に隱退せしめ、その子の義氏を立てゝ、鎌倉葛西谷に居らしめた。弘治元年、氏康は、使をやつて、入つて京都に上奏せしめて曰ふには「晴氏は道理に戻り、關東の將士を統べ治めて行くことは出來ませぬ。臣は謹んで諸將士と相談し、その子の義氏を立て、之に代らしめました」と。遂に義氏の爲めに官爵をお願ひ申した。朝廷では詔して左馬頭を授けられ、氏康を以て左京大夫となし、從五位下に叙せられた。

語釋　先公（高基）○御弓氏（高基の弟義明、御弓御所といつた。）○波多野（相模）○關宿（下總）○弘治（後奈良天皇の年號。）

長尾輝虎計擊氏康、亦詣京師、請將軍足利義輝、自冒上杉氏。太田資正爲輝虎、訛諸將曰、關東將士、自古屬源氏。北條、平氏也。胡爲附之。室町將軍已以輝虎爲管領。公等宜決嚮背焉。於是、將士多送款輝虎。輝虎數入上野。氏康遣兵拒之。更有勝敗。二年、里見義弘又通輝虎、以兵艦八十艘、上三浦城島。氏康、戍將梶原某・富永某、擊卻之、追戰海中、大獲而還。永祿二年、下總將士應輝虎、欲攻關宿取晴氏。結城晴朝、

來拒之。初晴朝與小山・佐竹・宇都宮三族戰。氏康遣兵、援晴朝。晴朝德之。故爲之守。已而聞三族應輝虎攻結城、則辭還。

訓讀 長尾輝虎、氏康を撃たんと計り、亦京師に詣り、將軍足利義輝に請うて、自ら上杉氏を冒す。太田資正、輝虎の爲めに諸將を誂して曰く、「關東の將士、古より源氏に屬す。北條は、平氏なり。胡爲ぞ之に附く。室町將軍、已に輝虎を以て管領と爲せり。公等宜しく嚮背を決すべし」と。是に於て將士、多く款を輝虎に送る。輝虎、數上野に入る。氏康兵を遣はして之を拒ぐ。更ゝ勝敗あり。二年、里見義弘、又輝虎に通じ、兵艦八十艘を以て、三浦の城島に上る。氏康の戍將梶原某、富永某、撃ちて之を卻け、追ひて海中に戰ひ、大に獲て還る。永祿二年、下總の將士、輝虎に應じ、關宿を攻めて晴氏を取らんと欲す。結城晴朝來つて之を拒ぐ。初め晴朝、小山・佐竹・宇都宮の三族と戰ふ。氏康、兵を遣はして晴朝を援けしむ。晴朝、之を德とす。故に之が爲めに守る。已にして三族、輝虎に應じ、結城を攻むと聞き、則ち辭して還る。

通釋 長尾輝虎は氏康を討たんと計り、彼も亦京都に往つて將軍足利義輝に賴んで、自ら上杉氏を名乘つた。太田資正は、輝虎の爲めに諸將を誘つて曰ふには「抑ゝ關東の將士は昔から源氏に屬いて居た。所が北條は平氏である。何故平氏等に附き從ふのか。室町將軍は既に輝虎をば管領となされたのである。一體貴公等はどちらに附くのか決めたら宜いだらう」と。そこで將士は、多くは輝虎に內通した。輝虎は度々上野に攻め入つた。氏康は兵を遣つて、之を拒いた。更る〲勝つたり負けたりしてゐた。二年、里見義弘は又輝虎に內通し、兵艦八十艘を引きつれて三浦の城島に上陸した。そこを守つてゐた氏康の大將梶原某・富永某が撃つて之を退け、追ひつ

めて、海中で戰ひ、大に勝つて還つた。永祿二年、下總の將士は輝虎に內應し、關宿を攻めて、晴氏を奪ひ取らうと思つた。結城晴朝がやつて來て之を拒いだ。初め、晴朝は、小山・佐竹・宇都宮の三族と戰つた。氏康は兵を遣はして、晴朝を援けさせた。晴朝は大層恩に思つた。故に北條氏の爲めに守つたのである。其の內に三族が輝虎に內應して、結城を攻めると聞いたので辭して還つて行つた。

〔語釋〕三浦城島（相模）○永祿（正親町天皇の年號。）

三年正月、輝虎率騎卒十一萬、來攻小田原。氏康議曰、「輝虎慓悍無前。而智慮短促不能持久。且以威力劫諸將。諸將必有不服者。吾厚集我兵、不與抗力、縱其猖獗、坐待其變、不損我兵、而彼將自潰矣。是兵法所謂、避其銳氣、擊其惰歸、不戰而屈人兵者也。」乃盡召八州將士、舍其城邑、來保守小田原。三月、輝虎率諸軍、至城下。氏康不肯出戰。輝虎攻之、不能拔。忍城主成田長康、憤輝虎無禮也、不告而去。將士稍稍亡去、皆叛輝虎、歸氏康。輝虎大驚卻走。氏康令沿途士民奪其輜重。輝虎狼狽、走歸越後。而東國歸伊勢氏者如故。先是、今川義元、其子氏眞、與武田晴信合兵、數臨境上、以爭富士河東之地。氏康、與嫡子氏政、俱會戰焉、不決。乃講和。氏康以女妻氏眞、爲

氏政娶晴信女。十二月、氏康授國於氏政而老。

訓讀 三年正月、輝虎、騎卒十一萬を率ゐ、來りて小田原を攻む。氏康、議して曰く、「輝虎は慓悍にして前無し。而して智慮短促にして、久しきを持する能はず。且つ威力を以て諸將を劫す。諸將必ず服せざるものあらん。吾れ厚く我が兵を集め、與に力を抗せず、其の猖獗を縱にせしめ、坐ながら其の變を待たば、我が兵を損せずして、彼れ將に自ら潰えんとす。是れ兵法に所謂、其の鋭氣を避け、其の惰歸を擊ち、戰はずして人の兵を屈するものなり」と。乃ち盡く八州の將士を召し、其の城邑を舍て、來つて小田原を保守せしむ。三月、輝虎、諸軍を率ゐて、城下に至る。氏康、肯て出でて戰はず。輝虎、之を攻めて拔く能はず。忍城主成田長康、輝虎の無禮を憤るや、告げずして去る。將士稍稍亡げ去り、皆輝虎に叛いて、氏康に歸す。輝虎、大に驚いて卻き走る。氏康、沿途の士民をして其の輜重を奪はしむ。輝虎、狼狽し、走つて越後に歸る。而して東國の伊勢氏に歸するもの故の如し。是より先き、今川義元、其の子氏眞、武田晴信と兵を合せ、數境上に臨んで、以て我が富士河東の地を爭ふ。氏康、嫡子氏政と、倶に會戰して、決せず。乃ち和を講ず。氏康、女を以て氏眞に妻はせ、氏政の爲めに晴信の女を娶る。十二月、氏康、國を氏政に授けて老す。

通釋 三年正月、輝虎は、騎兵歩兵十一萬を率ゐて、小田原を攻めに來た。氏康は相談して曰ふには「輝虎は性質氣早で勇氣があり、中々前に立つ者はない。(當ることが出來ぬ) しかし、智慧思慮が淺薄であつて、あれでは到底長く持ちこたへることは出來ない。それに威力で以て諸將を脅迫して從へたのだ。諸將の中に必ず心服しない者が居るのであらう。吾は我が兵を固く一所に集めて、彼と力を張り合ふことをしないで、あばれ放題あば

れさせて置いて、こちらはぢつとしてゐて變事の起るのを待つて居れば、結局我が兵を損はないで、そして、彼は自然に崩れることであらう。これは兵法に所謂敵の鋭い氣先きを避けて、そのなまけ歸る所を擊てば、戰はないで人の兵を屈することが出來ると云つてある通りだ」と。そこで盡く八州の將士を召し寄せ、その城邑は放擲つて置いて來つて小田原に立て籠らせた。三月、輝虎は、諸軍を率ゐて、小田原の城下にやつて來た。氏康は出でゝ戰はうとしなかつた　輝虎は之を攻めたが陷れることは出來なかつた。忍の城主、成田長康は、輝虎の無禮を怒つて、默つて本國へ引き返した。將士はこれからだん／＼と逃げ去り、皆輝虎に叛いて氏康に屬いた。輝虎は非常に驚いて、退却した。氏康は道筋の人民をして、その荷物や車を奪はしめた。輝虎は慌てゝ走つて越後に歸つた。そして、關東諸國はもとのやうに伊勢氏に歸して居た。これより前、今川義元及び其の子氏眞は、武田晴信と戰爭し度々國境に出張して、富士河の東の北條氏の領地を爭ひ合つた。氏康は嫡子氏政と倶に戰ひ合つたが、勝負が決まらなかつた。そこで和睦をなした。氏康は娘を氏眞に妻はせ、そして、氏政の爲めに晴信の娘を娶つた。十二月、氏康は國を氏政に授けて隱居をした。

語釋　兵法（孫子軍爭篇。）○忍（武藏）

五年、與晴信合兵、復取松山。松山者、太田資正屬城也。資正憾輝虎之不終功也、遣使說里見義弘。六年、義弘出兵下總、與資正合、欲襲江戶城。城將遠山某諜知之、急修守備、而馳使報氏康。氏康・氏政將兵、發小田原、與義弘夾鴻臺而陣。其夜、候騎報

曰「義弘兵卻」。我先鋒遠山某・富永某、進濟搦木瀨、平旦、引兵上臺上。敵將正木某、伏臺傍二里許、卒起要擊。我兵大敗、二將力戰死、餘兵大走。敵追至氏政陣。氏政麾兵、橫擊卻之。

【訓讀】五年、晴信と兵を合せて、復松山を取る。松山は、太田資正の屬城なり。資正、輝虎の功を終へざるを憾み、使を遣はして里見義弘に說かしむ。六年、義弘、兵を下總に出し、資正と合して江戶城を襲はんと欲す。城將遠山某、諜して之を知り、急に守備を修め、而して使を馳せて氏康に報ず。氏康・氏政、兵に將として、小田原を發し、義弘と鴻臺を夾んで陣す。其の夜、候騎報じて曰く、「義弘の兵卻く」と。我が先鋒遠山某・富永某、進んで搦木瀨を濟り、平旦兵を引いて臺上に上る。敵將正木某、臺傍二里許に伏し、卒に起つて要擊す。我が兵大に敗れ、二將力戰して死し、餘兵大に走る。敵、追つて氏政の陣に至る。氏政、兵を麾き、橫擊して之を卻く。

【通釋】五年、氏康は晴信と兵を合せて、再び松山を取つた。松山といふのは、太田資正に屬してゐた城である。資正は輝虎が成功しなかつたことを殘念に思ひ、使を遣はして、里見義弘に說かしめた。六年、義弘は兵を下總に出して、資正と合し、江戶城を襲はうと思つた。城將遠山某は間諜の知らせで、これを知り、急に守備を整へ、使を馳せて、氏康に報告した。氏康・氏政は兵を率ゐて、小田原を出發し、義弘と鴻臺を挾んで陣取つた。その夜斥候の騎兵が報告して曰ふのに「義弘の兵が退却した」と。わが先鋒の遠山某・富山某は進んで搦木瀨を渡つて、夜明けに兵を引率して、臺の上に登つた。敵將正木某が臺の傍二里ばかりの處に隱れてゐて、急に起つて構へ擊つた。

我が兵は大に敗れ、二將は力戰して討死し、殘兵は大敗北した。敵は追つかけて、氏政の陣屋に來た。氏政は兵を指揮して横合ひから擊つて之を退けた。

語釋 搦木瀨（利根川に在る。）〇二將（遠山、富永。）

氏康已濟水、得敗聞、召諸將曰「吾欲爲二將雪恥。何如」氏政曰「曩者遣一卒、雜敵入其陣。還報曰、義弘在臺上檢二將首、意色甚驕、敵喪其良、度已退去。吾且日濟水、追北殲之。乃釋甲休兵。是其可襲也」氏康曰「然」乃勒二軍、氏康・氏政自爲先鋒。會日且暮、大霧、咫尺不可辨。二軍自臺南北、鼓譟而登。聲震天地。義弘軍大驚、潰走。氏康乘愛馬。名賀美提白秘蘿刀手斫三十騎。氏政等擒正木以下十八將、斬首五千級。義弘・資正僅以身免。於是、上總・安房諸城、多望風降。四隣益畏焉。

訓讀 氏康、已に水を濟り、敗聞を得。諸將を召して曰く、「吾れ二將の爲めに恥を雪がんと欲す。何如」と。氏政曰く、「曩者に一卒を遣はして、敵に雜つて其の陣に入らしむ。還り報じて曰く、義弘臺上に在つて、二將の首を檢し、意色甚だ驕り、敵、其の良を喪ふ、度るに已に退き去らん。吾れ且日、水を濟り、北ぐるを追つて之を殲さんと。乃ち甲を釋き兵を休む。是れ其れ襲ふべきなり」と。氏康曰く、「然り」と。乃ち二軍を勒して、氏康、氏政、自ら先鋒と爲る。會日且に暮れんとし、大に霧ふり、咫尺も辨ず可からず。二軍、臺の南北より鼓

課して登る。聲、天地に震ふ。義弘の軍、大に驚き、潰えて走る。氏康、愛馬に乘る。賀美と名づく。白柲の薙刀を提げて、手づから三十騎を斫る。氏政等、正木以下十八將を擒にし、首を斬ること五千級。義弘、資正、僅に身を以て免る。是に於て、上總、安房の諸城、多く風を望んで降る。四隣益〻畏る。

通釋 氏康は、既に川を渡つて、敗軍の報を得た。諸將を召して曰ふには「吾は二將の爲めに恥を雪ぎたいと思ふがどうだ」と。氏政が曰ふには「さきに一卒を派遣し、敵中に混ぜて敵陣に入らしめました。それが還り報じて申しまするに、義弘は、鴻臺の上にあつて、二將の首實驗をやり、意氣顏色共に甚だ驕つてゐて、『敵はもう、その良臣を失つたのだから、思ふに、もはや退却したことだらう。吾は明日川を渡つて、その逃げるのを追つかけて、之を皆殺にしてやらう』などゝ申してゐるそうです。そんな譯ですから全く安心して鎧をぬぎ、兵を休息させて居りますそうです。ですからその不意を擊つには、今が打つてつけの機會です」と。氏康は曰ふに「全くさうだ」と。そこで二軍を纏めて氏康・氏政が、めい〳〵各一隊の先鋒となつた。丁度日が暮れようとして、大層な霧で、一寸さきも見えぬ程であつた。二た手の軍勢は鴻臺の南北から太鼓をたゝき喊の聲を揚げて臺に登つた。その聲は天地に震つた。義弘の軍は、大に驚いて潰え走つた。この時、氏康は愛馬に乘つてゐた。其の馬は賀美と名づけてゐた。白柄の薙刀を提げ、手づから三十騎を斬り倒した。氏政等は、正木以下、敵將十八人を生捕り斬つた首が五千級もあつた。義弘・資正はやつと身一つで逃げて免れた。そんな譯で上總安房の諸城も多く氏康の風を望んで降參した。四方の隣國は益〻北條氏を畏れた。

語釋 白柲薙刀（白柄のなぎなた。）

十年十月、氏康與晴信合兵五萬、攻長尾輝虎于廐橋、縱火城下、至其門還、以報小田原之役。輝虎不敢出。輝虎數窺河越、不得志。氏康有妾子三郎。輝虎欲養之爲子以成和議。氏康聽之。於是、諸國無事。

訓讀 十年十月、氏康、晴信と、兵五萬を合せて、長尾輝虎を廐橋に攻め、火を城下に縱ち、其の門に至つて還り、以て小田原の役に報ず。輝虎敢て出でず。輝虎、數河越を窺つて志を得ず。氏康に妾の子三郎あり。輝虎、之を養ひ子と爲し、以て和議を成さんと欲す。氏康、之を聽す。是に於て、諸國事無し。

通釋 十年十月、氏康は、晴信と兵五萬を合せて、長尾輝虎を廐橋に攻め、火を城下につけ、その門まで往つて引き返し、先年小田原に攻められた返報をした。輝虎は出て來ようとしなかつた。輝虎は度々河越をねらつたが、其の志を遂げなかつた。氏康には妾の子の三郎といふのがゐた。輝虎は、之を養子にして氏康と和睦をしたいと思つた。氏康も之を許した。こゝに於て、諸國は平穩となつた。

及今川義元死、氏眞承其後。而淫縱、不親國政。晴信、其母之弟也。陰謀奪其國。十一年十二月、晴信擧兵襲氏眞。氏眞逃走遠江。晴信不敢追。留居府中。恐我兵救之也、乃遣辯士寺島甫安來說 曰「請分駿河、富士河以西屬武田氏、富士河以東屬北條氏。」氏康・氏政怒曰「晴信規利以滅親。是豺狼也。今川氏、吾祖宗所寄跡、且爲姻

戚。吾必復氏眞矣。乃執甫安、囚于伊豆、以兵四萬餘騎、赴援。十二年正月、陣薩陲山。晴信陣興津。相持不戰。至四月、晴信度終不可支、夜拔其軍、間道逃去。氏眞乃來奔。氏康・氏政分兵、守諸城、爲氏眞修府中城。

【訓讀】今川義元死するに及び、氏眞、其の後を承く。而して淫縱にして、國政を親らせず。晴信は、其の母の弟なり。陰に其の國を奪はんと謀る。十一年十二月、晴信、兵を擧げて、氏眞を襲ふ。氏眞逃れて、遠江に走る。晴信敢て追はず。留つて府中に居る。我が兵の、之を救はんことを恐れ、乃ち辯士寺島甫安を遣はし來り說かしめて曰く、「請ふ、駿河を分つて、富士河以西は武田氏に屬し、富士河以東は北條氏に屬せん」と。氏康、氏政、怒つて曰く、「晴信、利を規つて親を滅す。是れ豺狼なり。今川氏は、吾が祖宗の跡を寄する所、且つ姻戚たり。吾れ必ず氏眞を復せん」と。乃ち甫安を執へて、伊豆に囚し、兵四萬餘騎を以て、赴き援く。十二年正月、薩陲山に陣す。晴信、興津に陣す。相持して戰はず。四月に至つて、晴信、終に支ふ可からざるを度り、夜、其の軍を拔いて、間道より逃れ去る。氏眞乃ち來奔す。氏康、氏政、兵を分つて諸城を守り、氏眞の爲めに府中城を修む。

【通釋】今川義元が死んでから、その子の氏眞が跡を嗣いだ。氏眞は淫亂で我儘で國政を自分で執らなかつた。武田晴信は、氏眞の母の弟である。（卽ち叔父）併しひそかに、其の國を奪はうと謀つてゐた。十一年十二月、晴信は、兵を擧げて、氏眞を襲うた。氏眞は逃げて遠江に走つた。晴信は押し切つて追はうとしなかつた。そし

て留まつて府中に居つた。北條氏の兵が氏眞を救ふのを恐れたので、辯士の寺島甫安を遣はして來り說かしめて曰ふには「何卒駿河を二分して、富士河より西は、武田氏に屬し、富士河より東は北條氏に屬することに致したい」と。氏康・氏政は怒つて曰ふには「晴信は利益ばかり求めて、親類を滅して顧みない。豺狼のやうな男である。元來、今川氏は、吾が先祖がはじめ身を寄せた家で、それに現在も姻戚になつてゐる。吾は必ず氏眞を其の國に取り戻すやうにする」と。そこで、甫安を捕へて、伊豆に囚へ置き、兵四萬餘騎を引きつれて援けに行つた。十二年正月、薩陲山に陣した。晴信は興津に陣した。どちらも自重して戰はなかつた。四月になつて、晴信は到底支へ切れぬと思ひ、夜、その軍を引き揚げて裏道から、逃げ去つた。そこで氏眞は北條氏に逃げ込んだ。氏康・氏政は兵を分けて諸城を守り、氏眞の爲めに府中の城を修覆してやつた。

語釋 薩陲山・興津（駿河）

六月、晴信來入伊豆、軍于鳴島。會大雨。我兵夜襲其營。晴信驚、棄其牙旗而走。而關東將士、多通晴信者。九月、晴信發二軍、來襲小田原。時我兵大半戍駿河、小田原兵寡。十月、晴信來至城下、聲言、詣鶴岡神祠、以告戰捷。氏康・氏政欲待其入鎌倉、而斷後殲之、令兵勿出。晴信乃引軍歸甲斐。氏政弟氏輝等、要之三增山、擊破其先鋒。而衆寡不敵、我兵遂敗走。氏輝獨身止戰。其臣大石某謂之曰「是非公死處。臣請代公

死。進而死之。氏輝得間馳走、馬中箭斃。其臣師岡某授其馬、免之。氏康・氏政將兵追晴信、未至嶺三里而敗報至。乃班軍。而戍駿河者、舍守赴難。十一月、晴信復擧國兵、入駿河。諸城解走。獨北條綱重在蒲原、堅守不下。晴信知其不可力取、引兵而去。綱重出追之。晴信分兵直入其城。綱重戰死之。晴信陷府中、盡取駿河。氏康乃給氏眞以早川邑、而遣氏政及松田憲秀等擊晴信。

訓譯　六月、晴信來つて伊豆に入り、鳴島に軍す。會大雨あり。我が兵、夜、其の營を襲ふ。晴信驚いて、其の牙旗を棄てゝ走る。而して關東の將士、晴信に通ずる者多し。九月、晴信、二軍を發して、來つて小田原を襲ふ。時に我が兵の大半は駿河を戍り、小田原に兵寡し。十月、晴信來つて城下に至り、聲言す、鶴岡神祠に詣で、以て戰捷を告げんとすと。氏康、氏政其の鎌倉に入るを待ち、後を斷ち之を殲さんと欲し、兵に令して出づる勿らしむ。晴信乃ち軍を引いて甲斐に歸る。氏政の弟氏輝等、之を三增山に要し、擊つて其の先鋒を破る。而れども衆寡敵せず、我が兵遂に敗走す。氏輝、獨身止り戰ふ。其の臣大石某、之に謂つて曰く、「是れ公の死處に非ず。臣請ふ、公に代つて死せん」と。進んで之に死す。氏輝、間を得て馳せ走り、馬、箭に中つて斃る。其の臣師岡某、其の馬を授けて之を免れしむ。氏康・氏政、兵を將ゐて晴信を追ひ、未だ嶺に至らざること三里にして、敗報至る。乃ち軍を班す。而して駿河を戍る者、守を舍てゝ難に赴く。十一月、晴信、復國兵を擧げて駿

河に入る。諸城、解走す。獨り北條綱重、蒲原に在りて、堅く守つて下らず。晴信、其の力取すべからざるを知り、兵を引いて去る。綱重出でて之を追ふ。晴信、兵を分つて、直に其の城に入らしむ。綱重戰つて之に死す。晴信、府中を陷れて、盡く駿河を取る。氏康乃ち氏眞に給するに、早川邑を以てす。而して氏政、及び松田憲秀等を遣はして、晴信を撃たしむ。

【通釋】六月、晴信はやつて來て伊豆に入り、鳴島に陣取つた。丁度大雨が降つた。我が兵は夜、その陣屋を襲うた。晴信は驚いて大將の旗を棄てゝ逃げた。併し關東の將士の晴信に從ふ者が多かつた。九月、晴信は二た手の軍勢を繰り出して、やつて來て小田原を襲うた。この時、我が兵は大半駿河を守つて居たので小田原には兵が寡かつた。十月、晴信は小田原の城下までやつて來て、鶴ケ岡八幡に參詣して戰捷を告げるのだと言ひふらした。氏康・氏政は晴信が鎌倉へ入るのを待ち其の後を絕つて敵を皆殺にしようと思ひ、兵に命令して城から外へ出ない樣にした。そこで晴信は軍を引きつれて甲斐に歸ることゝなつた。氏政の弟の氏輝等は三增山に晴信を待ち受けてその先鋒を撃ち破つた。併し多勢に小勢でかなはず我が兵は遂に敗北した。氏輝は一人で踏み止まつて戰つた。その家來の大石某が氏輝に謂つて曰ふには「こゝは君の討死なされる場處ではありません。私は君になり代つて討死致しませう」と。進んで討死をした。氏輝は其の隙を得て馳せて逃げたが、馬が矢に中つて斃れた。所が家來の師岡某が自分の馬を與へて、氏輝を逃がした。氏康・氏政は、兵をつれて晴信を追つかけたが、三增山へもう三里といふ所で敗軍の報告が來た。それで引きかへすことゝなつた。そして駿河を守つて居たものも、その守りを打ち棄て、小田原の危急を救ひに行つた。十一月、晴信は、再び國兵を擧げて駿河に攻め入つた。諸城は兵を解いて逃げ走つた。たゞ北條綱重は蒲原に居つて、堅く守つて降參しなかつた。晴信は力づくでは取れな

いといふことを知つて、兵を引きつれて去つた。綱重は城から出て之を追つかけた。晴信は兵を分けて直に其の城に入らしめた。綱重は遂に此の時に討死した。晴信は府中を陷れ、皆駿河を取つた。そこで氏康は氏眞に早川邑を與へた。そして、氏政及び松田憲秀等を遣はして晴信を撃たしめた。

語釋　鳴島（伊豆）○三增山（相模）○班軍（軍を還す。）○蒲原（駿河）○早川邑（相模）

元龜元年九月、氏政與晴信相拒伊豆。聞氏康疾作乃還。十月、氏康卒。年五十六。氏康攻擊四方、往往以身當敵、有大創數十。而常用心於政治、講源賴朝故事、察吏之貪廉、而黜陟之。關東諸國、倚而安焉。嘗與晴信會、晴信問河越戰略。氏康曰「是非吾功也。綱成等忠勇所致耳」其不矜如此。故其士民皆以廉讓相尙、趨君事如歸。及其卒也、無不哀慕。

訓讀　元龜元年、九月、氏政、晴信と伊豆に相拒ぐ。氏康疾作ると聞いて、乃ち還る。十月、氏康卒す。年五十六なり　氏康、四方を攻擊し、往往、身を以て敵に當り、大創數十あり。而して常に心を政治に用ひ、源賴朝の故事を講じ、吏の貪廉を察して、之を黜陟す。關東の諸國倚つて安んず。嘗て晴信と會し、晴信、河越の戰略を問ふ。氏康曰く、「是れ吾が功に非ざるなり。綱成等忠勇の致す所のみ」と。其の矜らざること此くの如し。故に其の士民、皆廉讓を以て相尙び、君事に趨くこと歸するが如し。其の卒するに及ぶや、哀慕せざる無し。

通釋　元龜元年九月、氏政は、晴信と伊豆で互に相拒いで居た。氏康が病氣に罹つたと聞いたので引き還した。十月、氏康は死んだ。年は五十六であつた。氏康は、四方を攻擊し、往々自分の身を以て敵に當り、爲めに大創が數十個所もあつた。そして常に心を政治に遣ひ、源頼朝の行つた故事に從ひ、役人の貪慾なものや潔白な者をよく見分けて之を任免してゐた。關東の諸國は氏康にたよつて安心して居た。嘗て、晴信と出會つた時、晴信が河越戰爭の軍略について尋ねたことがある。氏康が曰ふには「あれは私の手柄ではありません。綱成等の忠勇のお蔭であります」と。彼の威張らないことはこんな風であつた。だから其の配下の士民は皆廉潔で人に讓り合ふことを重んじ、君の事に働くことは自分の家に歸るかのやうに慕つてゐた。氏康が死んだ時に悲しみ慕はない者はなかつた程である。

語釋　元龜（正親町天皇の年號。）

氏政勇敢類氏康、而器略不及。氏康既卒、甲斐將士、欲乘喪攻氏政。晴信方西擊織田氏。以故不聽。遂講和議。氏政已無西顧之憂。乃專經營東國。天正五年夏、擊里見義高、破之。義高請和、獻其子義頼。常陸國主佐竹義重、亦效質子。氏政於是授國於嫡子氏直而老。氏政・氏直、皆襲氏康官爵。晴信既卒、子勝頼數出兵、與織田氏・德川氏爭、大敗衂。乃以重幣來請和、且請娶氏政妹。氏政許之。自是、武田氏遂爲我屬國。

六年、輝虎卒。二子景虎・景勝、爭國構兵。景虎卽氏政弟三郎也。氏政爲景虎請援於勝頼。勝頼諾之。景勝厚賂勝頼嬖臣。勝頼變意、遣兵助景勝、攻殺景虎。氏政大怒、與勝頼絕。

訓讀　氏政、勇敢、氏康に類し、而して器略は及ばず。氏康既に卒し、甲斐の將士、喪に乘じて氏政を攻めんと欲す。晴信、方に西織田氏を擊たんとす。故を以て聽さず。遂に和議を講ず。氏政已に西顧の憂なし。乃ち專ら東國を經營す。天正五年夏里見義高を擊つて、之を破る。義高、和を請ひ、其の子義頼を獻ず。常陸の國主佐竹義重も、亦質子を效す。氏政、是に於て、國を嫡子氏直に授けて老す。氏政・氏直、皆氏康の官爵を襲ぐ。晴信既に卒し、子勝頼、數兵を出し、織田氏・德川氏と爭つて、大に敗衄す。乃ち重幣を以て來つて和を請ひ、且つ氏政の妹を娶らんと請ふ。氏政、之を許す。是より武田氏、遂に我が屬國と爲る。六年、輝虎卒す。二子景虎・景勝、國を爭つて兵を構ふ。景虎は、卽ち氏政の弟三郎なり。氏政、景虎の爲めに援を勝頼に請ふ。勝頼、之を諾す。景勝、厚く勝頼の嬖臣に賂す。勝頼、意を變じ、兵を遣はして、景勝を助け、景虎を攻め殺す。氏政、大に怒つて、勝頼と絕つ。

通釋　氏政は、勇氣果敢なること、氏康に類似して居たが、併し器度才略は及ばなかつた。氏康が既に死んだので甲斐の將士は、その喪につけ込んで、氏政を攻めようと思つた。晴信は其の時、丁度、西の方織田氏を擊たうとしてゐた。故に之を聽き入れなかつた。遂に和議を結ぶことゝなつた。かくて氏政は西方の心配が無くなつ

た。そこで專ら關東方面を取り治めること〻なつた。天正五年夏　里見義高を撃つて之を破つた。義高は和議を願ひ出て、その子の義頼を獻じた。常陸の國主佐竹義重も亦自分の子を人質として差し出した。そこで氏政は國を嫡子の氏直に讓つて隱居した。氏政・氏直は皆氏康の官爵左京大夫從五位下を繼いだ。その頃、武田晴信は旣に死んで終ひ、その子の勝頼は度々兵を繰り出して織田氏・德川氏と爭ひ、非常に負けて弱つてゐた。そこで立派な贈物を持つて和議を願ひ出で、且つ氏政の妹を嫁にし度いと申し込んだ。氏政は之を許した。これから、武田氏は遂に北條氏の屬國となつた。六年、越後の長尾輝虎が死んだ。二子景虎・景勝は國を爭つて互に戰爭した。景虎は、氏政の弟の三郎である。（輝虎の養子）氏政は景虎の爲めに援助を勝頼に請うた。勝頼は之を承諾した。所が景勝は勝頼の氣に入りの家來に大層な賄賂を遣つて援助を請うた。故に勝頼は心を變じ、兵を遣はして景勝を助け、景虎を攻め殺した。氏政は非常に怒つて、勝頼と絕交した。

語釋　嬖臣（長政調閑、跡部勝資、）

織田信長既定畿内、來約夾攻勝頼。氏政許之。七年九月、與勝頼相持于三島。八年、戰于浮島原。十年三月、信長與子信忠、擊勝頼、入甲斐。氏政・氏直、將兵三萬臨境上。勝頼困蹙、欲死、勅夫人走小田原。夫人不聽。與俱自殺。信長既定甲斐・信濃、令我德川公居駿河、令其將瀧川一益守西上野、居廐橋城。十年六月、信長爲其下所弒。一

益將西歸。鉢形城主北條氏郡使告氏直、而出陣金窪、與一益戰、不利。一益兵乘勝而進。氏直先鋒、設伏而佯走。一益陷伏。我兵前後擊之、斬首二千級。時甲斐・信濃大亂。德川氏・上杉氏爭之。氏政又令氏直率兵數萬會戰。不決。乃與共和、定西上野而還。

訓讀 織田信長、既に畿內を定め、來つて勝賴を夾み攻めんと約す。氏政、之を許す。七年九月、勝賴と三島に相持す。八年、浮島原に戰ふ。十年三月、信長、子信忠と、勝賴を擊つて、甲斐に入る。氏政、氏直、兵三萬に將として、境上に臨む。勝賴、困蹙し、死せんと欲し、夫人をして小田原に走らしむ。夫人聽かず。與に倶に自殺す。信長、既に甲斐・信濃を定めて、我が德川公をして駿河に居らしめ、其の將瀧川一益をして西上野を守り、厩橋城に居らしむ。十年六月、信長、其の下の弑する所と爲る。一益、將に西に歸らんとす。鉢形城主北條氏郡、氏直に告げしめ、出でて金窪に陣し、一益と戰つて、利あらず。一益の兵、勝に乘じて進む。氏直の先鋒、伏を設けて佯り走る。一益、伏に陷る。我が兵、前後より之を擊つて、斬首二千級。時に甲斐、信濃、大に亂る。德川氏、上杉氏、之を爭ふ。氏政、又氏直をして、兵數萬を率ゐて會戰せしむ。決せず。乃ち與に共に和し、西上野を定めて還る。

通釋 織田信長は既に畿內を平定して終つてから、使者を以て勝賴を夾み討にしようと約束した。氏政は之を承諾した。七年九月、勝賴と三島に對陣した。八年、浮島ケ原で戰つた。十年三月、信長は其の子信忠と一緒に

勝頼を撃つて甲斐に攻め込んだ。氏政・氏直は兵三萬を引きつれて國境まで進出した。勝頼は苦しみちゞめられ遂に死なうと思ひ、夫人(氏政の妹)を小田原に逃げさせようとした。併し夫人は聽き入れなかつた。勝頼と一緒に自殺した。信長は既に甲斐・信濃を平定し、わが德川公家康をして、駿河に居らせて、その將瀧川一益をして西上野を守つて、厩橋城に居らしめた。十年六月、信長は、その家臣明智のために弑せられた。一益は將に西に歸らうとした。鉢形城主の北條氏邦は使をやつて、氏直に告げしめ、出でゝ金窪に陣取り、一益と戰つて見たがうまく行かなかつた。一益の兵は勝につけ込んで進んだ。氏直の先鋒は伏兵を設けて置いて、わざと逃げ出した。一益はうつかりその伏兵に陷つて終つた。我が兵は前後から之を擊ち、斬首二千級もあつた。當時甲斐・信濃の二國が大層亂れてゐた。德川氏・上杉氏は之を取らうと爭つてゐた。氏政は又氏直をして、兵數萬を率ゐて之と會戰せしめた。併し勝負は決まらなかつた。そこで德川氏と共に和睦をして、西上野を平定して還つて來た。

語釋 夫人(氏政の妹、前年勝頼に嫁した。) ○德川公(外史著者の時代は德川時代氏であつたので家康と呼びすてないで公字を用ひたのである。) ○鉢形(武藏) ○金窪(上野)

當是時、伊勢氏盡定八州、沃野千里、鑄山、煮海、小田原繁華、爲關東都會第一。然氏政漸驕侈、用人不別忠佞。初氏政之爲世子、從氏康略上野、與武田晴信合兵、軍松山。時方仲夏、有刈麥駄過軍前者。氏政見之、指問左右何物。左右曰「麥也」氏政曰「盡炊以供賓」晴信哂曰「吾今而後知北條氏大國也。郎君大國公子、故爲是言耳。夫麥

者、擊之、簸之、蕓之、晞而舂之者再、然後浸之、而炊之。今郎君乃欲直炊之。左右竊笑之。氏政不通下情如此。以故國政日弊。老臣松田憲秀弄權柄、士民多被冤枉者。嘗有一僧、過觀城門榜令。曰「北條氏將亡矣。」或走告之市尹。市尹召僧、問曰「聞汝謂北條氏將亡、信乎。」曰「信。」曰「何以謂之。」曰「吾三十年前過觀榜令、令四五條而已。今則三倍焉。夫德薄則政滯。政滯則令煩。令煩則衆離。衆離則君孤立矣。君已孤立。不亡而何待。」市尹以告氏政。氏政不爲意。獨委任憲秀。

訓讀　是の時に當り、伊勢氏、盡く八州を定め、沃野千里、山を鑄、海を煑て、小田原の繁華、關東の都會第一たり。然れども氏政、漸く驕侈にして、人を用ふるに忠佞を別たず。初め氏政の世子たりしとき、氏康に從つて上野を略し、武田晴信と兵を合せて、松山に軍す。時方に仲夏、麥を刈り馱して軍前を過ぐる者あり。氏政、之を見、指して左右に何物ぞと問ふ。左右曰く「麥なり」と。氏政曰く「盍ぞ炊いで以て賓に供せざる」と。晴信嘲つて曰く「吾れ今にして後、北條氏の大國なるを知る。郎君は大國の公子、故に是の言を爲すのみ。夫れ麥は、之を擊ち、之を簸し、之を蕓し、晞し之を舂づくもの再び、然る後、之を浸し、而して之を炊ぐ。今、郎君は乃ち直に之を炊がんと欲す」と。左右、竊に之を笑ふ。氏政、下情に通ぜざること此くの如し。故を以て、國政、日に弊る。老臣松田憲秀、權柄を弄して、士氏、寃枉を被るもの多し。嘗て一僧あり、過つて城門の榜令を

觀て曰く、「北條氏將に亡びんとす」と。或人走つて之を市尹に告ぐ。市尹、僧を召し、問うて曰く、「聞く、汝、北條氏將に亡びんと謂ふと。信乎」と。曰く、「信なり」と。曰く、「何を以て之を謂ふ」と。曰く、「吾れ三十年前、過つて榜令を觀しに、令四五條のみ。今は則ち三倍す。夫れ德薄ければ則ち政滯る。政滯れば則ち令煩し。令煩しければ則ち衆離る。衆離るれば則ち君孤立す。君已に孤立す。亡びずして何をか待たん」と。市尹以て氏政に告ぐ。氏政、意と爲さず。獨り憲秀に委任す。

【通釋】この當時伊勢氏は皆關八州を平定し、肥えた土地が千里も打ちつゞき、鑛山を開いて銅鐵を鑄たり、又海水を煮て鹽を取り、小田原の繁華なことは關東の都會中第一であつた。併し氏政はだん／＼心驕つて贅澤になり、人を用ふるのにも忠義なものと佞人との區別をしなかつた。初め氏政がまだ繼嗣の頃、氏康に從つて、上野を攻め、武田晴信と兵を合せて松山に陣取つたことがあつた。その時は夏の中頃であつたが、折しも麥を刈つて馬に積んで軍隊の前を通つたものがあつた。氏政は之を見て指して、左右の臣にあれは何かといつて尋ねた。左右の者は「麥で御座います」と曰つた。氏政が曰ふのに「それなら、なぜ飯にたいて客人に食べさせないんだ」と。晴信は笑ひ乍ら曰ふには「余は今日初めて北條氏が大國であるといふことが分つた。若殿は、その大國の公達だから、そんな事をいはれるのである。一體麥は、から竿で打つて、箕でよくふるひ、もみ摺りをしてもみを取り、日に乾かして臼で二度も舂き、それから水に浸けて、飯にたくのである。それを今若殿は刈つたばかりのものを直ぐ飯にたかうと申される」と。左右の者はこつそり氏政の愚なことを笑つた。氏政が下々の人情に通じてゐないことはこんな風であつた。だから國の政治は日に／＼すたれた。家老の松田憲秀は權柄を勝手に振り舞はし、それがために士民で無實の罪を受けたものが隨分多かつた。嘗て、一人の僧侶が通りすがつて、城門の前

に立てゝあつた制札を見て曰ふのに「北條氏はもう亡びることだらう」と。或る人が走つて之を町奉行に訴へた。町奉行はその僧を呼んで尋ねて曰ふのに「聞けば其の方は北條氏が近く亡びるといつたさうだ。本當か」と。答へて曰ふのに「たしかに申しました」と。町奉行は「何故そのやうな事を申した」と。すると答へて曰ふのに「拙僧は三十年前此處を通つて、制札を見たことがありますが、其の時は四五ケ條だけしかありませなんだ。しかるに、今は、之に三倍してゐます。一體君主の德が薄いと、政治は澁滯します。政治が澁滯すれば、法令は煩はしくなります。法令が煩はしくなれば士民は君主から離れるやうになる。士民が離れると君主たるものは一本立になつて終ひます。今北條殿は既に孤立して居られる。亡びるのを待たないで何を待ちませうぞ」と。町奉行は、この言葉を氏政に告げた。氏政は別に氣にも留めなかつた。そして獨り憲秀に萬事を委せ切りにしてゐた。

語釋　仲夏（夏の中頃、舊暦五月。）○礱（籾を臼で磨ること。）○晞（天日に乾かすこと。）

十一年七月、氏直娶徳川氏。信長既遇害、而其將豐臣秀吉代爲政於畿内、挾天子以令海内。徳川氏・上杉氏皆附之。秀吉屢使使來說曰「盍來朝京師」。十四年八月、氏政遣弟氏規赴京師、不肯親往。如是者再三。氏政曰「秀吉欲以口舌取八州。盍以弓箭取焉」。秀吉怒、使使請戰。於是、氏政乃修城壘、蓄糧仗。八州將士、皆留其部下守城砦、而聚于小田原。憲秀陰送款於秀吉。

【訓讀】十一年七月、氏直、德川氏に娶る。信長既に害に遇ひ、而して其の將豐臣秀吉、代り政を畿内に爲し、天子を挾んで以て海内に令す。德川氏・上杉氏、皆之に附く。秀吉、屢使をして來り說かしめて曰く、「盍ぞ來つて京師に朝せざる」と。十四年八月、氏政、弟氏規を遣はして、京師に赴かしめ、肯て親ら往かず。是の如きこと再三。氏政曰く、「秀吉、口舌を以て八州を取らんと欲す。盍ぞ弓箭を以て取らざる」と。秀吉怒つて、使をして戰を請はしむ。是に於て、氏政乃ち城壘を修め、糧仗を蓄ふ。八州の將士をして、皆其の部下を留め、城砦を守らしめ、而して小田原に聚らしむ。憲秀、陰に款を秀吉に送る。

【通釋】十一年七月、氏直は、德川氏から娶つた。信長は既に臣下に弑せられ、その將豐臣秀吉が代つて畿内で政治をなし、天子を擁して天下に號令を出してゐた。德川氏・上杉氏は皆之に附いてゐた。秀吉は度々使を出して說かしめて曰ふのに「何故京都に來て天子樣に御機嫌を奉伺しないのか」と。十四年八月、氏政は弟の氏規を遣はして、京都に行かせ、自分は、どうしても往かうとしなかつた。そんな事が再三續いた。氏政は曰ふのに「秀吉は、口先で關八州を取らうと思つてゐる。なぜ弓矢で取らないのだ」と。秀吉は怒つて使をして、戰爭を申し込ませた。そこで氏政は、城壘を修繕し、兵糧武器を蓄へて準備をした。八州の將士は皆その手下の者を留めてめい〳〵の城や砦を守らせて置いて、自分等は小田原に聚まるやうにさせた。家老の松田憲秀はこつそり秀吉に內通してゐた。

初憲秀子新六、守戶倉城、與武田勝賴戰、數不利。氏直聞之、罵曰「新六怯夫、多亡我士。」新六聞之慚恚、叛降勝賴。及勝賴亡、新六來歸。當誅。憲秀爲乞哀、乃宥死一等、屛

去其邑。至是、新六又勸憲秀、因敵將堀秀政通款焉。秀吉啗之以伊豆・相摸、令爲內應。氏政・氏直不之知也。與憲秀議、遣親族諸將、分守要害。美濃守氏規守韮山、陸奥守氏輝守竹浦、左衞門大夫氏勝守山中。氏勝、綱成孫也。間宮康俊・朝倉重高爲副、與舊守松田秀植、俱守焉。氏政賜刀於康俊・重高、曰「勉之」。康俊曰「臣以死從事」。重高退、謂同僚曰「北條氏之滅、在於是役也。山中之城、版築不備、而命守焉。是棄我輩於敵也。吾視十餘年來政、多失道者。事可知矣。諸君、謹之」。

訓讀　初め憲秀の子新六、戸倉城を守り、武田勝頼と戰つて、數利あらず。氏直、之を聞き、罵つて曰く、「新六は怯夫、多く我が士を亡ふ」と。新六、之を聞き慙恚し、叛いて勝頼に降る。勝頼亡ぶに及んで、新六、來歸す。誅に當る。憲秀、爲めに哀を乞ひ、乃ち死一等を宥して、其の邑に屛居せしむ。是に至り、新六、又憲秀に勸め、敵將堀秀政に因つて款を通ず。秀吉、之に啗すに伊豆、相模を以てして、內應を爲さしむ。氏政・氏直、之を知らざるなり。憲秀と議し、親族の諸將を遣はし、分つて要害を守らしむ。美濃守氏規は韮山を守り、陸奥守氏輝は竹浦を守り、左衞門大夫氏勝は山中を守る。氏勝は、綱成の孫なり。間宮康俊、朝倉重高副となり、舊守松田秀植と俱に守る。氏政、刀を康俊、重高に賜つて曰く、「之を勉めよ」と。康俊曰く、「臣、死を以て事に從はん」と。重高退き同僚に謂つて曰く、「北條氏の滅ぶる、是の役に在り。山中の城、版築備らずして、守を命ず。

是れ我が輩を敵に棄つるなり。吾れ十餘年來の政を視るに、道を失ふ者多し。事知るべし。諸君、之を謹めよと。

通釋 初め、憲秀の子の新六は戸倉城を守り、武田勝頼と戰つて度々敗けた。氏直は之を聞いて罵つて曰ふのに「新六は臆病者で多く我が士卒を失つて終つた」と。新六、之を聞いて、暫ち憤り、叛いて勝頼に降參した。勝頼が滅んでからは、又小田原に歸つて來た。當然誅せらるべき筈であつた。憲秀が命乞をしたので死一等を赦されて、其の領内に蟄居を命ぜられた。愈々秀吉と葛藤を生ずるに至つて、新六は又憲秀に勸めて、敵將堀秀政を間に入れて内通した。秀吉は、伊豆・相模を與へることにして、合戰の時に裏切らせることにした。所が氏政・氏直は一向之を知らなかつた。憲秀と相談し、親族の諸將を遣はし、手分けをして、要害の場所を守らせることにした。美濃守氏規は韮山を守り、陸奥守氏輝は竹浦を守り、左衛門大夫氏勝は山中を守つた。氏勝は綱成の孫である。間宮康俊・朝倉重高は氏勝の副將となり、もと其處を守つて居た大將の松田秀植と一緒に守ることになつた。氏政は刀を康俊・重高に賜はつて曰ふには「しつかりやれよ」と。康俊が曰ふのに「私は生命を捨て、從事致します」と。重高は退いて同役に向つて曰ふのに「北條氏の滅亡するのはこの戰爭である。山中の城は普請が十分出來てゐないのに、其處を守るやうに命ぜられた。これは我等を敵中へ棄てられたことになる。余は十餘年來の政治を見ると、隨分政治の仕方を誤つたものが多かつた。萬事は如何なるか分つてゐる。諸君よく〱氣をつけられよ」と。

語釋 戸倉(信濃)○竹浦(相模)○山中(伊豆)○版築(版は壁を築くときに用ふる板。)

十八年三月、秀吉發兵二十五萬、自將來攻。德川氏爲其先鋒。二十九日、圍山中城。城兵力戰、斬敵將一柳直末。而敵衆已淩城齊登。康俊・秀植死之。氏勝・重高遁走。德川氏軍至酒勾。四月、竹浦及湯本守兵皆潰。西軍來圍小田原。氏直聞諸城失守、議曰、「秀吉兵雖衆、而以威力相持。其心必不一。我兵雖寡、而五世君臣也。我欲要秀吉于險、一戰決雌雄。」憲秀沮之曰、「彼遠來、糧饟不繼。我堅壁淨野、不戰而屈之。是先公已試之策也。何必行危僥倖。」氏直乃止。憲秀潛使人告秀吉曰、「城西北有石垣山。以爲牙營、則城內情狀、無所遁隱。」秀吉從之。一城大驚。

【訓讀】十八年三月、秀吉、兵二十五萬を發し、自ら將として來り攻む。德川氏、其の先鋒たり。二十九日、山中の城を圍む。城兵力め戰つて、敵將一柳直末を斬る。而して敵衆、已に城を淩ぎて齊しく登る。康俊・秀植、之に死す。氏勝、重高遁れ走る。德川氏の軍、酒勾に至る。四月、竹浦及び湯本の守兵皆潰ゆ。西軍來つて小田原を圍む。氏直、諸城、守を失ふと聞いて、議して曰く、「秀吉の兵衆しと雖も、而も威力を以て相持す。其の心必ず一ならず。我が兵寡しと雖も、而も五世の君臣なり。我れ秀吉を險に要して、一戰に雌雄を決せんと欲す」と。憲秀、之を沮んで曰く、「彼れ遠くより來り、糧饟繼がず。我れ壁を堅くし野を淨め、戰はずして之を屈せん。是れ先公已に試むるの策なり。何ぞ必ずしも危きを行つて僥倖せん」と。氏直乃ち止む。憲秀、潛に人をして秀

吉に告げしめて曰く「城の西北に石垣山あり。以て牙營と爲さば、則ち城内の情狀、遁れ隱るゝ所なからん」と。秀吉、之に從ふ。一城、大に驚く。

通釋 十八年三月、秀吉は、兵二十五萬を練り出し、自身大將となつて攻めて來た。德川氏はその先鋒となつてゐた。二十九日、山中城を取り圍んだ。城兵は懸命に戰つて敵將一柳直末を斬つた。併し敵の軍勢は既に城壁に乘りかゝり皆一齊に登り出した。康俊・秀植は討死をした。氏勝・重高は逃げ去つた。その內に德川氏の軍勢が酒勾に着いた。四月、竹浦及び湯本を守つてゐた兵も皆崩れた。西軍は進んで小田原城を取り圍んだ。氏直は諸城がその守備を失くじつて陷落したと聞いて、相談して曰ふには「秀吉の兵は多いけれども威力で以て維持されてゐるのである。その心はきつと一致してゐない。わが兵は少いけれども五代もつゞいて君臣關係を結んでゐるのだ。(だから一致してゐる)我は秀吉を險阻な處に待受けて、一戰して勝敗を決めたいと思ふ」と。憲秀は之に反對して曰ふには「彼は遠方から來てゐるので兵糧が續きません。だから此方で城壁を固くし、田地の作物を刈り取つて終へば戰はないで之を屈することが出來ます。これは、先君(氏康)が既に輝虎の攻めて來た時にお試めしになつた策略であります。一番安全であります。何もそんな危い事をやつて僥倖的な勝利を得る事をしなくとも宜しいです」と。そこで氏直は思ひ止まつた。憲秀はこつそり人をして秀吉に告げしめて曰ふには「城の西北に石垣山といふ山があります。其處を本陣となされば、小田原城內の樣子は皆手に取るやうに分つて終ひます」と。秀吉は之に從つた。小田原城中の者は非常に驚いた。

語釋 酒勾・湯本(相模) ○五世(長氏、氏綱、氏康、氏政、氏直。) ○險(箱根をさす。)

已而上杉景勝、與前田利家、以北陸兵來、攻上野松枝城主大導寺政繁、出拒于坂本、不戰而走、遂降爲其先導、下廐橋・松山・沼田・蓑輪・河越諸城、進圍鉢形城。城主氏郡在小田原。留守將士、堅拒不下。西軍別將二人、以秀吉命、徇下野・上總・下總下之。氏勝逃在其邑甘繩。氏政・氏直召之。氏勝答曰「臣何顏見君乎。當死於此」或譖其有貳心。氏政怒。會德川氏招降氏勝。氏勝遂降之。五月、氏政弟氏房、出襲蒲生氏營不利。西軍別將陷氏房邑岩槻、留守妹尾兼延死之。秀吉更遣別將三人、攻館林城。城帶大澤。敵造浮梁濟之。城兵死守不降。秀吉取氏勝書諭之。乃降。

訓讀 已にして上杉景勝と前田利家と、北陸の兵を以て來つて、上野の松枝を攻む。城守大導寺政繁、出でて坂本に拒ぎ、戰はずして走り、遂に降つて、其の先導と爲る。廐橋・松山・沼田・蓑輪・河越の諸城を下し、進んで鉢形城を圍む。城主氏郡、小田原に在り。留守の將士、堅く拒いで下らず。西軍の別將二人、秀吉の命を以て、下野・上總・下總を徇へて之を下す。氏勝逃れて其の邑甘繩に在り。氏政・氏直、之を召す。氏勝答へて曰く、「臣、何の顏あつて君を見んや。當に此に死すべし」と。或る人、其の貳心あるを譖す。氏政怒る。德川氏、氏勝を招降するに會つて、氏勝遂に之に降る。五月、氏政の弟氏房、出でて蒲生氏の營を襲うて利あらず。西軍の別將、氏房の邑岩槻を陷れ、留守妹尾兼延、之に死す。秀吉、更に別將三人を遣はして、館林城を攻めしむ。城

大澤を帶ぶ。敵浮梁を造つて之を濟る。城兵、死守して降らず。秀吉、氏勝の書を取つて之を諭す。乃ち降る。

通釋　其の内に上杉景勝は前田利家と北陸道の兵を引きつれて來り、上野の松枝を攻めた。城將大導寺政繁は出でゝ坂本に拒ぎ、戰はないで逃げ出し、遂に降參して路案内となつた。厩橋・松山・沼田・蓑輪・河越の諸城を攻め落し、進んで鉢形城を取り圍んだ。城主氏邦は小田原に居た。留守の將士等は堅く拒いで降參しなかつた。西軍の別將二人は秀吉の命令で下野・上總・下總を觸れ諭して降參させた。氏勝は逃げて其の領内の甘繩に居た。氏政・氏直は之を呼び寄せた。氏勝は答へて曰ふに「私は敗けたので君に會はせる顏がありません。此處で討死すべきであります」と。或る人が彼の二心あることを讒言した。氏政は非常に怒つた。丁度そのとき德川公家康が氏勝を降參するやうに招いたので、氏勝はとうとう降參した。五月、氏政の弟氏房は出かけて蒲生氏の陣營を襲うたが負けた。其のとき西軍の別將は氏房の領地岩槻を陷れたが、そこの留守をしてゐた妹尾兼延は討死した。秀吉は更に別將三人を遣はして館林城を攻めさせた。この城は周圍に大きな澤をめぐらして居た。敵は舟橋を造つて渡つて來た。城兵は死物狂ひで守つて降參しなかつた。秀吉は氏勝の書面をやつて之を諭させた。そこで降參することになつた。

語釋　阪本・沼田・蓑輪（上野）〇厩橋・松山（武藏）〇別將二人（淺野長政・木村重茲）〇別將三人（石田三成・大谷吉隆・長束正家。）

六月、西軍合レ兵攻ニ忍城一。謂、城可レ灌也。募ニ土人一起ニ堤防一。城主成田長康在ニ小田原一。留守知ニ其不一レ可レ灌也、陰出ニ其人一應レ募以收レ錢。既就引レ水。城不レ漸ニ一版一。而敵沮レ水不レ得レ近。數

日隄潰。西軍死者數百人。景勝・利家下鉢形、圍八王子城。城屬氏輝。其留守横地監物遁之。狩野一庵・中山家範・金子家重・近藤助實、相謂曰「吾約奥州以死守。其可食言乎」與數百人殊死戰。利家在高處、望見壯之、問降將、知其姓名、使往降之。至則自殺矣。及事平、徳川氏收用家範二子昭守・信吉。信吉稱備前守、爲水戸傅者也。

訓讀 六月、西軍、兵を合せて、忍城を攻む。謂へらく、城灌ぐべしと。土人を募つて、堤防を起す。城主成田長康、小田原に在り。留守、其の灌ぐ可からざるを知るや、陰に其の人を出し、募に應じて錢を收む。既に就つて水を引く。城、一版を漸さず。而して敵、水に阻てられて近づくを得ず。數日にして、隄潰ゆ。西軍死するもの數百人。景勝・利家、鉢形を下し、八王子城を圍む。城は氏輝に屬す。其の留守横地監物、之を遁る。狩野一庵・中山家範・金子家重・近藤助實、相謂つて曰く、「吾れ奥州に約するに死守を以てす。其れ言を食む可けんや」と。數百人と殊死して戰ふ。利家、高處に在り、望み見て之を壯とし、降將に問ひ、其の姓名を知り、往いて之を降らしむ。至れば則ち自殺す。事平ぐに及んで、徳川氏、家範の二子昭守・信吉を收用す。信吉は備前守と稱し、水戸の傅となりし者なり。

通釋 六月、西軍は兵を合せて忍城を攻めた。この城は水攻めにすることが出來ると思つた。土地の者を募つて堤防を築いた。城主の成田長康は小田原に居たが、自分の留守の城は到底水攻めには出來ないと知つて居たから、こつそり城中の人を出してその堤防造築の募集に應じさせて、賃銀を取り込ませた。その内に堤防が出來て

水を引いた。けれども城は二尺も漸されなかつた。その水の爲めに却つて敵は城に近づくことが出來なかつた。五六日たつて堤が壊れた。それがため西軍の死者は數百人にも及んだ。その間に景勝・利家は鉢形城を陷れ、八王子城を取り圍んだ。城は、氏輝に屬して居た。その留守の大將横地監物は逃げ去つた。狩野一庵・中山家範・金子家重・近藤助實等が互に謂つて曰ふには「吾々は陸奥守（氏輝）に死守することを約束した。今更ら其の言葉を變へる譯には行かぬ」と。數百人の者とともに死を定めて戰つた。利家は高い處から遙に望み見て、敵乍ら立派なことだと思ひ、降參した大將に尋ねてその姓名を知り、往つて降參させようとした。けれども往つて見ると、もう皆自殺して終つて居た。小田原の事件が落着してから、德川氏は家範の二子、昭守・信吉を取り立てた。信吉は備前守と稱し、水戸藩のお附け人となつた。

語釋 一版（一版は高さ二尺、版は版築の版である。その巾二尺である。）○水戸傅（家康の子頼房、水戸に封ぜられ、信吉その保傅となる。）

當是時、里見・佐竹氏、及陸奥・出羽豪傑、皆降秀吉。秀吉擧天下兵、圍小田原。氏政・氏直勵衆堅守、出令曰「諸將士各守其所、毋妄相救。更番休止、休者遊息任意」。又分麾下士六百人、晝夜巡警。秀吉合圍百餘日、終不能得一首級。氏規守韮山。秀吉以七將騎卒五萬攻之。氏規謂其衆曰「此地、我高祖所由而起、而吾受命守之。失一障壁、吾之恥也」。衆皆奮激。其將朝比奈泰能等、數出力戰。西軍四面攻擊、死傷無算。乃築

長圍、不敢迫。徳川氏將小笠原某、以手兵傅壁、皆死。秀吉更將疾攻、陷其外城。氏規親督戰、卽日復之。八州城壘皆陷。獨小田原・韮山不下。

訓讀 是の時に當り、里見・佐竹氏、及び奧陸・出羽の豪傑、皆秀吉に降る。秀吉、天下の兵を擧げて小田原を圍む。氏政・氏直、衆を勵して堅く守り、令を出して曰く、「諸將士各其の所を守つて、妄に相救ふ勿れ。更番に休止し、休む者は遊息意に任す」と。又麾下の士六百人を分つて、晝夜巡警せしむ。秀吉、合圍すること百餘日、終に一首級をだに得ること能はず。氏規、韮山を守る。秀吉、七將、騎卒五萬を以て之を攻む。氏規其の衆に謂つて曰く、「此の地、我が高祖の由つて起りし所にして、吾れ命を受けて之を守る。一障壁をも失ふは、吾の恥なり」と。衆皆奮激す。其の將朝比奈泰能等、數出でて力戰す。西軍、四面より攻擊し、死傷、算なし。乃ち長圍を築いて、敢て迫らず。徳川氏の將小笠原某、手兵を以て壁に傅き、皆死す。秀吉、將を更へ疾く攻めて、其の外城を陷る。氏規親ら督戰して、卽日、之を復す。八州の城壘、皆陷る。獨り小田原・韮山下らず。

通釋 この當時、里見・佐竹の二氏及び陸奧・出羽の豪傑は皆秀吉に降參した。秀吉は天下の兵を全部擧げて小田原を取り圍んだ。氏政・氏直は衆を勵まして、堅く守り、命令を出して曰ふには、「諸將士は、各自分等の持場を守つて、滅多に救ひ合ふやうなことをしてはならぬ。かはりばんこに休み、休む者は思ひのまゝに休憩し遊んで宜い」と。又旗下の兵士六百人を分けて、晝夜、城中を巡つて警戒した。秀吉は、小田原を包圍すること百餘日にもなつたが、結局首一つも得ることは出來なかつた。氏規は韮山を守つて居た。秀吉は、七人の大將と騎兵步卒五萬を率ゐて之を攻めた。氏規は部下の軍勢に向つて曰ふには「この土地はわが高祖・早雲公の由つて起られた

ところで、吾は命を受けて、之を守つて居る。塀一重でも失つたら吾が耻辱であるぞ」と。衆は皆奮激した。その將朝比奈泰能等は度々城から出て、力戰した。西軍は、四面から攻撃し、その死傷は數知れぬ程であつた。そこで長陣を築いて、決して迫つて來なかつた。德川氏の將小笠原某は、手勢をつれて城壁の近くに押し寄せ、皆討死した。秀吉は、大將を取り代へて急ぎ攻め立て、その外城を陷れた。氏規は自身で士卒を指圖して戰ひ、その日のうちに取られた外城を取り戻した。關八州の城壘は皆陷つた。たゞ小田原と韮山とは降參しなかつた。

語釋　七將（織田信雄・蜂須賀至鎭・福島正則・細川忠興・蒲生氏郷・生駒親正、他の一人不明。）

氏房在小田原、與敵將浮田秀家對壘。秀家以秀吉旨、遺酒於氏房曰「聊以慰城守之勞」。氏房又遺物謝之曰「聊以慰攻戰之勞」。秀家遂使言於氏房曰「豐臣氏與北條氏、非有宿怨。偶爾構兵、半歲不決。徒使天下人膏鋒鏑。今誠議和弭兵、則封以伊豆・相摸。」氏房以告氏政。弗答。時堀秀政既死。子秀治、以秀吉密書投憲秀。憲秀欲導敵兵入城。少子英春、爲氏直所寵、常侍左右。憲秀召而告之。英春號泣固諫。憲秀弗聽、而止英春、不使復入。遂與秀治約。約既定。英春夜以鎧横自盛、入見氏直曰「君苟宥一人之死、則臣請告大事。誓而後告。」氏直大愕、召憲秀、詰而囚之。英春請宥其死。

弗レ聽カ。秀治踐レ約ミ、至二松田氏ノ壘下一ニ、待レ報ツコト三日。望二見スルニ其ノ旗幟一ヲ、皆變ズ。乃チ去ル。

訓讀　氏房、小田原に在り。敵將浮田秀家と壘を對す。秀家、秀吉の旨を以て、酒を氏房に遺つて曰く、「聊か以て城守の勞を慰む」と。氏房、又物を遺つて之を謝して曰く、「聊か以て攻戰の勞を慰む」と。秀家遂に氏房に言はしめて曰く、「豐臣氏、北條氏と宿怨あるに非ず。偶爾、兵を構へて、半歲まで決せず。徒に天下の人をして鋒鏑に膏らしむ。今、誠に和を議して兵を弭めば、則ち封ずるに伊豆・相模を以てせん」と。氏房以て氏政に告ぐ。答へず。時に堀秀政、既に死す。子秀治、秀吉の密書を以て憲秀に投ず。憲秀、敵兵を導いて城に入れんと欲す。少子英春、氏直の寵する所と爲つて、常に左右に侍す。憲秀、召して之を告ぐ。英春、號泣して固く諫む。憲秀聽かずして、英春を止めて復入らしめず。遂に秀治と約す。約既に定る。英春、夜、鎧櫃を以て自ら盛り、入り氏直に見えて曰く、「君、苟も一人の死を宥さば、則ち臣請ふ、大事を告げん」と。誓つて後告ぐ。氏直大に愕き、憲秀を召し、詰つて之を囚ふ。英春、其の死を宥さんことを請ふ。聽かず。秀治、約を踐み、松田氏の壘下に至つて報を待つこと三日。其の旗幟を朝見するに皆變ず。乃ち去る。

通釋　氏房は小田原城に居た。敵將浮田秀家と對陣して居た。秀家は、秀吉の內旨で酒を氏房に送つて曰ふには「聊か御籠城の御骨折をお慰め申し度い」と。氏房は又物を送つて、禮を述べて曰ふには「聊か城攻めの御苦勞を慰め申し度い」と。秀家は遂に人を遣はして、氏房に言はせて曰ふには「豐臣氏は北條氏と古い怨がある譯ではありません。ひよつとした事から戰爭をして、半年にもなるが未だ勝負が付きません。徒に天下の人をして討死せしめてゐます。今ほんとに和睦をして戰爭を罷められるならば、伊豆・相模の二國を以て、北條氏を封ず

るやうに計らひませう」と。氏房は其のことを氏政に告げた。氏政は返事をしなかつた。時に堀秀政はすでに死んでゐた。其の子の秀治は秀吉の密書を憲秀へ送り届けた。憲秀は敵兵を案内して城内に入れようと思つた。憲秀の少子英春は、氏直に可愛がられ、常にその左右に侍して居た。憲秀は英春を召んでその話をした。英春は泣き叫んで固く諫めた。憲秀は聞き入れないで英春を其のまゝ止めて置き、もう氏直の御殿には入らしめなかつた。憲秀は遂に秀治と約束した、約束は既に決まつた。英春は夜、鎧櫃の中に自分の身を入れて御殿へ往き、氏直に會つて曰ふには「君がもし一人の人の死を赦して下さるならば、私は大事件を申し上げます」と。誓つてから後、事の由を告げた。氏直は非常に愕いて、憲秀を召して詰問した後、之を拘留した。英春は誓つた通りに父の死を赦されんことを請うた。併し許されなかつた。秀治は約束通り、松田氏の壘の下に來て三日も返事を待つた。その旗や幟を望見するとすつかり變つてゐた。樣子の變つたことを知つて、そこで秀治は去つて終つた。

語釋 膏鋒鏑（刀や、矢の先きに、あぶら血をぬること。）○待報（松田の内應の報告を待つたのである。）○皆變（松田氏の旗記しが皆變つて他の人のものになつた。）

秀吉百方誘降。使黒田孝高・羽柴勝雅、因氏房説曰「方今北條氏勢、如魚在釜中、而烈火烹之。盍及今納降、取二國以存先祀。」氏房妻子、囚于岩槻。亦以書乞哀。氏房心折、勸氏政降。氏政曰「吾承父祖業、主於八州。爭武而失之、吾不必憾也。納降計存。死且不能。」已而成田長康等、亦送款於西軍。親臣・宿將互相疑阻、交勸和議。七月、秀

吉使徳川公諭氏規曰「子之武已多矣。今和議將成。子猶何守。宜來贊其議」答曰「氏規習於戰、不習於和、未能應命」徳川公請氏直書諭之。氏規不得已、撤守備、約封土事、自小田原西門入、則氏直已自南門出。蓋秀吉以陰謀間疏其父子。故氏直惶惑、不竢約而出也。

訓讀 秀吉、百方誘ひ降さんとす。黒田孝高、羽柴勝雅をして、氏房に因り説かしめて曰く、「方今、北條氏の勢、魚の釜中に在つて、烈火、之を烹るが如し。盍ぞ今に及んで降を納れ、二國を取り以て先祀を存せざる」と。氏房の妻子岩槻に囚へる。亦書を以て哀を乞ふ。氏房、心折けて、氏政に降を勸む。氏政曰く、「吾れ父祖の業を承けて、八州に主たり。武を爭つて之を失ふは、吾れ必ず憾まざるなり。降を納れて存を計るは、死するも且つ能はず」と。已にして成田長康等も、亦款を西軍に送る。親臣、宿將、互に相疑阻して、交和議を勸む。七月、秀吉、徳川公をして、氏規を諭さしめて曰く、「子の武已に多し。今、和議將に成らんとす。子、猶ほ何をか守る。宜しく來つて其の議を贊すべし」と。答へて曰く、「氏規、戰に習ひて、和に習はざれば、未だ命に應ずる能はず」と。徳川公、氏直の書を請うて之を諭す。氏規、已むを得ず、守備を撤して、封土の事を約し、小田原の西門より入れば、則ち氏直已に南門より出づ。蓋し秀吉、陰謀を以て、其の父子を間疏す。故に氏直、惶惑し、約を竢たずして出でしなり。

通釋 秀吉は色々手を盡して誘ひ降さうとした。黒田孝高・羽柴勝雅をして、氏房を通して説かしめて曰ふには

方今、北條氏の勢は魚が釜の中に在つて下から烈しい火で烹るやうなものである。なぜ今の内に降參を申し入れ、伊豆・相模二國を貰つて先祖の祀を絶やさぬやうにしないのか」と。氏房の妻子は、岩槻に囚へられて居た。これも亦書面で「和睦して早く助け出して貰ひ度い」と願うた。氏房は、強い心も折けて氏政に降參を勸めた。氏政がいふのに「吾は、父祖の遺業を受けついで關八州に主となつたのである。武力を爭うて、それに負けて之を失ふのなら、心殘りはない。併し降參を申し入れて生存を計るといふことは死んでも自分には出來ない」と。其の内に成田長康等も、亦西軍に内通した。親信してゐる家來や、老將などが互に疑ひ合ひ、心に隔りが出來て打ち解けぬやうになり、かはる〴〵和睦を勸めるやうになつた。七日秀吉は德川公家康をして氏規を諭させて曰ふのに「貴公の韮山を守つて屈しない武勇はもう十分である。今和睦の相談が出來ようとして居る。貴公は何をそんなに頑張つて居るのか。それよりもやつて來て、和睦の相談を助けたら宜いだらう」と。氏規は答へて曰ふのに「私は戰爭には慣れて居るが和睦にはまだ慣れてゐないから、どうもこの御命令には應じ兼ねる」と。德川公家康は氏直の書面を貰ひ受けて、氏規を諭した。氏規は止むを得ず城の守備を取り捨て、後ち〴〵北條を必ず伊豆・相模の二國に封ずるといふことを固く約束して小田原城の西門から入つて行つたが、氏直は其の時には已に南門から城外に出て終つてゐた。思ふにこれは、秀吉が、陰謀を以て、氏政・氏直の親子の仲を隔てた。だから氏直は恐れ迷うて領土の約束が決定するのも待たないで出て終つたのである。

於是、氏直就德川氏陣、請曰「願宥氏政以下、則亟致城矣」德川氏以有姻戚之嫌、敎之因羽柴勝雅以告秀吉。秀吉曰「吾當依其所請。獨其封土以二總代伊豆・相摸。」氏

規開之、恚曰「吾悔爲老賊所誑」將歸韮山、復修守備。氏直弗許。乃誅憲秀、致城於徳川氏。出城內士民、限以三日。氏政與弟氏輝、出在醫師安棲宅。秀吉憚氏政剛武、又變約、遣使者五輩、就其舍、令自殺。使者至、難言之。氏政・氏輝察其色、請間沐浴、作絶命辭、自裁。氏規將殉之。監吏奪刀、不得死。秀吉宥氏直、令率氏規・氏房・氏郡・英春等數十人、入高野山、給以萬石。明年、氏直病卒。年二十一。英春去仕前田氏。自長氏國于相摸、至是五世九十餘年乃滅。

訓讀 是に於て、氏直、徳川氏の陣に就き請うて曰く、「願はくば氏政以下を宥せ。則ち亟に城を致さん」と。徳川氏、姻戚の嫌あるを以て、之をして羽柴勝雅に因つて、以て秀吉に告げしむ。秀吉曰く、「吾れ當に其の請ふ所に依るべし。獨其の封土は二總を以て、伊豆・相模に代へん」と。氏規、之を聞き恚つて曰く、「吾れ老賊の誑く所になるを悔ゆ」と。將に韮山に歸つて、復守備を修めんとす。氏直許さず。乃ち憲秀を誅し、城を徳川氏に致す。城內の士民を出すに、限るに三日を以てす。氏政、弟氏輝と出でて醫師安棲の宅に在り。秀吉、氏政の剛武を憚つて、又約を變じ、使者五輩を遣はし、其の舍に就いて、自殺せしむ。使者至つて之を言ふを難る。氏政・氏輝、其の色を察し、間を請ひ沐浴し、絶命の辭を作つて自裁す。氏規將に之に殉ぜんとす。監吏、刀を奪つて、死するを得ず。秀吉、氏直を宥し、氏規・氏房・氏郡・英春等數十人を率ゐて、高野山に入らしめ、給する

に萬石を以てす。明年、氏直病んで卒す。年二十一なり。英春は去つて、前田氏に仕ふ。長氏の相模に國せしより、是に至るまで、五世、九十餘年にして、乃ち滅ぶ。

通釋 そこで、氏直は徳川氏の陣屋へ往つて請うて曰ふのに「どうか、氏政以下の命を赦して貰ひ度い。さすれば城を明け渡しませう」と。徳川氏は、姻戚關係であるから工合が惡いといふので、氏直をして羽柴勝雅を通して、秀吉に告げしめた。秀吉がいふのに「余は其の願を聞き届けよう。併し、領土のことであるが、上總・下總をば前にやると約束した所の伊豆・相模に代へることにする」と。氏規は之を聞いて怒つて曰ふには「老惡黨にだまされたのが殘念だ」と。韮山に歸つて再び備を修めようとした。氏直が許さなかつた。そこで憲秀を殺して、城を徳川氏に明け渡した。城内の士民は三日を限つて城外へ出すこととした。氏政は弟氏輝と一緒に城から出で安棲といふ醫者の家に居つた。秀吉は氏政の剛毅で勇氣のあるのを恐れ憚つて、又約束を變へ、使者五人をやり、其の家に往つて氏政に自殺をさせるやうにした。使者が行つて言ひ出し難くて困つて居た。氏政・氏輝は其の顏色を見て、それと察し、暫時の暇を請うて頭や身體を洗ひ、辭世の歌を作つて、自殺した。氏規も殉死しようとした。目附人が刀を取り上げたので死ぬことが出來なかつた。秀吉は氏直を赦し、氏規・氏房・氏郡・英春等數十人を引きつれて高野山に入らしめ、扶持として一萬石を支給した。明年、氏直は病氣で死んだ。年は二十一であつた。英春は去つて、前田氏に仕へた。長氏が相模に主となつてからこゝに至るまで、五代九十餘年で北條氏は亡んだのである。

語釋 姻戚之嫌（氏直の妻は徳川氏の女、故に肩を持つ嫌疑がかかる。）〇老賊（秀吉を罵つた語。）〇安棲（田村氏。）〇絶命辭（辭世の歌。ふくとふく、風ならむこそ、花の春、もみぢの殘る、秋あらばこそ。）〇九十餘年（應明四年より天正十八年に至る九十六年。）

後秀吉思氏規忠勇、以爲狹山城主、食萬石。其後、氏盛・氏信・氏宗・氏治・氏朝・父子相襲、歷事豐臣氏・德川氏。氏勝降德川氏、爲岩留城主、食萬石。關原之役、守岡崎。慶長中、卒。養保科正直子氏重。大坂之役、氏重在先鋒。後數徙封、終爲掛川城主、病卒。無嗣、國除。

訓讀 後、秀吉、氏規の忠勇を思ひ、以て狹山城主と爲して、萬石を食ましむ。其の後、氏盛、氏信、氏宗、氏治、氏朝、父子相襲ぎ、豐臣氏、德川氏に歷事す。氏勝、德川氏に降つて、岩留城主と爲り、萬石を食む。關原の役に、岡崎を守る。慶長中卒す。保科正直の子氏重を養ふ。大坂の役に、氏重、先鋒に在り。後數封を徙され、終に掛川城主と爲り、病んで卒す。嗣無く、國除かる。

通釋 その後、秀吉は、氏規の忠勇であつたことを思ひ起して狹山の城主となし、一萬石を與へた。その子孫の氏盛・氏信・氏宗。氏治・氏朝は父子相繼いで豐臣氏・德川氏に順次に事へた。氏勝は德川氏に降つて、岩留の城主となり一萬石を貰つてゐた。關ケ原の戰爭の時には、岡崎を守つて居た。慶長年中に死んだ。氏勝は保科正直の子の氏重を養つて子とした。大阪の役に氏重は先鋒に立つて働いた。その後、度々領地を移され、終に掛川の城主となつて病死した。跡取りがなかつたので領地を取り上げられ家は斷絕した。

語釋 關ケ原之役（德川家康と石田三成との合戰。）○岡崎（三河）○慶長（後陽成天皇の年號。）○大坂之役（家康が豐臣秀頼を滅した戰。）○掛川（遠江）

【叙説】本論は、北條早雲が關八州を取つたのは、英雄の心を收攬したからである。後、其の心を失つても猶ほ容易に滅びなかつたのは、早雲が人心を收攬したことによるのであると論ぜられてある。

外史氏曰、余聞早雲嘗召儒士、說黃石公三略。其首有言曰「主將之法、務攬英雄之心。」早雲聽之曰「止矣。吾既得之矣。」不復使說。嗚呼、有以夫、其以流寓漂泊之人、據有八州、以開五世之基也。

【訓讀】外史氏曰く、余聞く、早雲、嘗て儒士を召し、黃石公の三略を說かしむ。其の首に言へるあり、曰く「主將の法は、務めて英雄の心を攬る」と。早雲、之を聽いて曰く「止めよ。吾れ既に之を得たり」と。復說かしめずと。嗚呼、以あるかな、其の流寓漂泊の人を以て、八州に據有し、以て五世の基を開くや。

【通釋】外史氏が曰ふのに余は斯ういふことを聞いてゐる。それは早雲が或る時儒者を呼んで黃石公の三略といふ兵書を講義せしめた。その書の初めに次のやうなことが言つてある「總大將たる者の法は、出來るだけ、英雄の心を取り入れるようにすべきことだ」と。早雲は之を聽いて曰ふのに「もうやめよ。此の書の極意が分つた」と。さういつてもう講義をやらせなかつたさうだ。嗚呼、早雲がさまよひ歩いて定住の家のなかつた身分の人間で以て關八州に根を置いて五代の基を開いたのは、まことに道理のある事である。

【語釋】黃石公（秦代の隱士。）〇三略（兵書の名、太公望著す。黃石公、推演して張良に授けた七書の一。）

【餘論】以上第一段、本論の主意を揭ぐ、これ序論。早雲の人心收攬を論ず。

夫足利氏、墮其綱維、權臣內鬩、海內戰爭。所以然者、無他故焉。天下英雄、各以其心爲心、而主將不能收攬之焉耳。早雲蓋早有見於此。以爲天下之事可知已。故仗一劍之任、周流天下、以求用武之地。一得其地、雲蒸龍變、莫之或拒。夫以兩上杉氏百年故家・財賦之富・兵馬之雄、而早雲以赤手圖之。奚異錐鑿山哉。乃能戰勝攻取、制其死命者、果何所恃而然歟。亦以其結納英雄、得其驩心。兵寡而志一、地狹而力合。如同舟濟江、不期而救。以此臨敵、雖橫行天下、無難。而况於兩上杉氏乎。

訓讀　夫れ足利氏、其の綱維を墮り、權臣、內に鬩ぎ、海內戰爭す。然る所以の者は、他の故なし。天下の英雄、各其の心を以て心と爲し、而して主將、之を收攬する能はざるのみ。早雲は蓋し早く此に見るあり。以爲へらく、天下の事知るべきのみと。故に一劍の任に仗り、天下を周流し、以て武を用ふるの地を求む。一たび其の地を得れば、雲蒸龍變。之を或は拒ぐなし。夫れ兩上杉氏百年の故家、財賦の富、兵馬の雄を以て、而して、早雲、赤手を以て之を圖る。爰ぞ錐の山を鑿つに異らんや。乃ち能く戰へば勝ち、攻むれば取り、其の死命を制するは、果して何の恃む所あつて然るか。亦其の英雄に結納し、其の驩心を得るを以てなり。兵寡きも而も志一、地狹きも而も力合す。舟を同じくして、江を濟り、期せずして救ふが如し。此を以て敵に臨む、天下を橫行すと雖も、難きなし。而るを況や兩上杉氏に於てをや。

【通釈】一體足利氏は、その政治上の規律を破り、權臣は國內で相爭ひ、それが爲めに天下中に戰爭が起るやうになつた。そのやうになつたのは、外に譯があるのではない。天下の英雄が各々自分の心を心として（自分の思ふまゝを行ふ）總大將は之を取りまとめ取り入れることが出來なかつたからである。早雲は思ふに、この點を早く看破した。彼は天下の事は知り易いものだ（雜作のないことだ）と思つた。だから劍一本といふ荷物をたよりにして、天下を廻り歩いて武を用ふべき場所をさがしたのである。一旦その土地を得るや、雲が蒸し起つて龍が上天する程の勢であつたから誰も彼も拒ぐものとてはなかつた。かの兩上杉氏は百年も續いた舊い家で領內から取り立てる收入も十分豐富で、兵馬も强かつたのであつたが、それ丈けのものを以てしても早雲は素手で之を圖つたのである。これは錐で山を鑿つのと同樣であつた。併しそれ程貧弱なる早雲が、戰へば勝ち、攻むれば取つて、生かすも殺すも、その命を自由に制御してゐたのは、何か恃みとするものがあつて、そのやうに出來たのだらうか。それは無論彼が英雄に取り込んで英雄の驩心を得てゐたからである。兵は少くとも心は一致して居り、地は狹いが力は合してゐた。それは丁度同じ舟で川を渡るとき、風浪の危急の場合等に赤の他人同志が約束をしなくとも救ひ合ふ樣なものである。こういふ仕方で敵に對するとなれば、何だつて出來ないことはないので、天下を橫行しても決してむづかしい業ではない。まして兩上杉氏などをやつつけるに於ては易々たるものであつた。

【語釈】以二其心一爲レ心（我が心を心とする、つまり一致團結すること。）○其地（伊豆韮山）○制二其死命一（死生の命を自由に裁くこと。）○橫行（思ふ存分に振舞ふこと。）

【餘論】此の一節は、足利が民心を收攬しないで失敗したことから說き起し、早雲が其處に眼を着け、英雄の驩心を結んだことに說き到り、遂に八州を取ることの容易なりしことに論及してある。

氏綱・氏康、所以纘緒業致强大者、亦由此道也。至於氏政・氏直、已代兩上杉、以擅八州之富强。意滿志侈、不復用心於此。上下漸遠、君民不親。欲恃區區之法令、以制馭其下。而不知其下之心既已去之矣。將何恃以抗天下勁敵邪。

訓讀　氏綱、氏康緒業を纘ぎ、强大を致す所以の者も、亦此の道に由ればなり。氏政、氏直に至つては、已に兩上杉に代り、以て八州の富强を擅にす。意滿ち志侈り、復心を此に用ひず。上下漸く遠く、君民親まず。區區の法令を恃み、以て其の下を制馭せんと欲す。而して其の下の心、既已に之を去るを知らず。將た何を恃んで以て天下の勁敵に抗せんや。

通釋　氏綱・氏康が父祖の遺して置いた事業を承け繼いで國を强大にしたのも、矢張りこの英雄收攬といふやり方に因つたからである。氏政・氏直になるとすでに兩上杉氏に代つて、八州の富强を自由にしてゐた。それがためにすつかり滿足し心侈り、も早や英雄收攬といふことに心を用ひなくなつた。上下の間がだん〳〵疏隔し、君と民とが親しまなくなつて來た。それを下らぬ些細な法令を拵へて、それで以て其の下臣民を引き廻して行かうとしたのである。そしてその臣民の心はもう北條氏を去つてゐたといふことには御存知なかつたのである。そんなことで何を恃みにして天下の强敵に向ふことが出來ようぞ。（出來ようはない。）

餘論　以上第二段、本論に當る所で序論を發揮敷衍されてゐる。子孫も此の法によつて榮え、此の法を失つて衰微したことを通論す。

然豊臣太閤、以不世出之略、加之以我東照公、左提右挈、率天下猛將精兵、往問其罪。其勢力足以震撼天地。而合圍半歳、纔能舉之者、非以其父祖之收攬人心有固結不可解也哉。

訓讀　然れども豊臣太閤、不世出の略を以て、之に加ふるに我が東照公を以てして、左提右挈、天下の猛將精兵を率ゐ、往いて其の罪を問ふ。其の勢力以て天地を震撼するに足る。而して合圍半歳、纔に能く之を舉ぐる者は、其の父祖の人心を收攬し、固く結んで解く可からざる有るを以てにあらずや。

通釋　併し乍ら豊臣太閤程の世に滅多に出ない武略を以てして而かもその上に我が東照公德川家康を以て互に助け合ひ手を引き合つて連合し、天下の猛將精兵を率ゐて小田原に出かけ、北條の罪を問ひ正した。その勢力は天地を震ひ動かすに足る位のすさまじいものであつた　それでゐて、小田原城を半年も圍んでやつと之を取ることが出來たのは、矢張り北條氏の父祖が人心を取り込んで固く結び、容易に解くことの出來ないやうにしてゐたからではないか。（團結が強かつたからである。）

餘論　以上第三段、結論。早雲の人心收攬の餘澤を述ぶ。

日本外史新釋卷十終

日本外史新釋 卷十一

足利氏後記

武田氏
上杉氏

武田氏源義光裔也。義光子義淸、稱武田冠者。從父受射、傳伯父義家之旗、及無楯之甲、世居甲斐。義淸孫信義、及子信光等、從源賴朝起、數有戰功。與逸見・小笠原氏分領甲斐。賴朝移小笠原氏於信濃、以加藤氏代之、以及足利氏之時。信光後十餘世、曰信滿。上杉禪秀之亂、信滿以與之連婚、爲逸見所讒、自殺。二子信重・信長。信重與族父信元、逃爲僧。信長依加藤氏、與逸見鬪。足利持氏伐而降之、欲以其邑盡附

逸見。將軍義持不肯、賜之於信元。信元死、子幼。其將跡部專國、招信重爲假主。結城之役、信重有功、新充守護。乃誅跡部。逸見・加藤皆臣屬焉。

訓讀 武田氏は、源義光の裔なり。義光の子義清、武田の冠者と稱す。父に從つて射を受け、伯父義家の旗、及び無楯の甲を傳へ、世甲斐に居る。義清の孫信義、及び子信光等、源頼朝に從つて起り、數戰功あり。逸見、小笠原氏と甲斐を分領す。頼朝、小笠原氏を信濃に移し、加藤氏を以て之に代へ、以て足利氏の時に及ぶ。義光の後十餘世を、信滿と曰ふ。上杉禪秀の亂に、信滿、之と婚を連ぬるを以て、逸見の讒する所と爲り、自殺す。二子信重・信長あり。信重は族父信元と、逃れて僧と爲る。信長は加藤氏に依り、逸見と鬪ふ。足利持氏伐つて之を降し、其の邑を以て盡く逸見に附せんと欲す。將軍義持肯んぜずして、之を信元に賜ふ。信元死し、子幼なり。其の將跡部、國を專にし、信重を招いて假主と爲す。結城の役に、信重、功ありて、新に守護に充てらる。乃ち跡部を誅す。逸見、加藤、皆臣屬す。

通釋 武田氏は源義光の子孫である。義光の子の義清は、武田の冠者と稱してゐた。父義光に從つて、射術を學び傳へ、又伯父義家の旗と無楯の鎧とを受け傳へて、代々甲斐に居た。義清の孫信義及びその子の信光等は、源頼朝に從つて起り、度々戰功があつた。逸見・小笠原の二氏と甲斐の國を分けて、領有して居た。頼朝はこの小笠原氏を信濃に移し、加藤氏を以て之に代へ、そのまゝ足利氏の時代になつた。信光の十餘代後に信滿といふものがゐた。その信滿は上杉禪秀の亂の時に禪秀と姻戚の關係であるといふので、逸見の爲めに讒言せられて自殺して終つた。二人の子信重・信長といふのがあつた。信重は一族の年長信元と一緒に逃げて坊主になつた。信

長は加藤氏にたより、逸見と鬪つた。足利持氏は伐つて之を降參させ、その領地を全部逸見にやらうと思つた。將軍義持は承知しないで、信元に賜はつた。その內に信元は死んで、其の子はまだ幼年であつた。從つてその大將の跡部が國政を專らにしてゐたが信重を招いて假の主君とした。結城を攻めた時に、信重は戰功があつたので新たに守護職となつた。そこで權臣の跡部を殺して終つた。逸見・加藤なども家來になつた。

語釋 禪秀之亂（上杉氏憲は剃髮して禪秀といつた。應永二十三年亂を作す。）○結城之役（永享中、結城晴朝が持氏の二孤を奉じて亂を起した。）

信重後五世、曰二信虎一。與二駿河豪傑久島某一戰而勝レ之。以二是日一生レ男、因名二勝千代一、長曰二晴信一。沈毅多二權變一。信虎愛二少子信繁一、欲レ廢二晴信一。晴信故爲二癡騃狀一、以自晦、與二信繁一角二材技一、輒出二其下一。或佯墮レ馬、爲二人扶起一。諸將皆侮二晴信一。晴信獨與二駿河國主今川義元一相結託。義元其女兄夫也。天文五年、義元爲奏請、以二晴信一爲二嫡嗣一、加二首服一、任二大膳大夫一、兼二信濃守一。

訓讀 信重の後五世を、信虎と曰ふ。駿河の豪傑久島某と戰つて之に勝つ。是の日を以て男を生み、因つて勝千代と名づけ、長じて晴信と曰ふ。沈毅にして權變多し。信虎、少子信繁を愛して、晴信を廢せんと欲す。晴信故に癡騃の狀を爲し、以て自ら晦まし、信繁と材技を角し、輒ち其の下に出づ。或は佯つて馬より墮ち、人に扶け起さる。諸將皆晴信を侮る。晴信獨り駿河の國主今川義元と相結託す。義元は其の女兄の夫なり。天文五年義元、爲めに奏請し、晴信を以て、嫡嗣と爲し、首服を加へ、大膳大夫に任じ、信濃守を兼ぬ。

通釋 信重の後五代目を信虎といつた。信虎は駿河の豪傑久島某と戰つて之に勝つた。その日に男の子を生んだので勝千代と名づけ、それが大きくなつてから晴信といつた。彼は沈着で根づよく、謀に富んでゐた。所が信虎は少子の信繁を愛して、晴信を廢しようと思つた。晴信は、わざと馬鹿者の樣子をして自ら才能をかくし、信繁と材藝技能をくらべるやうなことのある時は、いつも其の下に出てゐた。或はわざと馬から落ちて人に扶け起して貰つたりした。諸將は皆晴信を侮つた。併し晴信はひとり駿河の國主今川義元と互に結び合つてゐた。義元は晴信の姉の婿である。天文五年義元は晴信の爲めに朝廷にお願ひして、晴信をば繼嗣となし、元服して大膳大夫に任じ、信濃守を兼ねさせて戴いた。

十一月、信虎出兵信濃、攻海口城。城主平賀源心善戰。信虎以兵八千攻之、踰月不能拔。會大雪。諸將議曰、「時已窮臘。請班師。敵亦必不尾也。」信虎從之。晴信請自殿。信虎笑曰、「敵必不尾而請殿。如二郎、必不然也。」晴信固請、以兵三百殿、後大軍數里止舍、親警其兵曰、「勿釋甲。勿卸鞍。食於馬而後食。五更卽發。唯吾所嚮是視。」兵皆竊嗤之曰、「風雪如此。何警爲。」五更、晴信卽發、還向海口、與三百騎冒雪馳、昧爽抵城。源心已散遣其兵、獨與百人留守。晴信分兵爲三、自以一隊入城、二隊揚幟城外、應之。城兵不測其衆寡、不戰而潰。乃斬源心、以其首歸獻。一軍大驚。信虎不賞曰、「舍城而歸

怯也」。諸將心服晴信。而不敢稱其功。晴信仍有愚色」。

【訓讀】十一月、信虎、兵を信濃に出し、海口城を攻む。城主平賀源心善く戰ふ。信虎、兵八千を以て之を攻め、月を踰へ拔く能はず。會々大に雪ふる。諸將、議して曰く「時已に窮臘なり。請ふ師を班さん。敵も亦必ず尾せざるなり」と。信虎、之に從ふ。晴信自ら殿せんと請ふ。信虎笑つて曰く「敵必ず尾せずして殿せんことを請ふ。二郎の如きは、必ず然らざるなり」と。晴信固く請ひ、兵三百を以て殿し、大軍に後るゝ數里にして止り舍し、親ら其の兵を警めて曰く「甲を釋く勿れ。鞍を卸す勿れ。馬に食うて後に食へ。五更即ち發せん。唯吾が嚮ふ所を是れ觀よ」と。兵皆竊に之を嗤つて曰く「風雪此くの如し。何ぞ警むるを爲さん」と。五更晴信即ち發し、還りて海口に向ひ、三百騎と雪を冒して馳せ、昧爽城に抵る。源心、已に其の兵を散遣し、獨り百人と留守す。晴信、兵を分ち三と爲し、自ら一隊を以て城に入り、二隊は幟を城外に揚げ、之に應ぜしむ。城兵、其の衆寡を測らず、戰はずして潰ゆ。乃ち源心を斬り、其の首を以て歸り獻ず。一軍、大に驚く。信虎、賞せずして曰く「城を舍てて歸るは、怯なり」と。諸將、晴信に心服す。而れども敢て其の功を稱せず。晴信仍ほ愚色あり。

【通釋】十一月、信虎は兵を信濃に出して海口城を攻めた。城主平賀源心はよく戰つた。信虎は兵八千を率ゐて之を攻め、一と月以上になつても落すことが出來なかつた。丁度大雪が降つた。諸將は相談していふには「今は十二月も押し詰まりました。軍勢を引きかへしませう。これでは、敵もきつと後を追つかけはしますまい」と。信虎も之に從つた。晴信は自ら殿をしたいと請うた。信虎は笑つていふには「敵がきつと追擊しないと決まつて、殿をしたいと申出る。二郎だと、さやうな事は申さない」と。晴信は是非にと願つて、兵三百をつれて殿し、本隊に後れること數里の所に止まり陣し、自分で其の兵士を警戒していふには「鎧をぬいではならぬ。鞍を

下ろしてはならぬ。馬に食物を與へてから飯を食へ。夜中に出發しよう。皆の者はたゞ余が向ふところを見て行動せよ」と。その兵士は皆ひそかに之を笑つていふには「こんな吹雪である。何を警戒する要があらうぞ」と。夜半になつて、晴信は出發し、引きかへして海口に向ひ、三百騎と雪の中を馳せて、夜明け頃城に着いた。源心はその兵を解散して立ち去らせ、ひとり、百人と留り、守つて居た。晴信は兵を分けて、三隊となし、自ら一隊を率ゐて城に入り、他の二隊は旗を城外に揚げて、之に應じさせた。城兵は敵の數が多いのか少いのか分らず慌てゝ戰はないで潰えた。そこで、源心を討ち取り、その首を以て歸つて獻上した。一軍の者は非常に驚いた。信虎は褒めないでいふには「攻め取つた城を棄てゝ置いて歸つたのは卑怯である」と。諸將は心から晴信に服した。併し信虎を憚つてその功を褒めたゝへるものはなかつた。晴信は依然として馬鹿げた態をしてゐた。

語釋　二郎（信繁）〇五更（午前四時）

信虎狂暴、賞罰無常。國人苦之。晴信陰與老臣飯富兵部・板垣信形謀、益結今川義元。義元素病信虎强亢、欲助晴信而擅其國。信虎不覺也。七年五月、信虎欲逐晴信於駿河。因託之於飯富氏、而自適駿河、計之義元。義元留信虎不返。而晴信自立於甲斐。諸宿將莫不頫首聽命。而隣國聞變、欲乘其隙。信濃士民、多去附村上義清。六月、諏訪城主諏訪賴茂・深志城主小笠原長時、合兵一萬來攻。晴信令騎將原加賀

留守、而自以六千人出拒韮崎。加賀聚府中農商得五千人、人執一紙旗、鼓譟而出。敵乃退走。

訓讀 信虎、狂暴にして、賞罰常なし。國人、之を苦しむ。晴信、陰に老臣飯富兵部・板垣信形と謀り、益々今川義元と結ぶ。義元素より信虎の强亢を病ひ、晴信を助けて其の國を擅にせんと欲す。信虎覺らざるなり。七年五月、信虎、晴信を駿河に逐はんと欲す。因つて之を飯富氏に託して、自ら駿河に適き、之を義元に計る。義元、信虎を留め返さず。而して晴信、甲斐に自立す。諸宿將、首を頫し命を聽かざるは莫し。而して隣國・變を聞き、其の隙に乘ぜんと欲す。信濃の士民、多く去り、村上義淸に附く。六月、諏訪城主諏訪賴茂、深志城主小笠原長時、兵一萬を合せ來り攻む。晴信、騎將加賀をして留守せしめ、而して自ら六千人を以て出でて韮崎に拒ぐ。加賀、府中の農商を聚め、五千人を得、人ごとに一紙旗を執り、鼓譟して出でしむ。敵乃ち退き走る。

通釋 信虎は氣荒々しくて賞罰も確實でない。國人は皆それに苦しんだ。晴信は家老の飯富兵部・板垣信形と相談し、益々今川義元と結んだ。義元も平素から信虎の强くて思ふ樣にならぬのを心配してゐたので、晴信を助けて、甲斐の國を勝手にしたいと考へて居た。信虎は一向それを覺らなかつた。七年五月、信虎は晴信を駿河に逐はうと思つた。そこで之を飯富氏に預けて置いて、自分は駿河に出かけて義元にその相談をした。義元は信虎を留めて置いて還さなかつた。その間に晴信は甲斐で自立した。諸々の老將は頭を垂れてその命を聽かないものはなかつた。一方隣國の者どもは、この事變を聞き込んで、その隙に付け込まうと思つた。信濃の士民は多く去つて、村上義淸に附いた。六月、諏訪の城主諏訪賴茂・深志の城主小笠原長時は兵一萬を合して攻めて來たの

で、晴信は騎兵の隊將原加賀をして留守をさせて置き、そして自分は六千人をつれて打つて出で、韮崎で拒いだ。加賀は府內の農民商人を狩り集めて五千人を手に入れ、銘々一本づゝの紙旗を持たせて太鼓と喊の聲とで擊つて出させた。そこで敵軍はかなはず退き去つた。

晴信寢驕恣、耽宴樂、喜詩賦、不視國政。群臣莫敢諫。板垣信形稱病、潛延一僧善詩者於家、學詩數旬、乃出侍宴、請賦詩。晴信不信。强請而可。立就五題。晴信大喜曰「汝何遽能如此。」信形因大諫曰「先君唯無道、故爲君所逐。今君復如此。得不復有如君者乎。」晴信感悟、遂厲精爲政。

訓讀　晴信寢く驕恣にして、宴樂に耽り、詩賦を喜み、國政を視ず。群臣敢て諫むる莫し。板垣信形、病と稱し、潛に一僧の詩を善くする者を家に延き、詩を學ぶこと數旬、乃ち出でて宴に侍し、詩を賦せんと請ふ。晴信信ぜず。强請して可さる。立ちどころに五題を就す。晴信、大に喜び曰く「汝何遽ぞ能く此くの如くなる」と。信形、因つて大に諫めて曰く「先君唯だ無道、故に君の逐ふ所と爲る。今、君復此くの如し。復君の如き者有らざるを得んや」と。晴信感悟し、遂に精を厲して政を爲す。

通釋　その內に晴信は追々心が驕り氣儘になつて酒宴の樂に耽り、好んで詩を作りなどして、國の政治を視ない。群臣に押し切つて諫めるものもなかつた。板垣信形は病氣と言ひ立てゝ家に籠り、こつそり詩の上手な僧を呼び込んで數十日間詩の稽古をし、出來上つた所で出仕して宴會に侍し、詩を作り度いと申し出た。併し晴信は

信用しなかつた。執拗く願つて、やつと許された。卽座に五題の詩を作り上げた。晴信は大層喜んで曰ふのに「其の方はどうしてそんなに上手になつたか」と。そこで信形は大に諫めていふには「先殿樣は唯だ無道でありましたから殿樣の爲めに逐はれなすつたのであります。而るに今や殿樣もまた國政をお執りなさらず、先殿樣のやうな有樣で御座います。これでは又殿樣の樣な人が現れて來ないとも申されません」と。晴信は感じ悟つて一生懸命に政治を勵んだ。

語釋 先君（信虎）〇如君者（君の如く、主君を追ひ出す者）

十一年三月、義淸・長時・賴茂與木曾義高、擧信濃兵來攻。諸將皆懼。晴信曰「四人合從、議必不一。可一戰而破也。」乃伴浚溝高壘。四人以爲怯、進入境內。晴信夜發、乘霧雨逼擊、大敗之。四人再擧至平澤。又擊破之。自是連年、相攻、晴信每勝。

訓讀 十一年三月、義淸・長時・賴茂、木曾義高と、信濃の兵を擧げ來り攻む。諸將皆懼る。晴信曰く「四人合從すれども、議必ずしも一ならず。一戰して破る可きなり」と。乃ち伴つて溝を浚ひ壘を高くす。四人以て怯と爲し、進んで境內に入る。晴信、夜發し、霧雨に乘じ逼り擊ち大に之を敗る。四人、再擧し平澤に至る。又擊つて之を破る。是より連年、相攻むれども、晴信每に勝つ。

通釋 十一年三月、義淸・長時・賴茂は木曾義高と信濃の兵を擧げて來り攻めた。諸將は皆懼れた。晴信がいふのに「四人の者は兵を連合したけれども、意見が必ずしも一致しないであらう。だから一戰して破ることが出來

る」と。そこでわざと溝を浚ひ、壘を高くして、堅固にして居た。四人の者は晴信は卑怯者だと思ひ境内に進み込んだ。晴信は夜出發して霧雨につけ込んで敵に逼り擊ち大に之を敗つた。四人は再擧して、平澤に來た。又擊つて之を破つた。これからは年々つゞけて、互に攻め合つたがいつも晴信が勝つた。

語釋 平澤（信濃）

晴信擧山本勘助。勘助三河人、眇目痿躄。嘗學兵於尾形某、以干今川氏。駿河舊臣、皆侮易之、義元不奇也。勘助寄食數年。板垣信形聞其名、薦之晴信。晴信召見與語、大悅之、卽日與二百貫邑、賜名晴行。十一月、晴信以晴行計、取信濃九城。十三年、以信形計、誘殺諏訪賴茂、而納其女為妾。明年生男勝賴、稱四郎。晴信有長男義信。以爲嫡嗣、使勝賴承賴茂後。十四年五月、與小笠原長時、及伊奈氏、戰于鹽尻嶺、破之。

訓讀 晴信、山本勘助を擧ぐ。勘助は、三河の人、眇目痿躄なり。嘗て兵を尾形某に學び、以て今川氏に干む。駿河の舊臣、皆之を侮易し、義元、奇とせず。勘助、寄食すること數年。板垣信形、其の名を聞き、之を晴信に薦む。晴信、召し見て與に語り、大に之を悅び、卽日二百貫の邑を與へ、名を晴行と賜ふ。十一月、晴信、晴行の計を以て、信濃の九城を取る。十三年、信形の計を以て、諏訪賴茂を誘殺し、其の女を納れて妾と爲す。明年、男勝賴を生む。四郎と稱す。晴信、長男義信あり。以て嫡嗣と爲し、勝賴をして賴茂の後を承けしむ。十

四年五月、小笠原長時及び伊奈氏と、鹽尻嶺に戰ひ、之を破る。

通釋 晴信は山本勘助を擧げ用ひた。勘助は三河の人で目つかちでびつこであつた。以前兵法を尾形某に習つて、今川氏に奉公しようと望んだ。併し今川の舊臣どもが皆馬鹿にして侮り、義元も亦格別すぐれた者とも思はなかつた。勘助は用ひられないで數年間も人の家に居候となつて居た。板垣信形は勘助の名を聞いて之を晴信に推薦した。晴信は呼びよせて話合つて見て大層氣に入り、その日直ぐ二百貫の領地を與へ、名を晴行と賜はつた。十一月、晴信は晴行の計略で信濃の九ケ城を取つた。十三年、信形の計略で諏訪頼茂を誘ひ出して殺し、其の娘を入れて妾とした。翌年其の女は勝頼といふ男子を生んだ。四郎と稱した。晴信には長男の義信といふのがあつた。それを繼嗣としたので勝頼は頼茂の跡目を相續させた。十四年五月、小笠原長時及び伊奈氏と鹽尻嶺で戰つて之を擊ち破つた。

語釋 二百貫（一貫は十石が普通である。）○納其女（山本勘助の策）○鹽尻（信濃）

十五年三月、攻戸石城。村上義淸將兵六千、來援。我前鋒甘利備前・横田備中等皆敗死。我軍將潰。晴行說曰「敵鋒不可遏。使之右顧、則克。」晴信曰「我兵且不從令。曷能使敵如我意。」晴行請假後隊兵、左旋而出。義淸軍右顧。晴信軍氣復振、進擊破之。晴行以功食八百貫邑。乃往駿河謝。前嗤笑者、交口稱譽。義元悔之。上杉氏將士、聞甲斐兵斃於戸石、以二萬騎踰碓氷嶺。晴信遣信形拒焉。而自繼之。九月、擊破上杉

氏軍。眞田幸隆及子昌幸、皆有功。晴信又用幸隆計、誘殺村上義淸精兵五百。十六年八月、晴信取志賀城。義淸出軍上田原。板垣信形將前軍、戰勝不備。義淸窺其怠、悉甲襲殺之。晴信赴援。義淸率死士、突入其麾下、與接刄墮馬終大敗。十八年八月、晴信略地上野、又與小笠原長時、戰于諏訪原、走之。十九年三月、復略上野。聞長時復出而還。

【訓譯】十五年三月、戸石城を攻む。村上義淸兵六千に將として來り援く。我が先鋒甘利備前・横田備中等皆敗死し、我が軍將に潰えんとす。晴行說いて曰く「敵鋒遏む可からず。之をして右顧せしめば則ち克たん」と。晴信曰く「我が兵すら且つ令に從はず。曷ぞ能く敵をして我が意の如くならしめん」と。晴行請うて後隊の兵を借り、左旋して出づ。義淸の軍、右顧す。晴信の軍氣復振ひ、進み擊ち之を破る。晴行、功を以て八百貫の邑を食む。乃ち駿河に往いて謝す。前に嗤笑せし者、口を交へて稱譽す。義元、之を悔ゆ。上杉氏の將士、甲斐の兵、戸石に斃ると聞き、二萬騎を以て碓氷嶺を踰ゆ。晴信、信形を遣はして拒がしむ。而して自ら之に繼ぐ。九月、擊つて上杉氏の軍を破る。眞田幸隆及び子昌幸、皆功あり。晴信、又幸隆の計を用ひ、村上義淸の精兵五百を誘殺す。十六年八月、晴信、志賀城を取る。義淸、出でて上田原に軍す。板垣信形、前軍に將とし、戰ひ勝つて備へず。義淸、其の怠るを窺ひ、甲を悉し、之を襲殺す。晴信、赴き援く。義淸、死士を率ゐ、其の麾下に突入し、與に刃を接し、馬より墮ち、終に大に敗る。十八年八月、晴信、地を上野に略し、又小笠原長時と、諏訪原

に戰ひ、之を走らす。十九年三月、復上野を略す。長時復出づと聞いて還る。

通釋 十五年三月、戸石城を攻めた。村上義淸は六千の兵をつれて援けに來た。我が先鋒甘利備前・横田備中などは皆敗けて討ち死し、我が軍は崩れようとした。晴行は晴信に說いて曰ふには「敵の鋒先は中々鋭くて、到底喰ひ止めることは出來ません。併し敵が右の方をふり向く樣にさせれば、きつと勝てます」と。晴信が曰ふのに「味方でさへも命令に從はない。それをどうして、敵を我が心のまゝにすることが出來ようか」と。そこで晴行はお願ひして後手の兵を借りて左の方から廻つて出た。義淸の軍勢は果して右の方をふり向き、晴信の軍勢の意氣再び振つて、遂に進み擊つて敵を破つた。晴行はその功で八百貫の領地を貰つた。そこで駿河へ往つて、もと厄介になつた人々にお禮を言つた。前に晴行を嘲り笑つたものも口々に褒めたゝへた。義元も彼を採用しなかつたことを後悔した。上杉氏の將士は甲斐の兵が戸石で敗られたと聞いて、二萬騎をつれて、碓氷嶺を踰えた。晴信は信形を遣つて之を拒がせ、そして、自分も繼いで進んだ。九月、上杉氏の軍を擊ち破つた。眞田幸隆及びその子の昌幸は皆此の戰で功があつた。晴信は又幸隆の計略を用ひて、村上義淸の精兵五百人をだまし討にして殺した。十六年八月、晴信は志賀城を取つた。義淸は出でゝ上田原に陣取つた。我が板垣信形は先手の大將となり戰ひには勝つたが、あとを用心しなかつた。義淸はその油斷を見すまして軍勢殘らずで不意に之を襲うて信形を殺した。晴信は助けに行つた。義淸は決死の士をつれて、晴信の本陣に衝き込んで、晴信と太刀打ちしたが義淸は馬から落ちてとう／＼大に敗れた。十八年八月、晴信は地を上野に取り。又小笠原長時と諏訪原で戰つて之を走らせた。十九年三月、また上野の地を取つた。長時がまた討つて出たと聞いて引き返した。

語釋 戸石・志賀（信濃）

時今川義元與相模國主北條氏康婚、爲氏康來請晴信曰「氏康與上杉氏戰、將取上野。願君、勿先焉。」晴信乃與氏康・義元連和。是歲、晴信削髮稱信玄。信玄引鏡自視曰「吾貌類不動佛。」乃使畫史爲己像、執劍及索、曰「我死、四隣襲入、視吾像、不敢加無禮也。」信玄連攻村上義清。又攻高梨・須田・島津氏。二十二年、盡略河中島四郡地。義清等不能支。相共計以爲、可敵信玄者、唯上杉謙信。乃往投之。

〔訓讀〕時に今川義元、相模の國主北條氏康と婚し、氏康の爲めに、來り晴信に請うて曰く「氏康、上杉氏と戰ひ、將に上野を取らんとす。願はくば君、先んずる勿れ」と。晴信乃ち氏康・義元と連和す。是の歲、晴信髮を削り信玄と稱す。信玄、鏡を引き自ら視て曰く「吾が貌、不動佛に類す」と。乃ち畫史をして己の像を爲り、劍及び索を執らしめて曰く「我れ死し、四隣襲ひ入るとも、吾が像を見て、敢て無禮を加へざる也」と。信玄、連りに村上義清を攻む。又高梨・須田・島津氏を攻む。二十二年、盡く河中島四郡の地を略す。義清等支ふる能はず。相共に計り以爲へらく、信玄に敵す可き者は、唯上杉謙信のみと。乃ち往いて之に投ず。

〔通釋〕當時今川義元は相模の國主北條氏康と婚姻を結び、氏康の爲めに來つて、晴信に請うていふには「氏康は上杉氏と戰つて、上野を取らうとして居る。何卒貴公、先きにお取りにならぬやうに」と。そこで晴信は氏康・義元と和睦連合した。この年、晴信は髮を剃つて信玄と號した。信玄は鏡を引き寄せ、自分の顏を見ていふには「余が顏はお不動樣に似てゐるぞ」と。そこで畫家に言ひ付けて自分の肖像を畫かせ、劍と繩とを持つた形にし

ていにふは「乃公が死んで四方の隣國から攻め込んでも余が像を見て決して無禮を加へることはないだらう。」と。(不動明王の形であるから無禮が加へられぬ譯)。信玄は續け樣に、村上義清を攻めた。又高梨・須田・島津をも攻めた。二十二年には、すつかり河中島四郡の土地を取つた。義清等は支へることが出來なかつた。互に相談して信玄に敵することの出來るものはたゞ上杉謙信だけだと思つた。そこで皆謙信の所へ出かけて、身を寄せることゝした。

語釋 勿先(先に上野を取る勿れといふ意。)〇劍及索(不動明王は右手に大智劍、左手に三昧繩を執る。)

上杉氏本長尾氏、平良文裔也。良文後十世、曰景政。居鎌倉、稱權五郎、以勇著東國。大庭氏・梶原氏、皆出於景政。景政後五世、曰景弘、始稱長尾氏。長尾氏嗣絕。養上杉藤景爲嗣。藤景本藤原氏。藤原重房從皇子宗尊、適東國、食丹波上杉邑、因氏焉。子孫、爲足利氏外戚、管領東國。藤景其庶曾孫也。後臣屬於上杉氏、散處越後・上野・伊豆諸國。

訓讀 上杉氏は、本長尾氏、平良文の裔なり、良文の後十世を、景政と曰ふ。鎌倉に居り、權五郎と稱し、勇を以て東國に著る。大庭氏・梶原氏、皆景政より出づ。景政の後五世を、景弘と曰ひ、始めて長尾氏と稱す。長尾氏、嗣絕ゆ。上杉藤景を養ひ嗣と爲す。藤景は、本藤原氏なり。藤原重房、皇子宗尊に從ひ、東國に適き、丹

波の上杉邑を食む。因つて氏とす。子孫、足利氏の外戚となり、東國を管領す。藤景は、其の庶曾孫なり。後上杉氏に臣屬し、越後・上野・伊豆の諸國に散處す。

【通釋】上杉氏はもと長尾氏、平良文の子孫である。良文の後十代目を景政といつた。鎌倉にゐて權五郎と稱し勇氣を以て關東に名高かつた。大庭氏・梶原氏は皆景政から出たのである。景政の後五代目を景弘といひ、はじめて長尾氏と稱した。長尾氏は其の後子孫が絶えた。そこで上杉藤景を養つて繼嗣とした。藤景はもと藤原氏である。藤原重房は皇子宗尊親王に從つて關東に行き、丹波の上杉村を領有して居た。それで上杉氏とつけたのである。その子孫は足利氏の外戚となり、東國を管領してゐた。藤景は重房の側腹の曾孫である。後にその子孫は上杉氏の家來となり、越後・上野・伊豆の諸國に散らばつて住まつて居た。

【語釋】平良文（葛原親王の曾孫）〇宗尊（後嵯峨天皇の皇子）

自藤景而後十二世、曰爲景。爲景輔上杉房能于越後。後以事相隙、擧兵鬪。房能終死于雨溝。時永正三年也。房能兄顯定爲管領。六年、顯定與子憲總、率上野兵、來討爲景。爲景敗、走越中西濱。顯定留徇越後。越後士民不服顯定。推高梨某爲將、去歸爲景。七年六月、爲景與高梨合兵、擊憲總于椎屋、破之。憲總走、保妻有莊。隨而圍之。顯定赴援、戰于長森、敗死。憲總走、歸上野。爲景乃立上杉氏庶孽定實、妻以其女、置

之上條城、奉レ之。而己居二越中府內一、徇二越後一、盡下レ之。長尾氏始大。天文十一年、一向賊起二加賀一、與二州豪族椎名泰種・神保良衡一、連レ兵、叛二爲景一。爲景自往擊レ之、至二栴檀野一。賊將江波某佯降、設二穽于路一、迎二爲景一、陷而殺レ之。

訓讀 藤景より後十二世を爲景と曰ふ。爲景、上杉房能を越後に輔く。後、事を以て相隙し、兵を擧げて鬬ふ。房能、終に雨溝に死す。時に永正三年なり。房能の兄顯定、管領と爲る。六年、顯定、子憲總と、上野の兵を率ゐ、來つて爲景を討つ。爲景敗れ、越中の西濱に走る。顯定留り越後を徇ふ。越後の士民、顯定に服せず。高梨某を推して將となし、去つて爲景に歸す。七年六月、爲景、高梨と兵を合せ、憲總を椎屋に擊ちて、之を破る。憲總走り、妻有莊を保つ。隨つて之を圍む。顯定赴き援け、長森に戰ひ、敗死す。憲總走り、上野に歸る。爲景乃ち上杉氏の庶孽定實を立て、妻はすに其の女を以てし、之を上條城に置き、之を奉ず。而して己は越中の府內に居り、越後を徇へ、盡く之を下す。長尾氏始めて大なり。天文十一年、一向の賊、加賀に起り、州の豪族椎名泰種、神保良衡と兵を連ね、爲景に叛く。爲景自ら往きて之を擊ち、栴檀野に至る。賊將江波某佯り降り、穽を路に設け、爲景を迎へ、陷れて之を殺す。

通釋 藤景から後十二代目を爲景といつた。爲景は上杉房能を越後に輔けてゐた。後にある事から互に仲違ひをし、兵を擧げて鬬つた。房能はとう／＼雨溝で死んだ。時に永正三年であつた。房能の兄顯定は管領となつた。六年顯定は其の子の憲總と上野の兵をつれて來て、爲景を討つた。爲景は敗れ、越中の西濱に走つた。顯定は留まつて越後をふれ下した。然るに越後の士民は顯定に服從しなかつた。高梨某を推して大將となし、顯定に背い

て、爲景に從ひ附いた。七年六月、爲景は高梨と兵を合せて、憲總を椎屋に擊つて、之を打ち破つた。憲總は逃げて妻有の莊を固めた。爲景等はすぐあとから之を取り圍んだ。顯定は援けに行き、長森で戰つて敗けて死んだ。憲總は逃げて、上野に歸つた。そこで爲景は上杉氏の側腹の子孫の定實を立て、自分の娘を妻にやり、之を上條城に據ゑて主君として守り立てた。そして、自分は越中の府内に居て越後を觸れさとして全部降參させた。長尾氏はこれからはじめて強大となつた。天文十一年、一向宗の賊が加賀に起つて土地の豪族、椎名秦種・神保良衡等と兵を連合して爲景に叛いた。爲景は自分で出かけて、之を擊ち、栴檀野まで來た。賊將江波某佯り降り、落し穴を路に拵へ置き、爲景を迎へて穴の中に陷れて殺した。

語釋　雨溝・椎屋（越後）〇永正（後柏原天皇の年號）〇妻有・長森（上野）〇上條（信濃）〇栴檀野（越中）

爲景有四男。長晴景、次景康、次景房、季曰景虎。景虎幼字虎千代、爲繼妻出。甫八歲、精悍有膽略。爲景不愛也。逐之橡尾、欲以爲僧。景虎不肯學僧事。及爲景死、諸將多屬意景虎。而大臣昭田常陸者、自爲景時、有權寵。利晴景庸暗、與二子黑田秀忠・金津某、及三條城主長尾俊景謀、立晴景、殺景康等。景房出走。追殺之貳城門中。景虎時年十三、亦走。門者爲匿之簀床下。逮夜、發而出之、則熟眠矣。喚起潛出。入春日山寺。寺僧挈之逃橡尾、匿乳母夫本莊慶秀家。慶秀與宇佐美定行、盡心保護。定行者

上杉氏世將、好讀書、通天文・兵法、謂景虎可輔也、深相結託。

訓讀 為景四男あり。長を晴景、次を景康、次を景房、季を景虎と曰ふ。景虎、幼字は虎千代、繼妻の出たり。甫めて八歲、精悍にして膽略あり。為景、愛せず。之を栃尾に逐ひ、以て僧と為さんと欲す。景虎、肯て僧の事を學ばず。為景死するに及び諸將多く意を景虎に屬す。而して大臣胎田常陸なる者、為景の時より、權寵あり。晴景の庸暗を利とし、二子黑田秀忠・金津某、及び三條城主長尾俊景と謀り、晴景を立て、景康等を殺さんとす。景房出で走る。追うて之を貳城の門中に殺す。景虎、時に年十三、亦走る。門者、為めに之を簀床の下に匿す。夜に逮び、發いて之を出だせば、則ち熟眠せり。喚び起し潛に出でしむ。春日山寺に入る。寺僧、之を挈げ栃尾に逃れ、乳母の夫本莊慶秀の家に匿す。慶秀、宇佐美定行と、心を盡して保護す。定行は、上杉氏の世將なり。好んで書を讀み、天文・兵法に通ず。景虎輔く可しと謂ふや、深く相結託す。

通釋 為景には四人の男の子があつた。長男な晴景、次男を景康、三男を景房、季の子は景虎といつた。景虎は幼名虎千代といひ、後妻の生んだ子である。やつと八歲の頃から勇氣があつて、膽太く策略に富んでゐた。為景は之を愛しなかつた。栃尾に逐つ拂つて僧にしようと思つた。景虎は僧のことを學ばうとはしなかつた。為景が死んでからは諸將は多く景虎に心を寄せた。併し家老の胎田常陸なる者、為景の時から氣に入つて權力もあつた。晴景が愚か者であるのをよい事にし、二人の倅黑田秀忠・金津某及び三條の城主長尾俊景と相談し、晴景を立てそして景康等を殺さうとした。景房は逃げ出した。追つかけて、二の丸の門内で殺した。景虎はその時年十三であつたが亦逃げ出した。門番はこれを簀の床の下に匿した。夜になつて床を上げて出さうとすると、すや〳〵と寐入つてゐた。そこで呼び起して、そつと出してやつた。春日山の寺に入つた。寺の僧は之をつれて栃尾

に逃げ、乳母の夫なる本莊慶秀の家に匿した。慶秀は、宇佐美定行と心を盡して之を守り立てた。この定行は上杉家の代々の大將の家柄のものである。書を讀むことを好み、天文、兵法に通じてゐた。景虎は立派な人物で、輔佐して行くに甲斐ある人と思ひ込み、深く互に結び合つてゐた。

語釋 橡尾・三條（越後）○門者（山本六助といふ。）○春日山（越前）

既而景虎聞賊搜索己不置也、則出避之。同從士十四人、爲行脚僧狀、行縢穿鞋而出。上米山、瞰視府内曰「吾他日、起兵復國、必陣于此。」遂至栴檀野、泣且拜曰「兒必夷滅仇敵、以慰冤魂。」於是、經歷北陸・東山諸國、周視山川城池形勢、圖寫齎歸。有告賊以景虎所在、遣甲來捕。景虎與慶秀・定行謀、起兵修橡尾城、據之、聽命於上杉定實。

訓讀 既にして景虎、賊の己を搜索して置かざるを聞くや、則ち出でて之を避く。從士十四人と同じく、行脚僧の狀を爲し、行縢し鞋を穿いて出づ。米山に上り、府内を瞰視して曰く「吾れ他日、兵を起し國を復するときは、必ず此に陣せん」と。遂に栴檀野に至り、泣き且つ拜して曰く「兒必ず仇敵を夷滅し、以て冤魂を慰めん」と。是に於て、北陸・東山の諸國を經歷し、山川城池の形勢を周視し、圖寫し齎し歸る。賊に告ぐるに景虎の所在を以てするものあり。甲を遣はし來り捕へんとす。景虎・慶秀・定行と謀り、兵を起し、橡尾城を修め之に據り、命を上杉定實に聽く。

通釋　その内に景虎は胎田等が自分を捜して止まないと聞いたので、出奔して之を避けることにした。十四人のお供と一緒に行脚僧の服裝をして、脚絆草鞋ばきで出かけた。米山に登つて、越中の城内を見下していふには「吾れ後日、兵を起して國を回復した時には必ずこゝに陣取らう」と。それから進んで、爲景の殺された梅檀野に來て、泣き且つ拜していふには「私はきつと仇敵を平げ滅して、父上の御無念を霽らします」と。そこで、北陸・東山の諸國を經めぐり、山川城池の樣子を視察して、すつかり之を繪圖に寫し取り持ち歸つた。所が景虎の居場所を胎田等に告げたものがあつた。兵士を遣はして捕へに來ようとした。景虎は慶秀・定行と相談して兵を起し、椽尾の城を修繕して、そこに立籠り、上杉定實の指圖を受けることにした。

語釋　行縢（脚絆）　○米山（越後）

十三年春、俊景・秀忠將兵來攻。景虎防戰、大破之、斬俊景、走秀忠。十四年、遣神餘昌綱、赴京師、請討賊詔旨。十五年、賊數來攻。景虎每戰輒勝。十六年晴景遣族政景、大擧來攻。定行欲出戰。景虎上城望之曰「敵遠來無輜重。非久留者。竢其將引去、擊之可也」夜半、政景果卻。景虎以三千騎開門出、戰于下濱、走之、及米山、景虎按兵止、敵過嶺、鼓衆追擊、又大破之。定行謂諸將曰「諸君知主公按兵止故乎」曰「不知也」曰「敵迫險急之則返擊。聽其過嶺、乘高下擊、敵不能支。主公年少、臨機制變如此。

豈我輩所ニ企及ニ哉」於レ是政景降、晴景窮蹙自殺。

訓讀 十三年春、俊景・秀忠、兵に將として來り攻む。景虎防ぎ戰ひ、大に之を破り、俊景を斬り、秀忠を走らす。十四年、神餘昌綱を遣はし、京師に赴き、賊を討ずるの詔旨を請はしむ。十五年、賊數來り攻む。景虎每戰輒ち勝つ。十六年、晴景、族政景を遣はし、大擧し來り攻めしむ。定行出で戰はんと欲す。景虎城に上り之を望み曰く「敵遠く來り輜重なし。久しく留る者に非ず。其の將に引き去らんとするを竢ち、之を擊つて可なり」と。夜半、政景果して卻く。景虎、三千騎を以て門を開き出で、下濱に戰ひ、之を走らせ、米山に及ぶころ、景虎兵を按じ止り、敵、嶺を過ぐるころ、衆を鼓し追擊し、又大に之を破る。定行、諸將に謂つて曰く「諸君、主公の兵を按じ止る故を知るか」と。曰く「知らず」と。曰く「敵、險に迫る。之を急にすれば則ち返り擊つ。其の嶺を過ぐるを聽し、高きに乘じ下り擊てば、敵支ふること能はず。主公、年少なれども、機に臨み變を制すること此くの如し。豈に我が輩の企て及ぶ所ならんや」と。是に於て、政景降り、晴景、窮蹙して自殺す。

通釋 十三年春、俊景・秀忠、兵を率ゐて攻め來つた。景虎は防ぎ戰つて大に之を打ち破つて、俊景を斬り、秀忠を追ひ散らした。十四年、神餘昌綱を遣つて京都に往かせ、賊を征伐する御詔を頂戴し度いとお願ひさせた。十五年賊兵が度々攻め來つた。景虎はどの戰爭でも勝つた。十六年、晴景は一族の政景を遣はし、大擧して攻め來らしめた。定行は城から出て戰はうとした。景虎は城に上つて之を望んでいふのに「敵は遠方から來たのに荷物などがない。これは長い間留まつて居る考へがないのだ。その内に引き歸すに決まつてゐるから、その時を待つて之を擊てば譯なしである。」と。夜半に政景は果して退いた。景虎は三千騎をつれて、城門を押し開いて打つて出で、下濱で戰つて之を走らせ、米山まで追つかけて來ると、景虎は兵を押へて之を止め、敵が米山の峠

を越えた頃、急に衆を勵まして追撃し、又大に之を破つた。定行は諸將に向つていふのに「諸君は主公が兵を止められた譯を知つて居るか」と。皆は「知りません」といふ。そこで定行がいふのに「敵は險阻に近づいた。さういふ場合に急に之を撃つと、敵は進退谷まつて遂に引き返して撃つて來るものである。だから敵が峠を越すのを許してやつて、下り坂になつた時こちらは高い所から一目散に下り撃つと、敵は到底支へることは出來ない。主公はお年こそ若いが、臨機應變の處置をお取りになることはこんな風である。どうして我等の及ぶことの出來るお方だらうか」と。そこで政景は降參し、晴景は行き詰つて弱り切り、自殺して終つた。

語釋 下濱（越後）

十八年、國人請景虎入府內。胎田等猶據三條不下。十九年、景虎攻三條拔之、誅胎田。賊以餘兵保新山・黑瀧二城。欲遂攻之。會上杉定實卒、不果。二十年、遣將高梨貞賴、攻拔新山、誅黑田秀忠。宇佐美定行拔黑瀧、誅金津。越後盡定。二十一年、諸將士共欲推景虎爲主。景虎曰「吾迫於上下之意、與兄抗兵。不料其自死。而吾主越後、世謂吾簒也。今國內略定。別擇主可也。吾逃爲僧、以明吾志。」遂削髮、號曰謙信、將赴高野山。諸將士連署、請其止治國。謙信曰「置君、將用其令也。不用令無君可也。自今吾所令、莫敢或違、則吾肯止耳」。乃與諸將誓而入。明日、出令、收專命大臣十六人、

賜死于林泉寺。諸將股栗。五月、任彈正少弼、敍從五位下。謙信曰「坐受官爵、非人臣義也」。二十二年二月、假路諸國、率兵二千、經北陸、入京師、先詣闕、遂謁將軍義輝、五月歸。

訓讀 十八年、國人、景虎の府内に入るを請ふ。胎田等、猶ほ三條に據り下らず。十九年、景虎、三條を攻め之を拔き、胎田を誅す。賊、餘兵を以て、新山・黑瀧の二城を保つ。遂に之を攻めんと欲す。會〻上杉定實卒し、果さず。二十年、將高梨貞頼を遣はし、攻め新山を拔かしめ、黑田秀忠を誅す。宇佐美定行、黑瀧を拔き、金津を誅す。越後盡く定る。二十一年、諸將士、共に景虎を推し主と爲さんと欲す。景虎曰く「吾れ上下の意に迫られ、兄と兵を抗す。料らざりき、其の自ら死せんとは。而して吾れ越後に主たらば、世、吾を簒へりと謂はん。今國内略定る。別に主を擇んで可なり。吾れ逃れて僧と爲り以て吾が志を明にせん」と。遂に髮を削り、號して謙信と曰ふ。將に高野山に赴かんとす。諸將士、連署し、其の止り國を治めんことを請ふ。謙信曰く「君を置くは、將に其の令を用ひんとするなり。令を用ひずば、君無くして可なり。今より吾が令する所、敢て違ふこと或る莫くば、則ち吾れ肯て止らんのみ」と。乃ち諸將と誓つて入る。明日、令を出し、命を專にする大臣十六人を收め、死を林泉寺に賜ふ。諸將、股栗す。五月彈正少弼に任ぜられ、從五位下に敍せらる。謙信曰く「坐ながら官爵を受くるは、人臣の義に非ざるなり」と。二十二年二月、路を諸國に假り、兵二千を率ゐ、北陸を經京師に入り、先づ闕に詣り、遂に將軍義輝に謁し、五月歸る。

通釋 十八年、國人は景虎に請うて府内に入つて貰つた。併し胎田等はまだ三條に立て籠つて降參しなかつた。

十九年、景虎は三條を攻めて之を陥れ、胎田を殺した。賊は殘兵をつれて新山、黒瀧の二城に立て籠つた。景虎はついでに之も攻めようと思つた。丁度其の時上杉定實が死んだので果さなかつた。二十年、大將の高梨貞頼を遣はして新山を陥れ、黒田秀忠を誅した。宇佐美定行は黒瀧を攻め落し、金津某を誅した。これで越後は皆平定した。二十一年、諸將士は共に景虎を推して、國主にしようと思つた。景虎がいふのに「余は上下の人々の希望に迫られて是非なく兄と攻め合つた。併し兄が自殺しようとは夢にも思はなかつた。それを今余が越後に國主となつたら、世間では余を位を簒つたものといふだらう。今國内は略ぼ平定した。だから別に國王を擇んだら宜いだらう。余は世を逃れて僧となつて余が本心を證明したいのである」と。遂に髪を剃つて謙信と號した。謙信は紀州の高野山に往かうとした。諸將士は連判狀を出して、是非とも思ひ止まつて國を治めて貰ひ度いと願ひ出た。謙信がいふのに「君を置くのはその命令を用ひるが爲めである。若し命令を用ひなかつたら、君などは要らない。今から余が命ずるところには少しも背かないといふなら、高野へ行くのを思ひ止まらう」と。そこで諸將と背かぬといふ誓約を爲して奥に入つた。明日、命令を出して君命を專斷した家老十六人を捕へて、林泉寺境内で切腹させた。諸將は慄え上つた。五月、謙信は彈正少弼に任ぜられ、從五位下に叙せられた。謙信はいふのに「ぢつとしてゐて官爵を頂戴するといふは、人臣のなすべき道ではない」と。二十二年二月、諸國の道路を通行させて貰つて、兵二千を率ゐ、北陸道を經て京都に入り、先づ御所に參内し、それから將軍義輝に會面し、五月に歸國した。

語釋 兄（晴景）

村上義清、與高梨政頼・須田親滿・島津規久等、自信濃來投、請謁謙信、言曰「僕等爲武田信玄所侵掠、容身無地。側聞公威名。願賜一下手救援。」謙信曰「諸君豈爲人下者。而來託於我。是知我也。我今略定内亂。念賀越、吾父讐。常欲屠此二國、遂樹幟京畿。是吾素志耳。雖然遇知我者、而不爲出力、非丈夫也。」因問義清曰「信玄用兵如何。」曰「信玄行軍不貪程頓。毎戰要勝於後。」謙信曰「彼要後勝、意在拓地也。吾則不然。遇敵輒戰、要不枉其鋒耳。」於是下令國内、以十月十二日、治兵小田濱、將八千騎、入信濃、放火武田氏屬城。十一月朔、進陣河中島。

訓読 村上義清、高梨政頼、須田親滿、島津規久等と、信濃より來り投じ、請うて謙信に謁し言つて曰く「僕等武田信玄の侵掠する所と爲り、身を容るるに地無し。側に公の威名を聞く。願はくば一たび手を下し救援するを賜へ」と。謙信曰く「諸君豈に人の下と爲る者ならんや。而るに來つて我に託す。是れ我を知れるなり。我れ今略ぼ内亂を定む。念ふに賀越は、吾が父の讐なり。常に此の二國を屠り、遂に幟を京畿に樹てんと欲す。是れ吾が素志のみ。然りと雖も、我を知る者に遇つて、爲めに力を出さゞるは丈夫にあらざるなり」と。因つて義清に問うて曰く「信玄、兵を用ふる如何」と。曰く「信玄軍を行る程頓を貪らず。毎戰、勝を後に要す」と。謙信曰く「彼れ後勝を要するは、意、地を拓くに在り。吾は則ち然らず。敵に遇へば輒ち戰ひ、其の鋒を枉げざる

を要するのみ」と。是に於て、令を國内に下し、十月十二日を以て、兵を小田濱に治め、八千騎に將として、信濃に入り、火を武田氏の屬城に放つ。十一月朔、進んで河中島に陣す。

通釋 村上義清は高梨政賴、須田親滿、島津規久等と一緒に、信濃から謙信の所へ身を寄せて來て、謙信にお目にかゝり度いと申し出ていふには「私等は武田信玄の爲めに領土を侵し取られ、自分等の身を容れる場所もない有様になりました。ほのかに貴公の武威名聲を聞き及びまして參上致しました。何卒一とたび手を下ろして御加勢下さいませぬでせうか」と。謙信が曰ふのに「諸君は皆歷とした、一國一城の主、どうして人の下風に立つ人々であらうや。而るに斯樣な方々が態々拙者の所へ身を寄せらるることゝなつた、是れ全く知己と申すべきぢや。拙者は今、大略國内の亂を平定した所である。考へ見るに、加賀、越中は我が父を殺した仇敵である。拙者は常に此の二國を滅して父の讎を報じ、それから進んで京畿地方に旗を押し立てゝ霸業を成したいと思つて居る。これが拙者年來の志で御座る。然し知己に遇つて、其の人達の爲めに力を出さないのは、如何にも男が立ち申さぬ。宜ろしい一肌脱ぎませう」と。そこで義清に尋ねて曰ふには「信玄はどういふ風に兵を用ひますか」と。義清が答ふるに「信玄が軍勢を進めまするには、先きを急いで無暗矢鱈に進むことは致しませぬ。又どの戰爭でも一時の勝利には目も吳れず、最後の勝利を目指して居りまする」と。謙信が曰ふのに「信玄が最後の勝利を得ようとするのは、彼の心に、土地を開き廣める考へがあるからである。拙者はそれと違ふ。敵に遇へば、いつでも戰ひ。歸結は我が軍勢の鋒先を鈍らさないやうにするに過ぎない」と。こゝに於て命令を國内に下し。十月十二日に小田ノ濱で勢揃をなし、八千騎を率ゐて信濃に入り、武田氏所屬の城に火をかけた。十一月朔には進んで河中島に陣取つた。

【語釋】父讎（天文十一年加賀越中の一向の賊が謙信の父長尾爲景を殺した。）○樹幟京畿（天下に覇たらんことをいふのである。）○不貪程頓（程は路程、頓は止舍、路程を適度にして無暗に進出しない。）○要勝於後（小さな勝利を爭はないで、終局の勝を期するのである。）○意在拓地（圍碁で石を取り込むことをせずして、地面を擴げ取る工夫と同じ。）○小田濱（越後）○陣河中島（これから河中島の第一戰が始まる。）

信玄聞之、請援於今川氏、將步騎二萬、出雨宮渡、使山本晴行等四人覘之。返報曰「北軍鋭甚。君宜厚集其陣、不戰屈之。」信玄從之。兩軍夾水而陣。謙信挑戰。信玄不出。相持二十七日。謙信遣使者言曰「吾聞、公用兵、所嚮無留陣。而何獨不與我決乎。我於公非有怨仇。特爲義淸輩。敢問、公何以奪彼地。公不欲與吾戰、則還地於彼。不欲還地、則與吾戰。」信玄答曰「公庇義淸、眞爲高義。雖然晴信而未死、公不能成志也。公欲戰則自公始。」謙信曰「諾。」乃決議、約詰朝會戰。卽夜傳發、以七隊合爲圓陣、平明渡橋而進。信玄勒十四隊迎戰。自卯至未、爭橋相逐、勝敗不決。謙信分兵渡上流、出甲斐軍後。甲斐軍顧之退去。橫田源助・板垣三郎等、及駿河七將皆死。而越後兵亦多死傷。引兵歸。

【通釋】信玄、之を聞き、援を今川氏に請ひ、步騎二萬を將ゐて、雨宮渡に出で、山本晴行等四人をして之を覘

はしむ。返り報じて曰く「北軍、鋭きこと甚だし。君宜しく厚く其の陣を集め、戰はずして之を屈すべし」と。信玄、之に從ふ。兩軍、水を夾みて陣す。謙信、戰を挑む。信玄出でず。相持する二十七日。謙信、使者を遣はし、言はしめて曰く「吾れ聞く、公の兵を用ふる、嚮ふ所、陣を留むることなしと。而るに何ぞ獨り我と決せざるか。我、公に於て、怨仇あるに非ず。特に義清輩の爲めにするのみ。敢て問ふ、公、何を以てか彼が地を奪へる。公、吾と戰ふを欲せずんば、則ち地を彼に還せ。地を還すを欲せずんば、則ち吾と戰へ」と。信玄答へて曰く「公、義清を庇ふ、眞に高義たり。然りと雖も、晴信にして未だ死せずんば、公、志を成す能はざるなり。公戰はんと欲せば、則ち公より始めよ」と。謙信曰く「諾」と。乃ち議を決し、詰朝會戰せんと約す。即夜、傳發し、七隊を以て合はせて圓陣と爲し、平明、橋を渡つて進む。信玄、十四隊を勒して、迎へ戰ふ。卯より未に至るまで、橋を爭ひて相逐ひ、勝敗、決せず。謙信、兵を分つて、上流を渡り、甲斐の軍後に出づ。甲斐の軍、之を顧みて退去す。横田源助、板垣三郎等及び駿河の七將、皆死す。而して越後の兵も、亦死傷多く、兵を引いて歸る。

通釋 信玄は此の事を聞いて、救援を今川氏に求め、歩兵騎兵二萬人を引き具し、雨宮の渡に打つて出で、山本晴行等四人の者をして敵の様子を覗ひ見させた。晴行等は歸つて報告して曰ふに「越後勢はその鋒先きが非常に鋭う御座ります。我が君には軍勢を厚く陣屋へ集め固め、戰爭しないで敵を屈服させるやうになされたら宜しう御座りませう」と。信玄は其の説に從つた。そこで兩軍は川を夾んで陣取つた。謙信は、戰を仕掛けて行つた。信玄の方が出ないので戰にならなかつた。斯くて睨み合つたまゝで對陣すること二十七日であつた。謙信は使者を遣つて信玄に言はしめて曰ふには「聞く所に據ると、貴公が兵を用ひらるゝには、何れに向はれても陣を一

所に駐屯なされることは無いさうであつた。而るに今日は留陣して戰はうとはなされぬ。何んで拙者とばかりは勝負を決められぬので御座るか。拙者は何も貴公に對して怨み仇が有る譯では御座らぬ。たゞ義清等に頼まれてやつてゐる計りぢや。敢てお尋ね申すが、貴公は何故あつて彼等の土地を奪ひ召されたか。貴公が拙者と戰ふのが厭やなら土地を彼等にお返しなされい。土地をお返しになるのが厭やなら拙者とお戰ひなされい」と。信玄がそれに答へて曰ふに「貴公が義清をお庇ひなさるゝは誠に立派な義俠で御座る。だが併し、お氣の毒では御座るが、此の晴信が死なゝい内は、貴公の思ふやうにはなり申さぬぞ。貴公が戰ひを欲せらるゝなら、如何ぢや、貴公からお始めなされたら宜しからう」と。謙信は「承知した」と曰つた。そこで相談を決めて、明朝會戰しようと約束した。謙信は其の晩卽ぐ命令を傳へて出發し、七隊を一緒にして圓陣を爲り、夜明けに橋を渡つて進出した。信玄は十四隊を纏めて之を迎へ戰つた。朝の六時頃から午後の二時頃まで、橋の奪ひ合ひで互に逐ひつ逐はれつして、容易に勝負が決まらぬ。謙信は別に兵を分つて上流を渡り、甲斐の軍の背部を襲うた。甲斐の軍は之をみて退却し去つた。横田源助・板垣三郎等・及び駿河の七將は皆討死した。一方越後の兵にも亦死傷多く、謙信は兵を引きつれて歸つて行つた。

【語釋】北軍（越後の軍）〇厚集其陣（兵を分けず一まとめに寄せ集める。）〇夾水（水は千曲川、一に筑摩川に作る。）〇自卯至未（卯は明け六つ。未は晝八つ。）〇駿河七將（今川氏の援兵の將。）

先是、謙信數出兵越中、而未得志。是歲、使使招降能登國主畠山義則、以女兄妻之、取其弟義春子養之、稱彌五郎。實質之也。是時、所管佐渡及莊內・會津盜起。遣兵擊

平之。二十三年五月、信玄與小笠原長時、戰于桔梗原、勝而降之。長時終出奔京師。信玄以女爲北條氏康婦、爲長子義信、娶今川義元女。於是、二國相共翼武田氏、以扞謙信。而信濃客將樂嵓寺・布下・和田等、陰通謙信。謙信出兵清野、縱火鼠子驛。聞客將事覺被誅、乃還。

訓讀 是より先き、謙信、數〻兵を越中に出して、未だ志を得ず。是の歲、使をして能登の國主、畠山義則を招き降さしめ、女兄を以て之に妻はせ、其の弟義春を取り之を子とし養ひ、彌五郎と稱す。實は之を質とするなり。是の時、管する所の佐渡及び莊內・會津の盜起る。兵を遣はし擊つて之を平ぐ。二十三年五月、信玄、小笠原長時と、桔梗原に戰ひ、勝つて之を降す。長時、終に京師に出奔す。信玄、女を以て北條氏康の婦と爲し、長子義信の爲めに、今川義元の女を娶る。是に於て、二國相共に武田氏を翼け、以て謙信を扞ぐ。而れども信濃の客將、樂嵓寺・布下・和田等、陰に謙信に通ず。謙信、兵を清野に出し、火を鼠子驛に縱つ。客將、事覺られ誅せらると聞き乃ち還る。

通釋 これより前謙信は、度々軍勢を越中に繰り出したが希望通りには行かなかつた。この年、能登の國主畠山義則を招き降し、姉を之に妻はせ、義則の弟の義春を賴んで貰ひ、養子として養ひ、彌五郎と稱した。其の實は人質としたのである。この時、領內の佐渡及び莊內會津に騷動が起つた。兵を遣はして、擊つて之を平らげた。二十三年五月、信玄は小笠原長時と桔梗が原で戰ひ、勝つて之を降參させた。が、長時は結局京都に出奔し

た。信玄は自分の娘を北條氏康の嫁となし、長子晴信の爲めに今川義元の娘を娶つた。そんな譯で北條・今川の二國は皆武田氏を助けて謙信を拒いだ。所が信濃の客分の大將の樂嵓寺・布下・和田等が内々謙信に內通した。謙信は清野に兵を繰り出し、鼠子驛に火をかけた。併し事が露れて、客將等が殺されたと聞いたので引き返した。

語釋 莊內（羽後）○會津（岩代）○桔梗原・清野・鼠子驛（信濃）

八月、謙信復以八千騎入信濃。曰「吾此行、必與信玄親戰、決雌雄耳。」進渡犀川陣。既望、信玄以二萬人出與之對、固壘不出。閲日、謙信使村上義清等夜伏兵、而曉出采樵者。近甲斐壘。甲斐兵出追之、陷伏皆死。諸隊隨出、乃大戰。終日十七合、迭有勝敗。信玄潛下令、張縱犀川而渡、伏旗幟徑蘆葦中、直襲謙信麾下。麾下潰走。信玄乘勝而進。宇佐美定行等、以手兵橫擊破之、擠之於河。信玄與數十騎走。有一騎、黃襖騮馬、以白布裹面、拔大刀、來呼曰「信玄何在。」信玄躍馬亂河、將逃。騎亦亂河、罵曰「豎子在此乎。」擧刀擊之。信玄不暇拔刀、以所持麾扇扞之。扇折。又擊斫其肩。甲斐從士欲救之、水駛不可近。隊將原大隅、槍刺其騎。不中。擧槍打之、中馬首。馬驚、跳入湍中。信玄纔免。武田信繁聞信玄危、返之、呼騎索戰、戰死之。是日、兩軍死傷大當。而信

玄被ㇾ創、夜收ㇾ兵退、後獲越後捕虜、言「嚮騎乃謙信也」

【譯文】八月、謙信、復八千騎を以て信濃に入る。曰く「吾が此の行、必ず信玄と親ら戰ひ、雌雄を決せんのみ」と。進んで犀川を渡つて陣す。既望、信玄二萬人を以て出でて、之と對し、壘を固くして出でず。間日、謙信、村上義清等をして、夜、兵を伏せ、而して曉に采樵者を出だして、甲斐の壘に近づかしむ。甲斐の兵出でて之を追ひ、伏に陷つて皆死す。諸隊隨つて出で、乃ち大に戰ふ。終日十七合、迭に勝敗あり。信玄、潜に令を下し、緪を犀川に張つて渡り、旗幟を伏せて、蘆葦中を徑り、直に謙信の麾下を襲ふ。麾下潰走す。信玄、勝に乘じて進む。宇佐美定行等、手兵を以て横擊して之を破り、之を河に擠す。信玄、數十騎と走る。一騎あり、黃襖騮馬白布を以て面を裹み、大刀を拔き來り呼んで曰く「信玄何くにか在る」と。信玄、馬を躍らして河を亂り、將に逃れんとす。騎も亦河を亂り、罵つて曰く「豎子、此に在るか」と。刀を擧げて之を擊つ。信玄、刀を拔くに暇あらず、持つ所の麾扇を以て之を扞ぐ。扇折る。又擊つて其の肩を斫る。甲斐の從士、之を救はんと欲すれども、水駛くして、近づく可からず。隊將原大隅、槍もて其の騎を刺す。中らず。槍を擧げて之を打ち、馬首に中つ。馬驚き跳つて湍中に入る。信玄、纔に免る。武田信繁、信玄の危きを聞き、之に返し、騎を呼んで戰を索め、戰つて之に死す。是の日、兩軍の死傷、大に當る。而して信玄、創を被り、夜兵を收めて退く。後、越後の捕虜を獲たり、言ふ「嚮の騎は乃ち謙信なり」と。

【通釋】翌天文二十三年八月に、謙信は再び八千騎の軍勢を引きつれて信濃へ攻め入つた。謙信は曰ふのに「こん度こそは必ず信玄と自身に戰ひ、勝ち負けを決めようと思ふ」と。進んで犀川を渡つて陣取つた。十六日、信玄は二萬人を引きつれて打つて出で之と相對し、城壘を固く守つて出で戰はなかつた。一日置いて十八日に謙信

は村上義清等をして夜兵を伏せて置いて、曉方に采樵者を出し、甲斐の城壘に近づかしめた。甲斐の兵は出て此の采樵者を追かけ皆伏兵に陷つて死んで終つた。そこで各部隊は引きつゞいて出で、大に戰つた。終日十七度も合戰し、互ひに勝つたり負けたりした。信玄は潛かに命令を下して、大綱を犀川に張つて、それを傳つて川を渡り、旗や幟を伏せ隱くし、蘆や葦の中を通り拔け、いきなり謙信の幕下を襲擊した。謙信の旗下は不意を打たれバタ／＼に潰え走つた。信玄は勝つた勢につけ込んで進んで行つた。すると宇佐美定行等が横合ひから出て來て信玄の軍を擊ち破り、之を河の中へ押し込んだ。信玄は數十騎の者と逃げ出した。その時黃色の陣羽織を羽織つて栗毛の馬に打ち跨り、白い布で顏を包み、大刀を拔き提げた一騎の武者が飛び出して來て、大聲に呼ばはつて曰ふには「信玄は何處に在るや、何處ぞ／＼」と。信玄は危いと見たか、馬を躍らせて河を渡り逃げようとした。するとその武者も亦跡を追うて河を渡り罵つて曰ふには「豎子、此にゐたかッ」と。その大刀を振りかざして信玄を擊つた。信玄は迚も刀抔拔いてゐる暇はないので、持つてゐた軍配扇で之を扞いだ。軍配扇は眞二つに折れた。その時二の太刀が打ち込まれ信玄の肩先きを斫つた。甲斐の從士が信玄を助けようと思つたが、何しろ水勢が早いので側へ近寄ることが出來ない。大將の原大隅が、主君の一大事と、槍で以て其の武者の馬を目蒐けて突き刺さうとした。だが中らなかつた。そこで槍を擧げて馬を打つたら、それが馬の首に中つた。馬は吃驚して跳つて早瀨の中へ飛び込んだ。信玄は危い所をヤッと免れることが出來た。武田信繁が信玄が危險だと聞て信きつけ、取つて返して、その武者を呼び止め遂に討死して終つた。この日兩軍の死傷は全く互角であつた。而し玄は創を受け、夜の間に兵を纏めて退却した。其の後、越後の捕虜を獲たが、其の捕虜が言つたのに「先きの騎馬武者は謙信でありました」と。

語釋 黃襖騮馬（黄迫の陣羽織と栗毛馬と。）○武田信繁（信玄の弟）

弘治元年四月、信玄攻降木曾義高、以女妻之。二年、信玄取伊奈郡。於是、盡定信濃、以高坂昌宣守貝津城、以備謙信。謙信爲武田氏强敵第一。諸將因榮昌宣也。

訓讀 弘治元年四月、信玄、木曾義高を攻め降し、女を以て之に妻はす。二年、信玄、伊奈郡を取る。是に於て盡く信濃を定め、高坂昌宣を以て貝津城を守らせ、以て謙信に備ふ。謙信は、武田氏の强敵第一たり。諸將因つて昌宣を榮とせり。

通釋 弘治元年四月、信玄は、木曾義高を攻めて降參させ、自分の娘を妻に遣はした。二年、信玄は伊奈郡を取つた。そこで皆信濃を平定したので、高坂昌宣に貝津城を守らせ、謙信に備へることにした。謙信は武田氏の强敵の第一である。だから强敵に當るやうにして貰つた所の昌宣を皆は名譽あることとした。

語釋 弘治（後奈良天皇の年號。）○伊奈（信濃）

三月、信玄・謙信復對壘河中。信玄與山本晴行等謀曰、「我分兵遶出越後軍後、鼓譟逼之、而以本軍夾擊、必大得志。」乃令信濃客將保科彈正等、以兵六千夜度戸神山。時月黑迷失道、不能達。謙信見甲斐軍夜襲、人馬有聲也、潛起擐甲傳令、舉八千騎出、五鼓詣信玄牙營。會天大霧、謙信自霧中直斫營而入。營驚潰。斬山本晴行等六

將。而天明矣。客將兵達上杉氏營、營無隻騎。顧聞河中戰聲如雷、則還、渡筑摩河、出北軍後。甲斐軍望見、乃返、夾擊北軍。北軍敗走。追逼之犀川。北軍輪轉返戰、包追兵、將鏖之。甲斐後軍横擊救之。北軍乃倒隊而退。宇佐美定行、植幟渡口、護之、盡濟。甲斐兵疲、不復追擊。

訓釋 三月、信玄、謙信、復河中に對壘す。信玄、山本晴行等と謀つて曰く「我れ兵を分ち、遶つて、越後の軍後に出で、鼓譟して之に逼り、而して本軍を以て夾み擊たば、必ず大に志を得ん」と。乃ち信濃の客將保科彈正等をして、兵六千を以て、夜、戸神山を度らしむ。時に月黑く、迷ひて道を失ひ、達すること能はず。謙信甲斐の軍、夜爨ぎ、人馬聲あるを見るや、潛に起ち、甲を擐し、令を傳へ、八千騎を擧げて出で、五鼓、信玄の牙營に詣る。會天大に霧ふる。謙信、霧中より直に營を斫つて入る。營驚き潰ゆ。山本晴行等の六將を斬る。而して天明く。客將の兵、上杉氏の營に達すれば、營に隻騎なし。顧みて河中の戰聲、雷の如きを聞いて、則ち還り、筑摩河を渡り、北軍の後に出づ。甲斐の軍望み見て、乃ち返り、北軍を夾擊す。北軍敗走す。追うて之に犀川に逼る。北軍、輪轉返戰し、追兵を包み、將に之を鏖にせんとす。甲斐の後軍、横擊して之を救ふ。北軍乃ち隊を倒にして退く。宇佐美定行、幟を渡口に植て、之を護り、盡く濟らしむ。甲斐の兵疲れて、復追擊せず。

通釋 弘治二年三月信玄と謙信とはまた／＼河中島で對陣することゝなつた。信玄は山本晴行等と相談して曰

ふのに「兵隊を分けて、別働隊を搦へ、グルリ越後の軍の背後へ出で、攻め太鼓、喊聲で譟ぎ立て、敵に逼り、そして本隊は前方から進んで夾み擊ちにしたなら、必つと此方の思ふ壷に嵌るに違ひない」と。そこで信濃の客將の保科彈正等をして、兵六千人を引き連れ、夜、戸神山を渡らせた。丁度折惡しく曇天で月が雲に蔽はれ眞つ暗らだつた爲めに、道を迷うて目的地に行きつくことが出來ない。謙信は甲斐の軍で夜、飯を焚いたり、人馬の聲が騒がしく聞えて來るのを知つて、潜かに起きて鎧冑を身に纏ひ、命令を傳へ、八千騎全部を引き連れて出發し、夜明け方に信玄の本營に到つた。恰度此の朝は霧が大層下りて居つた。謙信は霧の中から、いきなり信玄の本營を斫り卷くり進み入つた。信玄の方では仰天してバタ〳〵に潰えた。山本晴行等六人の隊將を斬り殺した。その内に夜が明けた。保科の兵は背部から上杉氏の兵營に到達したが兵營には一騎もゐなかつた。振り向いて見て、河中島で合戰の聲が雷のやうに轟くのを聞いたので、そこで引き返して筑摩河を渡り、越後の軍の後ろへ擊つて出た。甲斐の軍は遙かに此の有樣を望み見てこれも引き返へし、越後勢を夾擊した。越後の軍は敗れ走つた。それを追つかけて犀川に押し詰めた。越後の軍は、グルリ其處から引き返へし戰ひ、敵の追兵を包圍して之を皆殺しにしようとした。甲斐の後詰めの軍隊が横さまに之を擊つて救ひ出した。そこで越後の軍は軍隊を逆に立て替へて退却した。宇佐美定行は幟を渡し口に押し立て、越後の軍勢が川を渡るのを保護し、皆無事に渡らしめた。甲斐の兵も疲勞して、もう追擊しようともしなかつた。

語釋　弘治（後奈良天皇の年號。）○五鼓（五更。夜明けがた、七つ時。午前四時。）○輪轉（車がへしの陣。車輪の廻轉するやうに廻ること。）○倒レ隊（これまで後詰めであつたものを先陣となし、先陣だつたものを後詰めに直ほすこと。）

八月、謙信復出河中、使村上義清等營舊戰處、而自進過河、背水陣。信玄知其志在必死、不敢出戰。其候騎報曰「北軍積薪如山。」信玄令諸將曰「敵中夜有火擧、愼勿進擊。進擊者族。」及暮、候騎又報曰「北軍掃營、荷擔將去。」諸將爭請追擊。信玄曰「謙信豈迫暮掃營者。擊之必敗。」其夜北軍火起。甲斐軍不動。天明、望見北軍疏行首、嚴陣而待。諸將乃服信玄。信玄謀設伏兩山間、挑戰佯敗、誘敵入山、瞰射殲之。乃夜設伏、而明縱馬入北軍中、出輕卒追之。謙信不出。信玄慮兵老有變、乘夜退入上野原。謙信擧軍追擊。信玄返戰。殺傷相當。交收兵歸。甲斐・越後兵連不解。兩國士民患之、皆願講和。今川義元爲周旋之。謙信將有事於關東及越中。於是和成。

【訓讀】八月、謙信、復河中に出で、村上義清等をして、舊の戰處に營せしめ、而して自ら進んで河を過ぎ、水を背にして陣す。信玄、其の志必死に在るを知り、敢て出で戰はず。其の候騎、報じて曰く「北軍、薪を積むこと山の如し」と。信玄、諸將に令して曰く「敵中、夜、火の擧るありとも、愼んで進擊すること勿れ。進擊する者は族せん」と。暮に及び、候騎、又報じて曰く「北軍、營を掃ひ、荷擔して將に去らんとす」と。諸將爭ひて追擊せんと請ふ。信玄曰く「謙信、豈に暮に迫いて營を掃ふ者ならんや。之を擊たば必ず敗れん」と。其の夜

北軍火起る。甲斐の軍動かず。天明、北軍の行首を疏し、陣を嚴にして待つを望見す。諸將乃ち信玄に服す。信玄、伏を兩山の間に設け、戰を挑んで佯り敗れ、敵を誘うて山に入れ、瞰射して之を殲さんと謀る。乃ち夜伏を設けて明に馬を縱つて北軍中に入れ、輕卒を出だして之を追ふ。謙信出でず。信玄、兵老れて變あるを慮り夜に乘じ、退いて上野原に入る。謙信、軍を擧げて追擊す。信玄返り戰ふ。殺傷相當る。交兵を收めて歸る。甲斐、越後の兵連りて解けず。兩國の士民、之を患へ、皆和を講ぜんことを願ふ。今川義元、爲めに之を周旋す。謙信、將に關東及び越中に事あらんとす。是に於て、和成る。

通釋 八月、謙信はまた河中島に出て來て、村上義清等をして、舊との戰場に陣取らせて、そして自分は進んで河を渡り、河を背にして陣取つた。(背水の陣である。)信玄はこれを見て、上杉の志は必死の覺悟であることを知り、出て戰はうとしない。甲斐の斥候の騎兵が報告して曰ふのに「越後勢は薪を山のやうに積んで居りまする」と。信玄は諸將に命じて曰ふのに「敵中で夜、火が擧がることがあつても、よく氣をつけて、迂つかり進擊してはならぬぞ。若しも言ふことを聽かず進擊する者があつたら、一族全部殺して終ふであらうぞ」と。暮れ方になつて、斥候の騎兵が又報告して曰ふのに「上杉の方では兵營を引き拂ひ、荷物を擔つて將に立ち去らうとしてゐます」と、諸將は爭つて追擊せんと願つた。信玄が曰ふのに「謙信ともあらう者が、どうして暮方になつて兵營を引き拂はうや。迂つかり之を擊たう者なら、必つと負かされるのであらう」と。果して其の晩上杉の方で火事が出た。所が甲斐の方ではビクとも動かぬ。夜が明けると、上杉の方で行手を取り拂ひ、陣を嚴重にして待つてゐるのを望見した。追擊しようものなら、ドエライ目に遇ふ所であつた。諸將は皆信玄の智慮に服した。そこで信玄は次のやうな計畫をした。それは伏兵を山と山との間に設けて置いて、戰爭を仕掛けて負けた振りして

敵を山の中に誘び入れ、高い所から射ち降ろして敵を皆殺しにしようと。そこで夜伏兵を設けて、夜が明けると馬を放して、越後の軍中へ入らしめ、身輕るの兵卒を出して此の馬を追驅けさせた。謙信もさる者、迂つかり其の手に乘らず、出て來なかつた。信玄は味方の兵が疲れて、何か變事でも起ると大變であると心配し、夜の間に乘じ退いて上野原に入つた。謙信は軍を全部引き連れて追擊した。信玄は返り戰つた。殺傷の數は大體互角であつた。どちらも兵を收めて歸つて行つた。斯樣に甲斐と越後の戰爭は打ち續いて中々解けない。兩國の人民も之を患へ、何んとかして和睦されたいものだと願つてゐた。今川義元は兩國の爲めに、間に入つて仲裁の勞を取つた。丁度謙信も關東と越中とに戰爭事があらうとしてゐた。そこで折れ合つて、こゝに和議が成立した。

語釋　疏二行首一（左傳成公十六年の字面。行は路の義。陣の前を平坦に開いて置いて戰爭の時の足場にする。）

永祿元年三月、謙信自將入越中。越中・加賀將士、交請降。許之。先是、上杉憲政數與北條氏康戰、每戰輒敗、關東盡屬氏康。憲政欲請援於謙信。是歲秋、憲政走、入越後、求見謙信、謂之曰、「吾管領八州、十二世於此。卒爲氏康傾覆。求四鄰可報氏康者、獨有公與晴信。而晴信、氏康方親。吾是以捐怨以歸公。公能爲我復仇。」謙信曰、「敢不竭力。」當是時、謙信未得志於信濃。加賀・越中亦未服。而許於憲政者、欲以掩爲景之惡也。乃築館北川以寘之。憲政與謙信約爲父子、謙信於是稱上杉氏。又授以

其職號。謙信辭曰「事成受之、未晩也」於是、會將士議、使人諜北條氏、聞氏康每戰用奇、曰「彼用奇。吾用正也」十月、將兵入上野、陷厩橋・沼田等五城、復平井據之、發使京師、告東伐事、且請攝家一人爲關東主而己輔之如北條氏故事。二年四月、再入京師、營于坂本。五月朔、詣闕。天子賜酒、侑以寶劍、名五虎。請前關白前嗣東下、見許。又謁將軍。命管領關東、比三管領、許乘蒐輿執朱柄麾、賜己偏諱、改名輝虎。

【訓讀】永祿元年三月、謙信、自ら將として越中に入る。越中・加賀の將士交降を請ふ。之を許す。是より先き、上杉憲政數北條氏康と戰ひ、每戰輒ち敗れ、關東盡く氏康に屬す。憲政、援を謙信に請はんと欲す。是の歳秋、憲政走り、越後に入り、謙信を見ん事を求め、之に謂つて曰く「吾れ八州を管領すること、此に十二世。卒に一の氏康に傾覆せらる。四鄰、氏康に報ず可き者を求むるに、獨り公と晴信と有るのみ。而れども晴信は、氏康方に親む。吾れ是を以て怨を捐て以て公に歸す。公能く我が爲めに仇を復せよ」と。謙信曰く「敢て力を竭さざらんや」と。是の時に當り、謙信未だ志を信濃に得ず。加賀・越中も亦未だ服せず。而るに憲政に許すは、以て爲景の惡を掩はんと欲するなり。乃ち館を北川に築き以て之を寘く。憲政、謙信と約して父子と爲る。謙信是に於て上杉氏と稱す。又授くるに其の職號を以てす。謙信辭して曰く「事成りて之を受くるも、未だ晩からざるなり」と。是に於て、將士を會して議し、人をして北條氏を諜せしむ。氏康、每戰奇を用ふると聞き、曰く「彼は奇を用ふ。吾は正を用ふるなり」と。十月、兵に將として上野に入り、厩橋・沼田等の五城を陷れ、平

井を復し之に據り、使を京師に發し、東伐の事を告げ、且つ攝家一人關東の主と爲し、而して己れ之を輔くる、北條氏の故事の如くせんと請はしむ。二年四月、再び京師に入り、坂本に營す。五月朔、闕に詣る。天子酒を賜ひ侑むるに寶劍を以てし、五虎と名づく。前關白前嗣の東下を請ひ、許さる。又將軍に謁す。命じて關東を管領せしめ、三管領に比し、蔑輿に乘じ朱柄の麾を執るを許し、己が偏諱を賜ひ、名を輝虎と改む。

〔通釋〕永祿元年三月、謙信は自ら大將となつて、越中に入つた。越中・加賀の將士はかはる〴〵降參を申し出た。一々之を許してやつた。これより前に、上杉憲政は度々北條氏康と戰ひ、いつも敗けて、關東は全部氏康に從つて終つた。憲政は援助を謙信に乞はうと思つた。そこで此の年の秋、憲政は走つて、越後に入り、謙信に面會を求めて、之に向つていふには「吾が家は關八州を管領すること、こゝに十二代の久しい間になる。とう〳〵氏康の爲めに國を亡ぼされて終つた。四方隣國の諸侯で氏康に仕返しの出來る者を求めると、たゞ貴公と晴信（信玄）だけである。然るに晴信と氏康とは今親密な間柄である。吾はこれ迄の怨を打ちすてゝ貴公にお賴み申し度い。貴公何卒わが爲めに仇を返して下されよ」と。謙信は諾していふのに「力を竭さないで置きませうや。屹度力を盡します」と。この時、謙信は信濃ではどうも自分の思ふやうに行かなかつた。加賀・越中もまだ服從しなかつた。それなのに、憲政の賴みを請け合つたのは、上杉氏を助けて父、爲景の惡名を掩ひ匿さうが爲めであつた。そこで先づ北川に館を作つて、憲政を置いた。憲政は謙信と親子の約束をした。これから謙信は上杉氏を名乘ることゝなつた。憲政は又關東管領の職號をも讓らうとした。謙信は辭していふのに「それは成功の後に頂戴しても遲くはありませぬ」と。そこで將士を集めて相談し、人を遣つて北條氏の樣子をさぐらせた。氏康は戰爭には常に奇兵を用ふるといふことが分つて、謙信がいふのに「彼は奇を用ふる。されば余は反對に正を用ひよう」

と。十月、兵に將として上野に入り、厩橋・沼田等五城を陷れ、平井を取り戻し、之に立て籠り、使を京都に派遣して、東北條征伐のことを申し上げ、且つ攝政家の中の一人を關東へ迎へて、關東の主人となし、自分がそれを補佐すること、恰度北條氏の時の故例のやうにして戴きたいとお願ひ申させた。二年四月、再び京都に入り、坂本に陣取つた。五月朔日、御所に參內した。正親町天皇は、御酒を賜り、五虎と名づくる寶劍を引出物として賜つた。謙信は前の關白近衞前嗣の關東下向を乞ひ、之を關東の主に推戴し度いと願ひ出て許された。又將軍に拜謁した。關東を管領することを命ぜられ、室町の三管領と同じやうに竝べられ（同樣の待遇）網代の輿に乘り、朱ぬりの柄のついた采配を執ることを許され、又將軍自身の名（義輝）の一字を賜はり輝虎と改名した。

語釋 永祿（正親町天皇の年號）○捐レ怨（永正中、上杉爲景は、上杉顯定・房能を殺した、その怨。）○爲景之惡（其の主房能を弑した罪。）○北川（越後）○奇・正（奇は人の意表に出る兵、正は正々堂々の兵）○厩橋・沼田・平井（上野）○北條氏之故事（承久二年、北條義時が藤原賴經を迎へて鎌倉の主とした故事）○三管領（斯波・細川・畠山）

三年五月、謙信自將、攻二和田城一。未レ下。遣二長尾政景一、侵二武藏一。九月、前嗣來、館二于至德寺一。於レ是、謙信發二二萬騎一、陣二泉福寺一。北條氏康大擧禦レ之。本莊繁長以二所部一爲二先鋒一、接戰。相模軍卻。諸隊繼進。謙信以二麾下一自二中路一進、與二氏康一戰、大破レ之。關東豪傑響應。乃報二捷越後一、迎二憲政一、居二之厩橋牙城一、而自居二其郭一。四年正月、關東將士、賀二正厩橋一。遣レ兵攻二古河一、拔二關宿・河越諸城一。三月、謙信部二七十六將一、兵凡十一萬、進入二相模一。太田三樂・小

幡憲重等居前、建牙于高麗山下。北條氏遣死士、狙擊謙信。謙信覺捕之、縱還、遂圍小田原。氏康不敢出。謙信脫冑、穿白布幘、騎白馬、執朱柄麾、馳入諸隊、指揮軍事。關東將士竊指目語曰「此公視吾曹如蟲蟻、寧可終戴乎」。

訓譯　三年五月、謙信自ら將として、和田城を攻む。未だ下さず。長尾政景を遣はし、武藏を侵さしむ。九月、前嗣來り至德寺に館す。是に於て、謙信、二萬騎を發し、泉福寺に陣す。北條氏康、大擧して之を禦ぐ。本莊繁長、所部を以て先鋒と爲り、接戰す。相模の軍卻く、諸隊繼ぎ進む。謙信、麾下を以て中路より進み、氏康と戰ひ、大に之を破る。關東の豪傑響應す。乃ち捷を越後に報じ、憲政を迎へ、之を厩橋の牙城に居らしめ、而して自ら其の郭に居る。四年正月、關東の將士、正を厩橋に賀す。兵を遣はし古河を攻め、關宿・河越の諸城を拔く。三月、謙信、七十六將を部し、兵凡そ十一萬、進んで相模に入る。太田三樂・小幡憲重等、前に居り、牙を高麗山の下に建つ。北條氏、死士を遣はし、謙信を狙擊せしむ。謙信覺り、之を捕へ、縱ち還し、遂に小田原を圍む。氏康、敢て出でず。謙信、冑を脫し、白布の幘を穿ち、白馬に騎し、朱柄の麾を執り、馳せて諸隊に入り、軍事を指揮す。關東の將士竊に指目し語つて曰く「此の公、吾が曹を視る蟲蟻の如し。寧ろ終に戴く可けんや」と。

通釋　三年五月、謙信、自ら大將となつて、和田城を攻めた。まだ陷らなかつた。又長尾政景を遣つて、武藏を侵さしめた。九月、前嗣がやつて來て至德寺に宿つて居た。それで謙信は二萬騎を繰り出して、泉福寺に陣取つた。北條氏康は、大擧して之を防いだ。此の時本莊繁長は、その部下の兵をつれて先鋒となり接戰した。相模の軍勢は退卻した。謙信の諸隊は繼いで進んだ。謙信は旗下をつれて、眞中の路から進んだ。氏康と戰つて、大

に之を破つた。そこで關東の豪傑は響が聲に應ずるやうに謙信に從つた。そこで勝利を越後の憲政に報告し、憲政を迎へて、之を厩橋城の本丸に入れ、そして、自分は外城に居た。四年正月、關東の將士どもは厩橋に來て、年始の賀を申し述べた。又兵を派遣して、古河を攻め、關宿・河越の諸城を陷れた。三月、謙信は七十六將を手分けして、凡そ十一萬の兵をつれて、進んで相模に入つた。太田三樂・小幡憲重等が先手となり、大將の旗をば高麗山下に押し建てた。北條氏は決死の士を遣はして謙信を狙ひ撃ちさせようとした。謙信は之を覺つて捕へたが、放免して還してやり、遂に小田原を取り圍んだ。氏康は決して城から出ようとしなかつた。謙信は冑をぬいで白木綿の頭巾を着け、白い馬に乘つて朱塗の柄の采配を執り、馳せて諸隊中に入り、軍事を指圖した。關東の將士ども内密指さし見て言ひ合ふのに「この公は我々を視ること蟲蟻のやうで、ちつとも禮遇されない。これではいつまでも上に戴くことは出來まい」と。

語釋　和田(信濃)　○關宿(下總)　○高麗山(相模)

當是時、信玄在輕井澤。飯富兵部說曰「謙信威焰如此。北條氏必亡、則我亦危矣。君宜及小田原未陷、引兵出三增嶺、直當越後中軍。得勝大善。即不勝亦足以伸義天下。」信玄曰「不可。謙信用兵迅速、得之天資。而無老成之計。關東將士、必不能堪。終當歸氏康。汝暫待之。」宇佐美定行說謙信曰「城堅。我深入久頓、恐有變。宜及今收兵」從之。新發田治長年少、爲近習。自請爲殿。氏康不敢尾擊。乃入鎌倉、詣鶴岡祠、觀源

氏・北條氏舊圖、索故物小八葉車、載前嗣、而謙信騎從焉。關東將士、擁衛前後、小幡憲村操刀從。千葉國胤・小山政朝、門閥最高。爭坐次不決。訴於謙信。謙信判曰、在八州之士、千葉氏可爲首、小山氏不可爲尾。二人不能爭。忍城主成田長泰、稱源頼義故事、立馬祠前以待。從士曳長泰、下馬拳之。長泰慚恚奔歸。諸將叛歸者相繼。謙信還、至武藏府。長泰與北條氏兵、尾撃之。謙信令委棄輜重於道。敵爭取之。因蹂躪而過、入平井。四月、以憲政歸越後。

訓讀 是の時に當り、信玄、輕井澤に在り。飯富兵部說いて曰く「謙信、威焰此くの如し。北條氏必ず亡べば、則ち我も亦危し。君宜しく小田原未だ陷らざるに及び、兵を引いて三增嶺に出で、直に越後の中軍に當るべし。勝を得ば大に善し。卽し勝たざるも亦以て義を天下に伸ぶるに足らん」と。信玄曰く「不可なり。謙信兵を用ふる迅速、之を天資に得。而れども老成の計無し。關東の將士必ず堪ふる能はず。終に當に氏康に歸すべし。汝暫く之を待て」と。宇佐美定行、謙信に說いて曰く「城堅し。我れ深く入り久しく頓らば、恐らくは變有らん。宜しく今に及び兵を收むべし」と。之に從ふ。新發田治長年少く、近習たり。自ら請ひ殿と爲る。氏康、敢て尾撃せず。乃ち鎌倉に入り、鶴岡の祠に詣り、源氏・北條氏の舊圖を觀、故物小八葉車を索め、前嗣を載せて謙信騎從す。關東の將士、前後を擁衛し、小幡憲村、刀を操りて從ふ。千葉國胤・小山政朝、門閥最も高し。坐次を爭

つて決せず。謙信に訴ふ。謙信判じて曰く「八州之士に在つては、千葉氏、首たるべく、小山氏、尾たるべからず」と。二人爭ふ能はず。忍城主成田長泰、源頼義の故事と稱し、馬を祠前に立て以て待つ。從士長泰を曳き、馬より下し、之を拳つ。長泰慚恚し弃り歸る。諸將、叛き歸る者相繼ぐ。謙信還り、武藏府に至る。長泰、北條氏の兵と、之を尾擊す。謙信、輜重を道に委棄せしむ。敵爭つて之を取る。因つて蹂躪して過ぎ、平井に入る。四月、憲政を以て越後に歸る。

通釋 この當時、信玄は輕井澤に居た。飯富兵部が之に說いていふのに「あんなに謙信の威勢は盛んであります。北條氏は屹度亡びませうが、さすれば此方も危くなります。主公は小田原の陷落しない内に兵を引きつれ、三增嶺に出でられ、直に越後の本隊に當られるが宜いと存じます。若し勝利を得れば此の上ないよい事であります。又もし勝たないにしても北條を救ふといふ信義を廣く天下に見せるに充分であります」と。信玄はいふのに「それは可しくない。謙信は兵を動かすことが實に早くて、それは生れ付である。併し老練巧妙なる謀はない男だ。關東の將士等は必ず彼の部下たるに堪へ切れなくなる。結局、氏康に從ふやうになるであらう。暫く之を待つて居れ」と。一方宇佐美定行は謙信に說いて曰ふのに「この小田原城は堅固であります。我が軍が深く敵地に浸入して長い間留つて居ると、恐らくは變事が起るかも知れません。今の内に兵を取りまとめて引き揚げた方が宜しい」と。謙信は此の言葉に從つた。新發田治長は、年若く近習となつてゐた。自ら願うて殿を勤めた。氏康は決して追擊をしなかつた。そこで謙信は鎌倉に入り、鶴岡八幡宮に參詣し、源氏北條氏時代の舊跡を見物し、又昔から傳つてゐる小八葉車といふものをさがし求め、前嗣をその車に載せ、謙信は騎馬で從つた。關東の將士は前後を取り卷いて護衞し、小幡景村は刀を持つて從つた。千葉國胤と小山政朝の兩人は家柄が一番高かつた。

席順を爭つて決まらなかつた。そこで之を謙信に訴へた。謙信は之を取り捌いていふのに「關八州の侍の中で千葉氏は首座であるべく、又小山氏は尻につく譯にも行くまい」と二人はもう爭ふことも出來なかつた。忍の城主の成田長泰は源頼義の時の故例だといつて、馬を八幡の社前に立てて待ち受けてゐた。そこで謙信の從士は長泰を引き摺り下ろして拳骨でなぐり据ゑた。長泰は愧ぢ怒つて、走り歸つた。これから諸將の叛いて歸るものが繼いで出た。謙信はそれから還つて、武藏の國府に着いた。その時長泰は北條氏の兵と一緒になつて之を追擊した。謙信は、荷駄を道に棄てさせた。敵は爭つて之を取り合つた。そこで踏みにぢつて通り過ぎ、やがて、平井に入つた。四月、憲政を連れて越後に歸つた。

語釋　三增嶺（信濃）○小八葉車（葉は曜の借字、八曜を紋所として、それが飾りとなつてゐるもの、小は模樣が小さいからいふ。大臣以上の乘用車）○賴義之故事（長泰の祖は賴義の親族だつたからその頃の故事を用ひたのである。）○平井（上野）

六月、關東諸將復附氏康、來攻平井。謙信聞報卽發、潛軍由梭師谷出。比曉、擊北條氏軍。待前軍戰半、自以牙兵旁出、橫擊中堅。使別將遶出其背。氏康敗走。復白井・廐橋諸城而歸。謙信之攻小田原也、北條氏使使請信玄、北侵越後、以牽其勢。信玄乃令高坂昌宣焚掠疆上。謙信大怒。

訓讀　六月、關東の諸將、復氏康に附き、來り平井を攻む。謙信、報を聞き卽ち發し、軍を潛め梭師谷由り出

づ。曉くる比、北條氏の軍を擊つ。前軍の戰半なるを待ち、自ら牙兵を以て旁より出で、橫に中堅を擊ち、別將をして遶つて其の背に出でしむ。氏康敗走す。白井・廐橋の諸城を復して歸る。謙信の小田原を攻むるや、北條氏、使をして信玄に請ひ、北のかた、越後を侵し、以て其の勢を牽せしむ。信玄乃ち高坂昌宣をして疆上を焚掠せしむ。謙信大に怒る。

通釋 六月、關東の諸將はまた氏康に從ひ、平井を攻めに來た。謙信はその報告を聞いて直に出發し、軍勢を忍ばせて梭師谷から擊つて出た。夜あけ方に北條氏の軍勢を擊つた。先陣の合戰の半になるのを待つて、自ら麾下の兵をつれて傍から出で、北條の中軍を橫合から擊ち、別將をしてぐるり其の後に廻らせた。氏康は敗れ走つた。かくて謙信は、白井・廐橋の諸城を取り戾して還つて來た。謙信が小田原を攻めた時、北條氏は使を立てゝ、信玄に請ひ、北の方越後を侵して敵を引きつけるやうにさせた。そこで信玄は貝津の高坂昌宣をして國境近くの民家を焚かせ物を略奪させた。謙信は非常に怒つた。

語釋 白井（上野）

四年八月、復出信濃、壘于西條山、堰水爲池、以備貝津敵。信玄與義信、將二萬騎、來陣雨宮渡、以絕其歸路。越後將士說曰「利在速戰。」謙信不肯。居三日、信玄收兵入貝津、以瞰謙信歸。謙信自若也。信玄謀曰「謙信蓋待吾變、不動其軍也。吾伏兵河中、而別軍自貝津直往攻西條、則謙信無勝敗、必引兵北歸。而吾承敝麾戰、謙信可擒也」

越後諜者報曰「甲斐軍出貝津南行矣」謙信召諸將問計。直江實綱曰「彼國內有變。故乘夜引去耳。當邀擊之」宇佐美定行・齋藤朝信曰「不然。彼蓋爲二軍、欲及吾踰河夾擊之也」語未畢、諜者又報曰「甲斐軍渡廣瀨、上河中陣矣」謙信謂二人曰「如汝言。吾將出其意外也」

訓讀 四年八月、復信濃に出でて、西條山に壘す。水を堰いて池と爲し、以て貝津の敵に備ふ。信玄、義信と二萬騎を將ゐて、來つて雨宮渡に陣し、以て其の歸路を絕つ。越後の將士、說いて曰く「利は速戰に在り」と。謙信肯ぜず。居ること三日、信玄兵を收めて、貝津に入り、以て謙信の歸るを瞰ふ。謙信、自若たり。信玄謀りて曰く「謙信、蓋し吾が變を待ち、其の軍を動かさざるなり。吾れ兵を河中に伏せ、而して別軍は貝津より直に往いて西條を攻めば、則ち謙信、勝敗となく、必ず兵を引いて北歸せん。而して吾れ敝を承けて鏖戰せば、謙信擒にす可きなり」と。越後の諜者報じて曰く「甲斐の軍、貝津を出でて南行せり」と。謙信、諸將を召して計を問ふ。直江實綱曰く「彼れ國內に變あり。故に夜に乘じて引き去るのみ。當に之を邀へ擊つべし」と。宇佐美定行・齋藤朝信曰く「然らず。彼れ蓋し二軍と爲り、吾が河を踰ゆるに及んで、之を夾擊せんと欲するなり」と。語未だ畢らざるに、諜者又報じて曰く「甲斐の軍、廣瀨を渡り、河中に上りて陣す」と。謙信、二人に謂つて曰く「汝の言の如し。吾れ將に其の意外に出でんとす」と。

通釋 永祿四年八月、謙信は信玄が國境を焚き拂つて、民の物を掠奪したのを怒つて、また信濃へ出て行き西

條山に城壘を捺へた。水を堰き止めて池を作り、貝津の敵に備へた。信玄は長男の義信と二萬騎を將ゐて、雨宮渡に陣取り、謙信の歸路を絕ち切つた。越後の大將や侍は說いて曰ふのに「速く戰つた方が當方の利益です」と。併し謙信は承知しなかつた。それから三日經つて、信玄は兵を纏めて貝津に入り、謙信が歸るのを伺ひ待つてゐた所が謙信は一向に頓着せぬ。信玄は謀つて曰ふのに「謙信は思ふに我が軍中に異變の起るのを待つてゐて、それであの樣に軍隊を動かさずにゐるのだ。此方は兵を河中島に隱して置いて、別動隊が貝津からいきなり西條山へ攻めて行けば、謙信は屹度、勝ち負けに拘らず、兵を引き擧げて北に歸ることだらう。然うして置いて、此方は敵の痛んだ後を承けて必死に戰つたなら、謙信を擒にすることが出來るだらう」と。一方越後の廻し者が謙信に報告して曰ふのに「甲斐の軍が貝津に出て南方へ進軍を始めました」と。謙信は諸將を召し寄せて計略を問ねた。直江實綱が曰ふに「彼れ信玄の方には、屹度國內に異變が起つたのでありませう。だから夜に乘じて退却するのでせう。彼を邀へ擊つたら宜しう御座いませう」と。宇佐美定行・齋藤朝信が曰ふのに「イヤ然うではない。思ふに彼れは軍隊を二つにして、吾々を誘き寄せ、吾が軍が河を踰え渡るのを待つて、吾が軍を夾み擊ちにしようといふ算段だらう」と。其の語がまだ終らぬ內に、廻し者が又報告していふに「甲斐の軍が廣瀨を渡つて、河中島に上り、其處に陣取りました」と。謙信は宇佐美・齋藤の兩人に向つて曰ふに「其の方等の申した通ぢや。ヨシ敵に不意を喰はせてやらう」と。

語釋　西條山（信濃）〇承レ敝（潰えた所をうけて攻める。）〇廣瀨（信濃）

乃置二疑兵山上一、而全軍啣レ枚縛二馬舌一、渉二雨宮渡一。遇二武田氏斥騎十七人一、盡斬レ之。進歷二

信玄軍而陣、使本莊繁長・色部長實等、將二千騎、陣筑摩河岸。甲斐別軍、已向西條山。信玄竢報至曉。曉未辨人色。見謙信牙旗在前、將士皆失色。越後軍鼓而進、聲震地。信玄不暇易其陣、以弓銃力拒。謙信常憾向斫信玄而不遂也、欲必決死、自抽牙兵、前逼信玄麾下。麾下潰亂赴犀川。荒川伊豆逼擊信玄。信玄脫走。謙信追之。義信以二千騎尾謙信後。甘糟景茂等、擊走義信。

訓讀　乃ち疑兵を山上に置き、而して全軍、枚を啣み馬舌を縛し、雨宮渡を渉る。武田氏の斥騎十七人に遇ひ、盡く之を斬る。進んで信玄の軍を壓して陣し、本莊繁長・色部長實等をして、二千騎を將ゐて、筑摩河の岸に陣せしむ。甲斐の別軍、已に西條山に向ふ。信玄、報を竢ちて曉に至る。曉未だ人色を辨ぜず。謙信の牙旗、前に在るを見て、將士皆色を失ふ。越後の軍、鼓して進み、聲、地を震ふ。信玄其の陣を易ふるに暇あらず、弓銃を以て力め拒ぐ。謙信、常に向に信玄を斫つて遂げざりしを憾み、必ず死を決せんと欲し、自ら牙兵を抽いて、前んで信玄の麾下に逼る。麾下潰亂して、犀川に赴く。荒川伊豆、逼り、信玄を擊つ。信玄脫れ走る。謙信、之を追ふ。義信、二千騎を以て、謙信の後を尾す。甘糟景茂等、擊つて義信を走らす。

通釋　そこで謙信は疑兵を西條山に置いて、全軍枚を口に啣へ、馬の舌を縛り、靜かに雨宮渡を徒ち渡つた。武田氏の斥候の騎兵十七名に遭遇して、皆斬り殺した。それから進んで信玄の軍にヅッと近寄つて陣取り、本莊

繁長、色部長實等をして二千騎を率ゐて筑摩河の岸に陣取らしめた。甲斐の別働隊は既に西條山に向つた。信玄はその方からの通知を俟つて曉方になつた。まだ夜の引き明け時で人の顏色も尤分見分けがつかぬ。ヒヨイト見ると、謙信の將旗が早や眼の前にあるではないか、甲斐の將士は皆驚いて色を失つた。越後の軍では太鼓を鳴らして進み、其の聲は地を震ひ動かす程であつた。信玄は陣形を立て替へる暇もなく、弓や鐵砲で懸命に拒いだ。謙信は前に信玄を討ち漏らした事を、常に殘念に思つてゐたので、今度こそは勝負を決めようと思ひ、麾下の兵を引きつれ、前出して信玄の旗下へ逼つた。信玄の旗下の兵は潰え亂れて犀川の方へ赴いた。荒川伊豆は信玄に逼り、擊つてかゝつた。信玄は脫れ逃げた。謙信は之を追つかけた。信玄の長子義信は二千騎を引き連れて、謙信の後を尾けた。甘粕景茂等は擊つて義信を走らせた。

語釋 抽(ひきぬき連れること)

謙信既克、休止傳餐。義信又以殘兵返襲、敗之、斬越後將志田義時以下數十人。謙信執槍親鬪。本莊繁長等來援、復擊走義信。或說、「貝津敵、夜出乘我疲。宜急收兵。」謙信不肯、背犀川陣、次善光寺三日。遣使信玄、欲再決戰。甲斐將士、又有請焉者。信玄皆弗聽。

口譯 謙信既に克ち、休止して餐を傳ふ。義信又殘兵を以て返り襲ひて、之を敗り、越後の將志田義時以下數十人を斬る。謙信槍を執りて親ら鬪ふ。本莊繁長等來り援け、復擊つて義信を走らす。或人說く「貝津の敵、夜

出でて我が疲れたるに乘ぜん。宜しく急に兵を收むべし」と。謙信肯ぜず。犀川を背にして陣し、善光寺に次すること三日。使を信玄に遣はして、再び決戰せんと欲す。甲斐の將士、又請ふ者あり。信玄皆聽かず。

【通釋】謙信は既に勝つたので休息して辨當を使つてゐた。そこへまた義信が殘兵を連れて逆襲し來り、越後の將士志田義時以下數十人を斬つた。謙信は自ら槍を執つて鬪つた。本莊繁長等が援けに來り、また義信を擊つて走らせた。或人が謙信に說いて曰ふのに「貝津の敵が夜出て、此方の疲れた所に附け込んで來ることでせう。急に兵を纏めて退却なされた方が宜しいでせう」と。謙信は聽き入れなかつた。犀川を背にして陣取り、かくて善光寺に止宿すること三日に及んだ。そこで使者を信玄に遣はし、もう一度決戰しようと思つた。又甲斐の將士の内にも決戰し度いと請ふ者もあつた。併し信玄は一切聽き入れなかつた。

【語釋】傳レ飧（辨當をつかふこと。）

五年三月、北條氏康請二信玄一、合レ兵攻二松山一。松山、太田三樂屬城也。三樂與二長尾謙忠一、在二廐橋一。令三上杉憲政庶子憲勝守二之、告二急於謙信一。甲斐卒將甘利氏臣、有二米倉丹後者一。束レ竹爲レ楯、以扞二銃丸一。諸隊倣レ之。遂陷二松山一、降二憲勝一。而謙信方至二廐橋一、問二三樂一曰「松山何如」。曰「陷矣」。謙信大怒、瞋レ目按レ刀而跽曰「汝以二怯夫一守レ城、使三吾不レ及レ事。是辱二我武一也。吾寧與レ汝死」。三樂慴伏、不レ知レ所レ出。乃上二松山糧仗籍、及憲勝質子二人一。謙信左手

捽二人髮、而右手斬之、收刀復問曰「敵軍幾何」曰「五萬人」「將帥誰某」曰「信玄・義信・氏康・氏政」謙信笑曰「與吾敵者二人而已。如氏政・義信、吾直以刀背一擊足矣。抑、近地有敵城可攻乎」曰「私市城距此十里許」謙信曰「可攻也」卽親將赴攻。

通釋 五年三月、北條氏康、信玄に請ひ、兵を合せ松山を攻む。松山は、太田三樂の屬城なり。三樂、長尾謙忠と厩橋に在り。上杉憲政の庶子憲勝をして之を守らしめ、急を謙信に告ぐ。甲斐の卒將甘利氏の臣に米倉丹後といふ者あり。竹を束ねて楯と爲し、以て銃丸を扞ぐ。諸隊、之に倣ふ。遂に松山を陷れ、憲勝を降す。而して謙信、方に厩橋に至り、三樂に問うて曰く「松山は何如」と。曰く「陷る」と。謙信、大に怒り、目を瞋らし刀を按じ跽いて曰く「汝、怯夫を以て城を守らせ、吾をして事に及ばざらしむ。是れ我が武を辱むるなり。吾れ寧ろ汝と死せん」と。三樂慴伏し、出づる所を知らず。乃ち松山の糧仗籍、及び憲勝の質子二人を上る。謙信、左手に二人の髮を捽んで、右手に之を斬り、刀を收め復問うて曰く「敵軍幾何ぞ」と。曰く「五萬人」と。「將帥誰某ぞ」と。曰く「信玄・義信・氏康・氏政」と。謙信笑つて曰く「吾れと敵する者は二人のみ。氏政、義信の如きは、吾れ直に刀背を以て一擊して足れり。抑々近地、敵城の攻む可き有るか」と。曰く「私市城、此を距る十里許り」と。謙信曰く「攻む可きなり」と。卽ち親ら將として赴き攻む。

通譯 五年三月、北條氏康は信玄に賴んで兵を合せて松山を攻めた。松山は太田三樂の持城である。三樂は長尾謙忠と厩橋に居つた。上杉憲政の側腹の子の憲勝に、この松山城を守らせてゐたが、攻められてゐると聞いて

急を謙信に告げた。甲斐の大將廿利氏の家來に米倉丹後といふものがゐた。その男が竹を束ねて楯となし、鐵砲の彈丸を拒いだ。諸隊は皆之に見習つた。遂に松山を攻め落し、憲勝を降參させた。謙信は丁度其の時既橋に來て、三樂に問うて曰ふのに「松山はどうしたか」と。三樂は「落城しました」と答へた。謙信は大に怒り、目をむいて、刀に手をかけ膝をついていふのに「其の方は臆病者に城を守らせた爲めに吾をして戰の間に合はぬ樣にして終つた。これは我が武威を汚すことゝなつた。吾は一層のこと其の方共と死なう」と。三樂は恐れ入り、どうしてよいやら分らなかつた。そこで松山城の兵糧武器の控への帳面と憲勝の人質二人とを差し出した。謙信は左の手に人質二人の髮の毛をつかみ、右の手で斬り落し、刀を鞘に收めて、再び問うていふのに「敵の軍勢はどれ位だ」と。「五萬人あります」と答へた。「大將は誰だ」と謙信が問うた。答へていふのに「信玄・義信・氏康・氏政の四人で御座います」と。謙信は笑つていふのに「吾の敵になるものは信玄・氏康の二人だけである。氏政・義信のやうな連中は刀のみねで一うちすれば十分だ。それはさて置きこの近所に攻むべき敵の城があるか」と。三樂は答へて曰ふのに「私市城といふ城がこゝから十里ばかりの所にあります」と。謙信がいふのに「それはいゝから攻めよう」と。即座に自ら大將となつて赴き攻めた。

語釋　糧仗籍（兵糧・武器の控えの帳面。）○私市（藏武

三樂從レ之、綴レ舟濟ニ刀根川一。既濟、毀レ舟、過ニ信玄・氏康軍前一、遣レ使言曰「二公攻ニ松山一。而僕不レ及レ援。僕深愧レ之。不ニ敢徒歸一。今往攻ニ私市一。二公幸見レ要。」不レ答。乃傳レ城、四面齊登、一晝

夜拔之、斬城將小田朝眞、鏖三千人、以志田春義代守還、遣使二氏軍曰「僕拔城而還。猶可以一戰。二公豈有意乎」甲斐軍鼓譟。謙信免冑下馬、徐行而還、至廐橋、召長尾謙忠曰「三樂從我。汝何不從」拔刀斬謙忠、屠其衆二千、使北莊丹後代守、然後歸。氏康謂信玄曰「公何以不戰」曰「吾與公敵一謙信、雖勝可愧也」信玄從容與氏康語。因問之曰「河越之戰、公以一軍克兩上杉氏。願得聞其詳」氏康曰「公在焉、僕何敢言」信玄固請曰「欲使兒聞之」氏康乃談其戰略。信玄稱善。還至其營、謂馬場信房曰、「氏康手段、吾得之矣」

【訓讀】三樂之に從ひ、舟を綴り刀根川を濟る。既に濟り舟を毀ち、信玄・氏康の軍前を過ぎ、使を遣はし言つて曰く「二公、松山を攻む。而るに僕援くるに及ばず。僕深く之を愧づ。敢て徒に歸らず。今往いて私市を攻む。二公、幸に要せられよ」と。答へず。乃ち城に傳き、四面より齊しく登り、一晝夜にして之を拔き、城將小田朝眞を斬り、三千人を鏖にし、志田春義を以て代り守らせ還り、使を二氏の軍に遣はして曰く「僕城を拔いて還る。猶ほ以て一戰す可し。二公豈に意有らんや」と。甲斐の軍鼓譟す。謙信冑を免ぎ馬より下り、徐行して還り、廐橋に至り、長尾謙忠を召して曰く「三樂我に從へり。汝何ぞ從はざる」と。刀を拔き謙忠を斬り、其の衆二千を屠り、北莊丹後をして代り守らしめ、然る後に歸る。氏康、信玄に謂つて曰く「公、何を以て戰はざる」

と。曰く「吾れ公と、一謙信を敵とせば、勝つと雖も、愧づ可きなり」と。信玄、從容として氏康と語る。因つて之に問うて曰く「河越の戰、公、一軍を以て兩上杉氏に克つ。願はくは其の詳を聞くを得ん」と。氏康曰く「公在り、僕、何をか敢て言はん」と。信玄固く請うて曰く「兒をして之を聞かしめんと欲す」と。氏康乃ち其の戰略を談る、信玄善しと稱す。還り其の營に至り、馬場信房に謂つて曰く「氏康の手段、吾れ之を得たり」と。

通釋 三樂も之に從ひ、舟をつなぎ合せて、刀根川を渡つた。渡り切つて終ふとその舟をこわし（返らぬ決死の意氣込みを示す）信玄・氏康の陣屋の前を過ぎ、使を立てゝ、言はせるのに「御兩所には松山を攻められたそうな。拙者は援けるのに間に合はなかつた。深く之を愧ぢてゐる。このまゝオメ〳〵歸らうとは思はぬ。今から出かけて私市を攻める。御兩所には何卒遮り撃つて見られよ」と。これに對して返答しなかつた。そこで謙信は城につき四面から一齊に上り、一晝夜で之を攻め落し、城將小田朝眞を斬り、三千人を皆殺にし、志田春義に代つて守らせ、還つてから又もう一度使を、武田・北條の軍に遣つて曰ふのに「拙者は今城を陷れて還る所だ。まだもう一合戰は出來る。御兩所如何で御座る」と。甲斐の軍勢は太鼓を鳴らして喚ぎ立てた。（攻める氣勢を見せた）。謙信はわざと冑をぬぎ、馬から下り、しづ〳〵と落ち着いて歩いて還り、厩橋に着き、長尾謙忠を召していふのに「三樂は吾に從つた。其の方はなぜ從はなかつた」と。刀を拔いて謙忠を斬り、その部下の衆二千人を皆殺にし、北莊丹後をして、代り守らせ、それから國に歸つて行つた。氏康は信玄に向つて曰ふのに「貴公は何故合戰しなかつたのですか」と。信玄が對へていふのに「吾と貴公の兩人で、一人の謙信に敵するのだから、勝つても二人がゝりでは人前愧づべきことだ」と。この時信玄從容として、氏康と語つた。そこで尋ねていふには「河越の戰爭で貴公は一軍で兩上杉氏に勝たれた。何卒その詳しい事を承りたい」と。氏康がいふのに「貴公がゐら

れるのに、何とて御話が出來よう」と。信玄は固く請うていふのに「倅に後學の爲めに聽かせて置きたいと思ふのだ」と。そこで氏康はその戰略を話した。信玄は「立派だ」といつた。還つて陣營に入り、馬場信房に向つていふには「氏康の手段は皆分つた」と。

六年、信玄出兵上野、取箕輪・松枝諸城。又略飛驒、降其豪族江間常陸。而白谷氏納款於謙信。謙信於是與信玄分領飛驒。謙信自將入越中、拔松倉・小出、獲嘗殺爲景者江波氏、合其族十六人、盡誅之、梟首栴檀野、祭告爲景。是歲、謙信入上野、取伊勢崎。四月、入下總、攻臼井、與北條氏援軍戰、走之。先是、常陸小田氏治屬謙信。已而歸款北條氏。謙信怒、七年正月朔、冒雪發越後、入常陸、攻陷小田城。二月、攻佐野昌綱於上野。五月、北條氏康來援。逆擊走之、降昌綱。會足利氏使者來、傳敕旨、諭上杉・武田・北條三家、講和息兵。

【訓讀】六年、信玄、兵を上野に出だし、箕輪、松枝の諸城を取る。又飛驒を略し、其の豪族江間常陸を降す。而して白谷氏、款を謙信に納る。謙信、是に於て、信玄と飛驒を分ち領す。謙信自ら將として越中に入り、松倉・小出を拔き、嘗て爲景を殺せし者江波氏を獲、其の族十六人を合せ、盡く之を誅し、首を栴檀野に梟し、爲景

に祭告す。是の歳、謙信、上野に入り、伊勢崎を取る。四月、下總に入り、臼井を攻め、北條氏の援軍と戰ひ、之を走らす。是より先き、常陸の小田氏治、謙信に屬す。已にして款を北條氏に歸す。謙信怒り、七年正月朔、雪を冒し越後を發し、常陸に入り、攻めて小田城を陷る。二月、佐野昌綱を上野に攻む。五月、北條氏康來り援く。逆へ擊ち之を走らせ、昌綱を降す。會足利氏の使者來り、敕旨を傳へ、上杉・武田・北條の三家に諭し、和を講じ兵を息めしむ。

通釋 六年、信玄は兵を上野に出して、蓑輪・松枝の諸城を攻め取つた。又飛驒を取り、其處の豪傑江間常陸を降した。所が白谷氏は謙信に味方した。そこで謙信は信玄と飛驒を分けて領有することゝなつた。謙信は自ら大將となつて越中に入り、松倉・小出を攻め落し、嘗て爲景を殺した江波氏を生擒にし、その一族十六人を合せ全部之を殺し、首を梅檀野で獄門にかけ、お祭をして、爲景に告げた。この年、謙信は上野に入つて、伊勢崎を取つた。四月、下總に入り、臼井を攻め北條氏の援軍と戰ひ、之を走らせた。これより以前、常陸の小田氏治は謙信に屬いて居た。その內に北條氏に味方した。謙信は怒つて、七年正月元日、雪を冒して越後を出發し、常陸に入り、小田城を攻め落した。二月、佐野昌綱を上野に攻めた。五月、北條氏康が援けに來た、迎へ擊つて之を走らせ、昌綱を降參させた。丁度そこへ足利氏の使者が來て、天皇の詔を傳へ、上杉・武田 北條の三氏に諭して、和睦して戰を止めさせられた。

語釋 蓑輪（城將は安中景繁。）○松枝（城將は安中春綱。）

八月、謙信自ラ巡二視ス信濃ノ境上一ヲ。信玄モ亦出デ對スレ營ヲ。兩家ノ諸將交ミ說イテ二其ノ君一ニ曰ク「君以テ二四郡ノ故一ヲ與二

强敵構兵十二年。多喪士卒、祇爲四鄰之幸、無爲也」二人然之、乃約各選一力人使鬪、勝者取河中。上杉氏力士鬪勝。信玄乃獨取貝津一城、其餘盡屬謙信。謙信乃復村上義清・高梨政賴等按其故邑。

訓讀 八月、謙信自ら信濃の境上を巡視す。信玄も亦出で營を對す。兩家の諸將、交其の君に說いて曰く「君、四郡の故を以て、强敵と兵を構ふること十二年、多く士卒を喪ひ、祇四隣の幸となる。爲す無かれ」と。二人、之を然りとし、乃ち各一力人を選び鬪はしめ、勝つ者河中を取らんと約す。上杉氏の力士鬪ひ勝つ。信玄乃ち獨り貝津一城を取り、其の餘は盡く謙信に屬す。謙信乃ち村上義清・高梨政賴等を復して、其の故邑を按ぜしむ。

通釋 八月、謙信は自ら信濃の國境を巡回し視察した。信玄も、亦出て來て對陣した。上杉・武田兩家の諸大將は、かはる〴〵其の君に說いていふには「君は四ケ郡の爲めに强敵と兵を結ぶこと十二年にも及ばれました。多くの士卒を失ひ、却つて四方隣國の幸となるだけで無益な事ですからお止しになつた方が宜しい」と。信玄・謙信も之を然うだと思ひそこで各力士一人を選んで鬪はしめ、勝つた方が河中島四郡を取ることに約束した。上杉方の力士が鬪ひ勝つた。そこで信玄は貝津の一城を取つて、その外は皆謙信のものにした。そこで謙信は村上義清・高梨政賴等を元のやうにしてその舊領に據らせた。

語釋 四郡（河中島。）

謙信築精舍于春日山、號不識庵、盡牌將士殉難者、自弔祭之。先是、謙信使長尾政景守上田備信玄。已而忌之。有告其謀叛者。乃召諸親信、密議誅之。宇佐美定行諫曰「政景叛狀未著。誅之、恐招騷擾。上田要害、折入武田氏、君又負殺姉夫之名」謙信不聽。使定行圖之。定行乃歸其邑野尻、招政景、觀漁湖中、以漏船迎載、捉政景同溺。宣言私憾相殺。因沒入定行邑。而陰祿其子、收養政景子景勝、令鐵安朝代守上田。

訓讀 謙信、精舍を春日山に築き、不識庵と號し、盡く將士の難に殉ぜし者を牌し、自ら之を弔祭す。是より先き、謙信、長尾政景をして、上田を守り信玄に備へしむ。已にして之を忌む。其の謀叛を告ぐる者あり。乃ち諸の親信を召し、密に之を誅せんと議す。宇佐美定行諫めて曰く「政景の叛狀未だ著れず。之を誅せば恐らくは騷擾を招かん。上田の要害、折れて武田氏に入り、君又姉の夫を殺すの名を負はん」と。謙信聽かず、定行をして之を圖らしむ。定行乃ち其の邑の野尻に歸り、政景を招き、漁を湖中に觀、漏船を以て、迎へ載せ、政景を捉へ同じく溺る。私憾もて相殺すと宣言す。因つて定行の邑を沒入す。而して陰に其の子に祿し、政景の子景勝を收養す。鐵安朝をして、代り上田を守らしむ。

通釋 謙信は寺を春日山に建立し、不識庵と號し、國家の難に討死した將士の位牌を全部作り、自分で追善供養をした。これより以前に謙信は長尾政景をして上田を守つて信玄に備へしめた。その後政景を忌み嫌ふやうになつた。すると政景が謀叛したと告げる者があつた。そこで諸の腹心の家來を召して、ひそかに之を殺さうと

相談した。宇佐美定行は之を諫めていふのに「政景の謀叛の樣子もまだしつかりしません。之を殺せば恐らくは騷動を卷き起しませう。上田の要害な所が折れて、武田氏の領分になり、君は其の上に姉婿を殺したといふ惡名を受けられることでありませう」と。謙信は聽き入れなかつた。却つて諫めた定行をして、之を殺すやうに謀らしめた。そこで定行はその領分の野尻に歸つて、政景を呼び寄せ、野尻湖で獵を見物し、水の漏れる舟に政景を迎へ乘せ、政景をつかまへて一緒に水に溺れて死んだ。謙信は兩人は何か私の遺恨で相討をしたのであらうと言ひふらした。そこで表向き定行の領地を取り上げた。そして內々其の子に地行を與へ又政景の子の景勝を召し入れて養育した。鐵安朝に、代つて上田を守らせた。

語釋 野尻（信越の境。）

河中島之役、謙信爲武田義信所襲敗、曰「吾乃輸小兒」本莊繁長・長尾藤景、有救援之功。又竊笑之。謙信惡之、誅藤景。繁長自危、叛據其邑。遣兵討之。作距壍圍守、數年而降。義信勇敢善戰、將士歸心。信玄忌之。恐其倣己也。勝賴以庶子陰有奪嫡之志。乃與飯富兵部之弟昌景謀、使人誣告義信敎兵部就軍陣圖信玄。昌景證之。信玄囚義信、盡誅其親信、賜兵部死、屬其部兵於昌景、改氏山縣。終令義信自殺、歸義信妻於駿河。今川氏始惡於武田氏。武田氏既不慮上杉氏、而其兵西出矣。

訓讀 河中島の役に、謙信、武田義信の襲ひ敗る所と爲る。曰く「吾れ乃ち小兒に輸す」と。本莊繁長・長尾藤景、救援の功あり。又竊に之を笑ふ。謙信、之を惡み、藤景を誅す。繁長自ら危み、叛き、其の邑に據る。兵を遣はし之を討たしむ。距堙を作り圍み守り、數年にして降る。義信、勇敢にして善く戰ひ、將士、心を歸す。信玄、之を忌む。其の己に倣ふを恐るるなり。勝賴、庶子を以て、陰に嫡を奪ふの志あり。乃ち飯富兵部の弟昌景と謀り、人をして、義信、兵部をして軍陣に就き、信玄を圖らしむと誣告せしむ。昌景、之を證す。信玄、義信を囚へ、盡く其の親信を誅し、兵部に死を賜ひ、其の部兵を昌景に屬せしめ、氏を山縣と改む。終に義信をして自殺せしめ、義信の妻を駿河に歸す。今川氏、始めて武田氏に惡し。武田氏既に上杉氏を慮らずして、其の兵、西に出づ。

通釋 川中島の戰で謙信は武田義信に不意に襲ひ破られたことがある。そこで「余は小供に負けて終つた」と言つてゐた。本莊繁長・長尾藤景は、その時救助して手柄を立てた。又内々謙信の負けたのを笑つて居た。謙信、之を惡み、先づ藤景を殺した。繁長も自分で危なく思ひ、その領地に立て籠つて叛いた。そこで兵を遣はして之を討たしめた。謙信方は土手を作つて城を取り卷き、之を守ること數年にして、降參させた。義信は勇氣果敢で、上手に戰ひ、將士も心を歸して居た。信玄は之を忌み憎んでゐた。義信が自分に倣つて父を逐ひ出すのではないかと恐れてゐた。勝賴は側腹の子でありながら家督を奪ひ取る考があつた。そこで飯富兵部の弟昌景と相談し、人をして義信は、兵部に命じて軍中、陣屋の中で信玄を殺させようとしたと無實のことを言ひ立てさせた。昌景はそれを證言した。信玄は義信を囚へ、その腹心の者どもを皆誅し、兵部に切腹をさせ兵部手下の兵は昌景に從屬させ昌景の苗字を山縣と改めさせた。とう〳〵義信にも切腹させ義信の妻は駿河の今川氏に送り還した。

今川氏はこれから始めて武田氏と不仲になつた。武田氏は、上杉氏と和睦したので、もう悉かり其の方は心配しないで其の兵を西の方に出すことになつた。

【語釋】距堙（城の外へ築いて、敵を攻める、隄防をいふ）

初信玄・謙信共欲伸武於中原、而兵結不解、未暇及焉。謙信之再入京師也、三好長慶權勢方熾、家臣松永久秀專政。其吏徒途遇謙信、不禮。謙信命從士斬之。因密啓將軍義輝、請除長慶・久秀。義輝雖不能決、心倚賴之。久秀等聞之、頗懼。八年、義輝密使使召謙信。久秀等大懼、欲及其未來、行大事、遂弑義輝。義輝弟義昭逃走近江。

【訓讀】初め信玄・謙信、共に武を中原に伸べんと欲す。而して兵、結んで解けず、未だ及ぶに暇あらず。謙信の再び京師に入るや、三好長慶、權勢、方に熾にして、家臣松永久秀政を專にす。其の吏徒、途に謙信に遇ひ禮せず。謙信從士に命じて之を斬らしむ。因つて密に將軍義輝に啓し、長慶・久秀を除かんと請ふ。義輝、決する能はずと雖も、心は之に倚賴す。久秀等、之を聞き頗る懼る。八年、義輝、密に使をして謙信を召さしむ。久秀等、大に懼れ、其の未だ來らざるに及び、大事を行はんと欲し、遂に義輝を弑す。義輝の弟義昭、逃れて近江に走る。

【通釋】はじめ、信玄も謙信もともに自己の武威を畿内に張らうと思つてゐた。互に戰爭し合つて解けなかつたのでそこまで手を出す暇はなかつた。謙信が二度目に京都に入つた時、三好長慶の羽振りが丁度盛んな時で、そ

の家來の松永久秀が政治を專らにしてゐた。松永の下役人どもは途中で謙信に出遇つても禮をしなかつた。謙信は供の士に命じて之を斬殺せしめた。それを機會に內々將軍義輝に申し立てゝ、長慶・久秀の二人を除き度いと請うた。義輝は此の時之を決斷し兼ねたけれども心の中では謙信を賴みに思ふやうになつた。久秀等は之を聞いて隨分と懼れた。八年、義輝は內々使者を出して、謙信を召さしめた。久秀等は非常に懼れ謙信が來ない內に大事を決行しようと思ひ、遂に義輝を弑した。義輝の弟の義昭は逃げて近江に走つた。

九年、以書來、託謙信、以興復。議不輒成。義昭遂依織田信長於美濃。信長擁義昭入京師、遂略定近畿、頓致強大。顧恐謙信・信玄議其後。又自知非二人敵也、乃傾意結信玄、以控謙信。使幣相踵於甲斐。信玄知其意、動輒敗約、欲西其兵。信長患之、乃送其季子勝長爲質、以女妻勝賴。生信勝及義信死、立信勝爲嫡嗣、而勝賴護之。信勝母死。信長又請爲其子信忠娶信玄女。信玄與織田氏婚、遂與今川氏絕。

訓讀　九年、書を以て來り、謙信に託するに、興復を以てす。議輒く成らず。義昭、遂に織田信長に美濃に依る。信長、義昭を擁し、京師に入り、遂に近畿を略定し、頓に強大を致す　顧みて、謙信・信玄其の後を議するを恐る。又自ら二人の敵に非ざるを知るや、乃ち意を傾け信玄に結び、以て謙信を控す。使幣、甲斐に相踵ぐ。信玄其の意を知り、動もすれば輒ち約を敗り、其の兵を西せんと欲す。信長、之を患ひ、乃ち其の季子勝長を送り

質と爲し、女を以て勝賴に妻はす。信勝を生む。義信、死するに及び、信勝を立てて嫡嗣と爲す。而して勝賴之を護る。信勝の母死す。信長、又其の子信忠の爲めに信玄の女を娶らんと請ふ。信玄、織田氏と婚し、遂に今川氏と絕つ。

通釋 九年、義昭は書面で謙信に將軍家の再興をして貰ひ度いと賴み込んだ。容易に相談が纏らなかつた。義昭は遂に織田信長に美濃にたよつた。信長は義昭を擁して京都に入りそれから近畿を平定し、急に强大となつた。併し顧みて謙信・信玄が其の後を覘ふのを恐れた。且つ自分は、とても二人の者には叶はぬといふことを知つてゐたので、心を傾けて信玄に結びつき、謙信を牽制してゐた。使者や贈物が甲斐に向つて相續いて絕えない程であつた。信玄は信長の心中を知つてゐたので兎角約束を破つて、その兵を西に出さうと思つた。そこで信長は之に困つて、その末の子の勝長を送つて人質とにし、又娘を勝賴に妻はせた。その娘は信勝を生んだ。義信が死んでからは信勝を立てゝ跡目とした。そして勝賴が之を守り立てゝゐた。その內に、信勝の母が死んだ。織田家と緣が薄くなつたので、信長はその子信忠の爲めに信玄の女を娶り度いと申出た。信玄は織田氏と婚姻を結び遂に今川氏と絕交することゝなつた。

先レ是、今川義元與二信長一戰敗死。其子氏眞暗弱、任二嬖臣三浦義鎭一。國人不レ服。我德川公嘗屬二今川氏一。亦去屬二織田氏一、兵力日强。是時、信虎猶在、流二寓信濃一。使三人言二於信玄一曰、「駿河亂。將レ爲二德川氏所一レ有。汝宜先取レ之。」信玄不レ答。信玄國不レ濱レ海。仰二鹽於東海一。氏

眞與北條氏康謀、陰閉其鹽。甲斐大困。謙信聞之、寄書信玄曰「聞氏康・氏眞困君以鹽。不勇不義。我與公爭、所爭在弓箭、不在米鹽。請自今以往、取鹽於我國。多寡唯命。」乃命賈人平價給之。

訓讀 是より先き、今川義元、信長と戰ひ敗死す。其の子氏眞、暗弱にして、嬖臣三浦義鎭に任ず。國人、服せず。我が德川公、嘗て今川氏に屬す。亦去つて織田氏に屬し、兵力、日に強し。是の時、信虎猶ほ在りて、信濃に流寓す。人をして信玄に言はしめて曰く「駿河亂る。將に德川氏の有する所と爲らんとす。汝宜しく先づ之を取るべし」と。信玄答へず。信玄の國、海に濱せず。鹽を東海に仰ぐ。氏眞、北條氏康と謀り、陰に其の鹽を閉づ。甲斐、大に困む。謙信、之を聞き、書を信玄に寄せて曰く「聞く、氏康・氏眞、君を困むるに鹽を以てすと。不勇不義なり。我れ公と爭へども、爭ふ所は弓箭に在つて、米鹽に在らず。請ふ、今より以往、鹽を我が國に取れ。多寡は唯命のまゝ」と。乃ち賈人に命じ、價を平にし之を給せしむ。

通釋 これより以前、今川義元は信長と戰つて敗れて死んだ。その子の氏眞は智暗く、怯弱で、氣に入りの三浦義鎭に萬事を打ち任かせてゐた。從つて國人は心服しなかつた。わが德川公家康は嘗て、今川氏に屬いて居た。これも亦去つて織田氏に屬いて、兵力は日に日に強くなつて來た。當時、信虎はまだ生存してゐて、信濃に流れ留まつてゐた。人をして、信玄にいはしめていふには「駿河が亂れてゐる。將に德川氏の所有とならうとして居る。お前は先んじて之を取つたら宜からう」と。信玄は返答しなかつた。信玄の國は海に接してゐなかつた。鹽

な東海道から供給して貰つて居た。氏眞は北條氏康と相談して內々其の鹽の支給の道を閉ぢて送らせぬ樣にした。甲斐では大に困つた。謙信は之を聞いて書面を信玄に送つていふには「聞けば、氏康・氏眞が鹽で君を困しめてゐるさうだ。實に不勇不義である。余は貴公と爭つてゐるが、爭ふところは、弓矢の上に在つて米や鹽ではない。今後は鹽を我が國からお取りなさい。多い少いは、お言ひつけ次第にてどの樣にも便宜を計らう」と。そこで商人に命じて、價を公平にして鹽を支給した。

信玄使間者伺駿河、曰「可取也」。陰招國人、約爲內應。十一年十二月、引兵南入駿河、軍八幡坂。氏眞擧兵拒淸見寺。軍潰、走歸府中、遂走掛川。信玄欲隨攻之、而慮氏康來救、乃止軍府中。取諸降附任子、送致甲斐。聞庵原某嘗與山本晴行交、召問要地可城者。以久能及興津答。乃城之。氏康果以大兵來、爭駿河。以復氏眞爲名。信玄留兵守府中、而自軍興津。氏康軍薩陲山、相持未戰。信玄曰「氏康數與上杉戰、用兵遲緩、易與也」。因飲將士酒、問曰「猶寒乎」。曰「寒」。信玄曰「我陣平地、飲酒而猶寒。彼陣山上、寒可知矣。必下在其麓也」。令人伺其陣。陣果無人。乃奪其糧仗返。後數挑戰、不決。至四月、信玄問計諸將。馬場信房曰「臣嘗見啄木啄蟲、欲出蟲於前、先啄其後。信

玄默然。曰「然」夜收軍歸。氏眞遂走相模。三浦義鎭爲徳川氏所誅。

訓讀 信玄、間者をして駿河を伺はしめて、曰く「取る可きなり」と。陰に國人を招き、約して內應を爲さしむ。十一年十二月、兵を引き南のかた駿河に入り、八幡坂に軍す。氏眞、兵を擧げ淸見寺に拒ぐ。軍潰え、走つて府中に歸り、遂に掛川に走る。信玄隨つて之を攻めんと欲す。而して氏康の來り救はんことを慮り、乃ち軍を府中に止む。諸の降附の任子を取り、甲斐に送致す。庵原某、嘗て山本晴行と交ると聞き、召して要地の城く可きものを問ふ。久能及び興津を以て答ふ。乃ち之に城く。氏康、果して大兵を以て來り、駿河を爭ふ。氏眞を復するを以て名と爲す。信玄、兵を留め府中を守らしめ、而して自ら興津に軍す。氏康、薩陲山に軍す。相持して未だ戰はず。信玄曰く「氏康、數兩上杉と戰ふ。兵を用ふること遲緩、與し易きなり」と。因つて將士に酒を飮ましめ、問うて曰く「猶ほ寒きか」と。曰く「寒し」と。信玄曰く「我れ平地に陣し、酒を飮むも猶ほ寒し。彼れ山上に陣し、寒きこと知る可し。必ず下り其の麓に在らん」と。人をして其の陣を伺はしむ。陣果して人なし。乃ち其の糧仗を奪つて返る。後、數戰を挑めども、決せず、四月に至る。信玄、計を諸將に問ふ。馬場信房曰く「臣嘗て啄木の蟲を啄むを見るに、蟲を前に出ださんと欲すれば、先づ其の後を啄む」と。信玄、默然たり。曰く「然り」と。夜、兵を收めて歸る。氏眞、遂に相模に走る。三浦義鎭、德川氏の誅する所と爲る。

通釋 信玄、間諜を遣はして、駿河の樣子を捜らせていふには「駿河は討ち取ることが出來る」と。こつそりその國人を招き寄せて內々味方することを約束させた。十一年十二月、兵を引きつれ南方、駿河に打ち入り、八幡坂に陣取つた。氏眞は全部の兵をつれて淸見寺に拒いだ。其の軍は潰え走つて府中（靜岡）にかへり、遂に掛川

に走つた。信玄はその後をつけて、之を攻めようと思つた。併し氏康が援けに來はせぬかと心配して、そのまゝ軍を府中に止めた。多勢の降參し、從つた者の人質を取つて、甲斐に送り屆けた。庵原某は前に山本晴行と交はり、兵學に精しい男と聞いたので呼び出して城を築くべき要害の處を尋ねた。久能と興津とが宜いと答へた　そこで其處に城を築いた。すると案の定氏康は大軍を率ゐて、やつて來て駿河を取らうと爭つた。そして氏眞を元々通くにすることを言ひ立てた。信玄、兵を留めて、府中を守らせて置き、そして自分は興津に陣取つた。氏康は薩埵山に陣取つた。睨み合つてまだ戰爭にならなかつた。信玄がいふのに「氏康は、度々兩上杉と戰つた。そのやり方は兵を動すことが誠に緩やかであつて、相手にし易い」と。そこで將士に酒を飮ませていふには「まだ寒いか」と。すると「まだ寒い」と答へた。信玄がいふのに「我々は平地に陣取つてゐて、酒を飮んでもまだ寒いのだ。彼等は山の上に陣して居るから寒いことは分り切つてゐる。その內にきつと、山から下りて來て麓に陣取るだらう」と。人をやつて北條氏の陣屋を伺はせた。案の定陣中には人はゐなかつた。その兵糧武器を奪つて還つて來た。後度々戰を挑んで見たが、勝負が決まらないで四月になつた。信玄は計略を諸將に尋ねた。馬場信房がいふのに「私は以前啄木鳥が蟲を啄むのを見ましたが蟲を前へ出さうと思ふと先づ其の後の方をつゝきます」と。信玄は默つて暫らく考へて居た。そして、いふには「その通りだ」と。夜、軍を纏めて歸國した。氏眞は遂に相模に走つた。氏眞の嬖臣の三浦義鎭は徳川氏に誅せられた。

語釋　清見寺(駿河)　○掛川・久能・興津(遠江)　○任子(人質)　○收軍歸(これ卽ち啄木の蟲を出す計略。)

十二年六月、信玄出デ駿河ニ、遂ニ入リ伊豆ニ、軍ス鳴島ニ。會ヽ大雨フリ、流潦侵シ陣ヲ、引キ返ル。於テ是ニ、氏康ノ兵專ラ

防西面在小田原者甚寡。信玄諜知、議攻之。高坂昌宣諫曰「彼已懲謙信。講戰守必悉。君深入之、一有蹉跌、前功悉廢。而謙信將乘其後。」不聽。九月、下兵八王子、攻敵城邑不下者、過而南、入小田原、縱火城下。十月引返、遇北條氏二萬兵三增嶺。召諸將、命內藤昌豐掌輜重。昌豐辭。信玄曰「前謙信、唯失輜重、故敗於小田原。是重職也。」設八伏、及兵交、夾擊破之。歸謂昌宣曰「何如。」昌宣曰「是僥倖耳。」信玄嘉其忠讜。相模兵戍駿河者、聞難棄守返救。信玄瞰之。

訓讀 十二年六月、信玄、駿河に出で、遂に伊豆に入り、鳴島に軍す。會大に雨ふり、流潦、陣を侵し、引き返る。是に於て氏康の兵、專ら西面を防ぎ、小田原に在る者甚だ寡し。信玄、諜知し、之を攻めんと議す。高坂昌宣諫めて曰く「彼れ已に謙信に懲る。戰守を講ずる必ず悉さん。君深く之に入り、一たび蹉跌するあらば、前功悉く廢せん。而して謙信、將に其の後に乘ぜんとす」と。聽かず。九月、兵を八王子に下し、敵の城邑の下らざるものを攻め、過ぎて南し、小田原に入り、火を城下に縱つ。十月引き返し、北條氏二萬の兵に三增嶺に過ふ。諸將を召し、內藤昌豐に命じ、輜重を掌らしむ。昌豐、辭す。信玄曰く「前に謙信、唯輜重を失ひ、故に小田原に敗る。是れ重職なり」と。八伏を設け、兵交るに及び、夾み擊つて之を破る。歸り昌宣に謂つて曰く「何如」と。昌宣曰く「是れ僥倖のみ」と。信玄、其の忠讜を嘉す。相模の兵の駿河を戍るもの、難を聞き守を棄

て返り救ふ。信玄、之を瞰ふ。

通釋 十二月、信玄は駿河に出で、遂に伊豆に入り、鳴島に陣取つた。丁度大雨が降つて、雨水が陣中に流れ込んだので、引きかへした。かくて氏康の兵は專ら西の方面ばかり防いでゐて、小田原に居るものは至つて手薄であつた。信玄はそれを忍びの者によつて知り、小田原城を攻めようと相談した。高坂昌宣が諫めていふのに「北條氏はこれまでに謙信に攻められたので懲りてゐます。戰守の策をなすことに於てはきつと出來るだけのことをしてゐるでせう。それを主公が深く入り込まれ、一度失くぢるやうなことでもありますと、これまでのお手柄は全部駄目になつて終ふでせう。そして謙信は後の方から付け込まうとしてゐますからお止しになつた方が宜しいでせう」と。信玄は聞き入れなかつた。九月、兵を八王子に遣り、北條氏の城邑で降參しない者を攻め、そこを通り越して南して、小田原に攻め込み、城下に火をかけた。十月、引きかへして、北條氏の兵二萬と三增峠で出遇つた。そこで諸將を召し、內藤昌豐に命じて荷駄の係りを掌らせた。昌豐はそれを辭退した。信玄がいふのに前に謙信は荷駄を失つたから小田原で敗けたのである。これは重要な役目だ」と。やはり昌豐に命じた。伏兵を八個所に拵へ、合戰になつてから、その伏兵が出て來て、夾み討にして敵を敗つた。國に歸つてから昌宣に向つていふには「(お前は勝てないやうに申したが勝つたではないか) どうだ」と。昌宣がいふのに「これは僥倖で勝つたのです」と。信玄は昌宣の忠義で直言するのをよろこんだ。相模の兵で駿河を守つて居た連中が、小田原の急を聞いて、自分の持ち場を棄てゝ返り援つた。信玄は之を伺ひ知つた。

語釋 流潦(水のたまつてゐるのが潦。)

十一月、急出駿河、拔九城。獨蒲原不下。信玄宣言赴府中、伏兵城傍山中、而西。敵空城追之。伏起、取城、遂陷府中及諸城、與德川氏、割大井河爲界。織田信長以書來請曰「松平家康、僕所最眷顧者、公幸指敎之。家康介弟在今川氏。公宜取以爲質。」關東・北陸諸國、皆使使賀戰捷。於是、信玄國傳南海、謙信國傳北海、以橫絕海內。北條氏在其東、織田氏在其西。織田氏求援於信玄、北條氏求援於謙信。而謙信未之肯也。

【訓讀】十一月、急に駿河に出で、九城を拔く。獨り蒲原下らず。信玄、府中に赴くと宣言し、兵を城傍の山中に伏せ西す。敵、城を空しくして之を追ふ。伏起り城を取り、遂に府中及び諸城を陷れ、德川氏と、大井河を割き界と爲す。織田信長、書を以て來り請うて曰く「松平家康は、僕の最も眷顧する所の者、公、幸に之を指敎せよ。家康の介弟、今川氏に在り。公、宜しく取り以て質と爲すべし」と。關東・北陸の諸國、皆使をして戰捷を賀せしむ。是に於て、信玄の國は南海に傳き、謙信の國は北海に傳き、以て海內を橫絕す。北條氏は其の東に在り。織田氏は其の西に在り。織田氏は援を信玄に求め、北條氏は援を謙信に求む。而して謙信は未だ之を肯んぜざるなり。

【通釋】十一月、信玄は遂に駿河に出で、九ケ城を陷れた。たゞ蒲原だけが落ちなかつた。信玄は府中へ向ふのだと言ひふらして置き、兵を城の近くの山の中に匿して置いて西へ向つた。敵は城を空にして之を追つかけた。

すると、伏兵忽ち起つて城を取り、遂に府中及び其の他の城を陷れ、德川氏と協定して大井川をば領地の界目となした。織田信長が書面で來り請うていふには「松平家康は私が最も目をかけて居るものでありますから、貴公にも何卒よき樣に敎へてやつて下さい。家康の弟は今川氏に居ります。貴公は、之を取つて人質となされたら宜しいでせう」と。關東北陸の諸國は皆使者をよこして信玄の勝利を賀せしめた。かくて信玄の領地は南海に至り、謙信の領地は北海に至り、この二家で日本を東西に絶ち切つた形となつた。北條氏はその東に居り、織田氏はその西に居た。織田氏は援助を信玄に求め、北條氏は援けを謙信に求めた。そして謙信の方はまだ、しつかり之を承諾する所まで行かなかつた。

是歳春、謙信攻陷武藏・下野諸城。秋、入越中、攻神保長純、會畠山義則不能治其下、能登亂。遣上杉義春治之。立義則子義隆而還。當是時、謙信連略加賀・越中、而時出關東、兵行神速、敵不能測。每懸軍橫行八州。八州諸城聞其來、震慴、不敢出。聞其還上三國嶺、然後相告解嚴。如雷雨過者。

訓讀 是の歳の春、謙信、武藏・下野の諸城を攻陷す。秋、越中に入り、神保長純を攻む。會畠山義則、其の下を治むる能はずして、能登亂る。上杉義春を遣はし、之を治めしむ。義則の子義隆を立てゝ還る。是の時に當り、謙信、連に加賀・越中を略し、而して時に關東に出づ。兵の行くこと神速にして、敵、測ること能はず。每に軍を懸け八州を橫行す。八州の諸城、其の來るを聞き、震慴して敢て出でず。其の還り三國嶺に上ると聞き、

然る後に相告げて嚴を解く。雷雨の過ぐるものの如し。

通釋 この年、春、謙信は武藏下野の諸城を攻め落した。秋、越中に入り、神保長純を攻めた。丁度其の時畠山義則がその手下を治めることが出來ないで、能登が亂れてゐた。謙信は上杉義春を遣はして之を治めしめた。義則の子義隆を立てゝ還つて來た。この當時謙信はしきりに加賀越中を攻め取り、而して時々關東に打つて出た。その兵の行動は實に迅速で、敵は之を測り知ることが出來なかつた。常に後につづく兵がなくともかまはず遠征して、八州を横行した。八州の諸城は謙信が來たと聞くと身を震はせて恐れ、城から出なかつた。謙信が還つて、三國峠に上つたと聞くと初めてホッとして相告げて備を解くといつた有樣であつた。丁度雷雨でも通り過ぎるといつた樣なものであつた。

語釋 三國嶺（上野・越後・信濃に跨る。）

元龜元年、佐野昌綱族據飯盛城、與昌綱鬪。北條氏政以四萬騎助攻之。昌綱告急於謙信。正月、謙信卽發、晝夜兼行。聞氏政將分其兵當己、而急攻拔城也、謂諸將曰、「饒令我戰勝氏政、而不救城陷、無益。吾當獨身入城堅守。汝等推義春爲將繼進。」乃獨與八十騎過氏政陣前而入城。謙信穿黑綿衣、不被鎧、提十字槍騎行。敵軍指目曰、「謙信也。」而大驚、不敢遮擊。諸將尋至。北條氏軍潰走。謙信遂屠飯盛、徇下野・下總

入厩橋。北條氏康聞氏政敗、將二萬騎出援。陣河越相持。三月、使使請和、質其季子三郎。謙信與諸將議、聽之、會見于富田大中寺、携三郎歸、授其故名曰景虎。四月、氏康入駿河、攻深澤。不下。又請謙信、出兵上野・信濃間、以縻信玄。信玄自將出拒。交綏而退。

訓讀　元龜元年、佐野昌綱の族、飯盛城に據りて、昌綱と鬪ふ。北條氏政、四萬騎を以て、之を助け攻む。昌綱、急を謙信に告ぐ。正月、謙信卽ち發し、晝夜兼行す。氏政、將に其の兵を分ち己に當らしめ、急に攻めて城を拔かんとするを聞くや、諸將に謂つて曰く「饒令、我れ戰つて氏政に勝つも、而も城の陷るを救はずば益なからん。吾れ當に獨身、城に入り堅く守るべし。汝等、義春を推し將と爲し、繼ぎ進めよ」と。乃ち獨り八十騎と、氏政の陣前を過ぎて城に入る。謙信、黑綿衣を穿ち、鎧を被ず。十字槍を提げ騎行す。敵軍指目して曰く「謙信なり」と。而して大に驚き、敢て遮り擊たず。諸將尋いで至る。北條氏の軍潰え走る。謙信、遂に飯盛を屠り、下野・下總を徇へ、厩橋に入る。北條氏康、氏政の敗を聞き、二萬騎に將として出で援く。河越に陣し相持す。三月、使をして和を請はしめ、其の季子三郎を質とす。謙信、諸將と議し、之を聽し、富田の大中寺に會見し、三郎を携へ歸り、其の故名を授け景虎と曰ふ。四月、氏康、駿河に入り、深澤を攻む。下らず。又謙信に請ひ、兵を上野・信濃の間に出だし、以て信玄を縻す。信玄自ら將として出で拒ぐ。交綏して退く。

通釋　元龜元年、佐野昌綱の一族の者が、飯盛城に立てこもつて、昌綱と鬪つた。北條氏政は四萬騎を率ゐて

一族の者を助けた。昌綱は急を謙信に告げた。正月、謙信は早速出發し、夜を日に繼いで進軍した。謙信は、氏政が其の兵を分けて自分に當らしめ、そして急に昌綱の城を陷れようとして居ると聞いたので、諸將に向つていふのに「たとひ、余が戰爭して氏政に勝つたとしても、城の陷るのを助けなかつたら何にもならない。余は、一人で城中に入つて、堅く守るであらう。汝等は義春を推して大將となし、後から繼ぎ進めよ」と。そこで獨りで八十騎を率ゐて氏政の陣の前を通過して城中に入り込んだ。その時、謙信は、黑木綿の着物を着て別に鎧を着てゐなかつた。十文字の槍を提げて馬に乘つて行つた。敵軍は指し見ていふのに「あれは謙信だ」と。そして非常に驚いて遮り擊たうともしなかつたのである。やがて諸軍は繼いで到着した。北條氏の軍は潰え走つた。謙信遂に飯盛城を攻め落し、下野・下總を降伏せしめ、厩橋に入つた。北條氏康が氏政の敗れたのを聞いて、二萬騎を率ゐて出で、援けた。河越に陣取り、睨み合つてゐた。三月、使をして和を請はしめ、その末子の三郎を人質として提供した。謙信は諸將と相談して之を許し、富田の大中寺で會見し、三郎をつれて歸り、自分のもとの名を三郎に授け與へて、景虎といつた。四月、氏康は駿河に入つて、深澤を攻めた。陷らなかつた。又謙信に賴んで上野・信濃の間に兵を出して信玄を牽制した。信玄は自ら大將となつて出で、之を拒いだ。その内に相引になつて退いた。

語釋　飯盛城（信濃）○縻（繫ぐこと。）

十一月、徳川氏質子遁去。於是信玄與徳川氏絕。而織田氏聘問益厚。時氏康病卒。氏政請和信玄。將士皆說「勿許。乘喪擊之、盡取其地。雖謙信不能支也」信玄曰「吾夙

欲出兵東海、並海而西、建旗鼓于京師。則吾雖死不憾矣。前有醫人、診我脈、謂當罹篤疾。吾經營關東、而中道疾作、志不可成也。信長乘吾輩不西、以家康當我西面、而陰助之。其計可憎。我欲與氏政和、西治信長。」十二月、遂納氏政質、使逐氏眞。氏眞走、倚德川氏。時信長與義昭相隙。義昭以書諭信玄・謙信、來圖之。

〔訓讀〕十一月德川氏の質子遁れ去る。是に於て、信玄、德川氏と絕つ。而して織田氏の聘問益厚し。時に氏康病みて卒す。氏政、和を信玄に請ふ。將士皆說く「許す勿れ。喪に乘じて之を擊ち、盡く其の地を取らば、謙信と雖も支ふる能はじ」と。信玄曰く「吾れ夙に兵を東海に出し、海に並びて西し、旗鼓を京師に建てんと欲す。則ち吾れ死すと雖も、憾みず。前に醫人あつて、我が脈を診し、謂へらく、當に篤疾に罹るべしと。吾れ關東を經營して、中道にして疾作らば、志成るべからざるなり。信長、吾が輩の西せざるに乘じ、家康を以て我が西面に當らしめ、陰に之を助く。其の計憎むべし。我れ氏政と和し、西信長を治めんと欲す」と。十二月、遂に氏政の質を納れ、氏眞を逐はしむ。氏眞走り、德川氏に倚る。時に信長・義昭と相隙す。義昭、書を以て、信玄・謙信に諭し、來つて之を圖らしむ。

〔通釋〕十一月、德川氏の人質が遁げ去つた。そこで信玄は、德川氏と絕つた。而して織田氏の音問を通ずることは以前に增して一層に鄭重であつた。時に氏康は病んで死んだ。氏政は和を信玄に申し入れた。將士は皆說く「許してはなりません。喪につけ込んで擊ち、皆その地を取れば謙信とても支へることは出來ますまい」と。

信玄がいふのに「余は前から兵を東海道に繰り出し、海に沿うて西上し、旗鼓を京都に押し建てたいと思つてゐる。それが出來れば余は死んでも殘念に思はない。先達て醫者が我が脈を見て、重病に罹るだらうと申した。余が今、關東を經略して途中で病氣でも起つたら、自分の志は成就することは出來ない。信長は、吾が輩が西上しないのに付け込んで、家康を以て我が西方面に當らせ置き、內々之を助けて居る。その計略は隨分惡むべきものだ。だから余は氏政と和睦して、西方、信長を始末しようと思ふのだ」と。十二月、遂に氏政の人質を受取り氏眞を逐はしめた。氏眞は走つて德川氏に倚つた。時に信長は、義昭と不仲であつた。義昭は書面で信玄・謙信に諭して、京都に來て、信長を圖らせようとした。

語釋 義昭（將軍足利義昭）

二年二月、信玄引兵東出、至遠江、攻高天神城。四月、入三河、陷八城。德川氏出援。覩甲斐陣嚴整、不可犯、不敢接戰。信長聞義昭招謙信・信玄、懼甚。乃益媚事信玄、以書謝曰「家康密邇貴國。恐有違失。僕當訓督之。幸勿見尤」信玄答曰「老夫不知也」德川氏發兩使、通好於謙信、載誓書、請夾擊信玄。村上義淸子國淸寓越後。力贊成之。三年四月、謙信將萬人出信濃、縱火長沼、以遙爲德川氏聲援。勝賴在伊奈、聞警、以兵八百赴拒。謙信曰「彼敢以寡兵當我。不愧信玄兒。吾成其勇也」引兵而還、入

越中ニ夷グ椎名・神保氏ヲ

【訓讀】二年二月、信玄、兵を引きて東に出で、遠江に至り、高天神城を攻む。四月、三河に入り、八城を陷る。德氏出で援く。甲斐の陣の嚴整にして犯すべからざるを觀、敢て接戰せず。信長、義昭の、謙信・信玄を招くと聞き、懼ろること甚し。乃ち益く信玄に媚事し、書を以て謝して曰く「家康貴國に率邇す。恐らくは遺失あらん。僕當に之を訓督すべし。幸に尤めらるゝ勿れ」と。信玄答へて曰く「老夫知らざるなり」と。德氏兩使を發し、好を謙信に通じ、誓書を載せ、信玄を夾み撃たんと請ふ。村上義清の子國清、越後に寓す。力めて之を贊成す。三年四月、謙信、萬人に將として信濃に出で、火を長沼に縱ち、以て遙に德川氏の聲援を爲す。勝賴、伊奈に在り、警を聞き、兵八百を以て赴き拒ぐ。謙信曰く「彼れ敢て寡兵を以て我に當る。信玄の兒に愧ぢず。吾れ其の勇を成さしめん」と。兵を引いて還り、越中に入り、椎名・神保氏を夷ぐ。

【通釋】二年二月、信玄は兵を率ゐて、東に出で、遠江に至り、高天神城を攻めた。四月、三河に入り、八ケ城を陷れた。德川氏は出でゝ援けた。甲州勢の陣形がいかにも嚴重で整つてゐて、到底攻め込むことの出來ないのを見て、接戰しようともしなかつた。信長は、義昭が謙信・信玄を招いてゐると聞いて非常に恐れた。そこで益ゝ信玄の機嫌を取り、書面を以て信玄に謝していふのに「家康は貴國に接近してゐます。恐らくは過失もありましたでせう。私がよくく教へ正してやりませう。何卒お咎めにならぬようお願ひ致します」と。信玄は返事をやつていふのに「拙者は德川のことなら一切知り申さぬ」と。德川氏は使者二名を出して、好を謙信に通じ、誓書を差し出し信玄を夾み討たうと願ひ出た。村上義清の子國清は越後に寄寓して居た。つとめて、之を贊成した。三年四月、謙信は一萬人の大將となつて信濃に出で、火を長沼につけ、はるかに德川氏の加勢をした。勝賴

は伊奈に居つて、非常の知らせを聞き、兵八百をつれて拒ぎに出かけた。謙信がいふのに「彼は敢て少い兵で以て我に當つて來た。さすがに信玄の子たるに愧ぢない。余は彼の勇名を成し遂げさせてやらう」と。兵を引いて還り、越中に入り、椎名・神保の二氏を攻め平げた。

〔語釋〕 載誓書（誓書を送る意。載書の載と異る。）〇伊奈（信濃）

十月、信玄計謙信阻雪不能出、則復出遠江、拔二股城。信長潛遣兵援德川氏。十二月、信玄進陣三形原、以薄濱松城、縱火城下、挑戰。城兵不出。信玄佯退。城兵大出。上原能登謂小山田昌行曰「德川氏之陣單。織田氏之旗動。可敗也」昌行以告信玄。信玄乃返旆。昌行與勝賴及山縣昌景・馬場信房、爲先鋒。昌行・昌景先合而卻。勝賴・信房承之、衝其麾下。信玄乃遣米倉丹後、自間道橫擊、大破之。諸將請遂攻濱松。高坂昌宣曰「不可。我攻之、二旬不拔、信長必大舉來援。相持數月、而謙信出信濃、則我不得不返救。信長則曰、我能卻武田氏矣。是損威名也」信玄乃退、次刑部。是役、獲織田氏將平手汎秀、送其首於信長、讓而絕之。信長猶分疏不已。

〔訓讀〕 十月、信玄、謙信の雪に阻てられ出づる能はざるを計り、則ち復遠江に出で、二股城を拔く。信長、潛

に兵を遣はし徳川氏を援く。十二月、信玄、進んで三形が原に陣し、以て濱松城に薄り、火を城下に縱ち戰を挑む。城兵出でず。信玄佯り退く。城兵、大に出づ。上原能登、小山田昌行に謂つて曰く「徳川氏の陣は單なり。織田氏の旗動く。敗るべきなり」と。昌行以て信玄に告ぐ。信玄乃ち旆を返す。昌行、勝賴及び山縣昌景・馬場信房と先鋒となる。昌行・昌景、先づ合して卻く。勝賴・信房、之を承け、其の麾下を衝く。信玄乃ち米倉丹後を遣はし、間道より横撃せしめ、大に之を破る。諸將、遂に濱松を攻めんと請ふ。高坂昌宣曰く「不可なり。我れ之を攻むること二旬にして拔けずば、信長必ず大擧して來り援けん。相持すること數月にして、謙信、信濃に出でば、則ち我れ返り救はざるを得じ。信長則ち曰はん、我れ能く武田氏を卻くと。是れ威名を損ずるなり」と。信玄乃ち退き、刑部に次す。是の役に、織田氏の將平手汎秀を獲、其の首を信長に送り、讓めて之を絕つ。信長猶ほ分疏して已まず。

通釋 十月、信玄は謙信が雪に邪魔されて出て來ることが出來ないことを計り知り、再び遠江に出で、二股城を陷れた。信長は内々兵を遣はして、徳川氏を助けた。十二月、信玄は、進んで三形原に陣し、濱松城に迫り城下に火をつけ戰を仕かけた。城兵は出て來なかつた。信玄はわざと退却した。すると城兵はドッと出て來た。上原能登は小山田昌行に向つていふのに「徳川氏の陣形は單陣で後詰がない。織田氏の旗は動いてゐて一致して居らぬ。破ることは造作ない」と。昌行はそのことを信玄に告げた。そこで信玄は大將の旗を引き返した。昌行は勝賴及び山縣昌景・馬場信房等と先鋒となつた。昌行・昌景は先づ最初に敵と討ち合つて、退却した。勝賴・信房はそのあとを承けついで敵の旗下を衝いた。そこで信玄は米倉丹後を遣はして拔け道から横に撃たせて、大に之を破つた。諸將猶ほ一氣に濱松を攻めようと願ひ出た。高坂昌宣がいふのに「可ない。我々が之を二十日間も

攻めてまだ拔けないとなると、信長は大兵を擧げて援けに來るに定まつてゐる。そして相持すること數ケ月にもなると、謙信が信濃に打つて出て自然我等は引き返して救はない譯に行かなくなる。すると信長は自分の力で、武田氏の軍を退けたといふだらう。これは我が武田氏の威名を損すること、なる」と。そこで信玄は退いて、刑部に止まつた。この戰爭で織田氏の大將平手汎秀を討ち取り、その首を信長に送つて信長を大に責めて（内々德川を助けてゐるから）之と絶交した。信長はそれでもまだ言ひ譯をして止まなかつた。

語釋 旗動（人心の動搖する結果動くのである。）○刑部（江遠）

天正元年正月、信玄拔野田城。疾作而歸。信長請將軍義昭、諭信玄弭兵。信玄辭之、訴信長五罪。二月、使秋山晴近誘降岩村城。城將妻、信長之姑也。晴近奪而納之。京畿將士多來送款者。三月、信玄疾愈、復發。曰「此行必入京師也」。部兵三萬出美濃。信長以萬人出拒。山縣昌景以八百騎馳之。信長不戰、而走、乞和益力。信玄不聽。轉入三河、次平谷。四月、疾復作。自度不起、召諸將處後事。使勝賴攝衆、以竢信勝長誠之曰「汝愼勿佳兵以亡我國。吾死天下獨有一謙信而已。汝請援以國託之。彼一受汝託、必不與鄰國合以侵汝也」。言畢惛迷。已而呼山縣昌景曰「明日、樹汝旗于瀨田。乃

卒ス。年五十三ナリ。

【訓讀】天正元年正月、信玄、野田城を拔く。疾作つて歸る。信長、將軍義昭に請ひ、信玄に諭して兵を弭めしむ。信玄、之を辭し、信長の五罪を訴ふ。二月、秋山晴近をして、岩村城を誘ひ降さしむ。城將の妻は、信長の姑なり。晴近奪ひて之を納る。京畿の將士、來り款を送る者多し。三月、信玄、疾愈え、復發す。曰く「此の行必ず京師に入らん」と。兵三萬を部し、美濃に出づ。信長、萬人を以て出で拒ぐ。山縣昌景八百騎を以て之に馳す。信長戰はずして走り、和を乞ふこと益力む。信玄聽さず。轉じて三河に入り、平谷に次す。四月、疾復作る。自ら起たざるを度り、諸將を召し後事を處す。勝賴をして、衆を攝し、以て信勝の長ずるを竢たしむ。之を誡めて曰く「汝愼んで、兵を佳くし以て我が國を亡す勿れ。吾れ死せば、天下獨り一の謙信あるのみ。汝援を請ひ國を以て之に託せよ。彼れ一たび汝の託を受けば、必ず隣國と合し以て汝を侵さじ」と。言畢り、惛迷す。已にして山縣昌景を呼んで曰く「明日、汝が旗を瀨田に樹てよ」と。乃ち卒す。年五十三なり

【通釋】天正元年正月、信玄は野田城を陷れた。併し病氣が起つて歸國した。信長は、將軍義昭に賴み、信玄に諭して、兵を止めるようにして貰つた。信玄は之を斷つて、信長の罪科五ケ條を訴へ出た。二月、秋山晴近をして岩村城を誘ひ降參させた。岩村城將の妻は信長の叔母であつた。晴近はそれを奪つて妻とした。京畿の將士も來つて好を信長に通ずる者が多かつた。三月、信玄は病氣が癒つて再び出て行つた。「今度の出陣では必ずともに京都に攻め込まう」といつた。兵三萬を手分けして、美濃に出かけた。信長は一萬人を引きつれ出で、之を拒いだ。山縣昌景は八百騎で以て信長に馳せ向つた。信長は戰はないで走り、益々熱心に和睦を願ひ出た。併し信玄は許さなかつた。信玄は轉じて三河に入り、平谷に止まつた。四月病氣再發した。自らもう駄目だと思つたの

で諸將を召し寄せて死後の事を處理した。勝賴をして部下の將士をとり治めさせ、繼嗣の信勝が生長するのを待たせることにした。信玄は勝賴を戒めていふのに「お前は愼んで戰爭を好んで、我が國を亡ぼしてはならぬぞ。余が死んだら、天下にはたゞ一人の謙信があるばかりだ。お前は彼の援けを請うて國のことを萬事賴めよ。彼れ謙信は一旦、其の方の依賴を受けたら、義理堅い男だから必ず隣國と一緖になつて、お前を侵す樣なことはしないだらう」と。さう云ひ畢つて昏睡狀態に陷つた。其の内に山縣昌景を呼んでいふのに「明日、お前の旗を瀨田に押し建てよ」と。かくて息絕えて歿した。年は五十三であつた。

語釋 野田（參河）○岩村（美濃）○攝衆（衆を取り締る。）○佳兵（老子に出づ。兵を弄すること。）

諸將以遺命祕喪、以信玄弟信綱貌肖信玄、輿載之歸。曰「信玄有疾歸國」以昏夜延見四方使者。信玄又豫具空頭花押數百紙、以備書問。以故無來犯者。信玄居常略涉書志。嘗以孫子語、書其旗、曰「不動如山、侵掠如火、其靜如林、其疾如風」馬場信房問曰「風雖疾哉、非倏起倏止者乎。」信玄曰「兵鋒貴疾耳。苟止矣、則吾以麾下繼之。」信房曰「君要第二合之勝也」其君臣講究武事、皆此類也。四鄰頗聞信玄死。北條氏政馳使、告之謙信。謙信方食。舍箸而歎曰「失吾好敵手矣。世復有此英雄男子乎」因潸然流涕者久之。

【訓讀】諸將遺命を以て喪を祕し、信玄の弟信綱の貌の信玄に肖たるを以て、輿に之を載せて歸る。曰く「信玄、疾あつて國に歸る」と。昏夜を以て、四方の使者を延見す。信玄、又豫め空頭花押數百紙を具へ、以て書問に備ふ。故を以て來り犯す者なし。信玄、居常、略書志に渉る。嘗て孫子の語を以て、其の旗に書して曰く「動かざること山の如く、侵掠すること火の如く、其の靜なること林の如く、其の疾きこと風の如し」と。馬場信房問うて曰く「風は疾しと雖も、倏ち起り倏ち止むものにあらずや」と。信玄曰く「兵鋒は疾きを貴ぶのみ。苟も止めば、則ち吾れ麾下を以て之に繼がん」と。信房曰く「君は第二合の勝を要するものなり」と。其の君臣、武事を講究する、皆此の類なり。四隣頗る信玄の死を聞く。北條氏政、使を馳せ、之を謙信に告ぐ。謙信、方に食す。箸を舍て歎じて曰く「吾が好敵手を失ふ。世に復此の英雄男子あらんや」と　因つて潸然として、流涕する者之を久しうす。

【通釋】諸將は遺言により喪をかくし、信玄の弟の信綱が信玄によく似て居るので乘物に載せて歸つた。そして「信玄は病氣で歸國される」といひ立てた。夕方に暗くなつてから四方の使者を延き入れて面會した。信玄は又書き入れの出來る樣に書判だけを書いて、前の方が空けてある紙數百枚を、前以て作つて置いて、書面用に準備してあつた。だから隣國の者も信玄の死んだことを知らず、來り犯すものもなかつた。信玄は平素大概書物に一通り目を通してゐた。以前、孫子の「動かざること山の如く、侵掠すること火の如く、其の靜なること林の如く、其の疾きこと風の如し」落着いて動かないことは山のやうで、敵國を侵し物を掠め取ることは其の勢、火のやうで、敵に乘ずることが出來ないで靜かにしてゐることは林のやうで、敵に乘ずべき機を見出したら早きこと風の如くする）といふ語を旗に書きつけたことがある。馬場信房が問うていふのに「風は成程早いものですが忽

ち起つて忽ち止むものではありませぬか」と。信玄がいふのに「兵法は早いことを貴ぶものである。苟も風が止むやうに味方の兵が忽ち進めなくなつたら、余は自ら旗下を率ゐて直に其の後を引きついで出るから差支はない」と。信房がいふのに「それでは君には第二度目の勝を求められる譯であります」と。その君臣が武事を攻究することは大抵こんな風であつた。信玄の死んだことを匿してゐたが、その內に四隣の國々に信玄の死んだことが可成り知れ渡つた。北條氏政は使を馳せて之を謙信に告げた。その時丁度謙信は食事をして居た。手に持つてゐた箸を捨てゝ歎息していふには「余が善い相手を失つて終つた。世に、この樣な英雄は又とあらうや」と。そういつて隨分長い間さめ〴〵と涙を流して居た。

語釋 孫子（軍爭篇）

甲斐宿將馬場信房・山縣昌景・內藤昌豐・高坂昌宣四人、交說勝頼、請和謙信。勝頼不聽。勝頼性剛愎自用。長坂調閑・跡部勝資、自信玄時、已被近幸。勝頼益寵之。勝頼欲出兵美濃。四將交言不可。調閑・勝資勸之出。會三河軍圍長篠。乃止。五月、勝頼遣信房援長篠。敵設伏而燔柴、爲燒營遁、以誘我。將士欲追之。信房曰「其烟白。非燒營也。」使騎往踐之。果有伏。乃退次黑瀨。城陷而歸。昌景向濱松。亦不利歸。二年二月、勝頼出美濃、陷諸砦。五月、攻陷高天神、歸、宴將士。昌宣・昌豐相謂曰「武田氏之滅、兆於

此宴」矣。昌宣說曰「君狃勝不戢。構怨四鄰、非長久計。宜返地二氏、與之連和、稍取東國、厚集其勢」二孽沮而止。已而二孽勸勝頼出遠江。濟天龍河、遇敵不戰而返。返至伊奈、信虎在焉。年已八十。乃欲載歸。視其狂暴如故、乃止。

訓讀 甲斐の宿將馬場信房・山縣昌景・内藤昌豐・高坂昌宣の四人、交勝頼に說き、和を謙信に請はしむ。勝頼聽かず。勝頼、性剛愎にして自ら用ふ。長坂調閑・跡部勝資・信玄の時より、已に近幸せられ、勝頼、益之を寵す。勝頼兵を美濃に出さんと欲す。四將交不可を云ふ。調閑・勝資之に出だすを勸む。會々三河の軍、長篠を圍み乃ち止む。五月、勝頼、信房を遣はし長篠を援けしむ。敵、伏を設け柴を燔き、營を燒き遁るゝ爲して以て我を誘ふ。將士之を追はんと欲す。信房曰く「其の煙白し。營を燒くに非ざるなり」と。騎をして之を踐ましむ。果して伏あり。乃ち退き黑瀨に次す。城陷つて歸る。昌景、濱松に向ふ。亦利あらずして歸る。二年二月、勝頼、美濃に出で、諸砦を陷る。五月、攻めて高天神を陷れ、歸り、將士を宴す。昌宣・昌豐、相謂つて曰く「武田氏の滅ぶる此の宴に兆す」と。昌宣說いて曰く「君、勝に狃れ戢めず。怨を四隣に構ふは、長久の計に非ず。宜しく地を二氏に返して、之と連和し、稍く東國を取り、厚く其の勢を集むべし」と。二孽、沮んで止む。已にして二孽、勝頼に勸めて遠江に出でしむ。天龍河を濟り、敵に遇ひ戰はずして返る。返つて伊奈に至れば、信虎在り。年已に八十。乃ち載せ歸らんと欲す。其の狂暴、故の如きを視て、乃ち止む。

通釋 甲州の古い大將、馬場信房・山縣昌景・内藤昌豐・高坂昌宣の四人はかはる〳〵勝頼に向つて、和を謙信に申し込むやうに說き勸めた。勝頼は聞き入れなかつた。勝頼は性來强情で人のいふことは用ひぬ男であつた。

長坂調閑・跡部勝資は信玄在世の時以來勝頼に近づき、寵愛せられて居たが、勝頼は自分の代になつて益々之を寵愛した。勝頼は美濃に兵を出さうとした。前記の四將はかはるがはるその不可なることを申立てた。然るに調閑・勝資は之に出兵を勸說した。丁度その時三河の德川氏の軍が長篠を圍んだので、出兵することは取り止めた。五月、勝頼は信房を遣はして、長篠を援けさせた、敵は伏兵を設けて置いて柴を燒き、如何にも陣屋を燒いて逃げるがやうな眞似をして我が軍をおびき出さうとした。我が將士は之を追はうとした。信房がいふのに「煙の色が白い。あれは陣屋を燒いたのではない」と。騎兵をやつて往つて踏査せしめて見た。案の定、伏兵が設けてあつた。そこで退いて黑瀨に止まつた。長篠城が陷つてから國に歸つた。昌景は濱松に向つた。これも負けて歸國した。二年二月、勝頼は自身美濃に出で、諸々の砦を陷れた。五月、高天神を攻め落し、歸つて來て將士を振まつた。昌宣、昌豐が互に謂つていふのに「武田氏の滅亡は、この宴會に兆してゐる」と。昌宣は勝頼に說いていふのに「貴公は勝に增長して戰爭をお止めになりません。そんな事をして怨を四隣の諸國に結ぶことは決して國家長久の計ではありません。取つた土地を織田・德川の二氏に還付し、之と和睦をし、段々と關東方面の土地を取つて、兵力を分割せず、厚く一所に集める樣になすつたら宜いでせう」と。調閑・勝資の二嬖が邪魔したので其の儀に及ばなかつた。其の內に二嬖は勝頼に勸めて遠江に兵を出させた。天龍河を渡り、敵に遇つたが、戰はないで返つて來た。歸途、伊奈まで來ると信虎がまだ生存してゐた。年はもう八十にもなつてゐた。そこで輿に載せてつれ歸らうと思つた。併しその亂暴なことは以前のやうであつたので止めにした。

〔語釋〕長篠（參河）○黑瀨（遠江）

四鄰觀甲斐兵數不競、知信玄定死、稍窺之。自信玄之死也、信長專意於謙信、卑辭厚禮、事之猶事信玄。以其妹嫁神保長純。長純、上杉義春之兄屬謙信者。信長因陽結謙信、而陰圖之也。又陰以計招上杉氏諸城、歸款於己。謙信書詰其反覆。信長答書陳疏。謙信不聽。會畠山義隆將游佐彈正等、毒弑義隆、以七尾城降信長。七月、謙信將兵三萬西伐、攻長純木船城、拔之、遂入加賀、屠金澤、移兵攻七尾、以義春爲將、努力復取能登。游佐等乞援信長。信長方攻長島、不能來。九月、城陷、誅游佐等。乃休兵二日、屬十三夕。月色明朗。謙信置酒軍中、會諸將士。酒酣、自作詩曰「霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山幷得能州景。遮莫家鄉憶遠征」令將士善歌詩者皆和之。遂爲政國中而歸。信長遣大兵來援、聞城陷引去。信長猶使使謝罪於謙信。

訓讀 四隣、甲斐の兵、數競はざるを觀、信玄定めて死するを知り、稍く之を窺ふ。信玄の死せしより、信長意を謙信に專にし、辭を卑くし禮を厚くして、之に事ふること、猶ほ信玄に事ふるがごとし。其の妹を以て神保長純に嫁す。長純は上杉義春の兄にして、謙信に屬する者なり。信長因つて陽に謙信に結びて、陰に之を圖る。又陰に計を以て上杉氏の諸城を招き、款を己に歸せしむ。謙信、書して其の反覆を詰む。信長、答書して陳疏す。

謙信、聽かず。會畠山義隆の將游佐彈正等、義隆を毒弑して、七尾城を以て信長に降る。七月、謙信、兵三萬に將として西伐し、長純を木船城に攻め、之を拔き、遂に加賀に入り、金澤を屠り、兵を移し七尾を攻め、義春を以て將となし、努力して復能登を取る。游佐等援を信長に乞ふ。信長、方に長島を攻め、來ること能はず。九月城陷り、游佐等を誅す。乃ち兵を休むこと二旬、十三夕に屬す。月色明朗なり。謙信、軍中に置酒し、諸將士を會す。酒酣にして、自ら詩を作つて曰く「霜は軍營に滿ちて秋氣清し。數行の過雁月三更。越山幷せ得たり能州の景。遮莫家鄉遠征を憶ふを」と。將士の歌詩を善くするものをして、皆之に和せしむ。遂に政を國中に爲して歸る。信長、大兵を遣はして來り援けしむ。城陷ると聞き引き去る。信長、猶ほ使をして罪を謙信に謝せしむ。

【通釋】四方の隣國は甲斐の軍勢が度々香ばしくない成績であるのを見て、信玄は必定死んだものだと知り、段々と甲斐を伺ふようになつて來た。信玄が死んでからは信長は專心謙信に對し言葉を丁寧にし、禮を厚くして、之に事へた。それは丁度前に信玄に事へたやうにした。信長は自分の妹を神保長純に嫁入らせた。長純は上杉義春の兄で、謙信に屬いて居たものである。そこで信長は表面は謙信に結びつき、內々は之を亡さうと圖つた。又こつそり計略を以て、上杉氏の諸城を招いて自分に味方をさせた。謙信は之を知り、書面で信長の表裏のあることを嚴しく責めた。信長は返事を出して色々申譯をした。併し、謙信は聞き入れなかつた。丁度其の時、畠山義隆の大將游佐彈正等は義隆を毒殺し、七尾城を率ゐて信長に降參して來た。七月、謙信は兵三萬に將となり、西に向つて征伐し、長純を木船城に攻めて之を陷れ、猶ほ進んで加賀に入り込み、金澤を屠り、兵を轉換して七尾を攻め、義春を大將となし努力して、再び能登を取つた。游佐等は援助を信長に乞うた。信長は丁度其の時

長島を攻めてゐたので、來ることが出來なかつた。九月、城は陷つて、游佐等を誅した。そこで、兵を休めることと二旬、時は九月十三夜であつた。月色が明かに照つてゐた。謙信は陣中に酒宴を開き諸將士を會合した。酒の最中に自ら詩を作つていふには「霜は軍營に滿ちて秋氣清し。數行の過雁月三更。越山幷せ得たり能州の景。遮莫れ家鄉の遠征を憶ふを」と。（一帶の陣營は、夜來下りた霜で到る所白く、秋の凉氣は粲々と身に迫つて來る。その時である、空高く數列の雁が眞夜中の明月の前を飛んで過ぎたのは。あゝ、今は秋である。そして余は今や越後の山々を越えて、この景色のよい能登を全部取つて終つた。故鄕では我々の遠征の苦を、隨分と心配して吳れてゐることだらうが、そんなことはどうでも宜い。我々はこの戰勝の氣分を味つてゐれば宜いのだ。」と　將士で歌や詩の上手なものをして、皆この詩に和せしめた。遂に能登國中に政治を施して歸國した。信長は大兵を派遣して來り援けた。七尾城が陷つたことを聞いて引き返し去つた。それでもまだ信長は使者を遣はして謙信に謝罪せしめた。

語釋　不レ競（他國と力の釣り合はぬこと。）〇七尾（能登）〇木船（越中）

是歲、信長招二降參河將奧平信昌一、令レ守二長篠一、以備二甲斐一。三年四月、參河計吏大賀某、陰送二款甲斐一、約爲二內應一。勝賴往陣二楡城一。聞二大賀謀覺被一レ誅、乃還。五月、勝賴以二萬人一附二昌宣一、留拒二越後一、自以二一萬五千一圍二長篠一、軍二道虛寺一。令三叔父信實守二鳶巢壘一。德川氏乞二援於信長一。信長不二敢出一。使者三反、不レ許。使者請曰「不レ援、則納二遠江於武田氏一、爲二之

先驅、以取尾張。且信玄已死。公何怖之甚也。信長乃自將來援。兵凡七萬。猶憚甲斐騎兵衝突、植柵三層、守以萬銃。勝頼欲戰。信房・昌景・昌豐等、皆諫曰「敵衆新來、其氣鋭。不若且避之。不則疾攻城。雖損我兵、猶可拔而歸也」二嬖曰「一戰夷兩敵、在於今日。勿聽老怯計。」信房曰「今日之戰、老怯者必死。若公等乃遁走耳。」

【訓讀】 是の歳、信長、參河の將奧平信昌を招き降し、長篠を守らしめ、以て甲斐に備ふ。三年四月、參河の計吏、大賀某、陰に款を甲斐に送り、約して内應を爲す。勝頼往いて楡城に陣す。大賀、謀覺れ誅せらると聞き、乃ち還る。五月、勝頼、萬人を以て昌宜に附し、留りて越後を拒がしめ、自ら一萬五千を以て長篠を圍み、道虛寺に軍す。叔父信實をして、鳶巢の壘を守らしむ。德川氏、援を信長に乞ふ。信長敢て出でず。使者三反すれども、許さず。使者請うて曰く「援けずば則ち遠江を武田氏に納れ、之が先驅と爲り以て尾張を取らん。且つ信玄已に死せり。公、何ぞ怖るるの甚しき」と。信長乃ち自ら將として來り援く。兵凡そ七萬。猶ほ甲斐の騎兵の衝突するを憚り、柵を植つること三層、守るに萬銃を以てす。勝頼戰はんと欲す。信房・昌景・昌豐等、皆諫めて曰く「敵衆、新に來り、其の氣、鋭なり。且く之を避くるに若かず。不らずんば則ち疾く城を攻めよ。我が兵を損ずと雖も、猶ほ拔いて歸るべきなり」と。二嬖曰く「一戰して兩敵を夷ぐるは、今日に在り。老怯の計を聽く勿れ」と。信房曰く「今日の戰、老怯の者は必ず死せん。公等の若きは、乃ち、遁走せんのみ」と。

【通釋】 この年、信長は參河の德川氏の將奧平信昌を招き降して、長篠を守らしめ、甲斐の武田氏に備へた。三

年四月、徳川氏の勘定奉行大賀某は内々甲斐に味方して裏切することを約束した。勝頼は楡城に出陣した。大賀の陰謀露顯して殺されたと聞いたので引き返した。五月、勝頼は一萬人を昌宣に與へて留つて上杉氏を拒がしめ、自分は一萬五千をつれて長篠を圍み、道盧寺に陣取つた。叔父の信實をして、鳶巣の壘を守らしめた。徳川氏は援助を信長に乞うた。信長は出陣しようともしなかつた。徳川氏の使者は三囘も往復したが許さなかつた。使者は頼んでいふのに「もし援けて下さらないならば、遠江を武田氏に與へ、降參して武田氏の先鋒となつて尾張を攻め取りませう。それに信玄はもう死んで終つてゐます。公はなぜそんなに怖れて居られますか」と。そこで信長は自ら大將となつて援けに行つた。その兵は凡そ七萬騎であつた。それでもまだ甲斐の騎兵の突き當るのを嫌つて柵を三重に立てまはし、之を守るのに一萬挺の鐵砲を以てした。勝頼は戰はうと思つた。信房・昌景・昌豐等が皆諫めていふのに「敵の軍勢は新に來たばかりで、その氣鋒は實に鋭いものです。それに當るよりか暫時之を避けた方が宜しいでせう。若しそれが出來ませぬなら急に城を攻めなさい。我が兵を損つても城を陥れて歸國することが出來るだけましです」と。調閑・勝資の二嬖がいふのに「一度の戰で、織田・徳川の兩敵を平定するのは今日に在ります。そんなおいぼれ卑怯な計畫をお聞き入れになつてはなりませぬ」と。信房がいふのに「今日の戰爭には、そのおいぼれ卑怯な者が必ず討死するだらう。併し貴公等の如き者は老怯でないから逃げ出すことだらう」と。

【語釋】楡城(河參)

勝頼遂留室賀行俊・小山田昌行圍城、而自進濟河陣。旦日、敵間道襲鳶巣。信實敗

死。我陣顧而動。敵衆挑戰。昌景爲左先鋒、進犯敵柵、中丸死。信房爲右先鋒、與眞田則幸・土屋直村、破柵而進。則幸・直村亦中丸死。室賀行俊來請曰「圍可解否。」勝頼曰「可。」言未畢、諸軍大潰。信房使人馳白勝頼曰「君速去。臣請留死之。」與八十騎止戰、盡亡其騎。自登高邱、顧視勝頼已遠矣、乃號於敵曰「我馬場美濃也。宜斬以受重賞。」敵叢刺之死。二孽先遁。昌宣豫慮軍敗也、以兵八千迎於境上以歸。因大諫、請與北條氏婚、以拒二氏。勝頼從之。

訓讀　勝頼遂に室賀行俊、小山田昌行を留めて城を圍ましめ、自ら進んで河を濟つて陣す。旦日、敵、間道より鳶巣を襲ふ。信實敗死す。我が陣、顧みて動く。敵衆、戰を挑む。昌景は左の先鋒となり、進んで敵の柵を犯し丸に中つて死す。信房は右の先鋒となり、眞田則幸・土屋直村と柵を破つて進む。則幸、直村も亦、丸に中つて死す。室賀行俊來り請うて曰く「圍解くべきや否や」と。勝頼曰く「可なり」と。言未だ畢らざるに、諸軍大に潰ゆ。信房、人をして馳せて勝頼に白さしめて曰く「君、速に去れ。臣請ふ、留りて之に死せん」と。八十騎と止り戰ひ、盡く其の騎を亡ふ。自ら高邱に登り、顧みて、勝頼已に遠きを視、乃ち敵に號して曰く「我は馬場美濃なり。宜しく斬りて以て重賞を受くべし」と。敵之を叢刺して、死す。二孽先づ遁る。昌宣豫め軍の敗るゝを慮るや、兵八千を以て境上に迎へ以て歸る。因つて大に諫め、北條氏と婚し、以て二氏を拒がんと

請ふ。勝頼之に從ふ。

通釋　勝頼は遂に室賀俊行、小山田昌行を留めて長篠城を圍ましめ、そして自分は進んで豊川を渡つて陣取つた。翌日、敵は拔け道から、鳶巣を襲撃した。信實は敗けて死んだ。我が軍は之を顧みて驚いて動搖した。敵軍は戰をしかけて來た。昌景は左の先鋒となり、進んで敵の柵を攻め、彈丸に中つて討死した。信房は右の先鋒となり、眞田則幸・土屋直村と柵を破つて進んだ。則幸・直村も亦彈丸に中つて討死した。室賀行俊は來つて請うていふのに「城の圍を解いても宜いでせうか、如何ですか」と。勝頼は「宜しい」といつた。その言葉が未だ畢らぬ内に味方の諸軍は大に潰えた。信房は人をして、馳せて勝頼に曰はせていふのに「貴公は速く御立退なさい。私は留つて討死致します」と。八十騎と留り戰ひ全部其の騎を失つて終つた。自ら高い岡に登つて顧みて勝頼がもう大分遠方まで去つたのを見て、そこで敵に向つて怒號していふには「我は馬場美濃である。この首を斬つて、重い褒美を貰つたら宜からう」と。敵は大勢で寄つてたかつて突き刺したので死んで終つた。調閑・勝資の二嬖は眞先きに逃げ出した。高坂昌宣は前々から味方の敗れるのを心配して兵八千をつれて、國境近傍に出てゐたから、勝頼を出迎へ連れて歸つた。そこで昌宣は大に諫め、北條氏と結婚し、織田・德川の二氏を拒ぐようにしませうと願つた。勝頼は之に從つた。

語釋　婚二北條氏一（氏政の妹を娶ることをいふ）

信長既ニ大ニ捷チ、謂ヘラク、甲斐ハ不レ足レ患フルニ。所レ患フル獨リ謙信ノミ。乃チ大ニ城キ二安土ニ一、移ツテレ焉ニ以テ備フ二北道ニ一。柴田勝家爲リ二其ノ最驍將一。因ツテ守リ二越前ヲ一、居ル二北莊ニ一。八月、謙信將ヰテレ兵ヲ入リ二加賀ニ一、攻ム二松任城ヲ一。城將蕪木高秀、乞フレ援ヲ

於信長。信長將五萬人來陣御幸塚。勝家爲先鋒。謙信疾攻拔城、斬高秀、齎其首、贈信長曰「頃攻木城。相公遠來見援。幸甚。然城將已授首。謹此奉贈。公當有一戰以弔之。明早將相見。」信長許諾、而乘夜退軍、設八伏以竢。諸將請追擊。謙信曰「信長豈徒歸者。」亦引還。

訓讀 信長既に大に捷ち、謂へらく、甲斐は患ふるに足らず。患ふる所は獨り謙信のみと。乃ち大に安土に城き、移つて以て北道に備ふ。柴田勝家其の最驍將たり。因つて越前を守り、北莊に居らしむ。八月、謙信、兵に將として加賀に入り、松任城を攻む。城將蕪木高秀、援を信長に乞ふ。信長、五萬人に將として、來り御幸塚に陣す。勝家先鋒たり。謙信疾く攻めて城を拔き、高秀を斬り、其の首を齎し、信長に贈つて曰く「頃、木城を攻む。相公、遠く來り援けらる。幸甚し。然れども城將已に首を授く。謹んで此に奉贈す。公、當に一戰し以て之を弔ふ有るべし。明早、將に相見んとす」と。信長、許諾し、夜に乘じて軍を退け、八伏を設け以て竢つ。諸將追擊せんと請ふ。謙信曰く「信長豈に徒に歸るものならんや」と。亦引き還る。

通釋 信長既に大に武田氏に捷つたので、武田はもう心配する程のものでない、たゞ問題にすべきは謙信だけだと思つた。そこで大に安土に城を築いて移り、以て北陸道方面に備へた。柴田勝家は信長の第一の勇將であつた。そこで越前を守らせ、北莊に居らしめた。八月謙信は兵に將として、加賀に入り、松任城を攻めた。城主の蕪木高秀は援助を信長に乞うた。信長は五萬人に大將となつて、來つて御幸塚に陣取つた。勝家がその先鋒とな

つてゐた。謙信は急に攻めて、城を陷れ、高秀を斬り、其の首を持つて信長に贈らせていふには「此の頃此の城を攻めた。内大臣殿には遠方から態々援けに來られた。まことに有り難き仕合せで御座る。併し城將はもうこの通り首を差し出した。謹んで之を贈呈いたす。何卒貴公も一合戰して之を弔ひなされて然るべきだ。明日、朝早く御目にかゝりませうぞ」と。信長は承諾し、夜に乘じて軍を卻けた。そして伏兵を八個所に設けて謙信の追かけて來るのを待つた。上杉氏の諸將は之を追擊しようと申し出た。謙信がいふのに「信長はどうして、たゞで歸る奴だらうか。追つかけたらそれこそ事だ」と。謙信も亦兵をつれて還つた。

語釋 御幸塚（加賀）〇相公（信長、時に内大臣であつた）

是歲、勝賴使使請和謙信。欲報織田氏。謙信許之、徵其質子。不肯。會德川氏攻二股。城將依田幸成固守、不下。乃攻陷諏訪原、遂攻小山。勝賴曰「彼謂我不能復出乎」。乃募兵二萬援之。敵解圍去。十二月、幸成死。德川氏復來攻。幸成子信蕃拒之。勝賴命棄城退。岩村又陷。信長手刃其姑。是月、勝賴迎北條氏女成婚。昌宣退謂人曰「今夕吾始得高枕矣」。四年春、勝賴出兵遠江、與德川氏相持橫須賀。勝賴欲戰。昌宣諫曰「長篠之役、多失老將、獨有臣存。今又欲殺之乎」。勝賴乃退、城相良而歸。越後將士說謙信曰「甲斐兵新敗。可乘也」。謙信曰「我與信玄數十戰、不能取。及其死、侮弱子、乘

敗、取レ之、何以對二天下一。

【訓讀】是の歲、勝賴、使をして、和を謙信に請はしめ、織田氏に報ぜんと欲す。謙信、之を許し、其の質子を徵す。肯ぜず。會徳川氏、二股を攻む。城將依田幸成、固く守つて下らず。乃ち諏訪原を攻陷し、遂に小山を攻む。勝賴曰く「彼は我を復出づる能はずと謂ふか」と。乃ち兵二萬を募り、之を援く。敵圍を解いて去る。十二月、幸成、死す。徳川氏、復來り攻む。幸成の子信蕃、之を拒ぐ。勝賴、命じ城を棄てゝ退かしむ。岩村又陷る。信長手づから其の姑を刃す。是の月、勝賴、北條氏の女を迎へ婚を成す。昌宣、退いて人に謂つて曰く「今夕、吾れ始めて枕を高くするを得たり」と。四年春、勝賴、兵を遠江に出だし、徳川氏と横須賀に相持す。勝賴、戰はんと欲す。昌宣諫めて曰く「長篠の役に、多く老將を失ひ、獨り臣の存する有るのみ。今又之を殺さんと欲するか」と。勝賴乃ち、退き、相良に城いて歸る。越後の將士、謙信に說いて曰く「甲斐の兵、新に敗る。乘ずべきなり」と。謙信曰く「我れ信玄と數十戰し、取る能はず。其の死せるに及び、弱子を侮り、敗に乘じ之を取らば何を以て天下に對せん」と。

【通釋】この年、勝賴は使者を立てて和睦を謙信に請はしめ織田氏に返報しようと思つた。謙信は之を許し、人質を差し出させた。併し勝賴は承知しなかつた。丁度其の時、徳川氏は二股城を攻めてゐた。城將依田幸成は固く守つて下らなかつた。故に徳川氏は諏訪原を攻め、それから小山を攻めた。勝賴がいふのに「彼れ徳川は我等が再び打つて出ることが出來ぬと思つて居るのだらうか」と。そこで、兵二萬を募つて、小山を援けた。敵は圍を解いて立ち去つた。十二月、幸成は死んだ。徳川氏はまた攻めて來た。幸成の子の信蕃が之を拒いだ。勝賴は命じて城を棄てゝ退かしめた。その時岩村城も陷落した。信長は手づから其の叔母を殺した。この月、勝賴は北

條氏の娘を迎へて婚を取り結んだ。昌宣は退いて人に謂つていふのに「今夜こそ拙者は始めて安心して眠られる」と。四年春、勝頼、遠江に兵を出し、德川氏と横須賀で對陣した。勝頼は戰はうと思つた。併し昌宣が諫めていふのに「長篠の戰爭で多くの古い大將を討死させ、たゞ私が生き殘つて居るばかりであります。今又その私をも殺すお考へですか」と。そこで勝頼は退却し、相良に城を築いて歸國した。越後の將士が謙信に說いていふには「甲斐の兵はこんど敗けたばつかりです。（長篠の敗）今がつけ込み時です」と。謙信はいふのに「余は以前、信玄と數十度も戰つたが其の國を取ることが出來なかつた。其の信玄の死に乘じて小倅を侮り、その敗けたのに付け込んで、之を取つたら天下に顏向けがならぬ」と。

【語釋】二股・諏訪原・小山（遠江）○乃其姑（秋山晴近の奪つた者。）○北條氏女（氏政の女）○横須賀（遠江）

三月、謙信入越中、取蓮沼、獲椎名泰種殺之、令別將入飛驒夷江馬氏。遂自入加賀、攻小松。織田氏將前田利家等來援。以先鋒擊破之。使川田長親守越中、柿崎景家守能登而還。信長患謙信西向、日夜謀所以禦之。柿崎景家遣人市馬上國。信長喜曰「可以間也」。乃給直十倍、自書謝。更索佳鷹。景家貪其直、數給鷹。後有告終被殺。信長陰招能登人長重連・加賀人松任彥紹、誘一向賊北向。五年、重連聚兵據穴水城。小松・安宅・大道山諸城、竝起應之。當是時、筒井順慶・松永久秀等、據大和、

遂送款謙信、請其西上、又西約毛利氏、東西夾攻信長。

【訓讀】三月、謙信、越中に入り、蓮沼を取り、椎名泰種を獲て、之を殺し、別將をして飛驒に入り、江馬氏を夷げしむ。遂に自ら加賀に入り小松を攻む。織田氏の將前田利家等來り援く。先鋒を以て之を擊ち破る。川田長親をして越中を守り、柿崎景家をして能登を守らしめて還る。信長、謙信の西向するを患へ、日夜、之を禦ぐ所以を謀る。柿崎景家、人をして馬を上國に市らしむ。信長喜んで曰く「以て間すべきなり」と。乃ち直十倍を給し、自ら書して謝す。更に佳鷹を索む。景家、其の直を貪り數鷹を給す。後其の款を通ずと告ぐるものあり。終に殺さる。信長、陰に能登の人長重連・加賀の人松任彦紹を招き、一向賊を誘ひ北向せしむ。五年、重連、兵を聚め、穴水城に據る。小松・安宅・大道山の諸城、並び起り之に應ず。是の時に當り、筒井順慶・松永久秀等大和に據り、遙に款を謙信に送り、其の西上を請ひ、又西、毛利氏に約し、東西より信長を夾み攻めんとす。

【通釋】三月。謙信は越中に入り、蓮沼を取り、椎名泰種を擒にし、之を殺し、別將を飛驒に入らせて江馬氏を平定せしめた。それから自分は加賀に入り、小松を攻めた。織田氏の將前田利家等が援けに來た。先鋒で以て之を擊ち破つた。川田長親に越中を守らせ、柿崎景家に能登を守らしめて還つた。信長は、謙信が西に向つて出るのを心配し、日夜謙信を禦ぐ手だてを考へて居た。すると柿崎景家、人を遣はして、馬を上方に賣らせた。信長は喜んでいふのに「これは君臣の間を離間することが出來るよい機會だ」と。そこで馬の値段の十倍の金をわたし、自分でよい馬を得た禮狀を遣つた。更に善い鷹はないかと索めた。景家その價を貪つて、度々鷹を送つて來た。その後、景家が織田氏に內通したと告げるものがあつた。景家は終に殺されて終つた。信長は內々能登の人長重連、加賀の人松任彦紹を招き、一向宗の賊を引き入れて、北越後に向はせた。五年、重連は兵を聚めて穴水

城に立て籠つた。小松・安宅・大道山の諸城も並に起つて、之に味方した。この當時、筒井順慶・松永久秀等は大和に立て籠り、遠く謙信に內通し、謙信の京都に上らんことを願ひ出で、又西の方毛利氏と約束して、東西から信長を夾み討にしようとした。

九月、謙信自將攻穴水、拔之、斬重連、遂攻小松・安宅。信長遣柴田勝家・前田利家等五將、將兵四萬八千來援。而己亦潛來助之。謙信攻拔三城、進至石動橋、距織田氏軍十里而陣、使使約明曉會戰。信長復乘夜而逃。謙信大笑曰「信長巧於走者也。使其猶在、當盡踢墜之水耳。」遂進攻金澤、陷之、入越前、行攻織田氏壘塞、盡驅其守兵、焚掠而進。烟塵蔽天。信長退保北莊、遂退入長濱。

【訓讀】九月、謙信自ら將として、穴水を攻め、之を拔き、重連を斬り、遂に小松・安宅を攻む。信長、柴田勝家・前田利家等の五將を遣はし、兵四萬八千に將として來り援けしむ。而して己も亦、潛に來り之を助く。謙信攻めて三城を拔き、進み石動橋に至り、織田氏の軍を距ること十里にして陣し、使をして明曉の會戰を約せしむ。信長、復夜に乘じて逃る。謙信、大に笑つて曰く「信長は走るに巧なるものなり。其れをして猶ほ在らしめば、當に盡く之を水に踢墜すべきのみ」と。遂に進み金澤を攻め、之を陷れ、越前に入り、行くゆく織田氏の壘塞を攻め、盡く其の守兵を驅り、焚掠して進む。烟塵、天を蔽ふ。信長、退き北莊を保ち、遂に退いて長濱に入る。

通釋 九月、謙信は、自ら大將となつて、穴水を攻めて之を陷れ、重連を斬り、それから進んで、小松・安宅を攻めた。信長は柴田勝家・前田利家等の五人の大將を遣はし、兵四萬八千を率ゐて援けに行かせた。そして自分もこつそり來て之を助けた。謙信は、小松・安宅・大道山の三城を陷れ、進んで石動橋に至り織田氏の軍勢を去ること十里の所に陣取り、使をやつて明早朝の會戰を約束させた。信長は又夜に乘じて逃げた。謙信は大に笑つていふのに「信長は逃げるのに巧者な奴だ。まだ彼が留つて居るなら皆之を水の中へ蹴落してやるだけさ」と。遂に進んで金澤を攻め、之を陷れ、越前に入り、途中、織田氏の壘を攻め、全部其の守つてゐる兵士を追ひやり、放火掠奪し乍ら進んだ。烟や塵が天を蔽ふばかりであつた。信長は退いて北荘を持ち固め、遂に退いて長濱に入つた。

語釋 穴水（能登）○小松・安宅・大道山（加賀）○長濱（近江）

謙信以天寒雪下、又聞久秀等已敗死、欲班軍。乃遺書信長曰「信玄既死。公則委四郎於家康、而自居安土、蓋備謙信也。公數與畿內敵樂戰、未觀北人技倆耳。請期明春三月十五日、聊擧八州之卒西上、與公相見。公勿視謙信同皮履都人士。」時京師人喜穿皮履。故云。使使齎書因贈越後布二千端。信長延見使者、言曰「爲吾返報越後公。信長何敢與公角。公來、將盡脫刀劍、獨插扇於腰、單騎迎謁、先導以入都。」

公義人也。信長所辛苦經營、必不見奪也。使者復命。謙信哂曰「信長姦雄。甘言以怠我耳。聞長篠之役、渠以柵與銃困甲斐四郎。明年、復必以此擬我。我豈墮其計哉」

【訓讀】謙信、天寒く雪下るを以て、又久秀等已に敗死すと聞き、軍を班さんと欲す。乃ち書を信長に遣りて曰く「信玄既に死す。公則ち四郎を家康に委ねて、自ら安土に居るは、蓋し謙信に備ふるならん。公數畿内の敵と樂戰し、未だ北人の技倆を觀ざるのみ。請ふ、明春三月十五日を期し、聊か八州の卒を擧げ西上し、公と相見ん。公、謙信を視ること、皮履の都人士と同じくする勿れ」と。時に京師の人、喜んで皮履を穿く。故に云ふ。使をして書を齎し、因つて越後布二千端を贈らしむ。信長、使者を延見し言つて曰く「吾が爲めに返り越後公に報ぜよ。信長何ぞ敢て公と角せんや。公來らば、將に盡く刀劍を脫し、獨扇を腰に挿み、單騎迎謁し、先導して以て都に入らんとす。公は義人なり。信長の辛苦して經營する所、必ず奪はれじ」と。使者復命す。謙信哂つて曰く「信長は姦雄なり。甘言以て我を怠らすのみ。聞く、長篠の役に、渠、柵と銃とを以て、甲斐の四郎を困しむと。明年、復必ず此を以て我に擬せん。我れ豈に其の計に墮ちんや」と。

【通釋】謙信は、時候が寒くなつて、雪が降り出して來たし、又松永久秀等も、もう敗れ死んだと聞いたので、軍勢を引き返さうと思つた。そこで書面を信長に送つていふには「信玄は既に死んだ。貴公は勝賴の方面を家康に引き受けさせて置き、而して御自分は安土に居らるゝが、それは思ふに余に備へられる爲めで御座らう。貴公は度々五畿内の敵と氣樂な戰爭をしてゐらるゝから、北國人の手並はまだ觀ないのである。請ふ明年春三月十五日を限り、いさゝか領分八個國の兵士をつれて西へ上り、貴公と御面會仕らう。貴公は余を皮足袋をはく柔弱

な都人と同一視されては困る」と。當時京都の人は好んで皮足袋をはいたので、そのやうにいつたのである。そこで、使者をしてこの手紙を持たせ、それを機會に越後布二千端を贈らせた。信長は使者を引き入れ、會つていふには「吾が爲めに越後公に申し上げて吳れ。拙者はどうして、貴公と爭ふことを致しませうや。貴公が來られるならば皆刀劍を脫してたゞ扇子を腰に挿し、一騎でお迎へしてお目にかゝり、道案內して京都に入ることに致しませう。一體貴公は義の固い御方であります。だからこれまで私が苦辛して取つて治めてゐる所はきつと奪ひ取られる樣な氣遣ひはありません」と。使者は還つて、其の由を報告した。謙信はあざ笑つていふには「信長は性質の惡い英雄だ。巧いことをぬかして我を怠らせよう算段だ。聞く所によると長篠の戰爭で信長は柵と鐵砲とで甲斐の勝賴を苦しめたといふことだ。明年はまた屹度この方法で我に向ふであらう。我はどうして、その計略に陷つて堪らうか」と。

語釋　四郎（勝賴）　○八州（越後・越中・加賀・能登・飛驒・信濃・上野・佐渡）　○端（禮記の疏には丈八尺が端とある。日本では二丈八尺を端とす。）

十月、歸越後、間日傳檄、大發管內八國兵、期以三月五日。加賀以西兵、沿道附從。京畿大震。信長使使告之勝賴、請捐前故修舊好。曰「謙信西上、我與家康拒之北道。願公直指越後。事克、則其地唯公所取。」勝賴不答。六年三月、北陸諸國兵、應檄雲集。謙信自臨簡閱、申約束、將發。先發二日、疾作、二日遂卒。年四十九。卒後信玄五年矣。

訓讀 十月、越後に歸り、間日、檄を傳へ、大に管内八國の兵を發し、期するに三月五日を以てす。加賀以西の兵は、沿道より附き從はしむ。京畿、大に震ふ。信長、使をして之を勝頼に告げしめ、前故を捐て舊好を修めんと請ふ。曰く「謙信、西上せば、我れ家康と之を北道に拒がん。願はくは公、直に越後を指せ。事克たば、則ち其の地は唯公の取る所のまま」と。勝頼答へず。六年三月、北陸諸國の兵、檄に應じて雲集す。謙信自ら臨み簡閲し、約束を申ね、將に發せんとす。發するに先だつ二日、疾作り、二日にして、遂に卒す。年四十九。卒すること、信玄に後るる五年なり。

通釋 十月、越後に還り、一日おいて觸れを廻はし、大に領分の八個國の兵士を徴發し、三月五日を以て期限とした。加賀より西の兵士は途中で加り從ふことにした。五畿内地方は非常に震ひ怖れた。信長は使者を立てゝ勝頼に告げしめ、これまでの怨を捨てゝ古い好を修めようではないかと申し出た。いふのに「謙信が京都に上つたら、余は家康と之を北陸道に拒ぎませう。貴公は何卒直ぐ越後を指して攻め入つて下されよ。この事が成功すれば越後の土地は貴公の取り放題で御座る」と。勝頼は、返事をしなかつた。六年三月、北陸道諸國の兵士は觸れに應じて雲のやうに多勢集つて來た。謙信は自分で其の場に出かけて選び調べ軍令を言ひ渡して將に出發しようとした。出發に先だつこと二日、卽ち三月三日に、病氣が起つて、二日目に遂に死んだ。その時年は四十九。その死は信玄より五年後であつた。

語釋 修舊好（信玄在世當時の好を修むるをいふ。）

直江兼續・本莊繁長等ノ諸大臣、相共ニ謀ツテ曰ク「三郎ハ非ズ上杉氏ノ胤ニ。胤ハ乃チ景勝。且ツ親姪ナリ。宜シク立ツ。

立三郎、北條氏必因以幷呑北陸、吾輩皆爲之臣僕。於是、遣上杉義春、矯命急迎景勝於上田、來入內城、分親信守諸門。景虎在外城、日夜相鬩、弓銃交發。織田氏細作在越後者、走歸告信長。信長大喜、撫掌曰、「天下大定矣。」乃令佐久間信盛入加賀、前田利家入能登、佐佐成政入越中、各自略取之。景勝・景虎兵結不解。以故不能拒。

景虎終敗走、歸上杉憲政于北川。戶定城主北莊丹後聞變馳至、說景勝曰、「兩郎君宜各領四州、共拒信長。不則彼乘釁來侵。先公所百戰而取者、一旦附之敵人、豈不可惜。」景勝不聽。北莊怒、去助景虎、數破景勝兵。因軍善光寺。景勝母在上田、肩輿來入城、召諸將士面勗之、保謙信遺業。將士感激力守。

【訓讀】直江兼續・本莊繁長等の諸大臣、相共に謀つて曰く「三郎は、上杉氏の胤にあらず。胤は乃ち景勝。且つ親姪なり。宜しく立つべし。三郎を立つれば、北條氏必ず因つて以て北陸を併呑し、吾が輩、皆之が臣僕と爲らん」と。是に於て、上杉義春を遣はし、命を矯め、急に景勝を上田に迎へしむ。來りて內城に入り、親信を分ち諸門を守らしむ。景虎、外城に在り。日夜相鬩ぎ弓銃交發す。織田氏の細作の越後に在るもの、走り歸つて信長に告ぐ。信長、大に喜び、掌を撫して曰く「天下、大に定る」と。乃ち佐久間信盛をして加賀に入り、前田利家をして能登に入り、佐佐成政をして越中に入り、各自ら之を略取せしむ。景勝・景虎、兵、結んで解

けず。故を以て拒ぐこと能はず。景虎、終に敗れ走り上杉憲政に北川に歸す。戸定城主北莊丹後、變を聞き馳せ至り、景勝に說いて曰く「兩郎君、宜しく各 四州を領し、共に信長を拒ぐべし。不らずんば則ち彼れ釁に乘じ來り侵さん。先公百戰して取る所のもの、一旦之を敵人に附するは、豈に措む可からずや」と。景勝聽かず。北莊怒り、去つて景虎を助け、數 景勝の兵を破る。因つて善光寺に軍す。景勝の母上田に在り。肩輿にて來り城に入り、諸將士を召し、面のあたり之を勗め、謙信の遺業を保たしむ。將士、感激して力守す。

〔通釋〕直江兼續・本莊繁長などが相共に相談していふのは「三郎景虎殿は上杉家の血筋ではない。血筋の人はつまり景勝殿である。その上謙信公親身の甥である。宜しく繼嗣とすべきである。もし三郎君を立てると北條氏は乾度、それを宜いことにして、北陸道を併呑し、吾々は皆北條の家來となつて終ふのだ」と。そこで上杉義春を遣はし、謙信の命令だと僞つて急に景勝を上田から迎へさせた。來ると本丸に入り、腹心の者どもを分けて諸門を守らせた。景虎は外城に居たが、日夜せり合ひ雙方より、弓や鐵砲を互ひに放つた。織田氏の忍びの者で越後に居た者が走り歸つてこのことを信長に注進した。信長は非常に喜んで手を揉んで曰ふには「天下は立派に平定したぞ」と。そこで佐久間信盛をして加賀に入り、前田利家をして能登に入り、佐々成政をして越中に入らしめ、銘々に攻め取らせた。景勝・景虎は兵を取り結んで解けなかつた。それ故に信長の軍を拒ぐことは出來なかつた。景虎は、終に敗れて走り、北川なる上杉憲政の處へ逃げ込んだ。戸定城主北莊丹後は變事を聞きつけ、かけてやつて來て、景勝に說いていふには「二人の若殿は各 四ケ國を領分とし、一緒に信長を防がれたら宜しいでせう。それが出來なければ信長はわが隙間につけ込んで侵略に來ませう。先殿樣が百戰して取られた土地を一朝にして敵に與へることは、如何にも惜まずにはゐられません」と。景勝はいふことを聽かなかつた。北莊は怒

つてそこを去つて景虎を助け、度々、景勝の兵を破つた。因つて善光寺に陣取つてゐた。景勝の母親は上田に居た。轎に乗つて來て城内に入り、諸將士を呼び出して面前で之を激勵し、謙信の殘した事業を維持するやうに申付けた。將士は感激して力の限り守つた。

語釋　細作（忍びの者、廻し者）○北川（越後）○戸定（越前）

七年正月、景勝夜潛兵襲景虎軍後、大破之。北莊脱走。景勝將荻田主馬識之、追而刺之。於是、諸城多歸景勝。景虎走保鮫尾。北條氏政聞之、遣兵萬餘援景虎。又請援於武田氏。勝賴出軍飯山、景勝與戰不利。齋藤朝信説景勝、以東上野陷勝賴、先以金萬兩。又厚賂其二嬖。二嬖交説勝賴曰、「景虎君之舅也。雖然、援之而克、則北條氏連屬東北、將及於君矣。是與得東上野・金萬兩、孰利。」勝賴乃與景勝和、合兵攻景虎。景虎與憲政皆自殺。相模兵引去。氏政大怒、與勝賴絶、與織田氏・徳川氏約、夾攻勝賴。

訓讀　七年正月景勝、夜兵を潛め景虎の軍後を襲ひ、大に之を敗る。北莊脱し走る。景勝の將荻田主馬、之を識り、追うて之を刺す。是に於て、諸城多く景勝に歸す。景虎走つて鮫尾を保つ。北條氏政、之を聞き、兵萬餘

を遣はし景虎を援けしめ、又援を武田氏に請ふ。勝頼軍を飯山に出だす。景勝與に戰ひ利あらず。齋藤朝信、景勝に說き、東上野を以て勝頼に啗はし、先づ金萬兩を以てせしむ。又厚く其の二嬖に賂ふ。二嬖、交勝頼に說いて曰く「景虎は、君の舅なり。然りと雖も、之を援けて克たば、則ち北條氏、東北を連屬し、將に君に及ばんとす。是れ東上野・金萬兩を得ると、孰れが利ぞ」と。勝頼乃ち景勝と和し、兵を合せ景虎を攻む。景虎、憲政と皆自殺す。相模の兵引き去る。氏政、大に怒り、勝頼と絕ち、織田氏、徳川氏と約し、勝頼を夾み攻む。

訓讀 七年正月、景勝は夜、兵を忍ばせて景虎の軍の背後から襲うて大に之を破つた。北莊は身を脫して逃げた。景勝の大將荻田主馬は、それを氣づき追つかけて刺し殺した。これから諸城多くは景勝に歸した。景虎は走つて、鮫尾を固めた。北條氏政は之を聞いて兵萬餘人を遣はして、景虎を援けさせ、又援助を武田氏に乞うた。勝頼は軍勢を飯山に繰り出した。景勝はともに戰つたが負けた。齋藤朝信は景勝に說き、東上野を勝頼に與へて餌となすことにし、その前に先づ黃金一萬金を贈らしめた。又手厚く二嬖に賄賂を送つた。二嬖はかはる〴〵勝頼に說いていふには「景虎は公の小舅でゐられる。けれども之を援けて克てば、北條氏は東海と北陸とを連ね續けるようになり、追々其の勢力が公の領分に及んで來ることになりませう。これは、東上野と黃金一萬兩とを得るのと、どちらが利益でせうか。東上野と一萬兩を得た方が餘程利益で御座います」と。そこで勝頼は景勝と和睦し、兵を合せて景虎を攻めた。景虎は憲政と皆自殺した。相模の兵は引き去つた。氏政は非常に怒り、勝頼と絕交し、織田氏、徳川氏と約束して勝頼を夾み討にした。

語釋 君之舅（景虎は勝頼の妻の兄。妻の兄弟を阿舅といふ。）

七月、勝頼以テ其ノ妹ヲ妻ハシ景勝ニ、撤シ貝津之戍ヲ移ス於沼津ニ、數出ダシ兵ヲ上野及ビ駿河ニ。時ニ高坂昌宣

既死、莫復諫者。而二嬖益横。德川氏世子信康居岡崎。其母關口氏有罪廢居、與甲斐醫人滅慶通、使滅慶來送款、約爲內應。勝賴許之。事覺母子皆被殺。九月、勝賴次沼津氏政以兵四萬軍三島。十月、德川氏踰險入駿河、縱火由井。勝賴使別將當氏政而西。二嬖故遲其行。至則去矣。

訓讀 七月、勝賴、其の妹を以て景勝に妻はし、貝津の戍を撤し、沼津に移し、數兵を上野及び駿河に出だす。時に高坂昌宣既に死し、復諫むるものなし。而して二嬖益横なり。德川氏の世子信康、岡崎に居る。其の母關口氏、罪あつて廢居し、甲斐の醫人滅慶と通じ、滅慶をして來り款を送らしめ、約して內應を爲す。勝賴之を許す。事覺れ、母子皆殺さる。九月、勝賴、沼津に次す。氏政、兵四萬を以て三島に軍す。十月、德川氏、險を踰えて駿河に入り、火を由井に縱つ。勝賴、別將をして氏政に當らしめて西す。二嬖、故に其の行を遲くす。至れば則ち去る。

通釋 七月、勝賴は、其の妹を景勝に妻はせ、貝津の守備を取りのけて（貝津は越後に備へた城）之を沼津に移し、度々、上野及び駿河に出兵した。當時既に高坂昌宣は死んで、もう諫めるものはゐなかつた。そして二嬖は益々增長してゐた。德川氏の繼嗣の信康は岡崎に居た。その母の關口氏は罪があつて本妻をやめられて押し込められてゐたが、甲斐の醫者滅慶と密通し、滅慶を使者として、來つて內通せしめ裏切ることを約束した。勝賴は之を許した。その事が發覺して、信康の母子は皆殺された。九月、勝賴は沼津に宿して居た。氏政は兵四萬を

率ゐて、三島に陣取り、之に對抗した。十月德川氏は險阻を越えて、駿河に入り、火を由井に放つた。勝頼は別將をして、氏政に當らしめて置いて、自分は西方へ出かけた。二嬖はわざと其の行軍を手間取らせた。由井に來て見ると德川氏はもう去つた後であつた。

八年六月、德川氏攻高天神。十月、城且陷。城將岡部與行請援勝頼。裨將橫田尹松使言曰「城深在敵地。君不宜來。臣等分當守城死。卽得免、走歸亦不難也」將士皆贊其言。勝頼曰「坐不援無以藉口」乃出徇上野、攻膳城、肉薄拔之。九年二月、與氏政相持于伊豆。氏政將松田憲秀送款勝頼。勝頼欲戰。二嬖止之。三月、高天神陷、與行被獲。尹松力戰脫歸。勝頼欲賞之。曰「脫歸被賞、在君爲僭、在臣爲冒」固辭不受。

【譯】八年六月、德川氏、高天神を攻む。十月、城且に陷らんとす。城將岡部與行、援を勝頼に請ふ。裨將橫田尹松、言はしめて曰く「城深く敵地に在り。君宜しく來るべからず。臣等分當に城を守つて死すべし。卽し免るるを得ば、走り歸るも亦難からざるなり」と。將士皆其の言を贊す。勝頼曰く「坐して援けずば、以て口を藉るなし」と。乃ち出で上野を徇へ、膳城を攻め、肉薄して之を拔く。九年二月、氏政と伊豆に相持す。氏政の將松田憲秀、款を勝頼に送る。勝頼戰はんと欲す。二嬖、之を止む。三月、高天神陷り、與行獲らる。尹松、力戰して脫れ歸る。勝頼、之を賞せんと欲す。曰く「脫れ歸り賞せらるれば、君に在つては僭たり、臣に在つては冒

たり」と。固辭して受けず。

通釋 八年六月、德川氏は、高天神を攻めた。十月城が落ちかゝつた。城將岡部與行は援助を勝賴に賴んだ。その次將横田尹松は言はしめていふのに「城は深く敵地に在ります。貴公はお出でにならぬ方が宜しいです。私どもは本分として城を守つて討死すべきです。もし免れることが出來ましたら走り歸つてもそれは困難ではありません」と。將士は皆その言を贊成した。勝賴がいふのに「ぢつとしてゐて助けなくては申譯が立たぬ」と。そこで、出でゝ上野を觸れさとし、膳城を攻め、詰め寄せて之を陷れた。九年二月、勝賴は氏政と伊豆で對陣した。氏政の大將松田憲秀は勝賴に內通した。勝賴は戰はうと思つた。併し二嬖が之を止めた。三月、高天神は遂に陷り、與行は生捕られた。尹松は力め戰つて、脫れ歸つた。勝賴は尹松を賞しようとした。尹松がいふのに「脫れ歸つて御褒美を戴くと殿樣の方から申せば濫賞であり、私から申せば受けてならぬものを貰つたことになります」と。固く辭退して貰はなかつた。

語釋 分（臣子の分）

勝賴疆土日削。二嬖勸其請和信長。小山田昌辰曰晚矣。長其侮耳。不聽。返織田氏質子請和。信長答書辭甚倨。穴山信良又說勝賴曰先公威震四鄰。故所居不設城池。然聞氏康・信長通好謙信、則築岩殿・久能・吾妻三城以備之。謙信不屑從約。以故無事耳。今鄰國無復如謙信者。安可不備。勝賴然之、乃城于韮崎、號曰新府。信

良欲娶勝頼女爲婦。武田信豐賂二嬖、乃適信豐焉。信良卿之、終通款織田氏。諸公族諸將亦多送款者。木曾義昌爲勝頼妹婿。苦其誅求、陰降信長、請導其兵。有來告之者。二嬖斥爲虛言。已而事覺。十年正月、勝頼欲討義昌。阿部忠高曰「其地險狹。不可輒往。臣請先往、說紓其討、而君兵稍從其後、可也」二嬖沮之。遂命信豐、將五千人、冒雪赴討。遇義昌鳥居嶺、大敗歸。

訓読 勝頼、彊土、日に削らる。二嬖、其の和を信長に請はんことを勸む。小山田昌辰曰く「晩し。其の侮を長ずるのみ」と。聽かず。織田氏の質子を返し和を請ふ。信長の答書の辭甚だ倨る。穴山信良、又勝頼に說いて曰く「先公の威、四隣に震ふ。故に居る所、城池を設けず。然れども、氏康・信長、好を謙信に通ずと聞けば、則ち岩殿・久能・吾妻の三城を築き以て之に備ふ。謙信、從約を屑しとせず。故を以て事なきのみ。今、隣國に復謙信の如きものなし。安ぞ備へざるべけんや」と。勝頼、之を然りとし、乃ち韮崎に城き、號して新府と曰ふ。信良、勝頼の女を娶り婦と爲さんと欲す。武田信豐、二嬖に賂す。乃ち信豐に適く。信良、之を卿み、終に款を織田氏に通ず。諸の公族・諸將も、亦款を送るもの多し。木曾義昌は、勝頼の妹婿たり。其の誅求に苦しみ、陰に信長に降り、其の兵を導かんと請ふ。來つて之を告ぐるものあり。二嬖斥け虛言と爲す。已にして事覺はる。十年正月、勝頼、義昌を討たんと欲す。阿部忠高曰く「其の地險狹なり。輒く往くべからず。臣請ふ、先づ往き、說いて其の討を紓くし、而して君の兵稍く其の後に從はば、可なり」と。二嬖之を沮む。遂に信豐に

命じ、五千人に將とし、雪を冒し赴き討たしむ。義昌に鳥居嶺に遇ひ、大に敗れて歸る。

通釋 勝頼の領土は日に〳〵削り取られた。二嬖は、信長と和睦することを勸めた　小山田昌辰がいふのに「もう手遲れです。そんなことをすればたゞ信長の侮を增すばかりです」と。勝頼は承知しなかつた。織田氏の人質を還して、和睦を願ひ出た。信長の返書の文句が非常に横柄であつた。穴山信良は又勝頼に說いていふのに「先殿樣の威勢は四隣を震ひ恐れさせました。だから居られるところに城も堀も作られなかつた。併し、氏康・信長が謙信に味方したと聞かれてからは用心の爲めに岩殿・久能・吾妻の三城を築いて、之に備へられました。たゞ謙信は北條・織田と連合して當方を攻めることを心よく思はなかつたのです。それ故格別の事件も起らなかつたので御座います。今隣國には謙信のやうな潔い者はゐません。いつ何時合從して攻め込むものとも限りませんから、どうして備へずに居られませう」と。勝頼もさうだと思ひ、そこで韮崎に城を築いて新府と名づけた。信良は勝頼の娘を倅の嫁にしたいと思つた。武田信豐は二嬖に賄賂を送つて勝頼の娘を取り持つやうに頼んだ。そこで信豐の方に嫁入らせた。信良は之を怨んで終に織田氏に內通した。諸〻の公族、諸將にも亦內通するものが多かつた。木曾義昌は勝頼の妹婿であつた。併し軍用金などの取り立てが嚴しいので苦しみ、內々信長に降參して、その兵を案內し度いと申し出た。それを勝頼の所へ來て告げたものがあつた。二嬖はしりぞけて虛言だとした。その內に事件が愈〻發覺した。十年五月、勝頼は、義昌を討たうと思つた。すると阿部忠高がいふのに「木曾は土地險阻で狹く、容易に往くことの出來ない所です。私が往つて義昌に說いて、その備へを緩めるやうに致しませう。そして、君の兵はぼつ〳〵とその後からついてお出でになれば宜しいです。」と。二嬖は之を邪魔立てした。遂に信豐に命じ五千人に將として雪をもかまはず征伐に行かせた。義昌に鳥居嶺で、出遇ひ、大敗

して歸つて來た。

語釋　質子（信長の季子御坊丸）○紓二其討一（謀叛の計畫を暇取らせる。）○鳥居嶺（信濃）

二月、勝頼將兵二萬、出陣諏訪、遣諸將分守要害。而信長已遣長子信忠、引兵十餘萬、自木曾入。瀧川一益・川尻鎮吉等、爲前部。德川氏・北條氏各大舉應之。下條信氏棄瀧澤走。小笠原信嶺以松尾降。信忠入至桔梗原。勝頼召諸將于諏訪、聚議不決。城昌茂進而請曰「方今之勢、不可一日猶豫。臣與尹松、得假五千兵、爲先鋒、昌幸・昌辰等、以餘兵繼進、敵不復設。　㮰如長篠之役、我必克之。」勝頼問之二變。二變曰「少年者所言、不可用也。」阿部忠高曰「臣遣間覗。　敵、敵深入客地、離而不整。可襲也。我夜合兵疾進、挫其前部、以破其膽。」二變不許。已而信良叛降德川氏。駿河諸城皆解走。獨田中守將依田信蕃不下。先是、德川氏數攻信蕃、不得志。至是、使人說降之。對曰「吾知守城而已。不知外事。」乃使信良以書諭之。

訓讀　二月、勝頼、兵二萬に將とし、出で諏訪に陣し、諸將を遣はし、要害を分ち守らしむ。而して信長已に長子信忠を遣はし、兵十餘萬を引き、木曾より入らしむ。瀧川一益・川尻鎮吉等、前部たり。德川氏・北條氏各

大擧して之に應ず。下條信氏、瀧澤を棄てて走る。小笠原信嶺、松尾を以て降る。信忠入り桔梗原に至る。勝賴、諸將を諏訪に召し、聚議すれども決せず。城昌茂、進み請うて曰く「方今の勢、一日も猶豫すべからず。臣、尹松と五千の兵を假るを得て、先鋒と爲り、昌幸、昌辰等、餘兵を以て繼ぎ進まば、敵、復柵を設くること長篠の役の如くならずして、我れ必ず之に克たん」と。勝賴之を二嬖に問ふ。二嬖曰く「少年者の言ふ所用ふ可からざるなり」と。阿部忠高曰く「臣、間を遣はして敵を覘はしむるに、敵深く客地に入り、離れて整はず。襲ふべきなり。我れ夜、兵を合せ疾く進み其の前部を挫き、以て其の膽を破らん」と。二嬖許さず。已にして信良、叛いて、德川氏に降る。駿河の諸城、皆解走す。獨り田中の守將依田信蕃下らず。是より先き、德川氏、數信蕃を攻め、志を得ず。是に至り、人をして說いて之を降さしむ。對へて曰く「吾は城を守るを知るのみ。外事を知らず」と。乃ち信良をして、書を以て之を諭さしむ。

通釋 二月、勝賴は、兵二萬を引きつれて諏訪に出陣し、諸將を遣はして、要害の所を分ち守らしめた。而して一方信長は既に長子信忠を遣はし、兵十餘萬をつれて、木曾から入らしめた。瀧川一益・川尻鎭吉等は先手となつた。德川氏・北條氏も各〻大軍を起して信長に加勢した。下條信氏は瀧澤を棄てゝ逃げ去つた。小笠原信嶺は松尾城を率ゐて降參した。信忠は入つて桔梗原に着いた。勝賴は諸將を諏訪に呼び寄せて聚り議したが意見はまとまらなかつた。城昌茂は進み出て請うていふのに「今日の形勢では一日たりとも猶豫しては居られません。私は尹松と二人で五千人の兵を拜借させて戴き、先鋒となり、そして、昌幸・昌辰等はその餘の兵を引きつれて繼ぎ進めば敵は長篠の戰爭の時のやうに柵を搆へることもならず味方はきつと勝ちます」と。阿部忠高がいふのに「私は忍びの者を遣はして敵の樣子を搜らせましたが敵は深く他人の國に入り込んで、ちりぢりに離れて

陣立も整つてゐません。此の際襲ひ討つべきです。我が軍は、夜、兵を合せて急に進み、その先手を打ち破り、敵の荒膽を破りませう」と。二婁は之をも許さなかつた。その内に信良は叛いて、德川氏に降つた。駿河の諸城は皆守を解いて走つた。たゞ田中の守將依田信蕃だけは降參しなかつた。これより前、德川氏は度々信蕃を攻めたがうまく行かなかつた。この時使を遣はして信蕃に降參を說き勸めた。信蕃は答へていふのに「余は城を守ることだけを知つてゐる。その外の事は何も知らぬ」と。そこで信良をして書面を以て之を諭させた。

語釋 松尾（飛驒） ○田中（駿河）

三月、信蕃出歸甲斐。德川氏招以厚祿。辭曰「吾赴國難。未暇謀家。」諏訪軍潰、在者僅三千。勝賴乃走、歸新府。信忠合兵圍高遠。城將仁科信盛與小山田昌辰固守。信忠使辯士入說曰「孤城抗大敵。虀粉可待。苟出降、以爲將增其邑。」昌辰曰「吾報先公、正在今日。若何爲者、敢來誘我乎。」執使者、截其耳鼻、放還之。信忠怒、以信嶺爲導、疾攻。昌辰力戰數出狙擊信忠。不克。城遂陷。與信盛及渡邊某、皆死之。

訓讀 三月、信蕃出で、甲斐に歸る。德川氏、招くに厚祿を以てす。辭して曰く「吾は國難に赴く。未だ家を謀るに暇あらず」と。諏訪の軍潰え、在る者僅に三千。勝賴乃ち走り、新府に歸る。信忠、兵を合せ高遠を圍む。城將仁科信盛、小山田昌辰と固く守る。信忠、辯士をして入り說かしめて曰く「孤城、大敵に抗す。虀粉待つべし。苟も出で降らば、以て將と爲し、其の邑を增さん」と。昌辰曰く「吾れ先公に報ずるは、正に今日に在り。

若、何爲るものぞ、敢て來り我を誘ふか」と。使者を執へ、其の耳鼻を截り、之を放還す。信忠怒り、信嶺を以て導と爲し、疾く攻む。昌辰、力戰し、數出でて信忠を狙擊す。克たず。城遂に陷る。信盛及び渡邊某と、皆之に死す。

通釋 三月、信蕃は城から出でゝ甲斐に歸つた。德川氏は大祿を以て之を招いた。併し之を辭退していふには「私は國の難儀に赴くのである。一家のことなどを計る暇はない」と。諏訪の軍勢は潰えて殘つてゐるものは、わづかに三千人であつた。そこで勝賴は走つて、新府に歸つた。信長の長男信忠は兵を合せて高遠城を取り圍んだ。城將仁科信盛は、小山田昌辰と二人で固く之を守つて居た。信忠は辯舌の上手な者をして城に入つて說かせていふには「孤立無援の城を以て大敵に對抗してゐる。併しいづれは粉微塵にされるのである。もしも出でゝ降參すれば、大將となして地行を增さうではないか」と。昌辰は答へていふには「余が先殿樣に報ゆるのはまさしく今日に在るのである。貴樣は何する者だ、來つて余を誘惑するとは」と、使者を捕へ、その耳と鼻を殺いで之を追ひかへした。信忠は怒つて、信嶺を路案內となし、急に攻め立てた。昌辰は力のあらん限り戰つて、度々城から出ては信忠を狙ひ擊つた。併しうまく行かなかつた。城は遂に陷つた。昌辰は信盛及び渡邊某と皆討死した。

於是、敵兵四面來薄。而新府城壁未全。勝賴欲徙避之。嫡子信勝慷慨曰「事已至此。何之而免乎。當焚旗與無楯、徐自裁而已」。勝賴未答。小山田義國欲誘執勝賴、以市織田氏也、說曰「臣邑岩殿險 可保」。眞田昌幸曰「弗若臣邑吾妻險 有積粟。請以

死、奉君。勝賴乃令昌幸先歸。二嬖曰「昌幸新、義國故。去故就新、奈何」。勝賴遂徙岩殿、令義國先歸待己。於是焚殺諸叛臣質三百人、召死節者質十人、頒與金各百兩、散遣之。收其重器、以殘兵五百赴岩殿。顧望二府、君臣相顧泣下。

【訓讀】是に於て、敵兵、四面より來り薄る。而して新府の城壁未だ全からず。勝賴徙り之を避けんと欲す。嫡子信勝、慷慨して曰く「事已に此に至る。何くに之きて免れんや。當に旗と無楯とを焚いて、徐に自裁すべきのみ」と。勝賴未だ答へず。小山田義國、勝賴を誘ひ執へ、以て織田氏に市らんと欲するや、說いて曰く「臣の邑岩殿は險にして保つべし」と。眞田昌幸曰く「臣が邑吾妻の險にして積粟あるに若かず。請ふ、死を以て君に奉ぜん」と。勝賴乃ち昌幸をして先づ歸らしむ。二嬖曰く「昌幸は新なり。義國は故なり。故を去て、新に就く、奈何」と。勝賴、遂に岩殿に徙らんとし、義國をして先づ歸り己を待たしむ。是に於て、諸の叛臣の質三百人を焚殺し、節に死する者の質十人を召し、金各百兩を頒與し、之を散遣す。其の重器を收め、殘兵五百を以て岩殿に赴く。二府を顧望し、君臣相顧て泣下る。

【通釋】そこで敵兵は四方から來り攻め寄せた。そして一方新府は城普請がまだ出來上らなかつた。勝賴は他に徙つて敵を避けようと思つた。嫡子の信勝は慨いていふのに「萬事このやうになつて終つたのであります。何處へ往つたつて免れることは出來ませぬ。義家以來の旗と無楯の鎧とを燒いて、心靜に自害なされるばかりで御座います」と。勝賴はそれにはまだ返事をしなかつた。すると小山田義國は勝賴を生捕り、織田氏に渡して褒美に有りつかうと企んでゐたので、勝賴に說き勸めていふには「私の領分の岩殿は險阻で固めるに都合が宜しい」と。

眞田昌幸がいふのに「それよりも私の領分の吾妻の險阻で而も兵糧が澤山あるのには及びますまい。私は何卒死を以て、君を此に守り立てませう」と。そこで勝頼は昌幸をして準備の爲め先づ歸らせた。すると二嬖がいふのに昌幸は新參者です。義國は譜代です。譜代を去つて昨今の新參者の處へ行かれるのはどういふ譯ですか」と。勝頼は遂に岩殿に往かうと思ひ、義國をして、先づ歸つて自分を待たせることにした。そこで多くの叛臣の人質三百人を燒き殺し、節義に死んだ者の人質十人を召して各黄金百兩づゝを分ち與へ、之を散じ去らしめた。そして家の寳物をまとめ、殘兵五百をつれて岩殿に赴いた。新舊兩府をふりかへり望み、君も家來も顔を見合せて涙を流した。

至柏尾、待義國來迎。七日不至。走入駒飼民家。卽夜、義國使人襲取其質、乃絕關拒勝頼。勝頼不知所出。乃走入天目山。兵僅四十人。土屋昌恆・秋山光次牽其馬、阿部忠高・溫井常陸擔槍從之。小宮山友信單騎來從。友信初數諫勝頼、請除二嬖。又與小山田將監者爭事竝訴。將監厚結二嬖。勝頼遂廢錮友信。友信於是赴難、追及於田野、就昌恆言曰「君嘗擯我、而我赴君難、是傷君之明也。然不赴缺我義。與缺我義、寧傷君明耳」。因問「調閑何在」。曰「昨逃矣」。問勝資。曰「亦逃」。問將監。曰「逃已十日矣」。友信曰「唉、吾知有今日久矣」。勝頼俛首而已。

【訓讀】柏尾に至り、義國の來り迎ふるを待つ。七日にして至らず。走り駒飼の民家に入る。卽夜、義國、人をして其の質を襲ひ取らしめ、乃ち關を絶ち、勝賴を拒ぐ。勝賴、出づる所を知らず。乃ち走り天目山に入る。兵僅に四十人。土屋昌恒・秋山光次、其の馬を牽き、阿部忠高・温井常陸、槍を擔ひ之に從ふ。小宮山友信、單騎來り從ふ　友信初め數勝賴を諫め、二嬖を除かんと請ふ。又小山田將監といふものと事を爭ひ、並に訴ふ。將監、厚く二嬖に結ぶ。勝賴、遂に友信を廢錮す。友信、是に於て、難に赴き、追うて田野に及び、昌恒に就き言つて曰く、「君嘗て我を擯く、而して我れ君の難に赴くは、是れ君の明を傷ふなり。然れども赴かずんば、吾が義を缺かん。我が義を缺かんよりは、寧ろ君の明を傷はんのみ」と。因つて問ふ「調閑何くに在る」と。曰く「昨逃る」と。勝資を問ふ。曰く「亦逃る」と。將監を問ふ。曰く「逃れて已に十日なり」と。友信曰く　唉、吾れ今日あるを知ること久し」と。勝賴首を俛するのみ。

【通釋】主從は柏尾に着いて義國の迎ひに來るのを待つた。七日たつても來なかつた。致方なく走つて駒飼の百姓家に逃げ込んだ。その夜、義國は人をやつて不意に襲つて自分の人質を取り戻して置いて、關所を封じて、勝賴を拒いだ。勝賴は如何して宜いやら分らなかつた。そこで走つて天目山に入り込んだ。その時、兵士はわづかに四十人しかゐなかつた。土屋昌恒・秋山光次は勝賴の馬を牽き、阿部忠高・温井常陸は槍を擔つて之に從つた。この時小宮山友信は一騎で來り從つた。友信は以前度々勝賴に意見をし二嬖を除かむことを請うた。又小山田將監といふ者と事を爭つて、兩方から訴へ出たことがある。將監は厚く賄賂をつかつて二嬖に結びついた。それで勝賴は遂に友信の役を罷めさせて禁錮したのであつた。友信は勝賴が危いといふので、武田氏の難に赴き田野で追ひつき、昌恒に賴んで取り次いで貰ひ、いふには「我が君には嘗て私をお斥けなされたのに、私が今

日君の難に赴けば、君の御目鏡違ひを世間に顯はすことになります。しかし難に赴かないと、私の義理を缺くことになります。私の義理を缺かうよりは、むしろ君のお眼鏡違ひを顯はすまでゝす」と。そこで問ふのに「長坂調閑はどこに居りますか」と。昌恒答へて曰ふに「昨日逃げた」と。跡部勝資はどうかと尋ねると「これも亦逃げた」といつた。小山田將監は如何にと尋ねると「もう逃げてから十日にもなる」といつた。友信はいふのに「あゝ、そんな事になるだらうと、久しい前から思つて居た」といつた。勝頼は面目なくたゞうつむいて何も言はなかつた。

語釋 天目山・田野（甲斐）

已而山僧與村民謀、導敵索勝頼。勝頼乃使其配北條氏奔相摸。對曰「妾何顏見阿兄乎。」又使信勝間道奔陸奥。信勝曰「大人宜奔耳。兒辱家嗣。義當死于此。」勝頼曰「然則吾與女共死。顧女未行擐甲禮。當行禮而死。」乃請秋山光次爲賓、被信勝以無楯。比禮畢、敵兵奄至。衆飢不能起。勝頼以白布約髮、拔刀親戰。信勝以槍、昌恆以弓翼之、卻敵三次。山縣氏卒辻某、聚叛人自後山瞰射。我兵皆斃。昌恆矢盡、且拔刀。敵叢槍擬之。勝頼走救昌恆、爲敵刺喉及腋死。年三十七。信勝亦死。年十六。昌恆・友信・光次等、皆死之。武田氏滅。

【訓讀】已にして山僧、村民と謀り、敵を導き勝頼を索む。勝頼乃ち其の配北條氏をして、相摸に奔らしむ。對へて曰く「妾、何の顏あつて阿兄を見んや」と。又信勝をして、間道より陸奧に奔らしむ。信勝曰く「大人、宜しく奔るべきのみ。兒、冢嗣を辱うす。義當に此に死すべし」と。勝頼曰く「然らば則ち吾れ女と共に死なん。顧ふに、女未だ擐甲の禮を行はず。當に禮を行つて死すべし」と。乃ち秋山光次に請ひ賓と爲し、信勝に被するに無楯を以てす。禮畢る比、敵兵奄ひ至る。衆飢ゑて起つ能はず。勝頼、白布を以て髮を約し、刀を拔き親ら戰ふ。信勝は槍を以て、昌恒は弓を以て、之を翼け、敵を御ぐること三次。山縣氏の卒辻某・坂人を聚め、後山より瞰射す。我兵皆斃る。昌恒、矢盡き、且に刀を拔かんとす。敵、槍を叢めて之に擬す。勝頼走り昌恒を救ひ、敵に喉及び腋を刺され死す。年三十七。信勝も亦死す。年十六。昌恒・友信・光次等皆之に死す。武田氏滅ぶ。

【通釋】其の内に天目山の山僧が村民と相談して敵の案内をして勝頼をさがし求めた。そこで勝頼は其の妻の北條氏に相摸に奔り歸るように勸めた。すると對へていふのに「妾はどんな顏をして兄に遇はれませうや」と。又信勝をして拔け道から陸奧に走らせようとした。すると信勝がいふのに「父君こそ走られたら宜いでせう。私は武田の家督を辱くして居ります。義として、こゝで討死すべき筈で御座います」と。勝頼がいふのに「しからば余はお前と一緒に死なう。しかし思ふにお前はまだ鎧着の儀式を濟ませて居らぬ。その儀式を行つてから死ぬべきである」と。そこで秋山光次に頼んで烏帽子親となし、信勝に無楯の鎧を着せた。その儀式の終る頃に敵兵が不意に襲ひ來つた。皆の者は腹が減つて起つことも出來なかつた。勝頼は白い布で鉢卷をなし、刀を拔いて親ら戰つた。信勝は槍で、昌恒は弓で之に付き添ひ、三度も敵を退けた。山縣氏の足輕の辻彌兵衛なる者が坂人共を聚めて山の後から射下ろした。我が兵は皆斃れた。昌恒は矢種がなくなつたので刀を拔かうとした。敵は

槍を集中して突き刺さうとした。勝頼は走つて、昌恒を助けようとして却つて敵に喉と脇腹とを刺されて死んだ。年三十七であつた。信勝も亦討死した年は十六であつた。昌恒・友信・光次等も皆討死した。かくて武田氏は滅亡した。

織田氏入甲斐、懸令曰「氏族將士出降者復邑」。勝頼祖叔父信就・信光・叔父信綱・信龍・弟信貞・從弟信豐、及二孽、義國等、相率出降、皆爲所誅。獨穴山信良、得領甲斐一郡。上野諸將、非武田氏世臣者、盡隷於瀧川一益、信濃諸將隷於森長可、與柴田勝家等、相爲掎角、以圖上杉氏。

〔訓讀〕織田氏、甲斐に入り、令を懸けて曰く「氏族の將士出で降るものは邑を復せん」と。勝頼の祖叔父信就・信光・叔父信綱・信龍・弟信貞・從弟信豐及び二孽・義國等、相率ゐて出で降り、皆誅する所と爲る。獨り穴山信良甲斐の一郡を領するを得たり。上野の諸將、武田氏の世臣に非ざるものは、盡く瀧川一益に隷し、信濃の諸將は、森長可に隷し、柴田勝家等と掎角を相爲し、以て上杉氏を圖る。

〔通釋〕織田信長は甲斐に入り號令を掲げて曰ふのに「武田氏の一族將士で出で降參する者にはもとの領分を與へる」と。勝頼の大叔父信就・信光・叔父の信綱・信龍・弟の信貞・從弟の信豐、及び二孽（長坂調閑・跡部勝資）小山田義國など相率ゐて出で、降參した。併し皆誅せられた。たゞ穴山信良だけは甲斐の一郡を領有することが出來た。上野の諸將で武田家譜代の臣でないものは皆瀧川一益につき從ひ、信濃の諸將は森長可につき從

ひ、柴田勝家等と互に助け合つて前後から押し寄せて、上杉氏を滅ぼさうと圖つた。

【語釋】祖叔父（祖父の兄弟）〇掎角（左傳の字面。鹿の後足をとるを掎といひ、前よりの角をとるを角といふ。前後から敵を制する意）

時北陸訛言。信長兵大敗於甲斐。土寇羣起。景勝遣兵助之、與勝家等、戰于越中。勝家憚越後兵、拒以塹柵。其他諸將侮景勝、出柵外戰、輒見擊破。瀧川一益聞之、遣兵入越後。五月、景勝迎擊一益兵三國嶺、大破之、自將入越中、拔魚津、轉入信濃、與森長可戰。勝家等復取魚津。

【訓讀】時に北陸、訛言す。信長の兵、大に甲斐に敗ると。土寇、群起す。景勝、兵を遣はして之を助けしめ、勝家等と、越中に戰ふ。勝家、越後の兵を憚り、拒ぐに塹柵を以てす。其の他の諸將は、景勝を侮り、柵外に出で戰ひ、輒ち擊破せらる。瀧川一益、之を聞き、兵を遣はし越後に入らしむ。五月、景勝、一益の兵を三國嶺に迎へ擊ち、大に之を破り、自ら將として越中に入り、魚津を拔き、轉じて信濃に入り、森長可と戰ふ。勝家等復魚津を取る。

【通釋】その時北陸地方で間違つた噂を立てた。信長の兵は甲斐で大負けを食つたと。それがために一揆が諸方に起つた。上杉景勝は兵を遣はして之を助けさせ、勝家等と越中で戰つた。勝家は越後の兵が強いので恐れ憚つて、堀や柵を作つて之を拒いだ。その他の諸將は景勝の若いのを侮つて柵外に出て戰ひ、譯なく擊ち破られた。瀧川一益は、之を聞いて兵を遣はして越後に入らしめた。五月、景勝は一益の兵を三國峠に迎へ擊つて、大に之

を破り、自ら大將となつて、越中に入り、魚津を陷れ、方向を轉じて信濃に入り、森長可と戰つた。勝家等はまた魚津を取り戻した。

五月、穴山信良與二徳川氏一倶入二京師一。六月、信長爲二其將明智光秀所一レ弑。信良走歸、途遇レ盜、被レ殺。一益・長可・勝家、聞レ變皆西走。而武田氏故地大亂。諏訪頼忠・小笠原貞慶・村上國淸、皆擧レ兵欲レ復二先業一。景勝自將二兵七千一助レ之。七月、景勝入二貝津一。北條氏・徳川氏、各以二數萬人一來爭。眞田昌幸・高坂源吾、初屬二景勝一。已而通二北條氏一。曰「臣爲二內應一、景勝可レ獲。」景勝覺レ之、執誅二源吾一。北條氏不レ知。以二昌幸一爲二先導一、濟二筑摩川一、以待二源吾報一。景勝送二源吾首一請レ戰。北條氏懼引去。已而徳川氏盡取二甲斐・信濃一。景勝定二河中四郡一而歸。

【訓讀】五月、穴山信良、徳川氏と倶に京師に入る。六月、信長、其の將明智光秀の弑する所と爲る。信良走り歸り、途に盜に遇つて殺さる。一益、長可、勝家變を聞き皆西に走る。而して武田氏の故地、大に亂る。諏訪頼忠・小笠原貞慶・村上國淸、皆兵を擧げ、先業を復せんと欲す。景勝自ら兵七千に將として之を助く。七月、景勝、貝津に入る。北條氏・徳川氏、各數萬人を以て來り爭ふ。眞田昌幸、高坂源吾、初め景勝に屬す。已にして北條氏に通ず。曰く「臣、內應を爲さば、景勝獲べし」と。景勝之を覺り、執へて源吾を誅す。北條氏知らず。昌幸を以て先導と爲し、筑摩川を濟り、以て源吾の報を待つ。景勝、源吾の首を送り戰はんと請ふ。北條氏

懼れ、引き去る。已にして德川氏、盡く甲斐、信濃を取る。景勝、河中の四郡を定めて歸る。

通釋 五月、穴山信良は德川氏と共に京都に攻め上つた。六月信長は其の將明智光秀の爲めに弑せられた。信良は走り歸り、途中で盜賊に出遇つて殺された。一益・長可・勝家は信長の死を聞いて、皆西に走つた。そして武田氏の舊領は大層亂れた。諏訪賴忠・小笠原貞慶・村上國淸は皆兵を擧げて祖先の舊領を取り戻さうとした。景勝は、自ら兵七千を率ゐて之を助けた。七月、景勝は貝津に入つた。北條氏・德川氏は各數萬人を率ゐて來り爭つた。眞田昌幸・高坂源吾は以前景勝に屬いて居た。その內に兩人共に北條氏に內通した。そして曰ふのに「私が裏切れば景勝などは生捕りに出來る」と。景勝は之を覺つて源吾を執へて殺した。併し北條氏の方ではこの事を知らなかつた。昌幸を路案內となし、筑摩川を渡つて源吾の知らせを待つた。景勝は源吾の首を送つて、戰を申込んだ。北條氏は恐れて引き去つた。その內に德川氏は全部甲斐信濃を取つた。景勝は河中島の四郡を平定して歸つた。

景勝幼有武幹。心誓報謙信恩以償政景罪。謙信嘗欲誅深澤九鬼者。景勝時年十四。手斬二人。謙信賞賜政景舊邑。數從軍有功。謙信卒而三年、克景虎、將士盡伏。獨柴田因幡者、據新發田不下。景勝常有所內顧。以故不能專營外事。織田氏將筑前守羽柴秀吉、誅明智光秀、畧定京畿。與柴田勝家戰勝而殺之、取加賀・能登。十二年、遣使來通好曰「吾欲攻佐佐成政以取越中。願子勿救」景勝曰「吾素與成政仇。而

越中本吾地。吾欲先取之耳」乃自將兵入越中。十月、攻宮崎城、一鼓拔之、謂使者曰「越後男子用武如此。返語筑前守、吾於越中、欲取卽取。而不取者、以讓子也。」

訓讀　景勝、幼より武幹あり。心に謙信の恩を報じ、以て政景の罪を償はんことを誓ふ。謙信、嘗て深澤九鬼といふものを誅せんと欲す。景勝、時に年十四。手づから二人を斬る。謙信、政景の舊邑を賞賜す。數軍に從つて功あり。謙信卒して三年、景虎に克ちて、將士盡く伏す。獨り柴田因幡といふ者、新發田に據り下らず。景勝、常に內顧する所あり。故を以て、專ら外事を營む能はず。織田氏の將筑前守羽柴秀吉、明智光秀を誅し、京畿を略定し、柴田勝家と戰ひ勝ちて之を殺し、加賀、能登を取る。十二年、使を遣はし、來つて好を通じて曰く「吾れ佐佐成政を攻め以て越中を取らんと欲す。願はくは子、救ふ勿れ」と。景勝曰く「吾れ素より成政と仇なり。而して越中は本、吾が地なり。吾れ先づ之を取らんと欲するのみ」と。乃ち自ら兵に將として越中に入る。十月、宮崎城を攻め、一鼓して之を拔き、使者に謂つて曰く「越後男子、武を用ふること此くの如し。返つて筑前守に語れ。吾れ越中に於て、取らんと欲すれば卽ち取る。而して取らざるは、以て子に讓るなりと。」

通釋　景勝は幼少より武勇で大將の器量があつた。彼は自分が謙信に養育された恩に報い、實父政景叛逆の罪を償はうと心中誓つてゐた。謙信は嘗て深澤九鬼といふものを殺さうと思つた。その時景勝は十四歲であつた。手づから、この二人を斬つた。謙信はその勇を賞めて、政景の舊の領地を賜はつた。度々軍に從つて、手柄を立てた。謙信が死んで三年目に景虎に勝つてからは將士も皆服從した。たゞ柴田因幡といふ者が新發田に立て籠つて降參しなかつた。景勝はいつも自分の內輪に心を引かれる所があつた。その爲めに專心國外の事に從事するこ

とが出來なかつた。織田氏の大將の筑前守羽柴秀吉は明智光秀を誅戮して京畿地方を平定し、柴田勝家と戰つて之を殺し、加賀・能登を取つた。十二年、使者を立て好を通ぜしめて曰ふには「余は佐佐成政を攻めて越中を取らうと思つて居る。何卒貴公には成政を助けずに置いて貰ひ度い」と。景勝は答へていふには「余は元來成政とは仇である。その上、越中は本、吾が領分である。だから余が先きに之を取らうと思ふ」と。そこで、自ら兵に將として越中に入り込んだ。十月、宮崎城を攻め、一度で之を陷れ、羽柴氏の使者に向つていふには「越後男子の戰の仕方は先づこんなものである。返つて筑前守（羽柴）に話して貰ひ度い。余は越中で取りたいと思ふものはすぐに取つて終ふ。そして取らないものは貴公に讓るのであるから何卒遠慮なく取つて貰ひたい」と。

語釋　政景罪（謙信に反いた罪）　○新發田（越後）　○宮城（越中）

十三年四月、秀吉攻降成政、取越中。五月、秀吉獨率石田三成等三十人、來入越後、自稱使者、至薄氷城、見城將須賀、告以實、欲面見景勝計事。須賀以兵守之、而馳告景勝、請執殺之。景勝不許曰「彼身司天下權、而踰險入敵國者、蓋恃前約、以吾必不食言也。殺之不義。即日、與直江兼續等六十餘人、見秀吉。秀吉屏人與語。獨兼續與三成得侍。已而別去。七月、上田城主眞田昌幸、畔德川氏、復屬景勝、送質乞援。景勝遣須田某・本莊某等、將信濃兵六千赴援。兵少利。景勝欲大擧繼之。

徳川氏兵引去。十二月、秀吉又使使厚贈越後君臣、促其入朝。

訓讀 十三年四月、秀吉、成政を攻め降し、越中を取る。五月、秀吉獨り石田三成等三十人を率ゐ、來つて越後に入り、自ら使者と稱し、薄氷城に至り、城將須賀を見、告ぐるに實を以てし、面のあたり景勝を見て、事を計らんと欲す。須賀、兵を以て之を守り、馳せ景勝に告げ、執へて之を殺さんと請ふ。景勝許さずして曰く「彼れ身、天下の權を司る。而して險を踰え敵國に入るは、蓋し前約を恃み、吾れ必ず言を食まずと以へばなり。之を殺すは不義なり」と。即日、直江兼續等六十餘人と、秀吉を見る。秀吉、人を屛け與に語る。獨り兼續と三成と侍するを得たり。已にして別れ去る。七月、上田城主眞田昌幸、徳川氏に畔き、復景勝に屬し質を送り援を乞ふ。景勝、須田某・本莊某等を遣はして、信濃の兵六千に將として赴き援けしむ。兵、利少し。景勝、大擧して之に繼がんと欲す。徳川氏の兵引き去る。十二月、秀吉、又使をして厚く越後の君臣に贈らしめ、其の入朝を促す。

通釋 十三年四月、秀吉は成政を攻め降して、越中を取つた。五月、秀吉はひとり石田三成等三十人をつれて越後に入り、自身使者だと言つて薄氷城に至り、城將須賀某に會つて、實は秀吉だがと眞實をあかし、景勝に面と向つて相談したいと思ふと申し込んだ。須賀は兵士で之を守つて置いて、自分は馳せて、景勝に告げ、秀吉を捕へて殺したいと願ひ出た。景勝は許さないで曰ふのに「彼は今や自ら天下の大權を掌つてゐる。その者が斯うして險阻を越えて、敵國に入つたのは、思ふに、此の前の和睦の約束を信頼し、余が決して詐を言はない男だと思つてゐればこそである。それを殺すのは不義である」と。その日、すぐ直江兼續等六十餘人と往つて秀吉に會

つた。秀吉は、人拂をして共に語つた。たゞ兼續と三成とだけが傍に侍することを許された。それが濟んでから別れ去つた。七月、上田の城主眞田昌幸は德川氏に叛いてまた景勝に屬き、人質を送つて、援助を乞うた。景勝は須田某・本莊某等を遣はし、信濃の兵六千に將として援けに行かせた。併しあまり香しくなかつた。景勝は大軍を起して繼いで往かうと思つた。所が德川氏の兵は引き去つて終つた。十二月、秀吉は、又使者を立てて厚く越後の君臣に物を贈らしめ、景勝が京都に入朝するように催促した。

十四年五月、景勝入朝。秀吉供帳路次、爲奏敍正四位上、任參議。七月、歸國。是歲陷新發田、盡定越後。十五年、定佐渡・莊內。十七年、景勝又入京師。進從三位、遷中納言。直江兼續爲四位侍從。藤田・泉澤・安田三臣、皆敍四位。兼續自父實綱、常參謀議、爲仇人刺死無子。謙信命近士樋口與六爲嗣。是爲兼續。多文武材能。事景勝、尤見寵任。十八年、秀吉東伐北條氏。景勝與前田利家、自東山道進、下數十城。北條氏滅。又與利家徇陸奧・出羽。文祿元年、從秀吉伐朝鮮、陣那古耶。二年、景勝將兵入朝鮮、築釜山城而歸。

訓讀 十四年五月、景勝、入朝す。秀吉、路次に供帳し、爲めに奏して正四位上に敍し、參議に任ず。七月、國に歸る。是の歲、新發田を陷れ、盡く越後を定む。十五年、佐渡・莊內を定む。十七年、景勝、又京師に

入る。從三位に進み、中納言に遷る。直江兼續、四位の侍從と爲る。藤田・泉澤・安田の三臣、皆四位に敍せらる。兼續、父實綱より、常に謀議に參し、仇人に刺死せられ、子なし。謙信、近士樋口與六に命じ嗣と爲らしむ。是を兼續と爲す。文武材能多し。景勝に事へ、尤も寵任せらる。十八年、秀吉、東北條氏を伐つ。景勝、前田利家と、東山道より進み、數十城を下す。北條氏滅ぶ。又利家と、陸奧・出羽を徇ふ。文祿元年、秀吉に從ひ朝鮮を伐ち、那古耶に陣す。二年、景勝、兵に將として朝鮮に入り、釜山城を築いて歸る。

通釋 十四年五月、景勝は入朝した。秀吉は路筋に色々と手當てをして之をもてなし、景勝の爲めに奏請して正四位上に叙し、參議に任じて戴いた。七月、歸國した。この年、新發田を陷れて、全部越後を平定した。十五年、佐渡・莊内をも平定した。十七年、景勝は又京都に入朝した。從三位に進み、中納言に遷つた。直江兼續は四位の侍從にして貰つた。藤田・泉澤・安田の三臣も皆四位に叙せられた。兼續は、父の實綱の時から、常に謀の相談に關係してゐたが、仇の爲めに刺し殺されて子がなかつた。謙信は近侍の樋口與六に命じてその相續者とならしめた。これが兼續である。この兼續は文武の材能の多かつた人である。景勝に事へて中でも最も氣に入つて信任せられてゐた。十八年、秀吉は東、北條氏を伐つた。景勝は、前田利家と東山道から進み、數十城を攻め落した。かくて北條氏は滅亡した。又利家と陸奧、出羽を徇へ下した。文祿元年、景勝は秀吉に從つて、朝鮮を征伐し、那古耶に陣取つた。二年、景勝は、兵に將として朝鮮に入り、釜山城を築いて歸つて來た。

語釋 文武材能（兼續は左傳、文選等を版行した儒門に功ある人。）○文祿（後陽成天皇の年號）

是ノ時、上杉氏所レ領スル、歲入可カリ二三百萬石一。秀吉心ニ畏二惡シ景勝之能一チ、又度リ下謙信久シク訓ヘ二其ノ國一ニ、國

人皆戴景勝、欲徙其封。嘗從容問之曰「卿國歲入幾何」景勝恐被削、不以實對。曰「七八十萬石耳」秀吉佯驚曰「何少也」因徙之會津、食百二十萬石、賜兼續以米澤地三十萬石、賜越後于堀秀治。景勝大悔之。是歲慶長二年也。

【讀法】是の時、上杉氏領する所の歲入三百萬石可り。秀吉、心に景勝の能を畏惡し、又謙信久しく其の國に訓へ、國人皆景勝を戴くを度り、其の封を徙さんと欲す。嘗て從容として之に問うて曰く「卿の國の歲入幾何ぞ」と、景勝、削られんことを恐れ、實を以て對へず。曰く「七八十萬石のみ」と。秀吉佯り驚いて曰く「何ぞ少き」と。因つて之を會津に徙し、百二十萬石を食ましむ。兼續に賜ふに米澤の地三十萬石を以てし、越後を堀秀治に賜ふ。景勝、大に之に悔ゆ。是の歲、慶長二年なり。

【通釋】この時、上杉氏領內の一年の收入は約三百萬石であつた。秀吉は心中景勝の材能を畏れ惡み、又謙信が長い間その國人を訓練し、國人も亦皆景勝を推戴してゐて、中々其の勢の強いことを心配し、何とかして所換をしようと思つて居た。ある時、從容として景勝に問うていふのに「貴公の國の歲入は幾ら位あるか」と。景勝は削られるのを恐れて實際を答へなかつた。曰ふのに「七八十萬石です」と。秀吉はわざと驚いて曰ふのに「それはまた少いではないか」と。そこで之を會津に徙して百二十萬石を食ましめた。兼續は米澤の地三十萬石を賜ひ、越後を堀秀治に賜はつた。景勝は非常に之を殘念に思つた。この歲は慶長二年であつた。

三年、秀吉有疾。嗣子秀頼猶幼。乃以景勝與德川・前田・毛利・浮田氏、竝稱五大老、與

爲盟約。秀吉薨。徳川公威權獨熾。四年、石田三成與直江兼續謀、勸景勝擧兵。曰「群牧共願推公。」爲諸將載書示之。因密定議。七月、與佐竹義宣皆就國、城香指原、修壘塞、峙糧餉、誘陸奥・出羽士兵、齊起、又使人招越後遺民。遺民競起應之。堀氏不能制。五年正月、使藤田信吉賀正於大坂。徳川公厚賜之。信吉歸、驟諫景勝。兼續欲殺之。三月、信吉挈家奔歸徳川氏。徳川氏使伊奈圖書來諭景勝西上。景勝不聽。數徳川氏背盟十罪。徳川公終決意東伐。令前田・佐竹・伊達・最上氏四面來擊。伊達氏國會津東境。先衆而至。其將伊達成實・片倉景綱將兵來侵。景勝遣兵擊卻之。

【訓譯】三年、秀吉、疾あり。嗣子秀頼、猶ほ幼なり。乃ち景勝と、徳川・前田・毛利・浮田氏とを以て、並に五大老と稱し、與に盟約を爲さしむ。秀吉、薨ず。徳川公、威權獨り熾なり。四年、石田三成、直江兼續と謀り景勝に勸め兵を擧げしむ。曰く「群牧共に公を推さんことを願ふ」と。諸將の載書を爲り之を示す。因つて密に議を定む。七月、佐竹義宣と皆國に就き、香指原に城き、壘塞を修め、糧餉を峙て、陸奥・出羽の士兵を誘ひ齊しく起たしめ、又人をして越後の遺民を招かしむ。遺民競ひ起ち之に應ず。堀氏、制する能はず。五年正月、藤田信吉をして、正を大坂に賀せしむ。徳川公厚く之に賜ふ。信吉歸り、驟景勝を諫む。兼續、之を殺さんと欲す。三月、信吉、家を挈へ、奔つて徳川氏に歸す。徳川氏、伊奈圖書をして、來り景勝に諭し西上せしむ。景勝

聽かず。徳川氏の盟に背ける十罪を數ふ。徳川公、終に意を決して東伐す。前田・佐竹・伊達・最上氏をして、四面より來り撃たしむ。伊達氏は會津の東境に國す。衆に先だつて至る。其の將伊達成實・片倉景綱、兵に將として來り侵す。景勝、兵を遣はし撃つて之を卻く。

通釋 慶長三年、秀吉は病氣に罹つた。嗣子の秀頼はまだ幼なかつた。そこで上杉景勝と、徳川家康・前田利家・毛利輝元・浮田秀家とを以て並に五大老と稱し、與に秀頼を輔けるように誓をして、約束せしめた。かくて秀吉は薨去した。五大老の內、徳川公の威權だけがひとり盛であつた。四年、石田三成は直江兼續と相談し、景勝に勸めて、兵を擧げさせることにした。そして曰ふのに「諸大名は皆貴公を推して總大將としたいと願つてゐます」と。諸將の連判狀を作つて、景勝に見せた。それから內々に相談を決めた。七月、景勝は佐竹義宣と皆本國にかへり、景勝は、香指原に城を築き、塞を修繕し、兵糧を蓄へ、陸奥、出羽の士兵を引き込み、一齊に起たしめ、又人をやつて越後のもとの人民を招かしめた。その遺民等は我も〱と起つて之に味方した。新任の國主堀氏は之を取り鎭めることは出來なかつた。五年正月、藤田信吉をして大坂に年賀をする爲めに往かせた。徳川公家康は手厚く之に物を賜はつた。信吉は國に歸つてから度々徳川に對し兵を起すことに就て景勝を諫めた。兼續は之を殺さうと思つた。三月、信吉は家族をつれて出奔して徳川氏に屬いた。徳川氏は伊奈圖書をよこして景勝に京都に上るように諭さしめた。景勝は承知しなかつた。それ所かあべこべに徳川氏が五大老の盟約に背いてゐる十箇條の罪を數へ立てゝ責めた。徳川公は終に決心して上杉氏を征伐することにした。前田利家・佐竹義宣・伊達政宗・最上義光の諸氏をして四方から夾み撃たせた。伊達氏は會津の東境に領國を有してゐた。その關係で衆に先きだつてやつて來た。その將、伊達成實・片倉景綱は兵に將として侵して來た。景勝は兵を遣つて撃つて

之を退けた。

語釋 香指原（陸奥）

七月、德川公統將帥百餘人、至小山。景勝軍長沼、分兵守險以待之。石田三成乃矯秀頼命、與毛利・浮田・島津・小西諸將倶擧兵至美濃。八月、德川公使庶長子秀康以萬人守宇都宮、而自引兵西上。直江兼續請悉兵躡之。景勝弗聽。會秀康來請戰。景勝答曰「先人用軍、未嘗乘人危。吾不敢違也。且公年少、非我敵。吾待內府返、決戰耳。糧仗如缺乏、當相給焉」乃收歸會津。德川公之西也、命諸將曰「景勝勁敵也。愼勿與爭鋒」是以四鄰環守、不敢來犯。

訓讀 七月、德川公、將帥百餘人を統べ、小山に至る。景勝、長沼に軍し、兵を分ち險を守り以て之を待つ。石田三成、乃ち秀頼の命を矯め、毛利・浮田・島津・小西の諸將と、倶に兵を擧げて、美濃に至る。八月、德川公、庶長子秀康をして、萬人を以て宇都宮を守らしめ、而して自ら兵を引いて西上す。直江兼續、兵を悉して之を躡せんと請ふ。景勝聽かず。會〻秀康來り戰を請ふ。景勝答へて曰く「先人、軍を用ふるに、未だ嘗て人の危きに乘ぜず。吾れ敢て違はざるなり。且つ公は年少にして、我が敵に非ず。吾れ內府の返るを待ち、決戰せんのみ。糧仗如し缺乏せば、當に相給すべし」と。乃ち收めて會津に歸る。德川公の西するや、諸將に命じて曰く

「景勝は勁敵なり。愼んで與に鋒を爭ふ勿れ」と。是を以て、四隣環守し、敢へて來り犯さず。

通釋 七月、徳川公家康は將帥百餘人を引率して、小山に着いた。景勝は長沼に陣取り、兵を分けて險阻を守り、徳川の來るのを待つた。すると石田三成は詐つて秀頼の命令だといつて、毛利・浮田・島津・小西の諸將と一緒に兵を擧げて美濃に進み出た。八月、徳川公は側腹の長子秀康をして萬人を率ゐて宇都宮を守らせ、そして自分は兵をつれて、西、京都へ上つて行つた。直江兼續は全部の兵を擧げて之を尾撃したいと申し出た。併し景勝は聞き入れなかつた。丁度そこへ秀康が來て戰を申し込んだ。景勝は答へていふのに「わが父が兵を動かすのには、人の危いところを付け込むやうなことは、一度もしたことがない。余もこの法に背くことは決してしない。それに貴公はまだ年も若くて我輩の相手にはなり申さぬ。余は内大臣殿(家康)の還るのを待つて勝負を決めたいと思ふ。若し兵糧武器に不足があればいつにても支給致すであらう」と。そこで、兵をまとめて會津に還つた。徳川公が西に向ふとき諸將に命じて曰ふのに「景勝は強い敵だ。滅多に之と戰を交へぬ樣にせよ」と。そこで四隣の諸侯も遠卷に守つてゐて無暗に來り犯さなかつた。

語釋 先人(謙信)〇内府(家康は當時内大臣であつた)

九月、景勝以兵四萬附兼續、令攻最上義光于山形。義光設二十五砦待之、請援於伊達政宗。政宗發兵二萬赴之。兼續拔二十一砦、進攻長谷城、起樓櫓、鑿地道、晝夜攻擊。城將志村高治善拒。景勝又遣中村式部攻上山城。不利。義光・政宗合兵來援。

兼續軍中有傳呼。曰「上國軍敗矣。」已而使者至自會津、傳三成敗聞、命班師。兼續曰「聞變而退怯也。」乃使人入城告故、且日鼓衆齊登、陷其外城而返。義光・政宗與高治尾撃之。兼續返戰二十餘次而至米澤。政宗進攻福島。本莊繁長守城、撃卻之。

訓讀 九月、景勝、兵四萬を以て兼續に附し、最上義光を山形に攻めしむ。義光、二十五砦を設けて之を待ち、援を伊達政宗に請ふ。政宗、兵二萬を發し、之に赴く。兼續二十一砦を拔き、進み長谷城を攻め、樓櫓を起し、地道を鑿ち、晝夜攻撃す。城將志村高治善く拒ぐ。景勝又中村式部を遣はし、上山城を攻めしむ。利あらず。義光・政宗、兵を合せ來り援く。兼續の軍中、傳呼するものあり。曰く「上國の軍敗る」と。已にして使者、會津より至り、三成の敗聞を傳へ、命じて師を班さしむ。兼續曰く「變を聞き退くは、怯なり」と。乃ち人をして城に入り故を告げしめ、且日衆を鼓し齊しく登り、其の外城を陷れて返る。義光・政宗、高治と之を尾撃す。兼續返り戰ふこと二十餘次にして、米澤に至る。政宗進み福島を攻む。本莊繁長、城を守り、撃つて之を卻く。

通釋 九月、景勝は兵四萬を率ゐて兼續に與へ、最上義光を山形に攻めさせた。義光は二十五個所に砦を設けて、之を待ち、援助を伊達政宗に請うた。政宗は兵二萬を繰り出して援けに出かけた。兼續は二十一個所の砦を陷れ、進んで、長谷城を攻め、やぐらを作り、穴道を掘つて晝も夜も攻撃した。城將志村高治はよく之を拒いだ。景勝は又中村式部を遣はし、上山城を攻めしめた。併しうまく行かなかつた。義光・政宗は兵を合せて來り援けた。この時、兼續の軍中に傳へ叫ぶ者があつた。曰ふのに「上方の軍勢が敗けた」と。其の内に會津から使者が來て三成が敗けたといふ知らせを傳へ、軍を還すように命じた。兼續がいふのに「變事を聞いて退くのは臆

病である」と　そこで使者を城内にやりその譯を話させ、翌日衆を勵まして一齊に攻め登り、その外側の城を陷れて返つた。義光・政宗は高治と一緒に追擊した。兼續は引き返して二十餘回も戰ひ、遂に米澤に歸着した。政宗は進んで福島を攻めた。本莊繁長は城を守り、擊つて之を退けた。

語釋　長谷城、上山城(出羽)

六年二月、政宗又來侵。繁長又擊却之。政宗轉濟逢隅河、攻梁川。城將須田大炊、設四伏而與戰、破之。四月、政宗留兵備須田、而返攻本莊。本莊出距松川、侮敵不備。政宗乘曉而濟、擊敗之。本莊走入福島。須田聞之、濟逢隈河、破其兵、遂襲政宗軍後、與本莊夾擊走之。景勝乃自將而出。政宗驚、舍其軍、獨與十餘騎、間道走白石。德川公既克石田氏、天下歸之。景勝因秀康謝罪。德川公使人來促其西上。景勝卽治行。將士皆危而止之。景勝曰「吾豈可再負乎」。七月、至伏見謁見。八月、國除、獨食米澤三十萬石。宥兼續罪、賜五萬石。

訓讀　六年二月、政宗又來り侵す、繁長又擊つて之を卻く。政宗轉じ逢隈河を濟り、梁川を攻む。城將須田大炊、四伏を設けて與に戰ひ、之を破る。四月、政宗、兵を留め須田に備へ、返つて本莊を攻む、本莊出でて松川を距ぎ、敵を侮つて備へず。政宗曉に乘じて濟り、擊ち之を敗る。本莊走つて福島に入る。須田之を聞き、逢隈

河を濟り、其の兵を破り、遂に政宗の軍後を襲ひ、本莊と夾み擊つて之を走らす。景勝、乃ち自ら將として出づ。政宗驚き其の軍を舍て、獨り十餘騎と、間道より白石に走る。德川公既に石田氏に克ち、天下、之に歸す。景勝、秀康に因つて罪を謝す。德川公、人をして來り其の西上を促さしむ。景勝、卽ち行を治む。將士皆危みて之を止む。景勝、曰く「吾れ豈に再び負く可けんや」と。七月、伏見に至つて謁見す。八月、國除かれ、獨り米澤三十萬石を食む。兼續の罪を宥して、五萬石を賜ふ。

通釋 六年二月、政宗は又來つて福島を攻めた。繁長は又擊つて之を退けた。政宗は轉じて逢隈河を渡つて梁川を攻めた。城將須田大炊は四個所に伏兵を設けて與に戰つて之を敗つた。四月、政宗は兵を殘して須田に備へ、そして自分は還つて本莊を攻めた。本莊は出でゝ松川といふ所で拒いだが、敵を侮つて用意しなかつた。政宗は曉け方につけ込んで河を渡つて擊つて之を敗つた。本莊は走つて福島に入つた。須田は之を聞いて、逢隈河を渡つてその兵を破り、遂に政宗の軍を襲ひ、本莊と夾み討ちにして之を走らせた。そこで景勝は自分で大將となつて出かけた。政宗は、驚いて其の軍を放つて置いて獨りで十餘騎とぬけ道から白石に逃げた。德川公はその時はもう石田三成に克つて天下は之に歸服してゐた。景勝は秀康を賴んで罪を謝した。德川公は使者を立てて景勝が上方に來るように催促させた。景勝は早速旅の支度をした。將士は皆危んで、之を止めた。景勝がいふのに「去年も言ふことに背いたのに又背くことは自分には出來ぬ」と。七月、伏見に來て、德川公に謁見した。八月、國を取り上げられ、たゞ米澤の三十萬石を領有することとなつた。兼續の罪を宥して、五萬石を賜はつた。

語釋 松川・白石（陸奧）〇再背（伊奈圖書が來て西上を促した時に一度行かなかつた）

慶長十九年十一月、大坂兵起。徳川公率諸將攻之。景勝與佐竹義宣爲先鋒。二十四日、至大坂。景勝將杉原常陸、尙水干衣於鎧表。衆指而異之曰「彼越後宿將也。是其軍禮乎」杉原聞笑曰「吾鎧太敝惡。故尙此耳」景勝陣鴫野、義宣陣今福、間日竝進、破敵柵。景勝命植柵、設塹于大和河南、令隊將鐵某將銃手五百守之。將士竊言曰「此非戰場。不知何用」日午城兵大出、義宣兵不利。銃手齊發。敵兵乃卻。已而城兵七隊出鴫野。我先鋒須田大炊與戰、敗走。杉原常陸與安田上總・長尾權四郎進擊、斬其三將。

訓讀 慶長十九年十一月、大坂に兵起る。徳川公、諸將を率ゐ之を攻む。景勝、佐竹義宣と先鋒たり。二十四日、大坂に至る。景勝の將杉原常陸、水干衣を鎧の表に尙ふ。衆、指し之を異みて曰く「彼は越後の宿將なり。是れ其の軍禮か」と。杉原聞き笑つて曰く「吾が鎧太だ敝惡なり。故に此を尙ふるのみ」と。景勝は鴫野に陣し、義宣は今福に陣し、間日、竝び進み、敵の柵を破る。景勝命じて柵を植て、塹を大和河の南に設け、隊將鐵某をして・銃手五百に將として之を守らしむ。將士、竊に言つて曰く「此れ戰場にあらず。知らず、何の用ぞ」と。日午、城兵、大に出で、義宣の兵、利あらず。銃手齊しく發す。敵兵乃ち卻く。已にして城兵七隊、鴫野に出づ。我が先鋒須田大炊、與に戰ひ敗走す。杉原常陸、安田上總・長尾權四郎と・進み擊ち其の三將を斬る。

通釋 慶長十九年十一月、大坂に戰爭が起つた。德川公家康は諸將を率ゐて、之を攻めた。景勝は佐竹義宣と共に先鋒となつた。二十四日大坂に着いた。景勝の大將の杉原常陸は水干の衣を鎧の上に着けて居た。皆の者は指して之を怪しんでいふには「彼は越後の古い大將である。あんなものを羽織るのは軍中の禮でもあるのか」と。杉原が聞いて笑つていふのに「余の鎧は隨分古くて見苦しい。だから之を上に着たのである」と。景勝は鴫野に陣取り、義宣は今福に陣取り、一日置いて一緒に進み、敵の柵を擊ち破つた。景勝は命じて柵を立て、濠を大和河の南に掘らせ、隊長の鐵某をして、鐵砲組五百人の大將として之を守らしめた。將士はひそかに言つていふのに「こゝは戰場ではない何の用にするのか知らん」と。眞晝頃城兵が多數出て來て、義宣の兵は敗れた。この時鐵砲組は一齊に射擊した。そこで敵兵は堪らず退却した。その內に城兵七隊は鴫野に出た。我が先鋒の須田大炊は城兵と戰つて敗走した。杉原常陸は安田上總・長尾權四郎と一緒に進擊し、敵將三人を斬り殺した。

語釋 水干衣（狩衣の一種）

德川公聞二鴫野戰急一、令三堀尾氏・丹羽氏來代二景勝一。景勝以二槍手三百一自環爲レ陣、憑レ椅不レ動。使者十餘輩來傳二敎旨一。皆不レ得レ入。景勝厲レ聲曰「吾在二戰場一。雖レ有二敎命一、不レ能レ退二一步一」。麾レ兵益進、遂破二城兵一。城兵入レ柵。景勝銃手又驅二柵內兵一入レ城、不レ使二復出一。須田愧レ敗、與二五騎一馳二入敵中一、人得二一首級一而返。德川公軍監小栗又一具レ狀以聞。退語二同僚一曰「今日戰既解、猶有下宜二進擊一之機上。吾言レ之、景勝辭以二日暮一。可レ憾」。德川公聞レ之、叱曰「景

勝武事、若曹敢得誹議之。」次日巡視諸營、至上杉氏、親慰勞之、遂賜功狀於杉原・長尾・安田・須田・鐵・島津等。杉原伏謝曰「臣等何力之有焉。先寡君家範猶存。臣等奉以周旋焉耳。」退謂人曰「吾從先公、數與武田氏戰。若今日之戰、乃兒戲耳。何足載功狀乎。」

訓讀 徳川公、鴫野の戰急なるを聞き、堀尾氏・丹羽氏をして、來り景勝に代らしむ。景勝、槍手三百を以て、自ら環らしめ陣を爲し、椅に憑つて動かず。使者十餘輩、來つて敎旨を傳ふ。皆入るを得ず。景勝、聲を厲して曰く「吾れ戰場に在り。敎命ありと雖も、一歩を退く能はず」と。兵を麾き益〻進み、遂に城兵を破る。城兵、柵に入る。景勝の銃手、又柵內の兵を驅り城に入らしめ、復出でしめず。須田、敗を愧ぢ、五騎と馳せて敵中に入り、人ごとに一首級を得て返る。徳川公の軍監小栗又一、狀を具して以て聞す。退いて同僚に語つて曰く「今日、戰既に解くるも、猶ほ宜しく進み擊つべきの機あり。吾れ之を言ふも、景勝辭するに日暮るゝを以てす。憾む可し」と。徳川公、之を聞き、叱して曰く「景勝の武事、若が曹、敢て之を誹議するを得んや」と。次日、諸營を巡視し、上杉氏に至り、親ら之を慰勞し、遂に功狀を杉原・長尾・安田・須田・鐵・島津等に賜ふ。杉原、伏謝して曰く「臣等、何の力か之れ有らん。先寡君の家範猶ほ存す。臣等奉じ以て周旋せしのみ」と。退き人に謂つて曰く「吾れ先公に從ひ、數武田氏と戰ふ。今日の戰の若きは、乃ち兒戲のみ。何ぞ功狀に載するに足らんや」と。

【通釋】徳川公は鴫野の戰爭の危いことを聞いて堀尾氏・丹羽氏をやつて、景勝と交代させようとした。所が景勝は槍組三百人にぐるり自分を取り卷かせて陣形を作らせ、自分は椅子に倚りかゝつて動かない。使者は前後十餘人も將軍の命令を傳へにやつて來た。しかし皆その陣中に入ることが出來ない。景勝は聲を勵ましていふのに「吾は戰場にゐるのである。たとひ將軍の命令でも、一歩も退くことは出來ない」と。兵を指揮して益進み、遂に城兵を破つた。それで城兵は柵矢來の內に入り込んだ。景勝の鐵砲組は又柵內の兵を追ひ出して城內に入れ込み、もう出ることの出來ないやうにした。須田は負けたのを愧ぢて五騎と共に馳せて敵中に入り、銘々一首級を得て返つた。徳川公の軍目附小栗又一は樣子を逐一申し上げた。退いて同僚に語つていふのに「今日戰爭はもう濟んだが、それでもまだ進擊するのに宜い機會があつた。余は之を景勝に言つて見たが、景勝はもう日が暮れたからといつて斷つた。惜しいことをした」と。徳川公は之を聞いて、又一を叱つていふのに「景勝の戰事の手並は、お前達がどうして、彼れ是れ誹ることが出來やうぞ」と。次の日、諸營を巡視し、上杉氏の營に至り、徳川公自身親しく、之を慰勞し、遂に感狀を杉原・長尾・安田・須田・鐵・島津等に賜はつた。杉原は伏して御禮をいつていふのは「私どもに何の手柄がありませうぞ。亡くなりました謙信公の家法がまだ殘つて居ります。私どもは之を守つて働いただけで御座います」と。退いて人に向つていふのに「拙者は先殿樣に從つて、度々武田氏と戰つた。今日の戰爭の如きはそれに比べるとまるで小供の遊び事である。感狀に書き立てる程のことではないさ」と。

元和元年五月、再攻二大坂一。景勝以二特命一留二守京師一、陣二八幡一。凡兩役所レ用軍監、選下練二兵

事者、傳命諸營、多甲斐舊臣。而眞田昌幸子幸村在城中。戰守最可觀。世以爲出武田氏遺法也。九年三月、景勝病卒。年六十九。子定勝・孫綱勝相繼襲官秩。綱勝夭。以外甥吉良義英子綱憲爲嗣、削十五萬石。

訓讀 元和元年五月、再び大坂を攻む。景勝、特命を以て京師に留守し、八幡に陣す。凡そ兩役に用ふる所の軍監、兵事を練る者を選び、命を諸營に傳ふるに、甲斐の舊臣多し。而して眞田昌幸の子幸村、城中に在り。戰守最も觀るべし。以て武田氏の遺法に出づと爲す。九年三月、景勝病み卒す。年六十九。子定勝・孫綱勝相繼いで官秩を襲ぐ。綱勝、夭す。外甥吉良義英の子綱憲を以て嗣と爲し、十五萬石を削らる。

通釋 元和元年五月再び大阪を攻めた。景勝は特別の命令で京都を留守することゝなり、八幡に陣取つた。凡そ大坂兩度の戰爭に用ひられた軍目付が、指圖を諸營に傳へるのに兵事に熟練した者を選び用ひたが、それには甲斐の舊臣が一番多く選ばれて使はれた。そして眞田昌幸の子の幸村は城中に居たが、その攻防ともに最も手並が勝れてゐた。世間では、武田の家法から出たやり方だと言つてゐた。九年三月、景勝は病氣で死んだ。年は六十九であつた。子の定勝、孫の綱勝が相繼いで官位秩祿を嗣いだ。綱勝は若死をした。それで母方の甥吉良義英の子綱憲を繼嗣とし、十五萬石を削られた。

語釋 元和（後水尾天皇の年號）〇吉良義英（大石良雄に刺されし人）〇削十五萬石（養子緣組に不法があつたといふ。或はいふ赤穗浪士の一件にて削封に會ふと。）

上杉義春、本畠山氏。爲謙信子養、後以爲上條城主、承故上杉定實後、佐景勝、擊景

虎、最有功。徳川公命復畠山氏。削髮號入庵、老於京市。大坂冬役、召之二條城、問上杉氏行軍法。諸侯伯皆侍焉。義春爲人短小而善辯。陳己嘗從謙信所聞見。音辭如流。公稱善。諸將皆織田・豐臣以來、老兵豪傑、而毋敢出聲者。後病眼盲。使人讀近代史乘聽之、至武田・上杉氏事、往往指其謬僞云。

訓讀 上杉義春は、本畠山氏なり。謙信に子として養はれ後に以て上條城主と爲り、故の上杉定實の後を承け、景勝を佐け、景虎を擊ち、最も功あり。徳川公、命じて畠山氏に復す。髮を削り入庵と號し、京市に老す。大坂の冬の役に、之を二條城に召し、上杉氏行軍の法を問ふ。諸侯伯皆侍す。義春、人と爲り短小にして善く辯ず。己れ嘗て謙信に從ひ聞見せし所を陳ぶ。音辭流るるが如し。公、善しと稱す。諸將、皆、織田・豐臣以來、兵に老ゆる豪傑にして、敢て聲を出だす者なし。後、眼を病みて盲す。人をして近代の史乘を讀ましめて之を聽き、武田・上杉氏の事に至れば、往々其の謬僞を指せりと云ふ。

通釋 上杉義春は元來畠山氏であつた。謙信に子として養はれ、後に上條の城主となり、もとの上杉定實の後を承けつぎ、景勝を助け、景虎を擊つて最も手柄があつた。徳川公は命じてもとの畠山氏に復らせた。髮を剃り落して、入庵と號し、京都の街中に隱居して居た。大坂冬の陣の時入庵を二條城に呼び出して、上杉氏の戰爭の法を問うた。大小名は皆侍坐して聽いて居た。義春はその人柄は丈の低い小男であつたが、辯舌は上手であつた。自分が嘗て謙信に從つて、見たり聞いたりしたことを述べた。その言葉は、水の流れるがやうであつた。徳川公

は善しといつて賞めた。侍坐してゐた諸將は皆織田・豐臣以來戰爭には慣れ切つた豪傑揃ひであつたが、ちつとも口出しをするものもなかつた。後、眼病で盲目になつた。それからは人を頼んで近代の歴史物語等を讀ませて、之を聞き、武田・上杉氏の事になると度々その間違ひを指摘したといふことである。

【語釋】冬役（慶長十九年十一月）○二條城（京都）

宇佐美定行之孤定興、數潛從軍、欲立功自贖。景勝以其父故不許也。流寓諸國。及關原事作、赴難會津。及徙封、終隱越後終身。其子勝興仕紀伊。亦於越後事跡有所綜覈。

【訓讀】宇佐美定行の孤定興、數潛に軍に從ひ、功を立て自ら贖はんと欲す。景勝、其の父の故を以て許さず。諸國に流寓す。關原の事作るに及び、難に會津に赴く。封を徙さるるに及び、終に越後に隱れて身を終ふ。其の子勝興、紀伊に仕ふ。亦越後の事跡に於て綜覈する所あり。

【通釋】宇佐美定行の孤兒定興は度々内所で戰爭に出て、功を立て、自ら罪を贖はうと思つた。景勝は其の父定行が自分の親を殺したので許さなかつた。そこで定興は諸國に流浪してゐた。關原の戰爭が起つたので會津に馳けつけ舊主の難に赴いた。景勝が米澤に所換へとなつたので遂に越後に隱れて一生を終つた。その子の勝興は紀伊に事へた。この人も亦越後の事に就いてはその事實をまとめて明らかにしたことがあつた。

【語釋】其父故（其の父定行が政景と野尻湖に溺れた一件）

初武田・上杉二家、並務耕戰、以名法治國、政貴嚴刻、而上杉氏作事、率仗信義。是其所以獨存至今也。然世言兵法、並稱二家云。

訓讀 初め武田・上杉の二家、並に耕戰を務め、名法を以て國を治め、政、嚴刻を貴ぶ。而して上杉氏、事を作すに、率ね信義に仗る。是れ其の獨り存して今に至る所以なり。然れども世、兵法を言へば、二家を並稱すと云ふ。

通釋 はじめ、武田・上杉の二家はどちらも農事と戰鬪とを務め、刑名法術を以て國を治め、その政治はいかにも嚴重苛刻にすることを貴んだ。そして上杉氏のやつたことは大抵信義を重んじた行爲が多かつた。これが上杉氏だけ今日まで亡びないで殘つた所以である。しかし世間で兵法のことをいへば、此の二家を同樣に賞め稱へるといふことである。

敍說 本論の主意は、我が國では、信玄・謙信の二公が兵家の冠たる者であつて、其の兵法は精を極めたものである。而かも孫吳にも比すべきこの二家が同時に出たことは實に希有に屬することである。其の兵書の如きは往々後人の加筆があるから、その事蹟と照合すれば自然明かとなるといふことである。

外史氏曰、「世傳二家兵書。有出後人假託者。不可盡信。特言兵於我邦、期乎二公者、不可不知其由也。

〔訓讀〕外史氏曰く世に二家の兵書を傳ふ。後人の假託に出づるものあり。盡くは信ず可からず。特だ兵を我が邦に言ふもの、二公に期することは、其の由を知らざる可からざるなり。

〔通釋〕外史氏が曰ふのに世間では甲州流とか越後流とか申して武田・上杉二家の兵書なるものを傳へてゐる。併し中には後の人が二家の名前を借つて、作つたものもある。眞僞が混じてゐるから皆まで信用は出來ない。しかし、我が國で兵法のことゝいふと、たゞ信玄謙信の二公に限られてる樣に思ふことに就いては、その理由を知つて置かなければならない。

〔餘論〕以上第一段、一篇の起手。

夫勇悍趫捷、重恥輕死、我國俗所自有、我先王又養之以恩、結之以信。所以撫摩鍊冶之、經數百千年、闔國之民、親其上死其長、如手足之扞頭目、以能震懾四隣、雖魏唐之强大、不能加焉者、恃此俗也。

〔訓讀〕夫れ勇悍趫捷にして、恥を重んじ死を輕んずるは、我が國俗の自ら有する所、我が先王、又之を養ふに恩を以てし、之を結ぶに信を以てす。之を撫摩、鍊冶し、數百千年を經て、闔國の民、其の上を親しみ、其の長に死すること、手足の頭目を扞るが如く、以て能く四隣を震懾し、魏唐の强大と雖も、加ふる能はざる所以は此の俗を恃みてなり。

〔通釋〕一體勇氣があつて且つ素早く、恥を重んじ死を輕んずることは、我が日本國の自然に有してゐる所の風

俗である。そこへ以て來て我が御歷代の天皇は仁愛を以てこの人民を養はれ、信實を以てこの人民を結びつけられたのである。人民を愛撫せられ鍛練せられて數百年から千年を經つて、全國の人民は君上を親しみ、その長上の爲め一命を捨て、それは恰も手足が頭や目を障へ拒ぐがやうにし、能く四方の隣國を震ひ怖れしめ、支那の强大であつた魏や唐のやうなものを以てしても、決して日本に兵を加へることが出來なかつたが、その所以は全く以上述べたやうな風俗があつたからである。

語釋　撫摩（小兒を撫でさするやうにすること）○魏唐（曹操の魏、李氏の唐共に支那の國名）

及レ至レ通ニ唐氏一、乃舍レ此學レ彼、斲レ樸爲レ文、鍥レ强爲レ弱。平時奔競、有レ急遁逃。幾ニ乎擧レ朝皆婦人一矣。而先王遺民、勇而輕レ死者、皆爲ニ將門所一レ收。以レ此奪ニ王權一、營ニ私利一、無ニ所レ爲而不一レ成。承久・建武之事、輒皆爲レ然。故先王所ニ以自衞一、後王所ニ以自累一、均此兵也。顧ニ用捨何如一耳。

訓讀　唐氏に通ずるに至るに及び、乃ち此を舍てて彼を學び、樸を斲り文と爲し、强を鍥み弱と爲す。平時は奔競し、急あれば遁逃す。朝を擧げて皆婦人に幾し。而して先王の遺民、勇にして死を輕んずる者、皆將門の收むる所と爲る。此を以て、王權を奪ひ、私利を營み、爲す所として成らざるはなし。承久・建武の事、輒ち皆然りと爲す。故に先王の自ら衞る所以、後王の自ら累ふ所以、均しく此れ兵なり。用捨如何を顧るのみ。

通釋　所が唐と交通するやうになつてからは我が日本固有の良風美俗を棄て、支那の開化に心を奪はれて彼を

學び、質朴な美風を削り去つて、彼の文飾ある風となして終ひ、剛强なる風を刻み滅らして柔弱なる風にして終つた。平生は名利を得んために權力ある勢力ある家に奔走して、名利を競ひ、一旦緩急の場合にはサッサと逃げ出して終ふやうになつた。さういふ譯で朝廷の者は全部女であるといつても宜い位、その仕業は男らしくなかつたのである。そして御歷代天皇がお仕込みになつて、お殘しなされた民で、勇敢にして死を輕んずるものは皆源平などといふ武門に取り込まれて終つたのである。そこで彼等武門の連中は、この人民を利用して皇室の權力を横取りし、何をやつても出來上らないものは無いといふ狀態であつた。承久の昔に、北條氏が三上皇をお流し申したことの如き、建武の代に足利氏が御醍醐天皇を隱岐にお流し申したことの如き、すなはち皆それでないものはない。だから御歷代天皇の自らお衞となされた者、後世の列聖が自らお累となされた者、これは皆同じ此の兵であつたのである。だからこの兵は用ふれはお役に立つが捨てると大變な禍になるので、其の用捨のどちらにするかといふことで禍福が決定されるのである。

【餘論】以上第二段、國朝の初め、民よく武を尙び、朝廷又よく之を養ひ、中頃將家がそれを奪つて、朝廷で之を用ひられなかつたことが衰微する因をなしたことを述ぶ。

降至戰國、此兵各爲群雄所分領、日淬月厲、愈用愈勁。而其撫摩錬冶、敎之而後戰者、莫武田・上杉過焉。故我邦兵之精、極於此時。而二家又精之精者矣。且源平以還、其兵皆散而自戰、將勇卒銳者勝。非必有束伍結陣坐作進退之法。有之、始於二家。

二家ノ兵法、傳ヘテ爲ニ我ガ邦ノ極則ト者、由ル此ニ焉爾。

訓読 降つて戰國に至り、此兵各群雄の分ち領する所と爲り、日に淬ぎ月に厲き、愈用ひて愈勁し。而して其の撫摩錬冶し、之に敎へ後戰ふものは、武田・上杉より過ぐるはなし。故に我が邦の兵の精は此時に極る。而して二家は、又精の精なるものなり。且つ源平以還、其の兵皆散じて自ら戰ひ、將勇に、卒鋭なるものは勝つ。必ずしも束伍、結陣、坐作、進退の法あるに非ず。之あるは、二家に始る。二家の兵法、傳へて我が邦の極則と爲すは、此に由るのみ。

通釋 降つて戰國時代になると、この勇敢なる兵は各群雄の爲めに分ち取る所となり、絶え間のない戰爭で日々月々鍛えられ磨かれ、用ふれば用ふる程それだけ愈強くなつたのであつた。その中でも愛撫し錬り鍛へ十分に敎へ込んで後に戰つた兵といへば、何といつても武田、上杉以上に出るものはなかつた。（二氏の兵は他に比べると迚も上手に訓練せられてゐた）だから我が國の兵士の精鋭であつた事は、この時分が極點といつてもよい。そして武田、上杉の二家は、精中の又精なるものであつた譯である。それに源平より以來その兵は皆散り〳〵になつて、てんでに戰ひ、大將が勇敢で士卒の鋭い者が勝つてゐた。（個人的の戰）兵士が一團となつて陣形を作り進んだり退いたりする懸け引の法があつた譯ではなかつたのである。さういふ集團的合法的の戰爭をやり出したのは武田、上杉の二家から始まつたのである。二家の兵法が傳へられて、我が日本國第一の法則とされてゐるのはかゝる理由に基づいてゐるのである。

語釋 束伍（十人組、五人組のやうに組を作ること）○結陣（立陣

然源氏・足利氏、毎自東國起、其兵習騎戰。而足利氏居京畿、不恤馬政。織田・豐臣・德川竝起侯甸、少騎多歩。即如二家、雖較多騎、亦以其國險、不便騎、騎率徒取致遠。至戰、概舍馬歩鬪。故騎戰遂廢。又用火器與長槍、以爲軍鋒。而弓矢之用稍衰。是又我邦兵體變遷、不可不知也。

訓讀 然れとも、源氏・足利氏は、毎に東國より起り、其の兵、騎戰に習ふ。而して足利氏は京畿に居り、馬政を恤へず。織田・豐臣・德川竝に侯甸に起り、騎少く歩多し。即ち二家の如きは、較騎多しと雖も、亦其の國の險にして騎に便ならざるを以て、騎は率ね徒だ遠きを致すに取る。戰に至つては、概ね馬を捨て歩鬪す。故に騎戰遂に廢す。又火器と長槍とを用ひ、以て軍鋒と爲す。而して矢弓の用稍衰ふ。是れ又我が邦兵體の變遷、知らざる可からざるなり。

通釋 併し源氏足利氏は常に東國から起つてゐて、その兵士は馬に乘つて戰ふことに慣れてゐた。そして足利氏は京都に居つて、軍馬に關する法規等に留意しなかつた。織田、豐臣、德川は皆畿內に近い地方から起つて、騎兵が少く歩兵が多かつた。武田・上杉となると、どつちかといふとやゝ騎兵の方が多かつたのであるが、これは其の國が險阻で馬に乘るのに具合が惡いからで、馬は大抵唯だ遠方へ行く場合だけに用ひてゐた。さあ戰爭となると、大抵馬を棄てゝかち立ちとなつて鬪つたものである。だから騎戰といふことが遂になくなつて來たのである。又鐵砲と長槍とを用ひて先手とするやうになつた。從つて弓矢の使用が漸時衰へて來たのである。これは又

我が邦の軍兵組織の變化であつて、知つて置かねばならぬことである。

語釋 侯甸（周禮の侯服、甸服のこと。畿内より離れたる地）

此時、兵農雖別、往往收漁獵者爲弓銃手、收盜賊爲間諜、以補隊伍、充斥候。二家皆是。二家之陣、大約弓銃手居前、長槍步卒次之、騎士次之、牙旗鼓螺居中、左右拒夾之、輜重居後、游兵居外。每戰交發弓銃、長槍從之。士下馬以進、或自卒傍出、或自中跳盪而出。戰酣、或以麾下乘之。雖變化無準、概以此爲常。一時竝同此法。而群雄環視、獨畏二家。幸其噬搏不解、不敢觸犯云。

訓讀 此時、兵農別ると雖も、往往、漁獵の者を收め弓銃手と爲し、盜賊を收め間諜と爲し、以て隊伍を補ひ斥候に充つ。二家皆是なり。二家の陣、大約、弓銃手、前に居り、長槍の步卒、之に次ぎ、騎士、之に次ぎ、牙旗・鼓・螺、中に居り、左右の拒之を夾み、輜重、後に居り、游兵、外に居る。戰ふ每に、交弓銃を發し、長槍以て之に從ふ。士は馬を下り以て進み、或は卒傍より出で、或は中より跳盪して出づ。戰酣なるとき、或は麾下を以て之に乘ず。變化、準なしと雖も、概ね此を以て常と爲す。一時竝に此法を同じくす。而して群雄、環視して、獨り二家を畏る。其の噬搏して解けざるを幸として、敢て觸れ犯さずと云ふ。

通釋 この當時、兵と農とは判つきり分れて居たが往々漁夫や獵師抔を呼び出して、弓手銃手となしたり、又

盜賊を採用して隱密となし、それを以て隊伍中に編成し、斥候兵に充てがつたりした。これは武田、上杉の二家共皆さうであつたのである。そして二家の陣立は大抵その弓手銃手が前に居つて、長槍を持つた步卒がその後から續き、騎兵が之に次ぎ、大將の旗・攻め太鼓・法螺貝の本隊が中央に居り、そして左右兩翼の備が之を夾み、輜重はその後方に居り、游擊の兵は外側に居つた。戰爭が始まると、いつも弓と鐵砲を交互に放ち敵のひるむ所を長槍が續いて出る。騎士は馬から下りて進み、場合によつては步卒の側から進出し、或は中央から跳り出て敵を衝いて出る。戰爭の眞最中になると時には旗下の兵をつれて之につけ込むのである。さういふ次第で兵の動きの變化に一定の準則はなかつたのだけれども、大抵は以上述べたやうな遣り方が常法であつた。一時は誰れでも皆此の法を用ひたものであつた。それでゐて群雄は遠くからめぐり眺めて(觸らぬやうに)たゞこの二家を畏れたのである。二家が互に爭ひ合つて解けなかつたことを宜い幸として、觸らぬ神に祟なしで觸らぬやうにして居たといふことである。

【語釋】左右拒(左拒・右拒、左傳に見ゆ。左陣右陣の意)

【餘論】以上第三段、用兵の法は信玄、謙信に至つて最も精しくなつたことを述ぶ。集團的戰法、步鬪、銃槍、合法的配置等、從來見なかつた戰法は二家によつて編み出された。

夫孫武・吳起不同世而生。饒使同世生、借人之兵、以施己之法、不能大展其力、確鬪決勝敗也。今二公挾孫吳之能、擅趙魏之甲、而比肩接踵於一時、可謂希世之遇矣。後之言兵者、觀二公相與之迹、識其形勢機權之大、然後參之其書、辨別眞僞、

其法可得而詳論。余是以合敍二家焉。

【訓讀】夫れ孫武・吳起、世を同じくして生ぜず。饒ひ世を同じくして生ずるも、人の兵を借り、以て己の法を施す。大に其の力を展べ、確鬪して勝敗を決する能はざるなり。今二公は、孫吳の能を挾み、趙・魏の甲を擅にし、一時に比肩接踵するは、希世の遇と謂ふべし。後の兵を言ふ者、二公相與するの迹を觀、其の形勢機權の大を識り、然る後に之を其の書に參し、眞僞を辨別せば、其の法得て詳論すべし。余、是を以て二家を合敍す。

【通釋】夫れ孫武や吳起は同じ世に生れなかつた。よし同じ世に生れたとしても他人の兵を借り、他人の兵を用ひて自分の兵法を施したのである。有らん限り自分の力を展べ、確つかりと鬪つて勝負を決めるといふことは出來なかつたのである。所が今、信玄、謙信の二公は孫武、吳起のやうな才能を持つてゐて、趙や魏の兵のやうな強い兵士を自由に用ひ、而かも同じ時代に肩を竝べて跡を交へて出て來たといふことは、實に世に稀な遭遇といふべきであらう。後世の兵事を談ずる者が二公の取り組んだ跡を觀て、その地理や機略や權變の偉大なることを識り、然る後に二家の兵書と、之を照合して見て、どこ迄が眞で、どこ迄が僞であるかといふことを判定し區別するなら、二家の兵法は易に詳しく論ずることが出來るだらう。余はさういふ考へからこの二家の傳記を一緒にして叙べた譯なのである。

【語釋】孫武（吳王闔閭に事へ、孫子を著す）○吳起（魏の文侯に事へ、其の兵法の書は吳子といふ）○確鬪（酷しく鬪ふこと）○趙魏之甲（趙魏は戰國の二大國）

【餘論】以上第四段、結尾。二家を合叙した所以を叙べて發端の兵書のことに言及したのである。

昔者、吾父嘗行過甲斐。甲斐民飲食必稱館君。館君信玄也。以信玄之悖逆、而能抗

强敵數十年、而不相下、豈非以其敎民有素哉。謙信之事、多世所不傳。余幷考畠山氏・宇佐美氏說。又與米澤人士交游。爲余言如此。

訓讀 昔者、吾が父嘗て行いて甲斐を過ぐ。甲斐の民、飮食するに必ず館君と稱す。館君とは、信玄なり。信玄の悖逆を以てして、能く强敵に抗すること數十年にして、相下らざる、豈に其の民を敎ふるに素あるを以てに非ずや。謙信の事、世に傳はらざる所多し。余、畠山氏・宇佐美氏の說を幷せ考ふ。又米澤人士と交游す。余の爲めに言ふこと此の如し。

通釋 昔余の父が旅行して甲州を通過したことがある。その土産話によると甲州の人はいつでも屹度「御屋形樣」といつて飮食してゐたといふことである。(これは其の德を忘れぬといふ意味であるといふことだ) その御屋形樣とは信玄のことである。信玄ほどの道に悖つた無道な男が、猶ほよく强敵上杉氏に數十年間も對抗して相下らなかつたといふことは、その人民をよく敎化したといふ下地があつたからではないか。(全くその下地があつたればこそ出來たのである)又謙信の事跡で世間に傳はつてゐない事が隨分ある。余は上杉に緣故のある畠山義春、宇佐美勝興の說を併せ參考として此の傳記を書いた。又余は米澤(上杉藩)の人士とも交際してゐる。その人々が余の爲めに話して呉れたことも前記の如く本文に書き込んで置いた。

語釋 吾父(春水先生、名は惟完、字千秋、通稱彌太郎、藝藩敎授、三百石を食み、廣島に住す。) ○畠山氏(卽ち入庵のこと)

餘論 以上第五段、餘波。二家の遺事を竝べ言つて餘波としたのである。

日本外史新釋卷十一終

日本外史新釋 卷十二

足利氏後記

毛利氏

毛利氏出於大江廣元。廣元十一世祖曰本主。姓土師氏、爲備中介。本主生音人。音人歷仕仁明・清和之間、至從三位左大辨。賜姓大枝氏。後更大江、與菅原氏、並掌學政。音人生千古。千古之後七世曰匡房、有文武才略。敎源義家以陣法。匡房曾孫爲廣元。廣元佐源賴朝于關東、使之覇天下。以其薦爲安藝介、遷因幡守、至正四位下大膳大夫、兼陸奧守。源氏・北條氏之際、爲幕府元老、數定大難。有五子。長子親廣、承久之役屬官軍、不知所終。第三子曰季光、爲左近衞將監、食相模毛利莊。因氏焉。娶

三浦氏死ス於其ノ難ニ。季光ノ子經光、出デテ鎌倉ヲ、居ル越後ノ南莊ニ。經光ノ子時親、復タ起ツテ爲ル六波羅ノ評定衆ト。足利尊氏滅シ六波羅ヲ、加賜スルニ時親ニ以テス安藝ノ吉田、及ビ河内ノ利田ヲ。

訓讀　毛利氏は、大江廣元より出づ。廣元十一世の祖を本主と曰ふ。姓は土師氏、備中介と爲る。本主、音人を生む。音人、仁明・清和の間に歴仕し、從三位左大辨に至る。姓を大枝氏と賜ふ。後、大江と更む。菅原氏と、竝に學政を掌る。音人、千古を生む。千古の後七世を、匡房と曰ひ、文武の才略有り。源義家に敎ふるに陣法を以てす。匡房の曾孫を廣元と爲す。廣元、源頼朝を關東に佐け、之をして天下に覇たらしむ。其の薦を以て安藝介と爲り、因幡守に遷り、正四位下、大膳大夫に至り、陸奥守を兼ぬ。源氏・北條氏の際、幕府の元老と爲り、數大難を定む。五子有り。長子親廣は、承久の役、官軍に屬し、終る所を知らず。第三子を季光と曰ひ、左近衞將監と爲り、相模の毛利莊を食む。因つて氏とす。三浦氏を娶り、其の難に死す。季光の子經光、鎌倉を出でて、越後の南莊に居る。經光の子時親、復起つて六波羅の評定衆と爲る。足利尊氏、六波羅を滅し、時親に加賜するに、安藝の吉田、及び河内の利田を以てす。

通釋　毛利氏は大江廣元から出た。廣元の十一世前の先祖を本主といつた。姓は土師氏で備中介となつた。本主は音人を生んだ。音人は、仁明から清和に至る三代の君に歴任して、その官は從三位左大辨にまでなつた。姓を大枝氏と賜はつた。後に大江と改めた。菅原氏と竝んで學校事務を掌つて居た。音人は千古を生んだ。千古の後七世を匡房といひ、文武の才略があつた。源義家に陣法を敎へたことがある人だ。匡房の曾孫が廣元である。廣元は源頼朝を關東で輔佐し遂に頼朝をして天下に覇たらしめた。頼朝の推擧で安藝介と爲り、それから

因幡守に遷り、正四位下大膳大夫となり、陸奥守を兼ねてゐた。源氏・北條氏の頃に幕府の元老となつて度々大事件を平定した。廣元には五人の子があつた。長子親廣は承久の役に官軍方に屬いたが終に何處で死んだか分らなかつた。第三子は季光といひ、左近衞將監となり、相模の毛利莊を領してゐた。因つて地名を氏とした。三浦氏を妻とし、その爲めに泰村の難で泰村と共に死んだ。季光の子經光は鎌倉を出で、越後の南莊に居た。經光の子時親は復た起つて、六波羅の評定衆となつた。足利尊氏が六波羅を亡ぼしたとき、時親は安藝の吉田及び河内の利田を增封した。

【通釋】十一世（本主・音人・千古・維時・重光・匡衡・擧周・成衡・匡房・維順・維光。）○仁明（人皇第五十四代。）○清和（人皇第五十六代。）○承久之役（北條義時京師を攻めた亂。）○死於其難（寶治年間泰村は北條氏と戰ひ、季光之を助け、敗れて自殺す。）

時親生貞親、貞親生親茂。親茂有三子、師親・匡時・直衡。皆隷新田義顯。義顯爲足利氏將高師泰所滅。貞親以下猶屬官軍。獨師親去屬師泰。師泰之攻石見、敵阻劫川。師親與高橋某先衆亂流拔三城。以功盡食吉田邑。及師泰敗、屬山名時氏、迎親茂及二弟共居焉。足利氏令武田氏・吉川氏攻降之。師親生廣房、廣房生光房。光房子熙房、嘉吉之役、攻盤坂有功。熙房子豐元、應仁之役、與小早川氏守相國寺有功。

【訓讀】時親、貞親を生み、貞親、親茂を生む。親茂、三子あり、師親・匡時・直衡。皆新田義顯に隷す。義顯

は足利氏の將高師泰の滅す所と爲る。貞親以下猶ほ官軍に屬す。獨り師親去つて師泰に屬す。師泰の石見を攻むるや、敵、劫川を阻む。師親、高橋某と、衆に先だち流を亂り、三城を拔く。功を以て盡く吉田の邑を食む。師泰敗るるに及んで、山名時氏に屬し、親茂及び二弟を迎へて、共に居る。足利氏、武田氏・吉川氏をして、之を攻め降さしむ。師親、廣房を生み、廣房、光房を生む。光房の子熙房は、嘉吉の役に、蟹坂を攻めて、功有り。熙房の子豐元は　應仁の役に、小早川氏と、相國寺を守りて、功有り。

通釋 時親は貞親を生み、貞親は親茂を生んだ。親茂には三人の子があつて、師親・匡時・直衡といつた。いづれも皆新田義顯に屬いてゐた。義顯は足利氏の將高師泰の爲めに亡された。併し貞親以下は依然として官軍に屬いてゐた。たゞ師親だけは去つて師泰に屬いた。師泰が石見を攻めた時、敵は劫川で師泰を拒いだ。師親は高橋某と衆に先き立つて、流を渡り、三城を攻めて陷れた。その功で吉田邑を全部貰ふことになつた。師泰が敗れてから後は、山名時氏に屬いて、親茂及び二人の弟を呼び迎へて一緒に住つた。足利氏は武田氏・吉田氏をして攻めて之を降參させた。師親は廣房を生み、廣房は光房を生んだ。光房の子熙房は嘉吉の役に蟹坂を攻めて手柄を立てた。熙房の子の豐元は應仁の役に小早川氏と相國寺を守つて手柄があつた。

語釋 劫川（劫川又鄕川に作る。石見。）○嘉吉之役（赤松滿祐が將軍義教を殺した事件。）○應仁之役（山名持豐と細川勝元と京師で爭ふ。）

豐元生弘元。弘元之子曰興元、次曰松壽。松壽幼有器量。其保嘗抱之、濟水而顚溺。保惶懼謝罪。松壽曰「行道而顚、常也。庸何傷」比詣嚴島神祠、既歸、問從者曰「汝

輩何祈。曰「祈郎君主安藝也。」松壽曰「汝盍祈吾主天下。夫願主天下者、能主一方。願主一方者、能主一國。今願主一國矣。其所成可知已。」聞者奇之。興元既爲嫡嗣、松壽出養於丹比氏。永正八年、加首服、名元就、稱少輔次郎、居猿掛城、食邑七十五貫、養士卒三百。會明使者來聘京師、路經吉田。善相者朱良範從焉。元就往見良範。良範曰「公兼漢祖・唐宗之相。必宣威於四方。」元就心自負焉。元就爲人隆準肉角、音吐甚洪。在麾下號令士卒、聲聞於諸隊。

訓讀 豐元、弘元を生む。弘元の子を興元と曰ひ、次を松壽と曰ふ。松壽、幼より器量有り。其の保管て之を抱き、水を濟りて躓き溺る。保、惶懼して罪を謝す。松壽曰く「道を行いて躓くは、常なり。庸何ぞ傷まん」と。髫齔の比、嚴島の神祠に詣で、既に歸り從者に問うて曰く「汝が輩、何をか祈る」と。曰く「郎君の安藝に主たらんことを祈る」と。松壽曰く「汝盍ぞ、吾が天下に主たらんことを祈らざる。夫れ天下に主たらんと願ふ者は、能く一方に主たり。一方に主たらんことを願ふものは能く一國に主たり。今一國に主たらんことを願ふ。其の成る所知る可きのみ」と。聞く者、之を奇とす。興元既に嫡嗣となり、松壽出でて丹比氏に養はる。永正八年、首服を加へ、元就と名づけ、少輔次郎と稱し、猿掛城に居り、邑七十五貫を食み、士卒三百を養ふ。會明の使者、京師に來聘して、路に吉田を經たり。善く相する者朱良範從ふ。元就往いて良範を見る。良範曰く「公

は漢祖・唐宗の相を兼ぬ。必ず威を四方に宣べん」と。元就、心に自負す。元就、人と爲り隆準肉角、音吐甚だ洪なり。麾下に在つて、士卒に號令するに、聲諸隊に聞ゆ。

通釋　豐元は弘元を生んだ。弘元の子を興元といひ、次男を松壽といつた。松壽は幼時より器局度量があつた。松壽のお守役が或る時之を抱いて川を渡るとき躓いて溺れようとした。お守役は慌て恐れてその罪を詫びた。松壽は曰ふのに「道を歩いて躓くのはよくある事である　そんなに心配せんでも宜い」と。七八歳の頃に嚴島神社に參詣し、濟んでから歸ると、その供の者に問うて曰ふには「お前方は何を祈つたか」と。供の者は「若樣が安藝の領主になられるように祈りました」といつた。すると松壽が曰ふのに「お前方は何ぜ余が天下に主となることを祈らなかつた。一體天下に主となることを願つてせい〴〵一方に主となれる。一方に主となるを願つてやつと一國に主となれるのだ。今一國に主となるを願つた。それでは成就するところは知れたものだ」と。聞く者は非常に偉いと思つた。興元が既に繼嗣となつて、松壽は出で、丹比氏に養はれる身となつた。永正八年、元服して元就と名づけ、少輔次郎と稱し、猿掛城に居り、七十五貫の土地を領し、士卒三百人を召抱へた。丁度明國の使者が京都に來聘するので、途中吉田を通過した。人相見の名人朱良範といふものが使者に從つてゐた。元就は往つて良範に遇つた。良範は元就の人相を見て曰ふには「貴公は漢の高祖と唐の太宗の人相を兩方共備へて居られる。屹度將來威を四方に伸べられるであらう」と。元就は心中自負する所があつた。元就の人物は鼻高く額の骨が隆起してゐて、音聲は非常に大きかつた。旗下に在つて士卒に號令すると、その聲は諸隊に響く程であつた。

語釋　一方（一方山陰とか山陽とかいふやうに一の地方のこと。）○永正（後柏原天皇の年號。）○猿掛城（備中）○隆準（鼻の高いこと。）○肉角（額の骨の隆起してゐること。）

十四年、安藝守護武田元繁、據佐東・銀山、矯將軍命、攻略國內。十月、攻有田城。城屬吉川經基。經基與興元善。是時皆在京師。元繁柵于中偃、使熊谷元直守焉、別遣千騎、焚猿掛城下。元就以二百人出戰。不利。吉田兵聞急來援。元就乃分兵五百、備元繁援路、而以千人疾攻元直、破而斬之。元繁遣兵來援。不及。乃留一將當有田、自將四千騎來戰。元就令吉田將志道廣好潛兵出敵背、夾擊破之。元繁挺前濟水。我兵射洞其胸。其兵皆潰走。乃報捷京師。大內義興爲足利氏管領、爲請襃賞元就。元就遂幷領武田氏邑八千餘貫。經基妻以其孫女。元繁子光和猶據銀山不下。

訓讀　十四年、安藝の守護武田元繁、佐東・銀山に據り、將軍の命を矯めて國内を攻略す。十月、有田城を攻む。城は吉川經基に屬す。經基、興元と善し。是の時、皆京師に在り。元繁、中堰に柵し、熊谷元直をして守らしめ、別に千騎を遣はして、猿掛の城下を焚かしむ。元就二百人を以て出で戰ふ。利あらず。吉田の兵、急を聞いて來り援く。元就、乃ち兵五百を分ち、元繁の援路に備へ、千人を以て疾く元直を攻め、破つて之を斬る。元繁、兵を遣はし來り援けしむ。及ばず。乃ち一將を留めて有田に當らせ、自ら四千騎に將として來り戰ふ。元就、吉田の將志道廣好をして、兵を潛め、敵背に出でしめ、夾擊して之を破る。元繁挺前して水を濟る。我が兵射て其の胸を洞く。其の兵皆潰え走る。乃ち捷を京師に報ず。大内義興、足利氏の管領となり、爲めに請うて元就を襃賞

す。元就、遂に武田氏の邑八千餘貫を幷せ領す。經基、妻はすに其の孫女を以てす。元繁の子光和、猶ほ銀山に據つて下らず。

通釋 十四年安藝の守護武田元繁は佐東・銀山に立て籠り將軍の命令だと詐つて國内を攻め取つた。十月、有田城を攻めた。城は吉川經基に屬して居た。經基は興元と仲が善かつた。當時二人ともに京都に居た。元繁は中堰に柵を拵へ、熊谷元直をして其處を守らせ、別に千騎の兵を遣はして、猿掛の城下に火をつけさせた。元就は二百人をつれて出で戰つた。併し負けた。吉田の兵は危いと聞いて援けに來た。そこで元就は兵五百人を分けて、元繁が援けに來る路に備へて置き、そして千人をつれてどん〳〵元直を攻め、遂に破つて之を斬り殺した。元繁は兵を遣はして、援けに來させた。併し間に合はなかつた。そこで、一人の大將を留めて、有田に向はせ、自分は四千騎の將となり、來て戰つた。元就は吉田の將志道廣好をして、兵をかくして敵の背後に出でさせ、夾み討にして之を破つた。元繁は身を挺んでて進み、獨り川を渡つて來た。我が兵はそれを射つて其の胸を射ち貫いた。元繁の兵は皆潰え走つた。そこで勝利を京都に報告した。大内義興は當時足利氏の管領となつてゐたが、爲めに願ひ出て元就を褒賞して貰つた。元就は遂に武田氏の領地八千餘貫を幷せ持つことになつた。經基は孫娘を妻にやつた。元繁の子の光和は依然として銀山に立て籠つて降參しなかつた。

語釋 佐東・銀山（安藝）○將軍（足利義植）○有田城・中偃（安藝）

十七年、興元卒。子幸松嗣。外祖父高橋久光、與元就竝輔之。大永三年、久光父子、與備後三吉某戰而死。元就赴援、撫其遺臣、幷其邑萬餘貫。六月、出雲國主尼子經久、

攻大内氏將藏田信房于鏡山。元就奉幸松爲先鋒、陰誘信房叔父某、某斬信房出降、被誅。經久本六角氏、其祖父持久、爲伯父高詮幹國事。至於經久、滅鹽冶某、取富田城、轉略山陰諸國、南出兵、侵大内氏。大内氏世居周防山口、爲太宰大貳、雄長關西。是時、大内義興在京師。聞變馳歸。自是連年攻戰。石見・安藝豪族、介立其間、嚮背無常。獨毛利・吉川・武田氏、常附經久。

訓讀　十七年、興元、卒し、子幸松嗣ぐ。外祖父高橋久光、元就と竝びに之を輔く。大永三年、久光父子、備後の三吉某と戰つて死す。元就赴き援け、其の遺臣を撫し、其の邑萬餘貫を幷す。六月、出雲の國主尼子經久、大内氏の將藏田信房を鏡山に攻む。元就、幸松を奉じて先鋒となり、陰に信房の叔父某を誘ふ。某、信房を斬り出で降り、誅せらる。經久は、本と六角氏、其の祖父持久、伯父高詮の爲めに國事を幹す。經久に至りて、鹽冶某を滅し、富田城を取り轉じて山陰の諸國を略し、南に兵を出して、大内氏を侵す。大内氏は、世周防の山口に居り、太宰大貳と爲り、關西に雄長たり。是の時、大内義興、京師に在り、變を聞きて馳せ歸る。是れより連年、攻戰す。石見・安藝の豪族、其の間に介立し、嚮背常無し。獨り毛利・吉川・武田氏、常に經久に附く。

通釋　十七年、興元は死んで子の幸松が相續した。母方の祖父高橋久光は元就と竝んで之を輔佐した。大永三年久光父子は備後の三吉某と戰つて討死した　元就は援けに行つて、その殘つてゐる家來を慰撫して其の領地一萬

餘貫を併せ領した。六月、出雲の國主尼子經久が大內氏の大將藏田信房を鏡山に攻めた。元就は幸松を擁して、先鋒となり、陰に信房の叔父某を引き込んだ。某は信房を斬つて城を出て降參したが、これも誅せられた。經久は元來六角氏で、その祖父持久は伯父高詮の爲めに國の政治を切り盛りして居た。經久の時になつて鹽冶某を滅し、富田城を取り、方向を轉じて山陰の諸國を攻め取り、それから南方に兵を出して、大內氏を侵した。大內氏は代々周防の山口に居て、太宰大貳の職に任ぜられ、關西では一番の頭となつて居た。當時、大內義興は京都に居た。變を聞きつけて馳せ歸つた。これから每年攻め戰つた。石見・安藝の豪族は其の間に夾まつてゐて、ついたり、叛いたり定まりはなかつた。たゞ毛利・吉川・武田の三氏は常に經久に附いて居た。

語釋　鏡山（安藝）〇富田城（出雲）

七月、幸松病卒、無嗣。家臣聚議、選於群叔、以元就爲嗣。八月、元就入吉田。元就弟就勝、與坂某・渡邊某謀殺元就。元就覺之、襲殺就勝及坂・渡邊。坂者、桂廣澄兄、志道廣好弟也。乃使人諭廣澄・廣好、曰「吾不以坂故疑汝也」廣好拜謝。廣澄弗信、自殺。其子元澄聚族據城。元就單騎往諭降之。四年五月、大內義興、使其子義隆與其將陶持長將二萬人、攻安藝諸城屬尼子氏者。七月、尼子經久遣兵援之、敗績。八月、元就以部兵四千、夜斫大內氏營、破之。持長解去。七年、元就入京師。任右馬頭、爲幕府相伴

衆一〇ト

【訓讀】七月、幸松病んで卒し、嗣無し。家臣聚り議し、群叔を選び、元就を以て嗣と爲す。八月、元就、吉田に入る。元就の弟就勝、坂某・渡邊某と、元就を殺さんと謀る。元就、之を覺り、襲うて就勝、及び坂・渡邊を殺す。坂は、桂廣澄の兄、志道廣好の弟なり。乃ち人をして、廣澄・廣好を諭さしめて曰く「吾れ坂の故を以て汝を疑はざるなり」と。廣好、拜謝す。廣澄は信ぜずして、自殺す。其の子元澄、族を聚め城に據る。元就、單騎往き諭して、之を降す。四年五月、大内義興、其の子義隆をして、其の將陶持長と、二萬人に將として、安藝の諸城の尼子氏に屬する者を攻めしむ。七月、尼子經久、兵を遣はし之を援けしめ、敗績す。八月、元就、部兵四千を以て、夜、大内氏の營を斫りて、之を破る。持長解き去る。七年、元就京師に入る。右馬頭に任ぜられ、幕府の相伴衆と爲る。

【通釋】七月、幸松が病死して繼嗣がない。家臣は集つて評議し多くの叔父の中から選んで、元就を繼嗣とした。八月、元就は吉田に入つた。元就の弟の就勝は坂某・渡邊某と元就を殺さうと謀つた。元就は之を覺つて、不意に擊つて就勝と坂・渡邊を殺した。坂は、桂廣澄の兄で志道廣好の弟に當る。そこで人をやつて廣澄・廣好に諭さしめて曰ふには「余は坂があんな事をしたからとて、そなたを疑ふものではない」と。廣好は拜して禮をいつた。廣澄は之を信用しないで自殺した。その子の元澄は一族を聚めて城に立て籠つた。元就は一騎で行つて諭して之を降參させた。四年五月、大内義興は其の子義隆をして、其の將陶持長と二萬人を率ゐて安藝の諸城で尼子氏に屬いてゐるものを攻めさせた。七月、尼子經久は兵を遣はして之を援けさせ、敗けて終つた。八月、元就は

部下の兵四千をつれて、夜、大内氏の陣營に斬り込んで之を破つた。持長は兵を解いて立ち去つた。七年、元就は京都に入朝した。右馬頭に任ぜられ幕府の相伴衆となつた。

【語釋】相伴衆（將軍が諸侯の家で饗應せらるゝ時に相伴する役。）

享祿二年、熊谷信直以事怨武田光和、以高松城來歸元就。光和怒攻之、不利。憂憤死。香川光景亦以八木城屬元就、將攻銀山。銀山餘衆、終奔若狹。天文四年、元就率光景・信直等二千騎、東略備後、攻高野城。城將乞援於播磨赤松晴政。未至。元就急攻拔之、幷其兵、又徇下數城。

【訓讀】享祿二年、熊谷信直、事を以て武田光和を怨み、高松城を以て元就に來り歸す。光和怒つて、之を攻め、利あらず。憂憤して死す。香川光景も亦、八木城を以て元就に屬し、將に銀山を攻めんとす。銀山の餘衆、終に若狹に奔る。天文四年、元就、光景・信直等二千騎を率ゐて、東備後を略し、高野城を攻む。城將、援を播磨の赤松晴政に乞ふ。未だ至らず。元就、急に攻めて之を拔き、其の兵を幷せ、又數城を徇へ下す。

【通釋】享祿二年、熊谷信直は或る事から武田光和を怨み、高松城を擧げて來つて元就に屬いた。光和は怒つて之を攻めたが負けた。それで憂ひ憤つて死んで終つた。香川光景も、亦八木城を擧げて元就に屬し、銀山を攻めようとした。銀山に殘つてゐた者は終に若狹に出奔した。天文四年、元就は光景・信直等二千騎を率ゐて東方備後を攻め取り、高野城を攻めた。城將は援を播磨の赤松晴政に乞うた。併しまだ援兵はやつて來ない。その間に

元就は急いで攻めて、之を陥れ、其處の兵を合併し、又數城を脅かして下した。

語釋 享祿（後奈良天皇の年號。）〇高松城（備中）〇八木城（安藝）

先是、尼子經久逐子興久殺之、立孫晴久。晴久遇元就亡狀。大內義興病卒於享祿元年。遺言義隆曰「元就與晴久有郤。宜以是時、奪爲我援。愼勿失其驩心。吾嘗德彼。彼豈不記之」陶持長奉遺命、百方通好。元就終應之、攻下國內諸城屬晴久者。晴久大怒、欲親來討之。經久曰「元就材武、善用兵。未可以力取也。不若先定備後・石見、以形勝制之」經久弟義勝亦諫止之。晴久皆弗聽。吉田城東北有胄山。元就患敵陣山上以瞰城也。會出雲間來入。元就覺之、乃議曰「敵陣胄山、吾與宍戸隆家夾擊之。陣三猪口、則非我利也」隆家元就女婿、守五龍城者也。間者走報晴久。

訓讀 是より先き、尼子經久、子興久を逐うて、之を殺し、孫晴久を立つ。晴久、元就を遇する亡狀なり。大內義興、病んで享祿元年に卒す。義隆に遺言して曰く「元就、晴久と郤有り。宜しく是の時を以て奪つて我が援となすべし。愼んで其の驩心を失ふ勿れ。吾れ嘗て彼に德す。彼れ豈に之を記せざらんや」と。陶持長、遺命を奉じて、百方、好を通ず。元就、終に之に應じ、國內の諸城の晴久に屬する者を攻め下す。晴久、大に怒り、親

ら來り、之を討たんと欲す。經久曰く「元就、材武にして、善く兵を用ふ。未だ力を以て取る可からざるなり。先づ備後・石見を定め、形勝を以て之を制するに若かず」と。經久の弟義勝も亦、諫めて之を止む。晴久皆聽かず。吉田城の東北に冑山有り。元就、敵の山上に陣し以て城を瞰ふを患ふ。會出雲の間來り入る。元就、之を覺り、乃ち議して曰く「敵、冑山に陣すれば、吾れ宍戸隆家と之を夾擊せん。三猪口に陣すれば、則ち我が利に非ざらんなり」と。隆家は、元就の女婿にして、五龍城を守る者なり。間者走り、晴久に報ず。

通釋 これより前、尼子經久は子興久を逐うて之を殺し、孫の晴久を立てた。晴久は元就を遇すること誠に無禮であつた。大内義興は享祿元年に病氣で死んだ。其の子義隆に遺言して曰ふには「元就は晴久と不仲である。この際に、元就を取り込んで此方の援とするが宜い。愼んでその機嫌を損はぬやうにせよ。余は以前、元就の爲めに褒賞を貰つてやつて、彼には善いことをして居る。彼は眞逆之を憶えて居らぬことはあるまい」と。陶持長は義興の遺命を大切にして、色々手を盡して好を通じた。元就は終に大内氏に應じて國内の諸城で晴久に屬いて居るものを片端しから攻め降した。晴久は非常に怒つて自ら來て討たうと思つた。經久が曰ふのに「元就は才能武略があつて、兵を用ふることが上手である。力づくではまだ取ることは出來ない。それよりは先づ備後・石見を平定し、地形の勝れた處から敵を制御したら宜い」と。經久の弟の義勝も亦諫めて之を止めた。晴久は皆聞き入れなかつた。吉田城の東北に冑山といふ山がある。元就は敵がこの山上に陣取つて、城内を見下ろしはせぬかと氣遣つた。丁度其の時出雲(尼子氏)の廻し者がやつて來た。元就は之を知つたので、わざと相談して曰ふには「敵が冑山に陣取ればもう占めたもので、此方は宍戸隆家と之を夾み討にしてやる。三猪口に陣取られると、どうもこちらの都合が惡くなる」と。隆家といふのは元就の娘婿で五龍城を守つて居た者である。廻し者は走つてそ

の事を晴久に報じた。

語釋 三猪口（安藝）〇五龍城（備後）

九月、晴久將騎卒五萬、來陣于三猪口、助武田氏餘黨、復銀山。四近將帥怖晴久兵威、不敢援我。獨宍戶・竹原・小早川諸族、遣兵數百入城。城兵凡三千人。北軍焚掠。城兵輒出擊、走之。晴久叔父國久、部屬精勁、稱新宮黨。忿北兵數衄、以萬騎來挑戰。元就設二伏而出戰。敵覩我寡單、縱兵而進。路狹不得齊進。伏兵夾擊、破之。晴久乃作三柵于宮崎、以逼城。大內義隆遣陶隆房等、將兵來援、陣天神山。十年正月、元就請隆房備晴久、而自與長子隆元、攻宮崎。元就進破二柵。隆房與尼子義勝、戰于三猪坂。義勝死。晴久夜遁。城兵尾擊、多斬獲。銀山兵聞之亦遁。

訓讀 九月、晴久、騎卒五萬に將とし、來つて三猪口に陣し、武田氏の餘黨を助けて、銀山を復す。四近の將帥、晴久の兵威を怖れ、敢て我を援けず。獨り宍戶・竹原・小早川の諸族、兵數百を遣はして城に入らしむ。城兵凡そ三千人、北軍、焚掠す。城兵輒ち出で擊ちて、之を走らす。晴久の叔父國久、部屬精勁にして新宮黨と稱す。北兵の數衄るゝを忿り、萬騎を以て來り戰を挑む。元就、二伏を設けて出で戰ふ。敵、我の寡單なるを

親、兵を縱つて進む。路狹くして、齊しく進むを得ず。伏兵夾擊し、之を破る。晴久、乃ち三柵を宮崎に作り以て城に逼る。大内義隆、陶隆房等を遣はし、兵に將として來り援けしめ、天神山に陣す。十年正月、元就、隆房に請うて晴久に備へ、而して自ら長子隆元と宮崎を攻む。元就進んで二柵を破る。隆房、尼子義勝と三猪坂に戰ふ。義勝死す。晴久、夜遁る。城兵、尾擊し、斬獲多し。銀山の兵、之を聞いて亦遁る。

通釋　九月、晴久は騎兵歩兵五萬を率ゐて來つて三猪口に陣取り、武田光和の殘黨を助けて、銀山を取り戻した。四方近所の大將は晴久の兵威が盛なのを恐れて、誰もこちらを援けようといふものがない。たゞ宍戸・竹原・小早川の諸族は兵數百人を遣はして、吉田城に入らしめた。城兵は皆で三千人であつた。北軍は火をつけて掠奪した。城兵はすぐに出て行つて之を擊ち走らせた。晴久の叔父の國久は部下がすぐれて強く、新宮黨といはれてゐた。北兵が度々敗けるのを怒つて一萬騎をつれて來て戰爭を挑んだ。元就は二個所に伏兵を拵へて置いて、出て戰つた。敵は我が兵の少くて且つ續く力がないと見て兵を自由に縱つて進んで來た。併し路が狹くて一時に進むことは出來ない。それを狙つて伏兵が出て來て夾み討にして之を破つた。そこで晴久は三柵を宮崎に作つて城に逼つた。大内義隆は陶隆房等を遣はし、兵を率ゐて來り援けさせ、天神山に陣取つた。十年正月、元就は隆房に晴久の方を賴んで晴久に備へて貰ひ、自分は長子隆元と宮崎を攻めた。元就は進んで二柵を破つた。隆房は尼子義勝と三猪坂で戰つた。義勝は討死した。晴久は夜の間に逃げた。城兵追つかけ擊つて、斬つたり生擒にした者が隨分あつた。銀山の兵も亦之を聞いて逃げて終つた。

語釋　北軍（尼子勢。）○新宮（出雲）○宮崎（安藝）

十二年正月、義隆大擧攻富田。元就以兵二千從、與周防將秋山某、夾川陣。四月、河水大漲。城兵急攻秋山。元就曰、吾祖騎渡劫川。況此一衣帶水乎。亂流援擊、走之。七月、義隆敗走。元就整隊、徐退南還。是役也、吉川興經、與北軍將十餘人、叛晴久、導周防兵。已而復附之。義隆以故敗。

訓讀 十二年正月、義隆、大擧して富田を攻む。元就、兵二千を以て從ひ、周防の將秋山某と、川を夾んで陣す。四月河水、大に漲る。城兵、急に秋山を攻む。元就曰く「吾が祖、劫川を騎渡す。況や此の一衣帶水をや」と。流を亂り援け擊ちて、之を走らす。七月、義隆、敗走す。元就、隊を整へ、徐に退き南に還る。是の役に、吉川興經、北軍の將十餘人と、晴久に叛き、周防の兵を導く。已にして復之に附く。義隆、故を以て敗る。

通釋 十二年正月、義隆は大兵をつれて一度に尼子の本城富田を攻めた。元就は兵二千人をつれて從ひ、周防の將秋山某(大内方)と川を夾んで陣取つた。四月、河の水が大に增し漲つた。城兵は急に秋山を攻めた。元就が曰ふのに「吾が先祖は劫川を騎馬で渡られた。ましてこの帶の樣な川を渡らないでなるものか」と。流を横切つて渡り、秋山を援け、敵を擊つて之を走らせた。七月、義隆は敗れ走つた。元就は隊伍を整へて徐々と退却し、南に歸つた。この戰爭で吉川興經は北軍の將十餘人と共に晴久に叛いて周防の兵を案内した。其の内にまた元々通り尼子氏に附いた。それがために義隆は敗北したのである。

語釋 富田(出雲) ○夾川(川は富田川。) ○吾祖(親師)

吉川氏、出於駿河ノ人吉川友兼。友兼誅梶原景時。子孫以功食安藝ノ大朝。後十二世爲興經。興經娶大鹽某。其下皆怨、殺大鹽、廢興經、議曰「毛利右馬、與先公婚。其子皆先公ノ外孫。可養以爲嗣」乃請元就ノ次子元春、入新莊城、奉以爲主。元春弟隆景、亦出爲小早川氏ノ後。

訓讀 吉川氏は、駿河の人吉川友兼より出づ。友兼、梶原景時を誅す。子孫、功を以て安藝の大朝を食む。後十二世を、興經と爲す。興經、大鹽某を娶す。其の下皆怨んで、大鹽を殺し、興經を廢す。議して曰く「毛利右馬、先公と婚す。其の子は皆先公の外孫なり。養ひて以て嗣と爲す可し」と。乃ち元就の次子元春を請うて、新莊城に入れ、奉じて以て主と爲す。元春の弟隆景も亦、出でて小早川氏の後と爲る。

通釋 吉川氏は駿河の人吉川友兼から出た。友兼は梶原景時を誅殺したのである。子孫は其の功で安藝の大朝を拜領した。それから十二代目が興經である。興經は大鹽某といふ者を寵愛した。其の臣下は皆怨んで、大鹽を殺し興經を廢した。それから相談して曰ふには「毛利右馬頭元就は先君經基と緣組されたのである。だから元就のお子は皆先君の外孫に當る。養つて繼嗣とすべきである」と。そこで元就の次男元春を請ひ受けて、新莊城に入れ奉じて主君とした。元春の弟の隆景も亦出で、小早川氏の繼嗣となつた。

語釋 新莊（安藝）

小早川氏之先、出於伊豆人土肥實平。實平仕源氏、食安藝豐田。後十六世曰正平。正平子繁平、幼失明。其族黨議、請養隆景、妻以正平女、居沼田城。於是、吉川・小早川、竝爲毛利氏羽翼。人呼曰兩川。元春稱治部少輔、豪爽善用兵。隆景稱左衛門佐、美姿儀、沈斷有謀慮。皆類元就。元就以元春未有伉儷、使兒玉就忠密問其意所嚮。元春曰「吾欲得熊谷信直女。」就忠曰「郎君得無謬聞其美乎。彼女醜惡無匹。君必悔之。」元春哂曰「然。吾素知其醜也。抑古名將多以女色失其勇。所以人不取而吾取之。人不取而吾取之、信直必感喜、爲吾出死力。此間將卒、孰出信直右者。吾與之聯鋒、以爲家君之先、所向無不摧破耳。」就忠慚服、告元就娶之。信直果大喜。毛利氏兵鋒益鋭。

訓読　小早川氏の先は、伊豆の人土居實平より出づ。實平、源氏に仕へ、安藝の豐田を食む。後十六世を、正平と曰ふ。正平の子繁平、幼にして明を失ふ。其の族黨、議し、請うて隆景を養ひ、妻はすに正平の女を以てし、沼田城に居る。是に於て、吉川・小早川、竝に毛利氏の羽翼と爲る。人呼んで兩川と曰ふ。元春は治部少輔と稱し、豪爽にして善く兵を用ふ。隆景は左衛門佐と稱し、姿儀美しく、沈斷にして謀慮有り。皆元就に類す。元就、

元春の未だ伉儷有らざるを以て、兒玉就忠をして、密に其の意の嚮ふ所を問はしむ。元春曰く「吾れ熊谷信直の女を得んと欲す」と。就忠曰く「郎君、其の美を謬り聞くこと無きを得んや。彼の女醜惡、匹無し。君必ず之を悔いん」と。元春哂つて曰く「然り。吾れ素より其の醜を知る。抑〻古の名將、女色を以て其の勇を失ふもの多し。人取らずして吾れ之を取る所以なり。人取らずして吾れ之を取れば、信直必ず感喜し、吾が爲めに死力を出さん。此の間の將卒、孰れか信直の右に出づる者ぞ。吾れ之と鋒を聯ね、以て家君の先と爲らば、向ふ所摧破せざるなきのみ」と。就忠、悃服し、元就に告げて之を娶らしむ。信直、果して大に喜ぶ。毛利氏の兵鋒益〻銳し。

【通釋】小早川氏の先祖は伊豆の人士肥實平から出た。實平は源氏に仕へて、安藝の豐田を領してゐた。後十六代目を正平といつた。正平の子繁平は幼い時失明した。そこで一族郎黨の者は相談して請うて隆景を養ひ、正平の娘を妻はせて、沼田城に居らしめた。かくて吉川・小早川は共に毛利氏の羽翼となつた。人は之を呼んで兩川といつた。元春は治部少輔と稱し、氣象剛く、さつぱりとして、兵を用ふることが上手であつた。隆景は左衞門佐といつて、風采が美しく、落ち着いて果斷で、謀略思慮があつた。どちらも元就に似てゐた。元就は元春がまだ妻を貰つてゐないから、兒玉就忠に言ひつけて、內々これと思ふ意中の女を問はしめた。元春が曰ふのに「余は熊谷信直の娘を貰ひたいと思ふ」と。就忠がいふのに「若樣は美しいとお聞き違ひなさつたのでは御座いませんか。あの娘は容色の惡いことは無類で御座います。あんな者をお貰ひなさると屹度後悔なさいますぞ」と。元春は笑つて曰ふには「さうだ。余はもとよりその醜いことを知つて居る。一體昔の名將で女色の爲めにその勇氣を失つたものは隨分多い。だから人は醜女を娶らなくとも余だけは娶り度いと思ふ譯なのである。又人が娶らない者を余が取つて妻とすれば、信直は屹度有難がつて喜び、余の爲めに死力を出して働いて吳れるであらう。この

頃の將卒の中で信直の右に出る者が何處にある。余は信直と鋒先をならべて父君の先鋒となるなら、向ふところ碎け破れないものはないだらう」と。就忠は尤もだと慚ぢ入り、元就に告げて、之を娶らせた。信直は非常に喜んだ。これから毛利氏の兵鋒は益〻強くなつた。

〔語釋〕沼田城（安藝）

十七年、元就携隆元・元春・隆景、赴山口。義隆養内藤興盛女、妻於隆元、使陶隆房與元春約爲兄弟。義隆性文弱。山口多廷臣避亂者。而明人常互市焉。義隆耽詠歌、學梵譯、不復問武事。陶持長嘗憂之。持長子義清、幼聰敏、常誹義隆曰「是墮落沙門、流竄公卿耳」。持長視其有不臣之志、藥殺之、更養妹壻問田某子。是爲隆房。隆房悍厲、頗得士心。持長既死。隆房與義隆嬖臣相良武任有郤。結杉重政・青景隆時・内藤興盛、謀殺武任。武任怖而遁逃。冷泉隆豐勸義隆速誅隆房。不聽。隆房佯乞骸骨、歸其邑若山、日謀反逆。家臣深野康澄・宮川房勝、引持長遺囑、大諫。弗聽。二臣交刺死。

〔訓讀〕十七年、元就、隆元・元春・隆景を携へ、山口に赴く。義隆、内藤興盛の女を養ひて、隆元に妻はし、陶隆房をして、元春と約して兄弟たらしむ。義隆、性文弱なり。山口には廷臣の亂を避くる者多く、而して明人

常に互市す。義隆、詠歌に耽り、梵譯を學び、復武事を問はず。陶持長、嘗に之を憂ふ。持長の子義清、幼にして聰敏、嘗に義隆を誹つて曰く「是れ墮落の沙門、流竄の公卿のみ」と。持長、其の不臣の志有るを視て、之を藥殺し、更に妹壻問田某の子を養ふ。是を隆房と爲す。隆房、悍厲にして、頗る士心を得。持長已に死す。隆房義隆の嬖臣相良武任と郤有り。杉重政・靑景隆時・內藤興盛と結びて、武任を殺さんと謀る。武任懼れて遁逃す。冷泉隆豐、義隆の、速に隆房を誅せんことを勸む。聽かず。隆房佯つて骸骨を乞ひ、其の邑若山に歸り、日に反逆を謀る。家臣深野康澄・宮川房勝、持長の遺囑を引いて、大に諫む。聽かず。二臣交刺して死す。

〔通釋〕十七年、元就は隆元・元春・隆景の三人の倅をつれて、山口に赴いた。義隆は內藤興盛の娘を養女にして隆元に妻はせ、陶隆房をして、元春と兄弟分の約束をさせた。義隆は性質優柔で氣が弱かつた。山口には公卿で亂を避けて來てゐるものが多く、その上明の商人が常に來て、交易してゐたので、可成り繁昌してゐた。だから義隆は歌を詠むことに耽り、佛經を學び、もう武道などのことは少しも問題にしなかつた　陶持長は常に之を心配した。持長の子の義清は幼なくて非常に利口な子であつたが常に義隆を誹つて曰ふにあれは「墮落坊主、流され公卿のやうなものだ」と。持長は義清が臣道を守らぬ志のあることを知つて之を毒殺し、更に妹婿問田某の子を養つた。それが隆房である。隆房は勇氣があつて手荒く、隨分侍の人望がよかつた。持長は其の內に死んで終つた。隆房は義隆のお氣に入りの相良武任と仲が惡かつた。杉重政・靑景隆時・內藤興盛と結んで武任を殺さうとした。武任は怖れて逃げた。冷泉隆豐は義隆に早く隆房を誅するやうに勸めた。義隆は聞き入れなかつた。隆房は、佯つて辭職を願ひ出で、自分の領地若山に歸つて毎日謀叛の計畫をして居た。家來の深野泰澄・宮川房勝は持長が遺言して頼んだことを引いて、大に諫めた。隆房は聞き入れなかつた。二人の家來は刺し合つて死んだ。

【通釋】梵譯（梵語を譯した佛經。）○若山（周防）

二十年八月、隆房遂反、攻山口。義隆走法泉寺。其兵皆潰。前關白藤原尹房爲講和。隆房不肯。義隆航赴筑紫、阻風、還入大寧寺。賊兵來圍。九月、義隆自殺、隆豐等死之。義隆子義尊、及尹房以下公卿十餘人皆爲所殺。隆房更名晴賢、削髮號全薑、迎豐後國主大友義鎭弟義長爲主。曰「重政・隆時妬武任、勸吾行大事。」乃發兵誅二人。初晴賢之[illegible]難、使人來說元就黨己、啗以佐東郡。元就卻之。義隆臨終遺書囑元就曰「吾不幸爲賊臣所弑、吞恨入地。非卿誰能復我仇。」元就覽書流涕曰「吾受大貳恩眷。雖無所囑、猶欲爲復仇。況有是乎。」諸將曰「彼凶焰方熾、未可與爭衡。宜內養威力、外示柔弱、觀釁而動。」元就從之。

【訓讀】二十年、八月、隆房遂に反し、山口を攻む。義隆は、法泉寺に走る。其の兵皆潰ゆ。前關白藤原尹房、爲めに和を講ず。隆房、肯んぜず。義隆、航して筑紫に赴く。風に阻まれ還つて大寧寺に入る。賊兵來り圍む。九月、義隆、自殺し、隆豐等、之に死す。義隆の子義尊、及び尹房以下の公卿十餘人、皆殺す所と爲る。隆房、名を晴賢と更め、髮を削り全薑と號す。豐後の國主大友義鎭の弟義長を迎へて主と爲す。曰く「重政・隆時、武

任を妬み、吾を勸めて大事を行はしむ」と。乃ち兵を發して二人を誅す。初め晴賢の難を圖るや、人をして來つて元就に說き、己に黨せしめんとし、啗はすに佐東郡を以てす。元就之を卻く。義隆、終に臨んで書を遺し、元就に囑して曰く「吾れ不幸にして賊臣の弑する所となり、恨を吞みて地に入る。卿に非ずんば誰か能く我が仇を復せん」と。元就、書を覽て流涕して曰く「吾れ大貳の恩眷を受く。囑する所無しと雖も、猶ほ爲に仇を復せんと欲す。況んや是有るをや」と。諸將曰く「彼れ凶焰、方に熾にして、未だ與に衡を爭ふ可からず。宜しく內に威力を養ひ、外に柔弱を示し、釁を覸て動くべし」と。元就、之に從ふ。

通釋 二十年八月、隆房は遂に謀叛をして、山口を攻めた。義隆は法泉寺に逃げ込んだ。その兵は皆潰えた。前關白藤原尹房は爲めに和睦を取り持つて見た。併し、隆房は承知しなかつた。義隆は舟に乘つて筑紫に行かうとした。風の爲めに妨げられ、還つて大寧寺に入つた。其處へ賊兵が來て取り圍んだ。九月に義隆は自殺し、隆豐等も死んだ。義隆の子義尊及び尹房以下公卿十餘人は皆殺された。隆房は名を晴賢と改め髮を剃つて全薑と號した。豐後の國主大友義鎭の弟義長を迎へて、主人とした。曰ふのに「重政・隆時は武任が君に寵せられるのを妬んで、吾に勸めて君を弑する大事を行はしめたのだ」と。そこで兵を繰り出して二人を誅して終つた。はじめ、晴賢が大事を圖つてゐた時、人をよこして元就に說いて、自分に味方させようとし、佐東郡をやるからといふ掛合であつた。元就は斷然之をはねつけた。義隆は臨終の際に書置をして元就に賴んで曰ふには「自分は不幸にして賊臣陶晴賢の爲に弑せられ、遺恨を懷き乍ら死ぬことである。卿が我が仇を復へして下れなければ、外に仇をとつてくれる人はない」と。元就は此の遺書を覽て涕を流して曰ふに「自分は太宰大貳大內義隆殿の厚き恩顧を蒙つてゐたのである。この御依賴がなくとも自分は仇を復へさうと思つてゐたのである。況して此のやうな御依

賴があるからは猶ほ更ら捨て置けぬ」と。諸將が曰ふのに「彼れ晴賢は凶逆の勢、方に盛んであつて、今はこれと勢力を爭ふ可き時ではありませぬ。それよりは内に威力を養ひ、表面はいかにも柔弱に見せかけ、敵の隙間を觀て動作なされたら宜しう御座いませう」と。元就は之に從つた。

〔語釋〕公卿十餘人（藤原尹房・同良豐・同公顯・同基雅・冷泉宗紹等。）○佐東郡（安藝）

二十一年秋、元就攻拔槌山・志和諸城。是歲、備後江田隆貫叛、歸尼子氏。元就攻之、至泉橋。尼子國久將數萬騎、來救隆貫。元春以部兵二千、擊走之。會霖雨川漲。國久・隆貫、退入山内。元就亦歸。備中人三村家親來屬。二十二年、以家親爲鄉導、攻穗田爲資、降之。

〔訓讀〕二十一年秋、元就攻めて槌山・志和の諸城を拔く。是の歲、備後の江田隆貫叛き、尼子氏に歸す。元就之を攻めて、泉橋に至る。尼子國久、數萬騎に將として、來つて隆貫を救ふ。元春、部兵二千を以て擊つて之を走らす。會〻霖雨ありて川漲る。國久・隆貫、退いて山内に入る。元就も亦歸る。備中の人三村家親、來り屬す。二十二年、家親を以て鄉導となし、穗田爲資を攻めて、之を降す。

〔通釋〕二十一年秋、元就は攻めて、槌山・志和の諸城を拔いた。この年、備後の江田隆貫が叛いて、尼子氏に屬いた。元就は之を攻めて。泉橋に往つた。尼子國久が數萬騎を率ゐてやつて來て、隆貫を救つた。元春は部兵二千を率ゐて擊つて之を走らせた。丁度長雨が降つて、川の水が漲つた。國久・隆貫は退却して、山内に入り込んだ。

元就も亦引き返した。備中の人三村家親が來り屬いた。二十二年に家親を路案内として、穗田爲資を攻めて、之を降參させた。

語釋 槌山・志和（周防）○山田（備後）

初我將井上元兼、以豪宗不奉法令。竊言曰「主公欲誅陶氏。陶氏嘗救我。恩可背乎」。元就以計族誅之。於是、會諸族屬、議討晴賢之謀。隆景進曰「宜請之天子、仗大義討之。則人心所嚮、無不克矣」。元就曰「善」。乃上書曰「太宰大貳義隆、承父祖遺業、存心於王室。而爲賊臣晴賢者所弒。臣元就奮微力圖討伐、未得成其功。伏冀得討晴賢一行、詔糾合徒屬、以靖西陲」。初朝廷聞晴賢作難、命將軍・管領西伐。莫敢奉詔。及元就書至、卽制可之。元就得詔感喜、移書遠近。津和城主吉見正頼、世與陶氏讐。首應之。晴賢怒、攻津和。元就遣兵援之。

訓讀 初め我が將井上元兼・豪宗を以て、法令を奉ぜず。竊に言つて曰く「主公陶氏を誅せんと欲す。陶氏・嘗て我を救ふ。恩、背く可けんや」と。元就、計を以て之を族誅す。是に於て、諸族屬を會し、晴賢を討つの謀を議す。隆景進んで曰く「宜しく之を天子に請ひ、大義に仗つて之を討つべし。則ち人心の嚮ふ所、克たざ

ろこと無けん」と。元就曰く「善し」と。乃ち上書して曰く「太宰大貳義隆、父祖の遺業を承けて、心を王室に存す。而るに賊臣晴賢なる者の弑する所と爲る。臣元就、微力を奮ひて、討伐を圖り、未だ其の功を成すを得ず。伏して冀はくは、晴賢を討つ一行の詔を得て、徒屬を糾合し以て西陲を靖んぜん」と。初め朝廷、晴賢の難を作すを聞き、將軍・管領に命じて、西伐せしむ。敢て詔を奉ずるもの莫し。元就の書至るに及びて、卽ち之を制可す。元就、詔を得て感喜し、書を遠近に移す。津和城主吉見正頼、世陶氏と讎あり。首として之に應ず。晴賢怒り、津和を攻む。元就、兵を遣はして之を援けしむ。

通釋 初め毛利の大將である井上元兼は勢力のある豪族で、兎角言ふことを聞かないで法度號令に從はなかつた。竊に言ふには「殿樣は陶氏を誅しようと思つてゐられる。併しあの陶氏は以前我を救つて吳れたことがあります。その恩に背いては可けますまい」と。元就は計を用ひて元兼の一族を皆殺した。そこで元就は諸々の一族臣屬を集めて、晴賢を討伐する謀を相談した。隆景が進んで曰ふのに「これは天子に奏上してお願ひ申し、天子の御命によつて征伐する。卽ち大義名分に依つて討つが宜しい。さすれば人々の心は皆その方に向ふので、人心の向ふ所、戰に勝たぬといふことは御座いませぬ」と。元就は曰ふに「善し」と。そこで上書して曰ふには「太宰大貳義隆は父祖以來の事業を承け繼ぎまして、心を皇室に寄せて忠義の心を持つて居りました。而るに賊臣晴賢の爲に弑せられました。臣元就微力を奮つて之を討伐しようと圖つて居りまするが、まだその功を成し遂げることが出來ませぬ。伏して冀はくは晴賢を討てよと、一行の詔を頂戴し、手下の者共を寄せ集めまして、西方の邊陲を安んじ度いものに御座います」と。初め朝廷では晴賢が叛亂を起したと聞かれ、將軍や管領に命じて西伐せしめられた。併し私が參りませうと詔をお承けする者もなかつた。そこへ元就の書が來たので、早速

お許しの御沙汰があつた。元就は詔書を得て感激し喜び、遠近に書面を飛ばせ斯樣云々と布れた。津和の城主の吉見正頼は代々陶氏と仇敵であつた。それで最先きに味方をした。晴賢は怒つて津和を攻めた。元就は兵を遣つて之を援けさせた。

語釋 仗大義（詔を承けて逆徒を誅することは天子の命であるから大義。）○制可（御沙汰があつて許可になる。）○津和（石見）

二十三年五月、元就與諸子將兵西出、取銀山・草津・櫻尾諸城。遇陶氏兵于折敷畑、擊破之。陶氏骨鯁將有江良興房、守琥珀城。元就縱反閒言「興房送款」。晴賢族誅興房、遂檄周防・長門・豐前・筑後・石見、發兵東下。元就聞之、與諸子密謀曰「彼兵不下三萬。必首攻櫻尾・草津。我悉衆援之、不過五千人。勢力懸絕。與戰平地不可克也。爲今計者、宜城嚴島誘而殲之」。弘治元年五月、城于島之有浦。諸宿將皆諫其不可。元就弗聽。諸將皆相言曰「此公常不拒諫。今何乃爾」。六月、城成。命己斐・新里二氏、以兵數百守之、使草津・櫻尾・仁保諸城、互爲策應、既而聲言「吾悔不聽老將言。嚴島地形難守難援。卽爲敵有、諸城從陷。吾計莫失於此」。

訓讀 二十三年五月、元就、諸子と、兵に將として西に出で、銀山・草津・櫻尾の諸城を取る。陶氏の兵に折敷

畑に遇ひ、擊つて之を破る。陶氏骨鯁の將に江良興房あり、琥珀城を守る。元就、反間を縱つて言ふ「興房、款を送る」と。晴賢・興房を族誅し、遂に周防・長門・豐前・筑後・石見に檄し、兵を發して東下す。元就、之を聞き諸子と密に謀つて曰く「彼の兵三萬を下らず。必ず首として櫻尾・草津を攻めん。我れ衆を悉して之を援くるも、五千人に過ぎず。勢力懸絕す。與に平地に戰はば、克つ可からざるなり。今の計を爲す者は、宜しく嚴島に城き誘ひて之を殲むべし」と。弘治元年五月、島の有浦に城く。諸將、皆其の不可を諫む。元就聽かず。諸將皆相言つて曰く「此の公、常に諫を拒まず。今何ぞ乃ち爾るか」と。六月、城成る。己斐・新里の二氏に命じて、兵數百を以て之を守らしめ、草津・櫻尾・仁保の諸城をして、互に策應を爲さしむ。既にして聲言す「吾れ老將の言を聽かざりしを悔ゆ。嚴島は地形、守り難く援け難し。卽し敵の有とならば、諸城從つて陷らん。吾が計、此より失へるは莫し」と。

【通釋】天文二十三年五月、元就は多くの倅共と、兵に將として西方に出陣し、銀山・草津・櫻尾の諸城を取つた。陶氏の兵に折敷畑で遭遇し之を擊ち破つた。陶氏の直言剛毅の大將に江良興房といふ者がゐて、琥珀城を守つてゐた。元就は敵の間諜を抱き込んで、それを縱ちやつて「興房が元就に內通した」と言はせた。晴賢は興房は固よりその一族を全部殺して、遂に周防・長門・豐前・筑後・石見に檄し、兵を繰り出して東方へ下つて行つた。元就が之を聞き、諸子とこつそり謀つて曰ふのに「彼の兵は三萬人を下らない。屹度最初に櫻尾・草津を攻めるだらう。此方が全部の軍勢を繰り出して助けても、五千人より過ぎない。勢力が非常に違ふ。これは敵と平地で戰つては克つことは出來ない。今最も良い謀は、嚴島に城を築き、そこへ敵を誘ひ寄せて敵の勢を小さく蹙めれば宜い」と。弘治元年五月、嚴島の有浦に城を築いた。多くの老將が口を揃へてその不可ことを諫めた。元就はそれ

を聽き入れなかつた。諸將が皆言ひ合つて曰ふには「此の君は常も諫めを拒まれたことはない。それに今は何故吾々の言ふことを聽き入れられないのだらうか」と。六月に嚴島の城が出來上つた。己斐・新里の二將に命じて兵數百をつれて之を守らして、草津・櫻尾・仁保の諸城をして互に計略を通じて相呼應せしめた。その内に元就は言ひふらした「老將の諫言を聽き入れなかつたのは誠に殘念であつた。成る程嚴島は地形守り難く、又援けるにも難かしい所であつた。若しも此の城が敵の有となつたら、外の諸々の城もそれにつれて陷つて終ふだらう。これより大きな失策は、これ迄に無かつた哩」と。

語釋 銀山・草津 櫻尾（安藝）〇弘治（後奈良天皇の年號。）

九月、晴賢留其子長房于若山、而自統騎卒二萬、戰艦千餘艘、至岩國、議戰所嚮。大和興武曰「先拔櫻尾、則諸城不攻而陷」弘中隆包曰「請分兵、一攻櫻尾、一備其援路、彼不敢出。出則與之相持、而遣輕兵擣吉田、彼進退失據、不血刃而可取」晴賢曰「吾欲先取嚴島。城脆將孱、而不便於援。聞、元就甚悔之。吾取以爲根據、分兵攻諸城、是萬全策也」隆包曰「彼眞悔之、必不宣言。宣言者得非以餌我乎」晴賢猶豫未決。

訓讀 九月、晴賢、其の子長房を若山に留め、而して自ら騎卒二萬、戰艦千餘艘を統べ、岩國に至り、戰の嚮ふ所を議す。大和興武曰く「先づ櫻尾を拔かば、則ち諸城攻めずして陷らん」と。弘中隆包曰く「請ふ、兵を分

ちて一は櫻尾を攻め、一は其の援路に備へば、彼れ敢て出でじ。出でば則ち之と相持し、而して輕兵を遣はして吉田を擣かば、彼れ進退據を失ひ、刄に血らずして取る可し」と。晴賢曰く「吾れ先づ嚴島を取らんと欲す。城脆く將孱くして援くるに便ならず。聞く、元就甚だ之を悔ゆと。吾れ取りて以て根據と無し、兵を分ちて諸城を攻めん。是れ萬全の策なり」と。隆包曰く「彼れ眞に之を悔いば、必ず宣言せじ。宣言する者は、以て我を餌するに非ざるを得んや」と。晴賢、猶豫して未だ決せず。

通釋　九月、晴賢は伜の長房を若山に留め置き、自分は騎兵・兵卒二萬・戰艦千餘艘を統べ、岩國に至り、何の方面から攻めかゝらうかと相談した。大和興武が曰ふのに「先づ第一に櫻尾城を陷いれたなら外の城は攻めなくとも自然に陷落するでありませう」と。弘中隆包が曰ふのに「斯うして頂きたいものです。それは兵を分けて一軍は櫻尾を攻め、他の一軍は敵の援兵を送る路筋に備へて置いたなら、敵は屹度出て來ることは出來ませぬ。出て來たら之と相持ち合つて、一方身輕な兵を遣つて吉田を突かせたなら、敵は二進も三進も動きが取れなくなつて根據を失ひ、結局刄に血を塗らずして破ることが出來ませう」と。晴賢が曰ふのに「自分は先づ嚴島を取らうと思ふ。城は脆く、大將は弱く、加之に海を越さねばならぬ故之を援けるには極めて不便だ。それには聞く所に據ると、元就は其處へ城を築いたことを大層後悔してゐるといふことである。自分はそこを取つて根據地となし、兵を分けて諸城を攻めよう。是れが一番安全の策である」と。隆包が曰ふのに「元就が眞個に後悔してゐますなら決して宣言抔致しはしませぬ。彼れが宣言するのは、畢竟此方を餌で掛けようとするのでありませう」と。晴賢は如何したものかと迷つて愚圖々々して決しかねてゐた。

語釋　岩國(周防)　○援路(吉田から援兵の來る道筋。)

故櫻尾城主降在賊軍中、與己斐・新里相識。元就令二人貽書、指陳順逆、暴晴賢罪惡、極其醜詆。晴賢覽之大怒。元就又令桂元澄詐送款、約俟元就渡海赴援、飜城爲內應。晴賢乃決意攻嚴島。十月、建牙塔岡、燒民舍布陣。舟艦櫛比、喊聲震海。城兵嬰壁堅守。賊有鳥銃七口。櫓楯不支。積土豚扞之。晴賢遺書元就曰「公爲先大貳欲見加誅。不敢逃避。聊以水陸軍三萬陣之嚴島。公能來乎」。元就聚將士示之。將士皆有懼色。元就笑曰「使賊所言信、則吾大克矣」。衆問故。曰「其地迫狹。彼側肩蹐足、不便進退。兵愈衆而鋒愈鈍。我以死士數千衝之、克可必也」。乃使宍戸隆家留守吉田、而自率精兵三千餘人、南行至草津、與晴賢隔海而陣。國內諸豪意其必敗、多稱病不從。

〔訓讀〕故の櫻尾の城主、降りて賊軍の中に在り、己斐・新里と相識る。元就、二人をして書を貽つて、順逆を指陳せしめて、晴賢の罪惡を暴し、其の醜詆を極む。晴賢、之を覽て大に怒る。元就、又桂元澄をして、詐りて款を送らしめ、元就の海を渡りて赴き援くるを俟ちて、城を翻して內應を爲さんと約す。晴賢乃ち意を決して嚴島を攻む。十月、牙を塔岡に建て、民舍を燒き陣を布く。舟艦、櫛比し、喊聲、海に震ふ。城兵、壁に嬰りて堅く守る。賊に鳥銃七口有り。櫓楯支へず。土豚を積んで之を扞ぐ。晴賢、書を元就に遺つて曰く「公、先きの大

貳の爲めに、誅を加へられんと欲す。敢て逃避せず。聊か水陸の軍三萬を以て、之を嚴島に陣す。公能く來るか」と。元就、將士を聚めて之を示す。將士皆懼るゝ色あり。元就笑つて曰く「賊の言ふ所をして信ならしめば、則ち吾れ大に克たん」と。衆、故を問ふ。曰く「其の地迫狹なり。彼れ肩を側だて足を躡み、進退に便ならず。兵愈衆くして、鋒愈鈍る。我れ死士數千を以て之を衝かば、克つこと必す可きなり」と。乃ち宍戸隆家をして吉田を留守せしめ、而して自ら精兵三千餘人を率ゐ、南行して草津に至り、晴賢と海を隔てゝ陣す。國内の諸豪、其の必ず敗れんことを意ひ、多く病と稱して從はず。

通釋 故の櫻尾の城主をしてゐた男が降參して賊軍中にゐた、それが己斐・新里と識り合ひであつた。元就は此の二人の者をして、その故の櫻尾の城主に書面を贈らせ、順逆の道理を指し示し、晴賢の極惡の大罪を言ひ露はし、極めて口汚く罵り辱めた。晴賢は此の書を一覽して非常に怒つた。元就は又桂元澄をして詐つて賊に内通せしめ、元就が海を渡つて援けに行くのを待つて、城を翻へし裏切りをしようと約束させた。そこで晴賢は決心して嚴島を攻めることにした。十月に本陣を塔岡に建て、民家を燒き拂ひ、そこへ陣立をした。舟は櫛の齒のやうに比び、喊の聲は海を震ひ動かした。元就方の城兵は城に立て籠つて堅く守つた。賊軍に鳥銃が七挺あつた。それをドン／＼射放つので櫓も楯も支へ切れぬ。そこで土俵を積んで之を扞いだ。晴賢は書面を元就に遺つて曰ふに「貴公は先きの太宰大貳の爲めに、復讐して拙者を誅せられようと思つてゐらるゝ。決して逃げ匿くれ致さぬ。聊か海陸の軍三萬人を引き連れて、嚴島に陣してゐる。貴公何うぢや、攻め來ることが出來るか」と。元就は將士を集めて此の書を見せた。將士は皆恐ろしさうな顏色をした。元就は笑つて曰ふには「賊の言ふ所が眞んとゝすれば、味方の大勝利に決まつたぞ」と。多勢の者が其の譯を尋ねた。元就が曰ふに「嚴島の土地は狹く押

し迫つてゐる。三萬人もゐては、賊共は肩を縮め、足を踏み合ひ、進むにも退くにも不便である。兵數が多ければ多いだけ、鋒先は愈〻鈍くなる。味方は命知らずの數千人で之を衝いたなら、屹度打ち勝つことが出來るのである」と。そこで宍戸隆家をして吉田を留守させて、自分は選り拔きの強い兵三千餘人を率ゐ、南行して草津に至り、晴賢と海を間にして陣取つた。安藝國內の諸々の豪族は元就が屹度敗けると思ひ設けて、多くは病氣と言ひ立て、從はなかつた。

語釋　指₌陳順逆₋（賊に從ふは逆、天子の命により賊を討つは順なりと道理を說く。）○飜レ城（城を引くりかへす義、背いて敵につくをいふ。）

初伊豫有₌能島・來島二族₋、閑₌水戰₋。晴賢・元就竝招レ之。二族以₌三百艘₋、來屬₌元就₋。元就勞レ之、往問₌城中消息₋。賊四鑿₌地道₋、樓櫓殆覆。以₌大索₋維₌持之₋。元就移₌陣火立山₋。晦日盡返₌老弱輜重于草津₋、累累不レ絕。賊望見以爲₌我收₋レ兵也。於レ是元就令₌諸將士人以₌二條布₋約₋レ袖、佩₌一日糧₋、約₌暗號₋、比レ暮上レ船。會大風雨。士卒震怖、請レ俟₌風定₋。元就曰、「天助レ我也」。令₌皆滅₌篝火₋、揭₌一燈于牙船₋。諸軍認レ之、破レ浪而渡。既濟、返₌舟北岸₋、以示₌必死₋。遂上₌博尾崎₋、直出₌塔岡背₋。隆景別率₌伊豫船兵₋、出₌其面₋。賊恃₌風雨₋、無₌警邏者₋。穿₌賊艦₋而入。賊或誰何。浦宗勝大聲答曰、「筑前兵應レ徵來矣」。辟レ船而達、稍稍上レ岸。

【訓讀】初め伊豫に、能島・來島の二族あり、水戰に閑へり。晴賢・元就、並に之を招く。二族、三百艘を以て、來りて元就に屬す。元就之を勞し、往いて城中の消息を問はしむ。賊、地道を四鑿し、樓櫓殆ど覆らんとす。大索を以て之を維持す。元就陣を火立山に移す。晦日、盡く老弱輜重を草津に返し、累累として絶えず。賊望見して以て我れ兵を收むとなす。是に於て、元就、諸將士をして、人ごとに二條の布を以て袖を約し、一日の糧を佩び、暗號を約し、暮るゝ比、船に上らしむ。會ゝ大風雨あり。士卒震怖し、風の定るを俟たんと請ふ。元就曰く「天、我を助くるなり」と。皆篝火を滅せしめて、一燈を牙船に掲ぐ。諸軍、之を認め、浪を破りて渡る。既に濟り、舟を北岸に返し以て必死を示す。遂に博尾崎に上り、直に塔岡の背に出づ。隆景、別に伊豫の船兵を率ゐて其の面に出づ。賊、風雨を恃んで、警邏する者無し。賊艦を穿ちて入る。賊或は誰何す。浦宗勝、大聲に答へて曰く「筑前の兵、徴に應じて來る」と。船を辟けて達し、稍々岸に上る。

【通釋】初め伊豫の國に能島・來島の二族がゐて、水戰に習れてゐた。晴賢も、元就も兩方から之を味方に招いた。所が二族は三百艘の船を連れて元就に附いた。元就は糧鹽酒肴を贈つて之を勞らひ、一方人を派して有浦の城中の様子を尋ねさせた。所が(その報告によると)賊は四方から地中に道を拵らへて攻めたてるので、地盤が弛るんで城の櫓が殆んど覆へりさうである。それで大綱で樓櫓を持ちこたへてゐると分つた。元就は陣を火立山に移した。晦日に元就は老人や小供や、其の他荷車の類を草津に引き返させ、其の行列が長く續いて絶えない。賊は之を嚴島から望見して、元就は軍を引き纏めて退却してゐるのだと思つた。そこで元就は諸々の將士に、銘々二條の白木綿で袖をしばり結び、之を目記るしとなし、一日の食糧を身につけて、合ひ言葉を約束して、日の暮がたに船に乗らせた。丁度大風大雨が來襲した。士卒は震へ怖れて、風の落ち着くのを待つて進みませうと請うた。

元就は曰ふに「これは天が我をお助け下さるのである」と。皆篝火を消させて、唯だ一つの燈を親舟に揭げた。諸軍は燈を認め、浪を破つて渡つた。嚴島へ渡つて終つてから、舟を北の岸に返し、必死の覺悟を見せた。遂に博尾崎に上り、直ちに塔岡の背後へ出た。隆景は別に伊豫の海軍を引き連れて、塔岡の正面へ出た。賊の方では雨、風を恃みにして、見廻り警戒する者はなかつた。そこで賊の軍艦の櫛比してゐる間に割り込んで行つた。賊の中には「誰れだ」と曰つて之を咎める者もあつた。浦宗勝が大聲で答へて曰ふに「筑前の兵がお召しに應じて參りました」と。船を辟けさせて岸に達し、だん〳〵と岸に上陸した。

語釋　火立山（安藝、地御前。）〇返二舟北岸一（舟があると逃げ腰になる。）

兩隊皆陣。天將明矣。元就命吹螺、鼓譟、乘高下擊。賊諸軍大驚、爭萃其牙營。營塡咽自相擊刺。元就大呼曰「進」。諸將士破柵而入。賊兵遂大潰。晴賢咄嗟、遏走者、不能遏也。賊爭舟而遁、溺死數千人。晴賢肥大不便行步。從者扶掖至海岸求船、不復覩一隻。遂自殺。隆包以殘兵百餘、棲嵓洞中。元就惜其才、使人說降之。不肯而死。已而獲晴賢首。元就嚴建旗鼓、奮鞭指其首曰「弒逆之報、乃嬰天誅。今何如也」。諸軍揚凱。元就留嚴島十一日、引兵返小潟、葬晴賢首于洞雲寺。

訓讀　兩隊皆陣し、天將に明けんとす。元就、命じて螺を吹き鼓譟し、高きに乘じて下り擊たしむ。賊の諸軍、

大に驚き、爭つて其の牙營に萃る。營、塡咽して、自ら相撃刺す。元就、大に呼んで曰く「進め」と。諸將士、柵を破つて入る。賊兵終に大に潰ゆ。晴賢、咄嗟走る者を遏むれども、遏むる能はず。賊、舟を爭つて遁れ、溺死するもの數千人。晴賢、肥大にして、行步に便ならず。從者、扶掖して海岸に至り、船を求むれども復一隻を覩ず。遂に自殺す。隆包、殘兵百餘を以て、嵓洞中に棲む。元就、其の才を惜しみ、人をして說いて之を降さしむ。肯ぜずして死す。已にして晴賢の首を獲たり。元就、嚴に旗鼓を建て、鞭を奮つて其の首を指して曰く「弑逆の報、乃ち天誅に嬰れり。今如何」と。諸軍、凱を揚ぐ。元就、嚴島に留ること十一日、兵を引いて小濱に返り、晴賢の首を洞雲寺に葬る。

【通釋】兩隊が皆陣取つて終ふと將に夜が明けようとした。元就はその時命じて螺を吹き、太鼓を叩き譟ぎ立て、高い處から下り擊たしめた。賊の諸軍は大に驚き爭つて本陣に集つた。狹い本陣のことゝて、營は一杯に塞がつて押し合ひへし合ひの大騷ぎ、味方同志で同志討ちが始まつた。元就は大に叫んで曰ふに「進め〳〵」と。諸々の將士は柵を打ち破つて進入した。賊兵は遂に大敗した。晴賢は叱りつけて逃げる者を止めたが、中々逃げ足がついたらどうもならぬもの、止めることが出來ない。賊は舟を爭つて逃げようとするので、それが爲め溺れ死んだ者が數千人からあつた。晴賢はよく肥え太つた男であつて、步くのに不便な程であつた。供の者が腋の下に手をかけて扶けて、海岸まで來て船を搜し求めたが、もう一隻の船もない。とう〳〵自殺した。弘中隆包は殘りの兵をつれて岩屋の中に隱れ棲んでゐた。元就は其の才を惜んで人を遣つて降參するやうに說かせた。けれども承知しないで、これも亦死んだ。その內に晴賢の首が手に入つた。元就は嚴かに旗や太鼓を押し立てゝ、鞭を振り上げ、其の首を指して曰ふには一主君を弑して大逆を行つた報で天の誅罰に會つたのである。今や如何であ

るぞ」と。諸軍で勝鬨の聲を揚げた。元就は嚴島に留ること十一日、それから兵を引きつれ小潟に返し、晴賢の首を洞雲寺に葬つてやつた。

語釋　兩隊（元就の本隊と、隆景の別働隊。）○小潟（安藝）○洞雲寺（廿日市にある。）

元就既誅晴賢、威震關西。周防人相驚曰「毛利軍至矣」陶長房致義長乞援於大友氏。大友氏弗敢應。十二月、元就進陣岩國、遣隆景徇玖珂郡、至上關。杉重輔爲內應、攻殺長房。將士相疑、皆送款元就。元就聞尼子晴久窺備後・石見、未肯深入也。乃招降備後豪族山內隆通、又命元春守石見、而自引軍向山口。陶氏故黨以萬人拒煤間城。隆元攻之。城帶泥淖、我兵不利。三年三月、元就將萬騎發岩國。令士卒人持簀與席、以傅城下。投簀於淖、布席其上、踐以登城、鏖殺其兵。山口騷擾、悉甲拒右田岳。元就與隆元、合兵二萬、攻降之。使一將守之而進。吉見正賴來會焉。義長怖、走勝山。於是、元就整諸軍入山口。內藤隆春等迎降。

訓讀　元就、既に晴賢を誅し、威、關西に震ふ。周防の人相驚いて曰く「毛利の軍至る」と。陶長房、義長をして援を大友氏に乞はしむ。大友氏敢て應ぜず。十二月、元就、進んで岩國に陣し、隆景を遣はし、玖珂郡を徇へ

しめ、上關に至る。杉重輔、內應をなし、長房を攻殺す。將士相疑ひ、皆款を元就に送る。元就、尼子晴久、備後・石見を窺ふと聞き、未だ肯て深く入らず。乃ち備後の豪族山內隆通を招降し、又元春に命じて石見を守らしめ、而して自ら軍を引いて山口に向ふ。陶氏の故黨、萬人を以て煤間城に拒ぐ。隆元、之を攻む。城、泥淖を帶び、我が兵、利あらず。三年三月、元就、萬騎に將として岩國を發す。士卒をして、人ごとに簀と席とを持たしめ、以て城下に傅く。簀を淖に投じ、席を其の上に布き、踐んで以て城に登り、其の兵を鏖殺す。山口、騷擾し、甲を悉し右田岳に拒ぐ。元就、隆元と、兵二萬を合せ、攻めて之を降し、一將をして之を守らしめて進む。吉見正賴來り會す。義長怖れ、勝山に走る。是に於て、元就、諸軍を整へて山口に入る。內藤隆春等迎へ降る。

【通釋】元就は既に晴賢を誅し、その威勢は關西に震ひ渡つた。周防の人はお互に驚いて曰ふには「毛利勢が來た」と。陶長房は義長をして援助を大友氏に乞はせた。大友氏は之に應じようとしなかつた。十二月、元就は進んで岩國に陣取り隆景を遣はして、玖珂郡を觸れ下させ、上關まで來た。杉重輔が裏切つて長房を攻め殺した。將士ども疑ひ合ひ、皆元就に內通した。元就は尼子晴久が備後・石見をねらつてゐると聞いたので、深く周防には攻め込まなかつた。そこで備後の豪族山內隆通を招き降し、又元春に命じて、石見を守らしめ、そして、自分は軍を引率して山口に向つた。陶氏の舊の一味が一萬人を以て、煤間城に距いで居た。隆元が之を攻めた。この城は周圍に泥沼をめぐらしてゐて遂に我軍は負けて終つた。三年三月、元就は一萬騎を率ゐて、岩國を出發した。士卒をして、めい〳〵簀と蓆とを持たせて、城下に迫らせた。簀を泥沼の中に投げ入れ其の上に蓆を敷いてそれを踐んで城に攀ぢ登り、城兵を皆殺にした。山口は大分騷いで、有る限りの兵士を繰り出して、右田岳に拒いだ。元就は隆元と兵二萬人を合せ、攻めて之を降し、一人の大將に之を守らせて置いて進んだ。そこへ吉見正賴が來

り會した。義長は怖れて勝山に逃げた。そこで元就は諸軍を整へて、山口に入つた。內藤隆春は出迎へ降參した。

語釋 玖珂郡・上關・煤間城・右田岳（周防）〇一將（南方就正）

元就遣六千騎、扼長府・下關、以絕大友氏援路、而令福原貞俊攻勝山、殺義長及晴賢季子鶴壽。周防・長門士民、雲集山口。豐前・筑後諸城、又多送降者。元就盡除弊政、免租賦、分邑賞諸將、置戍于下關・門司・三尾・鵠峯四處。四月、凱旋安藝。是時、晴久入備後、數攻隆通、不能下。轉向石見、不敢入而去。十一月、陶氏餘黨起、攻鵠峯。元就將萬人往平之、轉攻周防故將益田藤包于三角城。元春・隆景說曰「藤包勇智、不下正賴。而與之有郤。宜兩存之、使相鈴制。」乃招降藤包。

訓讀 元就、六千騎を遣はして、長府・下關を扼し、以て大友氏の援路を絕ち、而して福原貞俊をして勝山を攻めしめ、義長及び晴賢の季子鶴壽を殺す。周防・長門の士民、山口に雲集し、豐前・筑後の諸城、又降を送る者多し。元就盡く弊政を除き、租賦を免じ、邑を分ちて諸將を賞し、戍を下關・門司・三尾・鵠峯の四處に置き、四月、安藝に凱旋す。是の時、晴久、備後に入り、數隆通を攻めて下す能はず。轉じて石見に向ひ、敢て入らずして去る。十一月、陶氏の餘黨起りて、鵠峯を攻む。元就、萬人に將として往いて之を平げ、轉じて周防の故將益田藤包を三角城に攻む。元春・隆景、說いて曰く「藤包は、勇智、正賴に下らず。而して之と郤有り。

宜しく之を兩存し、相鈐制せしむべし」と。乃ち藤包を招き降す。

通釋 元就は六千騎を遣はして長府下關を押へて、大友氏の援兵の來る路を絶ち切り、而して一方福原貞俊をして勝山を攻めさせて、義長、及び晴賢の末子鶴壽を殺した。そこで周防・長門の士民は山口に雲のやうに集り、豐前・筑後の諸城の中で降參を申し入れるものも多かつた。元就は全部これまでの惡い政治を取り除き、租税を免じ、土地を分けて諸將を賞し、守兵を下關・門司・三尾・鵜峯の四個所に置いて、四月に安藝に凱旋した。この時、晴久は備後に入つて、度々隆通を攻めたのだが降參さすことは出來なかつた。そこで方向を轉じて石見に向つたが攻め入りもしないで立ち去つた。十一月、陶氏の殘黨が起つて、鵜峰を攻めた。元就は一萬人を率ゐて往いて、之を平らげ、轉じて、周防の舊將益田藤包を三角城に攻めた。元春・隆景は元就に說いて曰ふのに「藤包はその勇その智正頼に下らぬ人物であります。そして正頼と互に不仲であります。これは兩家ともに殘して置いて、互に相牽制させるやうにした方が宜しう御座います」と。そこで藤包を招き降した。

語釋 勝山・長府・三尾(長門) ○鵜峯(周防) ○三角城(石見) ○鈐制(鈐は車のくさび、くさびが車を制するやうに、牽きとめて自由にさせぬこと。)

元就於是盡取大內氏地、遂圖尼子氏。而患尼子國久强悍、謀除之。尼子經久娶吉川經基女。而元就亦爲其孫女壻。是以託姻戚、數通使幣於國久。晴久頗疑之。義勝之死、其子經貞猶幼。國久攝其邑。及長不返與。經貞御之。於是、元就令死囚懷書入出雲、殺之道上。行人聚觀、取其書、乃元就與國久約內應者也。晴久獲書大驚、召經

貞、問曰「聞新宮黨陰通安藝。女豈知之乎」經貞媒蘖之曰「臣數見其密使往來。」晴久乃伏甲、要殺國久父子、殲其黨。北兵自是弱矣。

【訓讀】元就、是に於て、盡く大内氏の地を取り、遂に尼子氏を圖る。而れども尼子國久の强悍を患ひ、之を除かんと謀る。尼子經久、吉川經基の女を娶る。而して元就も亦、其の孫女の壻たり。是を以て姻戚に託して數使幣を國久に通ず。晴久頗る之を疑ふ。義勝の死するや、其の子經貞、猶ほ幼なり。國久、其の邑を攝す。長ずるに及んで返し與へず。經貞、之を啣む。是に於て、元就、死囚をして、書を懷にして出雲に入らしめ、之を道上に殺す。行人聚り觀て、其の書を取れば、乃ち元就、國久と、内應を約するものなり。晴久書を獲て大に驚き、經貞を召し、問うて曰く「新宮黨、陰に安藝に通ずと聞く。女豈に之を知るか」と。經貞、之を媒蘖して曰く「臣、數其の密使の往來するを見る」と。晴久乃ち甲を伏せ、國久父子を要殺し、其の黨を殲す。北兵、是れより弱し。

【通釋】こんな具合で元就は皆大内氏の土地を取り、遂に尼子氏を滅さうと計畫した。併し尼子國久が强くて勇氣があつて氣がかりになるので先づ之を除かうと謀つた。尼子經久は吉川經基の娘を娶つてゐた。そして元就も亦經基の孫娘の婿である。そこで元就は姻戚といふことにかこつけて、度々使者や贈物を國久に送つた。晴久はよほど、之を變に思つた。義勝が三猪口で討死した時、その子經貞はまだ幼少であつた。國久は其の領地を預つてゐた。所が經貞が成長しても返し與へなかつた。經貞は之を怨んで居た。そこで元就は死刑囚の男に密書を懷に入れさせて出雲に行かせ、その死刑囚の男を街道筋で殺して置いた。路上の行人が聚まつて之を觀て、その密

書を取り上げて見ると、元就が國久と内通の約束をした書面であつた。晴久はその密書を獲て非常に驚き經貞を呼んで曰ふには「新宮黨が安藝に内通したと聞いた。お前はそれを知つて居るか」と。經貞は怨のある國久をやつゝける時が來たと思ひ、罪をこしらへて曰ふのに「私は度々その密使が往き來するのを見ました」と。そこで晴久は兵士を匿し置いて國久親子を待ち伏せして殺し、その一味新宮黨を皆殺にして終つた。尼子の兵はこれから弱くなつた。

語釋 媒蘖（中に立つて罪を成立させるやうにすること。）

永祿元年二月、元就使元春陣出羽、與尼子氏將小笠原長雄・本莊常光戰。未決。神邊城主杉原盛重、來援破之。五月、元就攻降長雄。晴久來救、不及。三年二月、攻取松山。八月、誘降常光、定石見。是歲正月、天子行卽位禮。元就獻金助資焉。詔以元就敍從四位下、任大膳大夫、賜菊桐章。尋遷陸奧守。而隆元代之。

訓讀 永祿元年二月、元就、元春をして出羽に陣せしめ、尼子氏の將小笠原長雄・本莊常光と戰はしむ。未だ決せず。神邊城主杉原盛重、來り援けて之を破る。五月、元就攻めて長雄を降す。晴久來り救ふも、及ばず。三年二月、攻めて松山を取る。八月、誘ひて常光を降し、石見を定む。是の歲正月、天子、卽位の禮を行ふ。元就、金を獻じ、資を助く。詔して、元就を以て從四位下に敍し、大膳大夫に任じ、菊桐の章を賜ふ。尋いで陸奧守に遷さる。而して隆元、之に代る。

通釋 永祿元年二月、元就は、元春をして出羽に陣せしめて、尼子氏の將小笠原長雄・本莊常光と戰はせた。まだ勝負は決まらなかつた。神邊の城主杉原盛重が援けに來てから遂に之を破つた。五月元就は攻めて長雄を降した。晴久が長雄を救ひに來たが間に合はなかつた。三年二月攻めて、松山を取つた。八月誘うて常光を降して石見を平定した。この年正月、正親町天皇が御卽位の大典を行はせられた。元就は金子を獻上して、その御入用を補ひ奉つた。そこで詔して元就をば從四位下に叙し給ひ、大膳大夫に任ぜられ、菊桐の紋所を賜はつた。其の內に陸奧守に遷された。長子隆元が父になり代つて陸奧守を勤めた。

語釋 出羽（石見）○神邊（備後）○松山（備中）

十月、入出雲、軍于赤穴。迎降者十餘族。常光爲先鋒、縱火岩坂。常光負功汰虐。元就與元春・隆景謀曰「彼服可用。而叛不可制。已叛於尼子。何有於我。不若速除。」十一月、襲殺之。降將因是多叛。五年十月、元就由白潟入、城于洗合山。去富田七里、建爲本營、築連珠砦。以漸逼富田。迎京師公卿文儒、講書于軍中、以示據久之意。因幡山名氏、伯耆南條氏、嘗爲尼子氏所逐。元就復之、使收其義故、以助攻尼子氏。山名祐豐亦以伯耆來屬。

訓讀 十月、出雲に入りて、赤穴に軍す。迎へ降る者十餘族。常光、先鋒となり、火を岩坂に縱つ。常光功を

恃みて汰虐なり。元就、元春・隆景と謀つて曰く「彼れ服せば用ふ可し。而れども叛かば制す可からず。已に尼子に叛く。何ぞ我に有らん。速に除くに若かず」と。十一月、襲うて之を殺す。降將、是に因つて多く叛く。五年十月、元就、白潟より入り、洗合山に城く。富田を去ること七里、建てゝ本營となし、連珠砦を築き、以て漸く富田に逼る。京師の公卿、文儒を迎へ、書を軍中に講ぜしめ、以て據久の意を示す。因幡の山名氏、伯耆の南條氏、嘗て尼子氏の逐ふ所と爲る。元就、之を復し、其の義故を收め、以て尼子氏を助け攻めしむ。山名祐豐も亦、伯耆を以て來り屬す

通釋 十月、出雲に入り、赤穴に陣取つた。迎へ降るものが十餘族もあつた。常光は先鋒となつて火を岩坂にかけた。常光は手柄を鼻にかけて威張りちらし人を虐めてゐた。元就は元春・隆景と相談して曰ふには「あいつは服從さへすれば役に立つ。けれども叛いたらどうにも手に終へない男だ。すでに尼子に叛いた男である。我に叛く位は何とも思つてゐないであらう。早く始末をして置いた方が宜からう」と、十一月、不意を撃つて之を殺した。降參して來てゐる大將どもは自ら危ぶんで叛くものが多かつた。五年十月、元就は、白潟より入り洗合山に城を築いた。そこは富田を去ること七里で、建てゝ本營となし、珠數のやうな砦を築いて、だん／＼富田に逼つた。京都の公卿や學者を呼んで來て、陣中に於て書物を講義させ、長陣の覺悟を見せた。因幡の山名氏・伯耆の南條氏は嘗て尼子氏に逐はれたことがある。元就は之を元通りに取り戻し、その義理ある舊臣をまとめさせ、自分に加勢して尼子氏を攻めるやうにさせた。山名祐豐も亦伯耆の兵をつれて來り屬した。

語釋 岩坂・白潟・洗合山・富田（出雲）〇汰虐（奢り亂暴なること。）

十二月、晴久病卒。其子義久嗣。大友義鎭與義久通好、數攻門司。乃遣隆元・隆景、以萬餘人赴援、取神田城、留天野隆重守之。隆元留屯岩國。六年二月、義鎭以二萬人攻神田、不能下。會天使二人至自京師、令我與義鎭和弭兵。隆元乃爲其子輝元約娶義鎭女。又令與義久和。元就疏不可和者十條、辭之。

訓讀 十二月、晴久病んで卒す。其の子義久嗣ぐ。大友義鎭、義久と好を通じて、數門司を攻む。乃ち隆元・隆景を遣はし、萬餘人を以て赴き援けしめ、神田城を取り、天野隆重を留めて之を守らしむ。隆元留つて岩國に屯す。六年二月、義鎭、二萬人を以て神田を攻む。下す能はず。會天使二人、京師より至り、我と義鎭とをして、和して兵を弭めしむ。隆元乃ち其の子輝元の爲めに、義鎭の女を娶らんと約す。又義久と和せしむ。元就、和す可からざる者十條を疏して、之を辭す。

通釋 十二月、晴久は病氣で死んだ。その子の義久が後を嗣いだ。大友義鎭は義久と好を通じ、度々門司を攻めた。そこで隆元・隆景を遣はし、一萬人を率ゐて赴き援けさせ、神田城を取り、天野隆重を留めて此の城を守らせた。隆元は留つて、岩國に屯した。六年二月、義鎭は二萬人を引きつれて、神田を攻めた。併し下すことは出來なかつた。丁度天皇の御使二人が京都から來て、我と義鎭とに兵を罷めて和睦するやうにせしめられた。そこで隆元は其の子の輝元の爲めに義鎭の娘を娶るやうに約束した。天皇の御使は又義久と元就を和睦させようとされた。元就は和睦の出來ぬ譯を十個條書き立て、之を奏上し、お斷り申上げた。

七月、隆元撤守歸覲、過吉田。將士勸入城休息。隆元曰「家君衰老、櫛風沐雨。吾何忍休乎」八月、至舟木。和智隆實要而饗之。疾作、卒。年四十一。隆元性仁孝。元就嘗罹疾。祈以身代之。其在岩國、大友氏陰招周防・長門將士。將士皆不忍叛焉。元就得計、慮軍氣沮、出令曰「欲弔亡兒者力戰」。自將攻白鹿城。城將松田兵部能拒。乃使銀山礦卒鑿地道。城兵亦鑿而迎之、鬪于穴中。城兵遂塞穴而卻。乃截其汲路。松田盛米于斗、灌注馬足。我軍士視之、以爲水不乏也。九月、義久聞白鹿急、遣弟倫久將萬騎援之。欲動我兵決戰。平旦來挑戰。元就不應。日晡、倫久將去。元就乃鼓而進。敵敗走。

【語釈】神田城（豊前）〇天使二人（聖護院道澄・久我通興。）

【訓読】七月、隆元、守を撤して歸覲し、吉田を過ぐ。將士、城に入りて休息せんことを勸む。隆元曰く「家君衰老・風に櫛り雨に沐す。吾れ何ぞ休むに忍びんや」と。八月、舟木に至る。和智隆實、要して之を饗す。疾作りて卒す。年四十一。隆元、性仁孝なり。元就嘗て疾に罹る。身を以て之に代らんと祈る。其の岩國に在るや、大友氏、陰に周防・長門の將士を招く。將士皆叛くに忍びず。元就、計を得て・軍氣の沮まんことを慮り、令を出して曰く「亡兒を弔はんと欲する者は力戰せよ」と。自ら將として白鹿城を攻む。城將松田兵部、能く拒ぐ。

乃ち銀山の礦卒をして地道を鑿たしむ。城兵も亦鑿ちて之を迎へ、穴中に鬭ふ。城兵遂に穴を塞いで卻く。乃ち其の汲路を截つ。松田、米を斗に盛り、馬足に灌注す。我が軍士、之を視て、以て水乏しからずとなす。九月、義久、白鹿の急なるを聞き、弟倫久を遣はし、萬騎に將として之を援けしめ、我が兵を動かし決戰せんと欲し、平旦、來つて戰を挑む。元就應ぜず。日、晡なり。倫久將に去らんとす。元就乃ち鼓して進む。敵、敗走す。

通釋 七月、隆元は岩國の守備を取り除いて歸省し、吉田を通過した。將士等は城に入つて休息するやうに勸めた。隆元がいふのに「父君は御年を召しておゐでなされても、山野に艱難辛苦されて居る。自分だけがどうして休息するに忍びられようぞ」と。八月、舟木に至つた。和智隆實は待ち受けて御馳走をした。それがもとで急に病氣が起つて死んだ。年は四十一であつた。隆元は性質情け深く孝行であつた。元就がかつて病氣に罹つた。其のとき彼は身を以て代り度いと神に祈つた程である。彼が岩國に居つた時、大友氏はそひかに周防・長門の將士を招いた。併し將士は皆隆元に叛くには忍びなかつた。元就はその死んだ知らせを得て軍士の意氣の落ちるのを心配し、命令を出して曰ふには「亡兒を弔ひたいと思ふものは力を出して戰へ」と。自ら大將となつて白鹿城を攻めた。城將松田兵部は能く拒いだ。そこで銀山の坑夫をして地下道を掘らせた。城兵も亦穴を掘つて、之を迎へ穴の中で鬭つた。城兵は遂に穴を塞いで退却した。そこでこんどは水を汲む路を絶ち切つた。すると城將の松田は米を升に入れて馬の足にそゝいだ。(水のやうに見せかけたのである。)我が軍は之を見て水は缺けてゐないと思ひ込んで了つた。九月義久は白鹿が危いと聞いたので弟の倫久を派し一萬騎に將となつて之を援けさせ、我が兵を動かして決戰しようと思ひ、夜あけ方にやつて來て戰を仕かけた。元就は之に應じなかつた。日暮になつた。倫久が退却しようとした。そこで元就は太鼓を鳴らして進んで出た。敵軍は敗れ走つた。

語釋 櫛風沐雨（頭の髮を風で櫛り、雨で洗ふことにて、山野に曝露して苦辛すること。）○舟木（周防）○白鹿城（出雲）○銀山（石見の銀山。）

先是、元就遣香川光景、助三村家親、略備中、滅吉田氏。七年三月、入伯耆、幷南條・行松氏兵、絕富田糧道。會行松死。杉原盛重受命、攝其家事。初盛重爲杉原忠興家臣。與忠興據神邊、拒我兵、終降。及其死、元就命盛重爲之嗣。盛重嘗製陣法、以弓翼槍。與富田兵戰湖上、再克之。又收盜賊爲兵。有佐田某焉、妙於間諜。故盛重善知敵情、數有功。後徙八橋城。

訓讀 是より先き、元就、香川光景を遣はし、三村家親を助けて、備中を略せしめ、吉田氏を滅す。七年三月、伯耆に入り、南條・行松氏の兵を幷せ、富田の糧道を絕つ。會々行松死す。杉原盛重、命を受けて、其の家事を攝す。初め盛重、杉原忠興の家臣となる。忠興、神邊に據り、我が兵を拒ぎ、終に降る。其の死するに及び、元就、盛重に命じて之が嗣と爲らしむ。盛重嘗て陣法を製し、弓を以て槍を翼く。富田の兵と湖上に戰ひて、再び之に克つ。又盜賊を收めて兵と爲す。佐田某有り、間諜に妙なり。故に盛重善く敵情を知りて、數々功有り。後八橋城に徙る。

通釋 是れより先き、元就は香川光景を遣はして、三村家親を助け、備中を攻略せしめ、吉田氏を滅ぼした。七年三月、伯耆に入り、南條・行松二氏の兵を合併して、富田の兵糧運搬の路を絕ち切つた。丁度其の時行松は死

んで終つた。杉原盛重が命を受けて、行松家の事を取り計らつてゐた。はじめ、盛重は杉原忠興の家來となつてゐた。忠興は神邊に立て籠り、我が兵を防ぎ拒んだが、結局降參した。忠興が死んだので、元就は盛重に命じてその跡嗣ぎとした。（それから杉原と名乘つた）この盛重は嘗て陣法を作り、弓勢を以て槍隊を助けることにした。富田の兵と宍道湖のほとりで戰つて二度まで打ち克つた。又盜賊を召して兵士とした。その中に佐田某といふ者がゐて、非常に忍びの上手な男であつた。だから盛重は善く敵の内情を知つて、度々手柄を立てた。後に八橋城に移つた。

語釋 八橋城（伯耆）○佐田某（彦四郎。）

八年二月、隆元子輝元、與元春子元長、共來洗合。四月、熊谷信直擁元長、進擊走龜井安綱。八月、盛重拔江美。九月、家親拔大江。元就乃起石原・龍山等十二寨、以環富田、謀竭其糧也。置關四外、榜曰「必殲之。毋使一人遁。」已而度糧盡、則撤關吏、榜曰「降者釋之」。城兵逃降相踵。當是時、義久寵臣大塚某、與義久嬖姬相結、以譖諸將通款於我。九年正月、卯山久信被誅。諸將皆懼出降。獨河副・森脇等三百人不降。元就有疾。招降義久。七月、義久遂致城降。寘之安藝長田。元就圍富田、前後七年而降之。擇其守將。衆推天野隆重。乃命隆重守焉、振旅而還。

【訓讀】八年二月、隆元の子輝元、元春の子元長と、共に洗合に來る。四月、熊谷信直、元長を擁し、進み擊つて龜井安綱を走らす。八月、盛重、江美を拔く。九月、家親、大江を拔く。元就乃ち石原・龍山等の十二寨を起し、以て富田を環らし、其の糧を竭さんと謀る。關を四外に置き、榜して曰く「必ず之を殲せよ。一人をして遁れしむる勿れ」と。已にして糧盡くるを度り、則ち關を撤し榜を更めて曰く「降る者は之を釋さん」と。城兵逃降するもの相踵ぐ。是の時に當り、義久の寵臣大塚某、義久の嬖姫と相結び、以て諸將、款を我に通ずと讒す。九年正月、卯山久信誅せらる。諸將皆懼れ、出で降る。獨り河副・森脇等三百人降らず。元就疾有り、義久を招降す。七月、義久遂に城を致して降る。之を安藝の長田に寘く。元就、富田を圍むこと、前後七年にして之を降す。其の守將を擇ぶ。衆、天野隆重を推す、乃ち隆重に命じて守らしめ、振旅して還る。

【通釋】八年二月、隆元の子輝元は、元春の子元長と共に洗合に來た。四月、熊谷信直は元長を守り立てゝ進み、擊ち、龜井安綱を走らせた。八月、盛重は江美を陷れた。九月、家親は、大江を陷れた。そこで元就は石原・龍山等、十二個所に寨を築いて、富田を取り卷き、その兵糧を無くする算段をした。關所を城の外の四方に置いて、立て札をして曰ふのに「必ず敵を皆殺しにせよ。一人でも遁がしてはならぬ」と。その內に最早兵糧も無くなつた頃を見計ひ、關所を取り拂ひ、立て札を變へて曰ふには「降參する者は赦してやる」と。すると城兵の逃げて、降參した者が相ついで出た。この時、義久の寵臣大塚某は、義久のお氣に入りの妾と結托して、諸將が毛利に裏切つたと讒言した。そこで九年正月に卯山久信が誅せられた。それからは諸將が皆懼れて出でゝ毛利に降參した。たゞ河副・森脇等三百人は降參しなかつた。所が元就が病氣に罹つた。そこで攻めるのを止めて義久を招き降した。七月、義久は遂に城を明け渡して降參した。そこで義久を安藝の長田に置いた。元就は富田を圍む

こと、前後七年で降參させたのである。それで富田の守將を選ぶことゝなつた。皆々は天野隆重を推擧した。そこで隆重に命じて守らせ、勢揃ひをして引き上げた。

語釋　江見・大江・石原・龍山（出雲）　○四外（四方の出口。）　○大塚某（與左衞門）

元就既ニ幷セ二大內・尼子二氏ノ地ヲ一、定メ二山陰・山陽十三州ヲ一、命ジテ二元春ニ一掌ラシメ二山陰ヲ一、隆景ニ掌ラシム二山陽ヲ一。遂ニ令ム二二將ヲシテ略セ二地ヲ於南海・西海ニ一。當リ二是ノ時ニ一、南海ニ有リ二長曾我部・宇都宮・河野氏一。西海ニ有リ二大友・島津・龍造寺氏一。十一年、宇都宮豐綱攻ム二河野通直ヲ一。通直來リ乞フレ援ヲ。二月、元春・隆景將トシテ二兵數萬ヲ一、入リ二伊豫ニ一、拔キ二二城ヲ一、圍ム二豐綱ヲ于大津ニ一。長曾我部元親將トシテ二萬人ヲ一來リテ援ケ二豐綱ヲ一、軍ス二于柳原ニ一。乃チ令メ二宍戶隆家ヲシテ當ラ一レ之ニ、而シテ諸軍攻メテ降ス二豐綱ヲ一。元親引キ去ル。元春・隆景以テ二六旬ヲ一定メ二伊豫ヲ一、還リテ誅ス二和智隆實ヲ于嚴島ニ一。以テ二隆元之死有ルヲ一二蹤跡一也。當リ二是ノ時ニ一、筑紫ノ豪傑高橋・宗像・秋月ノ諸族、皆屬ス二元就ニ一。大友義鎭數攻ムレ之ヲ。十一月、元春・隆景、與ニ二元長一、將トシテ二五萬人ヲ一赴キレ援ニ、援ク二三岳ヲ一。

訓讀　元就、既に大內・尼子二氏の地を幷せ、山陰・山陽十三州を定め、元春に命じて山陰を掌り、隆景に山陽を掌らしむ。遂に二將をして、地を南海・西海に略せしむ。是の時に當り、南海に長曾我部・宇都宮・河野氏有り。西海に大友・島津・龍造寺氏有り。十一年、宇都宮豐綱、河野通直を攻む。通直來り援を乞ふ。二月、

元春・隆景、兵數萬に將として、伊豫に入り、二城を拔き、豐綱を大津に圍む。長曾我部元親、萬人に將として來つて豐綱を援け、柳原に軍す。乃ち宍戸隆家をして之に當らしめ、而して諸軍は攻めて豐綱を降す。元親引き去る。元春・隆景、六旬を以て伊豫を定めて還り、和智隆實を嚴島に誅す。隆元の死、蹤跡有るを以てなり。是の時に當り、筑紫の豪傑、高橋・宗像・秋月の諸族、皆元就に屬す。大友義鎭、數之を攻む。十一月、元春・隆景、元長と五萬人に將として赴き援け、三岳を拔く。

〔通釋〕元就は既に大内・尼子二氏の土地を併せ取り、山陰・山陽の十三州を平定し、元春に命じて山陰を掌らせ、隆景に山陽を掌らせた。猶ほその上にこの二人をして、南海道・西海道の土地を攻略せしめた。この當時南海には、長曾我部・宇都宮・河野等の諸氏がゐた。西海には大友・島津・龍造寺の諸氏がゐた。十一年、宇都宮豐綱は河野通直を攻めた。通直は來つて援助を乞うた。二月、元春・隆景は兵數萬に將となり、伊豫に入り、二城を陷れ、豐綱を大津に取り圍んだ。長曾我部元親は萬人に將として、來つて豐綱を援け、柳原に陣取つた。そこで、宍戸隆家をして、之に當らしめ、一方諸軍は攻めて、豐綱を降參させた。そんなことで元親は引き上げて歸つて終つた。元春・隆景は六十日間に伊豫を平定して還り、和智隆實を嚴島で誅殺した。それは隆元が死んだのは隆實が毒害した證跡があつたからである。この時に當り、筑紫の豪傑高橋・宗像・秋月の諸族は皆元就に屬いてゐた。大友義鎭は度々これ等諸族を攻めた。十一月、元春・隆景は元長と一緒に五萬人をつれて、助けに行き、三岳を陷れた。

〔語釋〕柳原（伊豫）〇有蹤跡（前年、隆實が隆元を饗して後急死したのは毒殺であつた證據が上つたのである。）〇三岳（筑前）

十二年四月、遂圍立華城。義鎭方攻龍造寺隆信于佐賀。聞之、與隆信和。五月、使其二將將兵七萬援立華。我軍作塹壘、再戰破之。元就携輝元、往長門、遙爲聲援。尼子氏遺臣山中幸盛・立原之綱等、在京師、聞之、索故尼子誠久子爲僧者、爲主、更名勝久。糾但馬海賊、入隱岐。六月、入出雲、取新山・末次、攻富田天野隆重。有兵三百。佯降、誘其兵二千于城下、撃破之。七月、敵設伏而誘隆重。隆重諜知、雨射伏中、又破之。元就聞浮田氏應勝久、遣香川光景定美作、令元春・隆景疾攻下立華、送致城兵于西軍。西軍猶與我相持。九月、故大内義興庶兄輝弘、寓大友氏、借兵五千、海路入周防、攻鵠峯。元就命班外師。十月、置戍班師。以吉見正頼爲殿而退。至若松渡、取土人質、使具船以濟、乃令戍兵致城而還。遣兵援鵠峯、逐輝弘、殺之。

【訓讀】十二年四月、遂に立華城を圍む。義鎭、方に龍造寺隆信を佐賀に攻む。之を聞いて隆信と和す。五月、其の二將をして、兵七萬に將として立華を援けしむ。我が軍、塹壘を作り、再び戰つて之を破る。元就、輝元を携へ、長門に往き、遙に聲援を爲す。尼子氏の遺臣山中幸盛・立原之綱等、京師に在つて之を聞き、故の尼子誠久の子の僧と爲れる者を索めて、主と爲し、名を勝久と更めしむ。但馬の海賊を糾し、隱岐に入る。六月、出

雲に入り、新山・末次を取り、富田を攻む。天野隆重、兵三百有り。佯り降り、其の兵二千を城下に誘ひ、撃つて之を破る。七月、敵、伏を設けて隆重を誘ふ。隆重、諜知し、伏中に雨射して、又之を破る。元就、浮田氏、勝久に應ずと聞き、香川光景を遣はし美作を定めしめ、元春・隆景をして、疾く攻めて立華を下さしめ、城兵を西軍に送致せしむ。西軍、猶ほ我と相持す。九月、故の大内義興の庶兄輝弘、大友氏に寓し、兵五千を借り、海路より周防に入りて、鴻峰を攻む。元就、命じて外師を班さしむ。十月、戍を置き師を班す。吉見正頼を以て殿と爲して退く。若松渡に至り、土人の質を取つて、船を具へしめ以て濟り、乃ち戍兵をして城を致さしめて還る。
兵を遣はし鴻峰を援けしめ、輝弘を逐ひて之を殺す。

通釋 十二年四月、遂に元春等は立華城を取り圍んだ。大友義鎭は折柄龍造寺隆信を佐賀に攻めて居た。立華城を圍まれたと聞いて隆信と急に和睦をした。五月、その二人の大將をして、兵七萬を率ゐて立華城を助けさせた。我が軍は堀と壘とを作つて、二度戰つて之を破つた。元就は孫の輝元をつれて、長門に行き、はるかに應援をした。尼子氏の遺臣の山中幸盛・立原之綱等は京都で、此の話を聞いて、故の尼子誠久の倅で僧になつて居る者を尋ね出して、それを主人となし、勝久と改名させた。かくして尼子勢は但馬の海賊をあつめて隱岐に入り込んだ。六月、出雲に入り、新山・末次を取り、富田を攻めた。天野隆重は其の時僅に兵三百人を有してゐた。そこで降參した振りをして其の兵二千人を城下におびき寄せ、撃つて之を破つた。七月、敵は、伏兵を設けて、隆重を誘うた。隆重はしのびの者の報告で前以て之を知り、伏兵のゐる所へ雨のやうに矢を射ちかけて、又之を破つた。元就は浮田氏が尼子勝久に味方したと聞いて、香川光景を遣つて、美作を平定せしめ、元春・隆景をして急に攻めて、立華を降參させ、城兵を西軍(大友の方)に送り致さしめた。西軍はまだ其の時我と對陣して居た。九月、故の

大内義興の側腹の兄輝弘は、大友氏に寄寓して居つたが兵五千人を借りて、海上から周防に入り込み、鵠峰を攻めた。元就は國外に出て居る軍勢を呼び戻すやうに命じた。十月、守兵を立華城に置いて軍を還した。吉見正頼を殿となして退いた。若松の渡に來て土地の者の人質を取つて置き、舟を支度させて渡りそこで守兵をして立華城を敵に渡させて還つて來た。そして兵を遣はして、鵠峰を救ひ、輝弘を逐うて殺した。

語釋 立華城（筑後）○二將（奈須統正 戸次道雪）○新山（多賀重綱が守つてゐた。）○外師（九州を伐つてゐる兵。）

元龜元年正月、元春・隆景將兵一萬五千、輔輝元、攻勝久。恐其城守也、宣言兵寡將納糧富田而還。山中幸盛聞之、悉甲五千、出于布辨山。我兵擊大破之。元春攻末次。夜列炬其面、而自背襲之。勝久・幸盛走新山。諸城連陷。

訓讀 元龜元年正月、元春・隆景、兵一萬五千に將として、輝元を輔け、勝久を攻む。其の城守を恐るゝや、兵寡く、將に糧を富田に納れて還らんとすと宣言す。山中幸盛、之を聞き、甲五千を悉して、布辨山に出づ。我が兵擊つて大に之を破る。元春、末次を攻む。夜、炬を其の面に列ね、而して、背より之を襲ふ。勝久・幸盛、新山に走る。諸城連に陷る。

通釋 元龜元年正月、元春・隆景は兵一萬五千に將として、輝元を輔けて勝久を攻めた。彼等は勝久が城に立て籠つて守るのではないかと心配したので、次のやうに宣言した「兵士が少いから兵糧を富田に納れて置いて、退却しようと思ふ」と。山中幸盛は之を聞いて五千の兵士を皆引きつれて布辨山に出陣した。我が兵は擊つて大に

之を破つた。元春は末次を攻めた。夜松明を敵の前面に列ねて置いて（人の居る樣に見せかけて）後の方から敵を襲うた。勝久・幸盛は新山に逃げ込んだ。諸城は次ぎ〳〵と陷つた。

語釋 恐其城守也（籠城すると攻めるのに困るから恐れたのである。）○有辨山（出雲）

八月、元就患瘍。輝元・隆景歸省之。二年六月、疾篤。輝元請遺言。元就曰「汝視二叔猶我、勿違其言、則可以守我業矣。吾復何言」遂卒。元就善歌詠、有遺集若干卷。嘗酒酣、慨然言曰「凡英雄以身繫天下治亂者、求友於千載之上、即同世而生、志合則天下治。志不合則天下亂」嘗問左右曰「吾於前世人主、可比於誰」有一儒士、對曰「可比周文武」元就笑曰「吾乃今知不若文武也。文武之臣、豈有面諛如汝者哉」元就得一州、則擇守將、輒戒之曰「吾聞、侮其人者、不有其土。汝服膺此言」故新附士民少倍畔者。

訓讀 八月、元就、瘍を患ふ。輝元・隆景、歸つて之を省す。二年六月、疾篤し。輝元、遺言を請ふ。元就曰く「汝二叔を視ること猶ほ我の如く、其の言に違ふことなくんば、則ち以て我が業を守るべし。吾れ復何をか言はん」と。遂に卒す。元就、歌詠を善くし、遺集若干卷あり。嘗て酒酣なるとき慨然として言つて曰く「凡そ英

雄、身を以て天下の治亂に繫くる者は、友を千載の上に求む。卽し世を同じくして生れ、志合へば則ち天下治る。志合はざれば則ち天下亂る」と。嘗て左右に問うて曰く「吾れ前世の人主に於て、誰に比すべき」と。一儒士あり、對へて曰く「周の文武に比す可し」と。元就笑つて曰く、「吾れ乃ち今にして文武に若かざるを知る。文武の臣、豈に面諛すること汝の如き者あらんや」と。元就、一州を得れば則ち守將を擇び、輒ち之を戒めて曰く「吾れ聞く、其の人を侮る者は、其の土を有せずと。汝此の言を服膺せよ」と。故に新附の士民、倍畔する者少し。

通釋 八月、元就は㾓といふ病氣に罹つた。輝元・隆景は見舞に歸つた。二年六月、病氣が重くなつた。輝元は何か御遺言はないかと請うた。元就はいふのに「お前が元春・隆景二人の叔父を視ること我を視るがやうにし、二人の言葉に背かなかつたならば我が事業を守つて行くことが出來るだらう。この外、別に申して置くこともない」と。遂に歿した。元就は和歌が上手で遺稿の歌集が若干卷ある。嘗て酒盛の最中、元就が嘆いていふには「凡そ英雄で自分の身を天下の治亂に關係させて居る程のものは、友を千年の古に求める。もし友となる可き人が同じ時代に生れたとしてそれと志が投合すれば、天下はよく治まることゝなる。若し志が合はなければ自然相爭ふから天下が亂れるのである」と。又嘗て左右の臣に問うていふには「余は前世の人君の中で誰に比べられるべきものであらうか」と。一人の儒者がいふのに「周の文王、武王に比すべき方であります」と。すると元就が笑つていふには「余は初めて自分が文王、武王に及ばないことを知つた。文王、武王の家來にはお前のやうな眼前で諂ふものはゐなかつた」と。元就は一國を攻め取ると之を守る大將を擇び、それを戒めて曰ふには「其の民を侮るやうなものは其の土地を保有することは出來ないものだと聞いてゐる。お前は此の言葉をよく胸に納めて

守つて行け」と。故に新に附いた將士人民で叛くものは至つて少かつた。

語釋 膈（食道の塞る病氣。）

元春得訃哭泣、謂將士曰「葬奠之任、隆景在焉。吾當勤敵以慰靈魂。」是時幸盛在末石。元春乃稱攻大山僧徒、而急還攻末石。幸盛出降。僞疾自厠中逃。八月、元春攻新山、走勝久。勝久匿京師、幸盛爲盜但馬・因幡間、遂與勝久偕歸於織田信長。

訓讀 元春、訃を得て哭泣し、將士に謂つて曰く「葬奠の任は、隆景在り。吾れ當に敵を勤し以て靈魂を慰むべし」と。是の時、幸盛、末石に在り。元春、乃ち大山の僧徒を攻むと稱し、而して急に還つて末石を攻む。幸盛出で降る。疾と僞り、厠中より逃る。八月、元春、新山を攻めて、勝久を走らす。勝久京師に匿る。幸盛、盜を但馬・因幡の間に爲し、遂に勝久と偕に織田信長に歸す。

通釋 元春は元就の訃を聞いて哭いて將士に向つていふには「葬式をしたり、お祭をする役目は隆景が居てやつて呉れる。吾は敵を皆亡し盡して、父君の御靈をお慰めせねばならぬ」と。この時、幸盛は末石に居た。そこで元春は大山の僧を攻めると言ひ立て、急に還つて末石を攻めた。幸盛は出で、降參した。併し病氣だといつて僞つて番卒を欺し便所から逃げ出した。八月、元春は新山を攻めて、勝久を打ち負かした。勝久は京都に匿れてゐた。幸盛は但馬・因幡のあたりで强盜をして居たが遂に勝久とともに織田信長に附いた。

語釋 末石（出雲）○大山（伯耆）

初信長起尾張、略取近畿。武田信玄・上杉謙信、割據其東、皆通使於元就、欲夾攻信長。謙信特勸將軍義輝、召致元就。元就罹疾不答。三年二月、元春・隆景、遣使答之。天正元年、信長攻將軍義昭。輝元與二叔議、遣安國寺僧惠瓊、爲和解之。義昭免、走紀伊。二年正月、尼子勝久借織田氏兵、入因幡、陷鳥取城。城本屬山名豐國、爲武田氏所奪。豐國欲復之。因黨勝久。其部將大坪一之諫之。不聽。一之乃來奔。八月、元春・隆景、大擧入伯耆、降豐國、逐勝久。義昭之走紀伊、遂西依浮田直家。直家弗禮。乃來備後、自託於輝元。輝元謀於二叔、遂與織田氏絕、計納義昭於京師。

訓讀 初め信長、尾張に起り、近畿を略取す。武田信玄・上杉謙信、其の東に割據し、皆使を元就に通じ、信長を夾み攻めんと欲す。謙信、特に將軍義輝に勸めて、元就を召致せしむ。元就、疾に罹り答へず。三年二月、元春・隆景、使を遣はして之に答ふ。天正元年、信長、將軍義昭を攻む。輝元、二叔と議し、安國寺の僧惠瓊を遣はして、爲めに之を和解せしむ。義昭免れ、紀伊に走る。二年正月、尼子勝久、織田氏の兵を借り、因幡に入り、鳥取城を陷る。城は本山名豐國に屬し、武田氏の奪ふ所と爲る。豐國、之を復せんと欲す。因つて勝久に黨す。其の部將大坪一之、之を諫む。聽かず。一之乃ち來り奔る。八月、元春・隆景、大擧して伯耆に入り、豐國を降し、勝久を逐ふ。義昭の紀伊に奔るや、遂に西浮田直家に依る。直家、禮せず。乃ち備後に來り、自ら輝元

に託す。輝元、二叔に謀り、遂に織田氏と絶ち、義昭を京師に納れんと計る。

【通釋】はじめ、信長は尾張から起つて、近畿を討ち取つた。武田信玄・上杉謙信はその東方に割據して皆使を元就の所へやつて信長を夾み討ちにしたいと希望してゐた。謙信は特に將軍義輝に勸めて、元就を呼び寄せた。元就は病氣に罹つてゐて返事をしなかつた。三年二月、元春・隆景は使を遣はして、之に答へた。天正元年、信長は將軍義昭を攻めた。そこで輝元は元春・隆景と相談して、安國寺の僧惠瓊を遣はし、仲裁させた。義昭は免れて紀伊に走つた。二年正月、尼子勝久は織田氏の兵を借りて、因幡に入り、鳥取城を陷れた。城はもと山名豐國に屬して居たのを武田氏に奪はれたものである。豐國は之を取り戻さうと思つた。そこで勝久に組したのである。その部將の大坪一之は之を諫めた。併し聽き入れなかつた。そこで一之は毛利の方に逃げて來た。八月、元春・隆景は大擧して伯耆に入り、豐國を降し勝久を逐ひ拂つた。義昭は紀伊に走つたけれども遂に西の方浮田直家にたよつた。直家は彼をよく待遇しなかつた。そこで備後に來て自ら輝元に賴み込んだ。輝元は二人の叔父と相談し、遂に織田氏と絶交して義昭を京都に納れようと謀つた。

【語釋】直家（備前が持國。）

先レ是、三村家親爲二盜所一レ殺。蓋直家所レ使也。直家爲二浦上氏將一、終簒二其備前・美作一。浦上宗景、與二家親子元親一、皆請二我兵一討二直家一。直家懼、亦因二僧惠瓊一、請レ滅二二氏一、約下以二備中一賂上レ我。元親族親成、告二元親通二織田氏一。宍戸隆家勸二隆景一討レ之。三年夏、圍二元親于松山一、滅

之。元親宗家穗田氏、前爲直家所滅。於是、使元就第五子元淸爲穗田氏後、居中山城、以鎭備中。

訓讀 是より先き、三村家親、盜の殺す所と爲る。蓋し直家の使しむる所なり。直家は浦上氏の將となり、終に其の備前・美作を簒ふ。浦上宗景、家親の子元親と、皆我が兵を請ひ直家を討つ。直家懼れ、亦僧惠瓊に因り、二氏を滅さんと請ひ、備中を以て我に賂はんと約す。元親の族親戚、元親、織田氏に通ずと告ぐ。宍戸隆家、隆景に勸めて之を討たしむ。三年夏、元親を松山に圍んで、之を滅す。元親の宗家穗田氏、前に直家の滅す所と爲る。是に於て、元就の第五子元淸をして穗田氏の後と爲し、中山城に居り、以て備中を鎭せしむ。

通釋 これより前、三村家親は賊の爲めに殺された。思ふにこれは直家が指圖してやらせたのである。直家は、浦上氏の大將となり、遂に主家浦上氏の土地備前・美作を奪ひ取つた男である。故に浦上宗景は家親の子元親と共に皆我が軍の手で直家を討つて貰ひ度いと申し出た。直家は懼れて亦僧惠瓊に賴んで浦上三村の二氏を亡したいと願ひ出で、交換條件として備中を毛利氏に賂ふことを約束した。元親の一族親戚が元親は織田氏に内通して居ると告げた。それで宍戸隆家は隆景に之を討つやうに勸めた。三年夏、元親を松山に取り圍んで之を滅した。元親の本家の穗田氏は以前直家の爲めに滅された。そこで元就の第五子元淸をして穗田氏の後となし、中山城に居て備中を鎭めさせることにした。

語釋 松山・中山（備中）

信長方攻一向僧徒于大坂。大坂來乞援。元春・隆景遣兵援之、又餽糧船六百、以兵艦三百護送之。七月、至木津川。能島・來島氏、與織田氏水軍戰、破之、奪其二大艦、納糧而返。先是、讃岐香川氏・淡路菅氏、皆來屬我。五年、香川氏與國人戰來乞援。七月、遣穗田元清・浦宗勝赴之、破土佐援師。宗勝還、掠播磨海濱、與國人黑田孝高戰而還。

訓讀 信長、方に一向の僧徒を大坂に攻む。大坂に來つて援を乞ふ。元春・隆景、兵を遣はし之を援けしめ、又糧船六百を餽り、兵艦三百を以て之を護送せしむ。七月、木津川に至る。能島・來島氏、織田氏の水軍と戰ひ之を破り、其の二大艦を奪ひ、糧を納れて返る。是より先き、讃岐の香川氏・淡路の菅氏、皆來つて我に屬す。五年、香川氏、國人と戰ひ、來つて援を乞ふ。七月、穗田元清・浦宗勝を遣はし、之に赴かしめ、土佐の援師を破る。宗勝還り、播磨の海濱を掠め、國人黑田孝高と戰つて還る。

通釋 丁度信長は一向宗の僧徒を大坂に攻めてゐた。その大坂の僧徒が來て援助を乞うた。元春・隆景は兵を遣はして之を援けさせ、又兵糧を載せた船六百艘を送り、軍艦三百艘で之を護衛させた。七月、木津川に着いた。能島・來島の二氏は、織田氏の水軍と戰つて、之を破り、その二艘の大艦を奪ひ、無事に兵糧を大阪に屆けて還つて來た。これより先き、讃岐の香川氏・淡路の菅氏は皆やつて來て我が軍に味方した。五年、香川氏はその國人

と戰ひ援助を乞ひに來た。そこで七月、穗田元清・浦宗勝を派して助けに行かせ、土佐の長曾我部の援兵を打ち破つた。宗勝は引き返し、歸り途に播磨の海濱を掠め取り、播磨の人黑田孝高と戰つて還つて來た。

孝高導織田氏將羽柴秀吉、攻別所氏于三木。尼子勝久爲先鋒。出山陽道、取上月城。城屬浮田直家。直家乞援於隆景、欲復之。當是時、丹波・但馬豪傑、使使請元春、來襲京師。元春遣兒玉春種、先往詗之。會隆景書至。欲與倶赴上月。元春答曰「卿合直家兵、可得四萬。不必須我。我收管內、亦可得三萬。留其五千、備大友氏、以其餘援丹波・但馬兵、上愛宕山以瞰京師、信長與吾相持、不能援上月。上月陷、則荒木村重・別所長治、必助我以逐秀吉。於是卿輔輝元、直入大坂、與我夾攻京師、以納將軍。」隆景曰「是危道也。村重意未可必。而兄弟相離、夾之而東、恐變起其間。先戮力陷上月、然後分道東上、爲未晩也。」因敎輝元召元春。元春從之。

訓讀 孝高、織田氏の將羽柴秀吉を導いて、別所氏を三木に攻む。尼子勝久、先鋒たり。山陽道に出で、上月城を取る。城は浮田直家に屬す。直家、援を隆景に乞ひ、之を復せんと欲す。是の時に當り、丹波・但馬の豪傑、使をして元春に請ひ、來りて京師を襲はしむ。元春、兒玉春種を遣はし、先づ往いて之を詗はしむ。會〻隆景の

書至る。與倶に上月に赴かんと欲す。元春答へて曰く「卿、直家の兵を合せば、四萬を得べし。必ずしも我を須たず。我れ管内を收めば、亦三萬を得べし。其の五千を留め大友氏に備へ、其の餘を以て丹波、但馬の兵を援け、愛宕山に上り、以て京師を瞰せば、信長、吾と相持し、上月を援くる能はず。上月陷らば、則ち荒木村重、別所長治、必ず我を助け以て秀吉を逐はん。是に於て、卿、輝元を輔けて、直に大坂に入り、我と夾んで京師を攻め以て將軍を納れん」と。隆景曰く「是れ危道なり。村重の意、未だ必すべからず。而して兄弟相離れ、之を夾んで東すれば、恐らくは變其の間に起らん。先づ力を戮せて上月を陷れ、然る後に道を分ち、東上するも、未だ晩からずと爲す」と。因つて輝元をして元春を召さしむ。元春、之に從ふ。

通釋　孝高は織田氏の大將羽柴秀吉を案内して、別所氏を三木に攻めた。尼子勝久はその先鋒となつてゐた。山陽道に道を取り、上月城を取つた。この城は浮田直家に屬いてゐた城である。直家は援助を隆景に乞ひ之を取り戻さうと思つた。この時に丹波・但馬の豪傑は、使をよこして元春に京都を來襲するように請はせた。元春は兒玉春種をして先づ往つて樣子を窺はせた。丁度其處へ隆景の手紙が來た。一緒に上月城に行き度いといふ手紙であつた。元春は答へていふに「卿は直家の兵を一緒にすれば四萬人を得ることが出來よう。何も我が軍の援助を待つにも及ぶまい。余も管轄内から兵を收むれば、三萬人を得られるだらう。その內五千人を留めて大友氏に備へ、その殘りをつれて、丹波・但馬の兵を援け、愛宕山に上つて京都を見下ろすことにすれば、自然信長は我と對陣することになつて、上月を援けることが出來なくなる。かくて上月が陷れば荒木村重・別所長治は屹度我を助けて秀吉を逐つ拂ふであらう。この時卿は輝元を輔けて直に大坂に入り込み我と兩方から京都を夾み討ちにして將軍を京都に納れ度いものである」と。隆景がいふのに「それは危い方法であります。村重の意中、屹度我を助

けるものとは保證出來ません。而も兄弟が離れ離れになつて村重を間にして東の方に居るといふことになると、恐らくは其の間から異變が起ることでせう。それよりは先きに力を合せて上月を陷れ、それから後に道を分けて東に上つてもまだ遲くはないと思ひます」と。そこで輝元は意を含めて、元春を召し寄させた。元春は之に從つた。

語釋 三木・上月（播磨）○荒木村重（信長に屬し、毛利に內通せし者。）○將軍（義昭）

六年二月、元春・隆景合兵、圍上月。直家稱疾、出其兵一萬五千會師。四月、秀吉與村重、合兵四萬來援、陣高倉山。我軍作塹柵自守。杉原氏間、夜入秀吉陣、獲首級者數。東軍懼。五月、信長欲自來援。先遣長子信忠及諸將援秀吉。兵凡十萬人。元長請元春曰「信長自來、則兵衆令一、不可敵。今秀吉・村重等、爭功不和。天雨月黑。宜夜襲之也」。元春使謀之隆景。隆景曰「舉信長全兵、不過二十萬。東備武田・上杉、西備大坂・雜賀、減六七萬焉。而見在此者十萬。卽自來二三萬而已。我以七萬當之。何必恐也。且我自北路襲、地形不便。自南路襲、浮田氏心難測。皆非萬全之策。不若固壁毋戰。彼兵衆而糧不繼。將自去矣」乃止。

訓讀 六年二月、元春・隆景、兵を合せて、上月を圍む。直家、疾と稱し、其の兵一萬五千を出だし、師に會せしむ。四月、秀吉、村重と兵四萬を合せて來り援け、高倉山に陣す。我が軍、塹柵を作りて自ら守る。杉原氏の間、夜、秀吉の陣に入り、首級を獲ること數なり。東軍懼る。五月、信長自ら來り援けんと欲す。先づ長子信忠及び諸將を遣はし、秀吉を援けしむ。兵凡そ十萬人。元長、元春に請うて曰く「信長自ら來らば、則ち兵衆く令一にして、敵す可からず。今、秀吉、村重等、功を爭うて和せず。天雨ふり月黑し。宜しく夜之を襲ふべきなり」と。元春、之を隆景に謀らしむ。隆景曰く「信長の全兵を擧ぐるも、二十萬に過ぎず。東武田、上杉に備へ、西大坂、雜賀に備へ、六七萬を減ず。而して見に此に在る者十萬。即し自ら來るも二三萬のみ。我れ七萬を以て之に當る。何ぞ必ずしも恐れん。且つ我れ北路より襲ふは、地形、便ならず。南路より襲へば、浮田氏の心測り難し。皆萬全の策にあらず。壁を固くして戰ふなきに若かず。彼れ兵衆くして糧繼がず。將に自ら去らんとす」と。乃ち止む。

通釋 六年十二月、元春・隆景、兵を合せて上月を圍んだ。直家は病氣だと言つて自分は出て來ないで、その兵一萬五千を出して加勢させた。四月秀吉は村重と兵四萬を合せて來り援け、高倉山に陣取つた。我が軍は塹と柵を拵へて自ら守つた。杉原氏の忍び上手の者は夜、秀吉の陣中に忍び込んで隨分數多くの首を獲た。東軍の者はそれに恐れをなした。五月、信長は自ら出かけて援けようと思つた。先づ長子信忠及び諸將を遣はして、秀吉を援けさせた。凡そ兵十萬ばかりあつた。元長は父元春に請うていふのに「信長が、自らやつて來れば、兵士の數が多く號令が一途に出ること〻なつて、敵することは出來ますまい。秀吉や村重等は功を爭つて和合してゐません。それに今は雨天で月も出ません。夜襲をしたら宜いと思ひます」と。元春はこのことを隆景に相談させた。

隆景がいふのに「信長の全體の兵を擧つて來たところで二十萬に過ぎない。その上に東方は武田・上杉に備へ、西方は大坂・雜賀に備へて置かねばならぬから結局六七萬を減ずることになる。そして現在こゝに攻めて來て居る者が十萬である。もし自分で來たところで、二三萬位の者を率ゐてゐるだけさ。我は七萬を以て之に當ることになる。何もそんなに恐れるには當らぬ。それに我が軍が北方の路から襲ふといふことは、地形の上から都合が惡い。南方の路から襲へば、浮田氏の心持が果してどんな者か測り兼ねるのでこれも都合がわるい。だから何れから敵を襲うてもそれは萬全の策ではない。それよりは城壁を堅固にして戰はないで居るが一番宜しい。彼は兵が多くして、兵糧が繼かない。その内に自ら立ち去ることであらう」と。故に元長はこの謀を止めにした。

語釋　杉原氏間（佐田某のこと、前出。）〇大坂・雜賀（一向宗の僧徒。）

六月、美作・出雲兵、與東兵鬪于熊川。秀吉自中軍、遣二萬騎出援。元長與弟元氏・廣家、以萬人亂流逆戰。東軍皆騎兵、馳突而來。元長令士卒曰「跪」。東兵不能入、逡巡而退。元長令曰「起」。如此者再三。追北二十餘町。荒木氏不敢援東兵。浮田氏不敢援西兵。西兵深入、難於退。天野隆重引手兵、上高岡而陣。西兵乃引還。秀吉知我不可力爭、請信長棄城而去。城陷、勝久自殺。山中幸盛復降。殺之甲部川上。

訓讀　六月、美作・出雲の兵、東兵と熊川に鬪ふ。秀吉、中軍より二萬騎を遣はし、出で援けしむ。元長、弟

元氏・廣家と、萬人を以て流を亂り逆へ戰ふ。東軍皆騎兵、馳突して來る。元長、士卒に令して曰く「跪け」と。東兵入る能はず、逡巡して退く。元長、令して曰く「起て」と。此くの如くすること再三。北ぐるを追ふこと二十餘町。荒木氏敢て東兵を援けず。浮田氏敢て西兵を援けず。西兵深く入り、退くに難む。天野隆重、手兵を引き、高岡に上りて陣す。西兵乃ち引き還る。秀吉、我れ力爭す可からざるを知り、信長に請ひ、城を棄て、去る。城陥り、勝久自殺す。山中幸盛復降る。之を甲部川の上に殺す。

通釋 六月、美作・出雲の兵は東兵と熊川で鬪つた。秀吉は中軍から二萬騎を出して、援けにやつた。元長は弟の元氏・廣家と共に一萬人を率ゐて、河を横切り渡つて、迎へ戰つた。東軍は皆騎兵で馳せ突いて來た。元長は士卒に令して「跪け」といつた。東兵は討ち込むことが出來ないで、ためらひ乍ら退却した。退却すると元長は又令して「起て」といつた。そんなことを兩三度やつた。かくて敵の逃げるのを二十町餘りも追つかけた。荒木氏は東兵を援けようともしなかつた。又浮田氏も西兵を援けようとはしなかつた。西兵は深く入り込んで退くのに困難を感じた。そこで天野隆重は手勢を引きつれて、高い岡の上に登つて陣取つた。（高い所から西兵を庇護した）そのお蔭で西兵は樂に引き還した。秀吉は毛利は到底力づくでは爭ふことの出來ないものと知り、信長に請うて上月城を棄て、立ち去つた。從つて城は陥り、尼子勝久は自殺した。山中幸盛は又又降參して來た。これを甲部川のほとりで殺した。

語釋 熊川（播磨）〇甲部川（備中）

直家已潛通信長。於是、稱疾愈來見。元長白元春曰「直家有異圖。見請卽席誅之」杉

原盛重又請之。隆景曰「彼無證、而我啓釁、縱得誅之、其國人皆立嗣以抗我。無爲也」乃止。已而直家因惠瓊、請二帥乘勢徇播磨。將軍義昭亦促之。元春・隆景乃進、陣黑澤山。直家享二帥于八幡山、欲伏甲擒之。直家弟忠家潛來告之。元春・隆景乃使人言直家曰「聞、公欲以我兄弟首獻織田氏。我兄弟並輔少主。未能順尊意。必欲獲之、請以旗鼓所不敢辭也」且日、分路西歸。直家不敢追。

訓讀　直家已に潛に信長に通ず。是に於て、疾愈ゆと稱し來り見ゆ。元長、元春に白して曰く「直家、異圖あり。兒請ふ、席に卽いて之を誅せん」と。杉原盛重、又之を請ふ。隆景曰く「彼れ證なくして、我れ釁を啓けば、縱ひ之を誅するを得るも、其の國人皆、嗣を立て、我に抗せん。爲す無きなり」と。乃ち止む。已にして直家、惠瓊に因り、二帥の勢に乘じて播磨を徇へんことを請ふ。將軍義昭も亦之を促す。元春・隆景、乃ち進み、黑澤山に陣す。直家、二帥を八幡山に享し、甲を伏せて之を擒にせんと欲す。直家の弟忠家、潛に來つて之を告ぐ。元春・隆景、乃ち人をして直家に言はしめて曰く「聞く、公、我が兄弟の首を以て織田氏に獻ぜんと欲すと。我が兄弟、並に少主を輔く。未だ尊意に順ふこと能はず。必ず之を獲んと欲せば、請ふ、旗鼓を以てせよ。敢て辭せざる所なり」と。且日、路を分ちて西に歸る。直家敢て追はず。

通釋　直家は既にこつそり信長に內通してゐた。上月城も取り戻したので病氣が直つたといつて會ひに來た。

元長は元春に向つていふのに「直家には謀叛の計畫があります。私は其の席上で彼を殺して終ひませう」と。杉原盛重は重ねて之を請うた。隆景がいふのに「彼にこれといふ證據がないのに、こちらから事端を開くとよし之を殺すことが出來たとしてもその國人は皆繼嗣を推し立てゝ我に抗するだらう。詰らぬから止せ〳〵」と。そこで止めにした。その内に直家は惠瓊に頼んで元春・隆景が勢に乘じて播磨を平定するように願つた。將軍義昭も亦このことを催促した。そこで元春・隆景は進んで、黑澤山に陣取つた。直家は元春・隆景を八幡山で饗應し、兵士を隱して置いて之を擒にしようと思つた。直家の弟の忠家はこつそりやつて來て之を密告した。そこで元春・隆景は人をやつて直家に言はせていふには「聞く所に據ると貴公には我々兄弟の首を織田氏に獻上しようと思つて居られるさうな。我々兄弟は協力して年の行かぬ主人を輔佐してゐる。折角だがまだ大事な身體であるから貴公の思ふやうには一寸致し兼る。それでも是非共我々の首が獲たいと思ふならどうだ、戰場で勝負をしよう。それなら決して辭する譯ではないぞ」と。翌日路を分けて、西に歸つた。直家は追つかけようともしなかつた。

【語釋】黑澤山(播磨) ○八幡山(備中)

十月、荒木村重叛信長、據兵庫・華隈諸城、與別所長治、皆乞援於我。我方患浮田氏、又聞南條元續通東軍、未暇赴援。獨餽糧助之。築丹生・淡河二城、西達三木、東達華隈。七年二月、秀吉遣弟秀長、夜襲取丹生。淡河定範穿塹布渠荅以待。秀長至、梗不得進。定範募得牝馬數十匹、驅入敵軍。軍馬爭牝相踶、什伍大亂。定範縱兵乘之。擊

走秀長。其從子說曰「秀吉必忿而來。窮而走、不若勝而退。」乃收入三木。秀吉來不見敵而去。

訓讀　十月、荒木村重、信長に叛き、兵庫・華隈の諸城に據り、別所長治と、皆援を我に乞ふ。我れ方に浮田氏を患へ、又南條元續、東軍に通ずと聞き、未だ赴き援くるに暇あらず。獨だ糧を餽りて之を助く。丹生、淡河の二城を築き、西は三木に達し、東は華隈に達す。七年二月、秀吉、弟秀長を遣はして、夜襲うて丹生を取る。淡河定範、塹を穿ち、渠荅を布き以て待つ。秀長至る。梗して進むを得ず。定範、牝馬數十匹を募り得、驅つて敵軍に入る。軍馬、牝を爭ひ相蹄み、什伍大に亂る。定範、兵を縱ちて之に乘じ、擊つて秀長を走らす。其の從子說いて曰く「秀吉必ず忿つて來らん。窮して走るより、勝つて退くに若かず」と。乃ち收めて三木に入る。秀吉來り、敵を見ずして去る。

通釋　十月、荒木村重は信長に叛いて、兵庫華隈の諸城に立て籠り、別所長治とともに皆援助を毛利氏に賴んで來た。所が丁度毛利氏では浮田氏を患としてゐたし、又南條元續が東軍に內通したといふことを聞いてゐるし、援けに行く暇がなかつた。たゞ兵糧を送つて之を助けて置いた。丹生・淡河の二城を築いで、西は三木に通じ東は華隈に通ずるやうにした。七年二月秀吉は弟の秀長を遣はして、夜襲を試みて丹生を取つた。淡河定範は濠を堀り、菱金を布きつめて敵の來るのを待ち受けた。秀長はやつて來た。菱金の爲めに邪魔されて、進むことが出來なかつた。定範は牝馬を數十匹募集して、之を追ひ立てゝ敵軍の中に入れた。敵の軍馬がこの牝馬を我がものにしようと爭つて蹴合ひを始めそれがために兵士の隊伍が非常に亂れた。定範は兵を放つて之につけ込ませ、擊

つて秀長を走らせた。定範の甥が說いていふのに「秀吉が屹度怒つて攻めて來るだらう。その時に困つて逃げるよりは今勝つて退却した方が宜い」と。そこで兵を纏めて、三木に入つた。秀吉は來て見たが敵が見當らないので引き去つた。

語釋 丹生（攝津）○淡河（播磨）○渠荅（鐵で作られた三角の菱形。道に散布して置いて敵の足を傷ますに用ふ。）○什伍（十人組、五人組といふ意より轉じて團體の意に用ふ。）○從子（江見又四郎。）

是歲、二帥輔輝元東伐、取美作五城。直家不敢出。四月、南條元續叛、通東軍。其族山田直重諫之。元續不聽。欲殺之。直重來奔。八月、直家攻升形・祝山二城、不能下。元春將兵赴援。聞其去、轉攻元續種石城。杉原盛重爲先鋒、與敵將南條信正、夾長瀨川陣。分兵爲三、渡川大戰、斬信正。元春乃環種石砦之。元續出戰、輒敗。十一月、元春・隆景、復輔輝元東伐、拔備中忍山。十二月、我餽饟三木者、襲殺敵壘將谷衞好。長治出兵應之、大敗。淡河定範死之。八年春、三木陷、長治自殺。直家以秀吉令、城于八濱、以二弟忠家・基家守焉。二月、隆景遣元淸攻之、殺基家。

通釋 是の歲、二帥、輝元を輔けて東伐し、美作の五城を取る。直家敢て出でず。四月、南條元續叛き、東軍に通ず。其の族山田直重、之を諫む。元續聽かず。之を殺さんと欲す。直重來り奔る。八月、直家、升形・祝山

の二城を攻めて、下す能はず。元春、兵に將として赴き援く。其の去るを聞き、轉じて元續を種石城に攻む。杉原盛重、先鋒と爲り、敵將南條信正と、長瀬川を夾んで陣す。兵を分ちて三と爲し、川を渡り大に戰ひ、信正を斬る。元春、乃ち種石を環し之に砦す。元續出で戰ひ輒ち敗る。十一月、元春、隆景、復輝元を輔けて東伐し、備中の忍山を拔く。十二月、我が、饟を三木に餽る者、敵壘の將谷衛好を襲殺す。長治、兵を出して之に應じ、大に敗る。淡河定範、之に死す。八年春、三木陷り、長治、自殺す。直家、秀吉の令を以て、八濱に城き、二弟忠家・基家を以て守らしむ。二月、隆景、元清を遣はして之を攻めしめ、基家を殺す。

通釋 この年、元春・隆景は輝元を輔佐して、東伐して美作の五城を取つた。直家は決して出ようとしなかつた。四月、南條元續は叛いて東軍に內通した。その一族の山田直重は之を諫めた。元續は聽き入れないで、直重を殺さうとした。だから直重は毛利方へ逃げて來た。八月、直家は升形・祝山の二城を攻めたが降すことは出來なかつた。元春は兵に將として援けに行つた。併し直家が去つたと聞いて方向を轉じて、元續を種石城に攻めた。杉原盛重が先鋒となつて、敵將南條信正と長瀬川を間にして陣取つた。兵を分けて三となし、川を渡つて大に戰ひ、信正を斬つた。そこで元春は種石城をぐるりと取りめぐらして砦を築いた。元續は出で、戰つたが、その度に負けた。十一月、元春・隆景はまた輝元を輔けて東伐し、備中の忍山を陷れた。十二月、三木に兵糧を送る味方(毛利)の者が敵の壘の大將谷衛好を不意打ちして殺した。これに勢を得て長治は兵を繰り出して應援したが却つて大に敗れた。この時淡河定範は討死した。八年春、三木は陷り、長治は自殺した。直家は秀吉の命令で八濱に城を築き、二弟忠家・基家をして之を守らしめた。二月、隆景は元清を遣はしてこの城を攻めさせ、基家を殺した。

【語釋】升形・祝山（美作）○種石城（伯耆）○八濱（備前）

四月、秀吉侵但馬・因幡、陷鹿野城、取山名氏質。元春赴援、不及。七月、荒木村重來奔。是月、秀吉圍山名豐國鳥取城、縛質城外、以槍擬之、以誘降之。城兵曰「我數叛毛利氏、而不被誅。今可復叛乎」。秀吉怒、殺質、次至豐國女。豐國遂降。秀吉削其邑而去。城兵皆叛豐國。豐國奔播磨。城兵請我一將。遣吉川經家守之。又城丸山。

【訓讀】四月、秀吉、但馬・因幡を侵し、鹿野城を陷れ、山名氏の質を取る。元春赴き援け、及ばず。七月、荒木村重來り奔る。是の月、秀吉、山名豐國を鳥取城に圍み、質を城外に縛し、槍を以て之に擬し、以て之を誘ひ降さんとす。城兵曰く「我れ數毛利氏に叛いて、誅せられず。今復叛くべけんや」と。秀吉怒り、質を殺し、次いで豐國の女に至る。豐國遂に降る。秀吉、其の邑を削りて去る。城兵皆豐國に叛く。豐國、播磨に奔る。城兵、我が一將を請ふ。吉川經家を遣はして之を守らしむ。又丸山に城く。

【通釋】四月、秀吉は但馬・因幡を侵して、鹿野城を陷れ、山名氏の人質を取つた。元春は援けに行つたが間に合はなかつた。七月、荒木村重が逃げて來た。この月、秀吉は山名豐國を鳥取城に圍み、その人質を城外に縛つて槍を胸にあてがつて、之を誘つて降參させようとした。城兵がいふのに「我等は度々毛利氏に叛いたけれども誅せられなかつた。その恩義に對して今更叛くことが出來るものか」と。秀吉は怒つて、人質を殺し、次に豐國の娘の殺される番になつた。娘可愛さに遂に豐國は閉口して降參した。秀吉はその領地を削つて其處を立ち去つ

た。城兵は皆豊國に叛いた。そこで豊國は播磨に出奔した。城兵は味方の大將一人を請ひ受けて大將にしたいと申し出た。そこで吉川經家を遣はして之を守らしめた。又丸山に城を築いた。

語釋 鹿野城・丸山（因幡）

九年七月、秀吉以數萬騎、圍鳥取・丸山、絕其糧道。吉岡質休在吉岡城。夜襲敵營、又迎擊敵兵、走之。奪秀吉馬標、獻之輝元。秀吉遣使招降丸山城。城將斬其使者、投屍城外。秀吉大怒、攻之益急。輝元欲援之、而國兵四戍疆上、在者甚寡。隆景至富田、召募數日、未進。元春曰「鳥取吾管內也。吾不可以待。」九月、以六千人馳至伯耆、則城已陷矣。秀吉欲誅國人、免經家。經家弗聽。與丸山・鳥取將領、皆自殺、以免其兵。元春得報、切齒曰「吾猶往爲經家一戰。」將發。又有報、曰「秀吉入伯耆矣。」乃留陣于馬山。

訓讀 九年七月、秀吉、數萬騎を以て、鳥取・丸山を圍み、其の糧道を絕つ。吉岡質休、吉岡城に在り。夜、敵營を襲ひ、又敵兵を迎へ擊つて、之を奔らす。秀吉の馬標を奪ひ、之を輝元に獻ず。秀吉、使を遣はし、丸山城を招降せんとす。城將、其の使者を斬り、屍を城外に投ず。秀吉、大に怒り、之を攻むること益急なり。輝元、之を援けんと欲すれども、國兵、疆上を四戍し、在る者甚だ寡し。隆景、富田に至り、召募する數日、未だ進まず。元春曰く「鳥取は吾が管內なり。吾れ以て待つ可からず」と。九月、六千人を以て馳せて伯耆に至れば、

則ち城已に陷る。秀吉、國人を誅し經家を免さんと欲す。經家聽かず。丸山・鳥取の將領と、皆自殺し、以て其の兵を免れしむ。元春、報を得て切齒して曰く「吾れ猶ほ往いて經家の爲めに一戰せん」と。將に發せんとす。又報あり、曰く「秀吉、伯耆に入る」と。乃ち留つて馬山に陣す。

通釋 九年七月、秀吉は數萬騎を引きつれて、鳥取・丸山を取り圍み、その兵糧の道を絶ち切つた。吉岡質休は吉岡城に居つた。夜、敵の陣屋を襲ひ、又敵兵を迎へ擊つて、之を走らせた。秀吉の馬記を奪つて、之を輝元に獻じた。秀吉は使を遣はして、丸山城を招き降さうとした。城將はその使者を斬つて、其の死骸を城外に投げ捨てた。秀吉は非常に怒つて、隨分激しく之を攻めた。輝元は之を援けようと思つたが、何分國兵は四方の國境を守りに行つてゐて、現在手元に居るものは非常に少かつた。隆景は、富田に行つて數日間兵士を募集してゐて、まだ進まなかつた。元春がいふのに「鳥取はわが管轄內である。余は隆景の來るのを待つては居られぬ」と。九月に六千人を引きつれて馳せて伯耆に往つて見ると、もう丸山は落城して終つた後であつた。秀吉は國人を誅して經家を赦してやらうと思つた。併し經家は承知しなかつた。丸山・鳥取の大將分と與に皆自殺して、其の城兵を免れしめた。元春はこの報を得て齒をくひしばつていふには「落城はしても余は行つて、經家の爲めに一戰しよう」と。將に出發しようとした。すると又通知が來ていふには「秀吉が伯耆に入り込んだ」と。そこで留まつて馬山に陣取つた。

語釋 吉岡(因幡)　○馬山(伯耆)

十月、秀吉至、稱二八萬騎一、陣二種石城後一、下二視馬山一。馬山左右湖山、後迫二大川一、纔通二一橋一。

人人無不震怖。元春命絕橋、毀舟楫、自絕走路。三澤爲虎・益田藤包私議曰「敵衆新勝。不若避其鋭而再擧。請入說之」。乃與偕謁元春。元春方釋甲而坐、曰「天大雪。諸君且留飲」。因圍爐命酒。醉而鼾睡。二人不敢說。元長・廣家以父命、巡視諸陣、穿塹植柵、曰「敵明日必來」。比曉、敵數千騎、納糧於種石。元春遣銃手、斃其一將。敵繼出者萬餘。元長・廣家以二千人馳之。秀吉急收其兵。南條元續請曰「盍一戰擒之」。秀吉哂弗答。明日、引兵而去。元長請尾擊之。元春不許。

訓讀 十月、秀吉至り、八萬騎と稱す。種石城の後に陣し、馬山を下視す。馬山の左右は湖山にして、後は大川に迫り、纔に一橋を通ず。人人震怖せざるはなし。元春、命じて橋を絕ち、舟楫を毀ち、自ら走路を絕つ。三澤爲虎・益田藤包、私に議して曰く「敵衆新に勝つ。其の鋭を避けて再擧するに若かず。請ふ入りて、之を說かん」と。乃ち與偕に元春に謁す。元春、方に甲を釋いて坐し、曰く「天、大に雪ふる。諸君、且く留り飲め」と。因つて爐を圍み、酒を命じ醉うて鼾睡す。二人敢て說かず。元長・廣家父の命を以て、諸陣を巡視し、塹を穿ち柵を植つ。曰く「敵、明日必ず來らん」と。曉くる比、敵の數千騎・糧を種石に納る。元春、銃手を遣はし、其の一將を斃す。敵繼ぎ出づる者萬餘。元長・廣家二千人を以て之に馳す。秀吉、急に其の兵を收む。南條元續請うて曰く「盍ぞ一戰して之を擒にせざる」と。秀吉哂つて答へず。明日、兵を引いて去る。元長、之を尾擊せんこと

を請ふ。元春許さず。

【通釋】十月、秀吉がやつて來たが、其の兵は八萬騎と稱してゐた。種什城の後に陣取り、馬山を見下した。馬山の左右は湖水や山で後は大川に近く、やつと橋一つで連絡されてゐるばかりである。人々震ひ恐れぬものとてはなかつた。元春は命じて橋を絶ち切らせ、舟や楫を壞し自ら逃げ路を絶ち切つた。三澤爲虎・益田藤包が私に相談していふのに「敵の軍勢はこんど勝つたばかりで非常な勢である。その鋭鋒は避けて又改めて再擧した方が宜い。一つ、内に入つて元春公に說いて見よう」と。そこで一緒に入つて元春に會つた。元春は丁度鎧をぬいで坐つて居ていふのに「大雪だなあ、諸君暫らく留まつて、酒でも飲めよ」と。そこで爐を取り圍んで酒を言ひつけて飲んだが、其の中に元春は醉うて高鼾をして眠つて終つた。二人は云ひ出す機會を失つて終つた。元長・廣家は父の命令で諸陣を見廻り、堀を掘り、柵を立てた。いふのに「敵は屹度明日來るだらう」と。夜あけ頃敵の數千騎は兵糧を種什城に納れてゐた。元春は鐵砲組を遣はして、その一將を射斃した。敵の繼いで出て來るものが一萬あまりもあつた。元長・廣家は、二千人を引きつれて、之に馳せ向つた。秀吉は急に其の兵を取り纏めた。南條元續が秀吉に請うていふのに「何故一戰して彼等を擒にしませぬか」と。秀吉は笑つて答へなかつた。翌日、兵を引率して立つて終つた。そこで元長は之を追擊しようと申し出た。こんどは元春が許さなかつた。

十年正月、元春欲レ復二因幡一。二月、將レ兵攻二大崎一。時杉原盛重既死、其子元盛先登。元春遂復二二城一、攻二鳥取一。四月、秀吉將二兵八萬一、入二備中一、攻二高松城一、引二甲部川一灌レ之。守將清水

高治募城内染戸、收板數百枚、造舟出戰。隆景聞急、乞援於元春。元春卽欲發。山陰諸將皆曰「上月之役、佐公率我師自援。馬山之役、留富田不來。今鳥取幾復。何棄此赴彼爲」。元春曰「隆景不來馬山、必有以也。吾坐視其危、獨如宗家何。諸君不欲往、吾寧獨身赴之、與隆景共死」。將士皆謝願從。乃留杉原元盛、當鳥取城、而南會隆景、合兵四萬、軍于廟山。輝元陣其西三里、相持未戰。

訓讀 十年正月、元春、因幡を復せんと欲す。二月、兵に將として大崎を攻む。時に杉原盛重既に死し、其の子元盛、先登す。元春遂に二城を復し、鳥取を攻む。四月、秀吉、兵八萬に將として、備中に入り、高松城を攻め、甲部川を引き、之に灌ぐ。守將清水高治、城内の染戸を募り、板數百枚を收め、舟を造り出でて戰ふ。隆景、急を聞き、援を元春に乞ふ。元春、卽ち發せんと欲す。山陰の諸將皆曰く「上月の役に、佐公我が師を率ゐ自ら援く。馬山の役に、富田に留つて來らず。今、鳥取幾んど復す。何ぞ此を棄てゝ彼に赴くを爲さん」と。元春曰く「隆景、馬山に來らざるは、必ず以あるなり。吾れ其の危きを坐視せば、獨り宗家を如何せん。諸君往くを欲せざれば、吾れ寧ろ獨身、之に赴き、隆景と死を共にせん」と。將士皆謝して、從はんことを願ふ。乃ち杉原元盛を留め、鳥取城に當らしめ、而して南、隆景に會し、兵四萬を合せ、廟山に軍す。輝元、其の西三里に陣し、相持して未だ戰はず。

【通釋】十年正月、元春は因幡を取り戻さうと思つた。二月、兵に將として、大崎を攻めた。時に杉原盛重は既に死んでその子の元盛が先登した。元春は遂に二城を取戻して鳥取を攻めた。四月、秀吉は兵八萬に將として備中に入り、高松城を攻め甲部川の水を引き込んで之に灌いだ。守備の城將清水高治は城内の染物屋を募集して張り板數百枚を取り收め、舟を造つて出で戰つた。隆景は高松が大變だと聞いて援兵を元春に乞うた。元春は早速出發しようとした。山陰の諸將は皆いふのに「上月の戰爭で隆景殿は、われ〳〵軍勢を引きつれて、御自分の援けとなされました。それだのに馬山の戰爭では富田にふみ留まつて助けに來られませんでした。今鳥取は殆んど取り戻さうといふ所です。どうして此處を放つて置いてあちらへ往くことをしませうや」と。元春がいふのに「隆景が馬山に來なかつたのは屹度譯の有ることぢや。今余が隆景の危險をぢつと見て居たら、隆景はともかく、本家をどうする。諸君が若し往きたくないのならば余は寧ろ獨りで行き隆景と一緒に討ち死しよう」と。將士は皆謝つて從はんことを願つた。そこで杉原元盛を留めて、鳥取城に當らしめ、そして自分は南方、隆景と一緒になり兵四萬を合せて、廂山に陣取つた。輝元は其の西三里の處に陣取り、敵と持ち合つてまだ戰はなかつた。

【語釋】大崎（因幡）〇上月之役（尼子勝久を攻めた戰。）〇佐公（隆景）〇馬山之役（すぐ前にあつた雪中會飲の際の戰。）〇廂山（備中）

五月、日幡城叛。隆景遣兵攻之、走東將木村隼人。秀吉不敢出援。加茂城亦叛、納東兵。元長・廣家以萬人赴之。秀吉復收兵。我兵數獲利、而高松旦夕將沒。元春聞信長將自來也、欲一戰。隆景曰「阿兄何自輕。乃倣一隊將之爲乎」。元春曰「家君以一夜克

陶氏、以七年滅尼子氏。蓋小敵宜緩困之、而大敵宜急挫之也。我以北兵夜襲其北、而卿應其南、必克之。浮田氏觀望、不戰走耳」隆景曰「然」會軍中流言、三澤爲虎通款秀吉。六月三日、二帥與元長、密會厠山絕頂、議曰「諸將意皆不可測。爲今之計、宜柵于牙營迎敵決戰」既罷。元長徑詣爲虎、迫其膝坐、曰「聞卿與秀吉通款、信乎。信則斫吾頭、以送秀吉」爲虎惶駭曰「是出讒口耳」乃獻誓書、衆情稍定。終期再明襲秀吉

訓讀 五月、日幡城叛く。隆景、兵を遣はして之を攻めしめ、東將木村隼人を走らす。秀吉敢て出で援けず。加茂城亦叛き、東兵を納る。元長・廣家、萬人を以て之に赴く。秀吉復兵を收む。我が兵、數利を獲れども、高松、旦夕將に沒せんとす。元春、信長將に自ら來らんとすと聞くや、一戰せんと欲す。隆景曰く「阿兄何ぞ自ら輕んずる。乃ち一隊將の爲に倣ふか」と。元春曰く「家君、一夜を以て陶氏に克ち、七年を以て尼子氏を滅す。蓋し小敵は宜しく緩く之を困しむべく、而して大敵は宜しく急に之を挫くべきなり。我れ北兵を以て、夜、其の北を襲ひ、而して卿、其の南に應ぜば、必ず之に克たん。浮田氏は觀望し、戰はずして走らんのみ」と。隆景曰く「然り」と。會〻軍中流言す、三澤爲虎、款を秀吉に通ずと。六月三日、二帥、元長と密に厠山の絕頂に會し、議して曰く「諸將の意、皆測る可からず。今の計を爲すは、宜しく牙營に柵し、敵を迎へて決戰すべし」と。既にして罷む。元長徑に爲虎に詣り、其の膝に迫つて坐して曰く「聞く、卿、秀吉と款を通ずと。信なるか。信

ならば則ち吾が頭を斫り以て秀吉に送れ」と。爲虎、惶駭して曰く「是れ讒口に出づるのみ」と。乃ち誓書を獻ず。衆情稍定る。終に再明、秀吉を襲はんと期す。

通釋 五月、日幡城が叛いた。隆景は兵を遣はして之を攻めしめ、織田氏の大將木村隼人を走らせた。秀吉は出て援けようともしなかつた。加茂城も亦叛いて織田勢を入れた。元長・廣家は一萬人をつれて之に赴いた。秀吉はまた兵を引揚げた。わが兵は度々勝つたのであるが高松城はもうすぐにも陥らうとした。元春は信長が自分でやつて來ると聞いて一戰爭しようと思つてゐた。隆景がいふのに「兄さんは何故そんなに自分を輕んずるのですか。そんなことは一隊の將のやる仕業です。それをあなたは見倣ふのですか」と。元春がいふのに「父君は一晩の内に陶氏に打ち克たれ、七年かゝつて尼子氏を滅された。思ふに小敵はゆる／＼と之を困める方が宜いが、大敵は急に之を挫いた方が得策だからである。余が山陰の兵をつれて敵の北を襲ひ、そして御身が其の南から相應じて攻めればきつと克てる。浮田氏は形勢を眺めてその内に戰はないで逃げ出すだらう」と。隆景も「たしかにさうです」といつた。丁度軍中で三澤爲虎が秀吉に内通したと云ひふらした。六月三日、元春・隆景は元長とこつそり庚山の絕頂に集まつて相談していふには　諸將の心中は皆測り知ることが出來ない。今の場合のよい計略は本營に柵を立て、敵を迎へて決戰することである」と。その内に評議が止んだ。元長は直に爲虎の處へ行つて、その膝元に詰め寄つて曰ふには「聞けばそなたは秀吉に内通したさうぢや。ほんとか、若し眞ならば余の首を斬つて秀吉に送れよ」と。爲虎はおそれ驚いていふのに「それは讒言です」と。そこで起誓を一札入れた。これで多勢の者の疑も解けて氣持ちが落ちついた。結局明後日を期して秀吉を襲ふことに決まつた。

語釋 日幡・加茂（備中）

僧惠瓊素歸心於秀吉、爲講和議。秀吉曰「苟使高治自殺、則我可以藉手而去。」惠瓊以告二帥。二帥弗肯。明日、惠瓊自入城諭高治。高治曰「我一死可以和兩國、何敢不死。」乃與兄月清・軍監末近乘舟出城、自裁舟中、以出城兵。惠瓊還報。二帥爲之發哀、遂爲盟約、割地講和。南界甲部川、北界馬山、送輝元季父元綱爲質。秀吉送森高政答之。卽日、東軍解去。元長在山頂、視之曰「彼無故講和、必有內變。」既而有告曰「信長爲明智光秀所弑。」元長曰「果然。吾不與盟。請追擊之。秀吉可生擒也。」浮田直家亦請爲援。二帥曰「乘喪背盟、不義莫大焉。」終弗許。後秀吉遺我將士款書數通。有三澤氏臣雲波書。爲虎乃誅之。輝元既與秀吉和、猶領八州、歲入百二十萬石。

【訓讀】僧惠瓊、素より心を秀吉に歸し、爲めに和議を講ず。秀吉曰く「苟も高治をして自殺せしめば、則ち我れ以て手を藉つて去るべし」と。惠瓊以て二帥に告ぐ。二帥肯んぜず。明日、惠瓊自ら城に入り、高治を諭す。高治曰く「我が一死以て兩國を和す可くんば、何ぞ敢て死せざらん」と。乃ち兄月清・軍監末近と、舟に乘り城を出で、舟中に自裁し、以て城兵を出だす。惠瓊還り報ず。二帥、之が爲めに哀を發し、遂に盟約を爲し、地を割いて和を講ず。南は甲部川を界とし、北は馬山を界とし、輝元の季父元綱を送つて質と爲す。秀吉、森高政を

送つて之に答ふ。即日、東軍解き去る。元長、山頂に在つて、之を視て曰く「彼れ故なくして和を講ずる、必ず內變あらん」と。既にして告ぐるあり、曰く「信長、明智光秀の弑する所と爲る」と。元長曰く「果して然り。吾れ盟に與からず。請ふ、之を追撃せん。秀吉、生擒すべきなり」と。浮田直家も亦、援を爲さんと請ふ。二師曰く「喪に乘じ、盟に背く、不義これより大なるは莫し」と。終に許さず。後、秀吉、我が將士の款書數通を遺る。三澤氏の臣雲波の書あり。爲虎乃ち之を誅す。輝元既に秀吉と和す。猶ほ八州を領し、歲入百二十萬石なり。

【通釋】僧の惠瓊は元々心を秀吉に寄せてゐて、秀吉の爲めに和睦の相談を取りもつた。秀吉がいふのに「もし高治を自殺させるならば我はそれを手しほにして立ち去るだらう」と。惠瓊はそのことを二師(元春・隆景)に告げた。二師は承知しなかつた。翌日、惠瓊は自ら城に入つて、高治に諭した。高治がいふのに「余の死ぬることによつて兩國を和することが出來るならば、どうして死なずに居られようか」と。そこで兄の月清・軍目付の末近と與に舟に乘つて城を出で、舟中で自殺し、城兵を出してやつた。惠瓊は還つて此のことを報告した。二師は高治の爲めに哀悼の意を表し、遂に盟約を結び、土地を分けて、和睦をした。南は甲部川を界とし、北は馬山を界とし、輝元の季父元綱を送つて人質とすることにした。秀吉は森高政を人質として送り之に答へた。その日、東軍は陣を解いて立ち歸つた。元長は山の頂に居て、之を視ていふのに「彼れが何の譯もなく和睦をしたのは屹度內輪に變事が起つたのである」と。その內に告ぐるものがあつて曰ふのに「信長は、明智光秀に弑せられた」と。元長がいふのに「矢つ張り拙者が思つた通りです。拙者は盟に關係しなかつたのです。之を追撃させて下さい。秀吉は生捕に出來ます」と。浮田直家も亦元長の援助をしようと申し出た。二師がいふのに「人の喪に乘じて盟に背くことはこの上ない不義な事になる」と。終に許さなかつた。後、秀吉は、味方(毛利方)の將士で內通した書

面を數通送つて來た。その中に三澤氏の家來雲波の書面があつた。そこで爲虎は雲波を誅殺した。輝元は既に秀吉と和睦を結んだ。地を秀吉に分けたけれども依然として八州を領有して、歲入は百二十萬石からあつた。

語釋　藉手（憑る所を得るをいふ。左傳の字面。）○八州（安藝・周防・長門・石見・備後・因幡・出雲・隱岐。）

七月、隱岐經清弑其叔父清家。初清家代兄領隱岐、養兄子經清。出己子甚五、質于吉田。經清欲通款信長。清家弗聽。及信長死、經清誘殺之、以滅口。因啓「清家通敵、臣誅之」。元春不信。甚五訴冤、請自復仇。許之。隱岐士民爲內應、終誅殺經清。八月、山田重直誘殺南條氏精兵數百。九月、伯耆人相驚曰「秀吉戰死上國、重直且來襲矣」。元續怖走入京師。其子小鴨元清亦走。秀吉笑曰「元春設詐語、不戰而走之耳。元春之智、元續之怯、皆無雙者也」。因請元春復之。

訓讀　七月、隱岐の經清、其の叔父清家を弑す。初め清家、兄に代り、隱岐を領す。兄の子經清を養ひ、己が子甚五を出だし、吉田に質とす。經清、款を信長に通ぜんと欲す。清家聽かず。信長死するに及んで、經清、之を誘殺し、以て口を滅す。因つて啓す「清家、敵に通じ、臣、之を誅す」と。元春信ぜず。甚五、冤を訴へ、自ら仇を復せんと請ふ。之を許す。隱岐の士民、內應を爲し、終に經清を誅殺す。八月、山田重直、南條氏の精兵數百を誘殺す。九月、伯耆の人相驚いて曰く「秀吉、上國に戰死し、重直、且に來り襲はんとす」と。元續怖れ

走つて京師に入る。其の子小鴨元清も亦走る。秀吉笑つて曰く「元春、詭語を設け、戰はずして之を走らすのみ。元春の智、元續の怯、皆無雙の者なり」と。因つて元春に請うて之を復す。

【評釋】七月、隱岐の經清は其の父清家を弑した。初め、清家は兄に代つて隱岐を領有してゐた。彼は兄の子經清を養つて自分の子の甚五を出して吉田に人質とした。經清は信長に味方しようと思つた。清家は承知しなかつた。信長が死んでから經清は清家を誘ひ出して殺し、その口止めをした。そこで申し出たのに「清家は敵に内通しましたから私が之を殺しました」と。併し元春は之を信用しなかつた。清家の實子の甚五は無實を訴へ出て、自ら仇を復へしたいと願ひ出た。そこで之を許してやつた。隱岐の士民が裏切つて内應し、終に經清を誅殺した。八月、山田重直は南條氏の精兵數百をおびき出して殺した。九月、伯耆の人は相驚いていふのに「秀吉は上方で討死し、重直が今に來襲するだらう」と。元續は怖れ逃げて京都に入り込んだ。其の子小鴨元清も亦走つた。秀吉は之を聞いて笑つて曰ふのに「元春は根のない噂を搆へて戰爭しないで元續を走らせた。元春の智惠と元續の臆病とは、どちらも天下に竝ぶものもない者である」と。そこで元春に賴んで元續を元に復して貰つた。

秀吉誅明智光秀、遂代織田氏、居大坂。元春羞屈下之也、居常怏怏不樂、讓家元長而老。十一年九月、隆景遣弟秀包及廣家赴大坂、尋去歲之盟。秀吉悅秀包有姿容、留之。先是、杉原景盛殺兄元盛、誣以叛、事覺。七月、隆景遣三弟元秋・元政・元康、攻殺景盛、以其弟次郎承杉原氏後。十三年四月、秀吉伐南海、令隆景・元長入伊豫。元長

稱疾歸、廣家代之。七月、定伊豫。秀吉徙河野通信于三原、令隆景代領其國、賜僧惠瓊・來島某各萬石。十月、隆景・元長如大坂。秀吉令諸將郊迎、曰「向使兩川變約、則吾豈得至此。」因饗之。

訓讀 秀吉、明智光秀を誅し、遂に織田氏に代つて、大坂に居る。元春、之に屈下するを羞ぢ、居常、怏怏として樂しまず。家を元長に讓つて老す。十一年九月、隆景、弟秀包及び廣家を遣はし、大坂に赴かしめ、去歲の盟を尋む。秀吉、秀包の姿容あるを悅び、之を留む。是より先き、杉原景盛、兄の元盛を殺し、誣ふるに叛を以てす。事覺る。七月、隆景、三弟元秋・元政・元康を遣はし、攻めて景盛を殺し、其の弟次郎を以て杉原氏の後を承けしむ。十三年四月、秀吉、南海を伐ち、隆景・元長をして、伊豫に入らしむ。元長、疾と稱して歸り、廣家、之に代る。七月、伊豫を定む。秀吉、河野通信を三原に徙し、隆景をして代つて其の國を領せしむ。僧惠瓊、來島某に各萬石を賜ふ。十月、隆景・元長、大坂に如く。秀吉、諸將をして郊迎せしめて曰く「向に兩川をして約を變ぜしむれば、則ち吾れ豈に此に至るを得んや」と。因つて之を饗す。

通釋 秀吉は明智光秀を誅し、遂に織田氏に代つて號令し、大坂に居た。元春は秀吉に腰を屈めて從ふことを羞ぢ、平生不平で不愉快な日を送つてゐた。家督を元長に讓つて隱居した。十一年九月、隆景は弟の秀包及び吉川廣家を遣はして大坂に行かせ、去年の盟を溫めた。秀吉は秀包の容貌の綺麗なのが氣に入つて之を留めて置いた。これより前、杉原景盛は兄の元盛を殺し、「謀叛したから殺した」といつて罪を揑へた。併し、その事實

が露顯した。七月、隆景は三弟、元秋・元政・元康を遣はし、攻めて景盛を殺させ、景盛の弟次郎を以て杉原氏の後を承けしめた。十三年四月、秀吉は南海を征伐し、隆景・元長をして伊豫に攻め込ませた。元長は病氣だといひ立てゝ歸り、廣家が之に代つた。七月、伊豫を平定した。秀吉は河野通直を三原に移し、隆景をして、代つて其の國を領有せしめた。僧惠瓊・來島某に各一萬石を與へた。十月、隆景・元長は大坂に往つた。秀吉は諸將をして城外まで出迎へさせていふのに「さきに吉川・小早川兩氏が約束を變へて拙者を追擊したら、拙者はどうして此んなになることが出來ようぞ。(今日あるは兩川のお陰だ)」と。そこで兩川を鄭重に饗應した。

語釋 三原(備後) ○兩川(小早川吉川。)

時秀吉將伐島津氏。囑元長請元春爲先鋒、約封之筑前。元春羞爲秀吉所驅使、弗肯。是歲、秀吉奏請、以輝元敍從四位下、任侍從。遣黑田孝高促元春。元春不起。輝元曰「公爲我一出。」元春不得已、乃與隆景倶發、攻拔小倉城。將移陣松山。疽發背不得行。隆景與孝高、攻拔閏津、下障子岳、進攻賀春岳。元春疾、將發。黑田氏饗之、供鮭。瘡復劇。乃遺囑二子、以後事。言不及私。終卒。年五十七。元長使廣家奉喪歸安藝、而自從隆景、降賀春守將高橋種元。

訓讀 時に秀吉、將に島津氏を伐たんとす。元長に囑して、元春の先鋒と爲らんことを請ひ、之を筑前に封ぜ

んと約す。元春、秀吉の驅使する所となるを羞ぢ、肯んぜず。是の歲、秀吉、奏請して、輝元を以て從四位下に敍し、侍從に任ず。黑田孝高を遣はし元春を促す。元春起たず。輝元曰く「公、我が爲めに一たび出でよ」と。元春已むを得ず、乃ち隆景と倶に發し、攻めて小倉城を拔く。將に陣を松山に移さんとす。疽背に發して行くを得ず。隆景、孝高と攻めて閏津を拔き、障子岳を下し、進んで賀春岳を攻む。元春瘥え將に發せんとす。黑田氏之を饗し、鮭を供す。瘡復劇し。乃ち二子に遺囑するに後事を以てし、言私に及ばず。終に卒す。年五十七。元長、廣家をして、喪を奉じ、安藝に歸らしめ、而して自ら隆景に從ひ、賀春の守將高橋種元を降す。

通釋 當時、秀吉は島津氏を伐たうと思つてゐた。元長に賴んで元春が秀吉の先鋒になつては吳れまいかと申し込み、元春を筑前に封ずることを約束した。元春は秀吉に追ひ廻されるのを愧ぢて承知しなかつた。この年秀吉は天皇に申上げ御願ひして輝元を從四位下に敍し、侍從に任じて戴いた。黑田孝高を遣はして元春を促した。併し元春は中々承知しなかつた。輝元がいふのに「貴公、何卒私に免じて一度出馬して下されよ」と。そこで元春も本家のいふことであるから已むを得ず隆景と一緒に出發し、攻めて小倉城を陷れた。陣屋を松山に移さうとした。その時腫物が背中に出來て行くことが出來なかつた。隆景は孝高と一緒に閏津を攻めて陷れ、障子岳を下し、進んで賀春岳を攻めた。元春の病氣も直つて將に出發しようとした。黑田孝高は御馳走をして、その時鮭を出した。それが中つて瘡がまた劇しく痛み出した。そこで二子（元長・廣家）に死後のことを遺言したが、一と口も一家の私事に及ばなかつた。終に死んだ。その時年は五十七であつた。元長は廣家をして遺骸を奉じて安藝に歸らしめ、そして自分は隆景に從つて、賀春の守將高橋種元を降參させた。

語釋 小倉・松山・閏津・障子岳・賀春岳（豐前）

十五年三月、豐臣秀長至、合我兵入日向、抵耳川、進圍高城。島津家久夜襲其營。秀長畏其兵慓悍、不敢出。元長欲逆戰。弗許。秀吉至、龍造寺氏以下皆降。五月、島津氏請和。秀吉徙隆景于筑前、治名島、賜秀包筑後三郡、治來目。元長道病、六月、遂卒。元長倔強類父、爲秀吉所畏惡、常有退居之志。見於歌詠。遺命立廣家。黑田孝高素悅廣家色美、與之親善。爲言秀吉立之、襲食隱岐。廣家初名經信、於是改今名。是歲冬、肥後・豐前盜起。隆景・廣家受命討而平之。筑前士民稔聞隆景賢聲、人人相慶。隆景務闊其禁網、漸修治敎。倣下野足利學校、建黌舍、釋奠先聖。時亂離日久、人始聞絃誦之聲。

訓讀 十五年三月、豐臣秀長至り、我が兵を合せ日向に入り、耳川に抵り、進んで高城を圍む。島津家久、夜、其の營を襲ふ。秀長、其の兵の慓悍を畏れ、敢て出でず。元長逆へ戰はんと欲す。許さず。秀吉至り、龍造寺氏以下皆降る。五月、島津氏、和を請ふ。秀吉、隆景を筑前に徙し、名島に治せしめ、秀包に筑後の三郡を賜ひ、來目に治せしむ。元長、道に病み、六月遂に卒す。元長、倔強父に類し、秀吉の畏惡する所と爲り、常に退居の志あり。歌詠に見る。遺命して廣家を立つ。黑田孝高、素より廣家の色美を悅び、之と親しみ善し。爲めに秀

吉に言つて之を立て、隱岐を襲食せしむ。廣家、初名は經信、是に於て今の名に改む。是の歲冬、肥後、豐前に盜起る。隆景・廣家、命を受け、討つて之を平ぐ。筑前の士民、隆景の賢聲を稔聞し、人々相慶す。隆景務めて其の禁網を濶くし、漸く治教を修む。下野の足利學校に倣ひ、黌舍を建て、先聖を釋奠す。時に亂離、日久しく、人始めて絃誦の聲を聞く。

【通釋】十五年三月、豐臣秀長が來て、我が毛利の兵を合せて日向に打ち入り、耳川に至り、進んで高城を取り圍んだ。島津家久が夜、その營を襲擊した。秀長は薩摩の兵の强くたけ〴〵しいことを畏れて、出ようとはしなかつた。元長は迎へ戰はうと思つた。併し許されなかつた。その內に秀吉が來て、龍造寺以下皆降參した。五月、島津氏は和睦を願ひ出た。秀吉は隆景を筑前に徙し、名島に本據を置かせ、秀包に筑後の三郡を賜うて來目に本據を置かせた。元長は途中で病氣になり、六月遂に死んだ。元長は强情で人に屈しない點は父元春に似てゐて、秀吉に畏れ惡まれ、自分でも隱退し度いと思つてゐた。其の心持は歌を詠んでもらしてゐた。元長は遺言して廣家を立てた。黑田孝高は平素から廣家の容貌の綺麗なのを悅んで之と仲が善かつた。だから廣家の爲めに秀吉に申し出で、隱岐を相續して領有することになつた。廣家、はじめの名は經信といつたが、これから今の名廣家に改めた。この年の冬、肥後・豐前に賊が起つた。隆景・廣家は命を受けて、討つて出で、之を平定した。筑前の士民は隆景の賢いといふ評判を久しく聞いて居たので、皆賢君を得たことを慶び合つた。隆景は務めてその法度を緩くしてやつて、漸次に政治命令を直ほして行つた。下野の足利學校に倣つて學校を建て、孔子をお祭した。當時は久しく世の中が亂れ、人民が離散してゐたのであるが、人々ははじめて雅樂を奏し、經書を讀む聲を聞くことが出來たのである。

語釋 稔聞（熟聞）○足利學校（小野篁之を建て、上杉憲實之を修めた。）○釋奠（釋菜、奠幣、祭に菜だけ用ふるのを釋菜といふのである。菜は蘋蘩の類である。先聖は孔子、孔子を祭ることをいふ。）○絃誦之聲（琴瑟を彈じ誦は書物を讀むこと。それ等の聲。）

十六年、輝元任參議。隆景・廣家・秀包、皆爲四位侍從。九月、秀吉養浮田秀家女、妻廣家。初廣家父兄皆死於西海之役。秀吉曰「吾許之以筑前。會其死不果。當以西海一州恤其孤。」石田三成・大谷吉隆、說秀吉曰「輝元所領已跨中國。而隆景・秀包、各領一國。備前浮田氏素與之惡。以爲可使相禁也。而亦婚於吉川。吉川今又受封矣。天下無事則已。苟有事則關以西皆歸毛利氏。爲今之計、莫若就輝元封內割予一二州。是名賜封、而實分其勢也。」秀吉然之、乃令輝元以出雲・伯耆數郡、加賜廣家、治富田。

訓讀 十六年、輝元、參議に任ぜらる。隆景・廣家・秀包・皆四位の侍從と爲る。九月、秀吉、浮田秀家の女を養ひ、廣家に妻はす。初め廣家の父兄、皆西海の役に死す。秀吉曰く「吾れ之に許すに筑前を以てす。其の死に會うて果さず。當に西海の一州を以て其の孤を恤むべし」と。石田三成・大谷吉隆、秀吉に說いて曰く「輝元の領する所、已に中國に跨りて隆景・秀包各一國を領す。備前の浮田氏、素より之と惡し。以て相禁ぜしむべしと爲す。而して亦、吉川に婚し、吉川、今又封を受く。天下事無くんば則ち已む。苟も事有らば、則ち關以西は皆毛利氏に歸せん。今の計を爲すに、輝元の封內に就いて、一二州を割予するに若くは莫し。是れ名は封を賜

ひて、實は其の勢を分つなり」と。秀吉、之を然りとし、乃ち輝元をして、出雲・伯耆の數郡を以て、廣家に加賜せしめ、富田に治せしむ。

通釋 十六年、輝元は參議に任ぜられた。隆景・廣家・秀包は皆四位侍從となつた。九月、秀吉は浮田秀家の娘を養つて、廣家に妻はした。はじめ、廣家の父兄（元春・元長）は皆西海の戰爭で死んだ。秀吉がいふのに「余ははじめ、元春に筑前をやると約束した。併し死んだのでその約束を果さなかつた。西海の一個國を與へて、その孤兒廣家に惠んでやらねばなるまい」と。石田三成・大谷吉隆は秀吉に說いていふのに「輝元の領有する所は從來中國に跨つて居りまして、隆景・秀包も各一國を領してゐます。備前の浮田氏は元から之と不仲で御座いました。ですから互に相牽制させたらよいと思つてゐました。然るに浮田氏は吉川氏と緣組をしましたし、吉川が今又此の上に領地を貰ふことになりました。天下が無事ならばそれでも宜いです。もし事變が起つたら關西は、皆毛利氏に屬いて終ひませう。今の最もよい計は輝元の領分內から一二ケ國を割いて廣家にやるやうになさることです。これは名目は封を賜ふことになりその實は毛利の勢を分けることになります」と。秀吉、之を然りとし、そこで輝元をして出雲・伯耆の數郡を廣家に加へ賜ふやうにさせ、富田に本據を置かせた。

十八年、秀吉東伐北條氏。使輝元守京師、隆景守淸洲、廣家守岡崎。北條氏不降。召隆景謀之。對曰「先人圍富田、休攻戰、示持久、多縱反間、使其君臣相疑、索其妻孥、而招降之。」秀吉曰「吾師之也。」遂以其計、平北條氏。先是、輝元患吉田險狹、城于己斐。十

九年、成リテ徙ル焉。更二ムチ名ヲ廣島ト一。

【訓讀】十八年、秀吉、東、北條氏を伐つ。輝元をして京師を守り、隆景をして清洲を守り、廣家をして岡崎を守らしむ。北條氏降らず。隆景を召して之を謀る。對へて曰く「先人、富田を圍むに、攻戰を休めて持久を示し、多く反間を縱ちて、其の君臣をして相疑はしめ、其の妻孥を索めて之を招き降さしむ」と。秀吉曰く「吾れ之を師とせん」と。遂に其の計を以て北條氏を平ぐ。是より先き、輝元、吉田の隘狹を患ひ、己斐に城く。十九年、成りて徙る。名を廣島と更む。

【通釋】十八年、秀吉は東北條氏を伐つた。輝元をして京都を守らせ、隆景をして清洲を守らせ、廣家をして岡崎を守らせて置いた。所が北條氏が中々降參しない。秀吉は隆景を呼び寄せて相談をした。隆景が對へていふのに「わが亡父が富田を圍みました時に、攻めるのを休めて、長陣の氣勢を敵に示し、廻し者を多く放つて、その君臣の間を疑はせて離間し、又その妻子をさがして之を招き降さしめました」と。秀吉がいふのに「余はそれを手本としよう」と。遂に其の計で北條氏を平げた。それより前、輝元は吉田の狹いのを氣遣ひ、己斐に城を築いた。十九年に出來上つて引越した。名を廣島と改めた。

【語釋】圍二富田一（尼子氏を攻めた時のこと。）（一其妻孥（城内將士の妻子。）

文祿元年、秀吉發シテレ兵ヲ伐ツ二朝鮮ヲ一。毛利・吉川・小早川氏、爲ル二後隊ト一。諸將在リ二朝鮮ニ一、連署シテ稟スレ事ヲ。隆景、花押點畫甚ダ繁シ。福島正則傍觀シ謂ツテレ之ニ曰ク「押字ハ宜シクレ疏ナル、不レ宜シカラレ密ナル。不レバレ然ラ則チ臨ミテレ死ニ作ルニ二遺狀ヲ一、不

能速成也。」隆景笑曰、「大丈夫當横尸原野、何以遺狀為。」正則有愧色。當是時、浮田秀家・石田三成等諸將、在國都、小西行長為先鋒、進據平壤、平壤以南至國都、城砦相屬。

訓讀 文祿元年、秀吉兵を發して、朝鮮を伐つ。毛利・吉川・小早川氏、後隊となる。諸將、朝鮮に在り、連署して事を稟す。隆景の花押、點畫甚だ繁し。福島正則、傍觀し、之に謂つて曰く「押字は宜しく疏なるべく、宜しく密なるべからず。然らざれば則ち死に臨みて遺狀を作るに、速に成る能はざるなり」と。隆景笑つて曰く「大丈夫當に尸を原野に横たふべし。何ぞ遺狀を以てするをなさん」と。正則、愧づる色あり。是の時に當り、浮田秀家・石田三成等の諸將、國都に在り。小西行長、先鋒となり、進んで平壤に據る。平壤以南、國都に至るまで、城砦相屬す。

語釋 文祿元年、秀吉は兵を繰り出して朝鮮を伐つた。毛利・吉川・小早川の諸氏は後詰となつた。かくて諸將は朝鮮に居て連判狀を出して事を申し出た。隆景の書き判は畫數が多くて隨分繁雜なものであつた。福島正則が傍で觀てゐたがいふのに「書き判の字は簡單であつた方が宜い。餘り込み入つてゐては宜しくない。若しさうでないと死に際に書置に書くのに早く書けないからなあ」と。隆景が笑つていふのに「大丈夫たる者は討死して屍骸を原野に曝すべきである。書置などに用事はない」と。正則は一本參つて愧ぢらふ色があつた。この當時浮田秀家・石田三成等の諸將は朝鮮の京城に居た。小西行長は、先鋒となつて進んで平壤に立て籠つてゐた。平壤よ

り、南京城に至るまで城や砦がづつと續いてゐた。

【語釋】文祿(後陽成天皇の年號。)

二年正月、明將李如松、率大兵來援朝鮮、陷平壤。行長敗走。大友義統亦棄城走。秀包與黑田長政、將兵迎行長、殿而退。如松乘勝南下。秀家等令諸城砦皆解、還萃於國都。隆景守開城、獨不肯還。曰「諸君皆去。吾當獨留。吾受命外征。固不期生。吾老矣。願與明人一戰、使明人知日本有小早川隆景者也。卽敗死、喪一老翁。何損於國哉。」秀家等促之再三。隆景不得已而還。與秀包・元康、及立花宗茂三將、合兵二萬、未至國都三十里而陣。

【訓讀】二年正月、明將李如松、大兵を率ゐ、來つて朝鮮を援け、平壤を陷る。行長、敗走す。大友義統も亦城を棄てゝ走る。秀包、黑田長政と、兵に將として行長を迎へ、殿して退く。如松、勝に乘して南下す。秀家等、諸城砦をして皆解き、還つて國都に萃らしむ。隆景、開城を守り、獨り肯て還らず。曰く「諸君皆去れ。吾れ當に獨り留るべし。吾れ命を受けて外征す。固より生を期せず。吾れ老いたり。願はくは明人と一戰し、明人をして、日本に小早川隆景なる者あるを知らしめん。卽し敗死すとも、一老翁を喪ふのみ。何ぞ國に損せんや」と。秀家等、之を促すこと再三なり。隆景已むを得ずして還る。秀包・元康、及び立花宗茂の三將と、兵二萬を合せ、

未だ國都に至らざること三十里にして陣す。

通釋　文祿二年の正月、明の大將の李如松が大兵を引きつれて來つて朝鮮を援け、平壤を陷れた。行長は敗れて走つた。大友義統も亦城を棄てゝ逃げた。毛利秀包は黑田長政と兵に將として行長を迎へ、殿となつて退却した。李如松は勝つた勢に乘じて南方に下がつて來た。秀家等は諸々の城や砦に命じて備を解き、還つて京城に集まらしめた。隆景は開城を守り、獨りで頑張つて肯て還らうとしない。曰ふのに「諸君は皆去つて還へれよ。余は獨り此處に留まるであらう。余は命を受けて外國征伐に來てゐるのである。勿論生きようなどゝは當てにして居らぬ。余はもう年を老つた。此の世の思ひ出に、何んとかして、明の奴等と一戰し、明の奴等に日本には小早川隆景といふ人があることを知らせてやりたい。もし敗れて討死しても、一人の老人を失ふに過ぎない。國家に取つて何の損失にもならぬ」と。秀家が再三、喧しく催促して還らう〳〵と說いた。隆景は止むを得ずして還つた。秀包・元康・及び立花宗茂の三將と兵二萬人を合はせ、京城へはもう三十里といふ處に陣取つた。

數日、候騎報曰「如松兵既至碧蹄驛、蓋十餘萬騎矣」隆景曰「足以試我武矣」乃分兵爲六隊、迎戰。前軍二隊不利卻。隆景揮槍大呼而進。士卒皆奮、莫不一當百。三將自左右夾擊之。明軍遂大敗、如松墮馬。隆景將井上某鏦之、不中。與其將李有聲、鬪而斬之。如松僅以身免。遂北至臨津、斬首萬餘級。而我兵死者僅百餘人。如松入開城、

視其所失亡、痛哭徹曉。遂退軍三次。明軍大沮。明之乞和於我、本於此戰也。四月、和成、國都諸將欲撤還。恐虜兵追躡、群議不決。隆景倚柱而睡。石田三成喚起問計。隆景曰「縱火焚城、更殿而退、何虞之有」從之、全軍而還。

【訓讀】數日にして、候騎、報じて曰く「如松の兵、既に碧蹄驛に至る。蓋し十餘萬騎なり」と。隆景曰く「以て我が武を試みるに足る」と。乃ち兵を分ちて六隊と爲し、迎へ戰ふ。前軍の二隊、利あらずして卻く。隆景、槍を揮ひ、大に呼んで進む。士卒皆奮ひ、一、百に當らざるはなし。三將、左右より之を夾擊す。明軍、遂に大に敗れ、如松、馬より墮つ。隆景の將、井上某、之を鎗く、中らず。其の將李有聲と鬪うて之を斬る。如松、僅に身を以て免る。北ぐるを逐ひ臨津に至り、首を斬ること萬餘級。而して我が兵の死する者、僅に百餘人のみ。如松開城に入りて、其の失亡する所を視て、痛哭曉に徹す。遂に軍を退くること三次。明軍、大に沮む。明の和を我に乞ふは、此の戰に本づくなり。四月、和成り、國都の諸將、撤し還らんと欲す。虜兵の追躡せんことを恐れ、群議、決せず。隆景、柱に倚つて睡る。石田三成、喚び起して計を問ふ。隆景曰く「火を縱ち城を焚き、更殿して退かば、何の虞か之あらん」と。之に從ひ、軍を全うして還る。

【通釋】それから數日經つて、斥候の騎兵が報告して曰ふに「李如松の兵が既に碧蹄驛まで來ました。其の兵數は思ふに十餘萬騎であります」と。隆景が曰ふのに「宜し余の武力を試すに申分はない」と。そこで兵を分けて六隊となし敵を迎へ戰つた。先登の二隊がうまく行かなくて退却した。隆景は槍を揮ひ大に呼ばはつて進んだ。

士卒は皆勢を出し、一人が百人に當らないものはない。三將が左右から敵を夾み撃ちした。明軍はとう／＼大敗し、李如松は馬から墮ちた。隆景の將井上某が之を突いたが中らなかつた。そこで如松の將の李有聲と鬪ひ之を斬り捨てた。其の間に如松は僅に生命から／＼逃げることが出來た。敵の逃ぐるのを逐ひ臨津まで行き、首を斬ること萬餘級であつた。そして我が兵の死する者は僅に百餘人に過ぎなかつた。如松は開城に入り、味方の多數死亡したのを見て、夜通し痛く嘆き悲しんで哭いた。遂に軍を反へし三日程の距離を退却した。それが爲め明軍は大に意氣沮喪した。明が日本に講和を願ひ出たのは、この戰爭に本づいたのである。四月に和睦が出來上り、京城の諸將は城を撤して歸還しようと思つた。けれども敵が後方から追かけ尾いて來はしないかと恐れ、色々相談したが、議論が多くて決まらない。隆景は柱に凭つて居睡をしてゐた。石田三成が喚び起して計を尋ねた。隆景が曰ふのに「火をつけて城を燒き、更る／＼殿し乍ら退却したら、何も心配する所は無いではないか」と。そこでこの意見に從ひ、軍を全うして還つて來た。

語釋　碧蹄驛（京畿道）

六月、輝元義子秀元濟海、與諸將倶攻晉州、拔之。秀元、元淸子也。其幼元春・隆景目之、相語曰「何酷肖先君也」時秀吉欲以其外甥秀秋爲毛利氏後。或以告隆景。隆景素知秀吉畏忌己、且不屑受其封、欲返致之。及聞是言、竊度曰「不可使他人汨我宗家。且秀秋妄庸人。養之是養禍也。吾寧任其弊。已而秀吉從容問之曰「參議齡强

而無嗣。何如。隆景卒對曰、既養穗田氏子矣。秀吉憮然曰、吾未之知也。隆景使人馳告輝元、使立秀元。遂請秀秋爲己子。秀吉喜許之。乃讓與之筑前、而自老于三原。秀吉始伐韓之年、自肥前航歸大坂、過大浦。舟人謀逆。故觸舟于礁、殆溺。秀元以走舸救之。秀吉梟舟人、挈秀元入京師、奏爲四位侍從、報其德也。遂有外征之命。年甫十五。

訓讀 六月、輝元の義子秀元海を濟り、諸將と倶に晉州を攻めて、之を拔く。秀元は、元淸の子なり。其の幼なるとき、元春・隆景、之を目して、相語げて曰く「何ぞ酷だ先君に肖たる」と。時に秀吉、其の外甥秀秋を以て、毛利氏の後と爲さんと欲す。或る人、以て隆景に告ぐ。隆景、素より秀吉の己を畏忌するを知り、且つ其の封を受くるを屑しとせず、之を返致せんと欲す。是の言を聞くに及んで、竊に度つて曰く「他人をして我が宗家を汨さしむ可からず。且つ秀秋は妄庸の人なり。之を養ふは、是れ禍を養ふなり。吾れ寧ろ其の弊を任ぜん」と。已にして秀吉、從容として之に問うて曰く「參議齡强にして嗣なし。何如」と。隆景、卒に對へて曰く「既に穗田氏の子を養へり」と。秀吉、憮然として曰く「吾れ未だ之を知らざるなり」と。隆景、人をして馳せて輝元に告げしめ、秀元を立てしむ。遂に秀秋を請うて己が子と爲す。秀吉喜んで、之を許す。乃ち之に筑前を讓與して、自ら三原に老す。秀吉始め韓を伐つの年、肥前より航して大坂に歸り、大浦を過ぐ。舟人、逆を謀る。故に舟を礁に觸れしめ、殆ど溺る。秀元、走舸を以て之を救ふ。秀吉、舟人を梟し、秀元を挈へて京師に入り、奏

して四位の侍從と爲す。其の德に報ゆるなり。遂に外征の命あり。年甫めて十五。

通釋 六月、輝元の養子の秀元は、海を渡つて、諸將と一緒に晉州を攻めて、之を陷れた。秀元は元清の子である。その幼ないとき、元春・隆景之を見て話しあつていふのに「隨分父上に似て居るではないか」と。時に秀吉は、その母方の甥、秀秋を毛利氏の繼嗣としたいと思つて居た。或る人がそれを隆景に告げた。隆景は平素から秀吉が自分を畏れ忌んでゐることを承知してゐるし、それに秀吉などから領地を貰ふのを屑しとしてゐなかつたので、之を返さうと思つて居たのである。そこでこの言葉を聞いてから、內々考へゐたには「他人をして我が本家の血筋を亂さしめてはいけない。それに、あの秀秋といふ男は詰らぬ人間だ。之を養子にするは禍を養ふやうなものだ。これはいつそのこと吾が家が其の厄介者を背負ひ込んだ方がいゝ」と。其の內或る時、秀吉はゆつくりとして隆景に問うていふのに「參議（輝元）はもう四十にもなつたが、繼嗣がないどうしたものぢや」と。隆景は遽に答へていふのに「もう穗田氏の子を養子にしました」と。秀吉はがつかりしていふには「ホウ、それはまだ知らなかつた」と。そこで隆景は人をやつて大急ぎで輝元に告げさせて秀元を立てゝ繼嗣とした。遂に隆景は秀秋を貰ひ受けて、自分の子とした。秀吉は喜んで之を許した。そこで、之に筑前を讓り與へて、自分は三原に隱居した。秀吉が、はじめ韓を伐つた年、肥前から舟に乘つて大坂に歸り、途中大浦を通つた。船頭が逆謀を企てた。わざと舟を暗礁に衝き當て、それが爲めに殆んど溺死しようとした。秀元は、早舟で之を救助した。秀吉はこの船頭を獄門にかけ、秀元をつれて京都へ上り、奏上して、秀元を四位侍從として戴いた。その恩に報いたのである。それから朝鮮征伐の命令を受けたのである。その時年はやつと、十五であつた。

語釋 齡强（禮記に四十を强といふとある。）〇穗田氏子（秀元をさす。）

慶長二年、輝元・隆景並爲從三位中納言、與秀家皆修淀河堤、秀元襲輝元官爵、爲秀吉女壻。是年、復伐朝鮮、以秀秋・秀元統諸將。六月、隆景病卒。年六十二。隆景爲秀吉所重、參其大計、而持己愼密、讒間不入。秀吉嘗欲徙封毛利氏于九州、隆景辭曰「八州已多。況增一乎。恐不能勝也。且先人所百戰而取、不忍棄之」秀吉乃止。及退老、以誦吟自適、以至於沒。

訓讀 慶長二年、輝元・隆景、並に從三位中納言と爲る。秀家と、皆淀河の堤を修む。秀元、輝元の官爵を繼ぎ、秀吉の女壻と爲る。是の年、復朝鮮を伐ち、秀秋・秀元を以て、諸將を統べしむ。六月、隆景病んで卒す。年六十二。隆景秀吉の重んずる所と爲り、其の大計に參す。而して己を持する愼密にして、讒間入らず。秀吉嘗て毛利氏を九州に徙封せんと欲す。隆景辭して曰く「八州已に多し。況んや一を增すをや。恐らくは勝ふる能はざらん。且つ先人、百戰して取る所、之を棄つるに忍びず」と。秀吉乃ち止む。退老するに及び、誦吟を以て自適し、以て沒するに至る。

通釋 慶長二年、輝元・隆景は二人共、從三位中納言となつた。二人は秀家と一緒に、淀河の堤防を修理した。秀元は輝元の官爵を繼ぎ、秀吉の婿となつた。この年また朝鮮を伐つたが秀秋・秀元を總大將となし、諸將を統率せしめた。六月、隆景は病氣で死んだ。年は六十二。隆景は秀吉に重んぜられ、大事の相談相手になつてゐた。

そして、自分の身持が大層細かく愼み深く、從つて讒言の入る隙はなかつた。秀吉嘗て、毛利氏を九州に場所換させようとした。その時隆景は之を辭して曰ふのに「八個國でも多いと思つてゐます。まして（九州は九ケ國であるから）一國を增しては多過ぎます。恐らくは持ち切れますまい。それに亡父が百戰して取つたところでありますから之を棄てるには忍びませぬ」と。だから秀吉もこの事は中止した。隆景は隱居してからは、書を讀み、詩歌を詠じて氣まゝに暮して世を終つた。

十二月、明兵圍我將加藤清正于蔚山。三年正月、秀秋・秀元赴援。廣家謂其騎曰「明兵衆而不整。汝注視其後軍。今將走也」既而果走。廣家以千餘騎先追之。明騎將吳惟忠・茅國器返戰。廣家縱横奮擊。二將皆奔逃。清正望見之曰「彼以蒲穗爲背幟者誰」。左右對曰「吉川也」。清正曰「勇哉。恨其幟之不較著也。當贈吾號」乃手取其背幟馬藺贈之。廣家驍名益著。秀吉欲大賞之。僧惠瓊素惡於吉川氏。乃與石田三成倶沮其議。

訓讀 十二月、明兵、我が將加藤清正を蔚山に圍む。三年正月、秀秋・秀元、赴き援く。廣家、其の騎に謂つて曰く「明兵衆くして整はず。汝、其の後軍を注視せよ。今將に去らんとするなり」と。既にして果して走る。廣家、千餘騎を以て先づ之を追ふ。明の騎將吳惟忠、茅國器、返り戰ふ、廣家、縱横奮擊す。二將皆奔逃す。清正、之を

望見して曰く「彼の蒲穗を以て背幟となす者は誰ぞ」と。左右對へて曰く「吉川なり」と。清正曰く「勇なるかな。其の幟の較著ならざるを恨む。當に吾が號を贈るべし」と。乃ち手づから其の背幟の馬藺を取つて之を贈る。廣家、驍名益〻著る。秀吉、大に之を賞せんと欲す。僧惠瓊、素より吉川氏に惡し。卽ち石田三成と倶に其の議を廢沮す。

通釋 十二月、明兵は我が將加藤清正を蔚山に取り圍んだ。三年正月、秀秋・秀元は之を援けに行つた。廣家はその部下の騎兵に向つていふには「明兵は衆いけれども整つてゐない。お前は明の後詰の方をよく見てゐろ。今逃げ出すであらう」と。その内に案の定明兵は逃げ出した。廣家は千餘騎を引きつれて眞つ先きに之を追つかけた。明の騎兵の大將、吳惟忠・茅國器は引き返へして戰つた。廣家は縱横に奮ひ撃つた。二將は皆逃げ走つた。清正は之を遠方から見ていふのに「あの蒲の穗を差物にして居るのは誰ぢや」と。左右の者が答へていふのに「吉川で御座います」と。清正がいふのに「勇ましいことぢや。惜しい事にあの差物でははつきりせぬ。吾がしるしを進ぜよう」と。そこで、手づから自分の馬藺草の差物を贈つた。廣家の勇名は益〻著れた。秀吉は大に之を賞めようと思つた。僧惠瓊は元から吉川家とは仲が惡かつた。そこで石田三成と一緒にその相談を妨害して中止させた。

語釋 蒲穗（がまの穗のこと。）○馬藺（とうしん草、藺を織る。）

八月、秀吉薨ズ。子秀頼嗣グ。毛利氏、徳川・前田・上杉・浮田氏、竝ニ稱ス二五大老ト一。共ニ輔二翼ス之ヲ一。三成等離二間ス諸老ヲ一。五年二月、輝元饗ス二徳川公ヲ于其ノ第ニ一、修メ好ミヲ交盟フ。四月、徳川公伐ツ二上杉氏ヲ一。輝

元遣廣家・惠瓊、將兵助之。三成使惠瓊言輝元曰「德川氏將不利嗣君。嗣君憂焉。將倚公之力以討之」。輝元乃將兵四萬、守大坂。增田長盛副之。三成自引兵、進入美濃。秀元諫輝元曰「秀頼幼騃、何辨臧否。大人愼勿惑其言。且君與德川盟、未幾背之、可乎」。不聽。秀元曰「然則大人擁秀頼以東伐。兒請爲先鋒焉。則諸將從德川者相來屬我。我勝必矣。坐守此地、非計也」。又不聽。命與廣家、陣瀬田、徇伊勢、攻拔津城。聞東西之軍會美濃、則北、屯南宮山。惠瓊與長曾我部盛親・長束正家、陣山下。兵凡三萬。

訓讀 八月、秀吉、薨ず。子秀頼嗣ぐ。毛利氏、德川・前田・上杉・浮田氏、並に五大老と稱し、共に之を補翼す。三成等、諸老を離間す。五年二月、輝元、德川公を其の第に饗し、好を修めて交盟ふ。四月、德川公、上杉氏を伐つ。輝元、廣家・惠瓊を遣はし、兵に將として之を助けしむ。三成、惠瓊をして輝元に言はしめて曰く「德川氏將に嗣君に利あらざらんとす。嗣君憂ふ。將に公の力に倚り以て之を討たんとす」と。輝元乃ち兵四萬に將として大坂を守る。增田長盛、之に副たり。三成自ら兵を引き、進んで美濃に入る。秀元、輝元を諫めて曰く「秀頼は幼騃、何ぞ臧否を辨ぜん。大人愼んで其の言に惑ふこと勿れ。且つ君、德川と盟ひ、未だ幾ならずして之に背く、可ならんや」と。聽かず。秀元曰く「然らば則ち大人、秀頼を擁し以て東伐せよ。兒請ふ、先鋒と爲らん。則ち諸將の德川に從ふ者、皆來つて我に屬せん。我れ勝つこと必せり。坐して此の地を守るは、計に非

ざるなり」と。又聽かず。命じて、廣家と瀨田に陣し、伊勢を徇へ、攻めて津城を拔かしむ。東西の軍、美濃に會すと聞き、則ち北して南宮山に屯す。惠瓊は長曾我部盛親・長束正家と、山下に陣す。兵凡そ三萬。

通釋 八月、秀吉は薨去した。子の秀頼が嗣いだ。毛利氏は德川・前田・上杉・浮田の四氏と並に五大老と稱し、共に、秀頼を輔佐した。三成等はこの諸大老を不仲にするようにした。五年二月、輝元は德川氏を自分の屋敷に饗應し、好を修めて交互に盟をして、不仲にならぬやうにした。四月、德川公家康は上杉氏を伐つた。輝元は廣家・惠瓊を派遣し、兵に將として德川公を助けさせた。三成は惠瓊をして、輝元に言はせていふには、「德川氏は秀頼公に不爲めの事をしようとしてゐる。秀頼公は、之を心配してゐられる。貴公の力に倚賴して德川を討たうとしてゐられる」と。そこで輝元は兵四萬を率ゐて、大坂を守つた。增田長盛が副將となつてゐた。三成は自身兵を引きつれて進んで美濃に入つた。秀元が輝元を諫めていふのに「秀頼公は幼くて愚かもので　何んで、善惡の辨別が出來ませうぞ。父上には愼んで彼等のいふことに惑はされてはなりません。それに父上には先達て德川と盟はれ、それからまだ幾程も經つてゐないのに之に背いて宜いでせうか」と。輝元は聞き入れなかつた。秀元がいふのに「それなら父上には秀頼を擁して東德川を伐ちなさい。私は是非先鋒にして貰ひませう。さうすれば諸將で德川に從つてゐる者が皆來つて味方になりませう。こつちが勝つに定まつてゐます。ぢつとしてゐて此の地を守るのは得策ではありません」と。これも聞き入れなかつた。秀元に命じて、廣家と共に瀨田に陣取らせ、伊勢を徇れ、攻めさせて津城を陷れた。東西兩軍が(石田と德川)美濃で會戰すると聞いたので則ち北に進んで、南宮山に陣取つた。惠瓊は長曾我部盛親・長束正家と山下に陣取つた。その兵は皆で三萬であつた。

語釋 南宮山(美濃)

秀秋會西軍、首送款於徳川氏、約爲内應。廣家亦與福原越後定議、勸秀元送款。秀元曰「吾家受託於幼弱人。棄之歸强國、非義也。且無家君之命、安可自肆乎」。廣家曰「豐臣氏恩澤侯且叛歸東軍。況於我家乎。宜速決去就。是利納言也」。秀元未決。廣家密因黒田長政納款、送福原某・粟屋某爲質。長政使之率衆來屬、擊西軍以爲信。秀元曰「我山下軍、非從我降者。吾亦不忍擊之」。唯當按甲不動。輝元在大坂。聞京極高次以大津應東軍、遣元康・秀包、與立花宗茂等攻之。使人入說曰「諸將爲嗣君舉義。公嗣君姻戚、何獨不從」。高次不肯曰「今日之事、毛利與徳川爭雌雄耳。嗣君何關焉」。於是、攻擊益急。高次遂致城而去。諸將將遂會美濃。當是時、西軍族輝元、東軍族徳川公、相持未戰。

訓讀　秀秋、西軍に會し、首として款を徳川氏に送り、約して内應を爲す。廣家も亦、福原越後と議を定め、秀元に勸めて款を送らしむ。秀元曰く「吾が家、託を幼弱の人に受く。之を棄てて强國に歸するは、義に非ざるなり。且つ家君の命なし、安んぞ自ら肆にすべけんや」と。廣家曰く「豐臣氏恩澤の侯すら、且つ叛いて東軍に歸す。況んや我が家に於てをや。宜しく速に去就を決すべし。是れ納言を利するなり」と。秀元未だ決せず。

廣家、密に黑田長政に因つて款を納れ、福原某・粟屋某を送りて質と爲す。長政、之をして衆を率ゐて來り屬し、西軍を擊つて以て信と爲さしむ。秀元曰く「我が山下の軍、我に從ひて降る者に非ず。吾も亦之を擊つに忍びず。唯だ當に甲を按じ動かざるべし」と。輝元、大坂に在り。京極高次、大津を以て東軍に應ずと聞き、元康・秀包を遣はし、立花宗茂等と之を攻めしむ。人をして入りて說かしめて曰く「諸將、嗣君の爲めに義を擧ぐ。公は嗣君の姻戚なるに、何ぞ獨り從はざる」と。高次肯んぜずして曰く「今日の事、毛利と德川と、雌雄を爭ふのみ。嗣君何ぞ關らん」と。是に於て、攻擊益〻急なり。高次遂に城を致して去る。諸將將に遂に美濃に會せんとす。是の時に當り、西軍は輝元を俟ち、東軍は德川公を俟ち、相持して未だ戰はず。

【通釋】秀秋も西軍（石田）に會してゐたが眞つ先きに德川氏に內通して、內から應援するやうに約束をした。廣家も亦福原越後と相談をきめて、秀元に勸めて、內通させた。秀元がいふのに「吾が家はか弱い秀賴公から倚託を受けた。之をうつちやつて强い國に屬くのは不義である。それに父上からの命令も來ないのに、どうして自分勝手なことが出來ようぞ」と。廣家がいふのに「豐臣家の恩顧を受けた大名でさへ豐臣に叛いて德川についてゐる。まして、我が家はさやうなことはないのであるから平氣である。早く就く、就かぬをお決めなさい。これは中納言殿（輝元）の御爲めである」と。秀元はそれでもまだ決しなかつた。廣家は、ひそかに、黑田長政に賴んで內通し、福原某・粟屋某を送つて人質とした。そこで長政は廣家をして軍勢を引きつれて來て、東軍に屬き、西軍を擊つて僞でないといふ證據を示させようとした。秀元がいふのに「我が山下の軍（長曾我部等）は我に從つて、東軍に降參したものではない。自分も亦之を擊つには忍びない。だから唯だ兵を止め押へて動かさないで置きませう」と。輝元は大阪に居た。京極高次は大津を擧げて東軍に味方したと聞いたので元康・秀包を派遣し、立花宗

茂等と一緒に之を攻めさせた。又使者を立てゝ、城中に入り、高次に說かせていふには「諸將は秀賴公の爲めに義兵を擧げてゐる。然るに貴公は秀賴公の緣邊の者でありながら、何故ひとり從はないのか」と。高次は承知しないでいふには「今日の事たるや、毛利氏と德川氏とが勝負を爭つてゐるのぢや。秀賴公等は問題ではない」と。そこで益手きびしく攻擊した。高次はとう〳〵支へ切れないで城を明け渡して立ち去つた。諸將はそれから進んで美濃で會合しようとした。この當時、西軍は輝元の來るのを待ち、東軍は德川公の來るのを待つてゐて、持ち合つてまだ戰はなかつた。

【語釋】强國（德川）○恩澤侯（功は無くとも恩澤でなつた諸侯。）○山下軍（長曾我部盛親・長束正家・安國寺惠瓊等の軍。）○嗣君姻戚（嗣君は秀賴、高次は秀賴の母の弟で、淀君の妹を娶る。）

九月、德川公至。而輝元未至。三成等遂聚議乎大垣、推浮田秀家爲將、以秀元爲先鋒。正家・惠瓊往參其議。還報。廣家怒曰「宰相代納言統師。不能爲秀家前驅。」已而三成自來、請曰「毛利・浮田分將前後。豈有輕重乎。」廣家終不聽。三成曰「然則公止軍於此、見我擧烽、則直襲東軍後。」

【訓讀】九月、德川公至る。而して輝元、未だ至らず。三成等、遂に大垣に聚り議し、浮田秀家を推して將と爲し、秀元を以て先鋒と爲す。正家・惠瓊、往いて其の議に參す。還り報ず。廣家怒つて曰く「宰相、納言に代つて師を統ぶ。秀家の前驅と爲る能はず」と。已にして三成、自ら來り、請うて曰く「毛利、浮田、分れて前後に將たり。豈に輕重あらんや」と。廣家、終に聽かず。三成曰く「然らば則ち公は止だ此に軍し、我が烽を擧ぐる

を見ば、則ち直に東軍の後を襲へ」と。

【通釋】九月、徳川公家康がやつて來た。併し輝元はまだ來なかつた。三成等は遂に大垣で聚まつて相談し浮田秀家を推して大將となし、秀元を先鋒とした。正家・惠瓊の二人は大垣に出かけてその相談に預つた。そして歸つて來てその報告をした。すると廣家は怒つていふのに「宰相(秀元)が納言(輝元)に代つて軍勢を統べるのが當り前である。秀家の爲めに先鋒になることは罷りならぬことだ」と。其の内に三成が自身やつて來て請うて曰ふのに「毛利と浮田の二氏が別々に分れて前後に大將となつたのである。どうしてそこに輕い重いがありませうや」と。併し、廣家は終に聞き入れなかつた。三成がいふのに「そんなら貴公はたゞ此處に陣取つて、わが烽を擧げたのを見たら直ぐ東軍の後方を撃つて下さい」と。

明日、兩軍皆陣關原。徳川公猶疑我意、分兵當南宮、而進陣桃配野。惠瓊來見秀元勗之。秀元曰「軍事委廣家矣」。惠瓊曰「公太閤義子、不可斯須忘秀頼。何得此推諉之言乎」。秀元曰「吾必如約」。惠瓊去。秀元使人謂廣家曰「東軍諸將、其質皆在大坂。棄而不顧。吾亦欲棄福原輩以應西軍。如何」。廣家不肯。已而兩軍大戰。石田氏陣、烽起。正家促秀元。秀元欲應之。廣家與宍戶元繼爲先鋒。其兵皆免冑而坐。秀元不得進。乃託傳餐、故失戰期。世人傳笑、遂謂不得已之計曰宰相傳餐。

【訓讀】明日、兩軍、皆關原に陣す。德川公、猶ほ我が意を疑ひ、兵を分ちて南宮に當て、而して進んで桃配野に陣す。惠瓊來り、秀元を見て之を勗む。秀元曰く「軍事は廣家に委す」と。惠瓊曰く「公は太閤の義子、斯須くも秀頼を忘るべからず。何ぞ此の推諉の言を得んや」と。秀元曰く「吾れ必ず約の如くせん」と。惠瓊去る。秀元、人をして廣家に謂はしめて曰く「東軍の諸將、其の質、皆大坂に在り。棄てゝ顧みず。吾れ亦、福原の輩を棄てゝ以て西軍に應ぜんと欲す。如何」と。廣家肯んぜず。已にして兩軍、大に戰ふ。石田氏の陣、烽起る。正家、秀元を促す。秀元、之に應ぜんと欲す。廣家、宍戸元繼と先鋒たり。其の兵、皆冑を免いで坐す。秀元進むを得ず。乃ち傳餐に託して、故に戰期を失す。世人、傳笑し、遂に已むを得ざるの計を謂ひて、宰相の傳餐と曰ふ。

【通釋】明日、東西兩軍は皆關原に陣取つた。德川公家康はまだ毛利氏の心を疑つて、萬一の爲めに兵を分けて南宮山に當らせ、進んで桃配野に陣取つた。惠瓊はやつて來て秀元に會つて之を激勵した。秀元がいふのに「軍事は廣家にまかしてゐる」と。惠瓊がいふのに「貴公は太閤の義理の子である以上、一寸の間も秀頼公をお忘れになつてはならぬ。どうして他人に責任を推しつけるやうな無責任な言葉を出すことが出來ませうや」と。秀元がいふのに「余は屹度約束通りにする」と。そこで惠瓊は立ち去つた。秀元は人をやつて廣家に言はせていふには「東軍の諸將の人質は皆大坂にゐます。併し皆之を棄てゝ顧みない。吾も亦之に倣つて、人質にやつてある福原輩は棄てゝ、西軍に味方しようと思ふ。如何思召さる」と。廣家は承知しなかつた。その内に兩軍は大に戰つた。石田氏の陣屋から相圖の烽が揚つた。正家は秀元を促した。秀元は之に應援しようと思つた。その時廣家は宍戸元繼と共に先鋒となつてゐた。所がその兵士は皆冑をぬいで、坐つて邪魔をした。秀元は進むことが出來な

い。そこで兵糧を使ふといふことにかこつけて、わざと戰期をはづして終つた。世人は之を言ひ傳へて笑ひ、遂に止むを得ない計のことを「宰相の兵糧使ひだ」といつた。

語釋 關原（美濃）〇桃配野（關原の東南。）

是時、秀秋在松尾山、觀望兩端。德川氏促之。乃自後襲西軍。其家老松野主馬怒曰「主公何爲此不義之擧。小早川氏所未曾有也。」終不肯戰。西軍大敗。我山下軍不戰而潰。廣家因長政謝德川氏曰「秀元宜速謁。顧輝元在大坂。不敢先也。」乃下山西歸。長政與福島正則、欲止秀元爲質。馳出其前路、設帳、要而饗之。秀元有膂力、佯醉拗正則手曰「近日見公於大坂矣。」奮袂而去。二人不敢止。立花宗茂至草津、得關原敗聞、返至大坂、欲助輝元城守。輝元不聽。秀包亦返至。宗茂欲與俱歸東軍。秀包曰「吾從納言者也。」乃入大坂。以疾歸安藝。尋卒。

訓讀 是の時、秀秋、松尾山に在りて、兩端を觀望す。德川氏、之を促す。乃ち後より西軍を襲ふ。其の家老松野主馬、怒つて曰く「主公、何ぞ此の不義の擧を爲す。小早川氏、未だ曾て有らざる所なり」と。終に肯て戰はず。西軍、大に敗れ、我が山下の軍、戰はずして潰ゆ。廣家、長政に因つて、德川氏に謝して曰く「秀元宜し

く速に謁すべし。顧ふに輝元、大坂に在り。敢て先んぜざるなり」と。乃ち山を下りて西に歸る。長政、福島正則と、秀元を止めて質と爲さんと欲す。馳せて其の前路に出づ。帳を設け、要して之を饗す。秀元、膂力あり、佯り醉うて、正則の手を拗して曰く「近日、公を大坂に見ん」と。袂を奮つて去る。二人敢て止めず。立花宗茂、草津に至り、關原の敗聞を得、返つて大坂に至る。輝元を助けて城守せんと欲す。輝元聽かず。秀包も亦返り至る。宗茂、與倶に東軍に歸せんと欲す。秀包曰く「吾は納言に從ふ者なり」と。乃ち大坂に入る。疾を以て安藝に歸り、尋いで卒す。

通釋　この時、秀秋は松尾山に居て貳股をかけて形勢を見てゐた。徳川氏は之を促した。そこで後方から西軍を襲うた。その家老の松野主馬が怒つていふのに「殿にはなぜこんな不義の振舞をなさいますか。小早川家にはこれまでこんなことはなかつたことであります」と。終に戰ふことを肯んじなかつた。かくて西軍は大に敗れ、わが山下の軍（長曾我部・長束）は戰はないで潰えた。廣家は長政に賴んで徳川氏に謝していふのに「秀元は早速お目通りすべきであります。考へて見ますと輝元が大坂に居ます。親に先き立つことは出來ませぬので失禮して居ります」と。そこで南宮山を下つて、西、大坂に歸つて行つた。長政は福島正則と二人で秀元を止めて、人質にしようと思つた。馳せて、その先き路に廻つて出た。御馳走の支度をして待ち受けて饗應した。秀元は腕の力があつたから醉つた風をして、正則の手をねぢ上げていふには「いづれ近日、大坂で逢はうではないか」と。袂をふり拂つて去つた。二人は止めることも出來かねた。立花宗茂は草津まで來て關ケ原の敗報を得て、大坂に返つた。輝元を助けて城を守らうと思つた。輝元は承知しなかつた。秀包も亦返つて來た。宗茂は秀包と一緒に東軍に付かうと思つた。秀包がいふのに「拙者は中納言殿（輝元）に從ふのだ」と。さう言つて大坂に入つた。併し病

氣になつて安藝に歸り間もなく歿した。

語釋 松尾山（關原の西南。）○出其前路（大津に出たといふことである。）○草津（近江）

輝元避城居于木津川別第、削髮稱宗瑞、請降德川公。德川公與其親信井伊直政、密議曰「毛利氏右族。不可遽加讓削。而廣島其治所也。不奪此、莫以正典刑焉」議未決。會輝元使者來。曰「生死唯命。若垂大仁、得領周防・長門、望外之幸也」德川公大喜、許之、盡收其餘六州。惠瓊匿伊吹山、出依秀元。聞其通東軍、去匿鞍馬。聞吉川氏來索、又出匿本願寺子院。近江僧樂鎭、素與之惡。以告東將奥平信昌。信昌遣兵捕之。從者與載、走東寺。追兵已迫。從者度不可脫、隔輿刺之、返鬪皆死。惠瓊未殊。遂就縛。十月朔、與石田・小西・長束等、皆梟首京師。輝元徙長門、治于萩城、食三十萬石、不與公役。送其子秀就爲質。

訓讀 輝元、城を避けて、木津川の別第に居り、髮を削り宗瑞と稱し、降を德川公に請ふ。德川公、其の親信井伊直政と密に議して曰く「毛利氏は右族なり。遽に讓削を加ふ可からず。而して廣島は其の治所なり。此を奪はざれば以て典刑を正すなし」と。議未だ決せず。會輝元の使者來る。曰く「生死は唯だ命のまま。若し大仁

を垂れ、周防、長門を領するを得ば、望外の幸なり」と。德川公、大に喜び、之を許し、盡く其の餘の六州を收む。惠瓊、伊吹山に匿れ、出でて秀元に依る。其の東軍に通ずるを聞き、去つて鞍馬に匿る。吉川氏來り索むと聞き、又出でて本願寺の子院に匿る。近江の僧樂鎭、素より之と惡し。以て東將奧平信昌に告ぐ。信昌、兵を遣はして之を捕へしむ。從者、輿載して東寺に走る。追兵已に迫る。從者、脫すべからざるを度り、輿を隔てて之を刺し、返り鬪ひて皆死す。惠瓊未だ殊せず。遂に縛に就く。十月朔、石田、小西、長束等と、皆京師に梟首す。輝元、長門に從り萩城に治し、三十餘萬石を食み、公役に與らず。其の子秀就を送つて質と爲す。

通釋 輝元は、大坂城を避けて、木津川の別莊に居り、髮を剃つて、宗瑞と言ひ、德川公に降參を申し込んだ。德川公はその親任ある家來井伊直政と內密に相談していふのに「毛利氏は名高い一族である。急に罪を責めて土地を削つてはならぬ。そして廣島が彼の根城である。この廣島を奪はないと掟を正しくするといふことがなくなるが如何致したものか」と。その相談がまだ決まらなかつた。丁度其處へ輝元の使者が來た。いふのに「生きるも死ぬるも仰の儘になりませう。併し若し非常なおなさけで周防・長門の二ケ國を領有することが出來るなら望み以上の仕合せであります」と。德川公は非常に喜んで、之を許し、全部防長以外の六國を沒收した。惠瓊は伊吹山に匿れ、出でゝ秀元にたよらうとした。併し秀元が東軍に通じたといふのを聞いて去つて、鞍馬山に匿れた。吉川氏が搜索に來たと聞いて、又出でゝ本願寺の末寺に匿れた。近江の僧で樂鎭といふ男は、元來惠瓊と仲が惡かつた。そこで之を東軍の將奧平信昌に告げた。信昌は兵を遣つて之を捕へさせた。そこで惠瓊の從者は轎に載せて東寺へ逃げ込まうとした。追手が間近に迫つて來た。從者は到底免れられないと思ひ、かご越しに惠瓊を突き刺して置いて、自分等は引き返し鬪つて皆討死した。惠瓊はまだ縡きれてゐなかつた。茲に捕縛せられた。十

月朔、石田・小西・長束等と皆京都で獄門にかけられた。輝元は長門に移つて、萩城を本據とし、三十萬石を領し公務には一切關係しなかつた。その倅の秀就を送つて人質とした。

語釋 避レ城（徳川に敵せぬ意を表す。）○公役（軍役、普請等。）

輝元既養二秀元一、而生二秀就及就隆一。徳川氏欲下分二長門于秀元一。秀元辭レ之、退居二長府一、以攝二國政一。會二其室卒一。徳川公養二松平康元女一繼レ之。十三年、又以二其孫女一妻二秀就一。秀就時爲二四位侍從一。十九年冬、徳川公攻二大坂一。留二二壻于江戶一。秀元因二水野忠元一、請曰「既辱二姻姫一、猶何見レ疑。願爲二先鋒一效レ力」許レ之。兵解歸レ國。元和元年夏、兵再起。秀元先二西道諸將一、至二大坂一。斬首三百級、有レ賞。秀就取二海道一、阻レ風後至。無レ罰。

訓讀 輝元既に秀元を養ひ、而して秀就及び就隆を生む。徳川氏、長門を秀元に分たんと欲す。秀元、之を辭し、退いて長府に居り、以て國政を攝す。會其の室卒す。徳川公、松平康元の女を養つて之に繼ぐ。十三年、又其の孫女を以て秀就に妻はす。秀就、時に四位の侍從たり。十九年冬、徳川公、大坂を攻む。二壻を江戶に留む。秀元、水野忠元に因り、請うて曰く「既に姻姫を辱うし、猶ほ何ぞ疑はるゝ。願はくは先鋒と爲りて力を效さん」と。之を許す。兵解けて國に歸る。元和元年夏、兵再び起る。秀元は西道の諸將に先だちて大坂に至る。斬首三百級、賞あり。秀就、海道を取り、風に阻まれ後れて至る。罰なし。

通釋 輝元はすでは秀元を養子にしたが、其の後秀就及び就隆を生んだ。徳川氏は長門を秀元に分けるように希望した。併し秀元は、之を辭退して長府に退居し、國政を秀就に代つてやつてゐた。丁度其の時秀元の内室が死んだ。徳川公家康は松平康元の娘を養女にして、秀元に與へて後妻とさせた。十三年又家康の孫娘を秀就に妻はせた。秀就は當時四位侍從であつた。十九年冬、徳川公が大坂を攻めた。その時秀元・秀就の二人の婿を江戸に留め置くことにした。秀元は水野忠元に頼んで、願ひ出ていふには「もう今となつては親類の間柄であるのに何故まだ疑つてゐられるのか。何卒先鋒となつて力を盡したいものです」と。そこで之を許した。其の内に戰爭が止んで國に歸つた。元和元年夏、又戰爭が起つた。秀元は西道の諸將に先き立つて、大坂に來た。敵の首を三百級も上げて御褒美を貰つた。秀就は海路から來たが風に邪魔され後れて着いた。併し罰はなかつた。

語釋 其室（豐臣氏。）○婣婭（婣は外戚、婭は兩壻相謂ふもの、あひ壻のこと。こゝでは親類といふ意に用ひたのである。）○元和（後水尾天皇の年號。）

寛永元年、秀元在江戸。輝元使使告之曰「我以二國新封、養十州舊臣。上下共困、不得給公役。念受封無益。欲返致二國。汝善計之、使我家不至滅亡」秀元大驚、因土井利勝、白之台徳公。公令秀元計之。秀元撿二國田、得七十八萬石。輝元聞之大喜。二年、輝元卒。次年、秀就爲左近衞少將。

訓讀 寛永元年、秀元、江戸に在り。輝元、使をして之に告げしめて曰く「我れ二國の新封を以て、十州の舊臣を養ふ。上下共に困しみ、公役に給するを得ず。念ふに封を受くるも益なし。二國を返致せんと欲す。汝善く

之を計り、我が家をして滅亡に至らざらしめよ」と。秀元、大に驚き、土井利勝に因つて、之を台德公に白す。公、秀元をして之を計らしむ。秀元、二國の田を撿し、七十八萬石を得たり。輝元、之を聞き大に喜ぶ。二年、輝元、卒す。次年、秀就、左近衞少將と爲る。

通釋　寬永元年、秀元は江戸にゐた。輝元は使者を立て、秀元に告げしめていふのに「余はこんど新に二國に封ぜられたが、併しその上り高で、昔十國を有つてゐた時代の家來を養つて行くのである。上下ともに困つてお上の仕事に勤めることが出來ぬ。これでは大名となつて居ても仕方がないと思ふ。だから防長の二國を返納したいと思つてゐる。お前はよく之を取計つて、よく大名を止めても我が家の絶えぬ樣にしろ」と。秀元は非常に驚いて土井利勝に賴んで之を台德公秀忠に申し上げた。公は秀元をして、二國の上り高を調べさせた。秀元は二國の田地を調べた所七十八萬石を調べ出した。國用が足らぬと思つてゐた輝元は、之を聞いて大に喜んだ。二年輝元は死んだ。その翌年秀就は左近衞少將となつた。

語釋　寬永（後陽成天皇の年號。）　○台德公（德川二代將軍。）

八年、秀元還政於秀就。大猷公曰「秀元成童爲外征元帥、門望皆隆。眞我老友也」數延與語。子孫仍居長府、食五萬石。就隆居周防德山、亦食五萬石。秀元次子元知、居長門淸末、食一萬石。豐臣氏質森高政、以森與毛利國音相近、遂冒毛利氏、居豐後佐伯、食六萬石。關原之役在大坂、削四萬石。此四家、與宗家皆存至今。宗家世任侍

從遷少將。而從四位下、大膳大夫、爲其常衡、襲廣元・元就故事也。吉川氏以存宗家之功、世食岩國六萬石。秀秋以內應之功、食備前・美作。松野主馬羞食其祿、去匿京師。無何、秀秋卒。無嗣國除。小早川氏遂不祀。

訓讀 八年、秀元、政を秀就に還す。大猷公曰く「秀元は成童にして外征の元帥となり、門望皆隆し。眞に我が老友なり」と。數延いて與に語る。子孫仍ほ長府に居りて、五萬石を食む。就隆は周防の德山に居りて、亦五萬石を食む。秀元の次子元知は、長門の清末に居りて、一萬石を食む。豐臣氏の質森高政、森と毛利と國語相近きを以て、遂に毛利氏を冒し、豐後の佐伯に居りて、六萬石を食む。關原の役には大坂に在り。四萬石を削らる。此の四家、宗家と皆存して今に至る。宗家は世侍從に任ぜられ、少將に遷る。而して從四位下、大膳大夫は其の常衡たり。廣元、元就の故事を襲ぐなり。吉川氏は宗家を存するの功を以て、世岩國六萬石を食む。秀秋は內應の功を以て、備前、美作を食む。松野主馬其の祿を食むを羞ぢ、去つて京師に匿る。何くもなく、秀秋卒す。嗣なく、國除かる。小早川氏遂に祀らず。

通釋 八年、秀元は攝政をやめて國政を秀就に還へした。大猷公家光がいふのに「秀元は十五歲の頃から朝鮮征伐の總大將になり、家柄人望皆高いものである。ほんとに余の老友である」と。度々延き入れて物語をした。その子孫は依然として長府に居て五萬石を領した。就隆は周防の德山に居つてこれも五萬石を領した。秀元の次男の元知は長門の清末に居つて一萬石を領した。豐臣家から來た人質の森高政は森と毛利とが日本の音で似通つ

て居るので遂に毛利の姓を冒し、豐後の佐伯に居て六萬石を領した。關原の戰爭では大坂に居つた。それが爲めに四萬石を削られた。この四家は本家の毛利氏と共に皆今日までも殘つて居る。本家は代々侍從に任ぜられ少將に遷ることになつてゐる。そして從四位下大膳大夫は世襲の位階である。これは廣元・元就の舊例を繼いだのである。吉川氏は廣家の計略で本家を保存した功によつて代々岩國の六萬石を領有した。秀秋は內通した功で備前・美作を領した。家老の松野主馬は裏切り主人の食祿を貰ふのを愧ぢて去つて京都に隱れた。幾もなく秀秋は死んだ。相繼人がなくて國は除かれた。小早川家は斷絕して、先祖の祀が出來なくなつた。

語釋　大猷公（德川三代將軍家光。）○成童（十五歲より二十歲までをいふ。）○老友（年の多い友達といふ意。）○存宗家之功（關ケ原の役で、東軍に附かせ、廣家が秀元に說いて本家を維持した功。）

○岩國（周防）

元春臨終遺書、戒輝元曰「往日吾兄弟並爲先鋒、推子爲元帥。今天下已有主矣。子愼勿自視如往日。隆景之將沒也、亦戒之曰「天下將亂。子第退守、勿進取。使我家有雄資如先君者、則可。否而爭權於天下、是自速禍也」。輝元忘二叔言、毛利氏以故削黜云。

元春、終に臨み遺書して、輝元を戒めて曰く「往日、吾が兄弟、並に先鋒と爲り、子を推して元帥と爲す。今、天下已に主あり。子、愼んで自ら視ること、往日の如くなる勿れ」と。隆景の將に沒せんとするや、亦之を戒めて曰く「天下將に亂れんとす。子、第だ退き守り、進み取ること勿れ。我が家をして、雄資先君の如きもの有ら

しめば則ち可なり。否らずして權を天下に爭ふは、是れ自ら禍を速くなり」と。輝元、二叔の言を忘る。毛利氏、故を以て削黜せらると云ふ。

【通釋】吉川元春は臨終の時に書置して、輝元を戒めていふのに「昔吾が兄弟は肩を揃へて先鋒となつて、貴公を推して總大將とした。今や天下には既に主る者がゐる。貴公は愼んで昔のやうな積りで居てはなりませぬぞ」と。又隆景が死ぬる時にも亦輝元を戒めていふのに「天下には亂が起らうとして居る。貴公は唯だ退いて本領を守つてゐて、決して進んで取らうなどゝ思つてはなりませぬぞ。我が家にすぐれたる天資父君（元就）の樣な人が出て來ればそれは進み取つても宜い。併しさうでなくて權を天下に爭へば、それだけ自ら禍を招くことになりますぞ」と。輝元はこの二人の叔父の言葉を忘れて終つた。だから毛利氏は地を削り取られ罪せられるやうになつたのである。

【餘論】本論には毛利氏が陶氏を伐ち朝貢を怠らなかつたことは皆大義に合つてゐるので、それが毛利氏の大をなさしめ、又子孫に至るまで屹然たる所以であることを叙べてあるのである。

外氏史曰、余安藝人也。俯仰其都邑城池、輒懷毛利氏盛時、毎觀嚴島、亦未嘗不想見元就之鏖賊也。

【訓讀】外史氏曰く、余は安藝の人なり。其の都邑城池を俯仰し、輒ち毛利氏の盛時を懷ふ。嚴島を觀る毎に、亦未だ嘗て元就の賊を鏖にせしを想見せずんばあらざるなり。

通釋　外史氏が曰ふのに余は安藝の人間である。安藝の都邑や城や壕を眺め見る度にいつでも、毛利氏が盛んであつた時のことを思ひ起すのである。嚴島を見物に行くごとに矢張り元就が賊陶晴賢を皆殺にした當時のことを想像しないことはないのである。

餘論　以上第一段、本論の端緒を開く。

夫室町之時、天下紛紛、日事兵爭、如群兒鬪暗中、喧呶毆擊、一仆一起、誰知其曲直。孟子所謂無義戰者、是已。唯元就之於陶賊、與北條早雲之於堀越、羽柴秀吉之於明智、其事皆可稱道。故其功效皆致如此。而元就最其難者也。

訓讀　夫れ室町の時、天下紛紛、日に兵爭を事とし、群兒の暗中に鬪ふが如く、喧呶毆擊、一仆一起、誰か其の曲直を知らん。孟子の所謂義戰なしとは、是れのみ。唯だ元就の陶賊に於ける、北條早雲の堀越に於ける、羽柴秀吉の明智に於けると、其の事皆稱道すべし。故に其の功效皆此くの如きを致す。而して元就は最も其の難きものなり。

通釋　一體室町時代は天下紛々として亂れ、日々の仕事は戰爭であつて、まるで大勢の小供が闇の中で喧嘩でもやつてるかのやうなもので、があ／＼騒いでなぐり合ひをやり、仆れるのがあるかと思ふと、起つのがあるといふ譯でどちらが善いのか惡いのか分つたものでなかつたのである。孟子の所謂春秋には義戰といふものが無かつたといつたが、全く其の通りであつた。たゞ元就が主殺しの賊陶氏をやつゝけたのと、北條早雲が親殺し堀越

の茶々丸を誅したことと、羽柴秀吉が主殺し明智光秀を誅したことゝは皆義戰であつて、これはたしかに褒め立てゝ宜いことである。だからその效果は大したもので皆今日から見るがやうに、三人は三人共立派に仕上げて出世したのである。そして三人の中でも元就が一番やり難くかつたのであつた。

語釋　室町之時（足利將軍京師に居つて政治した時代をいふ。）○孟子（盡心篇に出づ。）○於堀越（政知を弑した事前出。）

夫亂臣賊子、人得討之。然戰國之俗、唯見利而不聞義。如陶賊之事、四隣牧伯、熟視莫敢齟齬。甚至相率歸之、以爲倚賴。獨元就以微力圖誅討、而又請之天子、名正言順。義旗所指、無堅不破。如掲炬暗室、衆目駭觀。足以伸大義於天下、使天下響應歸之。而何十三州之足圖也哉、

訓讀　夫れ亂臣賊子は、人、之を討つを得。然れども戰國の俗、唯だ利を見て義を聞かず。陶賊の事の如き、四隣の牧伯、熟視して、敢て齟齬するなし。甚だしきは相率ゐて之に歸し、以て倚賴を爲すに至る。獨り元就、微力を以て誅討を圖り、而して又之を天子に請ふ。名正しく言順ふ。義旗の指す所、堅破れざるはなし。炬を暗室に掲ぐるが如く、衆目駭き觀る。以て大義を天下に伸べ、天下をして響應して、之に歸せしむるに足る。而して何ぞ十三州を之れ圖るに足らんや。

通釋　一體、亂臣賊子は誰だつて之を征伐することが出來る。併し戰國時代の風俗では唯だ自分の利ばかり考へて義理といふものを知らなかつた。陶賊の一件でも四方鄰國の大名などはぢつと見守つて居て、誰れこそ之に

逆つて非難するものとてなかつた。ひどいのになると、相率ゐて陶賊に從ひ、之をたのみとする奴まで出るに至つた。所がたゞ元就だけは僅な力で以て之を責め討たうと圖り、その上これを天子樣にお願ひ申した。勅命で逆賊を討つのであるから、名義は正しく、その言ふことも道理に協つてゐる。正義の旗の向ふところにはどんなに堅い城でも破れないものはないのである。それは丁度松明を暗室の中に揭げたやうなもので多勢の人の目はたゞ駭き觀ましたものである。だから元就のやつた事は大義を天下に伸べ擴げて、天下の者をして、聲の響に應ずるがやうに、之に歸せしむるに十分であつたのである。元就は山陰山陽の十三州を取つたが、それ位のことは何でもない事で、この義を以てすれば誠に圖り易いのである。

【語釋】亂臣賊子（臣にして其の君を弑する者は亂臣、子にして其の父を弑する者が賊子。）○牧伯（大名のこと。）

【餘論】以上第二段、三義戰を述べて、元就が義戰無きの時に義戰をしたことを叙せられてゐる。

大凡英雄成事、皆以爲其智略所致。而其事之合義、有能服人心者、而不自知也。後之追論者、亦徒視其成敗、謂盡成於其智慮、而不知天下之事有出智慮所不及。況當夫危疑之際、機會之來、間不容髮。苟以區區計算要之萬全、吾見其終身而不及事耳。故彼治世之論、不可以揣亂世英雄也。吾論元就、不言其智略、而言其果斷、不言其果斷、而言其事之合義。至於請之天子、又義之大者矣。且觀其效貢賦、助擧朝

儀、則チ存スルチ心ニ王室ニ、非ザル二一日ニ也。

【訓讀】大凡そ英雄の事を成す、皆以て其の智略の致す所と爲す。而して其の事の義に合ふこと、能く人心を服するものありしは、自ら知らざるなり。後の追論する者も、亦徒に其の成敗を視て、盡く其の智慮に成ると謂ひ、天下の事、智慮の及ばざる所に出づるあるを知らず。況んや夫の危疑の際に當り、機會の來る、間、髮を容れず。苟も區區の計算を以て、之が萬全を要するは、吾れ其の身を終るまで事に及ばざるを見るのみ。故に彼の治世の論は、以て亂世の英雄を揣る可からざるなり。吾れ元就を論ずるに、其の智略を言はずして、其の果斷を云ひ、其の果斷を言はずして、其の事の義に合ふを云ふ。之を天子に請ふに至つては、又義の大なる者なり。且つ其の貢賦を效して、朝儀を助擧するを觀れば、則ち心を王室に存する、一日に非ざるなり。

【通釋】大凡そ英雄が事業をすると、大抵の者は皆その英雄の智惠才略によつて其の事業が爲し遂げられたやうに思ひ込む。その事業が義に合つて人心を服從させるだけの者があつたことには氣がつかないのである。後世から遡つて之を論ずる者も矢張り唯だ、その成功失敗の結果だけを見て判斷し、皆その英雄の智慮から出來たもの〻やうに思ふが、併し天下の事業はその智惠の屆かぬ處から出來るもの〻あることには氣がつかないのである。斯樣に事業といふものは、中々智慮の屆かぬ所から出來るものであるが、まして(次のやうな場合には猶ほ更ら知慮が屆かぬのである) 如何したものだらうと危み疑つてゐる場合に、急に善い機會が來て、乾坤一擲の仕事をするといふやうなことはそれこそ毛筋一本も入れることの出來ない程間隙のない急切な場合である。(さういふ場合には知慮は屆かぬ)それを若し細い計算で見積つて少しも仕損じのないやうに萬々安全なる策を求めて見た所で、

それでは一生何をやつても事業にならぬことは分り切つてゐるのである。だから太平の御代の議論では亂世の英雄の心事を量り知ることは出來ない。余は元就を論ずるのに、その智略を言はないで、その果斷のあつたことをいひ、その果斷のあつたことよりもその事業が義に合つてゐたことをいふのである。征伐のお許しを天子様にお願ひ申した事は、又義理の大なる者である。その上貢物を獻上して朝廷の御儀式をお手傳ひ申したこと抔を見ると、元就が皇室に心を存して天皇を尊んだことは昨日今日のことでなかつたのである。

【餘論】以上第三段、元就の義に合つてゐたことを詳論して之を賞揚されてゐる。

昔者、孫堅以英傑之姿、志嚮漢室、奮討强賊、出身不顧。又有策・權之子。遂能據有江東。以魏武之勢、而不能取焉。毛利氏以關西抗織田氏、庶幾類之矣。元春之善戰也類策、而隆景之善謀也類權。皆絕人之才、而戮力協心、臣事輝元、使之不失舊業。是其義最爲不可及焉。輝元雖無孫皓之虐、而不量力度德、而爭衡於中原。宜乎、其削弱也。然其封土屹然、猶雄西陲者、豈非由元就父子之高義哉。

【口譯】昔者、孫堅、英傑の姿を以て、志、漢室に嚮ひ、奮つて强賊を討ち、身を出だして顧みず。又策・權の子あり。遂に能く江東に據有す。魏武の勢を以てして、取る能はず。毛利氏の關西を以て織田氏に抗するは、之に類するに庶幾し。元春の善く戰ふは策に類し、而して隆景の善く謀るは權に類す。皆絕人の才にして、力を

戮せ心を協へ、輝元に臣事し、之をして舊業を失はざらしむ。是れ其の義最も及ぶべからずと爲す。輝元、孫皓の虐なしと雖も、而れども力を量り德を度らずして、衡を中原に爭ふ。宜なるかな、其の削弱せらるるや。然れども其の封土、屹然として、猶ほ西陲に雄たるは、豈に元就父子の高義に由るに非ずや。

【通釋】昔孫堅は、勝れた生れつきの人で、其の志は漢の皇室を助けようと思ひ常に皇室に心を向け、奮起して董卓などといふ賊を討ち、我が身を投げ出して一向顧みなかつたのであつた。その上に彼には、孫策・孫權といふ勝れた子があつた。遂によく揚子江の東を占有してそこに立て籠つた。魏の武帝程の強い勢の者でも之を取ることは出來なかつた。毛利氏が關西を率ゐて織田氏に抵抗したのは餘程之と似て居るやうである。元春の戰上手は孫策に似て居り、隆景の善く謀ることは孫權に似てゐる。皆人より甚だしく勝れた才能であつて、而もそれが力を合せ、心を一つにして、輝元に臣として事へ、輝元が元就の舊業を失はないやうにせしめた。これは慥かに其の義の高くて、人の最も及ぶことの出來ない點である。輝元は孫皓のやつたやうな暴虐はしなかつたが而し自分の力を量り德を度るといふことをしないで、柄にもない中原で强弱を爭ふがやうな事を仕出來した。彼がその土地を削られ勢力を弱められたのは尤もな話ではある。けれどもその領土はきつとして今日迄西國の邊陲に雄長となつてゐるのは、元就親子の立派な正義に由るのではあるまいか。

【語釋】江東（今の南京の地方で、吳の地。）○魏武（魏の曹操。）○孫皓（孫權の玄孫、吳主となつて暴虐無道で吳を滅した男である。）

【餘論】以上第四段、毛利父子は漢土の孫堅父子に似たることを述べ、その高義が子孫にまで餘慶を貽したことを言ひて本論を終結されてゐる。

日本外史新釋卷十二終

日本外史新釋 卷十二

德川氏前記

織田氏 上

【敍說】本論は、封建の勢は源氏から始り、足利氏に成り、織田、豐臣の二氏を經て、德川に至つて出來上つたものであることを論じたのである。

外史氏曰、封建之成勢於我邦也、其來遠矣。在昔王家、郡縣七道、治以守介、田以口分、四徵租調、而朝之職位皆有田、有食封、有功田。其食封、多者不過三千戶、功田四等、世襲之者、止於大功。當是時、未有封建之勢也。

【訓讀】外史氏曰く、封建の勢を我が邦に成すや、其の來ること遠し。在昔、王家、七道を郡縣にし、治むる

に守介を以てし、田は口分を以てし、租調を四徴す。而して朝の職位、皆田有り、食封有り、功田有り。其の食封多き者も三千戸に過ぎず。功田、四等にして、之を世襲する者は、大功に止る。此の時に當り、未だ封建の勢有らざるなり。

通釋 外史氏が曰ふのに、封建制度が我が國で一般の大勢となつたのは、その由つて來るところは隨分久しいものである。昔は皇室に於かれては、七道を郡縣にせられ、守介といふ役人を置いて之を治めしめられ、田地は一戸の人數によつて分ち與へられ、租と調とを四方からお取り立てになつた。そして朝廷の官職位階に應じて職田があり、位田があり、又戸數で下さる食封があり、功勞によつて下さる功田があつた。その食封は多いのでも三千戸は越えなかつた。功田は四段階になつてゐていつまでも世襲することの出來たのは大功田だけであつたのである。だからこの當時にはまだ封建といふ大勢にはなつてゐなかつたのである。

語釋 封建（土地人民を與へて諸侯を建てること。）○勢（成り行き。）○郡縣（中央政府から派遣した長官によつて治めさせる制度、郡と縣とに分けて秦の始皇が始めた。）○七道（東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海。）○田以二口分一（男は二段、女は三分の一を減じた。六年毎に調べて改定した。）○租調（は田地からの年貢を租といひ、戸數割の税が調。調は綿帛等、その土宜によつて納入するのである。）○職位皆有レ田（職田は、太政大臣は四十町、左右大臣は三十町、大納言は二十町。位田は一品正一位は八十町、二品正二位は六十町の類。）○食封（これはその土地の田地、戸數を以て與へるもの、太政大臣は三千戸、左右大臣は二千戸、大納言は八百戸といつた類。）○功田（大功田は世襲、上功は三世、中功は二世、下功は子に傳へるだけ。）

餘論 以上第一段、封建の勢が、まだ無かつた時に就いて論ず。

自二相門世一レ權、所在封戸日多、不輸之地、不課之民、半二於天下一。後三條帝欲レ矯二其弊一、而不レ能レ遂。自レ是以後、各國之莊園、居二其十九一、守介所レ治僅二一焉。甚則國司終不レ赴レ任、而權

延其地方豪族武人以自代、謂之目代、而至源氏起、國司置守護、莊園置地頭、分領糧粟、以備盜賊、則嚮所謂目代之類者、碁峙六十州。而封建之勢始矣。

訓讀 相門、權を世にせしより、所在の封戸日に多く、不輸の地、不課の民、天下に半ばす。後三條帝、其の弊を矯めんと欲して、遂ぐる能はず。是より以後、各國の莊園、其の十の九に居り、守介の治むる所は僅に一のみ。甚だしきは則ち國司、終に任に赴かずして、權に其の地方の豪族、武人を延いて、以て自ら代らしめ、之を目代と謂ふ。而して源氏起るに至り、國司に守護を置き、莊園に地頭を置き、糧粟を分領し、以て盜賊に備ふ。則ち嚮に所謂目代の類の者、六十州に碁峙す。而して封建の勢始まる。

通釋 藤原氏が政治上の權力を代々自由にするやうになつてから到る處封戸が日に〳〵多くなつて來て、租調を出さぬ土地、夫役を勤めぬ人民が天下に半ばする位になつた。後三條天皇はこの弊害を矯め治さうとされたけれども、それは成し遂げられなかつた。これから後は各國の莊園は、其の國の十分の九位を占めるやうになつて守介が治めてゐる土地は、其の國のわづかに十分の一に過ぎなかつたのである。ひどいのになると國司は終ひまで其の任國に行かないで、臨時にその地方の豪族や武人を呼び出して自分の代理をさせ、之を目代といつてゐた。そして源氏が起つてからは國司(朝廷の直轄地)には守護を置き、莊園には地頭を置き、守護は朝廷へ納める米を、地頭は源氏の取り上げる米をそれ〴〵分け取つて盜賊に備へてゐた。そんなことで前述の目代の類が六十州に碁石のやうにならび立つてゐた。かくて封建の形勢といふものが崩し始めて來たのであつた。

語釋 莊園(臣民の所領で官地に非るもの。)

【餘論】以上第二段、源氏に至つて始めて封建の崩したことを論ず。

北條氏因其遺制、守護之任、猶得考課易置、如古之國司。然往往因襲、傳之子孫、漸成封建之勢。而至建武中興之時、朝廷欲以特恩收武臣之心、以新田・足利諸族、充諸國守護。概以一姓連二三州。雖名爲守護、其實封建之也。及足利氏叛、奪其成績、而與之其子弟功臣、仍稱守護、而世襲之。土地兵馬、儼然諸侯。而封建之勢成矣。

【譯義】北條氏、其の遺制に因つて、守護の任、猶ほ考課易置すること、古の國司の如くするを得たり。然れども往往因襲して、之を子孫に傳へ、漸く封建の勢を成す。而して建武中興の時に至り、朝廷、特恩を以て武臣の心を收めんと欲し、新田・足利の諸族を以て、諸國の守護に充つ。概ね一姓を以て二三州に連ね、名は守護たりと雖も、其の實は之を封建するなり。足利氏叛くに及び、其の成績を奪ひて、之を其の子弟功臣に與へ、仍ほ守護と稱して、之を世襲せしむ。土地、兵馬、儼然たる諸侯なり。而して封建の勢成る。

【通釋】北條氏の時代には源氏の遺制に從つて守護の任にある者は世襲と定まつてゐず、其の功を調べて職を與へ、その適否によつて易へたり、そのまゝ使つたりしたもので、それは恰度昔の國司を朝廷で置きかへられたやうであつた。併しどうかするとその儘之を子孫に傳へたりすることがあつて、だん／＼封建の勢を形成するやうになつた。建武中興の時になつて、朝廷では格別な恩惠を垂れて武臣の心を引きつけようとなされ、新田・足利の諸族をば諸國の守護の任に充てがはれた。大抵一家で二三ケ國を連ねて領有し、名前は守護であつたけれども、

その實は地を割いて之を諸侯に封じたと同じであつた。足利氏が謀叛を仕出來してから後は、足利が天皇建武御中興の御功績を奪つて終ひ、勝手に天皇の土地を自分の子弟や、功臣に與へ、依然として守護と稱してゐたが、併し代々之を子孫に襲がせてゐた。だからその有様は土地兵馬の權を握つてゐて、立派な諸侯であつた。かくて封建の大勢はすつかり出來上つて終つたのである。

【語釋】遺制（のこつてゐる制度。）○建武中興（後醍醐天皇の北條氏を滅された時をいふ。）○連二三州（新田義貞は上野・播磨、楠正成は攝津・河內、名和長年は伯耆・因幡、足利高氏は武藏・常陸・下總。）○奪其成績（中興の功績を横取りすること。）○子弟功臣（子弟は基氏の類、功臣は佐々木高氏・足利高經の類。）

【餘論】以上第三段、足利氏に至つて封建の勢の成つたことを論ず。

足利氏初務以大封啗將士、得以撓朝廷之權。既得天下、而勢不可削。及其政既衰、其權臣構難京師、而所謂諸侯、群起爲之黨援、又互相吞滅、益成強大、而最後織田氏以其陪臣、崛起而幷之。部下皆一時英豪、攻擊四出、取城略地者、因而賞之。其志在於盡鋤天下故國、而以其功臣代之。未成而踣。而豐臣氏以其將校踵起、見織田氏所志甚難、而不成也。是以舊國之降附者、存而撫之、大者或蟠踞八九州、而不加殺削。是以得速致於混一。而沒而未幾、海內分崩。

【訓讀】足利氏、初め務めて大封を以て將士に啗はし、以て朝廷の權を撓むるを得たり。既に天下を得て、勢削

る可からず。其の政、既に衰ふるに及び、其の權臣、難を京師に構へ、所謂諸侯、群起して之が黨援を爲し、又互に相呑滅し、益強大を成す。而して最後に、織田氏、其の陪臣を以て、崛起して之を幷す。部下は皆一時の英豪、攻擊四出し、城を取り地を略する者は、因つて之を賞す。其の志は盡く天下の故國を鋤して、其の功臣を以て之に代ふるに在り。未だ成らずして踣る。而して豐臣氏、其の將校を以て踵ぎ起り、織田氏の志す所、甚だ難くして成らざるを見る。是を以て、舊國の降附する者は、存して之を撫し、大なる者、或は八九州に蟠踞するも、而も殺削を加へず。是を以て速に混一を致すを得たり。而れども沒して未だ幾ならずして、海内分崩す。

通釋 足利氏は初め出來るだけ大きな領地を將士に與へ（機嫌を取つたのである）、それで以て朝廷の權力を撓めることが出來た。所が天下を取つて終つてから、彼等の勢は強くなつて、今更ら削ることも出來なくなつた。足利氏の政治が衰へて終つてからは權臣共（山名・細川）が京都で攻め合ふやうになつて、所謂諸侯どもが群り起つて二氏に結びつき、之を援け、又互に倂呑し合ひ滅し合ひなどして諸侯が益強大になつた。そして最後に織田氏は足利氏の又家來の身分で、むつくりはね起つて、これ等の諸侯を倂せ取つた。その部下の大將侍は何れも當時の豪傑であつて、四方に出て攻擊したもので、城を取り土地を取り掠めた者にはその功に因つて土地を與へて賞した。織田氏の志は從來の天下の舊い國を根こそぎ鋤き除いて自分の功臣と置き代へる積りであつた。併し出來上らないで織田氏は倒れて終つた。そして豐臣氏が織田氏の將校の身分から繼いで起り、織田氏の志してゐたことは迚も容易な業でなく到底出來ないことと見越した。だから舊い諸侯で降參して自分に屬くものは、其の儘存在を許し、之を慰撫し、その大きい者（毛利・上杉）となると八九個國にも跨つて領地を持つてゐたものも

あつたが併しそれを殺ぎ削ることもしなかつた。だから豊臣氏は早く天下を統一することが出來たのである。併し豊臣氏も秀吉が死んで間もなく、天下は分れ、崩れて終つた。

【語釋】以大封啗（赤松則村に三大莊を與へた如き類。）○陪臣（織田氏は足利氏の臣斯波氏の臣。）○舊國（毛利・上杉・島津等。）○混一（混じて一つに纏めること。）

【餘論】以上第四段、織田豊臣の二氏は封建の弊害をうまく裁くことが出來なかつたことを論ず。

由此觀之、封建之勢、始於源氏、而成於足利氏。足利氏未享其利、而不勝其弊。織田・豊臣承其弊、而不知裁之之術。蓋皆有待於我德川氏也。

【訓讀】此に由つて之を觀れば、封建の勢は、源氏に始りて、足利氏に成る。足利氏未だ其の利を享けず、而して其の弊に勝へず。織田・豊臣、其の弊を承けて、之を裁するの術を知らず。蓋し皆我が德川氏に待つ有るなり。

【通釋】以上のことから觀察すれば封建の勢は源氏時代に始まつて、足利氏に出來上つたものである。併し足利氏はまだ封建の利を受けず、却つて其の弊害に堪へ切れなかつた。織田・豊臣の二氏は其の弊害を受けついで、之をどういふ風に處理していゝのかその手段を知らなかつたのである。思ふに足利・織田・豊臣は皆我が德川を待つて始めて封建に對する處置が完成されたものと言へよう。

【餘論】以上第五段、上段と後段との關鍵になる所。德川氏の封建について說き起す端緒を發す。

夫有外諸侯、有内功臣。内功臣之封、不能抗外諸侯。然後足以親戴衞護其内、而折衝禦侮其外。否則功臣亦與諸侯等耳。無戴我之心、而有爭我之意。是織田氏所以

被禍也。雖能存外諸侯、而不知斷長補短、使勢力略敵、又不知大封宗族、據其扼塞、犬牙相制、以鎭壓其邪心。是豐臣氏所以絶嗣也。織田氏、唯難於取之。故重於分之。豐臣氏、唯易於取之。故輕於分之。輕之與重之、其情雖異、其不能收天下英雄之心一耳。故曰、二氏承封建之弊、而不知裁之之術也。

訓讀　夫れ外諸侯有り、內功臣有り。內功臣の封は、外諸侯に抗する能はず。然る後、以て其の內を親戴衞護して、其の外を折衝禦侮するに足る。否らざれば則ち功臣も亦、諸侯と等しきのみ。我を戴くの心無くして、我に爭ふの意有り。是れ織田氏の禍を被る所以なり。能く外諸侯を存すと雖も、而も長を斷ち短を補ひ、勢力をして略敵せしむるを知らず。又大に宗族を封じ、其の扼塞に據らしめ、犬牙相制し以て其の邪心を鎭壓するを知らず。是れ豐臣氏の嗣を絶つ所以なり。織田氏は唯だ之を取るに難し。故に之を分つに重んず。豐臣氏は唯だ之を取るに易し。故に之を分つに輕んず。之を輕んずると之を重んずると、其の情異なりと雖も、其の天下英雄の心を收むる能はざるは一のみ。故に曰く、二氏は封建の弊を承けて、之を裁するの術を知らざるなりと。

通釋　さて封建の諸侯には外樣大名もあるし譜代大名もある。譜代大名の領地は小さくて、外樣大名に匹敵することは出來ぬ。併し、さうあつてこそはじめて譜代の者がその君を親み戴き、其の君を守護し、外敵の衝突を折き、外敵の輕侮を禦ぎ得るのである。もし譜代を大諸侯とすれば、譜代も亦外樣大名と全く同じやうになつて終ふ。結局主君を戴く心がなくなり、一歩進んでは主君と爭ふ心を生ずるものである。これが織田氏の禍を被

つた譯なのである。豐臣氏になつてから、よく外樣大名を殘しては置いたが、その大領分を削つて譜代の小領分に補ひ足してやり、この兩者の勢力が大體釣り合ひの取れる位にするといふことを爲さなかつた。又大に一族を封じて要害な所に據らしめ、外樣と外樣との間に喰ひ込ませて置いて互に相牽制させ、その野心を押し鎭めるやうにすることも爲さなかつた。これが豐臣氏の滅亡して、子孫を斷つに至つた譯なのである。織田氏は之を取ることが困難であつた。だから之を人に頒け與へることを容易にしなかつた。之と反對に豐臣氏は之を取るのに容易であつた。だから之を人に頒つことを何とも思はなかつたのである。之を輕んずるのと、之を重んずるのとでは、その心が全く違つてゐたけれども、どちらも天下の英雄豪傑の心を收攬することの出來なかつた點に至ると、全然同一である。だから自分は前に「二氏は封建の弊害を受けついで之をどういふ風に處理していゝのかその手段を知らなかつたのである」と曰つた譯である。

語釋 使勢力略敵（大概に於て匹敵するやうにする。）〇犬牙相制（國境の入れ違ひになる樣が恰度犬の牙の入れ違ひになるやうなのである。）

餘論 以上第六段、織豐二氏の封建を失つた譯を論ず。

至我德川氏、鑑二氏之失而秉其衷、矯之以漸、權其內外輕重之際、以維持於萬世。封建之勢、於是一定而不可復撼焉。唐柳宗元論封建曰「勢也」余曰「封建勢也、制勢人也」彼生郡縣之世、而揣利弊於千載之上。使其目我邦之今日、以爲何如哉。

訓讀 我が德川氏に至りては、二氏の失に鑑みて、其の衷を秉り、之を矯むるに漸を以てし、其の內外・輕重

の際を權り、以て萬世に維持す。封建の勢、是に於て一定して復撼すべからず。唐の柳宗元、封建を論じて曰く、「勢なり」と。余曰く「封建は勢なり、勢を制するは、人なり」と。彼れ郡縣の世に生れ、而して利弊を千載の上に揣る。其をして我が邦の今日を目せしめば、以て如何と爲すや。

通釋 わが德川氏となると織田・豐臣二氏の失敗を考へて其の中庸の所、宜い加減の所を取り惡い所は次第々々に之を矯め直ほし、その內功臣、外諸侯の重さを秤にかけて釣り合ひを取り、萬代後までも維持出來るやうにした。封建の勢は德川氏になつて一定し、もう動かすことの出來ぬものとなつたのである。唐の柳宗元が封建を論じて曰ふのに「封建は自然の勢である」と。余は「慥かに封建は自然の勢であるが、その勢を切り盛りしたのは人である」といふ。柳宗元は唐代郡縣の世に生れて、封建の利益弊害を千年昔の時代に溯つて論じたのである。若し彼をして我が日本の今日の樣子を見させたならば何と言ふであらうか。屹度感心することだらう。

語釋 柳宗元（唐の人。唐宋八大家の一人。文章復古で有名な人。封建論を著した。唐宋八大家文讀本の卷七に見えてゐる。封建は聖人の意でないと論じてゐる。）

餘論 以上、第七段、德川氏が巧みに封建を確定したことを叙べ、柳子厚を捉へ來つて其の美を增すのである。

蓋德川氏之致太平、雖由參遠勳舊之力、而新附將帥之功與焉。今之外藩列國、成邦於足利氏以前者、如島津・佐竹・伊達・上杉・毛利・鍋島、是已。其餘皆由二氏興家者、雖慶長庚子以後、定賜封土、與之更始、而猶彼漢侯王之於陳項、唐將相之於周隋。不原其前代、其建置本末不可得而詳也。余故先叙二氏、而論其勢之所從來如此。

【訓讀】 蓋し徳川氏の太平を致すは、參遠勳舊の力に由ると雖も、而れども新附將帥の功與る。今の外藩列國、邦を足利氏以前に成す者は、島津・佐竹・伊達・上杉・毛利・鍋島の如き、是れのみ。其の餘は、皆二氏に由り家を興す者、慶長庚子以後、封土を定賜し、之と更始すと雖も、而も猶ほ彼の漢の侯王の陳項に於ける、唐の將相の周隋に於けるがごとし。其の前代に原づかざれば、其の建置本末、得て詳にすべからざるなり。余、故に先づ二氏を叙じて、其の勢の從來する所を論ずること此くの如し。

【通釋】 思ふに徳川氏が太平を致したのは、參河遠江(徳川氏の舊國)の勳功ある舊臣の力に由つたのであるけれども、一面には新たに附き從つた將帥の功も關係してゐる。今日の外樣列藩の中で足利氏以前から國を形成してゐた者は、島津・佐竹・伊達・上杉・毛利・鍋島などの如きものである。その外の諸侯共は皆織田・豐臣の二氏に從つて家を興したので、慶長五年(關ケ原戰役)以後領地を定めて貰つて、島津等の舊國と同じやうに新規に國を始めたのであるが、併しそれ等の諸侯と徳川氏との關係は恰度彼の漢代の諸侯王が陳渉・項羽に對するやうであり、又唐代の大將宰相が周・隋に對するやうな關係にあつたのである。(漢代に諸侯王となつた者はその以前陳渉項羽に從つて身を起したもの、それを漢王がそのまゝ用ひて諸侯王となしたのである。又唐の將相も周や隋に從つてゐたものを、そのまゝ用ひて將相としたのである。だから同じやうな關係にある)だから徳川氏が諸侯を建てて封建制度を確定したことを知らうとするのには、どうしてもその前の時代のことを尋ねて見なければ容易にその本末を明白にすることは出來ない。だから余は徳川氏に先き立つて織田・豐臣二氏の事を叙べ、そして封建の勢の因つて來るところを以上のやうに論じた譯である。

【餘論】 以上第八段、織豐二氏の傳を徳川氏の傳の前に置かねばならぬ理由と、封建の勢を論じた理由とを叙

べてある。

織田氏、出於平重盛。重盛次子曰資盛。元暦中、平氏與源氏戰于西海、大敗、擧族死亡。資盛有孤兒。其母懷之、匿于近江津田郷。郷長悅其母色、納之。兒從育其家。會越前織田莊祝人數入京師、每過郷長宿焉。嘗謂之曰「吾老無子。願得公一子養之」。郷長乃與以平氏孤兒。兒終冒織田氏、名親眞、稱權大夫。子孫世爲祝人。及足利氏定天下、越前・尾張爲斯波氏管國。斯波義重嘗出遊、見織田祝人之子、美之、載歸、以爲近臣。

【訓讀】織田氏は、平重盛より出づ。重盛の次子を資盛と曰ふ。元暦中、平氏、源氏と西海に戰ひ大に敗れ、擧族死亡す。資盛、孤兒有り。其の母、之を懷にして、近江の津田郷に匿る。郷長、其の母の色を悅び、之を納る。兒、從つて其の家に育はる。越前織田莊の祝人、數京師に入り、每に郷長に過り宿するに會ふ。嘗て之に謂つて曰く「吾れ老いて子無し。願はくは公の一子を得て之を養はん」と。郷長乃ち與ふるに平氏の孤兒を以てす。兒、終に織田氏を冒し、親眞と名づけ、權大夫と稱す。子孫、世祝人たり。足利氏天下を定むるに及び、越前・尾張、斯波氏の管國と爲る。斯波義重、嘗て出遊し、織田祝人の子を見て、之を美とし、載せ歸り、以て

近臣と爲す。

【通釋】織田氏は平重盛から出てゐる。重盛の次男を資盛といつた。元暦中、平氏は源氏と西海で戰ひ、大に敗れ、一族の者は死んで終つた。所が資盛に孤兒があつた。其の孤兒の母が之を懷に抱いて近江の津田村に隱れた。村の庄屋はその母の標致のいゝのが氣に入つて、之を納れて妻とした。從つてその兒も母に從つて其の家で養育せられた。越前織田莊の神官が度々京都に上るとき、いつもこの庄屋の家を尋ねて其處に泊めて貰つてゐたが、ある時いつものやうにその神官が庄屋の所にやつて來た。そして庄屋に向つていふには「私は年を取つても子がありませぬ。何卒貴公の御子息を一人貰ひ受けて、之を養ひたいものです」と。そこで庄屋は平家の孤兒を與へた。その兒は終に織田氏を名乘り、親眞と名づけ權大夫と稱し、子孫は代々神職となつて居た。足利氏が天下を平定するに及んで越前・尾張は斯波氏の管轄内の國となつた。斯波義重はある時出でて遊び、織田の神官の倅を見てその容貌が美しいとて一緒につれ歸つてお小姓にした。

【語釋】元暦（鳥羽天皇の年號。）

義重有大吏六人。其一人有罪放流。乃以織田氏代之。於是、織田氏終爲斯波氏重臣、從於尾張。自親眞而後十五世、曰敏定。敏定之時、斯波義敏、與族義廉爭立。敏定居間講和、請義敏養義廉子義良、而自輔之、居清洲城。尾張凡八郡、分爲上下、各四郡。敏定領下四郡、使族信安居岩倉城、領上四郡。敏定生敏信、敏信生常祐、相繼居

清洲。敏定庶子信定、稱彈正忠。信定子曰信秀、稱備後守。信秀以支庶降居勝幡城、與族二人竝爲宗家吏、分治四郡。信秀嗜武喜士、士多歸之。

【訓読】義重、大吏六人有り。其の一人、罪ありて放流せらる。乃ち織田氏を以て之に代ふ。是に於て、織田氏終に斯波氏の重臣と爲り、尾張に徙る。親眞より後十五世を、敏定と曰ふ。敏定の時、斯波義敏、族義廉と立つを爭ふ。敏定、間に居りて講和し、義敏に請うて、義廉の子義良を養はしめ、而して自ら之を輔け、清洲城に居る。尾張凡そ八郡、分ちて上下と爲し、各四郡なり。敏定、下四郡を領し、族信安をして岩倉城に居りて、上四郡を領せしむ。敏定、敏信を生み、敏信、常祐を生む。相繼いで清洲に居る。敏定の庶子信定、彈正忠と稱す。信定の子を信秀と曰ひ、備後守と稱す。信秀、支庶を以て、降つて勝幡城に居り、族二人と竝に宗家の吏と爲り、分ちて四郡を治む。信秀、武を嗜み士を喜び、士多く之に歸す。

【通釋】義重には重い役人が六人あつた。その一人が罪あつて追放せられた。そこで織田氏をそれに代らせ後任とした。これより織田氏は終に斯波氏の重臣となつて尾張に移つた。親眞から十五代目を敏定といつた。敏定の時代に斯波義敏は一族の義廉と相續を爭つたことがある。敏定は仲裁に入つて和睦させ、義敏に頼んで義廉の子義良を養子にさせ自ら其の輔佐をして清洲城に居つた。尾張は皆で八郡あつたのを分けて上下各四郡となし、敏定は下の四郡をあづかり領し一族の信安をして、岩倉城に居らせ、上の四郡をあづかり領せしめた。敏定は敏信を生み、敏信は常祐を生んだ。代々相繼いで清洲に居つた。敏定の側腹の子の信定は彈正忠と稱してゐた。信定の子を信秀といひ備後守と稱してゐた。信秀は分家筋の身分であつたのでさがつて勝幡城に居り、一族の二人の者

と與に本家の役人となり、分けて四郡を治めた。この信秀は武藝を嗜み、士を喜んだので、之に從ふ者が隨分多かつた。

語釋 大吏六人（鹿草・二宮・甲斐・朝倉・增澤・細河。）○其一人（增澤祐德。）○十五世（親眞・親基・親行・行廣・末廣・某實・廣村・眞昌・常昌・常勝・教廣・常任・勝久・久長・敏定。）○岩倉・勝幡（尾張）

時齋藤氏在美濃、今川氏在駿河、與織田氏日相攻擊。信秀徙居古渡城。天文十一年八月、今川義元將兵來攻、軍于小豆坂。信秀逆戰。衆寡不較、日暮將退。敵兵尾擊甚急。信秀弟信光、與死士六人返戰、卻之。十六年九月、信秀從常祐、攻齋藤秀龍于稻葉山、縱火城下。將還、秀龍出戰。我兵大敗、常祐以下八人皆死之。十一月、秀龍遂攻大垣城。信秀卽赴援、擊走秀龍。秀龍者山城西岡人、善歌謠、東遊美濃、仕土岐賴藝將長井某。遂殺長井、直仕賴藝、終爲其重臣、稱山城守。削髮更名道三。遂逐賴藝。十七年、賴藝來奔。信秀善遇之。因招美濃將士。將士多應者。八月、信秀往討秀龍、縱火多藝口。秀龍請和。信秀以比年兵興、上下疲弊、遂許之。秀龍乃復賴藝、以女妻信秀子信長。是歲、信秀徙末盛城。二十年三月、信秀患疫卒。

【訓讀】時に齋藤氏、美濃に在り、今川氏、駿河に在り、織田氏と日に相攻擊す。信秀從つて古渡城に居る。天文十一年八月、今川義元、兵に將として來り攻め、小豆坂に軍す。信秀逆へ戰ふ。衆寡、較せず。日暮將に退かんとす。敵兵、尾擊甚だ急なり。信秀の弟信光、死士六人と返り戰ひ、之を卻く。十六年九月、信秀、常祐に從ひ、齋藤秀龍を稻葉山に攻め、火を城下に縱ち、將に還らんとす。秀龍出で戰ふ。我が兵、大に敗れ、常祐以下八人、皆之に死す。十一月、秀龍遂に大垣城を攻む。信秀卽ち赴き援け、擊つて秀龍を走らす。秀龍は、山城西岡の人、歌謠を善くし、東美濃に遊び、土岐賴藝の將長井某に仕ふ。遂に長井を殺し、直に賴藝に仕へ、終に其の重臣と爲り、山城守と稱す。髮を削りて名を道三と更む。遂に賴藝を逐ふ。十七年、賴藝、來奔す。信秀善く之を遇す。因つて美濃の將士を招く。將士、應ずる者多し。八月、信秀往いて秀龍を討ち、火を多藝口に縱つ。秀龍、和を請ふ。信秀、比年、兵興り、上下疲弊するを以て、遂に之を許す。秀龍乃ち賴藝を復し、女を以て信秀の子信長に妻はす。是の歲、信秀、末盛城に徙る。二十年三月、信秀、疾を患へて卒す。

【通釋】時に齋藤氏は美濃に居り、今川氏は駿河に居り、これ等が織田氏と日に攻擊し合つてゐた。信秀は移つて古渡城に居た。天文十一年八月、今川義元は兵に將として來り攻め、小豆坂に陣取つた。信秀はそれを迎へて戰つた。併し敵は多勢、こちらは小勢で比べものにならなかつた。日が暮れて退却しようとした。敵兵は追つかけ擊つこと非常に急であつた。信秀の弟信光は決死の士六人と引返し戰ひ、之を退けた。十六年九月、信秀は常祐に從つて、齋藤秀龍を稻葉山に攻め、火を城下につけて還らうとした。その時秀龍は出て來て戰つた。わが兵は大に敗れ、常祐以下八人は皆討死した。十一月、秀龍は遂に大垣城を攻めた。信秀は早速援けに行き、討つて秀龍を走らせた。秀龍は山城西岡の人で謠が上手で、そのため東方美濃へ修業に行き、遂にそのまゝ土岐賴藝

の大將の長井某に仕へた。とう／＼長井を殺して直接賴藝に仕へ、結局その重臣となり、山城守と稱した。髮を剃つて名を道三と改めた。遂に賴藝をも逐つ拂つた。十七年賴藝は織田氏へ逃げ込んで來た。信秀は丁寧に之を待遇した。因つて美濃の將士を招き寄せた。將士で之に味方するものが隨分あつた。八月、信秀は往いて秀龍を討ち、火を多藝口につけた。秀龍は和睦を申し込んだ。信秀は年年戰爭が打ち續いて居り、上下共に疲弊したので遂に之を許した。そこで秀龍は賴藝を元々通りにし、自分の娘を以て信秀の子の信長に妻はせた。この年信秀は末盛城に移つた。二十年三月、信秀は流行病で死んだ。

語釋 古渡・末盛（尾張）〇小豆坂（三河）〇稻葉山・大垣・多藝口（美濃）〇長井某（長弘）

信秀有十二男四女。庶長子信廣、其次爲信長。信長幼字吉法師。信秀自居古渡、別城那古屋、置吉法師焉、令林通勝・平手政秀等傅之。甫十三、加首服于古渡、命名信長、字三郎。明年、信長始將兵、入參河、攻今川氏屬城吉良・大濱、縱火而還。信長幼跌蕩、喜武事、被服奇偉、喜帶大刀。其出行街市、或憑人肩、齧餅菓。傍若無人。常調馬、習弓銃、學泅、聚近士、令以竹槍鬪。曰「槍利於長。」乃造二丈槍。及嗣立、稱上總介。次弟信行、稱勘十郎。

訓讀 信秀、十二男四女有り。庶長子信廣、其の次を信長と爲す。信長、幼字は吉法師。信秀自ら古渡に居り、

別に那古屋に城き、吉法師を置き、林通勝・平手政秀等をして、之に傅たらしむ。甫めて十三、首服を古渡に加へ、名を信長、字を三郎と命ず。明年、信長始めて兵に將として、參河に入り、今川氏の屬城吉良・大濱を攻め、火を縱つて還る。信長、幼より跌蕩、武事を喜み、被服奇偉、喜んで大刀を帶ぶ。其の出でて街市を行くや、或は人の肩に憑りて、餅菓を啗ふ。傍に人無きが若し。常に馬を調し、弓銃を習ひ、泅を學ぶ。近士を聚め、竹槍を以て闘はしむ。曰く「槍は長きに利あり」と。乃ち二丈の槍を造る。嗣立するに及んで、上總介と稱す。次弟は信行、勘十郎と稱す。

通釋 信秀には十二男と四人の娘とがあつた。妾腹の長子は信廣で、その次が信長である。信長は幼名を吉法師といつた。信秀は自ら古渡に居り、別に那古屋に城を築いて吉法師を其處に置き、林通勝・平手政秀をお守役とした。やつと十三の時に古渡城で元服をし、名を信長、字を三郎とつけた。翌年、信長は始めて兵に將として參河に入り込み、今川氏の持ち城なる吉良・大濱を攻め、火をつけて還つて來た。信長は幼い時から締りがなく武藝を好み、衣服も人並はづれた異樣な大仕立で、大刀をぶつ込み、町中を出あるくときには人の肩につかまつて、餅や菓子を立ち食したりすることもあつた。その樣はまるで傍に人なきがやうであつた。常に馬を乘りこなし、弓や鐵砲の稽古し、水練を學んだ。又近習の者を集めて、竹槍を以て仕合をさせたりした。そしていふのに「槍は長い方が利益だ」と。そこで二丈の長さの槍を作つた。父の歿後嗣いで立つに及んで上總介と稱した。次弟信行は勘十郎と稱してゐた。

語釋 十二男（信廣・信長・信行・信包・信治・信時・信興・秀孝・信照・秀成・長益・長利。）○那古屋（名古屋。）○字三郎（通稱のこと。）○吉良・大濱（參河）

嘗爲信秀設法會。信長與信行偕往、拜位前。觀者甚衆。信長先進、攫香投鑪內、一拜而出。信行整容拈香、拜伏久之。觀者竊譽信行。有西海僧、在衆中、相信長曰「此子乃英雄也」。然信長放縱日甚。平手政秀驟諫之。政秀之子有名馬。信長請之。辭弗肯獻。信長怒、遂惡政秀、不聽其言。政秀憂懣曰「吾受保傅之託、而不能匡救焉。何以視息於人間哉」。二十二年正月、政秀遂自殺。信長驚悔自咎、屛居不出。爲建佛院、名曰政秀寺。忌日必詣、輙自矢曰「吾徒悔無益。當改過厲行、立大功於天下、以償前失耳」。於是、益講武事、警備鄰國。

【訓讀】嘗て信秀の爲めに法會を設く。信長・信行と偕に往き、位前に拜す。觀者甚だ衆し。信長先づ進み、香を攫み鑪內に投じ、一拜して出づ。信行、容を整へて香を拈み、拜伏すること之を久しうす。觀者、竊に信行を譽む。西海の僧有り、衆中に在つて、信長を相して曰く「此の子乃ち英雄なり」と。然れども信長、放縱日に甚だし。平手政秀、驟 之を諫む。政秀の子、名馬を有す。信長、之を請ふ。辭して肯て獻ぜず。信長怒り、遂に政秀を惡み、其の言を聽かず。政秀、憂懣して曰く「吾れ保傅の託を受けて、匡救する能はず。何を以て人間に視息せんや」と。二十二年正月、政秀遂に自殺す。信長、驚悔して、自ら咎め、屛居して出でず。爲めに佛院を建て、名づけて政秀寺と曰ふ。忌日には必ず詣で、輙ち自ら矢つて曰く「吾れ徒に悔ゆるも益なし。當に過を改め、

行を厲まし、大功を天下に立て、以て前失を償ふべきのみ」と。是に於て、益〻武事を講じ、隣國に警備す。

通釋 ある時、信秀の爲めに法事を營んだ。信長は信行と一緒に出かけて、位牌の前で拜禮をした。見物人が隨分多かつた。信長は先づ進んで香を一つかみ摑んで香爐の中に投げ込み、ちよつと頭を下げて出て行つた。信行は容を整へ、香をひねつて大分長い間拜伏して居た。見物人はひそかに信行を褒めた。西海の坊主が多勢の中で見物してゐたが信長の人相を見ていふのに「この人はたしかに英雄である」と。併し信長は日增にわが儘がつのつた。平手政秀は度々之を諫めた。政秀の伜が名馬を所有してゐた。信長は之をよこせと頼み込んだ。併し斷つて獻上しなかつた。信長は怒つて遂に政秀を惡み、その言葉を聞き入れなかつた。政秀は心配し煩悶していふのに「自分はお守役の依託を受け乍ら、君の過を正し救ふことが出來ない。どうして世の中に生きて居られようか」と。二十二年正月、政秀は遂に自殺した。信長は驚き愁歎して自分の身を咎め、引き籠つて外出しなかつた。政秀の爲めにお寺を建て、政秀寺と名づけた。命日にはきつと參詣し、その度びに自ら心に誓つていふには「無暗と後悔したばかりでは何んの役にも立たぬ。これから改心して行を立派にし精出して大功を天下に立て、前の過失を償ふべきである」と。これからは益〻武藝を習ひ隣國に對して警戒準備をした。

齋藤秀龍以其婦翁欲一見。四月、會于富田正德寺。秀龍豫使將士盛服列坐、欲延信長過其前、以試其動止也。至期秀龍微行、潛道傍民舍、以覘信長過。信長爲茶筅髻、着闊袖、穿虎皮袴、佩繩緱刀及大瓢。健士八百人、弓銃朱幹槍、各五百、從其前後。

秀龍以爲信長麤野、命其行人、以草具供之。信長至寺、入屏風中、結髪更衣而出。儀容閑雅、雖從者皆驚。秀龍使其二宰春日・堀田出迎。信長不與言、過群士前、上堂倚柱而坐。頃焉、秀龍出。信長如不見者。堀田進曰「是山城守也」信長乃顧秀龍曰「適在道傍民舍中所見者、何酷類公也」乃接見之。於是、秀龍復命、具酒饌如儀。既畢、自送信長者數里。既別、目送久之、曰「吁乎、美濃一國、吾終不得不爲之贄幣也」信長時年二十。

訓讀 齋藤秀龍、其の婦翁たるを以て、一見せんと欲す。四月、富田の正德寺に會す。秀龍、豫め將士をして、盛服して列座せしめ、信長を延いて其の前を過ぎしめ、其の動止を試みんと欲す。期に至り、秀龍、微行し、道傍の民舍に潛み、以て信長の過ぐるを覘ふ。信長、茶筅髻を爲し、闊袖を著け、虎皮の袴を穿き、繩紱の刀、及び大瓢を佩ぶ。健士八百人、弓・銃・朱幹槍、各五百、其の前後に從ふ。秀龍以て信長を麤野と爲し、其の行人に命じ、草具を以て之を供せんとす。信長、寺に至り、屏風中に入り、髪を結び衣を更へて出づ。儀容閑雅、從者と雖も、皆驚く。秀龍、其の二宰春日、堀田をして出で迎へしむ。信長、與に言はず、群士の前を過ぎ、堂に上り柱に倚つて坐す。頃ありて、秀龍出づ。信長見ざる者の如し。堀田進んで曰く、「是れ山城守なり」と。信長乃ち秀龍を顧みて曰く「適道傍の民舍中に在つて見る所の者、何ぞ酷だ公に類する」と。乃ち之を接見す。

是に於て、秀龍、復命じ・酒饌を具ふること儀の如くす。既に畢り、自ら信長を送ること數里。既に別れ、目送すること之を久しうして曰く「吁乎、美濃一國、吾れ終に之を贄幣と爲さざるを得ざるなり」と。信長、時に年二十。

通釋 齋藤秀龍は信長の舅であるので、一度信長に遇ひたいと思つた。四月、富田の正德寺で會見することになつた。秀龍は前以て將士をして立派な服裝で列び坐らせ、信長を延き入れて其の前を通らせ、その樣子を試して見ようと思つた。その約束の日になつて秀龍はしのんで道側の民家にかくれて、信長の通るのをのぞいて見て居た。信長は茶筅髻に結ひ、廣袖の着物を着て、虎の皮の袴をはき、繩を柄に卷きつけた刀と、大きな瓢箪とを腰につけてゐた。屈强の侍が八百人もゐて、弓方、鐵砲方、朱塗の長槍を持つもの、各五百人づゝがその前後に從つてゐた。秀龍は信長を見て品のない武骨者となし粗末な料理を出すことにした。信長は寺に着くと屛風の中に入つて髮を結ひかへ、着物を改めて出て來た。その姿樣子はしとやかで、みやびやかで、供の者までも皆驚いた程である。秀龍はその二人の家老の春日・堀田をして出迎へさせた。信長は之と物も言はなかつた。齋藤氏の多勢の侍の坐はつて居る前を通り、堂に上り、柱にもたれてドッカリ坐はつた。しばらくたつて、秀龍が出て來た。信長は見ぬ振りをしてゐた。堀田が進んでいふには「これが山城守で御座います」と。そこで信長は秀龍を顧みていふのに「先刻道側の民家の中に居て、見物してゐたものが大層よく貴公に似て居ました」と。そこで對面の挨拶をした。それから秀龍は再び命じて（粗末な料理は止めて）酒と膳部を具へ、型の如くにした。それが濟んで終ふと、自ら數里も信長を見送りした。別れて終つてからも、秀龍はしばらく之を見送つてゐた そして曰ふには「あゝ余の美濃一國は結局之を信長に進物としない譯に行くまい」と。信長この時年二十であつた。

語釋 婦翁（妻の父。）○富田（尾張）○茶筅髻（茶筅の形をした髻。）○山城守（秀龍）○贄幣（引出物。）

先是、常祐死于戰。其遺臣織田三位・坂井大膳・川尻左馬等、擁常祐子彦五郎、與信秀・信長構兵。斯波義統者、義良孫也。居清洲城中、竊右信長。彦五郎等覺之、不自安。二十三年七月、坂井・川尻等襲義統、弑之。毛利秀高以義統孤兒脫走、來那古屋。信長奉之于天王坊、謂將士曰「清洲我宗家也。而弑我累世之主。不可不誅。」乃遣柴田勝家等七將、攻清洲、與三位・左馬戰于城外、斬之。大膳使人乞援於守山城主織田信光。信光陰謀之信長。信長使佯許之。弘治元年四月、大膳延信光於城內、自與兄大炊來見。信光率兵而往、及見大炊、立拔刀斬之。大膳出奔。信長馳至、圍彦五郎、數其弑逆、誅之、終取清洲、徙居焉。令信光居那古屋、食河東郡。已而信光家內變。爲其下所害。信長以林通勝爲那古屋留守。

通釋 是より先き、常祐、戰に死す。其の遺臣織田三位・坂井大膳・川尻左馬等、常祐の子彦五郎を擁し、信秀・信長と兵を構ふ。斯波義統は、義良の孫なり。清洲の城中に居て、竊に信長を右く。彦五郎等之を覺り、

自ら安んぜず。二十三年七月、坂井・川尻等、義統を襲ひ、之を弑す。毛利秀高、義統の孤兒を以て脱走し、那古屋に來る。信長、之を天王坊に奉じ、將士に謂つて曰く「清洲は、我が宗家なり。而かも我が累世の主を弑す。誅せざるべからず」と。乃ち柴田勝家等の七將を遣はし、清洲を攻めしめ、三位・左馬と城外に戰ひ、之を斬る。大膳、人をして援を守山の城主織田信光に乞はしむ。信光、陰に之を信長に謀る。信長、佯つて之を許さしむ。弘治元年四月、大膳、信光を城内に延き、自ら兄大炊と來り見る。信光、兵を率ゐて往き、大炊を見るに及び、立どころに刀を拔いて之を斬る。大膳出奔す。信長馳せ至り、彦五郎を圍み、其の弑逆を攻めて、之を誅し、終に清洲を取り、徙つて居る。信光をして那古屋に居らしめ、河東郡を食ましむ。已にして信光の家に、内變あり。其の下の害する所と爲る。信長、林通勝を以て、那古屋の留守と爲す。

〔通釋〕これより前常祐（織田の本家）は討死をした。その遺臣の織田三位・坂井大膳・川尻左馬等は常祐の子の彦五郎を守り立て、信秀・信長と兵を結んで爭つた。斯波義統は義良の孫である。清洲の城内に居て、内々信長を助けた。彦五郎等は之を覺つて、自ら不安を感じた。二十三年七月、坂井・川尻等は不意に義統を襲うて之を弑した。毛利秀高は義統の孤兒をつれてのがれ走り、那古屋にやつて來た。信長は之を天王坊に置き將士に向つていふには「清洲はわが本家である。而もわが累代の主君を弑した。だから之を誅しない譯には行かない」と。そこで柴田勝家等七將を派遣して清洲を攻めしめ、三位・左馬と城外に戰つて之を斬り殺した。大膳は人をやつて援助を守山の城主織田信光に請はしめた。信光はひそかに之を信長に謀つた。信長はわざと之を承諾するやうにさせた。後奈良天皇の弘治元年四月、大膳は信光を城内に引き入れ、自身兄の大炊と一緒に遇ひに出た。信光は兵を率ゐて出かけ、大炊に會ふとすぐ其の場で刀を拔いて之を斬つた。大膳は出奔した。そこへ信長がかけ付けて彦五郎

を取り圍み彼が犯した弑逆の罪を責めて之を誅し、結局清洲を取つてそこへ移り住まつた。そして信光をして那古屋に居らしめ、河東郡を領有せしめた。其の内に信光の家に內輪のもめ事が起つた。それで信光はその家來の爲めに殺されて終つた。そこで信長は林通勝を以て那古屋の留守番とした。

〔語釋〕天王坊（尾張の寺の名。）○守山（尾張）

通勝患信長慓悍、與弟光春・柴田勝家、謀弑之、而立信行。信長覺之。二年五月、信長獨與四弟信時、卒往那古屋、詗之。光春耳語通勝曰「是天幸也。宜速行大事。」通勝不忍。信長還、砦于名塚、令佐久間大學守之。八月、勝家・光春各將千騎、急攻名塚。名塚告急於清洲。信長卽率見兵七百、赴援、使織田造酒丞等當勝家、而自與光春戰。我兵不利。隊將森可成謂信長曰「今日之戰、我軍克矣。」信長問何以知之。曰「光春有驕色。」信長欲馳。可成曰「少竢之。」已而光春愈乘勝縱其麾下兵。可成曰「可以馳矣。」信長乃馳、擊破之、手揮槍鏦殺光春。遂轉赴勝家軍、大呼曰「我已獲光春矣。勿使勝家逸。」勝家大怖、終走、歸末盛城。

〔訓讀〕通勝、信長の慓悍を患ひ、弟光春・柴田勝家と之を弑して信行を立てんと謀る。信長、之を覺る。二

年五月、信長、獨り四弟信時と、卒に那古屋に往いて之を調ふ。光春、通勝に耳語して曰く「是れ天幸なり。宜しく速に大事を行ふべし」と。通勝忍びず。信長還り、名塚に砦し、佐久間大學をして之を守らしむ。八月、勝家・光春、各千騎に將として急に名塚を攻む。名塚、急を清洲に告ぐ。信長、卽ち見兵七百を率ゐて赴き援け、織田造酒丞等をして勝家に當らしめ、而して自ら光春と戰ふ。我が兵利あらず。隊將森可成、信長に謂つて曰く「今日の戰は我が軍克つ」と。信長、何を以て之を知ると問ふ。曰く「光春、驕色有り」と。信長馳せんと欲す。可成曰く「少しく之を俟て」と。已にして光春、愈勝に乘じ、其の麾下の兵を縱つ。可成曰く「以て馳すべし」と。信長乃ち馳せ、之を擊破し、手づから槍を揮ひ光春を鏦殺し、遂に轉じて勝家の軍に赴き、大に呼んで曰く「我れ已に光春を獲たり。勝家をして逸せしむる勿れ」と。勝家、大に怖れ、終に走り、末盛城に歸る。

【通釋】通勝は信長が氣早な荒々しいのを心配し、弟の光春及び柴田勝家と相談して之を弑し、信長の弟の信行を立てようとした。信長は之を覺つた。二年五月、信長はたゞ四番目の弟信時と急に那古屋へ往つて樣子を伺つた。光春は通勝にさゝやいていふのに「これは天の授けた幸である。早く大事（信長を殺すこと）を行つたら宜いでせう」と。通勝はそれに忍びなかつた。信長は還つて、名塚に砦を築き、佐久間大學をして、之を守らしめた。八月、勝家・光春は、各千騎に將として急に名塚を攻めた。名塚では大變を清洲に知らせた。信長は早速、手元にあり合せの兵士七百を率ゐて援けに行き、織田造酒丞をして勝家に當らしめ、そして自分は光春と戰つた。所がわが兵（信長方）は敗北した。隊將の森可成は信長に向つていふには「今日の戰爭はわが軍の勝利です」と。信長はどうしてそれが分るかと尋ねた。可成は答へていふには「光春は勝つて驕る色があるからで御座います」と。信長は敵中にかけ出さうとした。可成がいふのに「マアしばらく御待ちなさい」と。その內に光春は愈

勝つた勢につけ込んで、其の旗下の兵を縱ち出した。可成はいふのに「今はかけ込んで宜いときです」と。そこで信長は馳せて之を撃ち破り、手づから槍を揮つて光春を突き殺し、それから方向を一轉して勝家の軍隊に赴き大聲に呼んでいふのに「余はもう光春の首を討ち取つた。勝家を逃がしてはならぬぞ」と。勝家は非常に怖れて終に逃げ、末盛城に歸つた。

語釋　名塚（尾張）

信長母六角氏、愛信行、與之倶居末盛。於是、六角氏令信行作誓書、勝家・通勝皆被僧服、來謝其罪。信長謂通勝曰「是吾之罪已。吾前背徳忤諫、使平手自殺。汝自今代平手匡我」。乃遣守那古屋如故。信行仍不悛、城龍泉寺、欲與岩倉兵合、略取東郡、令其將都築藏人招聚兵士。勝家數諫。信行疏斥之。永祿元年正月、信行饗諸將士、不及勝家。勝家怒、夜來清洲、告信行反。信長乃稱疾、使村井貞勝告六角氏「欲讓家於信行」。六角氏悦、告信行。信行即至、將入信長臥內。信長豫伏力士三人、斬之。不成。信行走出。池田信輝要撃于廊下、斃之。

信長の母六角氏、信行を愛し、之と倶に末盛に居る。是に於て、六角氏、信行をして誓書を作らしめ、

勝家・通勝、皆僧服を被り、來つて其の罪を謝す。信長、通勝に謂つて曰く「是れ吾の罪のみ。吾れ前に德に背き諫に忤ひ、平手をして自殺せしむ。汝、今より平手に代つて我を匡せ」と。乃ち遣はして那古屋を守らしむること故の如し。信行、仍ほ悛めず、龍泉寺に城き、岩倉の兵と合し、東郡を略取せんと欲し、其の將都築藏人をして、兵士を招き聚めしむ。勝家、數諫む。信行、之を疏斥す。永祿元年正月、信行、諸將士を饗し、勝家に及ばす。勝家怒り、夜、清洲に來り、信行反すと告ぐ。信長乃ち疾と稱し、村井貞勝をして六角氏に告げしむ。「家を信行に讓らんと欲す」と。六角氏悅び、信行に告ぐ。信行卽ち至り、將に信長の臥内に入らんとす　信長、豫め力士三人を伏せて、之を斬る。成らず。信行走り出づ。池田信輝、要して廊下に擊つて之を斃す。

〔通釋〕信長の母の六角氏は信行を愛して、之と一緒に末盛城に居つた。そこで六角氏は信行をして信長に叛かぬといふ誓書を作らしめ、勝家・通勝は皆僧侶の服を着し、來つて其の罪を詫まつた。信長は通勝に向つていふには「これは余の罪である。余はさきに德義に背き意見を聽き入れないで平手をして自殺せしめた。お前は今後平手に代つて、わが過を匡して吳れよ」と。そこで通勝を遣はして前の通りに那古屋城を守らしめた。信行はそれでもまだ改心しないで龍泉寺に城を築いて、岩倉の兵と聯合し、河東郡を略奪しようと思つた。其の將都築藏人をして兵士を招き聚めさせた。勝家は度々之を諫めた。信行は勝家を疏んじ退けた。正親町天皇の永祿元年正月　信行は諸將士に御馳走をし勝家だけは招待しなかつた。勝家は怒つて、夜清洲に來て、信行が謀叛をしたと告げた。そこで信長は病氣だと言ひ立て村井貞勝をして母の六角氏に告げさせた。「織田家を信行に讓りたいと思ひます」と、曰はせた。六角氏は悅んで信行に話した。信行は早速清洲にやつて來て、信長の寢所に入らうとした。信長は前以て力士三人を隱して置いて之を斬らせた。併しうまく行かなかつた。信行は走り出た。池田信

輝が廊下に待ち受けて之を撃ち殺して終つた。

【語釋】六角氏（高賴の女。）　被僧服（世を捨人となつて世の中のことに關せぬといふ事を現はす。）　龍泉寺（尾張）

二年四月、齋藤秀龍欲廢長子義龍立少子某。義龍誘殺少子、與秀龍鬪、遂弑之。信長將兵援秀龍。不及還。義龍躡之。信長自殿而退。會岩倉城主遂援義龍、以兵三千軍丹原野。時我見兵僅八十三騎。乃驅清洲市人、伐竹爲槍、列于軍後。敵以爲大兵來也、乃退去。七月、信長與犬山城主織田信清、合兵三千、攻岩倉。岩倉兵出、戰于浮野。信長令弓銃手横撃走之、追至城下而返。信長南行、信清北行。城兵視信清兵寡也、出尾之。信長返援、夾撃大破之、遂圍城。三月拔之。於是、信長盡取尾張。獨知多一郡屬今川氏。

【讀解】二年四月、齋藤秀龍、長子義龍を廢し、少子某を立てんと欲す。義龍、少子を誘殺し、秀龍と鬪ひ遂に之を弑す。信長、兵に將として秀龍を援く。及ばずして還る。義龍、之を躡す。信長自ら殿して退く。會岩倉城主、遂に義龍を援け、兵三千を以て丹原野に軍す。時に我が見兵、僅に八十三騎。乃ち清洲の市人を驅り、竹を伐りて槍と爲し、軍後に列せしむ。敵以て大兵來ると爲すや、乃ち退き去る。七月、信長、犬山の城主織田信

清と兵三千を合せ、岩倉を攻む。岩倉の兵出で浮野に戰ふ。信長、弓銃手をして橫擊せしめて之を走らせ、追うて城下に至りて返る。信長は南行し、信清は北行す。城兵、信清の兵寡きを視るや、出でて之に尾す。信長返り援け、夾擊して大に之を破り、遂に城を圍む。三月にして之を拔く。是に於て、信長盡く尾張を取る。獨り知多一郡のみ、今川氏に屬す。

通釋 二年四月、齋藤秀龍は、長子義龍を廢して少子某を立てようとした。義龍は少子を誘ひ殺し秀龍と鬪つて遂に親を弑した。信長は兵に將として秀龍を援けた。間に合はないで還つて來た。義龍は信長の跡を追つかけた。信長は自身殿をして退却した。丁度其の時岩倉の城主がはるかに義龍を援け、兵三千を率ゐて丹原野に陣取つた。時に味方の手元の兵は僅に八十三騎であつた。そこで清洲の町人を驅り立て、竹を伐つて槍となし、軍の後方に列せしめた。敵は大兵が押し寄せたと思つて退き去つた。七月、信長は犬山の城主織田信清と兵三千を合せて岩倉を攻めた。岩倉の兵は出でて浮野で戰つた。信長は弓方・鐵砲組をして橫合から擊たせて、之を走らせ追つかけて城下まで行つて還つて來た。信長は南に進み、信清は北に進んだ。城兵は信清の兵の少いのを見て、城を出でて跡から尾けて來た。信長は引き返し援け、夾み討ちにして大に之を破り、遂に城を圍んだ。三個月で之を陷れた。これで信長は全部尾張を取つたことになつた。たゞ知多だけが今川氏に屬いて居た。

語釋 少子某（義龍の弟龍之。）○岩倉城主（織田信知。）○丹原野・犬山・浮野（尾張）

先レ是、鳴海城將山口某畔、附二今川氏一、又取二大高・沓懸二城一、更城二于村木一。信長攻二下村木一、又攻二笠寺城一。城將戸部某、驍勇不レ可レ下。信長收レ兵而歸。以三戸部善二書一、令三侍史學二之一。

期年而得。乃贋作戶部通織田氏書、令森可成僞爲賈人、齎赴駿河、上之義元。義元怒、召戶部殺之、又殺山口父子。義元既定駿河・遠江・參河、將大擧攻尾張。信長修諸城壘、令佐久間大學守鷲津、飯尾定宗守丸根、與大高・笠寺兵數戰、不決。

訓讀 是より先き、鳴海の城將山口某畔き、今川氏に附き、又、大高・沓懸二城を取り、更に村木に城く。信長、村木を攻め下し、又、笠寺城を攻む。城將戶部某、驍勇にして下すべからず。信長、兵を收めて歸る。戶部、書を善くするを以て、侍使をして之を學ばしむ。期年にして得たり。乃ち戶部、織田氏に通ずる書を贋作し、森可成をして僞つて賈人となり、齎して駿河に赴き、之を義元に上らしむ。義元怒り、戶部を召して之を殺し、又山口父子を殺す。義元既に駿河・遠江・參河を定め、將に大擧して尾張を攻めんとす。信長、諸城壘を修め、佐久間大學をして鷲津を守り、飯尾定宗をして丸根を守らしめ、大高・笠寺の兵と數戰ひ、決せず。

通釋 これより以前鳴海の城將山口某が畔いて今川氏に屬き、又大高・沓懸の二城を取つて更に村木に城を築いた。信長は村木を攻め下し、又笠寺城を攻めた　笠寺城將戶部某は勇氣があつて、攻め下すことが出來なかつた。信長は致し方なく兵をまとめて歸つて來た。戶部は元來字が上手であつたので信長は自分の祐筆に命じて其の書風を學ばしめた。一年でその書風をすつかり手に入れた。そこで祐筆に命じて戶部が織田氏に內通した贋せ手紙を作らせ、森可成をして商人に變裝させ、それを持參して駿河に往き、義元に上らせた。義元はこれを見て大に怒り戶部を呼び出して之を殺し、又山口親子をも殺した。義元は既に駿河・遠江・參河を平定したので大擧して、

尾張を攻めようとした。信長は諸方の城壘を修繕し、佐久間大學をして鷲津を守らせ、飯尾定宗をして丸根を守らせ今川方の大高・笠寺の兵と度々戰つたが勝負は決まらなかつた。

語釋 鳴海・大高・沓懸・村木・笠寺・鷲津・丸根（尾張）

三年五月、義元自將三國兵四萬五千來攻。十八日、大學・定宗馳使清洲、告曰「義元昨日至沓懸、今夜將運糧大高、而且攻兩城也。」信長召將士、言曰「我欲赴援、如何。」林通勝等說曰「敵衆垂五萬。而我兵不過三千。宜避其來鋭、據本城待之。」信長曰「不可。吾視天下英雄、恃其地利、以失事機、自取滅亡者、不爲少矣。先君有言『隣國之來犯、苟有遲疑、我將士且變志。當亟出迎戰。』吾不敢背先君之教。明日將一戰決勝敗也。與吾同志者努力。」諸將莫敢諫者。

訓讀 三年五月、義元、自ら三國の兵四萬五千に將として來り攻む。十八日、大學・定宗、使を清洲に馳せ、告げて曰く「義元、昨日、沓懸に至り、今夜、將に糧を大高に運んで、且に兩城を攻めんとす」と。信長・將士を召し、言つて曰く「我れ赴き援けんと欲す、如何」と。林通勝等說いて曰く「敵衆、五萬に垂んとす 而るに我が兵三千に過ぎず。宜しく其の來鋭を避け、本城に據つて之を待つべし」と。信長曰く「不可なり。吾れ天下の英雄を視るに、其の地利を恃み以て事機を失ひ、自ら滅亡を取りし者 少しと爲さず。先君言へる有り。『隣國の

來り犯すとき、苟も遲疑する有らば我が將士旦に志を變ぜんとす。當に亟に出でて迎へ戰ふべし」と。吾れ敢て先君の教に背かず。明日、將に一戰して、勝敗を決せんとす。吾と志を同じうする者は努力せよ」と。諸將、敢て諫むる者なし。

通釋 永祿三年五月、義元は自ら駿遠參の三ケ國の兵四萬五千人に大將となつて攻めて來た。十八日に大學・定宗が使者を清洲に走らせて報告して曰ふに「義元が昨日沓懸にやつて來ました、今夜、兵糧を大高に運搬して、明朝鷲津・丸根の兩城を攻めようとして居ります」と。信長は將士を召し寄せて言つて曰ふに「自分は鷲津・丸根を行つて援けようと思ふ。如何なものぢや」と。林通勝等が說いて曰ふには「敵の軍勢は五萬になんなんとする程の大軍に、それに此方は三千人に過ぎないのであります。敵の攻め來る鋭い鋒先きを一時避けて、本城に立て籠つて敵の攻め來るのを待つた方が宜しう御座いませう」と。信長が曰ふのに「それは可けない。自分は天下の英雄を視るのに、自分の地の利を恃みにして、戰爭のよき機を逃がし、結局自分で滅亡をする者が少くない。先君（亡くなつた父）が言つて居られた。『隣國から攻め犯し來た時に、苟も愚圖々々するやうなことがあると、味方の將士が氣を變へて叛くやうなことが起るものである。だからその樣な場合には、早く出て行つて敵を迎へ戰はねばならぬ』と。自分は決してこの先君の御教戒に背かうとは思はぬ。明日一戰して勝負を決めたいと思ふ。自分と志を同じうする者は大に努め勵んで貰ひ度い」と。諸々の大將で諫め止めようとする者もなかつた。

信長因命レ酒與飲。酒酣天明。信長自起舞、謠二古謠一曰「人世五十年。乃如二夢與一レ幻。有レ生斯有レ死。壯士將何恨」舞畢、即被レ甲上レ馬、單騎擧レ鞭而出。騎能屬者十餘人。比レ及二熱田一、

祠、得千人、自祈戰勝、陰使祠官鳴甲于龕中。信長顧軍士曰「神助我也」。乃取山路行、收諸城兵。兵凡三千騎。東望見兩城火起、將士逡巡。信長益鞭其馬而進。林通勝・柴田勝家・池田信輝・毛利秀高、控馬諫曰「彼大衆新勝。以寡兵犯之、立覆沒矣」。信長厲聲曰「汝輩且聞吾言。吾非妄意進犯敵也。敵納糧大高、終夜不息。今亦拔兩城、其兵罷極。而義元侮我、不復設備。吾乘是時、出其不意、可一戰而擒也」。梁田出羽、進贊其計曰「敵拔兩城、未更其陣。中軍必在後。我直襲之、義元可獲矣」。

訓讀　信長、因つて酒を命じて與に飲む。酒酣にして天明く。信長、自ら起つて舞ひ、古謠を謠うて曰く「人生五十年、乃ち夢と幻との如し。生あれば斯に死あり。壯士はた何をか恨みん」と。舞畢り、即ち甲を被り馬に上り、單騎、鞭を擧げて出づ。騎能く屬する者十餘人。熱田祠に及ぶ比、千人を得たり。自ら戰勝を祈り、陰に祠官をして甲を龕中に鳴らさしむ。信長、軍士を顧みて曰く「神我を助くるなり」と。乃ち山路を取り、行くゆく諸城の兵を收む。兵凡そ三千騎。東のかた兩城に火起るを望見し、將士、逡巡す。信長、益其の馬に鞭うちて進む。林通勝・柴田勝家・池田信輝・毛利秀高、馬を控へて諫めて曰く「彼は大衆新に勝つ。寡兵を以て之を犯さば、立ちどころに覆沒せん」と。信長、聲を厲して曰く「汝が輩且く吾が言を聞け。吾れ妄意、進んで敵を犯すにあらざるなり。敵、糧を大高に納れ、終夜息はず。今亦兩城を拔き、其の兵罷極す。而して義元、我を侮

り、後備を設けず。吾れ是の時に乘じて、其の不意に出では、一戰にして擒にすべきなり」と。梁田出羽、進んで其の計を贊して曰く「敵、兩城を拔き、未だ其の陣を更へず。中軍必ず後に在らん。我れ直に之を襲はば、義元獲べし」と。

通釋 そこで信長は酒を出させて諸將と飮んだ。酒宴の酣なる頃に夜が明けた。信長は自ら起つて舞をなし、古い謠を謠つて曰ふには「人生は五十年で、考へて見れば夢や幻のやうである。人間生あれば必ずそこに死がある。血氣の武士、生命を棄てたとて何んの根があらうや」と。舞ひ終つて、早速に鎧を着け、馬に跨り、一騎鞭を高く揚げて出て行つた。餘りの早業で、能く後について行くことの出來た騎は十餘人であつた。熱田の御社に來た頃には人數も增して千人になつた。自ら戰勝を神に祈り、こつそり神官に賴んで、鎧を內殿中で鳴らせて貰らつた。信長は軍士を顧みて曰ふには「これは神樣が我を助けて下さる記しである」と。そこで山路傳に進路を取り途中で諸城の兵を取り纏め、兵凡そ三千騎になつた。東の方を觀て、鷲津・丸根の兩城が火にかゝり燒けてゐるのを望み、信長の將士は恐れ躊躇つた。信長は益々勢込んで馬に鞭を當てゝ進んだ。林通勝・柴田勝家・池田信輝・毛利秀高等が信長の馬を押へて諫めて曰ふには「敵の大軍は戰に勝つた計りの所です。こちらが僅かな兵で以て此の新勝の大軍を犯しましたなら、卽座に覆へり滅亡するでありませう」と。信長は聲を勵まして曰ふに「汝等暫らく余の言ふ所を聞け。自分は盲滅法に進んで敵を犯すのではないぞ。敵は兵糧を大高に納れ、終夜休息して居らぬ。そこへ以て今亦戰爭をして鷲津・丸根を陷れたので、彼等は非常に罷れ切つてゐる。それに義元は自分を侮り、油斷をして備へを立てゝ居らない。自分は此の時につけ込んで、敵の案外な所に出でたなら、一度の戰爭で彼を擒にすることが出來る」と。梁田出羽が進んで其の計を贊成して曰ふに「敵は兩城を陷れ、

て、まだ其の陣形を改め變へて居りませぬ。本隊は屹度後部の方に居りまする。こちらは直ぐ樣その本隊を襲つたならば、必ず義元を捕へることが出來ませう」と。

語釋 古謠（敦盛の謠。それを支那の詩に改めたので、韻が押してある。原歌は「人間五十年、下天のうちを比ぶれば、夢幻の間なり、一度生を受け、滅せぬもののあるべきか」。）○龕（音ガン、内殿。）

信長乃伏旗鼓、循山而馳、至於桶峽、瞰視義元營。信長欲下馬接戰。森可成曰、「衆寡不敵。宜騎而突之。」信長曰、「善。」乃馬上揮槍、先衆馳下。會大雷霧雨昏黑。我兵鼓譟、斫營而入。敵衆大驚擾亂、不知所出。服部小平太、進入幕中、薄義元。義元拔刀擊其膝。毛利秀高、鏦義元、斬其首而出。駿河軍遂大潰。信長追擊、斬其精騎二千餘級。乃賽熱田而返。士女夾路迎觀。信長揭義元首于馬前、凱旋清洲。大高・沓懸諸城皆解走。信長以此名聞天下。

訓讀 信長乃ち旗鼓を伏せ、山に循ひて馳せ、桶峽に至りて、義元の營を瞰視す。信長、馬を下りて接戰せんと欲す。森可成曰く「衆寡、敵せず。宜しく騎して之を突くべし」と。信長曰く「善し」と。乃ち馬上に槍を揮ひ、衆に先だちて馳せ下る。會大雷霧雨にして昏黑なり。我が兵、鼓譟し、營を斫つて入る。敵衆、大に驚き擾亂し、出づる所を知らず。服部小平太、進んで幕中に入り、義元に薄る。義元、刀を拔いて其の膝を擊つ。毛

利秀高、義元を鏖して、其の首を斬つて出づ。駿河の軍、遂に大に潰ゆ。信長、追撃して、其の精騎二千餘級を斬る。乃ち熱田に賽して返る。士女、路を夾みて迎へ觀る。信長、義元の首を馬前に揭けて、清洲に凱旋す。大高・沓懸の諸城、皆解走す。信長、此を以て、名、天下に聞ゆ。

通釋 そこで信長は旗や太鼓を伏せて敵に悟られぬやうにし、山に沿うて馳せ、桶峽に至り、義元の陣屋を見下ろした。信長は馬から下りて切り込まうと思つた。森可成が曰ふのは「敵は衆く味方は寡勢で迚も切り合ひでは敵ひませぬ。それよりは馬に乘つて敵中へ突込むのが宜しう御座いませう」と。信長は「善し」と曰つて、馬上で槍を揮ひ乍ら多勢の者の眞先きに立つて驅け下つた。丁度其の時は大雷、雨で眞ッ暗であつた。我が織田の兵は太鼓を叩き譟ぎ立て、敵の陣屋を切り卷くつて突入した。敵の軍勢は非常に吃驚して騷ぎ亂れ、如何にして宜いか、爲す所を知らぬ有樣であつた。服部小平太が進んで陣幕の中に入り義元に肉薄した。義元は刀を拔いて小平太の膝を擊つた。その時毛利秀高が義元を槍で突き、其の首を斬つて出て來た。駿河の軍は遂に大敗して潰え走つた。信長はこれを追かけ擊つて、敵の強い兵二千餘人の首を上げた。そこで熱田神宮に御禮參りをして返つた。男も女も路を夾んで之を迎へ觀た。信長は義元の首を馬前に高く揭げさせて清洲に凱旋した。大高・沓懸の諸城は皆風を望んで城の備へを解いて逃げた。信長はこの戰で名前を天下に高くした。

語釋 桶峽(尾張)

當是時、足利氏大衰、三好氏・松永氏、專京畿之政。而七道將士各據其國、迭相爭奪。信長慨然有戡定天下之志。初尾張人道家某、與京師人立入宗繼者相識。宗繼爲

左京亮、自父祖居京郊、多田業。供御乏絕、每取給焉。嘗說中納言藤原惟房曰「方今天下大亂、宮闕頽敝、供御之邑、盡爲武人所占。而以臣視之、其勢非得天下豪傑、不足以定天下之亂。聞尾張有織田信長者。年甫二十、割據東國之咽喉、能以少摧衆。是其人必有絕世之才。君盍奏請綸旨、囑信長以撥亂反正之事。」惟房畏憚內外、不敢決。宗繼再入說之曰「事如漏泄、臣獨任其責。」帝探鬮鏡室、決計。

訓讀 是の時に當り、足利氏大に衰へ、三好氏・松永氏、京畿の政を專にす。而して七道の將士、各其の國に據り、迭に相爭奪す。信長慨然として天下を裁定するの志あり。初め尾張の人道家某、京師の人立入宗繼なる者と相識る。宗繼左京亮となり、父祖より京郊に居り、田業多し。供御乏絕せば、每に給を取る。嘗て中納言藤原惟房に說いて曰く「方今天下大に亂れ、宮闕頽敝す。供御の邑、盡く武人の占むる所となる。而して臣を以て之を視れば、其の勢、天下の豪傑を得るに非ざれば、以て天下の亂を定むるに足らず。聞く、尾張に織田信長といふ者あり。年甫めて二十、東國の咽喉に割據し、能く少を以て衆を摧く。是れ其の人必ず絕世の才有らん。君盍ぞ奏して綸旨を請ひ、信長に囑するに撥亂反正の事を以てせざる」と。惟房、內外を畏憚し、敢て決せず。宗繼再び入りて、之に說いて曰く、「事、如し漏泄せば、臣獨り其の責に任ぜん」と。帝、鬮を鏡室に探り、計を決す。

【通釋】この當時、足利氏は大に衰へ、三好氏・松永氏が京畿の政治を專斷してゐた。そして、七道の將士は各其の國に立て籠り、互に爭ひ奪ひ合つてゐた。信長は之を慨いて天下を治め鎭めようといふ志を抱いた。はじめ、尾張の人道家某は京都の人立入宗繼と識り合ひの間柄であつた。宗繼は左京亮となつて、父祖の時代から京都の郊外に住まつて居て、田畑を澤山所有してゐた。禁裏のお供へ物が乏しい場合にはいつでも其の家から支給せしめられて居つた。宗繼はある時中納言藤原惟房に說いていふには「この頃は天下が大に亂れ、御所も崩れ壞れました。お臺所にあてられる御領地は全部武士に占領せられて終ひました。私の考へで見ますると、其の勢天下の豪傑を手に入れなければ、迚も天下の大亂を平定することは出來ませぬ。聞けば尾張に織田信長と申す者が居ります。年はやつと二十で御座いますが、東國の咽喉元に當る要地に割據し、能く小勢で多勢の今川を打ち破りました。これは屹度その人物が世にすぐれた才能のあることで御座いませう。君には何故天子樣の詔を請ひ受けられ、信長に亂を治め、正しきに反へす事業をお賴みなされませぬか」と。惟房は公卿や武家に遠慮して決め兼ねて居た。宗繼は再び御所に入つて之に說いていふには「この事が若し泄れましたら私が獨りで全責任を負ひます」と。そこで天皇は內侍所で御鬮をお探りなされて計を御決定遊ばされた。

【語釋】三好氏（長慶）〇松永氏（長慶の臣松永久秀。）〇七道將士（三好・松永・今川・北條・里見・佐竹・最上・上杉・朝倉・武田・佐々木・淺井・尼子・毛利・大友・島津等。）〇裁定（裁は籌つこと。）〇道家某（淸十郞）〇供御（お手元の諸物資。）〇撥亂反正（國語に出づ。）

五年十月、惟房宣言「天子感異夢、將奉幣于熱田祠。」乃使宗繼及磯貝久次齎密旨、赴尾張。因錫信長以御用合香、館道家氏。信長獵歸、過道家。道家告以故。信長乃沐

浴更衣、出見宗繼。宗繼宣達勅旨。信長謂宗繼曰「吾聞、天下天子之君。宜自我共職焉。而今反辱使命、加以寵貺。吾何以堪之。當藉天威以夷凶徒、不日入朝、竭力圖報。」因自調食、以享二使、召森可成・柴田勝家・丹羽長秀・木下秀吉・瀧川一益・菅谷長賴・堀秀政、諭以勅旨。於是、日夜議西上之策。

訓讀 五年十月、惟房、宣言す。「天子、異夢に感じ、將に幣を熱田の祠に奉ぜんとす」と。乃ち宗繼及び磯貝久次をして、密旨を齎し、尾張に赴かしむ。因つて信長に錫ふに御用の合香を以てし、道家氏に館す。信長、獵より歸り、道家を過る。道家告ぐるに故を以てす。信長乃ち沐浴して衣を更め、出でて宗繼を見る。宗繼、勅旨を宣達す。信長、宗繼に謂つて曰く「吾れ聞く、天子は天下の君と。宜しく我より職に共すべし。而るに今、反つて使命を辱うし、加ふるに寵貺を以てす。吾れ何を以て之に堪へん。當に天威を藉り、以て凶徒を夷げ、不日、入朝し、力を竭し報を圖るべし」と。因つて自ら食を調へ、以て二使を享し・森可成・柴田勝家・丹羽長秀・木下秀吉・瀧川一益・菅谷長賴・堀秀政を召し、諭ぐるに勅旨を以てす。是に於て、日夜、西上の策を議す。

通釋 五年十月、惟房は言ひふらした。「天子様が不思議な御夢を御覽遊ばし、その爲めに熱田神宮に幣物を奉獻せられることゝなつた」と。そこで宗繼と磯貝久次をして密旨を持つて尾張に赴かしめられた。因つて信長に天子御用の調合された香を賜はり、お使は道家氏に宿泊して居た。信長は獵から歸つて來て道家氏に立ち寄つた。道家は信長に譯を話した。そこで信長は身を清め、着物を着換へ、出でゝ宗繼に會つた。宗繼は勅旨をお傳へ申

した。信長は宗繼に向つていふのに「私が聞く所によれば天子樣は天下の君であらせられると。此方から進んで職務をなすべきで御座います。しかるに今却つて御使者を以て勅命を辱うし剰へ有り難き賜物までも頂戴致しました。（堪へ切れない程の御恩を受けましたので）私はどうして之に堪へられませうぞ。私は天子樣の御威光を借つて惡者を平らげ、日ならず入朝致し力を盡して御恩がへしをすべきで御座います」と。そこで自身食物を調理して、二使を御馳走し、森可成・柴田勝家・丹羽長秀・木下秀吉・瀧川一益・菅谷長頼・堀秀政等を召して、勅旨の趣を告げた。そこで日夜西の方京都に上る策略を相談した。

刈谷城主水野信元說曰「參河德川氏舊屬今川。公宜結納之、委之東事、而西面以圖天下。」信長從之。甲斐國主武田信玄、國富兵强。信長厚贈遺之、約爲婚姻、以順適其意、而西圖齋藤氏。

訓讀 刈谷城主水野信元說いて曰く「參河の德川氏は、舊と今川に屬す。公宜しく之に結納し、之に東事を委ね、而して西面以て天下を圖るべし」と。信長、之に從ふ。甲斐の國主武田信玄、國富み兵强し。信長厚く之に贈遺し、約して婚姻を爲し、以て其の意に順適し、而して西齋藤氏を圖る。

通釋 刈谷の城主水野信元は信長に說いていふのに「參河の德川氏は元來今川氏に屬いてゐました。公には之に結びつき給ひ、彼に東方の事を任かし、そして、西に向つて天下を圖るやうになされましたら宜しいでせう」と。信長は之に從つた。この時甲斐の國主武田信玄は國富み兵强がつた。信長は手厚く進物を贈り、結婚の約束

をして彼の心に逆はないやうにし、そして西の方、齋藤氏を滅ぼすことを謀つた。

【語釋】 刈谷（參河）

齋藤秀龍之未死也、有二驍將。信長計除之。乃乘夜外出者數。夫人齋藤氏、疑其有所私、頗有妬色。信長曰「吾非有他心。乃欲成祕計耳。」夫人問其計。曰「不可與女言也。」固問。信長乃詐之曰「美濃二將、陰通款於我、圖舅氏。事成則擧燧。吾每夜出望之、未擧也。」夫人憂恐、密爲書告之秀龍。秀龍驚、卽誅其二將。齋藤氏兵力、遂自是削弱矣。義龍既弑秀龍、傳子龍興。龍興暗弱、其將士多歸心於信長。四年五月、信長將兵千五百、出西美濃。洲股城將長井某・日根野某、以六千騎迎之、覩我兵寡、徑淖而來。信長分兵爲三隊、以一隊自衞、一隊蹙其前、一隊横擊之、斬二將於是、城于九條・洲股、令織田勘解由守九條、木下秀吉守洲股。

【訓讀】 齋藤秀龍の未だ死せざるや、二驍將有り。信長、之を除かんと計る。乃ち夜に乘じて外出すること數くなり。夫人齋藤氏、其の私する所有るかと疑ひ、頗る妬色有り。信長曰く「吾れ他心有るにあらず。乃ち祕計を成さんと欲するのみ」と。夫人、其の計を問ふ。曰く「女と言ふべからざるなり」と。固く問ふ。信長乃ち之を

詭いて曰く「美濃の二將、陰に款を我に通じ、舅氏を圖る。曰く、事成らば則ち燧を擧げんと。吾れ毎夜、出でて之を望むに、未だ擧らざるなり」と。夫人憂恐し、密に書を爲り、之を秀龍に告ぐ。秀龍驚き、卽ち其の二將を誅す。齋藤氏の兵力、遂に是より削弱す。義龍、既に秀龍を弑し、子龍興に傳ふ。龍興、暗弱にして、其の將士多く心を信長に歸す。四年五月、信長、兵千五百に將として、西美濃に出づ。洲股城の將長井某、日根野某・六千騎を以て之を迎へ、我が兵の寡きを覩て、淖を徑りて來る。信長兵を分ちて三隊と爲し、一隊を以て自ら衛り、一隊は其の前に蹙り、一隊は之を橫擊し、二將を斬る。是に於て、九條・洲股に城き、織田勘解由をして九條を守らしめ、木下秀吉をして洲股を守らしむ。

通釋　齋藤秀龍がまだ生きてゐた時分に二人の強い大將がゐた。信長は之を除かうと計畫した。そこで夜に乘じて度々外出した。夫人の齋藤氏は他に誰れか內證に寵愛してゐる女でもあるかと疑ひ隨分悋氣する顏色をした。信長がいふのに「余は外に心ある譯ではない。たゞ祕密の計畫をしようと思ふばかりに、夜、出かけるのである」と。夫人は其の計畫とはどんな事か尋ねた。信長がいふのに「この一件はお前と話す譯には行かぬ」と。夫人は固く尋ねた。そこで信長は之を欺いていふのに「美濃の二將が內々當方に通じて、舅殿を殺すことを計つてゐる。其の事が成就すれば二將はのろしを擧げるといつてゐた。余は毎晚外に出て之を望み見るのだがまだ烽が上らない」と。夫人は心配し恐れ、ひそかに手紙を書いて之を秀龍に告げた。秀龍は驚いてすぐ樣二將を殺した。齋藤氏の兵力は遂にこれから弱つて來た。義龍はすでに秀龍を殺し其の子龍興に相續させた。龍興は愚かで氣弱く、その將士共は多く心を信長に寄せた。四年五月、信長は兵千五百に大將となり、西美濃に討つて出た。洲股城の大將長井某、日根野某は六千騎を率ゐて之を迎へ、わが兵の小勢なのを見るや沼田を橫ぎつてやつて來た。信長

は兵を分けて三隊となし、一隊を以て自分の護衛とし、一隊は前に詰め寄せ、一隊は横合から撃つて出で二將を斬り殺した。こゝに於て九條、洲股に城を築き、織田勘解由をして九條を守らしめ、木下秀吉をして洲股を守らしめた。

語釋 九條（美濃）

五年五月、齋藤龍興在井口城、謂其將士曰「洲股河漲。信長未能來。吾欲以此時攻九條。」乃率其將稻葉・牧村等、攻九條。九條告急信長。信長卽赴援、至河側。不可渡。信長曰「吾寧溺死、豈可坐視不救乎」乃鞭馬亂流而渡。全兵從之。時既夜。九條城將爲先鋒、擊走牧村、與稻葉鬪而死。池田信輝・佐佐成政、識稻葉聲、交刺于暗中、斃之、讓其首不取。柴田勝家取之、獻曰「信輝・成政讓首不取。臣謹獻焉」信長褒賞三士、凱而歸、終徙居小牧城、以迫美濃。遣丹羽長秀、攻下二城。

訓讀 五年五月、齋藤龍興、井口城に在り。其の將士に謂つて曰く「洲股河漲る。信長未だ來る能はず。吾れ此の時を以て九條を攻めんと欲す」と。乃ち其の將稻葉・牧村等を率ゐて、九條を攻む。九條、急を信長に告ぐ。信長卽ち赴き援けて、河側に至る。渡るべからず。信長曰く「吾れ寧ろ溺死するも、豈に坐視して救はざる可けんや」と。乃ち馬に鞭うち流を亂つて渡る。全兵、之に從ふ。時既に夜なり。九條の城將、先鋒と爲り、擊つて

牧村を走らせ、稻葉と鬪つて死す。池田信輝・佐佐成政、稻葉の聲を識り、交暗中に刺して、之を斃し、其の首を讓つて取らず。柴田勝家、之を取り、獻じて曰く「信輝・成政、首を讓つて取らず。臣謹んで獻ず」と。信長、三士を褒賞し、凱して歸り、終に徙つて小牧城に居り、以て美濃に迫る。丹羽長秀を遣はし、二城を攻め下さしむ。

【通釋】五年五月、齋藤龍興は井口城に居つた。龍興はその將士に向つていふには「洲股河が漲つてゐる。信長はまだ來ることは出來ない。余はこの際九條を攻めようと思ふ」と。そこで其の大將稻葉・牧村等を引きつれ九條を攻めた。九條では急を信長に告げた。信長は早速援けに行き、河の側まで來た。併し渡ることが出來ない。信長がいふのに「余はむしろ溺れ死んでもどうしてぢつと視てゐて援けないで居られようか」と。そこで馬に鞭つて流を橫切つて渡つた。全軍は之に從つた。其の時は最早夜であつた。九條の城將は先鋒となつて擊つて牧村を走らせ、稻葉と鬪つて討ち死した。池田信輝・佐佐成政の二人は稻葉の聲を知つてゐて、かはる〴〵闇の中で稻葉を刺して之を殺し、お互に其の首を讓り合つて取らなかつた。柴田勝家が之を取つて、獻じていふには「信輝・成政の二人がこの首を讓り合つて取りませぬ。故に私が謹んで獻上致します」と。信長は、池田・佐佐・柴田の三人を褒め賞し凱歌を揚げて還り、遂に小牧城に移り住まひ美濃に迫つた。丹羽長秀を遣はして二城を攻め落させた。

【語釋】井口(美濃)　〇稻葉(常通)　〇牧村(政倫)　〇九條城將(織田興康)　〇小牧(尾張)

龍興ノ將稻葉通朝・氏家經國・伊賀範俊、諫ム龍興ノ失政ヲ。弗聽カ。七年八月、三將送ル款ヲ於信

長。信長許レ之。乃聲ニ言攻ニ參河一、以聚レ兵。兵既聚。乃率而西行、上ニ瑞龍山一、以瞰ニ井口一、縱レ火疾攻。城兵惶駭而降。乃逐ニ龍興一。三將來謁曰、「君來何速也。」信長既定ニ尾張・美濃一、徙居ニ于井口一、更名ニ岐阜一。會有下獻ニ佳鷹二一者上。信長郤レ之曰、「吾方有レ事ニ四方一。未レ暇ニ遊獵一。吾定ニ天下一、然後受、爲レ未レ晩也。」

訓讀 龍興の將稻葉通朝・氏家經國・伊賀範俊、龍興の政を失ふを諫む。聽かず。七年八月、三將、款を信長に送る。信長、之を許す。乃ち參河を攻むと聲言し、以て兵を聚む。兵既に聚る。乃ち率ゐて西行し、瑞龍山に上り、以て井口を瞰ひ、火を縱ちて疾く攻む。城兵、惶駭して降る。乃ち龍興を逐ふ。三將來り謁して曰く「君來る何ぞ速なる」と。信長、既に尾張・美濃を定め、徙つて井口に居り、更めて岐阜と名づく。會〻佳鷹二を獻ずる者有り。信長、之を郤けて曰く「吾れ方に四方に事有り。未だ遊獵に暇あらず。吾れ天下を定め、然る後に受くるも、未だ晩からずと爲す」と。

通釋 瀧興の大將稻葉通朝・氏家經國・伊賀範俊は龍興の失政を諫めた。龍興は聞き入れなかつた。七年八月、三將は信長に內通した。信長は之を許容した。そこで三河を攻めると言ひふらして、兵を聚めた。その內に兵は聚つた。そこで之を率ゐて西に行き、瑞龍山に上り、井口城を見下ろし、火をつけて急に攻めた。城兵は恐れ驚いて降參した。そこで龍興を逐つ拂つて終つた。三將は來り、信長にお目通りしていふには「君の御出は實に御早い事で御座います」と。信長はすでに尾張・美濃を平定し、移つて井口に居り、そこを岐阜と改め名づけた。

丁度其の時善い鷹を二羽獻じた者があつた。信長は之を御けていふには「余は今四方を攻めて戰爭で忙がしい。獵などをしてゐる暇がない。余が天下を平定してから貰つても遲くはない」と。

語釋 瑞龍山（井口の南。）

十年十月、天子復使立入宗繼齎詔來、詔信長曰「朕顧四方、莫如卿武。曩降密勅、囑以征討。卿存心王室、不憚跋涉。聞已平尾濃、奮庸宣威。朕深嘉之。宜益迪果毅、以副朕望。」因錫戰袍一領。信長召村井貞勝讀詔、領旨感激、受其袍曰「臣督師詣闕之日、當服以拜賜耳。」

訓讀 十年十月、天子、復立入宗繼をして、詔を齎らし來らしめ、信長に詔して曰く「朕、四方を顧みるに、卿の武に如くは莫し。曩に密勅を降し、囑するに征討を以てす。卿、心を王室に存し、跋涉を憚らず。聞く、已に尾濃を平げ、庸を奮ひ威を宣ぶと。朕、深く之を嘉す。宜しく益果毅を迪んで、以て朕の望に副ふべし」と。因つて戰袍一領を錫ふ。信長、村井貞勝を召し、詔を讀ましめ、旨を領して、感激し、其の袍を受けて曰く、「臣、師を督して闕に詣るの日、當に服して以て賜を拜すべきのみ」と。

通釋 十年十月、天皇は再び立入宗繼をして詔書を持つて信長の元へお遣はしになり、信長に詔して仰せらるゝには「朕四方を顧みるに卿の武勇に及ぶものとてはない。さきに密勅を授けて逆徒を征討する事を依托した。

卿は皇室に心を寄せ、山を越え川を渉ることをも苦勞としない。聞く所によると、もう尾張・美濃の二國を平定し、手柄を奮ひ立て威勢を宣べ張つたとのことである。朕は深く之を喜ぶ。これより益々果斷強毅な行をして、朕の期望に叶ふやうにしたが宜い」と。因つて陣羽織一組を御下賜になつた。信長は村井貞勝を召して詔を讀ませ、君の仰せを拜受して感激し、その陣羽織を頂戴していふには「私は軍勢を監督して、御所に罷り出る日に、この陣羽織を着て賜物を拜戴することにしませう」と。

先是、三好氏弑將軍足利義輝。義輝弟義昭、走依六角義賢、欲借其力靖難。三好康長・三好政康・岩成左通、稱三好三黨、專京師政、陰令義賢圖義昭。義昭懼、走依武田義統。義統辭。又依朝倉義景。義景諾而不果。又喪其愛子、志氣頓沮。義昭流寓於外三歳、聞信長威名、欲往託焉。使卜人太華筮之。遇臨之節。曰「知臨。大君之宜、吉。是之謂柔任於剛。任於剛、則不勞而治也」義昭決意。十一年七月、遂使使諭信長。信長方計西上、即諾之、遣將吏迎之、館于立正寺。義昭見信長、託以興復。信長答曰「是在信長度内耳。幕下臨此、當築館以奉之。然信長爲幕下定京師、不出兩月矣。莫以館爲也」。

訓読 是より先き、三好氏、將軍足利義輝を弑す。義輝の弟義昭、走つて六角義賢に依り、其の力を借りて難を靖んぜんと欲す。三好康長・三好政康・岩成左通、三好の三黨と稱して、京師の政を專にし、陰に義賢をして義昭を圖らしむ。義昭懼れ、走つて武田義統に依る。義統、辭す。又朝倉義景に依る。義景、諾して果さず。又、其の愛子を喪ひ、志氣、頓に沮む。義昭、外に流寓すること三歳、信長の威名を聞き、往いて託せんと欲す。卜人太華をして之を筮せしむ。臨の節に之くに遇ふ。曰く「知にして臨む。大君の宜しき、吉。是を之れ、柔、剛に任ずと謂ふ。剛に任ずれば、則ち勞せずして治らん」と。義昭、意を決す。十一年七月、遂に使をして信長に諭さしむ。信長、方に西上を計る。卽ち之を諾し、將吏を遣はして之を迎へしめ、立正寺に館す。義昭、信長を見て、託するに興復を以てす。信長答へて曰く「是れ信長の度内に在るのみ。幕下此に臨む。當に館を築き以て之を奉ずべし。然れども信長、幕下の爲めに京師を定むる、兩月を出でじ。館を以て爲す莫きなり」と。

通釋 これより前、三好氏は將軍足利義輝を弑した。義輝の弟義昭は走つて六角義賢にたより、其の力を借りて亂賊を平定しようと思つた。三好康長・三好政康・岩成左通の三人は三好の三黨と稱して、京都の政治を勝手にやり、ひそかに義賢をして義昭を殺させようとした。義昭は懼れ走つて武田義統にたよつた。義統は之を斷つた。そこでこんどは朝倉義景にたよつた。義景は承知し乍ら、それを果さなかつた。其の上義景は愛子に死なれて急にがつかりして、その元氣がなくなつた。義昭は京都を離れ他國に流れ歩くこと三年、信長の威勢名望を聞いて往つて依賴しようと思つた。太華といふ易者にそれを占はせて見た。すると臨の卦が出て、六五の變爻で節の卦となるといふのであつた　その易者が曰ふのに「周易の臨の卦の六五の爻辭(下から五番目の爻の辭)に『尊い君上(六五は君上の位置。陰で柔中の德を備へてゐる)が賢士(九二は臣の位置。陽で剛中の德を備へてゐる)を

知つて之を擧げ用ひ、之に政治を打ち任せ、柔中の德を以て、下萬民に臨む。それは實に君としての道に適はしい仕方で、大君（六五）が臣（九二）に相應じて宜しきに叶つてゐるので、誠に吉である」と出てゐます。これは柔中の德を持つた君が剛中の德を持つた家來に一切を任すことを謂つてゐるのであります。つまり柔たる貴公が剛たる信長に任ずれば則ち苦勞しないでたやすく治まるに至ることでせう」と。義昭は決心した。十一年七月、遂に使をよこして信長に諭さしめた。信長は丁度其の時西上を計畫して居た。だから早速之を承諾して大將や吏卒を遣はして義昭を迎へさせ、立正寺に宿泊してゐた。義昭は信長に會つて、足利家の復興を依賴した。信長は答へていふのに「そのことは私の胸の內に在ります。元來貴公は私の所に御出で下さつたのでありますから、當然お館をこしらへてそれにおいでを願ふべき筈であります。然しながら私が貴公の爲めに京都を平定することは二個月までかゝりませぬ。お館抔こしらへる必要はないのであります」と。

語釋 六角義賢（近江に據る。）○武田義統（若狹に據る。）○朝倉義景（越前に據る。）○遇臨之節（臨䷒。節䷻。臨の卦の下から第五番目の陰爻は老陰であつたので變爻して小陽になる。だから節の卦に之つた譯である。占筮法に就いては朱子の易學啓蒙が初學には分り易いから參照されよ。尙ほ日本外史新釋卷五亨册五九頁を參看されよ。）○幕下（將軍のある所を幕府といふ。故に敬して幕下といふ。）

八月五日、大會將士于岐阜、謂之曰「吾將有事於京畿。汝衆各修兵備以竢我令。」乃盡散遣之、自率數十騎至澤山、使使六角義賢、說以順逆。義賢、及子義弼、業已與三好三黨。三黨聞信長助義昭、則益啗義賢・義弼以利。曰「竭力以拒信長、曠日彌久。我以大軍爲後援也」信長在澤山十日、使者三反。義賢竟弗聽。信長乃歸美濃、索近江

地圖、與二諸將一計二畫之一。下二令管內一曰、「以二九月五日一、會二于岐阜一。」會者凡三萬人。

【訓読】八月五日、大に將士を岐阜に會し、之に謂つて曰く「吾れ將に京畿に事有らんとす。汝衆、各〻兵備を修め以て我が令を竢て」と。乃ち盡く之を散遣し、自ら數十騎を率ゐて、澤山に至り、使を六角義賢に使はし、說くに順逆を以てせしむ。義賢、及び子義弼、業已に三好の三黨に與す。三黨、信長の義昭を助くると聞き、則ち益〻義賢・義弼に啗はすに利を以てす。曰く「力を竭して以て信長を拒ぎ、曠日彌久せよ。我れ大軍を以て後援を爲さん」と。信長、澤山に在ること十日、使者、三反す。義賢、竟に聽かず。信長、乃ち美濃に歸る。近江の地圖を索め、諸將と之を計畫す。令を管內に下して曰く「九月五日を以て、岐阜に會せよ」と。會する者凡そ三萬人。

【通釈】八月五日、大に將士を岐阜に集め、之に向つていふには「余はこれから京畿地方で一仕事出來さうと思つてゐる。お前等は各〻兵備を整頓して余の命令を待つて居よ」と。そこで全部解散して其の領分に歸らせ、自ら數十騎を率ゐて澤山に至り、使を六角義賢に遣はし、順逆の道理を說かせた。義賢及び其の子義弼は、もうその時には三好の三黨と聯合して居た。三黨は信長が義昭を助けると聞いたので、益〻義賢・義弼に利を啗はして機嫌を取り入つた。そして曰ふには「出來るだけ精出して信長を拒ぎ、日數を費やし久しきに亙るやうになされよ。此方から大軍をつれて後援をします」と。信長は澤山に十日も居て、信長の使者は六角の所へ三度も往復した。義賢は竟に聽き入れなかつた。そこで信長は美濃に歸つた。近江の地圖を求め、諸將と六角攻撃の計畫をした。命令を領分内に下していふには「九月五日に岐阜に集まれ」と、集つた者が凡そ三萬人もあつた。

七日、信長將諸軍而西。義賢・義弼、居觀音寺城、修箕作・和田山等十八城、以和田山當美濃之衝、最固其壘壁、守以精兵、欲待我軍攻之、而首尾相救。信長諜知其計、乃使美濃三將備和田山、而宣言向觀音寺、因引兵襲箕作。城兵出戰。木下秀吉・丹羽長秀等爲先鋒、故緩攻之、漸至城下、則奮擊突入、卒拔之。和田山城望風解去。義賢・義弼夜棄城遁。信長三日、下十八城、自入觀音寺、爲政國中、招聚逃亡。使人迎義昭、相見于守山。明日、濟湖、陣于園城寺。湖山之間、無非兵者。三好三黨驚懼、棄京師去。

語釋　澤山（近江）

訓讀　七日、信長、諸軍に將として西す。義賢・義弼、觀音寺城に居り、箕作・和田山等の十八城を修む。和田山は美濃の衝に當るを以て、最も其の壘壁を固くし、守るに精兵を以てし、我が軍の之を攻むるを待つて、首尾相救はんと欲す。信長、其の計を諜知し、乃ち美濃の三將をして、和田山に備へしめ、而して觀音寺に向ふと宣言し、因つて兵を引いて箕作を襲ふ。城兵出で戰ふ。木下秀吉・丹羽長秀等、先鋒と爲り、故に緩く之を攻め、漸く城下に至り、則ち奮擊突入し、卒に之を拔く。和田山城・風を望んで解き去る。義賢・義弼、夜、城を棄てゝ遁る。信長、三日にして十八城を下し、自ら觀音寺に入り、政を國中に爲し、逃亡を招聚す。人をして義昭を迎へしめ、守山に相見る。明日、湖を濟り、園城寺に陣す。湖山の間、兵にあらざる者無し。三好の三黨、

驚き懼れ、京師を棄てゝ去る。

通釋 七日、信長は諸軍に將として、西に向つた。義賢・義弼は近江の觀音寺城に居て箕作・和田等の十八ケ所の城を修築した。中でも和田山は美濃から攻め來る正面に當つてゐるので、最もその土手を堅固にし、選り拔きの強い兵士で之を守り、信長の軍が此の壘を攻めるのを待つて、前後から互に和田山を救ふやうにしようと目論で居た。信長は忍びの者によつて其の計略を知つたので美濃の三將をして和田山に備へさせ、觀音寺に向ふと言ひふらして置いて、それから兵を率ゐて箕作を不意擊ちした。城兵は出でて戰つた。木下秀吉・丹羽長秀等は先鋒となりわざとゆるやかに之を攻め、やつと城下まで來ると急に奮擊して突き込み、遂に之を陷れた。和田山城はその有樣を見て守を解いて去つた。義賢・義弼は夜、城を棄てゝ逃げ去つた。信長は三日間で十八城を降し自ら觀音寺城に入り、國中に政治を爲し逃げたものを招き聚めた。人をして義昭を迎へしめて守山で會見した。翌日琵琶湖を渡つて園城寺に陣取つた。湖も山も、そこら中兵士でないものはなかつた。三好の三黨は驚き恐れ、京都を棄てゝ逃げ去つた。

語釋 美濃三將（稻葉通朝・氏家經國・伊賀範俊。）〇守山（近江）

於是、信長整諸軍入京師。天子使藤原惟房迎勞之粟田口。信長稽首、謂惟房曰、「臣屢辱過寵、不勝悚懼。幸爲臣謝。」立入宗繼又從惟房至。信長指所服戰袍、謂之曰、「是嚮所賜也。」於是、使義昭居清水寺、而自陣東福寺。自出美濃至此、蓋十有二日矣。京

師ノ士民、固ヨリ聞キ二信長ノ威武一、慮リ二其ノ暴掠一、相驚キテ曰ク「信長至ル矣」。皆荷擔シテ而走ル。及ンデ二信長ノ至ルニ一、號令嚴明、秋毫モ不レ犯サ。使ム下菅谷長賴ヲシテ巡二行セ街市一。織田氏ノ養卒、有レバ下與二賈人一爭フ上レ價ヲ者上、輒チ執ヘテ縛シ二之ヲ樹ニ一、以テ視ス二行道ノ者ニ一。於レ是ニ、士民相告ゲテ而歸リ、物情大ニ安シ。

【訓讀】是に於て、信長、諸軍を整へて京師に入る。天子、藤原惟房をして、迎へて之を粟田口に勞せしむ。信長、稽首し、惟房に謂つて曰く「臣、屢過寵を辱うし、悚懼に勝へず。幸に臣の爲めに謝せよ」と。立入宗繼、又惟房に從つて至る。信長、服する所の戰袍を指さし、之に謂つて曰く「是れ曩に賜ひし所なり」と。是に於て、義昭をして清水寺に居らしめ、自ら東福寺に陣す。美濃を出でしより、此に至るまで、蓋し十有二日なり。京師の士民、固より信長の威武を聞き、其の暴掠を慮り、相驚いて曰く「信長至る」と。皆荷擔して走る。信長の至るに及んで、號令嚴明、秋毫も犯さず。菅谷長賴をして街市を巡行せしむ。織田氏の養卒、賈人と價を爭ふ者有り。輒ち執へて之を樹に縛し以て行道の者に視す。是に於て士民相告げて歸り、物情大に安し。

【通釋】そこで信長は諸軍を整へて京都に入つた。天皇は藤原惟房をして、之を粟田口に出迎へさせられ慰勞せしめられた。信長頭を地につけて惟房に向つていふには「私は度々過分の恩寵を辱う致しまして誠に恐れ多いことで御座います。何卒私の爲めに御禮を言上して下さい」と。立入宗繼は又惟房についてやつて來た。信長は自分の着てる陣羽織を指して、宗繼に向つていふには「これはあの時に拜領したものであります」と。そこで義昭をして清水寺に居らせ、自分は東福寺に陣取つた。美濃を出てからこゝに至るまで、思ふに十二日しか

經つて居らぬ。京都の士民は平素から信長の威光武勇を聞いてゐたので、その亂暴掠奪をするのを心配し、相驚いていふのに「そら信長がやつて來た」と。皆荷物を擔いで逃げ出した。信長が來て見ると號令きびしく明かで少しも民を犯すことはしなかつた。菅谷長賴をして町內を巡回監督させた。織田家の飯焚の小者で町の商人と物の値段を爭つたものがあつた。早速その飯焚を捕へて之を樹に縛りつけて、道を行く者に見せつけた。これから士民は告げ合つて京都へ立ちかへり人氣が非常に落ち付いて來た。

語釋 栗田口（京都三條通りの入口。）○養卒（廝養の卒。）

信長聞三黨據山城・攝津・河內諸城、卽日、遣柴田勝家・森可成等、將萬人、涉桂川、攻岩成左通于青龍寺。明日、自以五萬騎繼之。左通望見大懼、以城降。乃以左通爲先導、攻三好政康于芥川。篠原長房于越水。二城皆潰。乃奉義昭於越水、而自入芥川。十月、自攻池田勝政于池田。勝政善拒。我兵縱火奮戰、奪關而入。勝政終降、獻質子五人。乃宥之、加賜二千貫邑。高槻・茨木諸城、聞之、皆降。三好康長等、棄河內走、歸阿波。信長告成事於義昭。於是、使信長自擇邑。信長辭不取。請分之幕府功臣。先是、伊丹親興・畠山高政・三好義繼・松永久秀、數與三黨戰、先送款于美濃。以故分河內于

高政・義繼、分二攝津一于親興・勝政及和田惟政一、令二久秀居一志貴城、以定二大和一、攻二筒井順慶一。順慶降。信長自置二吏于界浦・大津一、乃歸二京師一、陣二清水寺一。

訓讀 信長、三黨、山城・攝津・河内の諸城に據ると聞き、即日、柴田勝家・森可成等を遣はし、萬人に將として、桂川を渉り、岩成左通を青龍寺に攻めしむ。明日、自ら五萬騎を以て之に繼ぐ。左通、望見して大に懼れ、城を以て降る。乃ち左通を以て先導を爲し、三好政康を芥川に、篠原長房を越水に攻む。二城皆潰ゆ。乃ち義昭を越水に奉じ、自ら芥川に入る。十月、自ら池田勝政を池田に攻む。勝政善く拒ぐ。我が兵、火を縱つて奮戰し、關を奪つて入る。勝政、終に降り、質子五人を獻ず。乃ち之を宥し、二千貫の邑を加賜す。高槻・茨木の諸城之を聞いて皆降る。三好康長等、河内を棄てゝ走り、阿波に歸る。信長、成事を義昭に告ぐ。是に於て、信長をして自ら邑を擇ばしむ。信長、辭して取らず。請うて之を幕府の功臣に分つ。是より先き、伊丹親興・畠山高政・三好義繼・松永久秀、數々三黨と戰ひ、先づ款を美濃に送る。故を以て、河内を高政・義繼に分ち、攝津を親興・勝政、及び和田惟政に分ち、久秀をして志貴城に居らしめ、以て大和を定め、筒井順慶を攻めしむ。順慶降る。信長、自ら吏を界浦・大津に置き、乃ち京師に歸りて、清水寺に陣す。

通釋 信長は三好の三黨が山城・攝津・河内の諸城に立て籠つて居ると聞いて、その日の内に柴田勝家・森可成等を遣はし、一萬人に將として桂川を渉つて、岩成左通を青龍寺に攻めさせた。翌日、自ら五萬騎を率ゐて後から繼いだ。左通は望み見て、大に懼れ、城を擧げて降參した。そこで左通をば路案内として三好政康を芥川に、篠原長房を越水に攻めた。この二城は皆潰えた。そこで義昭を越水に居らせ、自分は芥川に入つた。十月、自ら池

田勝政を池田に攻めた。勝政はよく之を拒いだ。我が兵は火を放つて奮ひ戰ひ、城門を奪つて攻め込んだ。勝政は終に降參し、人質五人を差し出した。そこで之を宥して二千貫の領地を加へ與へた。高槻・茨木の諸城は、このことを聞いて皆降參した。三好康長等は河内を棄てて逃げ、本國の阿波に歸つた。信長は事の成就したことを、義昭に報告した。そこで義昭は信長に自ら領地を思ふがまゝに擇び取らせた。信長は斷つて取らなかつた。願うて之を幕府の功臣に分け與へた。これより前、伊丹親興・畠山高政・三好義繼・松永久秀は度々三黨と戰ひ、第一に美濃(信長)に内通した。故に河内を高政・義繼に分け、攝津を親興・勝政及び和田惟政に分け、久秀をして志貴城に居らせて大和を平定せしめ、筒井順慶を攻めさせた。順慶は降參した。信長は自ら役人を界浦・大津に置いて、京都に歸り、淸水寺に陣取つた。

語釋 桂川・靑龍寺(京都の西。)○芥川・越水・池田・高槻・茨木(攝津)○志貴城(大和)

當是時、京畿將士執謁信長、軍門如市。朝廷論信長功、敍從四位下、任左兵衞督。信長辭曰「臣以天之道、得克强賊。敢攘以爲功、辱顯爵。」乃敍從五位下、任彈正忠。義昭私以信長爲管領、賜號副將軍。皆辭不受。義昭賀成事、欲張散樂十三曲于其第。信長諫曰「方今凶賊纔服、四方未平。此非優游之秋也。且諸軍士多思歸者。宜如式而止也。」乃省爲五曲。卽日、釋兵、撤畿內關塞、以便行旅。遠近悅服。義昭病信長有功

無ㇾ賞也、爲ㇾ書褒ㇾ之、呼ニ信長一曰ㇾ父。信長乃歸ニ岐阜一。

訓讀 是の時に當り、京畿の將士、謁を信長に執りて、軍門、市の如し。朝廷、信長の功を論じて、從四位下に敍し、左兵衛督に任ず。信長、辭して曰く「臣、天の道を以て、强賊に克つを得たり。敢て攘んで以て功と爲し、顯爵を辱しめんや」と。乃ち從五位下に敍し、彈正忠に任ぜらる。義昭、私に信長を以て管領と爲し、號を副將軍と賜ふ。皆辭して受けず。義昭、成事を賀し、散樂十三曲を其の第に張らんと欲す。信長諫めて曰く「方今、凶賊纔に服すれども、四方未だ平がず。此れ優游の秋にあらざるなり。且つ諸軍士、歸るを思ふ者多し。宜しく式の如くにして止むべきなり」と。乃ち省きて五曲と爲す。即日、兵を釋き、畿内の關塞を撤し、以て行旅に便にす。遠近、悅服す。義昭、信長の功有つて賞無きを病ふるや、書を爲つて之を褒め、信長を呼んで父と曰ふ。信長乃ち岐阜に歸る。

通釋 この當時、京畿の將士が信長にお目通りをするので、陣屋の門前が市のやうに賑やかであつた。朝廷では信長の功を論じて從四位下に敍し、左兵衛督に任ぜられた。信長は之を辭退していふには「私は正しい天道に從ひましたので、そのお蔭で手強い賊に打ち克つことが出來ました。それを圖々しく自分の手柄となし、立派な爵位を頂戴するやうなことは私には出來ませぬ」と。そこで從五下に敍し、彈正忠に任ぜられた。義昭は私に信長を以て管領となし、號を副將軍と賜はつた。皆辭退して貰はなかつた。義昭は成功を賀して、能樂を十三番、自分の屋敷で催したいと思つた。信長は之を諫めていふのには「この節惡者がやつと歸服したばかりで、まだ四方は平定して居りませぬ。今はそんな呑氣な遊びをしてゐる時ではありませぬ。それに鄕里に還り度いと思つ

て居る諸軍士が多いのです。ほんの型だけにして止めた方が宜しいでせう」と。そこで其の番數を省いて五番とした。その日直ぐに兵士を解散し、畿內の關所や寨を取り拂ひ、旅行者の便利なやうにした。遠近の者は悦び服した。義昭は信長が手柄があり乍ら褒美のないのを心配して感狀を作つて之を譽め、信長を呼んで父といつた。そこで信長は岐阜に歸つた。

語釋 彈正忠（彈正少弼の次官、內外を巡察する役。）

十二年正月、三黨與齋藤龍興等、圍義昭于本國寺。信長聞警、單騎赴援。至則已平。諸國兵後至者五萬。信長初令畿內豪戶、納金于足利氏。獨界浦不奉命。又責三黨。信長宣言屠界浦。浦人號哭乞哀。乃使上贖金二萬貫、就二條武衞陣故址、拓修幕府。四月、成。使義昭居焉、以備寇賊。於是、信長召村井貞勝・島田秀滿・僧日乘等、諭之曰、應仁以來、天下大亂、王室衰微、宮闕墜廢。凡居王土、爲王臣者、誰不嗟悼。信長夙有修擧之志、兵亂倥偬、延而至此。今畿內粗定。當修禁內、以安帝座。雖然、亂後興役、不可急迫。恐擾民情。宜以漸成之。乃留木下秀吉、守京師而歸。遂略近畿諸國。

訓讀 十二年正月、三黨、齋藤龍興等と、義昭を本國寺に圍む。信長、警を聞き、單騎赴き援く。至れば則ち

已に平ぐ。諸國の兵後れ至る者五萬。信長、初め畿内の豪戸に令し、金を足利氏に納れしむ。獨り界浦、命を奉ぜず。又三黨を資く。信長、界浦を屠らんと宣言す。浦人、號哭して哀を乞ふ。乃ち贖金二萬貫を上らしめ、二條武衞陣の故址に就いて、幕府を拓修す。四月、成る。義昭をして居らしめ、以て寇賊に備ふ。是に於て、信長、村井貞勝・島田秀滿・僧日乘等を召し、之に諭して曰く「應仁以來、天下、大に亂れ、王室衰微し、宮闕隳廢す。凡そ王土に居り、王臣となる者、誰か嗟悼せざらん。信長、夙に修擧の志有り。兵亂倥傯、延いて此に至る。今や畿内粗ぼ定る。當に禁内を修め以て帝座を安んずべし。然りと雖も亂後役を興す、急迫なるべからず。恐らくは民情を擾さん。宜しく漸を以て之を成すべし」と。乃ち木下秀吉を留め、京師を守らしめて、歸る。遂に近畿の諸國を略す。

通釋　十二年正月、三好の三黨は齋藤龍興等と聯合して義昭を本國寺に取り圍んだ。信長はその知らせを聞いて、一騎で援けに行つた。來て見ると亂はもう平らいでゐた。諸國の兵で後れて着いたものが五萬からゐた。信長は初め畿内の物持に命じて金を足利氏に奉納させた。たゞ界浦だけがその命令を奉じなかつた。それ許りか又三黨を助けた。信長は界浦の人民を屠り殺すのだと言ひふらした。界浦の人民は泣き叫んでお助けを哀願した。故に罰金二萬貫を上らしめ、二條の斯波家の屋敷跡をそのまゝ拓いて、幕府を立てた。四月に落成した。義昭をしてそこに居らしめて、寇する賊に備へた。こゝに於て信長は村井貞勝・島田秀滿・僧日乘等を呼び寄せ之に諭していふには「應仁以來、天下大に亂れ、皇室は衰へ給ひ、御所は崩れ壞れた。凡そ天子の土地に住ひ天子の家來たる以上、この有様を見て誰か嘆き傷まぬものがあらうや。余は早くから之を修繕し奉り度い志を持つてゐた。併し兵亂の爲めに忙しく今日まで延引した。今や畿内はほゞ平定した。御所を修繕して天子の御座所を安ん

じ奉るべきである。けれども戰亂の後に土木工事を起すのであるから餘り急いで、がみ〳〵申してはならぬ。餘り急いで喧しくいふと、恐らくは人民の心を動搖させるであらう。追々に之を仕上げるやうにしたら宜いだらう」と。そこで木下秀吉を留めて京都を守らせ置いて、自分は歸つて行つた。遂に近畿の諸國を取り定めた。

【語釋】贖金（罪を贖ふ金。）〇倥偬（仕事が多くて忙しいこと。）

七月、遣兵以伊丹親興・池田勝政為先鋒、略但馬、攻山名氏。八月、自將兵五萬、略伊勢、攻北畠具教于大河內。旬餘、具教將拓植某送款信長、殺具教以啓我兵。信長縛拓植、數之曰、「汝為人臣、弑其君、以降敵。不可容也。」乃斬以徇、以次子信雄為北畠氏後、居大河內、食十萬石。三子信孝為神戶氏後、居神戶城、弟信包居上野城、各食五萬石。信雄幼字茶筅、信孝幼字三七、皆庶出也。十一月、信長徑入京師、戒皇宮工事。是歲、置赤黑母衣各十騎、以將士子弟材武者充之。

【語譯】七月、兵を遣はし、伊丹親興・池田勝政を以て先鋒と爲し、但馬を略し、山名氏を攻めしむ。八月、自ら兵五萬に將として、伊勢を略し、北畠具教を大河內に攻む。旬餘、具教の將柘植某、款を信長に送り、具教を殺し、以て我が兵を啓く。信長は柘植を縛し、之を數めて曰く、「汝、人の臣と爲り、其の君を弑し、以て敵に降る。容すべからざるなり」と。乃ち斬つて以て徇へ、次子信雄を以て、北畠氏の後と爲し、大河內に居りて、十

萬石を食ましむ。三子信孝を、神戸氏の後と爲し、神戸城に居り、弟信包を、上野城に居りて、各五萬石を食ましむ。信雄、幼字は茶筅、信孝、幼字は三七、皆庶出なり。十一月、信長、徑に京師に入りて、皇宮の工事を戒む。是の歳、赤黑母衣各十騎を置き、將士の子弟の材武の者を以て之に充つ。

【通釋】七月、兵を遣はし、伊丹親興・池田勝政を以て先鋒となし、但馬を取らうとして山名氏を攻めさせた。八月、自ら兵五萬に將として伊勢を攻め取り北畠具教を大河内に攻めた。十日餘もすると具教の將柘植某が信長に内通し、具教を殺して我が兵を案内した。信長は柘植を縛りつけ之を責めていふには「お前は人の家來となつてゐながら、その君を弑して敵に降參した。そんな不屆者は赦すこと罷りならぬ」と。そこで斬り殺して見せしめとなし、次男の信雄を以て北畠氏の跡嗣となし、大河内に居て十萬石を食ましめた。三男の信孝を以て神戸氏の跡嗣となし、神戸城に居らせ、弟の信包をば上野城に居らせ、各五萬石を食ましめた。信雄は幼名を茶筅といひ、信孝の幼名は三七といひ、皆妾腹の出である。十一月、信長は一路京都に入り、皇居御譜請の工事の指圖をした。この年、赤母衣・黑母衣各、十騎を置いて將士の子弟で武藝才能の勝れた者を以て之に充てた。

【語釋】大河内・神戸（伊勢）〇上野（伊賀）〇赤黑母衣―母衣は鎧の上に着るもの、漢の樊噲は戰に出るとき其の母が衣を脱いで贐とした。噲はそれを鎧の上に着て戰つた。信長はそれを軍用したのである。

元龜元年二月、入京師。四月、張散樂于將軍新第、大會德川氏以下諸將。領義昭爲奏、請進信長官爵。信長固辭。以朝倉義景拒命、自往討之、至敦賀、攻手筒城、一晝夜、拔而居之。進攻金崎、降守將朝倉景恆、以爲先導、欲遂定國內。會淺井長政招六角

氏餘黨、與義景約、夾擊信長。長政爲小谷城主、信長妹婿也。信長得報、不信。警聞益至。信長乃欲自若狹入京師、恐義景追躡。木下秀吉自請留備。信長壯而許之。令諸將人出三四十騎以助秀吉、而引兵西。德川公爲殿、至朽木谷。朽木元綱被甲率兵而迎。信長疑其有異心。松永久秀曰「臣請往質之。卽有他故、刃之而死」。乃馳往諭元綱。元綱脫甲撤兵、以饗信長、送至京師。秀吉亦至。

訓讀 元龜元年二月、京師に入る。四月、散樂を將軍の新第に張り、大に德川氏以下の諸將領を會す。義昭、爲めに奏し、信長の官爵を進めんと請ふ。信長、固辭す。朝倉義景、命を拒むを以て、自ら往いて之を討ち、敦賀に至り、手筒城を攻む。一晝夜にして拔いて之を屠る。進んで金崎を攻め、守將朝倉景恒を降し、以て先導と爲し、遂に國內を定めんと欲す。會〻淺井長政、六角氏の餘黨を招き、義景と約し、信長を夾擊す。長政は小谷城主となれるもの、信長の妹婿なり。信長、報を得て、信ぜず。警聞益〻至る。信長、乃ち若狹より京師に入らんと欲し、義景の追躡を恐る。木下秀吉、自ら留り備へんと請ふ。信長、壯として之を許す。諸將をして人ごとに三四十騎を出だし、以て秀吉を助けしめ、而して引いて西す。德川公、殿となり、朽木谷に至る。朽木元綱、甲を被り兵を率ゐて迎ふ。信長、其の異心有るを疑ふ。松永久秀曰く「臣、請ふ、往いて之を質さん。卽し他の故有らば、之を刃して死せん」と。乃ち馳せ往き元綱を諭す。元綱、甲を脫ぎ兵を撤し、以て信長を饗し、送つて京師に至る。秀吉も亦至る。

【通釋】元龜元年二月、信長は京都に入つた。四月、能樂を將軍の新屋敷で催し、大に德川氏以下の諸大將を集めた。義昭は爲めに申し上げて信長の官爵を進めて下さるやうに願ひ出た。信長は固く辭退した。朝倉義景は信長の言ひ付けを聞かなかつたので信長は自ら行つて之を討ち、敦賀まで來て手筒城を攻めた。一晝夜で陷れて城兵を皆殺にした。進んで金崎を攻め、守將朝倉景恒を降參させたので、彼を路案内とし、更らに國内をも平定しようと思つた。丁度其の時淺井長政が六角氏の殘黨を招き義景と約束して信長を夾み討ちにしようとした。長政は小谷の城主となつてゐたもので、信長の妹婿である。信長はその報告を得ても信用しなかつた。所が變報は益〻やつて來た。故に信長は若狹の方面から京都へ入らうと思つたがさうすると義景が追つかけて來はせぬかと心配した。木下秀吉は自ら踏み留つて守り度いと申し出た。信長はこれを元氣のあることとして許した。諸將をして各〻三四十騎づゝを出して秀吉を助けさせ、そして自分は兵を引きつれて西に向つた。德川公家康が殿となり、朽木谷まで來た。朽木元綱が鎧を着け、兵を率ゐて之を出迎へた。信長は元綱が自分を撃たうとする野心を持つてゐるのではないかと疑つた。松永久秀がいふのに「私が往つて、よく二た心の有無を調べ質して來ませう。もしも怪しいことがあつたら、之を刺し殺して私も相果てませう」と。そこで驅け行つて、元綱を言ひ聞かせ納得させた。元綱は鎧をぬぎ兵士を去らせて、信長を御馳走し京都に送つて行つた。秀吉も亦歸つて來た。

【語釋】手筒・金崎（越前）〇小谷・朽木谷（近江）

信長乃爲義昭徵京畿將士之質、割近江地、令森可成守志賀・宇佐山、柴田勝家守長光寺、佐久間信盛守長原、木下秀吉守長濱、而歸美濃、聞敵兵要于鯰江・市原、

乃以蒲生賢秀等爲鄕導、由千種路歸。六角義賢使善銃者杉谷善住伏山木中、狙信長過、連發二丸、中其衣袖。從兵愕、欲索之。信長不許。金森長近、密與信長易衣、乘其輿而歸、終達岐阜。

【訓讀】信長乃ち義昭の爲めに京畿將士の質を徵し、近江の地を割き、森可成をして志賀・宇佐山を守らしめ、柴田勝家をして長光寺を守らしめ、佐久間信盛をして長原を守らしめ、木下秀吉をして長濱を守らしめて、美濃に歸る。敵兵、鯰江・市原に要すと聞き、乃ち蒲生賢秀等を以て、鄕導と爲し、千種路より歸る。六角義賢銃を善くする者杉谷善住をして、山木の中に伏せしめ、信長の過ぐるを狙ひて、連に二丸を發し、其の衣袖に中つ。從兵愕き、之を索めんと欲す。信長許さず。金森長近、密に信長と衣を易へ、其の輿に乘りて歸り、終に岐阜に達す。

【通釋】そこで信長は義昭の爲めに京畿の將士から人質を出させ、近江の土地を割いて、森可成を志賀・宇佐山を守らしめ、柴田勝家をして長光寺を守らしめ、佐久間信盛をして長原を守らしめ、木下秀吉をして長濱を守らしめ、そして自分は美濃に歸ることにした。所が敵兵が鯰江・市原に待ち伏せして居ると聞いたので蒲生賢秀等を以て路案内となし、千種路から歸つた。六角義賢は鐵砲の名手杉谷善住をして山の木立の中にかくれ、信長の通るのを狙ひ擊たせ、つゞけて二發を射つて信長の袖に中てた。供の兵は吃驚して之を搜さうとした。信長は之を許さなかつた。金森長近はこつそり信長と着物を取り易へて信長の乘物に乘つて歸り、終に無事岐阜に着いた。

語釋　志賀・宇佐山・長光寺・長濱・鯰江・市原（近江）

六月、六角義賢糾合土寇、出野洲川。勝家・信盛邀擊破之。加賜各三萬貫。淺井長政・朝倉義景、壘于比長・刈安、令近江驍將堀某・樋口某守釜川城。信長欲誘降之。美濃人竹中重治、爲信長說二將曰「子守城者、欲何爲」。曰「欲立功」。曰「立功以爲何人乎」。曰「爲淺井・朝倉氏」。曰「織田君爲天子・將軍起義兵。而二氏不助焉、欲乘其危圖之。是天下所切齒。而子爲之立功。爲士者固如此乎」。二將乃因重治降、各獻質子。信長以爲先導、自將繼之。諸壘皆解走。乃攻長政于小谷城。城甚險。森可成・阪井政尚等、與城兵戰于雲雀山、破之。

訓讀　六月、六角義賢、土寇を糾合し、野洲川に出づ。勝家・信盛、邀擊して之を破る。各三萬貫を加賜す。淺井長政・朝倉義景、比長、刈安に壘し、近江の驍將堀某・樋口某をして、釜川城を守らしむ。信長、之を誘降せんと欲す。美濃の人竹中重治、信長の爲めに二將に說いて曰く「子の城を守る者は、何をか爲さんと欲する」と。曰く「功を立てんと欲す」と。曰く「功を立て以て何人の爲めにするか」と。曰く「淺井・朝倉氏の爲めにす」と。曰く「織田君は、天子、將軍の爲めに義兵を起す。而るに二氏助けずして、其の危きに乘じて之を圖らんと

欲す。是れ天下の切齒する所。而るに子は之が爲めに功を立つ。士たる者は固より此の如きか」と。二將乃ち重治に因つて降り、各〻質子を獻ず。信長以て先導と爲し、自ら將として之に繼ぐ。諸壘皆解走す。乃ち長政を小谷城に攻む。城甚だ險なり。森可成・坂井政尚等、城兵と雲雀山に戰ひ、之を破る。

通釋 六月、六角義賢は土地の盜賊を寄せ集めて野洲川に出て來た。勝家・信盛は之を迎へ擊つて破つた。その功で各三萬貫を加增された。淺井長政・朝倉義景は比長・刈安に壘を作り、近江の勇將堀某・樋口某をして、釜川城を守らしめた。信長は之を誘うて降參させようと思つた。すると美濃の人竹中重治が信長の爲めに二將に說いていふには「貴公が城を守つて居らるるは何を仕出來さうと思つてか」と。二將がいふのに「手柄を立てようと思つてであります」と。重治が曰ふのに「然らば手柄を立てて誰れの爲めにしようといふのです」と。曰く「淺井・朝倉氏の爲めにするのです」と。重治はいふのに「織田殿は天子將軍の爲めに義兵を擧げられたのである。而るに淺井・朝倉の二氏はその正しい人を助けないで織田殿の危きにつけ込んで、之を滅さうと思つた。これは天下の者が齒ぎしりをして怒つてゐることであります。然るに貴公はその不義な男の爲めに手柄をお立てなされる。武士たる者は元來そのやうなことをするものでありませうか、一つ考へ直して下さい」と。そこで二將は重治に賴んで降參し、各〻人質を差し出した。信長はこの二人を路案内となし、自ら大將となつて、其の後に繼いだ。諸〻の城壘は皆守を解いて走つた。そこで長政を小谷城に攻めた。その城は甚だ嶮岨であつた。森可成・坂井政尚等は城兵と雲雀山に戰つて之を破つた

語釋 野洲川・比長・刈安・釜川・雲雀山（近江）

信長引諸軍、上虎姬山、議攻城策。佐久間信盛進曰「拔之不難。恐損我兵。主君以身任天下。何必乎此。」信長乃焚城四面而返。令佐佐成政・梁田出羽・中條將監爲殿。柴田勝家曰「此輩、兵不滿千。盍命臣若信盛。」信長曰「否、大兵敗於險地、不可復收。故命此三人。且吾自留號令之。卿等先去。」乃自引近臣二百騎返助三人。三人辭之、迭殿而退。城兵尾擊。三人且戰且卻、遂全軍而歸。遂攻橫山城。城將告急於長政。長政乞援於義景。義景使族景健先往、合兵二萬餘騎、軍于大寄山。我兵望之、攻城益急。

【訳】信長、諸軍を引いて、虎姬山に上り、城を攻むるの策を議す。佐久間信盛進んで曰く「之を拔くは難からず。恐らくは我が兵を損せん。主君、身を以て天下に任ず。何ぞ此に必せん」と。信長、乃ち城の四面を焚いて返る。佐佐成政・梁田出羽・中條將監をして殿とならしむ。柴田勝家曰く「此の輩、兵千に滿たず。盍ぞ臣若しくは信盛に命ぜざる」と。信長曰く「否、大兵、險地に敗るれば、復收むべからず。故に此の三人に命ず。且つ吾れ自ら留り之を號令せん。卿等先づ去れ」と。乃ち自ら近臣二百騎を引き、返つて三人を助く。三人、之を辭し、迭に殿して退く。城兵、尾擊す。三人且つ戰ひ且つ卻き、遂に軍を全うして歸る。遂に橫山城を攻む。城將、急を長政に告ぐ。長政、援を義景に乞ふ。義景、族景健をして先づ往かしめ、兵二萬餘騎を合せ、大寄山に軍す。我が兵、之を望み、城を攻むること益急なり。

【通釋】信長は諸軍を率ゐて虎姫山に上り、城を攻める計策を相談した。佐久間信盛が進んでいふには「これを陷れることは困難ではありませぬ。併しそれが爲めに恐らくは我が兵を損ふことでせう。殿は身を以て天下の重きに任じてゐられます。何もそんなに犧牲を拂つてまで攻め落さねばならぬ所でも御座いません」と。そこで信長は城の四方を燒いて還つた。佐佐成政・梁田出羽・中條將監をして殿とした。柴田勝家がいふのに「この連中はその兵干にも足りません。何故私か或は信盛にお命じなされませんか」と。信長がいふのに「否、大兵が嶮岨な處で負けると、もう收拾することは出來ない。だからこの三人に命じたのである。それに余は自身こゝに踏み留つて之を號令するのだ。そなた達は先きにこゝを立ちのけよ」と。そこで自ら近臣二百騎をつれて引き返し、三人を助けた。三人は之を辭退してかはる〳〵殿して退却した。城兵はこれを追つかけ擊つた。三人は戰ひ乍ら退却し、遂に軍を少しも傷つけないで歸つて來た。それから遂に我が軍は橫山城を攻めた。城將は急を長政に告げた。長政は援助を義景に賴んだ。義景は一族の景健をして先きに往かせ、兵二萬餘騎を合して、大寄山に陣取つた。我が兵は之を望んで益〻きびしく城を攻め立てた。

【語釋】虎姫山・橫山・大寄山(近江)

長政・景健議曰「吾待朝倉公而戰、恐城不守也。宜急救之。今信長陣龍鼻、距此五十町。直馳赴之、人馬皆疲。吾旦日移陣于三田、乘曉襲其中軍、彼必驚擾、莫不敗矣」淺井半助進曰「臣嘗遊美濃、爲稻葉氏客。視信長將略、非驚擾者也。公計恐不中耳」遠

藤某奮曰「彼何足畏。公第進戰。吾雜敵兵、與信長決耳」。議乃決。信長夜望大寄山、顧呼宿直諸將曰「柴田・木下・佐久間在乎」。皆答曰「在」。信長乃召而前之、指示曰「北軍炬火徹宵。是將乘曉襲我也」。乃下令、勒軍爲十三隊、坂井政尙・池田信輝等爲先鋒、以當長政、德川公獨將其兵、當朝倉氏、稻葉通朝助之。乃留丹羽長秀備城兵、而引兵西向。

訓釋 長政、景健議して曰く「吾れ朝倉公を待つて戰はば、恐らくは城守らざらん。宜しく急に之を救ふべし。今、信長、龍鼻に陣し、此を距ること五十町。直に馳せて之に赴かば、人馬皆疲れん。吾れ旦日移つて三田に陣し、曉に乘じて、其の中軍を襲はば、彼れ必ず驚擾し、敗れざる莫からん」と。淺井半助進んで曰く「臣嘗て美濃に遊び、稻葉氏の客と爲る。信長の將略を視るに、驚擾する者にあらざるなり。公の計、恐らくは中らざるのみ」と。遠藤某奮つて曰く「彼れ何ぞ畏るるに足らん。公第だ進み戰へ。吾れ敵兵に雜りて、信長と決せんのみ」と。議乃ち決す。信長、夜、大寄山を望み、顧みて宿直の諸將を呼んで曰く「柴田・木下・佐久間在るか」と。皆答へて曰く「在り」と。信長乃ち召して之を前め、指示して曰く「北軍、炬火、宵を徹す。是れ將に曉に乘じて我を襲はんとするなり」と。乃ち令を下し、軍を勒して十三隊と爲す。坂井政尙・池田信輝等、先鋒と爲り、以て長政に當り、德川公獨り其の兵に將として、朝倉氏に當り、稻葉通朝、之を助く。乃ち丹羽長秀を留

めて城兵に備へ、而して兵を引いて西に向ふ。

通釋 長政と景健とが相談していふには「我々が朝倉殿の來るのを待つて戰爭するといふことだとそれまで恐らくは横山城は守り切れないだらう。今は急いで之を救ふのが宜い。今、信長は龍鼻に陣取り、こゝから五十町も離れてゐる。すぐに馳せて行けば(行けないことはないが)人馬が皆疲れることであらう。我々は明日、三田に移つて陣取り、曉に乘じて信長の本隊を襲つたならば、彼は屹度驚き亂れて敗れないことはあるまい」と。淺井半助が進んでいふには「私は以前美濃に遊んで稻葉氏の客分となつたことがあります。あの信長の大將としての器量を見ると、只今仰せのやうな驚いて亂れるものではありません。公の計略は中つてゐないやうに思ひます」と。遠藤が奮ひ起つていふには「信長など畏るゝには足らない。公には唯だ一圖に進んで戰爭をなさいませ。私は敵兵の中へまぐれ込んで信長と勝負を決めるまでであります」と。そこで評議は一決した。信長は夜、大寄山を望み顧みて宿直の諸將を呼んでいふには「柴田・木下・佐久間は居るか」と。皆答へていふには「居ります」と。そこで信長は呼び寄せて之を進め指し示していふのに「北軍では松明を夜通したいて居る。これはあすの曉方につけ込んで我を襲ふのであらう」と。そこで命令を下して軍勢を揃へ、分けて十三隊となした。坂井政尚・池田信輝等は先鋒となつて長政に當り、德川公家康はひとり其の部下の兵に將として朝倉氏に當り、稻葉政朝が之を助けることとなつた。そこで丹羽長秀を留めて城兵に對し備へて置き、そして自分は兵をつれて西に向つた。

語釋 龍鼻・三田(近江)　○城兵(横山城の兵。)

天明、遇北軍于姉川北。軍大驚。政尙・信輝進戰、不レ利。信長使氏家經國・伊賀經俊擊

其横、通朝顧而助之、大破長政、而景健亦大敗走。獲其驍將遠藤・眞柄等十餘人、斬首三千餘級。横山以下諸城、皆解走。秀吉欲乘勝取小谷。信長不許。使母衣騎傳令收軍、親論賞戰功將士、遂攻磯野員正于澤山、置戍而西、獻捷京師、遂歸岐阜。

訓讀　天明、北軍に姉川に遇ふ。北軍、大に驚く。政尙・信輝進み戰ひ、利あらず。信長、氏家經國・伊賀經俊をして其の横を擊たしむ。通朝、顧みて之を助け、大に長政を破る。而して景健も亦、大に敗走す。其の驍將遠藤・眞柄等十餘人を獲、斬首三千餘級。横山以下の諸城、皆解走す。秀吉、勝に乘じて小谷を取らんと欲す。信長許さず。母衣騎をして、令を傳へ軍を收めしめ、親ら戰功の將士を論賞す。遂に磯野員正を澤山に攻め、戍を置いて西し、捷を京師に獻じ、遂に岐阜に歸る。

通釋　夜明け方に北軍と姉川で出遇つた。北軍は非常に驚いた。政尙・信輝は進み戰つたが負けた。信長は氏家經國・伊賀經俊をして其の横を擊たせた。通朝は顧みて之を助け、大に長政を破つた。そして景健も大に敗れて逃げ出した。その勇將、遠藤・眞柄等十餘人を討ち取り、斬首三千餘級もあつた。横山以下の諸城は皆守を解いて逃げた。秀吉は勝に乘じて小谷を取らうと思つた。信長は之を許さなかつた。母衣の武者をして命令を傳へて軍を取り收めさせ、親ら手柄を立てた將士を論議して賞を與へた。それから磯野員正を澤山に攻め、守備兵を置いて西し、京都に勝利を報告して遂に岐阜に歸つた。

語釋　姉川・澤山（近江）

八月、三好三黨與齋藤龍興、糾兵一萬、據野田・福島。信長自將討之。九月、陣天滿林。義昭陣中島。塡壕薄埤。而一向僧賊以大坂應賊。信長曰、彼長袖者、何能爲。遣佐佐成政赴拒、而自繼之。成政等冒矢石進。將領多死。我兵潰走、賊軍乘之。前田利家揮槍大呼、手殪數十人。賊辟易而去。利家幼爲信長近士、忤旨被逐。私從軍、先登、獲首級者數。信長乃復之、擢爲尾張荒子城主。至是力戰、以全信長軍。信長軍方困於三城間、淺井長政・朝倉義景時之也、合兵三萬、軍比叡、將焚坂下。宇佐山城將森可成出拒、死之。信長弟信治、及尾藤某・道家某、皆死。北軍遂攻宇佐山。留後・武藤等能拒。北軍乃過大津、縱火醍醐・山科。

訓読 八月、三好の三黨、齋藤龍興と、兵一萬を糾し、野田・福島に據る。信長、自ら將として之を討つ。九月、天滿林に陣す。義昭、中島に陣す。濠を塡めて埤に薄る。而して一向の僧賊、大坂を以て賊に應ず。信長曰く、「彼長袖者何ぞ能く爲さん」と。佐佐成政を遣はし赴き拒がしめ、而して自ら之に繼ぐ。成政等、矢石を冒して進む。將領多く死す。我が兵潰走し、賊軍、之に乘ず。前田利家、槍を揮ひて大に呼び、手づから數十人を殪す。賊、辟易して去る。利家、幼より信長の近士と爲り、旨に忤ひて逐はる。私に軍に從ひ、先登して首級を獲ること數

なり。信長乃ち之を復し、擢んで、尾張の荒子の城主と爲す。是に至つて、力戰し、信長の軍を全うせり。信長の軍、方に三城の間に困しむや、淺井長政・朝倉義景、之を時とし、兵三萬を合せ、比叡衢に軍し、將に坂下を焚かんとす。宇佐山の城將森可成、出で、拒ぎ之に死す。信長の弟信治、及び尾藤某・道家某、皆死す。北軍遂に宇佐山を攻む。留後・武藤等能く拒ぐ。北軍乃ち大津を過ぎ、火を醍醐・山科に縱つ。

〔通釋〕八月、三好の三黨は齋藤龍興と兵一萬を集め合せ、野田・福島に立て籠つた。信長は自ら將となつて之を討つた。九月、天滿森に陣取つた。義昭は中島に陣取つた。堀を埋めて敵の土手に迫つた。しかるに一向宗の僧賊が大坂を擧げて賊に味方をした。信長がいふのに「かの長袖の坊主共に何が出來るか」と。佐佐成政を遣はして、行つて之を拒がしめ、そして自分は其の跡から繼いで進んだ。成政等は矢丸を冒して進んだ。この時大將どもが多く討死した。わが兵は潰え走り、賊軍は之に乘じて攻め來つた。前田利家は槍を揮つて大聲に呼ばゝり乍ら手づから數十人を倒した。賊は閉口して逃げ去つた。利家は幼い時から信長の近習となつてゐたが御機嫌を損して逐ひ出されてゐた。所が自分勝手に從軍先登し、首級を得ること度々であつた。そこで信長は前のやうにしてやり、擢んで、尾張の荒子の城主となした。この度の戰爭で力の限り戰ひ、信長の軍隊を全うせしめたのである。信長の軍が丁度野田・福島・大坂の三城の間で苦しんで居た時のこと、淺井長政・朝倉義景はいゝ機會にして、兵三萬を合せて、比叡の辻に陣取り、坂下を焚かうとした。宇佐山の城將森可成は出で、之を拒いで討死した。信長の弟の信治及び尾藤某・道家某も皆討死した。北軍は遂に宇佐山を攻めた。留守の大將武藤等がよく拒いだ。そこで北軍は大津を通り過ぎ醍醐・山科に火をつけた。

〔語釋〕野田・福島・天滿林・中島（攝津）○比叡衢・坂下・宇佐山（近江）○留後（留守居。）

信長聞警曰「吾藉得拔三城、使奴輩蹂躙京師、則我之恥也」乃令攝津・河内諸將備三城、而還救之。三城兵大起、尾之、奪舟於江口渡。諸軍患之。信長自視于岸曰「水淺可渡也」乃亂流皆濟、整軍徐退。敵不敢逼。遂達京師。且日、向北軍。北軍驚、上叡山陣。信長陣志賀・宇佐山、分兵攻叡山。毎夜襲擊。而使人說其僧徒曰「汝等能捨彼而助我、則他日使汝寺封如故。否則中立不倚、莫有所助。二者不聽、他日必縱火赭山、鏖殺僧徒、不釋一人」僧徒弗聽。

【訓読】信長、警を聞いて曰く、「吾れ藉ひ三城を抜くを得るも、奴輩をして京師を蹂躙せしめば、則ち我の恥なり」と。乃ち、攝津・河内の諸將をして、三城に備へしめ、而して還つて之を救ふ。三城の兵、大に起つて、之に尾し、舟を江口渡に奪ふ。諸軍、之を患ふ。信長自ら岸に視て曰く、「水淺く、渡るべし」と。乃ち流を亂つて皆濟り、軍を整へ徐に退く。敵敢て逼らず。遂に京師に達す。且日、北軍に向ふ。北軍驚き、叡山に上つて陣す。信長、志賀・宇佐山に陣し、兵を分ちて叡山を攻む。毎夜襲擊す。而して人をして其の僧徒に說かしめて曰く、「汝等能く彼を捨てゝ我を助けば、則ち他日、汝の寺封をして、故の如くならしめん。否らざれば則ち中立して倚らず、助くる所有る莫れ。二者聽かざれば、他日必ず火を縱ち山を赭にし、僧徒を鏖殺して、一人を釋さず」と。僧徒聽かず。

通釋 信長は警報を聞いて曰ふには「味方がよし、三城を陷れたとしても、奴等の爲めに京都を踏みにじられてはわが耻である」と。そこで攝津・河内の諸將をして三城に備へさせ、そして自分は引き返して之を救はうとした。三城の兵は大擧して後を追つかけ、江口渡で舟を奪つた。諸軍は之に困らされた。信長は自身、岸に近づいて視ていふのに「水は淺いから渡れるぞ」と。そこで流を横切つて皆渡り、軍隊を整へて靜かに退却した。敵は敢て逼らなかつた。かくて遂に京都に着いた。翌日、北軍に向つた。北軍は驚いて、叡山に上つて陣取つた。信長は志賀宇佐山に陣取り、兵を分けて、叡山を攻めた。每晩襲ひ擊つた。そして人をして叡山の僧徒に說かしめていふには「お前等が能く北軍を捨て、我が軍を助けるならば後日お前等の寺領を元々通りにしてやらう。若しさうなければ中立してどちらにも附かず、どちらも援けるな。この二つの內どれも聞かぬとなら後日、屹度火をつけて、山を赤土にし、坊主どもを一人殘らず皆殺にしてやるぞ」と。僧侶はこの申し出でを聞き入れなかつた。

語釋 江口渡（攝津）○志賀（近江）

十月、信長遣菅谷長頼・佐佐成政、言於北軍曰「吾與公等相持曠日、若士卒勞倦何。請一戰以決勝敗」長政等不答。六角義賢糾近江士兵、將夾攻信長。木下秀吉自橫山、丹羽長秀自澤山、來援、行破土兵、至於志賀。信長登樓望之、驚以爲義賢至。至則秀吉・長秀也。二人以首級謁曰「北人深入至此、自送死耳。請獮擊之、莫使一騎還」信

長大喜。長政等請和。不許。六角義賢來降。十一月、堅田人猪飼甚介等屬信長、請得一將。坂井政尚自請而往。北軍來爭。政尚力戰死之。會大雪。北軍慮歸路梗、數請和。弗許。乃請之義昭。義昭親來信長營、言之。信長乃聽之、各解兵歸國。

訓讀 十月、信長、菅谷長頼・佐佐成政を遣はし、北軍に言はしめて曰く、「吾れ公等と相持して日を曠しうす。士卒の勞倦するを若何せん。請ふ、一戰して以て勝敗を決せん」と。長政等答へず。六角義賢、近江の士兵を糾し、將に信長を夾攻せんとす。木下秀吉は横山より、丹羽長秀は澤山より來り援け、行くゆく士兵を破り、志賀に至る。信長樓に登り、之を望み、驚き以て義賢至ると爲す。至れば則ち秀吉・長秀なり。二人、首級を以て謁して曰く、「北人深く入つて此に至るは、自ら死を送るのみ。請ふ、之を獮撃し、一騎をして還らしむる莫かれ」と。信長、大に喜ぶ。長政等、和を請ふ。許さず。六角義賢來り降る。十一月、堅田の人猪飼甚介等、信長に屬し、一將を得んと請ふ。坂井政尚、自ら請うて往く。北軍來り爭ふ。政尚、力戰して之に死す。會大に雪ふる。北軍歸路の梗るを慮り、數和を請ふ。許さず。乃ち之を義昭に請ふ。義昭親ら信長の營に來り、之を言ふ。信長乃ち之を聽し、各兵を解いて國に歸る。

通釋 十月、信長は菅谷長頼・佐々成政を遣はし、北軍に言はしめていふには「余は貴公達と相對陣して空しく日を送つて居る。これでは士卒が倦み疲れて困る。何卒一いくさして勝負を決めようではないか」と。長政等は返答しなかつた。六角義賢は近江の士兵を集めて、將に信長を夾み討ちしようとした。木下秀吉は横山から丹羽

長秀は澤山からそれ〴〵援けに來り、途中土兵を打ち破り、志賀に着いた。信長は物見櫓に登つて之を望み見て驚いて義賢が來たのだと思つた。來て見るとそれは秀吉・長秀であつた。二人は首級を持つてお目通りしていふには「北國の軍勢が深か入りし、こゝまで來ましたのは自分で生命を免れに來たのであります。之を皆殺にして一騎も還らしめてはなりませぬ」と。信長は非常に喜んだ。長政等は和睦を申し込んで來た。併し許さなかつた。六角義賢は降參して來た。十一月、堅田の人猪飼甚介等は信長に從ひ、一人の大將を得たいと願ひ出た。坂井政尚は自分から願ひ出て出かけて行つた。北軍がやつて來て爭つた。政尚は根限り戰つて死んだ。丁度その時大雪が降つた。北軍は歸り路が雪で塞がるのを心配して度々和睦を願ひ出た。併し許さなかつた。そこで之を義昭に賴んだ。義昭は自身信長の陣營に來て其のことを申し入れた。だから信長も之を承知し、各兵を解散して國に歸つた。

【語釋】堅田（近江）

二年二月、磯野秀昌以澤山降長秀。五月、淺井長政以二萬騎攻箕浦。秀吉赴援、擊郤之。先是、一向賊起於長島、攻信長弟信興于小木江、殺之。五月、信長入長島、縱火而退。賊乘風雨、迫嶮要擊。氏家經國死之。八月、以柴田勝家為先鋒、入近江、出小谷・山本之間、縱火而退。兩城兵八千出蹋之。勝家返戰三次。敵不復出。信長再發、攻拔新村・下小川・常樂寺。

【訓讀】二年二月、磯野秀昌、澤山を以て長秀に降る。五月、淺井長政、二萬騎を以て箕浦を攻む。秀吉赴き援け、撃つて之を卻く。是より先き、一向の賊長島に起り、信長の弟信興を小木江に攻めて之を殺す。五月、信長、長島に入り、火を縱つて退く。賊、風雨に乘じ、嶮に迫りて要撃す。氏家經國、之に死す。八月、柴田勝家を以て先鋒と爲し、近江に入り、小谷・山本の間に出で、火を縱つて退く。兩城の兵八千、出でゝ之を躡す。勝家返り戰ふこと三次。敵復出でず。信長再び發し、攻めて新村を拔き、小川・常樂寺を下す。

【通釋】二年二月、磯野秀昌は澤山を擧げて長秀に降參した。その五月、淺井長政は二萬騎をつれて箕浦を攻めた。秀吉は援けに行き撃つて之を退けた。これより前、一向宗の僧賊が長島に起り、信長の弟信興を小木江に攻めて之を殺した。五月、信長は長島に入り、火をつけて退却した。賊は風雨につけ込んで嶮阻な處に迫つて喰ひ止め、待ち受けて之を撃つた。氏家經國は討ち死した。八月、柴田勝家を先鋒となし、近江に討ち入り、小谷・山本兩城の間に出で、火をかけて退いた。兩城の兵八千人が出て來て、後から追つかけ撃つた。勝家は、三度引きかへして戰つた。敵はもう二度と出て來なかつた。信長は再び兵を繰り出し、攻めて新村を陷れ、小川・常樂寺を下した。

【語釋】箕浦（近江）○長島・小木江（伊勢）○小谷・山本・小川・常樂寺（近江）

九月、陣二勢多一、命二諸將一縱レ火焚二叡山一。諸將皆失レ色。佐久間信盛等諫曰、「自二桓武帝創二建此寺一、幾二千年于此一。爲二王城之鎭一。莫二敢或レ犯者一。今而滅レ之。其如レ之何。」信長曰、「吾除二國賊一耳。」

汝輩何沮我邪。吾欲定四海興王道之衰。勞筋骨、輕軀命、未嘗一日安居。去歲略攝津、兩城將陷。長政・義景擧兵窺我後。吾舍兩城而返、棲之山上、將殲之也。遣人諭僧徒、陳說禍福、而彼竟不服。務右凶徒、以梗王師。此非國賊乎。今而不行芟除、乃貽患於天下也。且聞、彼犯其律、茹葷蓄妾、束閣誦呪。安在其鎭王城也。圍而燔之、勿使有遺類。諸將乃服。明日、圍叡山、燔中堂及二十一社、僧徒・婦女、無老少皆斬之。以志賀郡賜明智光秀、城坂下使居之。歸岐阜、令丹羽長秀誅高宮某于澤山、以其通大坂也。是歲、皇宮成。信長貸金于京畿豪戶、令每月納息縣官、以充供御。且爲計畫廷臣家計、興廢繼絕。

訓讀　九月、勢多に陣し、諸將に命じ、火を縱ち叡山を焚かしむ。諸將、皆色を失ふ。佐久間信盛等諫めて曰く「桓武帝、此の寺を創建せしより、此に幾千年、王城の鎭たり。敢て犯すある者なし。今にして之を滅す。其れ之れを如何」と。信長曰く「吾れ國賊を除くのみ。汝が輩、何ぞ我を沮むや。吾れ四海を定めて王道の衰へたるを興さんと欲す。筋骨を勞し、軀命を輕んじ、未だ嘗て一日も安居せず。去歲攝津を略し、兩城將に陷らんとす。長政・義景兵を擧げて我が後を窺ふ。吾れ兩城を舍てゝ返りしは、之を山上に棲ましめ、將に之を殲さんとす。

したればなり。人を遣はし僧徒を諭し、禍福を陳說せしむ。而るに彼れ竟に服せず。務めて凶徒を右け、以て王師を梗ぐ。此れ國賊に非ずや。今にして芟除を行はざれば、乃ち患を天下に貽さん。且つ聞く、彼れ其の律を犯し、葷を茹ひ妾を畜へ、誦呪を束閣すと。安んぞ其の王城を鎭むるに在らんや。圍んで之を燔き、遺類有らしむる勿れ」と。諸將乃ち服す。明日、叡山を圍み、中堂及び二十一社を燔き、僧徒・婦女、老少と無く皆之を斬る。志賀郡を以て、明智光秀に賜ひ、坂下に城いて之に居らしめて、岐阜に歸る。丹羽長秀をして高宮某を澤山に誅せしむ。其の大坂に通ずるを以てなり。是の歲、皇宮成る。信長、金を京畿の豪戶に貸し、每月、息を縣官に納れしめ、以て供御に充つ。且つ爲めに廷臣の家計を計畫し、廢を興し絕を繼ぐ。

【通釋】九月、信長は勢田に陣取り諸將に命じて火をつけて叡山を焚かしめた。諸將は皆驚いて顏色をかへた。佐久間信盛等が意見していふには「桓武天皇がこの寺を始めてお建てなされてからもう何千年にもなりますが、この叡山は京都の鎭護となつてゐます。敢て之を犯すものもありません。それを今日滅すと云ふことは、如何なもので御座いませう」と。信長がいふのに「余は國賊を除くのである。お前達は何故余の企を妨げるのか。余は天下を平定して天子の道の衰へたのを起さうと思つてゐるのである。骨身を疲らし、一命を輕んじて一日たりともまだ安樂にしたことはないのだ。去年、攝津を攻め取り、野田・福島の兩城が將に陷らうとした。その時、長政・義景は兵を擧げて我が後方を窺つた。余が兩城を棄てゝ引き返したのは長政・義景を比叡山の上に追ひ込み、そこに據らせて一擧に之を皆殺しにしようとしたのである。人を遣つて叡山の僧徒を諭し、禍福を說いて聞かせた。而るに彼等僧侶は遂に服從しなかつた。それ所か却つて惡る者どもを助けて我が天皇の軍を邪魔しようと務めてゐる。これはつまり國賊ではないか。今の內に之を芟り除いて置かなければ厄介者を天下に殘して置くやう

なものである。それに聞く所に據ると、彼等は僧侶の戒律を犯し、なまぐさい物を食べ、妾を蓄へ、お經などは高閣に束ね置いてゐるといふことだ。それで京城を鎭護するなどとは聞いても呆れる。取り圍んで之を燒き、一人も殘る者の無いやうにせよ」と。そこで諸將も納得した。翌日叡山を取り圍み、中堂及び二十一社を燒き拂ひ、僧侶や女は老少の別なく皆之を斬り殺した。志賀郡を明智光秀に賜はり、坂下に城を築いてそこに居らしめて、岐阜に歸つた。丹羽長秀をして高宮某を澤山で誅せしめた。それは高山が大坂の一向宗の賊に內通してゐたからである。この年に御所が出來上つた。信長は金を京畿の物持ちに貸し、毎月利息を朝廷の役人に納めさせ、それで天皇の御入用に充てることにし、その上に公卿衆の經濟方面のこと迄も色々と取り計つてやり、廢れてゐた儀式を興し、絕えてゐた職務等を繼ぎ起すことゝした。

語釋　王城之鎭（比叡は京城の鬼門に當つて、京城を鎭護してゐる。）〇茹レ葷（酒肉五辛の類で、くさいものをいふ。）〇中堂（根本中堂。）

三年三月、縱火小谷・山本城下、從軍志賀、攻木戶・田中二城、置戍焉。遂入京師、陣妙覺寺。義昭使信長置第于武者小路。固辭。不許。乃令村井貞勝董役。不日而成。細川昭元・岩成左通來降。大坂僧徒亦贈物納款焉。三好義繼・松永久秀、私與畠山氏鬭、築城交野。信長素疾二人。欲因事誅之。於是、遣兵攻交野城。兵夜遁。久秀竟降。七月、信長、長子信忠、幼字奇妙、始被鎧、從信長攻淺井長政于小谷。令木下秀吉別攻山

本聞朝倉義景來援、壘於虎姫山、待之。義景以二萬騎至。信長曰「及其未陣、襲之、莫使安營也」將士乘夜更襲之。北人患之。多來降者。會義昭使來諭弭兵。乃令秀吉守虎姫山、宮部某守宮部壘、鑿山開道、以便往來。

訓譯 三年三月、火を小谷・山本の城下に縱ち、從つて志賀に軍し、木戸・田中の二城を攻め、戍を置く。遂に京師に入り、妙覺寺に陣す。義昭、信長をして、第を武者小路に置かしむ。固く辭す。許さず。乃ち村井貞勝をして役を董さしむ。不日にして成る。細川昭元・岩成左通來り降る。大坂の僧徒も亦、物を遺り、款を納る。三好義繼・松永久秀、私に畠山氏と鬭ひ城を交野に築く。信長、素より二人を疾む。事に因つて之を誅せんと欲す。是に於て、兵を遣はし交野を攻めしむ。城兵、夜遁れ、久秀竟に降る。七月、信長の長子信忠、幼字は奇妙、始めて鎧を被り、信長に從ひ、淺井長政を小谷に攻む。木下秀吉をして別に山本を攻めしむ。朝倉義景來り援くと聞き、虎姫山に壘して、之を待つ。義景、二萬騎を以て至る。信長曰く「其の未だ陣せざるに及んで之を襲ひ、營に安んぜしむる莫れ」と。將士、夜に乘じて更之を襲ふ。北人、之を患ふ。來り降る者多し。會 義昭の使來り諭して兵を弭めしむ。乃ち秀吉をして虎姫山を守らしめ、宮部某をして宮部の壘を守らしめ、山を鑿ち道を開き、往來に便す。

通釋 二年三月、信長は火を小谷・山本の城下につけ、移つて、志賀に陣取り、木戸・田中の二城を攻め、守備の兵を其處に置いた。そして更に京都に入つて妙覺寺に陣取つた。義昭は信長をして屋敷を武者小路に置かしめ

た。信長は固く之を辭退した。併し許さなかつた。そこで村井貞勝をして普請を監督させた。日ならずして出來上つた。細川昭元・岩成左通が降參して來た。大坂の僧徒も亦物を贈つて內通した。三好義繼・松永久秀は私に畠山氏と戰ひ、城を交野に築いた。信長は平素から義繼・久秀の二人を憎んでゐた、何かのことで之を殺して終はふと思つて居た。城を築いたりしたので、これをきつかけに兵を遣はして交野を攻めさせた。城兵は夜、遁れ久秀は遂に降參した。七月、信長の長子信忠、幼名は奇妙といつたが、それが初めて鎧を着て信長に從ひ、淺井長政を小谷に攻めた。木下秀吉をして別に山本を攻めさせた。朝倉義景が援けに來たと聞いたので、虎姬山に壘を搆へて、之を待つた。義景は二萬騎を率ゐてやつて來た。信長がいふのに「敵がまだ陣取らない內に之を不意擊ちして陣屋に落ちつかせろな」と。將士は夜に乘じて更代で之を襲うた。北軍は之には困つた。降參して來るものが多かつた。丁度其の時義昭の使者がやつて來て戰爭を止めるやうに諭した。そこで秀吉をして虎姬山を守らせ、宮部某をして宮部の壘を守らしめ、山を切り開き、道を通じて往來に便利なやうにした。

語釋　木戶（近江）〇交野（河內）

當是時、長政・義景、與越後國主長尾謙信、通好以抗信長。而武田信玄亦以甲斐・信濃兵西出。信長遣佐久間信盛・平手汎秀、援德川氏、距信玄於東海。不利。汎秀死。義昭時與信長惡。欲乘是時圖之。先是、信長病義昭多失行、上書諫曰「幕下之入京師也、信長首請朝參勿敢或怠。幕下諾之、後乃違焉。夫光源公怠於王事、天譴立至。信

長竊爲幕下懼之、忠臣亡賞、而佞夫得官、以虐下民、下民何罪。罪人納金、卽便宥之。僞稱叡山賦稅、以掠民財、或陽責征課、而陰蠲之、以買私恩、此皆非幕下所宜爲。朝議欲改元龜之號、而幕下特愛費用、不果從、遠近有惡御所之目、信長竊爲幕下羞之。

訓讀 是の時に當り、長政・義景、越後の國主長尾謙信と好を通じ、以て信長に抗す。而して武田信玄も亦、甲斐・信濃の兵を以て西に出づ。信長、佐久間信盛・平手汎秀を遣はし、德川氏を援け、信玄を東海に距がしむ。利あらず。汎秀死す。義昭、時に信長と惡し。是の時に乘じて之を圖らんと欲す。是より先き、信長、義昭の失行多きを病ひ、上書して諫めて曰く幕下の京師に入るや、信長、首として、朝參し、敢て怠ること勿れと請ふ。幕下、之を諾し、後乃ち違ふ。夫れ光源公、王事に怠り、天譴立ちどころに至る。信長、竊に幕下の爲めに之を懼る。忠臣、賞亡くして、佞夫、官を得、以て下民を虐す。下民、何の罪ぞ。罪人、金を納るれば、卽便ち之を宥す。僞つて叡山の賦稅と稱し、以て民財を掠め、或は陽に征課を責めて、陰に之を蠲き、以て私恩を買る。此れ皆幕下の宜しく爲すべき所にあらず。朝議、元龜の號を改めんと欲す。而して幕下、特に費用を愛しみ、從ふことを果さず、遠近、惡御所の目有り。信長、竊に幕下の爲めに之を羞づ。

通釋 この當時、長政・義景は越後の國主長尾謙信と修好して、信長に對抗した。そして武田信玄も亦甲斐・信濃の兵をつれて西の方へ出て來た。信長は佐久間信盛・平手汎秀を派遣して、德川氏を助けて、信玄を東海に防が

しめた。併しうまく行かなかつた。そして汎秀は討ち死した。その頃義昭は信長と仲が惡かつた。そこで義昭はこの機會に乘じて信長を滅さうと思つた。これより前、信長は義昭が不行跡が多いのを心配して、上申して意見をなしていふのには、貴公が京都に入られた時、私は眞先きに參内を怠らないやうにお願ひ申しました。貴公も之を御承諾下されましたのに、その後の有樣を見ると却つて參内なされない。夫れ御兄君の光源院殿（義輝）は天子樣のことを怠けられた爲めに天の罰が立どころにやつて來たのです。私はひそかに貴公の爲めにも或はそのやうになるのではないかと懼れて居ります。忠臣に御褒美を與へられないで口の利口な者が官職を得、そして下民を虐げてゐるのであります。下民に何の罪がありませうや。又罪人どもが金を出せばすぐにその罪を宥しておやりになる。それから僞つて叡山の税だといつて、人民の財産を掠め取つたり、或はうはべは運上租税を責めながら、蔭では之を許して、私の恩義を賣り付けておいでになる。是れ等のことは皆貴公の爲さるべき筋合の事ではありませぬ。朝廷の相談で元龜といふ年號を換へようとなされた。而るに貴公はその爲めに生ずる費用を惜しんでとう〳〵從はれなかつた。そんなこんなで遠近の者が皆貴公のことを惡御所と名づけてゐます。私はひそかに貴公の爲めに之を羞ぢます。

信長築二條城、以備寇賊、而欲舍徙他所、糶城內粟、以蓄金銀。諸國將士多貴金賤粟、遺其武備、以爲遯隱之計、皆倣幕下之爲也。信長所納紀綱之僕、無罪奪俸、來乞哀者數。請而不得復。信長無面目以對此輩。且聞下教諸國、徵馬及金囊白、凡百需

索、宜囑信長。信長將立辨之。今陰有此教。信長惑焉。信長志欲與幕下協心戮力、撥亂略、以興王政。豈有他哉。願幕下、勿信讒言、以保終吉、斥佞進忠、恢弘先業也。至如儒人、最宜親近之、以鑑古今興衰。信長生長兵亂之間、曠於文學、自度處事多違故典。所以常懷愧恥也。妄疏所見。唯幕下留意焉。義昭弗納。遂相嫌隙。

訓讀 信長、二條城を築き、以て寇賊に備ふ。而るに舍てゝ他所に徙らんと欲し、城内の粟を糶し、以て金銀を蓄ふ。諸國の將士、多く金を貴び粟を賤しみ、其の武備を遺れ、以て遯隱の計を爲す。皆幕下の爲に倣ふなり。信長納るゝ所の紀綱の僕、罪爲くして俸を奪はれ、來つて哀を乞ふ者數なり。請うて復するを得ず。信長、面目の以て此の輩に對する無し。且つ聞く教を諸國に下し、馬及び金を徵すと。曩に白す、凡百の需索は、宜しく信長に囑すべし。信長將に立ちどころに之を辨ぜんとすと。今陰に此の教有り。信長惑ふ。信長、志幕下と、心を協せ、力を戮せ、亂略を撥し、以て王政を興さんと欲す。豈に他有らんや。願はくは幕下、讒言を信ずることなく、以て終吉を保ち、佞を斥け忠を進め、先業を恢弘せよ。儒人の如きに至りては、最も宜しく之を親近し、以て古今の興衰を鑑みるべし。信長、兵亂の間に生長し、文學に曠く、自ら度るに、事を處する、多く故典に違ふと。常に愧恥を懷く所以なり。妄に所見を疏す。唯だ幕下意を留めよ―と。義昭納れず。遂に相嫌隙す。

通釋 私は二條城を築いて寇をする賊に對して備へました。而るに貴公は折角の私の苦心を棄てゝ外の處へ移らうとなされ、城内にある穀類を賣り出して金銀となし、その金銀を蓄へられました。諸國の將士は多く金を貴

んで穀類を賤しみ、その武備を忘れ、後日隱居するときの計ばかりやつてゐます。これは皆貴公の仕業を習つたものであります。私が差し上げました所の大小の事務を掌る御家來で、罪もないのに俸祿を奪ひとられ、私の所へ來て泣き付く者が度々御座います。その都度お願ひ申して見ましたが元々通りにして戴くことは出來ませんでした。私はこの連中に對し會はす顏もないのであります。それに聞く所によれば貴公には命令を諸國に下して、馬や黄金を徴發されてゐるさうです。先達て申し上げました、何んでも御入用の物は皆私にお頼み下さい。さすれば私は卽座に之を支辨しますと。然るに今ひそかに命令を諸國に下されました。これは何故ですか私には分かり兼ねます。私の志は貴公と心を合せ、力を合せ、騷亂の計略を爲すものを拂ひ除けて、立派な天子の政を興さうと思つてゐるのであります。決して其れ以外に考があるのではありません。何卒貴公は讒言を信ぜらるゝことなく、いつまでも幸福を維持なされ、佞人を退け忠臣を進めて御先代の御事業を大にお弘めなさい。學者のやうな者は最も之を親しみ近づけ、古今の興亡盛衰の話をお聞きなされ、それをよく鑑みられたら宜いでせう。私は兵亂の間に生長して、文學は暗く、自分でも考へてゐますが、事を處理するのに古例に違つたことを隨分やつてゐることゝ思ひます。常に心に愧づかしいと思つて居ることです。無暗に思ひ付いたことを申し上げました。たゞ貴公のお氣をつけられんことをお頼み申します」と。義昭はその言葉を納れなかつた。遂に兩人は仲違ひになつた。

語釋　紀綱之僕（左傳僖公二十四年に出づ。大小の事務を掌る臣。）

天正元年、義昭潛ニ發シレ使、諭シニ信玄及ビ謙信ニ、約スレ夾ニ攻セント信長ヲ。又諭シニ安藝ノ國主毛利輝元ニ、以テ爲ス

後據。信長使村井貞勝請和義昭。義昭不聽。二月、義昭自城于石山・堅田、以山岡・磯貝・渡部等守之、徵發兵食。信長聞之曰「吾終不得不用兵」遣柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・蜂屋賴高、渡勢多、招石山兵降之。勝家乃留備京師、而長秀等攻堅田拔之。三月、信長自將至大津。細川藤孝・荒木村重迎降。乃進入京師、觀兵請和。義昭弗聽。乃圍二條城。義昭窮蹙、使人出言曰「自今後、盡聽卿所言」信長拜謝、行成而返、至守山、遣諸將攻六角義弼于鯰江。召丹羽長秀、耳語曰「室町氏必再擧。再擧必阻勢多・矢橋。汝伐澤山木、造兵艦十餘艘。」乃歸岐阜。尾張人有梶川某者、喜博奕、爲衆所擯。信長愛其勇、與以善馬。曰「緩急以此樹功。」梶川感喜而退。

〔訓讀〕天正元年、義昭、潛に使を發し、信玄及び謙信を諭し、信長を夾攻せんと約す。又安藝の國主毛利輝元を諭し、以て後援と爲す。信長、村井貞勝をして、和を義昭に請はしむ。義昭聽かず。二月、義昭自ら石山・堅田に城き、以て山岡・磯貝・渡部等を以て、之を守らせ、兵食を徵發す。信長、之を聞いて曰く「吾れ終に兵を用ひざるを得ず」と、柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・蜂屋賴高を遣はし、勢多を渡り、石山の兵を招かしめて之を降す。勝家乃ち留つて京師に備ふ。而して長秀等、堅田を攻めて、之を拔く。三月、信長自ら將として大津に至

る。細川藤孝・荒木村重、迎へ降る。乃ち進んで京師に入り、兵を觀し和を請ふ。義昭聽かず。乃ち二條城を圍む。義昭・窮蹙し、人をして出でゝ言はしめて曰く「今より後、盡く卿の言ふ所を聽かん」と。信長拜謝し、成を行つて返り、守山に至り、諸將を遣はし、六角義弼を鯰江に攻めしむ。丹羽長秀を召し、耳語して曰く「室町氏必ず再擧せん。再擧せば必ず勢多・矢橋を阻まん。汝、澤山の木を伐り、兵艦十餘艘を造れ」と。乃ち岐阜に歸る。尾張の人梶川某なる者あり。博奕を喜み、衆の擯くる所と爲る。信長、其の勇を愛し、與ふるに善馬を以てす。曰く「緩急あらば此を以て功を樹てよ」と。梶川、感喜して退く。

【通釋】天正元年、義昭はひそかに使者を出して信玄と謙信に諭して、信長を夾み討ちにしようと約束した。又安藝の國主毛利輝元を諭して後楯にした。信長は村井貞勝をして義昭に和睦を申し込ませた。義昭は聽き入れなかつた。二月、義昭は自ら石山・堅田に城を築いて、山岡・磯貝・渡部等に之を守らせ、兵糧を徵發した。信長は之を聞いて曰ふのに「これではどうしても兵を用ひない譯に行かぬ」と。柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・蜂屋賴高を遣はし、勢多を渡り石山の兵を招かせて之を降した。そこで勝家は留まつて京都に備へた。そして長秀等は堅田を攻めて之を陷れた。三月、信長は自ら大將となつて大津に行つた。細川藤孝・荒木村重が之を迎へて降參した。そこで進んで京都に入り、兵の威勢を示して、和睦を乞うた。義昭は承知しなかつた。そこで信長は二條城を取り圍んだ。義昭は動きがとれぬやうになつて人をして城から出でゝ言はしめて曰ふには「この後は何でも卿の言ふことを聽くであらう」と。信長は拜謝し、和睦を結んで還り、守山に至り、諸將を遣はして六角義弼を鯰江に攻めしめた。丹羽長秀を召し出して之にさゝやいて曰ふには「室町殿（義昭）は屹度また旗擧げするだらう。もし再擧すれば必ず勢多・矢橋を防ぐであらう。お前は澤山の木を伐つて兵艦十餘艘を作つて置け」と。そこで岐阜に

歸つた。尾張の人に梶川某といふ人があつた。賭博が好きで多勢の者に擯斥されて居た。信長はその男の勇氣を愛して之に善い馬を與へた。曰ふのに「一急の起つた場合には此の馬に乘つて功名を立てよ」と。梶川は感激し喜んで引き退がつた。

〔語釋〕石山・堅田（近江）

七月、義昭再擧兵、留伊勢某・三淵某與廷臣二名、守二條、而自據槇島、阻宇治河、爲固。報至岐阜。信長卽起、直馳至澤山、乘其兵艦、夜濟朝妻渡口。日、達坂下、直入京師、縱火呼譟。烟焰漲天。義昭兵距勢多・矢橋者、返顧而潰。京師人大驚曰「織田公豈飛來邪」。信長疾攻二條、陷之、斬三淵。城兵皆降。以爲先鋒、向槇島、自陣柳山、遣稻葉通朝・伊賀範俊等、將二萬人、渡平等院、佐久間信盛・木下秀吉等、將五萬人、渡五箇莊。於是、梶川某騎信長所賜馬、曉出河岸、大呼自名、亂流而渡。通朝麾兵從之、與信盛・秀吉合擊、奪柵縱火而入。信長在柳山、左右望烟起、相謂曰「我軍方渡矣。誰先登者」。信長曰「必梶川也」。槇島既破、義昭請降。信長令信盛・秀吉處置之。二人乃奉義昭、從于若江、令細川昭元守槇島。通朝來白曰「臣爲梶川所先、意甚憾焉。然恐其單進致

死也。故繼之信長幷賞二人。

【訓讀】七月、義昭、再び兵を擧げ、伊勢某・三淵某と、廷臣二名とを留めて、二條を守らしめ、而して自ら槇島に據り、宇治河を阻み固と爲す。報、岐阜に至る。信長卽ち起ち、直に馳せて澤山に至り、其の兵艦に乘り、夜、朝妻渡を濟る。旦日、坂下に達し、直に京師に入り、火を縱ちて呼譟す。烟焰、天に漲る。義昭の兵、勢多・矢橋に距ぐ者、返顧して潰ゆ。京師の人、大に驚いて曰く「織田公、豈に飛來するか」と。信長、疾く二條を攻めて、之を陷れ、三淵を斬る。城兵皆降る。以て先鋒と爲し、槇島に向ひ、自ら柳山に陣し、稻葉通朝・伊賀範俊等を遣はし、二萬人に將として、平等院に渡らしめ、佐久間信盛・木下秀吉等を五萬人に將として、五箇莊に渡らしむ。是に於て、梶川某、信長賜ふ所の馬に騎して、曉に河岸に出で大に呼び自ら名いひ、流を亂つて渡る。通朝、兵を麾いて之に從ひ、信盛・秀吉と、合擊し、柵を奪ひ火を縱つて入る。信長柳山に在り。左右烟起るを望み、相謂つて曰く「我が軍方に渡る。誰か先登する者ぞ」と。信長曰く「必ず梶川ならん」と。槇島既に破れ、義昭、降を請ふ。信長、信盛・秀吉をして、之を處置せしむ。二人乃ち義昭を奉じ、若江に徙し、細川昭元をして、槇島を守らしむ。通朝來り白して曰く「臣、梶川の先んずる所と爲り、意甚だ憾む。然れども其の單進、死を致すを恐る。故に之に繼ぐ」と。信長、二人を幷せ賞す。

【通釋】七月、義昭は再び兵を擧げ、伊勢某・三淵某と公卿二名とを留めて、二條を守らせ、そして自分は槇島に立て籠り、宇治川を防いで固めとした。その報告が岐阜に來た。信長は早速起つて、直樣馳せて澤山に至り、準備してあつた兵艦に乘つて夜、朝妻の渡を渡つた。翌日、坂下に達し、直に京都に討ち入り、火をつけて譟ぎ立

てた。烟や焔が天に漲つてゐた。勢多・矢橋を拒ぎ守つて居た義昭の兵はこの樣をふりかへり見て潰え崩れた。京都の人は非常に驚いて曰ふのに「織田公は飛んで來られたのだらうか」と。信長は急に二條を攻めて之を陷れ、三淵を斬つた。城兵は皆降參した。そこでこの兵を先鋒として槇島に向ひ、自ら柳山に陣取り、稻葉通明・伊賀範俊等を遣はして二萬人に將とし、宇治河を渡つて平等院に至らしめ、佐久間信盛・木下秀吉等をして五萬人を率ゐて同じく河を渡つて五箇莊に至らしめた。この時に梶川某は信長から賜はつた馬に乘つて朝早く河岸に出で、大聲に叫んで自分の名乘りを上げ、流を横ぎつて渡つて行つた。通朝は兵を指圖してその後に從ひ、信盛・秀吉と聯合して攻め撃ち、柵を奪ひ取り、火をつけて突き込んだ。この時信長は柳山に居た、左右の臣が烟の上るを遙に見て言ひ合ふのに「我が軍が今、河を渡つた。誰が先登したらう」と。信長がいふのに「それは屹度梶川だらう」と。その內に槇島が敗れて義昭は降參を申し出た。信長は信盛・秀吉をして宜いやうに之を處分させた。そこで二人は義昭をつれ若江に移し、細川昭元をして槇島を守らせた。通朝が來て申し上げるには「私は梶川の爲めに先登されて非常に殘念に思つて居ります。併し放つて置けば梶川が獨りで進んで討ち死するだらうと恐れました。それですぐ後から繼いで出ました譯で御座います」と。信長は梶川と通朝の二人をどちらも賞した。

語釋　槇島・柳山（山城）○朝妻（近江）○五箇莊（宇治）○若江（河內）

於是、織田氏遂代足利氏、出令京師、蠲戸租、免徭役、賑窮民、旌節孝。以村井貞勝爲所司代、收兵而返。遂以兵艦攻拔木戸・田中二城、賜之明智光秀。令秀吉・藤孝攻淀

城、斬岩成左通、令荒木村重攻和田惟政于芥川城。村重素以雄豪聞。部兵皆驍。義昭之變、首應信長、迎謁于大津。而貌甚偉。會有獻饅頭者。信長拔佩刀、貫饅頭于鋒、以啗村重。村重進開口受之。信長笑曰「好男子、攝津十三郡、任汝剪取之。」於是、命攻惟政、榜賞格曰「獲主將者予萬金。獲褊裨者千金。獲士卒者百金。」村重將中川清秀熟視之、以墨勾其首條、觀者無測其意。既而惟政曉出城、雜士卒、修守備。清秀伏濠側、跳出斬其首。信長乃賞清秀以萬金、以池田勝政觀望不至、逐之高野、以和田・池田氏邑、盡賜村重。

【訓讀】是に於て、織田氏、遂に足利氏に代り、令を京師に出だし、戸租を蠲き、徭役を免じ、窮民を賑し、節孝を旌す。村井貞勝を以て所司代と爲し、兵を收めて返る。遂に兵艦を以て、攻めて木戸・田中の二城を拔き、之を明智光秀に賜ふ。秀吉・藤孝をして、淀城を攻めしめ、岩成左通を斬り、荒木村重をして、和田惟政を芥川城に攻めしむ。村重素より雄豪を以て聞ゆ。部兵皆驍なり。義昭の變に、首として信長に應じ、迎へて大津に謁す。面貌甚だ偉なり。會〻饅頭を獻ずる者有り。信長、佩刀を拔き、饅頭を鋒に貫き、村重に啗はしむ。村重進み、口を開いて之を受く。信長笑つて曰く「好男子、攝津十三郡は、汝の之を剪取するに任す」と。是に於て、命じて惟政を攻めしむ。賞格を榜して曰く「主將を獲る者には萬金を予へん。褊裨を獲る者には千金、士卒を獲る者

には百金」と。村重の將中川淸秀、之を熟視し、墨を以て其の首條に勾す。觀る者其の意を測る無し。既にして惟政、曉に城を出で、士卒に雜り、守備を修む。淸秀、濠側に伏し、跳り出で、其の首を斬る。信長乃ち淸秀を賞するに萬金を以てす。池田勝政、觀望して至らざるを以て、之を高野に逐ふ。和田・池田氏の邑を以て、盡く村重に賜ふ。

通釋 これから織田氏はとうとう足利氏に代つて、命令を京都に出して、戸別税を除き、夫役を許し、貧乏人を救ひ賑はし節義孝行の者を表彰した。村井貞勝を所司代となし、兵をまとめて歸つた。遂に兵艦を引きつれて、木田・田中の二城を陷れ、之を明智光秀に賜はつた。秀吉・藤孝をして淀城を攻めさせて、岩成左通を斬り殺し、荒木村重をして、和田惟政を芥川城に攻めさせた。村重は平生から雄膽豪氣を以て世に知られてゐた。その部下の兵士も皆勇氣があつた。義昭の變事があつた際に眞つ先きに信長に味方し、大津に出迎へてお目通りした。その顏つき樣子が非常にすぐれて立派であつた。丁度其の時饅頭を獻上した者があつた。信長は腰の刀を拔いて饅頭を切先に突き刺して村重に食はせた。村重は進み出で、口をあけ、之を受けて食つた。信長は笑つていふのに「立派な男だ、攝津の十三郡はお前の自由に切り取つて宜いぞ」と。そこで命じて惟政を攻めさせた。褒美の等級を立札に書いて曰ふのに「大將を討ち取つた者には一萬兩を與へよう。副將を討ち取つた者には千兩を與へよう。士卒を討ち取つた者には百兩を與へよう」と。すると村重の大將の中川淸秀は之をぢつと見て、墨で以てその最初の「大將を討ち取つた者には一萬兩を與へよう」といふ箇條書の所へ勾の記しをつけた。觀て居た者はなんの積りでそんなことをしたのか分らなかつた。その內に曉方になつて惟政は城を出で士卒の中に混り守備を整へてゐた。淸秀は堀端に隱れてゐて跳り出で、惟政の首を斬つた。そこで信長は一萬兩を與へて淸秀を賞した。池田勝

政は形勢を觀望してやつて來なかつたので之を高野山に追つ拂つた。和田・池田の領地を全部村重に賜はつた。

語釋 墨勾（墨で「と記しをつけること。）

八月、歸岐阜。居三日、淺井氏將阿閉某來降。信長復發、下月瀨城、軍于山田。淺井氏兵守燒尾、朝倉氏兵守大嶽、與山田相持。信長遣勝家・信盛、陣于高月、絕越前援路。朝倉義景聞之、以二萬騎來、軍于田邊。信長又遣稻葉通朝、助勝家。燒尾守將因阿閉納款、以導我兵。我兵遂圍大嶽、夜冒風雨疾攻。守將乃降。信長令信忠守虎姬山、不破光治守大嶽、而進下丁野。遣使高月、戒諸將曰「今夜北軍必走。宜尾擊鏖之」。諸將皆莫信。且應曰「諾諾」。夜半、義景果焚營而遁。信長大呼起曰「敵走矣」。與左右五十騎馳出。有先馳者。信長誰何之。答曰「利家・成政」。其他十餘人皆迭對。信長戲曰「吾欲先登爲諸君所先」。乃聯轡疾馳。及敵于刀根山、斬其褊裨二十三人・雜兵二千。金松某執甲首以謁。跣而蹀血。信長勞之、手取芒鞋一兩、賜之曰「吾每臨戰、懸之刀欛、以備闕乏。今而有用矣」。

【訓讀】八月、岐阜に歸る。居ること三日、淺井氏の將阿閉某來り降る。信長復發し、月瀬城を下し、山田に軍す。淺井氏の兵、燒尾を守り、朝倉氏の兵、大嶽を守り、山田と相持す。信長、勝家・信盛を遣はし、高月に陣し、越前の援路を絕たしむ。朝倉義景、之を聞き、二萬騎を以て來り、田邊に軍す。信長、又稻葉通朝を遣はし、勝家を助けしむ。燒尾の守將、阿閉に因り款を納れ、以て我が兵を導く。我が兵、遂に大嶽を圍み、夜、風雨を冒して疾く攻む。守將乃ち降る。信長、信忠をして虎姬山を守らしめ、不破光治をして大嶽を守らしめて、進んで丁野を下す。使を高月に遣はし、諸將を戒めて曰く「今夜、北軍必ず走らん。宜しく尾撃して之を鏖にすべし」と。諸將皆信ずる莫し。且らく應へて曰く「謹んで諾す」と。夜半、義景、果して營を焚いて遁る。信長、大に呼び、起つて曰く「敵走る」と。左右五十騎と馳せ出づ。先づ馳する者あり。信長、之を誰何す。答へて曰く「利家・成政」と。其の他十餘人、皆迭に對ふ。信長戲れて曰く「吾れ先登せんと欲す。諸君の先んずる所と爲る」と。乃ち轡を聯ねて疾く馳す。敵に刀根山に及び、其の褊裨二十三人・雜兵二千を斬る。金松某、甲首を執りて以て謁す。跣にして血を蹀む。信長、之を勞し、手づから芒鞋一兩を取り、之に賜ひて曰く「吾れ戰に臨む每に之を刀欄に懸けて、闕乏に備ふ。今にして用あり」と。

【通釋】八月、信長は岐阜に歸つた。それから三日目に淺井氏の大將阿閉某が降參して來た。信長は再び兵を出して近江の月瀬城を攻め下し、山田に陣取つた。其の時、淺井氏の兵は燒尾を守り、朝倉氏の兵は大嶽を守り、山田(織田方)と對抗してゐた。信長は勝家・信盛を遣はし、高月に陣取り越前からの援路を絕ち切らせた。朝倉義景は之を聞いて二萬騎を率ゐて來り、田邊に陣取つた。信長は又稻葉通朝を遣はして勝家を助けさせた。燒尾の守將は阿閉に賴んで內通することを申し入れ、味方の兵を案內した。我が兵は遂に大嶽を圍み、夜、風雨を冒し

て急に攻め立てた。守つてゐた大將は堪へ切れず降參した。信長は信忠をして虎姫山を守らしめ、不破光治をして大嶽を守らしめ、自分は進んで丁野を下した。使を高月に遣はし、諸城を戒めていふには「今夜、北軍は屹度逃げるだらう。逃げたら追ひ擊つて之を皆殺にしろ」と。諸將は誰もこれを信じる者はなかつた。併し一時答へていふのに「承知致しました」と。夜中になると義景は案の定兵營を燒いて逃げ出した。信長は大聲で叫んで起ち上つていふには「そら敵が逃げるぞ」と。左右の五十騎と驅け出した。所が信長より一と足先きに馳せてゐるものがある。信長は「誰だ」と咎めた。答へていふのに「利家・成政」と、その外の十餘人も皆順々に名乘つた。信長は戲れていふのに「余は先登しようと思つてゐた。遂に諸君に先んぜられて終つた」と。そこで手綱を並べて急いで馳せた。刀根山で敵に追ひ付き、その副將二十三人雜兵二千人を斬り殺した。金松某は鎧武者の首を執つてお目通りした　跣足で血を蹂んだ爲め足が眞赤になつてゐた。信長は之を慰勞し手づから草鞋一足を取り出して之に賜はつていふには「余は戰場に出る度に草鞋を刀の柄に引つかけて置いて、無くなつた時の用意にしてゐた。今それが始めて役に立つたわい」と。

語釋　燒尾・大嶽・高月・田邊（近江）　○刀根山（越前）　○甲首（鎧武者、左傳の字面。）

信長兩日下十四城、留敦賀三日、徵降將質子、進軍龍門寺。義景棄一乘谷、匿大野。勝家・通朝等、分兵搜索。平泉僧徒懼、請鄕導。通朝貨土人、得義景所在、誘降其族景鏡。景鏡迫義景使自殺。信長誅黨類、撫降附、爲政國中、使人齎義景首、梟之京師。以

降將前波長俊、爲越前假守、明智光秀等監之。引兵返虎姬山、淺井長政與父久政、保守兩城。信長遣秀吉、登粒羅岡、絕兩城之間、使久政・長政自殺、以其地賜秀吉。九月、遣勝家、攻鯰江、降六角義弼、獲杉谷善住、生埋之地、以竹鋸鋸其首。十一月、入朝。遣佐久間信盛、攻殺三好義繼。於是、淺井・朝倉・六角・三好氏皆滅。

訓讀 信長、兩日に十四城を下し、敦賀に留ること三日、降將の質子を徵し、進んで龍門寺に軍す。義景、一乘谷を棄てゝ、大野に匿る。勝家・通朝等、兵を分ちて搜索す。平泉の僧徒懼れ、鄕導せんと請ふ。通朝、士人に貨し、義景の在る所を得、其の族景鏡を誘ひ降す。景鏡、義景に迫り自殺せしむ。信長、黨類を誅し、降附を撫し、政を國中に爲し、人をして義景の首を齎し、之を京師に梟せしむ。降將前波長俊を以て、越前の假守と爲し、明智光秀等、之を監す。兵を引いて虎姬山に返る。淺井長政、父久政と兩城を保守す。信長、秀吉を遣はし、粒羅岡に登り、兩城の間を絕たしむ。久政・長政をして自殺せしめ、以て其の地を以て秀吉に賜ふ。九月、勝家を遣はし、鯰江を攻めしめ、六角義弼を降す。杉谷善住を獲て、之を地に生埋し、竹鋸を以て其の首を鋸る。十一月、入朝す。佐久間信盛を遣はし、攻めて三好義繼を殺さしむ。是に於て、淺井・朝倉・六角・三好氏、皆滅ぶ。

通釋 信長は二日間で十四城を降し、敦賀に三日間留つて、降參した大將の人質を受け取り、進んで龍門寺に陣取つた。義景は一乘谷を棄てゝ大野に匿れた。勝家・通朝等は兵を分けて義景を搜し求めた。平泉寺の僧徒は懼

れて案内させて呉れと申し込んだ。通朝は土地の人に金をやつて義景の在りかを知り、義景の一族の景鏡を誘つて降參させた。景鏡は義景に迫つて、自殺させた。信長は義景の一味徒黨を誅し降參して來た者をいたはり、政を國中に行ひ、人をして義景の首を持たせ、京都で曝しものにさせた。降參した大將前波長俊を越前の假りの國守となし、明智光秀等が之を監督した。かくて信長は兵をつれて虎姫山に引き返した、淺井長政は父の久政と小谷・山本の兩城を保ち守つて居た。信長は秀吉を遣はし、粒羅岡に登つて兩城の間の連絡を絕ち切らせた。そして久政・長政をして遂に自殺せしめ、淺井氏の領分を秀吉に賜はつた。九月勝家を遣はし、鯰江を攻めさせ、六角義弼を降した。杉谷善住（前に信長を鐵砲で狙擊した坊主）を捕へて之を地中に生埋にし、竹の鋸で其の首を引き切つた。十一月、信長は京都に入朝した。佐久間信盛を遣はして、三好義繼を攻めて殺させた。かくて淺井・朝倉・六角・三好の諸氏は皆滅んで終つた。

語釋　龍門寺・一乘谷・大野（越前）○平泉（越前）○使㆓自殺㆒（賢松寺に圍み自殺せしめた。）○粒羅岡（近江）

日本外史新釋　卷十三終

日本外史新釋 卷十四

徳川氏前記

織田氏 下

天正二年正月元日、近畿將士、盡賀正于岐阜。信長賜之酒。酒三行、謂衆曰「我有佳肴。請侑歡焉。」令左右取一函來、置之座上。衆屬目焉。信長觴柴田勝家、而手開其蓋、則義景。長政首也。塗以金粉。諸將皆笑曰「有此好下物、何辭滿酌也。」信長曰「吾經略京畿、爲二患所礙、數年矣。卿等爲吾積勞累苦、以得致誅斃。」因各賜刀劍、極驩而罷。佐佐成政留而白曰「臣無似、從諸將之後、叨被洪恩。不知所報。唯願君不自足焉、遂定四方也。」信長大悅、握成政手、入室內、與談政治。侍史武井夕菴自傍贊之曰「不圖、

成政能爲二此言一。君勿レ忽焉。信長厚賜二二人一。

【訓読】天正二年正月元日、近畿の將士、悉く正を岐阜に賀す。信長、之に酒を賜ふ。酒三行、衆に謂つて曰く「我れ佳肴有り。請ふ、飲を侑めん」と。左右をして一函を取り來らしめ、之を座上に置く。衆、目を屬す。信長、柴田勝家に觴して、手づから其の蓋を開けば、則ち義景・長政の首なり。塗るに金粉を以てす。諸將皆笑つて曰く「此の好下物有り、何ぞ滿酌を辭せん」と。信長曰く「吾れ京畿を經略して、二患の礙ふる所と爲ること數年。卿等、吾が爲めに勞を積み、苦を累ね、以て誅夷を致すを得たり」と。因つて各刀劍を賜ひ、驩を極めて罷む。佐佐成政、留つて白して曰く「臣、無似、諸將の後に從ひ、叨に洪恩を被る。報ゆる所を知らず。唯だ願はくば、君自ら足れりとせず、遂に四方を定めよ」と。信長、大に悅び、成政の手を握り、室內に入り、與に政治を談ず。侍史武井夕菴、傍より之を贊して曰く「圖らざりき、成政能く此の言を爲さんとは。君忽にする勿れ」と。信長、厚く二人に賜ふ。

【通釋】天正二年正月元日、近畿の將士は全部岐阜に登城して年賀の禮をした。信長は之に酒を賜はつた。酒が三廻りしてから信長は列座の多勢の者に向つていふには「余に好い肴がある。それを肴にしてもつと飲んで貰ひ度い」と。左右の者に命じて一つの箱を持つて來させた。それを座上に置いた。皆の者は何が出るか目を注いだ。信長は柴田勝家に杯を差し乍ら、自分手づから、其の蓋をあけるとそれは義景・長政の首であつた。金の粉が塗つてあつた。諸將は笑つていふのに「こんな好い肴があるのにどうしてなみ／＼頂戴せずにゐられませうや」と。信長がいふのに「余は京畿を經營攻略するのにこの二人の爲めに數年間も妨げられた。諸君は余の爲めに苦勞を

積み重ねて呉れたのでこのやうに殺し滅すことが出來たのである」と。因つて銘々に刀劍を賜はり、十分歡を盡して宴を罷めた。佐佐成政が跡に殘つて申し上げるには「私は愚か者で諸大將の後について行つただけでありますが不相應に大恩を被りました。どうして御恩返しをしていゝか分りませぬ。唯だお願ひ致し度きは殿はこれだけのことで御滿足なさらずして、これから天下を御平定なさるやうにしたいものです」と。信長は非常に悦び成政の手を握つて部屋の中に入り、與に政治上の話をした。祐筆の武井夕菴が傍から調子をあはせていふには「成政がこんな事を申し上げようとは思ひがけなかつたことである。何卒殿には輕々に思召さるるな」と。信長は手厚く成政・夕菴の二人に物を賜はつた。

語釋　義景(朝倉)　○長政(淺井)　○金粉(金箔)

二月、甲斐兵侵東美濃、圍明地城。信長與信忠出距之。城內有叛者、城陷。乃修高野・遠利二城、令河尻鎭吉・池田信輝守之。時武田信玄既死、長尾謙信猶存。信長與武田氏絕、通好於長尾氏、厚贈之。三月、信長入朝、寓于相國寺。詔敍從三位、任參議。以足利義政故事、奏乞東大寺所藏名香、自至多門城、遣使令截香一寸八分、而三分之、自取其一、分賜其二於諸將。四月、還京師。大坂賊出要之。擊破而過。五月、歸岐阜。

訓讀　二月、甲斐の兵、東美濃を侵し、明地城を圍む。信長、信忠と、出でて之を距ぐ。城内に叛く者有りて、

城陷る。乃ち高野・遠利二城を修め、河尻鎭吉・池田信輝をして之を守らしむ。時に武田信玄既に死し、長尾謙信猶ほ存す。信長、武田氏と絕ち、好を長尾氏に通じ、厚く之に賂る。三月、信長、入朝し、相國寺に寓す。詔して從三位に敍し、參議に任ぜらる。足利義政の故事を以て、奏して東大寺に藏する所の名香を乞ひ、自ら多門城に至り、使を遣はし香一寸八分を截らしめて、之を三分し、自ら其の一を取り、其の一を諸將に分賜す。四月、京師に還る。大坂の賊出でて之を要す。擊ち破つて過ぐ。五月、岐阜に歸る。

【通釋】二月、甲斐の兵が東美濃を侵して、明地城を取り圍んだ。信長は信忠と與に出かけて之を拒いだ。城內に謀叛人が出て陷落した。そこで高野・遠利の二城を修繕し、河尻鎭吉・池田信輝をして、之を守らしめた。その頃武田信玄はもう死んで終ひ、長尾謙信はまだ生存して居た。信長は武田氏と絕交し、好を長尾氏に通じ、手厚く物を遣つた。三月、信長は京都に入朝し、相國寺に寓宿してゐた。詔して從三位に敍し、參議に任ぜられた。足利義政の故例によつて奏聞して奈良の東大寺に藏してゐる名香蘭奢待を頂戴し度いとお願ひ申し、自ら大和の多門城に出かけ、使を遣はしてその香を一寸八分剪らせ、それを三分して自ら其の一を取り、あとの一を諸將に分け賜はつた。四月、多門城から京都に還つた。大坂の賊が出て來て、之を待ち伏せてゐた。打ち破つてそこを通り過ぎた。五月、信長は岐阜に歸つた。

【語釋】明地・高野・遠利（美濃）〇名香（聖武天皇の時に西蕃より得られた香。蘭奢待と名づく。）〇大坂賊（本願寺の臣下、間大進等。）

六月、武田勝頼出兵遠江、圍高天神城。徳川氏使使請援信長・信忠。將兵至荒井、會城陷。還至吉田。徳川公來謝曰、藉公餘威、得以保國至此。信長勞之曰、卿爲我守東

面、以距二武田氏一、使三我毋二東顧之患一。吾得三以速定二京畿一、卿之功也。」乃令三左右四人擔二二革嚢、盛以二黄金一、以賜レ之曰「薄以酬二將士之勞一」乃還。

訓読 六月、武田勝頼、兵を遠江に出だし、高天神城を囲む。徳川氏、使をして援を請はしむ。信長・信忠、兵に將として荒井に至る。會〻城陥る。還つて吉田に至る。徳川公、來り謝して曰く「公の餘威を藉りて、以て國を保ちて此に至ることを得たり」と。信長、之を勞して曰く「卿、我が爲めに東面を守り、以て武田氏を距ぎ、我をして東顧の患なからしむ。吾れ以て速に京畿を定むるを得たるは、卿の功なり」と。乃ち左右四人をして二革嚢を擔はしめ、盛るに黄金を以てし、以て之に賜ひて曰く「薄か以て將士の勞に酬ゆ」と。乃ち還る。

通釈 六月、武田勝頼は兵を遠江に繰り出し、高天神城を取り圍んだ。徳川氏は使を信長に遣はして援助を請はしめた。信長・信忠は兵に將として荒井に着いた。丁度其の時に高天神城は陥落した。だから還つて、吉田に至つた。徳川公家康はそこへやつて來て謝して曰ふには「公の餘威によつて國を維持して今日に至る事が出來ました」と。信長は之を勞らうて曰ふには「貴殿は私の爲めに東方面を守つて武田氏を拒ぎ、私をして東方を顧みる心配なからしめてくれた。私が存外早く京畿を平定することの出來たのは全く貴殿の手柄である」と。そこで左右の四人をして皮袋二つを擔がせ其の中に黄金を一ぱい入れて、之を家康に賜はつていふには「いさゝか、これを以て將士の骨折に報い申さう」と。そこで還つて行つた。

語釈 新井(遠江) 〇吉田(今の豊橋。)

七月、征長島。信長之滅淺井・朝倉氏、遂攻長島、屠二城、置戍而還。遇雨。賊據險夾射。林新三郎殿戰死之。信長怒曰、以草賊故、多亡吾良。吾必覆其巢窟、殲其醜類、以弔死者。已而長島應武田氏。信長覺之、益怒。於是、與信忠將兵數萬、三道赴討。信雄與瀧川一益・九鬼嘉隆、以舟師會之、行破賊兵而進。賊入保五城。八月、大鳥居城賊、夜乘風雨遁。柴田勝家等追擊、殲男女二千人、截其耳鼻、盛之一船、送致長島。篠橋城降。九月、長島賊出城乘船而去。我弓銃手豫伏堤側、擊鏖之。餘衆可八百、突入我中軍。信長叔父信次・庶兄信廣・弟秀成・從弟信成、迎戰死之。賊奔大坂。遂燔殺三城男女二萬人。臭聞數里。乃以長島賜瀧川一益、食北伊勢五郡。

【訓讀】 七月、長島を征す。信長の淺井・朝倉氏を滅すや、遂に長島を攻めて、二城を屠り、戍を置いて還る。雨に遇ふ。賊、險に據り夾み射る。林新三郎、殿戰して之に死す。信長怒つて曰く「草賊の故を以て、多く吾が良を亡ふ。吾れ必ず其の巢窟を覆し、其の醜類を殲し、以て死者を弔はん」と。已にして長島、武田氏に應ず。信長、之を覺り、益〻怒る。是に於て、信忠と、兵數萬に將として、三道より赴き討つ。信雄、瀧川一益・九鬼嘉隆と、舟師を以て之に會し、行くゆく賊兵を破つて進む。賊入りて五城を保つ。八月、大鳥居城の賊、夜、風

雨に乘じて遁る。柴田勝家等、追擊し、男女二千人を殲し、其の耳鼻を截りて、之を一船に盛り、長島に送致す。篠橋城降る。九月、長島の賊、城を出でて船に乘つて去る。我が弓銃手、豫め堤側に伏し擊つて之を鏖にす。餘衆八百ばかり、突いて我が中軍に入る。信長の叔父信次・庶兄信廣・弟秀成・從弟信成、迎へ戰ひて之に死す。賊、大坂に奔る。遂に三城の男女二萬人を燔殺す。臭、數里に聞ゆ。乃ち長島を以て瀧川一益に賜ひ、北伊勢五郡を食ましむ。

通釋　七月、長島を征伐した。信長が淺井・朝倉二氏を亡ぼした時、更に長島を攻めて、二城を屠り、戍兵を置いて引き還した。途中で雨に遇つた。すると賊は險阻に立て籠つて信長を夾み射つた。林新三郞はこの時殿して討死した。信長は怒つていふのに「こんな小盜の爲めに多くの善い將士を失つた。余は屹度その根據地を攻め覆し、その惡者どもを皆殺しにして死者を弔つて見せる」と。その內に長島は武田氏に味方した。信長は之を覺つて益怒つた。そこで信忠とともに兵數萬に將として三道から赴き討つた。信雄は瀧川一益・九鬼嘉隆とともに海軍を率ゐて之に會し、途中賊兵を破つて進んだ。賊は逃げ込んで五城を保持した。八月、大鳥居城の賊は夜風雨につけ込んで逃げ出した。柴田勝家等は追ひ擊つて男女二千を皆殺しにし、その耳や鼻を切つて之を一舟に載せて長島に送り屆けた。その內に篠橋城も降參して來た。九月、長島の賊は城を出て、舟に乘つて立ち去つた。我が弓方鐵砲組は前以て堤防の側にかくれて居て擊つて之を皆殺しにした。その殘餘の衆八百人ばかりが我が中軍に突入して來た。信長の叔父の信次、妾腹の兄信廣・弟秀成・從弟信成等は迎へ戰つて討死した。かくてその賊は大坂に出奔した。遂に三城の男女二萬人を燒き殺した。その臭が五六里にも及んだ。そこで長島を瀧川一益に賜ひ、北伊勢の五郡を領有せしめた。

語釋　長島（伊勢）〇二城（別府・片岡。）〇五城（皆伊勢に在る。篠橋・大鳥居・唐戸島・中江・大島。）〇三城（長島・大鳥居・篠橋。）

三年正月、命吏四人、巡近畿諸國、修橋道、蠲關征。三月、信長入朝、檢廷臣采田、其賣於人者、爲償還之。四月、信長聞大坂納長島逋逃、又糾合三好氏遺黨、以遙應武田氏也、乃引兵南伐、下新湟・高尾二城而返。五月、武田勝賴大擧出參河、圍長篠城。德川氏復使使請援。信長・信忠以騎卒五萬赴之。戒其軍曰「人持杙與紖」。乃詣熱田祠、祈戰勝、至岡崎。値城將奧平信昌使者、曰「城兵日夜望大旆來也」。信長慰勞遣歸、而縱反間曰「信長方患京畿北國、不能來援」。勝賴大喜、分兵備城、築壘于鳶巢山、留一將守之、而自進二十餘町、濟瀧澤川而陣。

訓讀　三年正月、吏四人に命じ、近畿諸國を巡り、橋道を修め、關征を蠲かしむ。三月、信長、入朝し、廷臣の采田を檢し、其の人に賣る者は、爲めに償つて之を還す。四月、信長、大坂、長島の逋逃を納れ、又三好氏の遺黨を糾合し、以て遙に武田氏に應ずと聞くや、乃ち兵を引いて南伐し、新湟・高尾の二城を下して返る。五月、武田勝賴、大擧して參河に出で、長篠城を圍む。德川氏、復使をして援を請はしむ。信長・信忠、騎卒五萬を以て之に赴く。其の軍を戒めて曰く「人ごとに杙と紖とを持て」と。乃ち熱田祠に詣で、戰勝を祈り、岡崎に至

る。城將奥平信昌の使者に値ふ。曰く「城兵、日夜、大旆の來るを望む」と。信長、慰勞して遣歸し、反間を縱つて曰く「信長、方に京畿・北國を患ひ、來り援くる能はず」と。勝頼、大に喜び、兵を分ち、城に備へ、壘を鳶巣山に築き、一將を留めて之を守らしめ、而して自ら進むこと二十餘町、瀧澤川を濟つて陣す。

通釋 三年正月、役人四名に言ひつけて、近畿の諸國を巡廻し、橋梁道路を修築させたり、關所の關税等を除かせた。三月、信長は入朝して公卿の領地を調べ、中で人に賣つたものはその爲めに之を償つて取り戻してやつた。四月、信長は大阪の一向の僧賊が長島の落武者を納れ、又三好氏の殘黨を呼び集めて遂に武田氏に內應したと聞いたので、兵を率ゐ南下して之を征伐し、新湟・高尾の二城を攻め下して返つた。五月、武田勝頼は大擧して參河に出て、長篠城を取り圍んだ。德川氏はまた使を寄越して援助を請はせた。信長・信忠は騎卒五萬人を率ゐて、助けに行つた。その軍を戒めていふのに「めい〳〵皆杭と繩とを持つて行け」と。そこで熱田神宮に參詣して戰勝を祈り、それから岡崎に着いた。そこで長篠の城將奥平信昌の使者に出會つた。その使者がいふには「城中の兵は明け暮れ將軍の御旗の來るのを待つて居ります」と。信長は之を慰勞してやり歸し、そして忍びの者を放つていはせるには「信長は今京畿と北國とを心配してゐるから、援けに來ることは覺束ない」と。勝頼は非常に喜び兵を分けて城に備へ、壘を鳶巣山に築き、一將をそこに留めて守らしめ、そして自分は進出すること二十餘町瀧澤川を渡つて陣取つた。

語釋 三好氏遺黨（三好康長）〇新湟・高尾（河內）〇長篠・岡崎（參河）

信長至設樂鄕、令將士議戰。德川氏部將酒井忠次進曰「臣請、今夜間道遶出敵背、

襲鳶巣壘、縱火敵營、以褫其氣、而大軍乘之、莫不勝矣」信長佯罵曰「咄、田舍兒何知」諸將皆退。信長使人陰招忠次曰「汝計可用。吾恐其漏泄、故佯叱之耳。汝宜速發。顧如毋郷導何」忠次曰「臣卽爲郷導。請賜監吏」信長乃遣金森長近等四人從之。當是時、信長陣極樂寺、信忠陣新御堂、勒兵爲十五隊。德川公爲右先鋒、居前、佐久間信盛・木下秀吉・瀧川一益、爲左先鋒、少郤。信長下令、爲柵于軍前、用杙與繩、立成。乃抽諸隊銃手、得三千、以佐佐成政・前田利家等司之。曰「勝賴恃勇無謀。而其兵喜騎戰。吾沮之以柵、而銃斃之。彼卽馳至、勿遽發銃。及其已逼、每千迭發」

【訓讀】信長、設樂郷に至り、將士をして戰を議せしむ。德川氏の部將酒井忠次進んで曰く「臣請ふ、今夜、間道より遶りて敵背に出で、鳶巣山の壘を襲ひ、火を敵營に縱ち、以て其の氣を褫ひ、而して大軍、之に乘ぜば勝たざる莫けん」と。信長、佯り罵つて曰く「咄、田舍兒、何をか知らん」と。諸將皆退く。信長、人をして陰に忠次を招かしめて曰く「汝の計用ふべし。吾れ其の漏泄を恐る。故に佯つて之を叱するのみ。汝宜しく速に發すべし。顧ふに郷導毋きを如何」と。忠次曰く「臣卽ち郷導を爲さん。請ふ、監吏を賜へ」と。信長乃ち金森長近等四人を遣はし之に從はしむ。是の時に當り、信長、極樂寺に陣し、信忠、新御堂に陣し、兵を勒して十五隊と爲す。德川公右先鋒と爲りて、前に居り、佐久間信盛・木下秀吉・瀧川一益、左先鋒と爲り、少しく郤く。

信長、令を下し、柵を軍前に爲り、杙と繩とを用ひ、立ちどころに成る。乃ち諸隊の銃手を抽き三千を得たり。佐佐成政・前田利家等を以て之を司らしむ。曰く「勝頼、勇を恃んで謀無し。而して其の兵、騎戰を喜む。吾れ之を沮むに柵を以てし、而して銃もて之を斃さん。彼れ卽し馳せ至るも、遽に銃を發する勿く、其の已に逼るに及び、每千迭に發せよ」と。

通釋 信長は設樂村に着いて、將士をして戰爭の評議をさせた。德川氏の部將酒井忠次が進んで曰ふには「私はお願ひしますが今夜裏道から敵の後に廻り、鳶巣の壘を不意に襲ひ、敵營に火をかけてその度膽を拔きますから、一方大軍は之につけ込んで進み出たら勝てぬことはありますまい」と。信長はわざと僞り罵つていふには「馬鹿ッ、田舍者に何か分るか」と。諸將は皆退散した。信長は人知れず忠次を呼ばせて曰ふには「お前の計略は大層いゝから用ふべきである。余は漏れるのを心配した。それで先刻わざと叱つたのである。お前は直ぐ出かけたら宜からう。しかし路案内が無いが如何致すか」と。忠次がいふのに「私が案内を致します。何卒お目付の役人を下されたいものです」と。そこで信長は金森長近等四人を遣はして、之に從はせた。この當時、信長は極樂寺に陣取り、信忠は新御堂に陣取り、兵をまとめて十五隊としてゐた。德川公家康は右翼の先鋒となつて前方に控へて居り、佐久間信盛・木下秀吉・瀧川一益は左翼の先鋒となつて少し後方に退いて居た。信長は命令を下し、柵を軍陣の前に作らせたが例の杭と繩とを用ひて、卽座に出來上つた。そこで諸隊の鐵砲組をぬき出して三千人を得た。佐佐成政・前田利家等をして、之を指揮せしめた。そして曰ふのに「勝頼は勇氣を恃んで計略といふものはない。そしてその部下の兵は騎馬で戰ふことを好んでゐる。味方は之を妨ぐのにこの柵を用ひ、そして一方鐵砲を以て之を斃さうといふのである。彼がもし馳せて來ても急いで鐵砲を射たないで、彼がすでに接近した處で

千挺づゝかはり番に射てよ」と。

【語釋】設樂・極樂寺・新御堂（參河）

二十一日、昧爽、鳶巣火起。敵軍顧而擾動。信長自率司銃五人、出柵十町、發巨銃于敵中、挑戰而退。敵四將更進、逼我右先鋒、轉犯左先鋒。銃丸亂發、敵兵沮靡。敵三將敢死繼進、直犯左先鋒、破柵一層。我銃乃齊發。右先鋒以槍橫擊之。成政馳白信長曰、敵中軍旗幟搖動。信長令先鋒縱兵乘之。敵軍敗走。乃令諸軍、鼓譟齊進。敵軍大潰。逐走追北、斬首一萬三千級。擠餘兵於川、獲其宗族將領二十餘人。勝頼僅以身免。參河諸城、屬武田氏者、皆解走。信長收軍、不敢窮迫。

【訓譯】二十一日、昧爽、鳶巣、火起る。敵軍顧みて擾動す。信長自ら司銃五人を率ゐて、柵を出づること十町、巨銃を敵中に發ち、戰を挑んで退く。敵の四將更ゞ進み、我が右先鋒に逼り、轉じて左先鋒を犯す。銃丸亂發し、敵兵沮靡す。敵の三將、敢死して繼ぎ進み、直に左先鋒を犯し、柵一層を破る。我が銃乃ち齊しく發す。右先鋒槍を以て橫に之を擊つ。成政馳せて信長に白して曰く「敵の中軍の旗幟搖動す」と。信長、先鋒をして兵を縱ち、之に乘ぜしむ。敵軍敗走す。乃ち諸軍に令し、鼓譟して齊しく進ましむ。敵軍、大に潰ゆ。走るを逐ひ北ぐるを追ひ、斬首一萬三千級。餘兵を川に擠し、其の宗族・將領二十餘人を獲たり。勝頼、僅に身を以て免る。

參河の諸城、武田氏に屬する者、皆解走す。信長、軍を收め、敢て窮追せず。

通釋 二十一日の夜明けに鳶巣の壘に火が上つた。敵軍は之を顧みて亂れ騷いだ。信長は自身で鐵砲奉行五人を率ゐて十町餘も柵を出て、大砲を敵中に射ち込み戰をしかけて退いた。武田方の四人の大將はかはる〴〵進んで、我が右翼先鋒に逼り、一轉して左翼先鋒を犯した。鐵砲の丸が亂れ發し、敵兵は氣を呑まれて終つた。すると敵の三人の大將が死を決して繼いで出で、直に左翼先鋒を犯し、柵一重を擊ち破つた。そこで我が鐵砲は一齊に射擊した。右翼先鋒は槍を以て橫合から之を擊つた。成政は馳せて信長に申し上げて曰ふには「敵の本陣の旗が大分色めき動いてゐます」と。信長は先鋒をして、兵を縱つて之に乘ぜしめた。敵軍は敗れ走つた。そこで諸軍に命じて攻め太鼓・喊の聲で一齊に進軍せしめた。敵軍はだん〳〵に崩れた。北げるのを追つかけ、首を斬ること一萬三千級。その殘兵を瀧澤川に追ひ詰め、武田氏の一族の者や大將を二十餘人討ち取つた。勝賴は生命から〴〵免れた。參河の諸城で武田氏に屬して居たものは皆守を解いて逃げ去つた。信長は軍勢をまとめて敢て追ひ詰めようともしなかつた。

語釋 敵四將（山縣昌景・小幡昌盛・武田信綱・武田信豐。）○敵三將（馬場信房・眞田則幸・土屋直村。）

德川公來、謝二軍門一曰「今日之役、不レ知レ所レ謝。」信長曰「卿兵最力戰、以得二此捷一耳。」德川公因請三乘レ勢遂入二甲斐一。前田利家・木下秀吉、亦以爲レ言。信長不レ可曰「我兵疲矣。吾且養レ力再擧。」乃振レ旅而還、賽二熱田一、修二其祠宇一、歸二美濃一。於レ是、令三信忠攻二岩村城一、越前假守前

波長俊失政。朝倉景健等、與一向賊作亂、據龍門・虎杖・木理・火燧・水津・河野諸城、以遂應大坂。

訓讀 德川公來り、軍門に謝して曰く「今日の役、謝する所を知らず」と。信長曰く「卿の兵最も力戰し、以て此の捷を得るのみ」と。德川公、因つて勢に乘じて遂に甲斐に入らんと請ふ。前田利家・木下秀吉も亦以て言を爲す。信長可かずして曰く「我が兵疲れたり。吾且に力を養つて再擧せんとす」と。乃ち振旅して還り、熱田に賽し、其の祠宇を修めて、美濃に歸る。是に於て信忠をして岩村城を攻めしむ。越前の假守前波長俊、政を失ふ。朝倉景健等、一向の賊と亂を作し、龍門・虎杖・木理・火燧・水津・河野の諸城に據りて、以て遂に大坂に應ず。

通釋 德川家康は軍門に來て御禮を言つて曰ふには「今日の戰爭に就いては御禮の申し樣もありません」と。信長がいふのに、「貴殿の兵が最も力を盡して戰つたのでこの勝利が得られたのである」と。そこで德川公は、勢に乘じて更に甲斐に攻め入らせて與れと賴んだ。前田利家・木下秀吉も亦其の事を言つた。信長は承知しないでいふには「我が兵は疲れてゐる。だからジツクリ力を養つて再擧しよう」と。そこで軍隊を整へて還り熱田神宮に御禮參りをなし、その御殿を修繕して美濃に歸つた。それから信忠をして岩村城を攻めさせた。その頃、越前の假の守護前波長俊は政治を失くじつてゐた。その爲めに朝倉景健等は一向の僧賊と聯合して亂を起し、龍門・虎杖・木理・火燧・水津・河野の諸城に立て籠つて、遂に大坂の一向の僧賊に應援した。

語釋 龍門・虎杖・木理・火燧・水津・河野（越前）

八月、信長・信忠、乃統公族諸將兵凡八萬、北伐至敦賀。會大雨。信長潛召木下秀吉曰「敵必不設備。汝潛以舟師取河野浦、撃其不意、遂破龍門、則木理諸城不攻自破矣」乃以明智光秀等助之、夜發敦賀。已而河野・龍門火起。木理諸城顧視之、皆棄守潰走。諸將邀撃大敗之。柴田勝家等、拔鳥羽城、入加賀。金森長近等、自德山口入、屠三城、而丹波・若狹將士、以兵艦數千艘來會、縱火沿海。信長乃進踰木理嶺、至龍門。景健斬賊帥下間和泉等、乞降。弗許、誅之。景健從士三人、伏刃殉之。信長恤三人妻孥、分兵索賊黨、斬獲五萬人。進略加賀。加賀・越前十餘日而定。

訓讀 八月、信長・信忠、乃ち公族・諸將の兵凡そ八萬を統べ、北伐して敦賀に至る。會大に雨ふる。信長、潛に木下秀吉を召して曰く「敵必ず備を設けず。汝潛に舟師を以て河野浦を取り、其の不意を撃ち、遂に龍門を破らば、則ち木理の諸城は、攻めずして自ら破れん」と。乃ち明智光秀等を以て之を助けしめ、夜、敦賀を發す。已にして河野・龍門、火起る。木理の諸城、之を顧視し、皆守を棄てゝ潰走す。諸將、邀撃して、大に之を敗る。柴田勝家等、鳥羽城を拔き、加賀に入る。金森長近等、德山口より入り、三城を屠る。而して丹波・若狹の將士、兵艦數千艘を以て來り會し、火を沿海に縱つ。信長乃ち進んで、木理嶺を踰え、龍門に至る。景健、賊帥下間和泉等を斬り、降を乞ふ。許さず、之を誅す。景健の從士三人、刃に伏して之に殉ず。信長、三人の妻孥を

恤む。兵を分ちて賊黨を索め、斬獲五萬人。進んで加賀を略す。加賀・越前・十餘日にして定る。

語釋 そこで八月、信長・信忠は公族や諸將の兵凡そ八萬人を率ゐて、北伐して敦賀に着いた。丁度其の時大雨であつた。信長は潛かに木下秀吉を召して曰ふのに「敵は屹度備を怠つて何もしてゐないだらう。お前はひそかに海軍を率ゐて河野浦を取り、敵の不意を擊ち、進んで龍門を破つたら其の外の木理等の諸城は攻めないでも自然に破れる」と。そこで明智光秀等を以て秀吉を助けさせ、夜、敦賀を出發した。その內に河野・龍門の二城から火が起つた。木理等の諸城は之を顧み見て、皆守備を棄てゝ崩れ走つた。諸將は迎へ擊つて、大に破つた。柴田勝家等は鳥羽城を陷れ加賀に入り込んだ。金森長近等は德山口から入り、三城を屠つた。その上丹波・若狹の將士が兵艦數千艘を率ゐて來り會し、火を海岸に沿うてゐる地方に放つた。信長は進んで木理峠を越えて龍門に至つた。景健は賊の將帥下間和泉等を斬つて降參を申し出た。しかし許さないで之を殺した。景健の從士三人は、刃につつ伏して主人に殉死した。信長はその三人の妻子を氣の毒に思ひ扶持を與へた。兵を分けて賊の一味を搜し出し、斬つたり生捕つたりした者が、五萬人からあつた。進んで加賀を攻め取つた。加賀越前は十餘日で平定した。

語釋 鳥羽（越前）〇德山口（美濃）〇三人（山內源左衞門・金子新之丞父子。）

九月、信長返至北莊、大論戰功、令梁田出羽守檜屋・大聖寺二城、以鎭加賀。分越前三郡、賜前田利家・佐佐成政及金森・原・不破・武藤等、以其餘八郡、盡賜柴田勝家、城北莊・足羽、使居焉。身自經畫之、因敕勝家曰「越前北陸之要扼、而當長尾氏之衝。吾

選於諸將、以命汝。汝其勉之。夫守國之道、不當徒恃勇武。當恩威並施以服民心。乃申條制曰、「毋厚賦斂。毋征關市。毋侮士民。毋偏訟獄。毋遺武備。毋喜游田。皇人之邑、爲亂賊所掠者、當據印券還付。國內閒地、歸我倉廩者、以待功勞之士、不當徒費。凡我所令、有不便者、輒來爭之。我將改焉」。因命不破・佐佐・前田等、與勝家相檢察、以爲國政。然後班師岐阜。

[illegible] 九月、信長返つて北莊に至り、大に戰功を論じ、梁田出羽をして、檜屋・大聖寺の二城を守り、以て加賀を鎭せしむ。越前の三郡を分ち、前田利家・佐佐成政、及び金森・原・不破・武藤等に賜ひ、其の餘の八郡を以て盡く柴田勝家に賜ひ、北莊・足羽に城いて居らしむ。身自ら之を經畫し、因つて勝家を戒めて曰く、「越前は、北陸の要扼にして、長尾氏の衝に當る。吾れ諸將より選び、以て汝に命ず。汝其れ之を勉めよ。夫れ國を守るの道は、當に徒に武勇を恃むべからず。當に恩威並び施し、以て民心を服すべし」と。乃ち條制を申べて曰く「賦斂を厚くする毋れ。關市を征する毋れ。士民を侮る毋れ。訟獄を偏する毋れ。武備を遺るゝ毋れ。游田を喜む毋れ。皇人の邑、亂賊の掠むる所と爲る者は、當に印券に據りて還付すべし。國內の閒地、我が倉廩に歸する者は、以て功勞の士を待ち、當に徒費すべからず。凡そ我が令する所、不便なる者有らば、輒ち來つて之を爭へ。我れ將に改めんとす」と。因つて不破・佐佐・前田等に命じて、勝家と相檢察し、以て國政を爲さしむ。

然る後、師を岐阜に班す。

通釋 九月、信長は引き返して北莊に至り、そこで大に戰功を論じ、梁田出羽をなして檜屋・大聖寺の二城を守つて加賀を鎭定せしめることにした。越前の三郡を分けて前田利家・佐佐成政及び金森・原・不破・武藤等に賜ひ、その外の八郡をば全部柴田勝家に賜ひ、北莊・足羽に城を築いてそこに居らしめた。信長自身、その城の見積りや計畫をなし、そこで勝家を戒めていふのに「越前は北陸道の大切な守り場所で、長尾氏の討つて出る正面に當つて居る。余は諸將の中から選んで特にお前に命ずる。お前もしつかりやれ。元來國を守る仕方は無暗に武勇を恃んだつて初まらない。恩德と威光とを竝び施して、人民の心を服すべきである」と。そこで個條書を陳べていふには「多く人民から取り立てゝはならぬ。關所や市場から税を取つてはならぬ。士民を輕侮してはならぬ。訴訟事は公平にやらねばならぬ。武備を忘れてはならぬ。狩獵を好んではならぬ。公卿衆の領地で亂賊の爲めに掠奪せられてゐる者は、捺印のある證書と照し合はせて還してやるべきである。國内の無所屬の土地で、その收入が我が藏米になるといふやうなものは、後日功勞の士の出るのを待つて與へるやうにし、無駄費ひしてはならぬ。凡そ我が命令したことで不便な者があれば遠慮なく來て故障を申し立てよ。余はそれを改めて遣はすから」と。因つて不破・佐佐・前田等に命じて勝家と共に互に吟味し合ひ、國の政治を爲さしめた。さうして置いて軍隊を岐阜に還した。

語釋 北莊（越前）　○檜屋・大聖寺（加賀）　○長尾氏（上杉氏をさす。）　○印券（朝廷より下された印の捺してある證書。）

十月、入朝。廷臣二名來迎于澤山。詔聽昇殿、超拜右大臣。信長固辭。即任權大納言、

兼右近衛大將。信長從弓部百人、入拜謝。因賜宴於御前。東西諸國交使使賀之。大坂僧徒乞降、獻珍玩。許之。會美濃使者至、告武田勝賴來援岩村。信長馳還赴之。先是、岩村城將出戰。信忠擊卻之。城將遂出降。而信長至、磔城將、以徇。以河尻鎭吉爲岩村城主。勝賴聞之引去。朝廷嘉信忠功、擬以高爵。信長固辭。乃除秋田城介。信長因奏請曰、臣將校、爲臣效力。使臣奏功。今臣父子獨辱顯爵、而不及此輩。臣意竊愧之。於是、以木下秀吉除筑前守、明智光秀除日向守、塙直正除備中守、河尻鎭吉除肥前守。

【訓譯】十月、入朝す。廷臣二名、來つて澤山に迎ふ。詔して、昇殿を聽し、超えて右大臣に拜せらる。信長、固辭す。卽ち權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねしむ。信長、弓部百人を從へ、入りて拜謝す。因つて宴を御前に賜ふ。東西の諸國、交使をして之を賀せしむ。大坂の僧徒、降を乞ひ、珍玩を獻ず。之を許す。會美濃の使者至り、武田勝賴、來つて岩村を援くと告ぐ。信長馳せ還つて之に赴く。是より先き、岩村の城將出で戰ふ。信忠擊つて之を卻く。城將遂に出で降る。而して信長至り、城將を磔し以て徇へ、河尻鎭吉を以て岩村の城主と爲す。勝賴、之を聞いて引き去る。朝廷、信忠の功を嘉し、擬するに高爵を以てす。信長、固辭す。乃ち秋田城介に除せらる。信長、因つて奏請して曰く「臣の將校、臣の爲めに力を效し、臣をして功を奏せしむ。今や臣の

父子、獨り顯爵を辱うして、而して此輩に及ばず。臣、意竊に之を愧づ」と。是に於て、木下秀吉を以て筑前守に除し、明智光秀を日向守に除し、塙直正を備中守に除し、河尻鎭吉を肥前守に除す。

【通釋】十月、信長は京都に入朝した。公卿二人が澤山まで來て出迎へた。詔して昇殿を許し、一足飛びに右大臣に拜せられた。信長は固く辭退した。そこで權大納言に任じ、右近衞大將を兼ねしめられた。信長は弓隊百人を從へ入朝して御禮を言上した。因つて天皇の御前で御馳走を賜はつた。東西の諸國からは、かはる〲使者を立てゝ之を賀せしめた。大坂の僧徒も降參を申し出て、珍らしい品物を獻じた。信長は之を許してやつた。丁度其の時美濃の使者がやつて來て、武田勝頼が岩村を助けに來たと告げた。信長は馳せ還つて岩村に赴いた。これより前、岩村の城將は出で〻戰つた。信忠は擊つて之を退けた。故に城將は遂に城を出で〻降參した。そして信長がやつて來ると城將をはりつけにしてとなへ示し、川尻鎭吉を岩村の城主とした。勝頼はこのことを聞いて引き去つた。朝廷は信忠の功を嘉せられ、高い官爵を當てがはれた。信長は固くそれを辭退した。そこで秋田城介に任ぜられた。信長は因つて奏聞してお願ひするには「私の部下の將校どもは、私の爲めに力を致し、私をして手柄を樹てしめたので御座います。今私の親子だけが立派な官爵を戴きまして、これ等の者には御惠が及んでゐません。私は心中愧づかしく思つてゐます」と。そこで木下秀吉を筑前守に任じ、明智光秀を日向守に任じ、塙直正を備中守に任じ、川尻鎭吉を肥前守に任ぜられた。

先是西海豪姓多絕而無嗣。信長欲使諸功臣繼之。乃命各冒其姓。明智光秀冒惟任氏、塙直正冒原田氏、梁田出羽冒別喜氏、丹羽長秀冒惟住氏。秀吉羨丹羽・柴田

氏ノ威名ヲ、請ウテ稱ス羽柴氏ト。信長謂ツテ信忠及ビ諸將ニ曰ク「我他日得バ混二一スルヲ海內ヲ、則チ使メント汝輩ヲシテ實ニ稱セ其ノ名ニ也」。當リ是ノ時ニ、織田氏之國、橫ニ塞ス天下ノ衢路ヲ。以テ東國ノ鷹馬ヲ贈ニ遺シ西國ニ、以テ西國ノ虎豹ノ皮ヲ贈ニ遺ス東國ニ。得ル贈遺ヲ者、各以爲ヘラク信長已ニ略ニ有スト其ノ地ヲ也。

訓譯 是より先き、西海の豪姓、多く絶えて嗣無し。信長、諸功臣をして之を繼がしめんと欲す。乃ち命じて各〻其の姓を冒さしむ。明智光秀は惟任氏を冒し、塙直正は原田氏を冒し、梁田出羽は別喜氏を冒し、丹羽長秀は惟住氏を冒す。秀吉は丹羽・柴田氏の威名を羨み、請うて羽柴氏と稱す。信長、信忠及び諸將に謂つて曰く「我れ他日、海內を混一するを得ば、則ち汝が輩をして、實に其の名に稱せしめん」と。是の時に當り、織田氏の國、天下の衢路を橫塞す。東國の鷹馬を以て西國に贈遺し、西國の虎豹の皮を以て、東國に贈遺す。贈遺を得る者、各〻以爲へらく、信長、已に其の地を略有すと。

通釋 これより前、西海の豪族は多く絶えて跡取がなかつた。信長は諸功臣をして、其の跡目を繼がせようと思つた。そこで命じて各その姓を名乘らせた。明智光秀は惟任氏を名乘り、塙直正は原田氏を名乘り、梁田出羽は別喜氏を名乘り、丹羽長秀は惟住氏を名乘つた。木下秀吉は丹羽・柴田兩氏の威勢名望を羨んで、お願ひ申して兩氏の一字宛を取つて羽柴氏と稱した。信長は信忠や諸將に向つていふのに「余が後日天下を一統することが出來たら、お前等をして實際に領地がお前等の官名に叶ふ樣にしてやる」と。この當時織田氏の國は天下の中央にゐてその街道を橫斷し塞いでゐた。だから東國から出る鷹や馬を西國の諸侯に贈り、西國に出る虎や豹の皮を

東國の諸侯に賜つた。その贈物を受けた者は皆信長はもう此等の產出する地方を占領したのだと思ひ込んだものである。

【語釋】西國虎豹皮（朝鮮などから九州に傳へたもの。）

四年正月、信長欲徙治于近江安土山、以備長尾氏。惟住長秀董役。課畿內及尾張・美濃・若狹・越前十一州之卒、起天主閣。閣凡七層、高七丈、布邸第于山下、令信忠居岐阜、以備武田氏。是歲、信忠叙從四位下、尋進上。四月、信長入朝。詔使修二條城址以爲館焉。數年而成。不敢自館。請獻之皇太子居焉。

【訓讀】四年正月、信長、徙つて近江の安土山に治し、以て長尾氏に備へんと欲す。惟住長秀役を董す。畿內、及び尾張・美濃・若狹・越前十一州の卒に課して、天主閣を起す。閣凡そ七層、高さ七丈、邸第を山下に布き、信忠をして岐阜に居て、以て武田氏に備へしむ。是の歲、信忠、從四位下に叙せられ、尋いで上に進めらる。四月、信長、入朝す。詔して、二條城趾を修め以て館と爲さしむ。數年にして成る。敢て自ら館せず。請うて之を皇太子に獻じて居らしむ。

【通釋】四年正月、信長は政治の根據を近江の安土山に移して長尾氏に備へようと思つた。惟住長秀がその普請奉行となつて工事を監督した。畿內及び尾張・美濃・若狹・越前などの十一個國の兵卒に夫役を課して天主閣を拵へ上げた。その天主閣は皆で七階で、高さ七丈からあり、武家の屋敷を其の山の下に布き陳ね、一方信忠をして

岐阜に居つて武田氏に備へしめた。この年、信忠は從四位下に叙せられ、ついで從四位上に進められた。四月、信長は入朝した。詔して二條の城跡を修覆してその屋敷となされた。數年たつて出來上つた。信長は敢てそこに泊らうとしなかつた。願つて之を皇太子に獻じて住つて戴いた。

時大坂復叛、與武田・長尾・毛利氏相結。信長遣細川藤孝・荒木村重・惟任光秀・原田直正・筒井順慶、將兵三萬赴討、令佐久間信盛等守天王寺壘。賊壘于木津・難波、舟船往來。信長戒諸將曰「必取木津。」直正率降將三好康長及根來寺兵攻之。難波賊以銃手要之田中。先鋒敗走。直正戰死之。

訓讀 時に大坂復叛き、武田・長尾・毛利氏と相結ぶ。信長、細川藤孝・荒木村重・惟任光秀・原田直正・筒井順慶を遣はし、兵三萬に將として赴き討たしめ、佐久間信盛等をして天王寺の壘を守らしむ。賊、木津・難波に壘し、舟船往來す。信長、諸將を戒めて曰く「必ず木津を取れ」と。直正、降將三好康長、及び根來寺の兵を率ゐて、之を攻む。難波の賊、銃手を以て之を田中に要す。先鋒敗走す。直正戰つて之に死す。

通釋 當時、大坂の一向の僧賊がまた叛き、武田・長尾・毛利の諸氏と取り結んだ。信長は細川藤孝・荒木村重・惟任光秀・原田直正・筒井順慶を遣はし、兵三萬に將として赴き討たしめ、佐久間信盛等をして天王寺の壘を守らしめた。賊は木津・難波に壘を築いて、舟で往き來をして居た。信長は諸將を戒めて曰ふのに「是非共木津を取つて終へ」と。直正は降將三好康長及び根來寺の兵を率ゐて之を攻めた。難波の賊は鐵砲組によつて之を田の中

に待ち伏せした。その爲めにわが先鋒は敗れ走つた。直正は戰つて死んだ。

五月、賊遂以萬餘人圍天王寺。信盛與光秀・順慶等、固守拒之。梶川彌三郎從在城內。數出力戰。時溝壁未成。乃刺殺牛馬、張其皮代壁、以扞矢石。信長聞急。方浴。浴衣上馬、與百餘騎赴援。至若江、兵聚者三千。分爲三隊、命先鋒於村重。村重辭。信長曰「然則乃公爲之耳」。乃自雜輕卒、指麾而進。敵矢丸如雨。信長傷足。怒而益進。城兵望見其旗、大喜開門出戰。夾擊破賊兵。賊兵猶布陣不退。信長欲再戰。諸將諫曰「衆寡不可敵。竢我兵盡來、然後戰」。信長叱曰「機可失乎」。合兵爲二隊、復擊大破之、追北至大坂城門、斬首二千餘級。乃整軍以備敵返襲、築壘十所、以環大坂、凱旋若江。

訓譯　五月、賊、遂に萬餘人を以て天王寺を圍む。信盛、光秀・順慶等と、固く守つて之を拒ぐ。梶川彌三郎、從つて城內に在り。數出でゝ力戰す。時に溝壁未だ成らず。乃ち牛馬を刺殺し、其の皮を張つて壁に代へ、以て矢石を扞ぐ。信長、急を聞く。方に浴す。浴衣にて馬に上り、百餘騎と赴き援く。若江に至り、兵聚る者三千。分つて三隊と爲し、先鋒を村重に命ず。村重、辭す。信長曰く「然らば則ち、乃公之を爲さんのみ」と。乃ち自ら輕卒に雜り、指麾して進む。敵の矢丸、雨の如し。信長、足を傷つく。怒つて益進む。城兵其の旗を望見し、

大に喜び、門を開いて出で戰ふ。夾撃して賊兵を敗る。賊兵、猶ほ陣を布いて退かず。信長再び戰はんと欲す。諸將諫めて曰く「衆寡、敵すべからず。我が兵盡く來るを竢ち、然る後戰へ」と。信長、叱して曰く「機失ふべけんや」と。兵を合せて二隊と爲し、復擊つて大に之を破り、北ぐるを追うて大坂の城門に至る。斬首二千餘級。乃ち軍を整へ、以て敵の返襲に備へ、壘を十所に築き、以て大坂を環らし、若江に凱旋す。

通釋 五月、賊は遂に一萬餘人を率ゐて天王寺を取り圍んだ。信盛は光秀・順慶等と堅く守つて之を拒いだ。梶川彌三郎は從つて城内に居た。度々城から出て力め戰つた。時に天王寺は堀も城壁もまだ出來上つてゐなかつた。そこで牛や馬を刺し殺し、其の皮を張り壁に代へて弓や鐵砲を防いだ。信長は急を聞き込んだ。その時丁度入浴して居た。浴衣の儘で馬に飛び乘り、百餘騎と共に援けに行つた。若江に着く頃には兵が三千人も聚つた。分ちて三隊となし、先鋒を村重に命じた。村重はそれを辭退した。信長がいふのに「それなら乃公が先鋒となる計りだ」と。そこで自身足輕の中に混じつて指揮して進んだ。敵の彈丸は雨のやうであつた。信長は足を傷つけた。非常に怒つて益進み出た。城兵は信長の旗を望み見て非常に喜び、門を開いて出て來て戰つた。信長は夾み討ちにして賊兵を討ち破つた。賊兵はそれでもまだ陣を布いて退かなかつた。信長がもう一度戰はうとした。すると諸將は諫めていふのに「敵は衆く味方は小勢で迚も叶ひませぬ。味方の兵が全部來るのを待つて、それから戰爭しなさいませ」と。信長は叱りつけていふには「このいゝ機會を失つてどうする」と。兵を合せて二隊となし、再び敵を擊つて大に之を破り敵の北ぐるを追つかけて大坂の城門まで來た。斬首二千餘級もあつた。そこで軍を整へて敵の返り擊つのに備へ、壘を十ケ所に築いて大坂をぐるり取り卷き、自分は一と先づ若江に凱旋した。

六月、歸安土、休兵二十日、就役。七月、天主閣成。十一月、入朝。詔進正三位、拜內大臣。固辭。不許。十二月、獵尾張・參河。

訓読　六月、安土に歸り、兵を休むること二十日にして、役に就かしむ。七月、天主閣成る。十一月入朝す。詔して、正三位に進め、內大臣に拜せらる。固辭す。許されず。十二月、尾張・參河に獵す。

通釋　六月、信長は安土に歸り、兵を休息すること二十日にして工事に取りかゝらせた。七月、天主閣が出來上つた。十一月入朝した。詔して正三位に進められ、內大臣に任ぜられた。固く辭退した。併し許されなかつた。十二月、尾張・參河で獵をなした。

五年正月、入朝。二月、紀伊賊雜賀孫一作亂、應大坂。信長招降賊將雜賀三緘・根來杉房、以爲鄉導、率諸軍南伐、自二道入、拔貝塚及中野。三月、孫一降、請攻大坂自效。許之、置戍于左野而還。四月、能登・越中賊起。長尾氏不能制。信長聞之、招降能登人長重連等、乘機略地。七月、長尾謙信來攻重連。重連弟連龍來告急。乃遣羽柴秀吉等、助柴田勝家赴救。秀吉不告而返。信長譴不許見。

訓読　五年正月、入朝す。二月、紀伊の賊雜賀孫一、亂を作して、大坂に應ず。信長、賊將雜賀三緘・根來杉

房を招降し、以て郷導と爲し、諸軍を率ゐて南伐し、二道より入り、貝塚及び中野を拔く。三月孫一降り、大坂を攻め自ら效さんと請ふ。之を許し、戍を左野に置いて還る。四月、能登・越中の賊起る。長尾氏、制すること能はず。信長、之を聞き、能登の人長重連等を招降し、機に乘じて地を略す。七月、長尾謙信、來つて重連を攻む。重連の弟連龍、來つて急を告ぐ。乃ち羽柴秀吉等を遣はし、柴田勝家を助けて赴き救はしむ。秀吉、告げずして返る。信長、譴めて見るを許さず。

通釋 五年正月、信長は又京都に入朝した。二月、紀伊の賊雜賀孫一なるものが亂を起して大坂に味方した。信長は賊將雜賀三緘・根來杉房を招き降して路案内となし、諸軍を率ゐて南に征伐し、二道から攻め入り貝塚及び中野を陷れた。三月、孫一は降參し、大阪を攻めてその功で自分の罪を償ひ度いと申し出た。故に之を許し、戍兵を佐野に置いて還つた。四月、能登・越中に賊が蜂起した。長尾氏はそれを取り鎭めることが出來なかつた。信長は之を聞いて能登の人長重連等を招き降し、機に乘じて土地を攻め取つた。七月、長尾謙信は來つて重連を攻めた。重連の弟連龍が來つて急を告げた。そこで羽柴秀吉等を遣はして柴田勝家の加勢をなして援けに行かせた。所が秀吉は無斷で還つて來た。信長は怒つて之を責め、對面を許さなかつた。

語釋 自二二道一入（信盛等の兵は山に沿うて入り、一益等の兵は海岸から丹輪口に入つた。）○貝塚・中野・左野（和泉）

八月、松永久秀叛、應二大坂一初久秀之降也、信長不レ許。曰、彼智勇有レ餘、而奸佞無レ比。飢則伏、飽則起。彼已亂二足利氏一、亦欲レ亂二我家一乎。佐久間信盛曰、彼事二暗主一、乃能如レ此爾。

得主公駕馭之、何能爲也。宜且撫納之、以示天下廣可也」從之。德川公嘗謁信長、見一老人侍側、問其爲誰。信長笑曰「此松永彈正者也。此夫爲人所難能者三。弑公方、一也。叛三好氏、二也。燔大佛殿、三也」久秀俯伏流汗、意不自安。久秀有茶鐺、名平蛛。信長欲得之。久秀靳不獻。於是、與諸將俱戍大坂、遂叛去、據志貴城。信長遣侍史楠友閑、往問其意。久秀弗答。

【訓讀】八月、松永久秀叛き、大坂に應ず。初め久秀の降るや、信長許さず。曰く「彼れ智勇餘り有りて、奸佞比なし。飢うれば則ち伏し、飽けば則ち起つ。彼れ已に足利氏を亂す。亦我が家を亂さんと欲するか」と。佐久間信盛曰く「彼れ暗主に事ふ、乃ち能く此くの如きのみ。主公、之を駕馭するを得ば、何ぞ能く爲さん。宜しく且く之を撫納し、以て天下に廣きを示して可なるべし」と。之に從ふ。德川公、嘗て信長に謁す。一老人の側に侍するを見て、其の誰たるかを問ふ。信長笑つて曰く「此れ松永彈正といふ者なり。此の夫、人の能くし難き所を爲すもの三つ。公方を弑する、一なり。三好氏に叛く、二なり。大佛殿を燔く、三なり」と。久秀、俯伏流汗し、意自ら安んぜず。久秀、茶鐺有り、平蛛と名づく。信長、之を得んと欲す。久秀靳しんで獻ぜず。是に於て、諸將と俱に大坂を戍り、遂に叛き去り、志貴城に據る。信長、侍史楠友閑を遣はし、往いて其の意を問はしむ。久秀答へず。

通釋　八月、松永久秀が叛いて大阪に味方した。初め久秀の降參するや、信長は之を許さなかつた。曰ふのに「彼は智勇が餘る程あつて、その人物の奸惡佞邪なることは比べるものもない程である。飢ゑると降參し、飽きると飛び起つ。彼はすでに足利氏を滅茶々々にして終つた。その傳でわが家をも亂さうと思つてゐると見える」と。佐久間信盛がいふのに「彼は馬鹿主人に事へてゐたから、それだけの仕事が出來たのです。わが殿が之をお引き廻しになれば、何が出來ませうぞ。一時之を撫で許し、殿の度量の廣い所を天下にお示しなされたら宜しいと思ひます」と。信長は之に從つた。徳川公家康が、ある時信長にお目通りした。一人の老人が其の側に侍して居るのを見て、誰れであるか尋ねた。信長は笑つていふのに「これは、松永彈正といふ者である。この男は人のやり難きことを三度やつてゐる。公方を弑したのが一つ。三好氏に叛いたのが二つ。大佛殿を燒いたのが三つだ」と。久秀は恥ぢてうつぶし汗を流し、心中自ら不安を感じた。久秀は平蜘といふ茶釜を所持してゐた。信長は之を得たいと思つた。久秀は惜しん獻じなかつた。そこで久秀は諸將と共に大阪を守つて居たが遂に叛き去り、志貴城に立て籠つた。信長は祐筆の楠友閑を遣はし、往つて其の心を問はしめた。久秀はそれに返答をしなかつた。

語釋　飢則伏飽則起（魏の曹操が呂布を批評した言葉。）○公方（將軍義輝）○三好氏（久秀の主家。）○大佛殿（奈良東大寺。）

九月、乃令下信忠將二數萬騎一討上レ之。細川藤孝・惟任光秀・筒井順慶等、別攻二其屬城片岡一。藤孝二子、忠興・興正、猶幼。先登獲二首級一。諸軍從レ之、遂拔レ之、與二信忠一合、圍二志貴一。久秀潛遣レ使、與二雜賀・大坂一約、期レ夾攻。使者誤入二佐久間信盛營一。信盛捕獻レ之。信忠喜曰「是天

授也」乃令死士二百僞雜賀援兵、夜至城門、門開而入。比及二城、信忠鼓衆齊登。二百人呼譟應之。信忠遂入、麾久秀于天主閣。久秀縱火、抱所愛茶鐺、自燒殺。其子久通以下皆被捕誅。

訓讀　九月、乃ち信忠をして數萬騎に將として之を討たしむ。細川藤孝・惟任光秀・筒井順慶等、別に其の屬城片岡を攻む。藤孝の二子忠興・興正、猶ほ幼し。先登して首級を獲たり。諸軍、之に從ひ、遂に之を拔き、信忠と合し、志貴を圍む。久秀、潛に使を遣はし、雜賀・大坂と、期を約し夾み攻めんとす。使者、誤つて佐久間信盛の營に入る。信盛捕へて之を獻ず。信忠喜んで曰く「是れ天授なり」と。乃ち死士二百をして、雜賀の援兵と僞らしめ、夜、城門に至る。門開いて入る。二城に及ぶ比、信忠、衆を鼓し、齊しく登る。二百人、呼譟して之に應ず。信忠遂に入り、久秀を天主閣に麾む。久秀、火を縱ち、愛する所の茶鐺を抱き、自ら燒殺す。其の子久通以下、皆捕へ誅せらる。

通釋　そこで九月、信忠をして數萬騎に將として之を討たしめた。細川藤孝・惟任光秀・筒井順慶等は別に敵の屬城片岡を攻めた。藤孝の二子忠興・興正はまだ幼なかつた。それが先登して首級を得た。諸軍は二子に從ひ、遂に之を陷れ、信忠と合して志賀を取り圍んだ。久秀はひそかに使を遣はして、雜賀・大阪と期日を約束し、我が軍を夾み討ちにしようとした。所がその使者が誤つて佐久間信盛の陣屋に入り込んだ。信盛はそれを取り押へて獻じた。信忠は喜んでいふのに「これは天のお授けである」と。そこで死士二百をして雜賀の援兵だと僞らせ、

夜志貴の城門まで來た。門があいて中に入つた。二の丸に屆いた頃、信忠は多勢の者を勵まして一齊に城に登り出した。城中に入つた二百人は大鼓をたゝき喊聲をあげ、之に應へた。信忠は遂に城に入り、久秀を天主閣に攻め縮めた。久秀は火をかけ、自分の大事にして居た茶釜を抱いて自ら燒け死んだ。その子久通以下皆捕へられて誅せられた。

語釋 片岡(和大)

信忠入朝。廷臣傳詔、叙從三位、任左近衞中將、聽昇殿。信忠稽首曰「天恩隆渥、無物可比。雖然、臣不敢輒受。請告之信長、然後奉受。」強之不肯。使者還報。天子動容嘉賞、聽其所言。信長答書曰「久秀老猾、汝一舉斃之。汝功多矣。宜奉詔也。」信忠乃入朝拜謝。觀安土而歸岐阜。是役也、筒井順慶最有功。信長賜之大和。十一月、信長入朝。進從二位、轉右大臣。

訓讀 信忠、入朝す。廷臣、詔を傳へて、從三位に叙し、左近衞中將に任じ、昇殿を聽さる。信忠、稽首して曰く「天恩隆渥、物の比すべきなし。然りと雖も、臣敢て輒く受けず。請ふ、之を信長に告げ、然る後に奉受せん」と。之を強ふるも肯んぜず。使者還り報ず。天子、容を動かして嘉賞し、其の言ふ所を聽す。信長、答書して曰く「久秀は老猾、汝、一擧にして之を斃す。汝の功多し。宜しく詔を奉ずべきなり」と。信忠、乃ち入

朝して拜謝す。安土に覲して岐阜に歸る。是の役に、筒井順慶、最も功有り。信長、之に大和を賜ふ。十一月、信長、入朝す。從二位に進め、右大臣に轉ぜらる。

通釋 信忠は入朝した。公卿がやつて來て、詔を傳へ、從三位に叙し、左近衞中將に任じて昇殿を許された。信忠頭を地につけていふには「天子樣の御恩のお手厚いことは外にたとへる物も御座いません。併し、私はすぐそれを頂戴することは出來兼ねます。一度父信長に告げまして、それから頂戴致したいと思ひます」と。之を強ひて見たが聞き入れなかつた。使者が還つてこの事を報告した。天皇は玉體を動かし給ひ、いたく感心せられ、その言ふことをお聞き濟みになつた。信長は返事をよこしていふのに「久秀は年とつて猾い男であつたが、お前は一討で之を斃した。お前の手柄は多い。詔を奉じて官爵を頂戴したらよからう」と。そこで信忠は入朝して御禮を申し上げた。それから安土に往つて父を見舞ひ、岐阜に歸つた。この戰爭で筒井順慶は最も手柄があつた。信長は之に大和を賜はつた。十一月信長はまた入朝した。從二位に進められ、右大臣に轉ぜられた。

信長略定畿內、獨大坂未服。毛利氏前納足利義昭、終與我絕、又援大坂、爲餽糧食。備前浮田氏屬毛利氏、東窺播磨。播磨人赤松義祐・別所長治・小寺政職・黑田宗圓、皆求援於我。宗圓子孝高爲使者、因羽柴秀吉以通信長。信長譴秀吉之敗於北陸也、於是、命西征大將、使略山陽・山陰、以償其罪。秀吉感奮、戰播磨有功。十二月、信長

獮參河。令菅谷長賴留守安土、以名刀寶器授之、戒曰「秀吉來則與之」。既歸而秀吉至。六年正月、饗信忠及秀吉等十二人于茗室、親饋之。終率以登天主閣、曰「所以就此城者、卿等力也」。又遣秀吉西征。四月、辭兩職。時長尾謙信已死。信長乃令北陸降將齋藤氏・神保氏、與飛驒國主姉小路氏、幷力以定越中。遣惟任光秀略丹波、細川藤孝略丹後。

訓讀 信長、畿內を略定し、獨り大坂未だ服せず。毛利氏、前に足利義昭を納れ、終に我と絕ち、又大坂を援け、爲めに糧食を餽る。備前の浮田氏、毛利氏に屬し、東播磨を窺ふ。播磨の人赤松義祐・別所長治・小寺政職・黑田宗圓、皆援を我に求む。宗圓の子孝高、使者と爲り、羽柴秀吉に因つて以て信長に通ず。信長、秀吉の北陸に敗るゝを譴むるや、是に於て、西征大將を命じ、山陽・山陰を略し、以て其の罪を償はしむ。秀吉、感奮し、播磨に戰つて功有り。十二月、信長、參河に獮す。菅谷長賴をして安土に留守せしめ、名刀・寶器を以て之に授け、戒めて曰く「秀吉來らば則ち之を與へよ」と。既に歸りて秀吉至る。六年正月、信忠及び秀吉等十二人を茗室に饗し、親ら之に饋る。終に率ゐて天主閣に登りて曰く「此の城を就す所以は、卿等の力なり」と。又秀吉を遣はし西征せしむ。四月、兩職を辭す。時に長尾謙信已に死す。信長乃ち北陸の降將齋藤氏・神保氏をして、飛驒の國主姉小路氏と、力を幷せ以て越中を定めしむ。惟任光秀を遣はし丹波を略せしめ、細川藤孝に丹後を略せしむ。

通釋 信長は畿内を攻め平げたが、たゞ大阪だけがまだ服從しなかつた。毛利氏は前に足利義昭を納れて、終に織田氏と絶交し、又大阪を援けて、爲めに兵糧を仕送つてゐた。備前の浮田氏は毛利に屬き東方播磨を狙つてゐた。播磨の人赤松義祐・別所長治・小寺政職・黑田宗圓等は皆援助を織田氏に求めた。宗圓の子の孝高が使者となつて羽柴秀吉を間に入れて、其の由を信長に通じた。信長は秀吉が北陸で敗けたのを責めてゐたので、此の際西征の大將を任命して、山陽・山陰を攻め取つて、其の罪を償はせることにした。秀吉は感激し奮發し播磨に戰つて手柄を立てた。十二月、信長は參河に獵をした。それで菅谷長賴をして安土城に留守番をさせ、名刀・寶器を預けて之を戒めていふには「秀吉が來たら、之をやつて呉れ」と。其の内に獵が濟んで歸り、秀吉もやつて來た。六年正月、信忠及び秀吉等十二人を茶室に饗應し、自身茶を立てて與へた。とう／＼皆を引きつれて天主閣に上つていふのに「この城が出來たのは皆君方の盡力である」と。又秀吉を遣はして西征せしめた。四月、右大臣と右大將の兩職を辭した。その頃、長尾謙信はもう死んで終つてゐた。そこで信長は北陸の降將齋藤氏・神保氏をして飛驒の國主姉小路氏と力を併せて越中を平定せしめた。又惟任光秀を遣はして丹波を攻め取らせ、細川藤孝を遣はして丹後を攻め取らせた。

通釋 西征（毛利氏を伐つことをいふ。）

五月、毛利輝元發大兵、至熊川。秀吉告急。信長欲自赴援。諸將止之曰「臣等先往、詳其地形險易、然後迎駕。」乃令荒木村重赴援、又遣信忠・信雄・信孝・信包、率諸將繼之。

六月、京師大水。信長入朝。秀吉來謁、具白軍狀。信長命之曰「敵兵多食足。我軍與之曠日持久、特疲力耳。不若引兵按定播磨、待時進取。」秀吉乃去、傳令於諸將。信忠還兵、攻下神吉・志方諸城、令秀吉守之、以攻三木城。三木與大坂、海路相通。信長乃命九鬼嘉隆、以大艦數十艘、自伊勢廻紀伊、擊破雜賀賊船、奪三十餘艘、以傳界浦。九月、信長入朝。南巡大坂、獵于阿部野。十月、召嘉隆、習水戰、觀之。自是、三木・大坂援路遂絕。

【訓讀】五月、毛利輝元、大兵を發して、熊川に至る。秀吉、急を告ぐ。信長自ら赴き援けんと欲す。諸將、之を止めて曰く「臣等先づ往き、其の地形の險易を詳にし、然る後に駕を迎へん」と。乃ち荒木村重をして赴き援けしめ、又信忠・信雄・信孝・信包を遣はし、諸將を率ゐて之に繼がしむ。六月、京師、大水あり。信長、入朝す。秀吉來り謁し、具に軍狀を白す。信長、之に命じて曰く「敵は、兵多く食足る。我が軍、之と日を曠しくして久しきを持すれば、特に力を疲らすのみ。兵を引いて播磨を按定し、時を待つて進取するに若かず」と。秀吉乃ち去り、令を諸將に傳ふ。信忠、兵を還し、攻めて神吉・志方の諸城を下し秀吉をして之を守らしめ、以て三木城を攻む。三木と、大坂とは、海路相通ず。信長乃ち、九鬼嘉隆に命じ、大艦數十艘を以て、伊勢より紀伊に廻らしめ、雜賀の賊船を破り、三十餘艘を奪ひ、以て界浦に傳る。九月、信長、入朝す。南大坂を巡り、阿

部野に獵す。十月、嘉隆を召し、水戰を習はしめて之を觀る。是より、三木・大坂の援路遂に絶ゆ。

通釋　五月、毛利輝元は大兵を繰り出して熊川に至つた。秀吉が急を告げた。信長は自身で援けに行かうと思つた。諸將は之を止めていふのに「私どもが先きに往つて、その地形の險はしいか平地であるかをよく調べてそれからお乘物を迎へに參りませう」と。そこで荒木村重をして援けに行かせ、又信忠・信雄・信孝・信包を遣はして諸將を率ゐて其の後に繼がしめた。六月、京都に大洪水があつた。それで信長は御見舞に入朝した。そこへ秀吉が來てお目通りして詳しく戰爭の樣子を申し上げた。信長は之に命じて曰ふのに「敵は兵が多くて兵糧も十分である。我が軍が之と日數をかけていつまでも持ちこたへてゐると、たゞ力を疲勞させるばかりである。だから此の際は兵を引きつれて播磨を押へ鎭め時機を待つて進み取つた方が宜いのだ」と。そこで秀吉は立ち去り、信長の命令を諸將に傳へた。信忠は兵を還して播磨の神吉・志方の諸城を攻め降し、秀吉をして之を守らしめ、そして自分は三木城を攻めた。三木と大阪とは海路によつて互に交通してゐた。そこで信長は九鬼嘉隆に命じ、大艦數十艘を率ゐて、伊勢から紀伊を廻らせ雜賀の賊船を擊ち破り、三十餘艘を分捕つて界浦に到着した。九月、信長は入朝した。南大阪を巡廻して、阿部野で獵をした。十月、嘉隆を召し、水戰を練習させて之を見物した。これからは三木・大阪の援路がとう／＼絶えて終つたのである。

語釋　三木（長治の本城。）

荒木氏士人有糶於大坂者。監吏以告。曰「村重與大坂有私。」信長不信。曰「村重微者也。吾擢以爲攝津守護。何苦而反。毋乃訛傳邪。」明智光秀嫉村重以新進聲績出己

右也、力媒蘖之。信長使人詰村重。村重驚愕、欲面陳謝之。家臣皆諫。不聽而往。光秀馳書、止之於途曰「主公怒弗可犯。足下何自投虎口爲」。村重乃還、據伊丹城叛、應毛利氏、欲與三木城夾攻秀吉。

訓讀 荒木氏の士人、大坂に糶する者有り。監吏以て告げて曰く「村重、大坂と私有り」と。信長、信ぜず。曰く「村重は微者なり。吾れ擢んで、以て攝津の守護と爲す。何を苦しんで反せん。乃ち訛傳なる毋らんや」と。明智光秀、村重の新進を以て、聲績己の右に出づるを嫉むや、力めて之を媒蘖す。信長、人をして村重を詰らしむ。村重、驚愕して、面のあたり之を陳謝せんと欲す。家臣皆諫む。聽かずして往く。光秀、書を馳せ、之を途に止めて曰く「主公の怒犯すべからず。足下何ぞ自ら虎口に投ずるを爲す」と。村重乃ち還り、伊丹城に據つて叛し、毛利氏に應じ、三木城と秀吉を夾攻せんと欲す。

通釋 荒木氏の侍に米を大阪に賣り込む者があつた。お目付の役人が告げていふのに「村重は大坂と通じてゐます」と。信長は之を信じないで曰ふのに「村重は元來微賤な者であつた。それを余が拔擢して攝津の守護としたのである。何を苦しんで謀叛などをしようや、それは多分間違つた噂ではないだらうか」と。明智光秀は村重が新參の者であるのに、その名聲功績が自分の上に出て居ることを妬んで、力めて罪に陷れるやうに讒言した。信長は人をして村重を責めさせた。村重は非常に驚いて信長の面前で言ひ譯けして謝らうと思つた。所が家來が行くなと皆諫めた。それをも聞き入れないで出かけた。光秀は手紙を馳せて村重を途中に止めていふのに「主

公は隨分怒つて居られるから申譯などは迚も出來ない。君は何故自ら進んで危い虎口へ往くのであるか」と。故に村重は還つて伊丹城に立て籠り、叛いて毛利氏に內應し、三木城と共に秀吉を夾み討ちにしようと思つた。

語釋 伊丹（攝津）

十一月、信長自將討村重。信忠以下皆從、至郡山。高槻城主高山友祥・茨木城主中川清秀、皆屬村重。信長聞友祥崇天主敎也、召敎主伴天連者、使諭友祥。友祥乃降。信長自脫衣衣之、賜芥川郡。清秀聞之亦降。進至昆陽、屠兵庫。秀吉來說村重改圖。村重弗聽。十二月、圍伊丹。不克。信長恐其損兵、築長圍、令池田信輝・瀧川一益・蒲生氏鄉等守之而還。

訓讀 十一月、信長自ら將として村重を討つ。信忠以下皆從ひ、郡山に至る。高槻の城主高山友祥・茨木の城主中川清秀、皆村重に屬す。信長、友祥の天主敎を崇ぶと聞くや、敎主伴天連なる者を召して、友祥を諭さしむ。友祥乃ち降る。信長自ら衣を脫して之に衣せ、芥川郡を賜ふ。清秀、之を聞いて、亦降る。進んで昆陽に至り、兵庫を屠る。秀吉來つて、村重に、圖を改めんことを說く。村重聽かず。十二月、伊丹を圍む。克たず。信長其の兵を損するを恐れ、長圍を築き、池田信輝・瀧川一益・蒲生氏鄉等をして之を守らしめて還る。

訓讀 十一月、信長は自ら大將となつて村重を討つた。信忠以下皆之に從つて郡山に至つた。高槻の城主高山

友祥・茨木の城主中川清秀は皆村重に屬いてゐた。信長は友祥が耶蘇教を信じてゐると聞いたので、宣教師の伴天連といふ者を召し友祥を諭さしめた。そこで友祥は降參した。信長は自ら着物を脱いで友祥に衣せていたはり之に芥川郡を賜はつた。清秀も之を聞いて亦降參して來た。信長は進んで昆陽に至り、兵庫を屠つた。秀吉はやつて來て村重に心を入れかへるやうに說いた。村重は聞き入れなかつた。十二月、伊丹を取り圍んだ。併し克てなかつた。信長はこんなことで兵士を損なふことを恐れ、長陣を築き、池田信輝・瀧川一益・蒲生氏郷等をして之を守らせ自分は還つて行つた。

【語釋】郡山・高槻・昆陽(攝津)

七年二月、入朝。三月、與信忠俱如伊丹、慰勞諸將、遊箕尾。八月、大賚于三木・伊丹・天王寺屯戍將士。九月、信長復如伊丹、村重留族人守城而夜逃。如華隈・尼崎、求援於毛利氏。毛利氏辭以海路梗塞。十月、一益密招城兵中西某、諭之曰「而主怯恇、棄若輩去。若爲怯主致死。曷若降織田公、以樹功名哉」。中西乃與卒長五人、謀啓我兵。我兵乃入。留守者請釋其孥、則往說村重、使致尼崎・華隈二城也。乃質其孥而遣之。二城拒弗納。乃散走。信長命磔其孥于尼崎西北、以示二城兵。十二月、徇荒木氏族

三十餘人于京師、誅之。以攝津賜池田信輝、令與其二子之助・輝政俱攻華隈、終拔之。

【訓讀】七年二月、入朝す。三月、信忠と倶に伊丹に如き、諸將を慰勞し、箕尾に遊ぶ。八月、大に三木・伊丹・天王寺屯戍の將士に賚ふ。九月、信長、復伊丹に如く。村重、族人を留め、城を守らせて、夜逃る。華隈・尼崎に如き、援を毛利氏に求む。毛利氏、辭するに海路の梗塞するを以てす。十月、一益、密に城兵中西某を招き、之を諭して曰く「而の主は怯恇、若が輩を棄てゝ去る。若、怯主の爲めに死を致す。曷ぞ織田公に降り以て功名を樹つるに若かんや」と。中西乃ち卒長五人と、我が兵を啓くを謀る。我が兵乃ち入る。留守の者請ふに、其の孥を釋さるれば、則ち往いて村重に說き、尼崎・華隈の二城を致さしめんと。乃ち其の孥を質として之を遣はす。十二月、二城、拒んで納れず。乃ち散じ走る。信長、命じて其の孥を尼崎の西北に磔し、以て二城の兵に示す。荒木氏の族三十餘人を京師に徇へて、之を誅す。攝津を以て池田信輝に賜ひ、其の二子、之助・輝政と倶に華隈を攻めしめ、終に之を拔く。

【通釋】七年二月、信長は入朝した。三月、信忠と一緒に伊丹に往き、諸將を慰勞し、箕尾に遊んだ。八月、三木・伊丹・天王寺にたむろして守つて居る將士に大に物を賜はつた。九月、信長はまた伊丹に往つた。村重は一族の者を殘して、城を守らせ、自分は夜、逃げた。華隈・尼崎に往き援助を毛利氏に求めた。所が毛利氏は海上が塞つてゐて路が通じないといふ理由で斷つて來た。十月、瀧川一益はこつそり城兵中西某を招いて之を諭していふには「お前の主人村重は臆病者で、お前等を見棄てゝ逃げ去つて終つた。お前はかやうな臆病主人の爲めに生命

を擲げ出してゐる。それよりは織田公に降參して功名を立てた方が餘つ程宜いではないか」と。そこで中西は足輕頭五人と織田氏の兵を手引することを謀つた。それ故織田氏の兵は城内に入つた。留守してゐた者が自分等の妻子を赦して下さるなら往つて村重に說いて尼崎・華隈の二城を明け渡す樣にさせませうと申し出た。故にその妻子を人質として之を派遣した。所が尼崎・華隈の二城の者は拒んで其の言を納れなかつた。そこで使ひに行つた者も歸る譯に行かず、何れへか散つて逃げた。信長は命じて人質に取つた妻子を尼崎の西北で磔にして二城の兵に見せつけた。十二月、荒木氏の一族三十餘人を京都に引廻して誅殺した。攝津をば池田信輝に賜ひ、その二子之助・輝政兩人と一緒に華隈を攻めさせ終に之を陷れた。

語釋　箕尾・華隈・尼崎（攝津）

是歲、令羽柴秀吉分兵、助惟任光秀攻丹波、招降國主秦秀治。秀治不肯降。光秀送母爲質。秀治乃降。光秀誘執之、押送安土、磔殺之。丹波人聞之、磔光秀母。信長以丹波賜光秀、居龜山城。八年正月、三木城將別所長治致城自殺。信長以三木加賜於中川清秀、以女妻其子。令秀吉攻但馬、降其國主山名宗仙。浮田氏既降、與毛利氏相距兒島。

訓讀　是の歲、羽柴秀吉をして兵を分ち、惟任光秀を助けて丹波を攻めしめ、國主秦秀治を招降す。秀治、肯へ

て降らず。光秀、母を送りて質と爲す。秀治乃ち降る。光秀誘つて之を執へ、安土に押送して、之を磔殺す。丹波の人之を聞き、光秀の母を磔す。信長、丹波を以て光秀に賜ひ、龜山城に居らしむ。八年正月、三木の城將別所長治、城を致して自殺す。信長、三木を以て中川清秀に加賜し、女を以て其の子に妻はす。秀吉をして但馬を攻めしめ、其の國主山名宗仙を降す。浮田氏既に降りて、毛利氏と兒島に相距ぐ。

通釋 この年、羽柴秀吉をして惟任光秀を助けて、丹波を攻めしめ、その國主秀治を招き降參させようとした。秀治は肯て降參しなかつた。光秀は母を送つて人質とした。そこで秀治は降參した。光秀はおびき出して秀治を捕へ、安土へ押し籠めにして送り、之を磔にして殺した。丹波の人はそのことを聞いて人質の光秀の母を磔にした。信長は丹波を光秀に賜はり、龜山城に居らしめた。八年正月、三木の城將別所長治は城を明け渡して自殺した。信長は三木を以て中川清秀に增し與へ、娘を其の子(秀政)に妻はせた。秀吉をして但馬を攻めしめ、その國主山名宗仙を降した。浮田氏はもう以前に織田氏に降參して、毛利氏と兒島で拒ぎ合つて居た。

大坂連失強援、勢力日衰。天子遣廷臣三輩、就諭降之。信長亦使楠友閑往焉。於是、僧光佐聚徒屬議之。其老下間刑部等、皆贊其降曰「我有宜降者四。我與織田氏交兵十一歲矣。諸國門徒竝起、應我、而皆被誅殺、不知其幾千萬也。可不憫乎。一宜降也。本城諸將久在圍中、粉骨虀身。藉不能賞之、猶息其肩。二宜降也。織田氏用武、所當者破、所擊者服。若別所・荒木・秦氏、莫不絕其根殲其類。我雖因地利憑人和、以至

於今日而竟亦如此矣。是非自絕滅我敎乎。三宜降也。天子之詔、不可不奉。四宜降矣。且夫天下英雄豪傑抗衡織田氏者、孰若我耐久乎。我武多矣。誰得嗤我。光佐從之、請盟。

訓讀 大坂、連に強援を失ひ、勢力、日に衰ふ。天子、廷臣三輩を遣はし、就き諭さしめて之を降す。信長も亦楠友閑をして往かしむ。是に於て、僧光佐、徒屬を聚めて之を議す。其の老下間刑部等、皆其の降を賛して曰く「我れ宜しく降るべき者四有り。我れ織田氏と兵を交ふること十一歳。諸國の門徒、竝び起り、我に應じ、皆誅殺せられ、其の幾千萬なるを知らず。憫まざるべけんや。一宜しく降るべきなり。本城の諸將、久しく圍中に在つて、粉骨虀身す。藉ひ之を賞する能はざるも、猶ほ其の肩を息はしめん。二宜しく降るべきなり。織田氏の武を用ふるや、當る所の者は破り、擊つ所の者は服す。別所・荒木・秦氏の若き、其の根を絕ち其の類を殲さざるは莫し。我れ地の利に因り人の和に憑り、以て今日に至ると雖も、而れども竟に亦此くの如し。是れ自ら我が敎を絕滅するに非ずや。三宜しく降るべきなり。天子の詔は奉ぜざるべからず。四宜しく降るべし。且つ夫れ天下の英雄豪傑、織田氏に抗衡する者、孰か我が久しきに耐ふるに若かんや。我が武多し。誰か我を嗤ふを得ん」と。光佐、之に從ひ、盟を請ふ。

通釋 大坂では次ぎ〱と強い援助を失ひ、その勢力は日增しに衰へる一方であつた。天子は公卿三名をお遣はしになり、大坂へ往つて織田氏へ降參するやうに諭された。信長も亦楠友閑をして往かしめた。そこで僧光

佐は一味の者を聚めて相談をした。家老の下間刑部等は皆その降參に贊成していふには「我々は降參すべき理由が四つあります。我々は織田氏と兵を交ふること十一年にもなります。諸國の門徒は一齊に起つて我に味方し、そして皆殺されて其の數幾千萬だか分らぬ位であります。憫まない譯には參りません。これが降るべき第一の理由です。この城中の諸將は長い間、圍の中に居つて骨を粉にし、身を微塵にして努力しました。たとひ恩賞を與へることが出來ぬとしても、せめては其の肩休め位はさせてやりたいと思ひます。これが降參すべきの第二の理由です。織田氏が兵を用ふる所を見ると當るところの者は破り、撃つところの者は皆服從してゐます。別所・荒木・秦氏の如き其の根まで絕やし、其の一類を皆殺しにしなかつたものはないのです。我々は地の利に因り人の和を得て、今日まで維持出來たのですが、併し聽ては亦あんな目に遭ふことでせう。これは我が宗門を絕やし亡すことにはなりますまいか。これが降參すべき第三の理由です。それに天子の詔は是非奉戴せねばなりません。これが降參すべき第四の理由です。その上天下の英雄豪傑で織田氏に對抗した者の中で、我々のやうに長い間持ちたへたものが外に何處にありませう。して見れば我が武威はもう充分これで足りてゐます。降參しても誰が笑ふことが出來ませうや」と。光佐も之に從ひ和睦の盟を申し出た。

語釋　本城（大坂城。）

信長使青山虎莅焉、賜光佐以下金、有差。四月、光佐散遣其衆、自遯于紀伊鷺森、留子光壽、以七月致城。信長使矢部善七受之。門徒陰說光壽曰「信長爲人詐而忍。我一

旦失據、恐陷其計矣。光壽乃再修守備。光佐懼、使人止之。弗肯。信長聞之、怒曰「我終不得不剪滅之。」遣兵陷勝曼・尼崎二壘。光壽惶恐謝罪。信長曰「我徐圖之耳。」乃肯之。七月、光壽致大坂而去。

【訓読】信長、青山虎をして莅ましめて、光佐以下に金を賜ふ、差有り。四月、光佐、其の衆を散遣し、自ら紀伊の鷺森に遜れ、子光壽を留め、七月を以て城を致す。信長、矢部善七をして之を受けしむ。門徒、陰に光壽に說いて曰く「信長、人と爲り詐にして忍なり。我れ一旦據を失はば、恐らくは其の計を陷らん」と。光壽乃ち再び守備を修む。光佐懼れて、人をして之を止めしむ。肯んぜず。信長、之を聞き、怒つて曰く「我れ終に之を剪滅せざるを得ず」と。兵を遣はし勝曼・尼崎の二壘を陷る。光壽、惶恐罪を謝す。信長曰く「我れ徐に之を圖らんのみ」と。乃ち之を肯んず。七月、光壽、大坂を致して去る。

【通釈】信長は青山虎をして、その盟に臨ませ、光佐以下に夫々段階を設けて黄金を賜はつた。四月、光佐はその部下を解散し去らしめて、自分は紀伊の鷺森に引退し、子の光壽を止めて、七月に大阪城を明け渡した。信長は矢部善七をして城を受け取らせた。門徒の者がひそかに光壽に說いて曰ふのに「信長はその人柄嘘をついて殘忍であります。我々が一度根據地を失ふと、恐らくは彼の計略に陷つてひどい目に遭はされることでせう」と。そこで光壽は再び守備を修めた。光佐は恐れて人をやつて之を止めさせた。併し承知しなかつた。信長は之を聞いて怒つて曰ふのに「余は矢張り之を剪り滅さない譯に行かなくなつた」と。兵を遣はして勝曼・尼崎の二壘を

陷れた。光壽は恐れ入つて罪を謝した。信長が曰ふのに「それではゆる〳〵と之を亡してやらう」と。そこで之を承諾した。七月に光壽は大阪を明け渡して去つた。

語釋 勝曼（律語）

八月、信長入朝。自宇治舟行、至大坂、巡視城郭、以書數佐久間信盛及其子正勝曰「汝父子戍天王寺五年。翫寇殖利、不事進取。夫羽柴秀吉以二歳定三國、惟任光秀定丹波、池田信輝、二兒、以幼齡拔華隈、柴田勝家聞此數人樹功、自愧不如也、力戰以定加賀。獨汝父子無尺寸功、不養士卒、而蓄金錢、不論賞罰、而品茗飮。是胡爲也。前朝倉之敗也、汝懈不肯追。吾以麾下獨進。汝乃曰「雖爾懈矣、若信盛者、焉可復得」。審如所言、則五歳之戍、何不一戰。自吾執弓箭、未嘗敗也。前使汝援家康以拒信玄。家康有所指敎。汝不肯從。乃餧平手於敵、貽吾羞辱。何顏返見吾乎。吾以四方未平、含忍至今。汝終不悛、日累罪戾。吾不復能用汝。汝猶悔過引咎、欲立功自贖乎。不則宜削髮而去。吾不忍置汝於法也」。使人齎書往視之曰「吾所言非、則直爭之」。信盛・正

勝弗能答。削髮遁于高野。部將皆散。獨山口重政從之。初水野信元爲信盛所讒殺。至是得白。信長乃召信元弟忠重、復其邑。信長自大坂至京師、乃流林通勝・伊賀範俊。以通勝嘗謀逆、範俊嘗謀叛也。後二歲、信盛死于高野。信長憐之、召正勝祿之、使仕信忠。

訓讀 八月、信長、入朝す。宇治より舟行して、大坂に至り、城郭を巡視す。書を以て、佐久間信盛及び其の子正勝を數めて曰く「汝父子、天王寺を戍ること五年。寇を翫び利を殖して、進取を事とせず。夫れ羽柴秀吉は、二歲を以て三國を定め、惟任光秀は、丹波を定め、池田信輝の二兒は、幼齡を以て華隈を抜く。柴田勝家、此の數人、功を樹つるを聞き、自ら如かざるを愧づるや、力戰し以て加賀を定む。獨り汝父子、尺寸の功無く、士卒を養はずして、金錢を蓄へ、賞罰を論ぜずして、茗飮を品す。是れ胡爲ぞ。前に朝倉の敗るゝや、汝懈つて肯て追はず。吾れ麾下を以て獨り進む。汝乃ち曰く「爾く懈ると雖も、信盛の若き者、焉んぞ復得べけん」と。審に言ふ所の如くんば、則ち五歲の戍、何ぞ一戰せざる。吾れ弓箭を執りしより、未だ嘗て敗れず。前に汝をして、家康を援け以て信玄を拒がしむ。家康、指敎する所有り。汝肯て從はず。乃ち平手を敵に餧して、吾が羞辱を貽す。何の顏ありて返つて吾を見るか。吾れ四方未だ平がざるを以て、含忍今に至る。汝終に悛めずして、日に罪戾を累ぬ。吾れ復汝を用ふる能はず。汝猶ほ過を悔い咎を引き、功を立て自ら贖はんと欲するか。不らざれば則ち宜しく髮を削りて去るべし。吾れ汝を法に置くに忍びざるなり」と。人をして書を齎らし、往いて之に視し

めて曰く「吾が言ふ所非ならば、則ち直に之を爭へ」と、信盛・正勝答ふる能はず。髮を削り高野に遁る。部將皆散ず。獨り山口重政、之に從ふ。初め水野信元、信盛の讒殺する所と爲る。是に至つて白するを得たり。信長、乃ち信元の弟忠重を召し、其の邑を復す。信長、大坂より京師に至り、乃ち林通勝・伊賀範俊を流す。通勝は嘗て逆を謀り、範俊は嘗て叛を謀るを以てなり。後二歲、信盛、高野に死す。信長、之を憐み、正勝を召して之に祿し、信忠に仕へしむ。

〔通釋〕八月、信長は入朝した。宇治から舟で行つて大坂に出て、大坂の城郭を巡視し、書面を以て佐久間信盛及び其の子正勝を責めていふには「お前方父子は天王寺を守ること五年にもなつた。その間、敵をなぶりものにして本氣に防がず、利益を謀つて進み取るを事としなかつた。かの羽柴秀吉は二年の間に三ケ國を平定し、惟任光秀は丹波を平定し、池田信輝の二兒(之助・輝政)は幼いながら華隈を陷れた。柴田勝家はこの數人が手柄を立てたと聞いて自ら及ばないことを愧ぢ、力め戰つて加賀を平定した。たゞお前方父子だけは少しの手柄もなく、士卒を養はないで金錢を蓄め込み、賞罰を論じ功罪を定めることなく、たゞ茶の湯ばかりやつて居る。一體これはどうしたことであるぞ。以前朝倉義景が敗れた時、お前はなまけて追ひかけることをしなかつた。故に余は旗下を率ゐてひとり進んだ。するとお前は減らず口を申すに「こんなに怠けてゐるやうでありますけれども私程の者はどうして又とお手に入れられませうや」と。ほんとにお前の言ふ通りであるなら、五年間も守つてゐて何故一戰もしなかつたのだ。余は弓箭を執つて以來まだ一度として負けた事はない。しかるに以前汝をして家康を援けて信玄を拒がせたことがある。家康はお前に指圖し敎へる所があつたさうである。然るにお前は之に從ふことをしなかつた。それがもとで平手汎秀を敵方に見捨てゝ終ひ、吾が耻辱を世上に殘したのである。お前はどの

面下げて余に會へるのだ。余は天下がまだ平定しないので今まで口にも出さずに忍んでゐた。所がお前は結局行を改めないで日々罪科を重ねてゐる。余はもうお前を用ふることは出來ない。お前はこれでもまだ過ちを後悔し罪を自分に引き受け、手柄を立てゝその罪を自ら贖はうと思ふか。それならそれで考へても見ようが、若し然うでなければ髮を剃つて立ち去つたら宜からう。余はお前を法に照らして罰するには忍びないから、手前宜いようにしろ」と。人をやつて、その書面を持參して往き、信盛父子に示さしめて曰ふのに「余の言ふ所が惡いなら直ぐ言ひ返して見ろ」と。信盛・正勝は答辯することが出來なかつた。髮を剃つて高野山に遁げ込んだ。その部下の大將は皆散じ去つた。たゞ山口重政だけが之に從つた。はじめ水野信元は信盛の爲めに讒言されて殺された。こゝに至つてそのあかりが立つた。そこで信長は信元の弟忠重を召してその領地を元々通りにした。信長は大坂より京都に着いてから林通勝・伊賀範俊を流した。それは通勝は嘗て大逆を謀り、君を弑しようとしたし、範俊は嘗て謀叛を企くらんだからである。その後二年たつて信盛は高野山で死した。信長は之を憐み、正勝を召し之に祿を與へ、信忠に仕へしめた。

語釋　翫レ寇（敵を玩び、本氣で戰爭せぬこと。）○三國（播磨・丹後・但馬。）○得レ白（寃罪を明白にする。）

九年二月、信長率ニ諸子一入朝。二月、柴田勝家以ニ謙信既死、北陸稍定一、乃來謁、獻ニ金銀及土物一。信長褒ニ其成功一、親饗レ之。初織田氏有ニ傳家茶鐺一、名ニ姥口一。勝家嘗請レ之。信長曰「先君臨レ終、授ニ之我一曰、愛護勿レ失。必得下有ニ大勳勞一者上予レ之。汝勉レ之」至レ是、勝家請曰「臣藉ニ

君威靈、定越前・加賀、不足稱勳勞、雖然、四方漸平、臣等莫復可以樹功也。願以是時、得前所請者。信長欣然、出而賜之。

訓讀 九年二月、信長、諸子を率ゐて入朝す。二月、柴田勝家、謙信既に死し、北陸稍定るを以て、乃ち來り謁し、金銀及び土物を獻ず。信長、其の成功を褒し、親ら之を饗す。初め織田氏に傳家の茶鐺有り、姥口と名づく。勝家嘗て之を請ふ。信長曰く「先君、終に臨み、之を我に授けて曰く、愛護して失ふ勿れ、必ず大勳勞有る者を得て之を予へよと。汝、之を勉めよ」と。是に至つて、勝家請うて曰く「臣、君の威靈を藉り、越前・加賀を定む。勳勞と稱するに足らず。然りと雖も、四方漸く平ぎ、臣等、復以て功を樹つべき莫し。願はくは是の時を以て、前に請ふ所の者を得ん」と。信長、欣然として、出だして之を賜ふ。

通釋 九年二月、信長は諸子を率ゐて入朝した。二月、柴田勝家は謙信が既に死んで北陸道も追々平定したので、來り謁して金銀及び土地の物産を獻じた。信長はその成功を褒賞し、親ら之を饗應した。初め織田氏に代々家に傳つてゐた姥口といふ茶釜があつた。勝家は嘗て之を下さいとお願ひ申した。信長がいふのに「亡くなられた父君が死なれる時に之を余に授けて大事にして無くさないやうにせよ。必ず非常な手柄を立てた者を見つけて之を與へよと仰せられた。だからお前もしつかりやつて、姥口を得るやうに努力せよ」と。北陸が平定したので勝家は請うて曰ふには「私は君の御威光に因つて越前加賀を平定しました。併し勳勞と稱する程のことでもありません。しかし乍ら天下は漸く平定し、もう此の上は私どもは手柄を立てる餘地はありません。どうか此の際さきにお願ひ申したものを頂戴致したう御座います」と。信長は喜ばしげに姥口を出して勝家に賜はつた。

是月、信長大閱馬京師。爲埒于皇宮東、請天子莅視焉。四方將士皆會。會長尾景勝窺虛侵越中、至于小出、而加賀賊起應之。是時、越中守將佐佐成政、與降將神保某、來在安土。信長得警報、令成政等馳還距之。柴田勝家義兒佐久間盛政在加賀尾山。擊賊殲之、走景勝。成政至則事已平。乃進悉定越中。信長以越中賜成政。

訓讀 是の月、信長、大に馬を京師に閱す。埒を皇宮の東に爲り、天子の莅視を請ふ。四方の將士皆會す。會々長尾景勝、虛を窺ひ、越中を侵し、小出に至り、加賀の賊も起つて之に應ず。是の時、越中の守將佐佐成政、降將神保某と來つて安土に在り。信長警報を得て、成政等をして馳せ還つて之を距がしむ。柴田勝家の義兒佐久間盛政、加賀の尾山に在り。賊を擊つて之を殲し、景勝を走らす。成政至れば則ち事已に平ぐ。乃ち進んで悉く越中を定む。信長、越中を以て成政に賜ふ。

通釋 この月、信長は京都で大々的に軍馬を檢閱した。馬場を御所の東に作り、天皇の御覽をお願ひ申した。四方の將士は皆集まつた。丁度其の時、長尾景勝は隙を窺ひ越中を侵入し、小出に至り、又、加賀の賊も起つて之に味方した。この時越中の守將佐々成政は降將神保某と共に安土に來て居た。信長は非常の報知を得たので、すぐ成政等をして馳せ還つて之を拒がしめた。柴田勝家の義理の子の佐久間盛政は加賀の尾山に居つた。賊を擊つて之を皆殺にし、景勝を走らせた。成政がやつて來て見ると、萬事既に平定してゐた。そこで進んで悉く越中を定めた。信長は越中を以て成政に賜はつた。

語釋 加賀賊（一向賊。） ○義兒（佐久間盛次は柴田勝家の妹を娶り盛政を生んだ。盛政は信長の命で勝家に仕へてゐた。） ○尾山（勝家は盛政を尾山の城主となす。）

先是、前田利家定能登。以能登・加賀增賜之。於是、細川藤孝定丹後、誘殺其國主一色義定。以丹後賜之。八月、使信雄與筒井順慶定伊賀。分賜伊賀于信雄・信包。乃令秀吉大擧以伐毛利氏。十月、拔鳥取城、定因幡。織田氏既代足利氏、定近畿二十餘國。法令嚴峻、雖竊一錢者、處斬。姦盜屏息、路不拾遺。行旅委橐而睡。

訓讀 是より先き、前田利家、能登を定む。能登・加賀を以て之に增賜す。是に於て、細川藤孝、丹後を定め、其の國主一色義定を誘殺す。丹後を以て之に賜ふ。八月、信雄をして筒井順慶と伊賀を定めしむ。伊賀を信雄・信包に分賜す。乃ち秀吉をして、大擧し以て毛利氏を伐たしむ。十月、鳥取城を拔き、因幡を定む。織田氏、既に足利氏に代り、近畿二十餘國を定む。法令嚴峻、一錢を竊む者と雖も、斬に處す。姦盜屏息し、路に遺ちたるを拾はず。行旅橐を委して睡る。

通釋 これより前、前田利家は能登を平定した。そこで能登・加賀を利家に增し賜はつた。この時、細川藤孝は丹後を平定し、その國主一色義定を誘ひ出して殺した。故に丹後を藤孝に賜はつた。八月、信雄をして筒井順慶と共に伊賀を平定せしめた。伊賀を信雄・信包に分ち賜はつた。そこで秀吉をして大擧して毛利氏を伐たしめた。十月、鳥取城を陷れ、因幡を平定した。織田氏は既に足利氏に代つて近畿地方の二十餘國を平定した。その法律命令は至つて嚴重で、一錢を盜んだものでも斬に處せられた。惡る者どもは息を殺し、路傍に物が落ちてゐて

も拾はなかつた。旅人は胴巻を投げ出して安心して睡つた程である。

當是時、大坂以下强賊已屬攘除。而西有毛利氏、東有長尾・武田二氏。與我接境、未服從也。徳川氏數攻武田氏、克之。北條氏以關東八州求內屬。東北豪傑皆使使獻方物。武田勝頼大懼。是歲十一月、勝頼送致勝長。勝長信長季子、質於甲斐者也。信濃人木曾義昌、因美濃人苗木某、言於信忠曰「臣不勝勝頼誅求。願爲前導、以伐甲斐。」信忠告之信長。信長曰「吾欲伐甲斐、未有釁可乘。今得此報、我事成矣。雖然、吾聞、木曾地險隘、人心不可測。宜徵其質子、然後踐其地。」信忠乃徵義昌任子。十二月、輸粟二萬石于吉良、誡徳川氏曰「明春、將有事於甲斐。」

訓讀 是の時に當り、大坂以下の强賊、已に攘除に屬す。而れども西に毛利氏有り、東に長尾・武田の二氏有り。我と境を接し、未だ服從せず。徳川氏、數武田氏を攻めて之に克つ。北條氏、關東八州を以て內屬を求む。東北の豪傑、皆使をして方物を獻ぜしむ。武田勝頼、大に懼る。是の歲十一月、勝頼、勝長を送致す。勝長は、信長の季子にして、甲斐に質たりし者なり。信濃の人木曾義昌、美濃の人苗木某に因つて、信忠に言つて曰く「臣、勝頼の誅求に勝へず。願はくば前導を爲し、以て甲斐を伐たん」と。信忠、之を信長に告ぐ。信長曰く「吾

れ甲斐を伐たんと欲するも未だ釁の乘ずべき有らず。今此の報を得たり。我が事成る。然りと雖も、吾れ聞く、木曾の地は險隘にして、人心測るべからずと。宜しく其の質子を徵し、然る後に其の地を踐むべし」と。信忠、乃ち義昌の任子を徵す。十二月、粟二萬石を吉良に輸し、德川氏を誡めて曰く「明春、將に甲斐に事有らんとす」と。

〔通釋〕その當時大坂一向の僧賊以下の强賊は既に拂ひ除かれて終つた。しかし、西に毛利氏が居り、東に長尾・武田の二氏がゐた。皆我と國境を接してゐてまだ服從しなかつたのである。德川公は度々武田氏を攻めて之に克つた。北條氏は關東八州を擧げて附屬せんことを申し込んだ。東北の豪傑も皆使を寄越して其の地の物產を獻ぜしめた。武田勝賴はこのことを聞いて非常に恐れをなした。この年十一月、勝賴は勝長を送り返した。この勝長は信長の末の子で甲斐に人質となつて居たものである。信濃の人木曾義昌は美濃の人苗木某を間に入れて信忠に言つていふには「私は勝賴の嚴しい取り立てに遣り切れませぬ。願はくば御案内申して甲斐を伐ちたいものです」と。信忠は之を信長に告げた。信長がいふのに余は甲斐を伐ちたいと思つて居たが、まだ乘ずべき隙間がなかつた。今やこの報を手に入れることが出來た。もうこの事は成功したやうなものだ。しかし聞くところに據ると木曾の地は險阻で狹く、人の心も測ることが出來ないといふことだ。だからその人質を徵し取つて、それから後に其の地を踐んだら宜いだらう」と。そこで信忠は義昌の人質を出させた。十一月、米二萬石を三河の吉良に搬び、德川氏に戒めて曰ふには「來年の春、甲州を攻めるからその積りで居られよ」と。

〔語釋〕吉良（三河）

十年二月、信忠既收義昌任子、將五萬騎、入木曾。信長自將步騎七萬繼之。德川氏以三萬餘騎自駿河、北條氏以三萬騎自相摸、金森長近以三千騎自飛驒、竝進應之。信忠以瀧川一益・川尻鎭吉爲先鋒、入伊奈。伊奈人降、導鎭吉兵納之。我兵進陷松尾・飯田・小山三城。木曾義昌擊破甲斐前軍于鳥居嶺、獻捷於信忠。信忠遣兵五千助之、自進陣桔梗原。復進陣飯田、陷大島城。甲斐・信濃士民、素苦勝賴弊政、爭先來降。信忠留兵守大島、而進陣飯島。勝賴在諏訪、走歸甲斐。信忠乃圍高遠城。城當衝要。守將仁科信盛・小山田昌辰等力戰。不可下。

訓讀 十年二月、信忠、既に義昌の任子を收め、五萬騎に將として、木曾に入る。信長自ら步騎七萬に將として之に繼ぐ。德川氏は三萬餘騎を以て駿河より、北條氏は三萬騎を以て相模より、金森長近は三千騎を以て飛驒より、竝び進んで之に應ず。信忠、瀧川一益・川尻鎭吉を以て先鋒と爲し、伊奈に入る。伊奈の人降り、鎭吉の兵を導いて之を納る。我が兵進んで、松尾・飯田・小山の三城を陷る。木曾義昌、甲斐の前軍を鳥居嶺に擊破し、捷を信忠に獻ず。信忠兵五千を遣はして之を助けしめ、自ら進んで桔梗原に陣す。復進み飯田に陣し、大島城を陷る。甲斐・信濃の士民、素より勝賴の弊政に苦しみ、先を爭つて來り降る。信忠、兵を留めて大島を守らせ、而して進んで飯島に陣す。勝賴、諏訪に在り、走つて甲斐に歸る。信忠乃ち高遠城を圍む。城は衝要に當る。守

將仁科信盛・小山田昌辰等、力戰す。下すべからず。

【通釋】十年二月、信忠は既に義昌の人質を收め、五萬騎に將となつて木曾に入り込んだ。信長は自ら步騎七萬に將として之に繼いだ。德川氏は三萬餘騎を率ゐて駿河から、北條氏は三萬騎を率ゐて相模から、金森長近は三千騎を率ゐて飛驒から一齊に進んで信長に應じた。信忠は瀧川一益・川尻鎭吉を以て先鋒となし、伊奈に入つた。伊奈の人は降參して鎭吉の兵を案內して國內に納れた。我が兵は進んで松尾・飯田・小山の三城を陷れた。木曾義昌は甲斐の前軍を鳥居峠に擊ち破り勝利を信忠に獻じた。信忠は兵五千人を遣はして之を助けさせ、自分は進んで桔梗原に陣取つた。それから再び進んで飯田に陣取り、大島城を陷れた。甲斐・信濃の士民は平素から勝賴の惡い政治に苦しんでゐたので、先を爭つて降參して來た。信忠は兵を留めて大島を守らせ、そして進んで飯島に陣取つた。勝賴は諏訪にゐたのであつたが走つて甲斐に歸つた。そこで信忠は高遠城を取り圍んだ。この城は敵の攻めかゝる肝要な場所に當つてゐた。守將の仁科信盛・小山田昌辰等は力め戰つた。なかなか降參さすことは出來なかつた。

【語釋】伊奈・飯田・小山・鳥居嶺・桔梗原・大島城・飯島・諏訪・高遠城（信濃）

三月、信忠使諸將攻其前、而自攻其後、淩城而登、獲信盛・昌辰以下將領十七人、斬首二千餘級、齎信盛首、獻信長于呂久川、梟之路左。信忠進陷高島・深志二城、遂入甲斐。勝賴以下已逃匿山谷。信忠陣古府、誅其留者、遣弟勝長、及森可成子長可徇

上野、下之。聞勝頼在天目山、遣瀧川一益圍之。獲勝頼及其子信勝、齎首獻信長于波合。信長大喜曰「出師三十日、乃定四國、獲其巨魁。此兒眞大奇也」。以信秀所傳佩刀賜之、使人梟勝頼首于京師。曰「乃父一生以入京爲志。吾使豎子繼其志也」。

〔訓読〕三月、信忠、諸將をして其の前を攻めしめ、自ら其の後を攻め、城を淩いで登り、信盛・昌辰以下の將領十七人を獲て斬首二千餘級。信盛の首を齎し、信長に呂久川に獻じ、之を路左に梟す。信忠進んで高島・深志の二城を陷れ、遂に甲斐に入る。勝頼以下、已に山谷に逃匿す。信忠、古府に陣し、其の留る者を誅し、弟勝長、及び森可成の子長可を遣はし、上野を徇へしめて、之を下す。勝頼、天目山に在りと聞き、瀧川一益を遣はし之を圍ましむ。勝頼、及び其の子信勝を獲、首を齎し、信長に波合に獻ず。信長、大に喜んで曰く「師を出だしてより三十日にして、乃ち四國を定め、其の巨魁を獲たり。此の兒、眞に大奇なり」と。信秀傳ふる所の佩刀を以て之に賜ひ、人をして勝頼の首を京師に梟せしむ。曰く「乃が父、一生、京に入るを以て志と爲す。吾れ豎子をして其の志を繼がしむるなり」と。

〔通釈〕三月、信忠は諸將をして城の前方を攻めさせ、そして自分は城の後部を攻め、城壁を押し淩いで乘りかゝり、信盛・昌辰以下の大將分十七人を討ち取り、斬首二千餘級からあつた。そこで信盛の首を持參して呂久川のほとりで信長に獻じ、之を路の左側に曝し首にした。信忠は進んで高島・深志の二城を陷れ、遂に甲斐に入つた。勝頼以下はその時既に山谷に逃げ匿れた。信忠は古府(甲府)に陣取り、そこに留つてゐた者を誅し、弟の勝長

及び森可成の子長可を遣はし、上野を徇へさせて之を下した。勝頼が天目山にゐると聞いたので瀧川一益を遣はして之を圍ましめた。勝頼及び其の子信勝を討ち取り、其の首を持つて波合で信長に獻じた。信長は大層喜んで曰ふのに「軍勢を繰り出してから三十日でもう四ケ國を平定し、その大頭を討ち取つた。この倅は本當に見所のある奴だ」と。信秀から傳へられた刀を賜ひ、人をして勝頼の首を京都で曝しものにさせた。そして曰ふのに「お前の父の信玄は一生涯京都に入ることを望みとしてゐた。余はこの小僧に其の志を繼がせてやるのだ」と。

語釋 呂久川（美濃）○高島・深志・波合（信濃）○四國（甲斐・信濃・上野・駿河。）

於是、信長進陣諏訪。兵聚諏訪者、凡十餘萬。下令於甲斐・信濃・駿河・上野、撫納降附、收武田氏姦臣數十人、數其罪誅之。北條氏獻黃金粱米、以賀戰捷。徳川公既定駿河、來謁于諏訪。信忠亦來會焉。信長與之謀、大論功行賞、賜駿河于徳川公、甲斐于川尻鎭吉、上野于瀧川一益、信濃四郡于森長可、岩村地五萬石于長可弟蘭丸、諸降將穴山信良・眞田昌幸等、因舊邑而增損之。

訓讀 是に於て、信長進んで諏訪に陣す。兵、諏訪に聚る者、凡そ十餘萬。令を甲斐・信濃・駿河・上野に下し、降附を撫納し、武田氏の姦臣數十人を收め、其の罪を數めて之を誅す。北條氏、黃金、粱米を獻じ、以て戰捷を賀す。徳川公、既に駿河を定め、諏訪に來り謁す。信忠も亦來り會す。信長、之と謀りて、大に功を論じ賞

を行ひ、駿河を德川公に、甲斐を川尻鎭吉に、上野を瀧川一益に、信濃の四郡を森長可に、岩村の地五萬石を長可の弟蘭丸に賜ふ。諸の降將穴山信良・眞田昌幸等は、舊邑に因つて之を增損す。

【通釋】そこで信長は進んで諏訪に陣取つた。諏訪に聚まつた兵は凡そ十餘萬からであつた。命令を甲斐・信濃・駿河・上野に下し、降參し屬いた者を撫で許し、武田氏の奸臣數十人を捕へ、その罪を責めて之を誅した。北條氏は黃金と米を獻じて勝利を祝賀した。德川公家康はすでに駿河を平定して諏訪に來て、信長にお目通りした。信忠も亦來り會した。信長は之と相談して大に功を論じ賞を行ひ、駿河を德川公に甲斐を川尻鎭吉に上野を瀧川一益に信濃の四郡を森長可に、岩村の地五萬石を長可の弟蘭丸に賜はつた。諸の降將穴山信良・眞田昌幸等は舊との領分を參酌して或は增したり或は減らしたりした。

【語釋】粱米（粱は良質の米。）

四月、信長巡視二府、革武田氏弊政、使諸將罷歸、而自入駿河、觀富士岳、德川氏除道供帳。信長賜之吉良粟二萬石。曰「今無用矣。以賞乃將士」乃西歸。遺命瀧川一益曰「吾以汝爲關東管領。凡關八州以至陸奥・出羽、皆汝處分之所、不能獨決者、謀之家康」賜之名馬曰「宜騎焉以入封也」因令柴田勝家等、與一益相爲應援、以圖長尾氏。遂經尾張歸安土。以南海未定、命信孝、與織田信澄・丹羽長秀・蜂屋賴隆等、南征。

曰「事平分賜四國」。五月、信孝等軍于大坂。信澄信行子也。

訓讀 四月、信長、二府を巡視し、武田氏の弊政を革め、諸將をして罷め歸らしめ、而して自ら駿河に入り、富士岳を觀る。德川氏、道を除いて供帳す。信長、之に吉良の粟二萬石を賜ふ。曰く「今や用無し。以て乃の將士を賞せよ」と。乃ち西歸す。瀧川一益に遺命して曰く「吾れ汝を以て關東管領と爲す。凡そ關八州より以て陸奧・出羽に至るまで、皆、汝之を處分し、獨り決する能はざる所の者は、之を家康に謀れ」と。之に名馬を賜ひて曰く「宜しく騎して以て封に入るべし」と。因つて柴田勝家等をして、一益と應援を相爲し、以て長尾氏を圖らしめ、遂に尾張を經て安土に歸る。南海未だ定らざるを以て、信孝に命じ、織田信澄・丹羽長秀・蜂屋賴隆等と、南征せしむ。曰く「事平がば四國を分賜せん」と。五月、信孝等、大坂に軍す。信澄は、信行の子なり。

通釋 四月、信長は古府新府を巡視し、武田氏の惡い政治を改め、それから諸將をして罷めて本國に歸らして、そして自分は駿河に入り、富士山を見物した。德川氏は道を綺麗に掃除して接待の用意をし、色々御馳走をした。信長は吉良に積んで置いた米二萬石を德川氏に賜はつた。曰ふのに「もう要らないからこれで貴公の將士を賞してやれ」と。そこで西に歸つた。瀧川一益に命令を言ひ置いていふには「余はお前を關東管領とする。凡そ關東八州から陸奧・出羽に至るまで皆お前が之を取り裁けよ。若し獨りで決めることの出來ない場合は家康に相談せよ」と。一益に名馬を賜はつて曰ふのに「この馬に乘つて領分の上野に行つたら宜からう」と。そこで柴田勝家等をして一益と互に應援し合つて、長尾氏を圖らしめた。遂に信長は尾張を經て安土に歸つた。南海地方がまだ平定せぬので、信孝に言ひつけて、織田信澄・丹羽長秀・蜂屋賴隆等と共に南征せしめた。曰ふのに「事が落着し

たら四國を分けてやらう」と。五月、信孝等は大阪に陣取つた。信澄といふのは信長の弟信行の子である。

十五日、徳川公與穴山信良入謝。信長待之甚渥。令惟任光秀饗之。旦日、得羽柴秀吉書。曰「秀吉圍高松城。吉川元春・小早川隆景、擁毛利輝元、將數萬騎來援。請得援軍。」信長曰「彼擧其巢穴而來。是自速覆滅也。吾自往掃殄之、梟元春・隆景首、乘勢遂定九州耳。」乃遣堀秀政、馳誡秀吉曰「汝與之相持、勿使歸入。」於是、大徵兵、命池田信輝・細川忠興・高山友祥・中川清秀、爲先鋒先發。光秀亦與焉。

訓讀 十五日、徳川公、穴山信良と入りて謝す。信長、之を待つこと甚だ渥し。惟任光秀をして之を饗せしむ。旦日、羽柴秀吉の書を得たり。曰く、「秀吉、高松城を圍む。吉川元春・小早川隆景、毛利輝元を擁し數萬騎に將として來り援く。請ふ、援軍を得ん」と。信長曰く「彼れ其の巢穴を擧げて來る、是れ自ら覆滅を速くなり。吾れ自ら往いて之を掃殄し、元春・景隆の首を梟し、勢に乘じて遂に九州を定めんのみ」と。乃ち堀秀政を遣はし、馳せて秀吉を誡めしめて曰く、「汝、之と相持し、歸り入らしむる勿れ」と。是に於て、大に兵を徵し、池田信輝・細川忠興・高山友祥・中川清秀に命じて、先鋒と爲し、先發せしむ。光秀も亦與る。

通釋 十五日、徳川公家康は穴山信良と共に安土に入り、御禮を申し述べた。信長は、之を大層手厚く待遇した。惟任光秀をして接伴係となして御馳走させた。その翌日羽柴秀吉の書面が屆いた。曰ふのに「私は高松城

を取り圍んで居ります。吉川元春・小早川隆景が毛利輝元を擁し、數萬騎に將として援けに來ました。どうか援軍をお遣はし下さいませ」と。信長が曰ふのに「毛利氏がその本國の兵を全部つれて來たのは、自ら滅亡を早めてゐる樣なものだ。余は自ら出かけて之を拂ひ滅し、元春・隆景の首を獄門にかけ、その勢に乘じて遂に九州を平定せんばかりである」と。そこで堀秀政を遣はし、馳せて秀吉を戒めて曰ふには「お前は之と對峙して彼等を本國に歸らせない樣にせよ」と。こゝに於て大に兵士を集め、池田信輝・細川忠興・高山友祥・中川清秀に命じて前鋒となし、先づ出發せしめた。明智光秀も亦其の派遣される中に在つた。

語釋　入謝（駿河を分ち貰ひ、粟二萬石を貰つた禮。）○高松城（備中）

初光秀、以土岐氏疏屬、流寓諸國、無所遇。終干信長。信長擢爲坂下城主、終賜丹波。信長待將士、不設禮節。嘲詼嫚罵以爲常。而光秀爲人文深、喜自修飾、以材藝自高。先是稻葉通朝家臣、齋藤・那須有罪。去仕光秀。通朝訴之信長。信長令光秀還致那須、賜齋藤死。光秀不奉命。信長怒召光秀、罵詈之。嘗飮將士酒。光秀逃酒。信長親追捉而伏之、騎其項、拔刀擬曰「不飮酒則飮此」。光秀素不勝飮。强嚼一觥。信長乃掖光秀、手擊其頭曰「好禿顱、可以代鼓」。光秀慚憤、自揣信長欲殺己。故形於言動。

訓讀　初め光秀・土岐氏の疏屬を以て諸國に流寓し、遇ふ所無し。終に信長に干む。信長擢んでて坂下の城主

と爲し、終に丹波を賜ふ。信長、將士を待つに、禮節を設けず。嘲謔嫚罵、以て常と爲す。而して光秀、人と爲り文深、喜んで自ら修飾し、材藝を以て自ら高ぶる。是より先、稻葉通朝の家臣齋藤・那須、罪有り。去つて光秀に仕ふ。通朝、之を信長に訴ふ。信長、光秀をして那須を還致し、齋藤に死を賜はらしむ。光秀、命を奉ぜず。信長怒り、光秀を召して之を罵詈す。嘗て將士に酒を飲ましむ。光秀、酒を逃る。信長親ら追ひ、捉へて之を伏せ、其の項に騎し、刀を拔き擬して曰く「酒を飲まずんば則ち此を飲め」と。光秀、素より飲むに勝へず。强ひて一觥を嚼す。信長乃ち光秀を挾み、手もて其の頭を擊つて曰く「好禿顱、以て鼓に代ふべし」と。光秀、慚憤し、自ら揣るに、信長己を殺さんと欲す。故に言動に形ると。

〔通釋〕初め明智光秀は土岐氏の疏遠の一族であつて、諸國を流浪し、あちこち渡り歩き、よい主君に遭遇しなかつた。終に信長に仕官を求めた。信長は拔擢して坂下の城主となし、終に丹波の國まで賜つて非常に出世した。一體信長といふ人は將士を扱ふのに禮儀作法など少しも設けない人であつた。人を嘲つたり、戲談を言つたり、口汚く罵つたりするのが常であつた。所が此の光秀といふ男は其の人柄、物事に念を入れる質で、好んで上べを飾り行儀をよくし、材能技藝に達してゐるので、それを鼻にかけて自らえらい者に思つてゐた。これより先き、稻葉通朝の家來の齋藤・那須といふ二人が惡事をして罪が有つた。此の二人は去つて光秀に仕へた。そこで通朝は之を信長に訴へた。信長は光秀に那須を稻葉に還へしやり、齋藤は切腹させるやうに命じた。所が光秀はその命に從はなかつた。信長は怒つて光秀を呼び寄せ、大層之を罵り辱めた。信長が嘗て將士に酒を飲ましめた。光秀は酒が嫌ひで酒席を脫した。信長は親ら追つかけ來り、光秀を捕へて組み伏せ、その首の所に跨がつて刀を拔いて、さしつけて曰ふのに「酒を飲まなければ、此の刀を飲めよ」と。光秀平生酒が嫌ひで迚も飲めないのであ

るが、無理に一大杯の酒を傾け飲んだ。そこで信長は光秀の頭を腋の下に挾んで手で其の頭を撃ち乍ら曰ふには「此の好く禿げた禿げ頭は鼓の代用にすることが出來る」と。光秀は慚ぢ憤り、自ら考へ計り、これは信長が自分を殺さうと思つてゐるのである。だからあのやうに言葉や動作に現はれるのであると思つた。

語釋 文深（文法深刻、何にでも念を入れキチ〳〵と定まり通りにやつて行かふとすること。）○觥（音クワウ。大杯。）

信長寵森蘭丸。嘗陳珍翫、謂之曰「汝所欲得、吾輒予之」。蘭丸曰「臣所欲得、不在於此。近江志賀郡、先臣可成舊領也。願得還賜幸甚。非所敢望也」。信長曰「暫俟之。三歳後當充汝願」。光秀在屏後、聞之自疑曰「志賀今屬我。我之被誅、其在三歳後乎」。既而信長命光秀、以蘭丸爲女壻、欲令予之志賀也。光秀復不奉命。至是受命饗徳川氏。盛治帳具、周旋甚勤。俄而有出征之命。他人來代之。光秀大恚曰「使我徒勞」。悉投其具於湖中而去。於是遂有反心。而信長不之覺也。乃令津田益信及蒲生賢秀等守安土、而自以近臣百餘人入京師、館本能寺。信忠與弟勝長等、館于妙覺寺。

訓讀 信長、森蘭丸を寵す。嘗て珍翫を陳ね、之に謂つて曰く「汝の得んと欲する所は、吾れ輒ち之を予へん」と。蘭丸曰く「臣の得んと欲する所は、此に在らず。近江の志賀郡は、先臣可成の舊領なり。願はくは還し賜ふ

を得ば、幸甚だし。敢て望む所にあらざるなり」と。信長曰く「暫く之を俟て。三歳の後、當に汝の願を充すべし」と。光秀、屛後に在りて、之を聞き、自ら疑ひて曰く「志賀は今、我に屬す。我の誅せらるるは、其れ三歳の後に在るか」と。既にして信長、光秀に命じ、蘭丸を以て女壻と爲し、之に志賀を予へしめんと欲す。光秀、復命を奉ぜず。是に至り、命を受けて德川氏を饗す。盛に帳具を治め、周旋甚だ勤む。俄にして出征の命あり。他人來りて之に代る。光秀、大に恚つて曰く「我をして徒勞せしむ」と。悉く其の具を湖中に投じて去る。是に於て、遂に反心有り。而して信長、之を覺らず。乃ち津田益信、及び蒲生賢秀等をして安土を守らしめ、而して自ら近臣百餘人を以て京師に入り、本能寺に館す。信忠は弟勝長等と、妙覺寺に館す。

通釋 信長は森蘭丸を寵愛した。當て珍らしい手なぐさみの品を列らべて、蘭丸に謂つて曰ふに「お前が得たいと思ふものは、何んでも遣るから言つて見ろ」と。蘭丸が曰ふのに「臣の得たいと思ひまするものは此等の品物では御座りませぬ。近江の志賀郡は父可成の舊の領地で御座います。願はくは、その土地を還し下さらばこんな仕合せは御座いませぬ。が然し、たつて頂戴したいと望む所では御座いませぬ」と。信長が曰ふのに、「マア暫く待つて居れ。三年の後にはお前の願ひを充たしてやるであらう」と。光秀は屛風の後ろで其の問答を聞き、自ら疑つて思ふに「志賀は今自分の領地となつてゐる。ハ、ア自分が殺されるのは、分つた、三年の後であるのか」と。其の内に信長は光秀に命じ蘭丸に娘をやつて婿となし、そして蘭丸に志賀郡を與へしめようと思つた。光秀は此の命を受けなかつた。德川氏が安土へ來たので光秀は信長の命を受けて家康を饗應することになつた。光秀は盛に諸道具を取り揃へ隨分骨折つて世話をした。そこへ秀吉の方から援兵を請うて來たので急に光秀に命じ先鋒として出征するやうにした。從つて家康を饗應するに他の人がやつて來て代つた。光秀は非常に怒つて曰ふの

に、「我に無駄な骨折をさせた」と。皆其の諸道具類を琵琶湖の中に投げ棄て、其處を去つた。是に於て遂に謀叛をする心を起した。けれども信長はそれを覺らなかつた。そこで津田益信、及び蒲生賢秀等に安土城を守らせて、自分は近臣百餘人と京都へ入り、本能寺に止舍した。信忠は弟勝長等と妙覺寺に泊つてゐた。

光秀之發安土也、治行于坂下、遂入丹波、詣愛宕山祠、拈鬮再三。夜宿祠下。寢而不寐。數有嘆聲。從者問「何故嘆」光秀叱曰「非汝輩所知也」其明、會于西坊、爲連歌。或供粽焉。光秀不脫苞、而食。卒然問傍人曰「本能寺隍深幾尺」衆異之。既罷歸龜山。六月朔、光秀召從子光春及其將齋藤利三等五人、謂之曰「汝等能爲我死乎。則有一事、可與議。議苟不合、則速斫吾頭」五人相目不能答。光春曰「臣等業已委質矣。詎必問也。抑所議者何事」光秀曰「吾殆爲右府所殺者數矣」因具語以故。曰「今事已迫矣。吾將先發之」五人欲諫止之。視光秀意色既決、不可諫、乃贊成其謀。光秀使五人納誓效質。

訓讀 光秀の安土を發するや、坂本に治行し、遂に丹波に入り、愛宕山祠に詣で、鬮を拈ること再三。夜、祠下に宿す。寢ねて寐られず。數嘆聲あり。從者問ふ「何の故に嘆ずる」と。光秀、叱して曰く「汝が輩の知る

所に非ざるなり」と。其の明、西坊に會し、連歌を爲す。或人、粽を供す。光秀、苞を脱せずして食す。卒然、傍人に問ひて曰く「本能寺の隍の深さ幾尺ぞ」と。衆、之を異しむ。既に罷めて龜山に歸る。六月朔、光秀、從子光春、及び其の將齋藤利三等五人を召し、之に謂つて曰く「汝等能く我が爲めに死せんか。則ち一事の與に議すべき有り。議苟も合はずんば、則ち速に吾が頭を斫れ」と。五人相目して答ふる能はず。光春曰く「臣等業已に質を委せり。詎んぞ必ずしも問はんや。抑議する所の者は何事ぞ」と。光秀曰く「吾れ殆ど右府の殺す所と爲ること數なり」と。因つて具に語るに故を以てす。曰く「今、事已に迫れり。吾れ將に先之を發せんとす」と。五人諫めて之を止めんと欲す。光秀の意色、既に決し、諫むべからざるを視、乃ち其の謀に贊成す。光秀、五人をして誓を納れ質を效さしむ。

通釋　光秀が安土を出立して、征西の途に上つた時には、坂下で旅裝を整へた。そして遂に丹波に入り、愛宕山のお社にお參りして、みくじを抽くこと二三度に及んだ。其の夜はその社のもとで宿つた。夜寢ても寐られない。度々嘆息の聲を漏らした。供の者が「何故、そのやうに嘆息なされまするか」と尋ねた。光秀はそれを叱つて曰ふのに、「貴樣等の知つたことではない」と。其の翌日愛宕山の西坊(寺の名)で集つて連歌の會があつた。その時或る人が粽を御馳走した　光秀は皮を取らずに皮ぐるみにそれを食べた。遽かに側の人に尋ねて曰ふには、「本能寺の溝の深さは何尺あるか」と。多くの人々はこれは變だと思つた。かくてその會も濟んで自分の居城龜山に立ち歸つた。六月朔、光秀は甥の光春、及び其の將の齋藤利三等五人を召し、謂つて曰ふに「お前等は余の爲めに死んで呉れることが出來るか。死んで呉れる事が出來るなら此處に一つお前等と相談致したい事がある。若しも此の相談が少しでもお前等の心と合はないならば、速かに余の頭を斬つて終へよ」と。五人の者は互に目

を見合はせて何んとも答へることは出來なかつた。光春が曰ふのに「臣等は既に贄を執つて、あなた樣の家來になつてゐます。家來となつてゐる以上は何も氣兼してお尋ねなされるまでもないもので御座りまする。一體御相談といふのは何事で御座いまするか」と。光秀が曰ふのに「余は殆んど右大臣殿の爲めに殺されようとしたことが度々であつた」と。そこで詳しく謀叛をしようと決心するに至つた、一伍一什を話した。そして曰ふのに「今や事は、さし迫つて來てゐる。余は、彼より事の起らぬ前に此方から先手を打たうと思ふ」と。五人の者は諫めて之を止めさせようと思つた。所が光秀の意氣込みや其の氣色が既に決つてゐて、中々諫めることは出來ないと見て取つて、そこで其の謀に贊成することになつた。光秀は五人の者に起請を書かせ、人質を出させた。

語釋　連歌（歌の上句と下句とを二人で詠むもの。）○龜山（丹波、光秀の居城のある所。）○業已（二字でスデニと讀む。）○委質（質を體質と譯し、奉公する意に取るものがある。その時は質はシツと訓まねばならぬ。又質を人質と譯する人がある。その時はチと訓まねばならぬ。併し委質の時は通常にえを執る意に用ふる。質と贄と通ずる。この時は質は音シである。）○右府（信長）

於是、悉丹波兵、卽發。宣言「奉命西援秀吉。」夜度大江山、至老坂。右折則走備中道也。光秀乃左馬首而馳。士卒驚異。既渉桂川。光秀乃擧鞭東指、颺言曰「吾敵在本能寺矣。」衆始知其反也。昧爽、圍本能寺、呼譟而入。弓銃交發。信長在臥內。驚起曰「反者誰。」令蘭丸出視其旗幟。返報曰「惟任光秀也。」信長曰「豎子敢爾。」乃手弓而出。蘭丸以下宿直者、皆肉薄拒戰。信長親射斃數人。弦絕。執槍而鬭、傷右肱。乃走入、揮姬妾使逃

去、縱火自殺。年四十九。蘭丸及二弟坊丸・力丸、及金森長則・高橋寅松・矢代勝介・伴正林等百餘人、皆力戰死之。光秀索信長首不得。意甚懼。齋藤利三、得其衣焦爛者示之。光秀猶不安、大索之。

訓讀 是に於て丹波の兵を悉し卽ち發す。宣言す、一命を奉じて西のかた、秀吉を援く」と。夜、大江山を度り、老坂に至る。右折すれば則ち備中に走く道なり。光秀乃ち馬首を左にして馳す。士卒驚き異しむ。既に桂川を涉る。光秀乃ち鞭を擧げて東に指し、颺言して曰く「吾が敵は本能寺に在り」と。衆始めて其の反を知る。昧爽、本能寺を圍み、呼譟して入る。弓銃交發す。信長、臥内に在り。驚き起つて曰く「反する者は誰ぞ」と。蘭丸をして出でて其の旗幟を覘しむ。返り報じて曰く「惟任光秀なり」と。信長曰く「豎子敢て爾るか」と。乃ち弓を手にして出づ。蘭丸以下の宿直の者、皆肉薄して拒ぎ戰ふ。信長親ら射て數人を斃す。弦絕ゆ。槍を執つて鬭ひ、右肱を傷く。乃ち走せ入り、姬妾を揮して逃れ去らしめ、火を縱ちて自殺す。年四十九。蘭丸、及び二弟坊丸・力丸及び金森長則・高橋寅松・矢代勝介・伴正林等百餘人、皆力戰して之に死す。光秀、信長の首を索むれども得ず。意甚だ懼る。齋藤利三、其の衣の焦爛する者を得て、之を示す。光秀猶ほ安んぜず。大に之を索む。

通釋 そこで光秀は丹波の兵を殘らず繰り出し、早速出發した。そして言ひふらした、一信長の命を承つて西方秀吉を援けるのである」と。夜大江山を越え、老坂に至つた。此處から右に折れると備中に行く道となる。所が光秀は馬の首を左にして驅け出した。士卒はこれは變だと驚き怪しんだ。かくて桂川を渡つて終つた。光秀は

そこで鞭を擧げて東方を指し聲高らかに言つて曰ふのに、「吾が敵は本能寺に在るのであるぞ」と。皆の者共は始めて光秀が謀叛をしたことを知つた。夜明け方に本能寺を取り圍み、呼ばはり噪わいで進み入つた。交る〳〵弓や鐵砲を發つた。信長は臥室の内にあつた。吃驚して起きて曰ふのに、「叛いた奴は誰れだ」と。蘭丸をして其の旗の旗記しを見させた。蘭丸は引き返して報告して曰ふに「謀叛人は惟任光秀に御座りまする」と。信長が曰ふのに「豎子、不敵なことを仕出來し居る」と。そこで、手づから弓を取つて出た。蘭丸以下宿直のものも皆敵に迫つて拒ぎ戰つた。信長は親ら射て數人を斃した。弓の弦が絕ち切れた。そこで槍を執つて鬪ひ、右肱に怪我をした。そこで走せて寺内に入り腰元どもを指揮して逃げ去らせて置き、火をつけて自殺した。其の時年四十九であつた。蘭丸及び二人の弟坊丸・力丸、及び金森長則・高橋寅松・矢代勝介・伴正林等百餘人の者、皆力め戰つて討死した。光秀は信長の首を搜し求めたけれども判らなかつた。心の内で非常に懼れた。齋藤利三が信長の衣の燒け焦げたのを得て光秀に見せた。光秀はそれでもまだ安心出來なくて、大に索し求めた。

語釋 大江山（丹波）〇老坂（山城・丹波二國の界に在る。）〇桂川（京都の西。）〇颺言（聲を高く揚げ言ふ。）

信忠聞變大愕、馳赴之。途望見本能寺烟起。村井貞勝來跪路左、報曰「右府已遇弑矣。君宜急保二條第。」信忠從之、使貞勝徙皇太子于禁内、而入保之。衆或議曰「及賊未來、馳歸安土、建我旗鼓、則數萬騎立至矣。討賊復仇、一擧可辨。」信忠曰「彼既謀此大事、豈有不置兵塞路者乎。與其暴尸於路、寧自裁于此。」衆以爲然。日中賊合

萬餘騎、來圍。吾兵僅二三百人、連鋒奮擊、相逐于庭。猪子兵介・小澤六郎、在于逆旅。聞警赴之。主人止之。弗聽而入。梶原松千代亦欲入援。其家僕又右衞門止之、而代入。信忠褒之、賜長刀。斃數十人而死。賊患我兵力戰、乃遣弓銃手、登近衞第屋上、瞰而亂發。我兵死傷略盡。信忠乃割腹而死。毛利秀高・福富貞次・菅谷正賴・齋藤新五、皆死之。其餘從兵無一人逃者。

【訓讀】信忠、變を聞き大に愕き、馳せて之に赴く。途に本能寺に烟起るを望見す。村井貞勝來つて路左に跪き、報じて曰く「右府已に弑に遇へり。君宜しく急に二條の第を保つべし」と。信忠、之に從ひ、貞勝をして皇太子を禁內に徙さしめ、而して入りて之を保つ。衆或は議して曰く「賊未だ來らざるに及び、馳せて安土に歸り、我が旗鼓を建つれば、則ち數萬騎立ちどころに至らん。賊を討じ仇を復する、一擧にして辨ずべし」と。信忠曰く「彼れ既に此の大事を謀る。豈に兵を置き、路を塞がざる者あらんや。其の尸を路に暴さんよりは、寧ろ此に自裁せん」と。衆以て然りと爲す。日中、賊、二萬餘騎を合せ、來り圍む。吾が兵僅に二三百人、鋒を連ねて奮擊し、庭に相逐ふ。猪子兵介・小澤六郎、逆旅に在り。警を聞き、之に赴かんとす。主人、之を止む。聽かずして入る。梶原松千代も、亦入りて援けんと欲す。其の家僕又右衞門、之を止めて代つて入る。信忠之を褒し、長刀を賜ふ。數十人を斃して死す。賊、我が兵の力戰するを患ひ、乃ち弓銃手を遣はし、近衞第の屋上に登り、

瞰して亂發す。我が兵死傷略ぼ盡く。信忠乃ち腹を割いて死す。毛利秀高・福富貞次・菅谷正賴・齋藤新五、皆之に死す。其の餘の從兵一人の逃るゝ者なし。

【通釋】信忠は變事を聞いて非常に驚き馳せて難に赴いた。途中で本能寺に烟が起るのを望み見た。そこへ村井貞勝がやつて來て、路の左側に跪いて報告して曰ふには「右大臣殿はもう弑せられました。君には急に二條の屋敷を維持なさつたら宜いと思ひます」と。信忠は之に從ひ貞勝をして二條に居られた皇太子を御所へお移し申し、そして自分はそこに入つて之を保つた。多勢の者は或は評議して曰ふのに「賊兵がまだ押し寄せて來ぬ間に馳せて安土城に歸り、わが旗鼓を建てたなれば數萬騎の兵は卽座に集まることだらう。賊を討ち仇を返すことは一戰爭で埒が明く」と。信忠がいふのに「彼はすでにこの大事を企てたのである。どうして兵を置いて路を塞ぎ遮ぎらぬことがあらうや。逃げて屍を路側に暴らすよりは一層のこと、こゝで自殺した方が宜い」と。多勢の者も皆さうだと思つた。日中になつて賊は二萬騎を合せて來り圍んだ。わが兵僅かに二三百人に過ぎなかつたが鋒先をそろへて奮ひ擊ち、庭上で逐つかけ合つた。猪子兵介・小澤六郎は宿屋に居た。非常を聞いて出かけようとした。宿屋の主人が之を止めた。聞き入れないで二條城に入つた。梶原松千代も亦入つて援けようと思つた。その下僕の又右衞門が之を止めて代つて屋敷に入つた。信忠は之を褒めて長刀を賜はつた。數十人を切り倒して戰死した。賊は我が兵が力め戰ふのを厄介に思ひ、そこで弓方、鐵砲組を遣はし、近衞邸の屋根の上に上つて見下ろして無暗に射かけた。わが兵は死んだり傷ついたりして大抵盡きて終つた。そこで信忠は腹を割いて死んだ。毛利秀高・福富貞次・菅谷正賴・齋藤新五など皆討死した。その外の從兵は一人も逃げた者はなく皆討死した。

【語釋】從ニ皇太子ニ（前から二條城に皇太子をお住せ申してゐた。）○割レ腹而死（年二十六。）

初安藤範俊家臣松野平助、有材名。範俊敗、信長祿之。於是、宿于八幡祠、不及於難。齋藤利三素與之善。以書招之。平助佯應、欲窺隙刺光秀。光秀覺其意、不敢親近。平助乃自殺。光秀大索織田氏臣僚在京師者、殺之。獨前田玄以帶信忠遺命、逃至岐阜、抱信忠子三法師、走入清洲。

訓讀　初め安藤範俊の家臣、松野平助、材名あり。範俊敗れ、信長之を祿す。是に於て、八幡祠に宿し、難に及ばず。齋藤利三、素より之と善し。書を以て之を招く。平助佯り應じ、隙を窺ひ光秀を刺さんと欲す。光秀其の意を覺り、敢て親近せず。平助乃ち自殺す。光秀大に織田氏の臣僚の京師に在る者を索めて之を殺す。獨り前田玄以、信忠の遺命を帶び、逃れて岐阜に至り、信忠の子三法師を抱き、走つて清洲に入る。

通釋　はじめ安藤範俊の家來松野平助は材能があるとの名聲が高かつた。範俊が敗れた後も信長は之を用ひて祿を充てがつた。光秀の亂の時、八幡宮に泊つて居て、この亂に間に合はなかつた。齋藤利三は平素から彼と仲が善かつた。書面をやつて之を招いた。平助はわざと伴つて之に內應し、隙をねらつて光秀を刺し殺さうと思つた。光秀は彼の心を覺つて決して近づけ親しまなかつた。そこで平助は自殺した。光秀は大々的に織田氏の家來で京都に居るものを捜し求めて之を殺した。たゞ前田玄以だけは信忠の遺命を帶びて逃げて岐阜に歸り、信忠の子の三法師を抱き、走つて清洲に入り込んだ。

語釋　八幡祠（男山八幡宮。）〇三法師（秀信）

信長起尾張、常以平定四方為志。不喜虛美。廷臣或勸為征夷大將軍。信長曰「吾何遽襲室町故號為」。然將士有功、輒急賞之、獎用公廉、政無偏私。獄內贖金、悉以為修橋道之資。尤憎浮屠氏。嘗有一僧、自稱得神通、愚民景附。信長召見詰問、使人捉其兩手、而親舉刀斫其頭。曰「猶得神通乎」。柴田勝家獻一向賊首級。信長有喜色。楠友閑在側。諫曰「誰非天下之民乎」。因極論仁暴是非。信長嘉納之。然時承室町氏婾惰之後、以刑殺立威。所得之地、必誅其主、以予家臣。性亦猜忍、追咎諸將舊惡。若光秀者、皆不自安。所以不終其志也。

訓讀 信長、尾張より起り、常に四方を平定するを以て志と為す。虛美を喜ばず。廷臣、或は征夷大將軍となるを勸む。信長曰く「吾れ何遽ぞ室町の故號を襲ぐことを為さん」と。然れども將士、功あれば、輒ち急に之を賞し、公廉を獎用し、政、偏私なし。獄內の贖金は、悉く以て橋道を修むるの資となす。尤も浮屠氏を憎む。嘗て一僧有り、自ら神通を得ると稱し、愚民景附す。信長召し見て詰問し、人をして其の兩手を捉へしめ、而して親ら刀を擧げ其の頭を斫る。曰く「猶ほ神通を得るか」と。柴田勝家、一向賊の首級を獻ず。信長、喜色あり。楠有閑、側に在り。諫めて曰く「誰か天下の民に非ざらんや」と。因つて仁暴の是非を極論す。信長、之を嘉納す。然れども、時は室町氏婾惰の後を承け、刑殺を以て威を立つ。得る所の地、必ず其の主を誅し、以

て家臣に予ふ。性も亦猜忍、諸將の舊惡を追咎す。光秀の若き者、皆自ら安んせず。其の志を終へざる所以なり。

通釋 信長は尾張から起つて常に天下を平定することを自分の志としてゐた。表はべの立派なことは喜ばなかつた。ある公卿が征夷大將軍になつたら如何かと勸めたことがある。信長がいふのに「余はどうして室町の舊い稱號を繼ぐやうなことをしませうや」と。併し乍ら將士で手柄があればいつでも急いで之を賞し、公正にして廉潔なるものを推奬し任用し、政治に依怙偏頗なことがなかつた。牢内の罰金は全部橋や道普請の費用にした。中でも一番僧侶を憎んだ。ある時一人の僧が自分は神通力を得てゐるといつて愚民を惑し、愚民は影の形に於けるがやうに附きまとつた。信長はその僧を召して之に會ひ、詰り問うた揚句、人をして、彼の兩手を取らへさせて置き、自分で刀を振り擧げてその首を切つた。曰ふのに「これでも神通力を得てゐるのか」と。柴田勝家が一向宗の賊の首級を獻じた。信長は嬉しさうにした。楠友閑が傍に居て諫めて曰ふのに「これ等の者だつて皆天下の民でありまして誰か天下の民でないものがありませうぞ」と。そこで口を極めて仁政が正しく暴政が非なることを論じた。信長はその言を喜び納れた。しかし乍ら其の當時は室町氏のお座なりの政治の後を承けてゐたので、刑法殺戮を以て威力を立てゝゐた時代である。土地を取れば必ず其の土地の主を誅して家臣に與へた。その性質も亦そねみ深く殘忍であつて諸將の古い罪までも洗ひ出すといつた風であつた。光秀のやうな者も皆自ら不安を感じてゐたのであつた。それが爲めに遂に弑せられたので、それが信長の天下平定の大志を成就し得なかつた譯なのである。

語釋 追咎舊惡（林通勝・伊賀範俊を罰せし類。）

光秀既定京師、欲取安土。卽日、馳至瀬田、遺書於城主山岡景隆。景隆斬使者、燒橋而逃。光秀發卒修橋。初安土城中聞變、未得確報。物情恟然。日暮有數騎、馳歸自京師。士民要路問之。騎曰「兩公薨矣」。城中大擾。蒲生賢秀欲鎭衆拒守。衆一夜四五驚。諸將士多逃亡者。賢秀乃令其子氏鄉具輿馬數百、迎夫人以下、逃於其邑日野。姬人或勸賢秀取天主貨寶而火之、毋以予賊也。賢秀曰「先君所盡心經營、不忍燒也。光秀其或燒之、卽取焉以自殖、豈能久乎。今吾取其貨、人謂之何」。使木村某守之而去、保守日野。

【訓讀】光秀既に京師を定め、安土を取らんと欲す。卽日、馳せて瀬田に至り、書を城主山岡景隆に遺る。景隆、使者を斬り、橋を燒いて逃る。光秀、卒を發し橋を修む。初め安土の城中、變を聞き未だ確報を得ず。物情恟然たり。日暮、數騎あり、馳せて京師より歸る。士民、路に要して之を問ふ。騎曰く、「兩公、薨ず」と。城中、大に擾る。蒲生賢秀、衆を鎭め拒守せんと欲す。衆、一夜に四五たび驚く。諸將士、逃亡する者多し。賢秀乃ち其の子氏鄉をして、輿馬數百を具へしめ、夫人以下を迎へ、其の邑日野に逃れしむ。姬人、或は賢秀に天主の貨寶を取りて之を火き、以て賊に予ふる勿れと勸む。賢秀曰く「先君の心を盡し經營する所、燒くに忍びざるなり。光秀其れ或は之を燒き、卽しくは取つて以て自殖するも、豈に能く久しからんや。今吾れ其の貨を取らば、人、

之を何とか謂はん」と。木村某をして之を守らしめて去り、日野を保守す。

通釋 光秀は既に京都を定めたので安土を取らうと思つた。その日、すぐ馳せて瀨田に至り、書面を城主山岡景隆にやつた。景隆はその使者を斬り、橋を燒いて逃げた。光秀は兵卒を繰り出して橋を修繕させた。はじめ安土の城内では變事を聞いたのだけれども確かな報知を得なかつた。それが爲め人心が騷々しかつた。すると日暮れ方に五六騎の者が京都から馳せ歸つて來た。士民は途中で待ち受けて尋ねた。その騎兵がいふのに「大殿も若殿も皆死なれた」と。城内は大混亂に陷つた。蒲生賢秀は衆を鎭めて拒ぎ守らうと思つた。併し多勢の者は蜚語を聞いて一晩の中に四五回も騷ぎ出すといつた有樣であつた。諸將士で逃げ去るものが隨分多かつた。そこで賢秀は其の子氏鄉をして乘物や馬を數百準備させ、信長の夫人以下を迎へて、その領分の日野に逃れさせた。或る腰元が賢秀に向つて天主閣に在る寶物を皆燒いて終つて賊に與へるなと言つた。賢秀がいふのに「これは先殿樣が心を盡してこんなに仕上げられたのであるから燒くには忍びない。光秀が或は燒くかも知れないが、或は又之を取つて自分を肥やしたとしても、君を弑した逆賊がどうして永續きしようや。今自分がその寶物を取つたら、人は私を何といふだらう考へても見よ」と。木村某をして之を守らしめて立ち去り、日野を守備した。

語釋 燒レ橋（瀨田橋を燒く。）〇日野（近江）

光秀至、與二其將士一分二取貨寶一。會天使來勞レ之。光秀意益驕。遣レ使招二其女壻細川忠興一。忠興逐二其使者一招二其友人筒井順慶一。順慶不レ至。光秀乃懼、入二京師一務行二惠政一以收二人

心。復適安土、欲攻賢秀。賢秀遣使伊賀、求援於信雄。信雄危疑不發。賢秀乃送質爲信。信雄乃出、次椎山。光秀不敢動。會伊賀盜起。信雄以故不能進。信孝初在大坂。奉信長密旨、宣言修艦於紀伊、因急襲鷺森、幾殺光佐、而變報至。信孝與信澄・長秀議、解圍而退、至大坂。

訓讀 光秀至り、其の將士と貨寶を分取す。會天使來り之を勞す。光秀、意益驕る。使を遣はし其の女婿細川忠興を招く。忠興、其の使者を逐ふ。其の友人筒井順慶を招く。順慶至らず。光秀乃ち懼れ、京師に入り、務めて惠政を行ひ以て人心を收む。復安土に適き賢秀を攻めんと欲す。賢秀、使を伊賀に遣はし、援を信雄に求む。信雄、危疑して發せず。賢秀乃ち質を送り信と爲す。信雄乃ち出で、椎山に次す。光秀敢て動かず。會伊賀に盜起る。信雄、故を以て進む能はず。信孝、初め大坂に在り。信長の密旨を奉じ、艦を紀伊に修むと宣言し、因つて急に鷺森を襲ひ、幾んど光佐を殺さんとし、而して變報至る。信孝、信澄・長秀と議し、圍を解いて退き、大坂に至る。

通釋 光秀は安土にやつて來て、その將士と寶物を分け取りした。丁度其の時、勅使が見えて光秀を慰勞された。光秀は心益高ぶつた。使を遣はして其の婿の細川忠興を招かせた。忠興はその使者を逐つ拂つた。その友人筒井順慶を招いた。順慶も來なかつた。そこで光秀は恐れて京都に入り、出來るだけ仁政を行つて人心の收攬をつとめた。それからまた安土に往つて賢秀を攻めようと思つた。賢秀は使者を伊賀に遣はして援助を信雄に求

めた。信雄は危ぶみ疑つて兵を出さなかつた。そこで賢秀は人質を送つて證とした。故に信雄は出で〻椎山に宿つてゐた。光秀は敢て動かなかつた。丁度其の時伊賀に賊が起つて、信雄はその爲めに進出することが出來なかつた。信孝ははじめ、大坂に居つた。信長の内々の命令を受けて軍艦を紀伊で修繕するのだと言ひふらし、そして急に鷺森を襲ひ、殆んど光佐を殺さんとした所へ變事の知らせが來たのである。信孝は信澄・長秀と相談して圍を解いて退却し、大坂に至つた。

語釋 椎山(近江) ○鷺森(紀伊)

信澄亦光秀壻也。叛應光秀、據其子城。信孝・長秀迫之、使自殺、欲遂誅光秀。而兵潰不可收。會羽柴秀吉以數萬騎至自備中。信孝大喜、乃會議于尼崎。諸將爭先不決。乃因信長在時之法、次以城邑前後。高山友祥爲先鋒、中川淸秀次之、池田信輝・丹羽長秀又次之。信孝自將四千人在其後。秀吉爲後拒。討光秀于山崎、大破之。光秀伏誅。明智光春守安土、聞敗燒城走坂下、殺其妻子、自殺。齋藤利三等皆被捕誅。淸秀俗字瀨兵衞、山崎之役戰最力。信孝下馬、握其手曰「吾子力戰。吾不忘德。」秀吉自輿中呼曰「瀨兵勞矣。」淸秀曰「筑前守氣貌已吞天下矣。」

【訓讀】信澄も亦、光秀の壻なり。叛いて、光秀に應じ、其の子城に據る。信孝・長秀、之に迫り、自殺せしめ、遂に光秀を誅せんて欲す。而して兵潰えて收むべからず。會ゝ羽柴秀吉、數萬騎を以て備中より至る。信孝、大に喜び、乃ち尼崎に會議す。諸將、先を爭つて決せず。乃ち信長在時の法に因り、次は城邑の前後を以てす。高山友祥、先鋒と爲り、中川清秀、之に次ぎ、池田信輝・丹波長秀、又之に次ぐ。信孝自ら四千人に將として其の後に在り。秀吉、後拒と爲り、光秀を山崎に討つて、大に之を破る。光秀、誅に伏す。明智光春、安土を守り、敗を聞き城を燒いて、坂本に走り、其の妻子を殺して、自殺す。齋藤利三等、捕誅せらる。清秀、俗字は瀨兵衞、山崎の役に、戰ひ最も力む。信孝、馬より下り、其の手を握つて曰く「吾子、力戰す。吾れ德を忘れず」と。秀吉、輿中より呼んで曰く「瀨兵、勞せり」と。清秀曰く「筑前守、氣貌已に天下を呑めり」と。

【通釋】信澄も亦光秀の婿であつた。叛いて光秀に味方し、大阪城の出丸に立て籠つた。信孝・長秀は之に迫つて自殺せしめ、進んで光秀を誅しようと思つた。所が兵士がばら〳〵になつて收拾することが出來なかつた。丁度其の時、羽柴秀吉は數萬騎を率ゐて備中から歸つて來た。信孝は非常に喜んで、そこで尼崎で會議を催した。諸將は皆先鋒を爭つて中々決まらない。そこで信長在世時代の掟に從つて、其の順序は敵地に近い所に城を持つてゐるものを先きとし、遠いものを後にした。高山友祥が先鋒となり、中川清秀が之に次ぎ池田信輝・丹羽長秀が又之に次いだ。信孝は自ら四千人に大將となつて其の後に控へてゐた。秀吉は後詰となつて光秀を山崎に討つて大に之を破つた。かくて光秀は終に誅に伏した。明智光春は安土を守つてゐたが山崎で敗けたことを聞いて城を燒き、坂下に逃げ、そこにゐた光秀や自分の妻子を殺し、自殺した。齋藤利三等は捕へられて殺された。清秀は俗名を瀨兵衞といひ山崎の戰では一番よく働いた。信孝は馬から下りて其の手を握つて曰ふのに「君は隨分働い

て呉れた。余はこの恩は忘れない」と。秀吉は乘物の中から聲をかけて曰ふのに「瀨兵衞、御苦勞だつた」と。
清秀がいふのに「筑前守はもう悉つかり天下を丸呑みにしたらしい意氣容貌がある」と。

語釋 山崎（山城）

信輝・秀吉等、收信長尸于本能寺、葬之、遂之清洲、謁三法師。柴田勝家・佐佐成政、與長尾景勝、相持越中、拔魚津。聞變、收兵、入討光秀。至柳瀨、得捷聞、直之清洲。瀧川一益在廐橋城。是月七日、得變聞。部下將士說曰「變故之際、人心不測。且秘之、更取諸客將質、然後託事西上。」一益曰「是豈可終秘乎。不若自我發之。」乃急傳令、召諸客將、告變事曰「事已至此。吾在此地與否、在諸君所計。吾且還諸君質。」客將皆相謂曰「管領推誠遇我輩。我輩誓不相負。」乃請重納質。一益謝而遣歸之。明日、變報四至。北條氏直欲乘變擊一益。一益乃率部下八千人、軍于鉋川。諸客將以萬騎來援、擊走敵一將。氏直以全軍繼至。一益使言於客將曰「諸君惠然一戰。可以休矣。一益請代進。」乃進戰、不利。其將篠岡某等二百人止死。一益歸廐橋、盡返質子、徑信濃而西。遣使

告沿道城主眞田昌幸・木曾義昌、皆送質出兵護送、達於尾張。

【訓読】信輝・秀吉等、信長の尸を本能寺に收め、之を葬り、遂に清洲に之きて、三法師に謁す。柴田勝家・佐佐成政、長尾景勝と越中に相持し、魚津を拔く。變を聞き、兵を收め、入つて光秀を討つ。柳瀬に至り、捷聞を得て、直に清洲に之く。瀧川一益、厩橋城に在り。是の月七日、變聞を得。部下の將士說いて曰く「變故の際、人心測れず。且く之を祕し、更に諸客將の質を取り、然る後、事に託して西上せん」と。一益曰く「是れ豈に終に祕すべけんや。我より之を發するに若かず」と。乃ち急に令を傳へ、諸客將を召し、變事を告げて曰く「事已に此に至る。吾れ此の地に在ると否とは、諸君の計る所に在り。吾れ且つ諸君の質を還さん」と。客將、皆相謂つて曰く「管領、誠を推して我が輩を遇す。我が輩誓つて相負かず」と。乃ち重ねて質を納れんと請ふ。一益、謝して之を遣歸す。明日、變報四もより至る。北條氏直、變に乘じ一益を擊たんと欲す。一益乃ち部下八千人を率ゐて、鉋川に軍す。諸客將、萬騎を以て來り援け、擊つて敵の一將を走らす。氏直、全軍を以て繼ぎ至る。一益客將に言はしめて曰く「諸君、惠然一戰す。以て休ふべし。一益、請ふ代り進まん」と。乃ち進み戰うて利あらず。其の將篠岡某等二百人止り死す。一益、厩橋に歸り、盡く質子を返し、信濃を徑りて西す。使を遣はし沿道の城主に告げしむ。眞田昌幸・木曾義昌、皆質を送り、兵を出して護送し、尾張に達せしむ。

【通釋】信輝・秀吉等は信長の死骸を本能寺から收めて之を葬り、遂に清洲に往つて三法師に拜謁した。柴田勝家・佐々成政は長尾景勝と越中で對陣し、魚津を攻めて陷れた。變事を聞いたので、すぐ兵をまとめ、入つて光秀を討つことにした。柳瀬まで來たとき山崎の勝利の知らせを得たので直に清洲に往つた。瀧川一益は厩橋城に居

た。この月七日に變事の知らせを得た。部下の將士が一益を說いて曰ふには「かゝる凶變の際には人心といふものは測られぬものです。暫時之を祕密にして置き、改めて諸々の客將の人質を取り入れ、その後事にかこつけて西に上りませう」と。一益がいふのに「これは、どうして終りまで隱して置くことの出來る譯のものではない。それよりは此方から發表した方が宜い」と。そこで急に命令を傳へて諸々の客將を召し變事を告げていふのに「萬事かういふ風な事になつて終つた。余が此の地に居ると居らぬとは諸君の考へ一つで決まる。余はしばらく諸君の人質をお還し致さう」と。客將共は互に謂つて曰ふには「管領殿は眞心を推して我々をお扱ひになる。我々は決して叛きは致しません」と。そこで重ねて人質を入れたいと申し出た。一益はお禮をいつて之を歸らせた。翌日、變事の報が四方から屆いた。北條氏直はこの變事につけ込んで一益を擊たうと思つた。そこで一益は部下八千人を率ゐて鉋川に陣取つた。諸々の客將が一萬騎を率ゐて援けに來り、擊つて敵の一將を走らせた。氏直は全軍を率ゐて繼ぎ來つた。一益は客將に言はしめて曰ふには「諸君は御親切にも私の爲めに一戰して下さつた。もう御止め下さい。私が自身代つて進みます」と。そこで進み戰つたが敗けた。その將篠岡某等二百人は留まつて討死した。一益は厩橋に歸り、盡く人質を歸し、信濃を橫切つて西に向つた。使者を遣はして道すぢの城主に通過することを告げしめた。眞田昌幸・木曾義昌など皆一益に人質を送り、兵を出して一益を警衞し無事尾張に到着させた。

【語釋】魚津（越中）○柳瀨（近江）○厩橋城・鉋川（上野）

河尻鎭吉在リ甲斐ニ。甲斐亂ル。會徳川氏ノ使者至ル。鎭吉疑ヒテ其ノ有ルヲ異チ、殺ス之ヲ。鎭吉モ亦爲ル國人ノ所ト

殺。森長可在信濃。挾諸質子。馳入信濃。盡斬之。前田利家定能登。丹羽長秀定若狹。皆收兵。與秀吉。會議于清洲。以三法師爲信長嫡長孫。立爲嗣。更名秀信。居安土。奉以近江三十萬石。其餘分領之。以竢秀信長。信雄領尾張。信孝領美濃。勝家領長濱。長秀素有若狹。幷領志賀・高島。信輝幷領兵庫・尼崎。而秀吉領播磨・丹波・但馬・因幡。秀吉與勝家・長秀・信輝。更置吏於京師。已而專決於秀吉。

訓讀 河尻鎭吉、甲斐に在り。甲斐亂る。會〻徳川氏の使者至る。鎭吉、其の異あるを疑ひて、之を殺す。鎭吉も亦、國人の殺す所と爲る。森長可信濃に在り。諸〻の質子を挾み、馳せて信濃に入り、盡く之を斬る。前田利家、能登を定め、丹羽長秀、若狹を定む。皆兵を收めて、秀吉と清洲に會議し、三法師は信長の嫡長孫たるを以て、立てゝ嗣と爲す。名を秀信と更め、安土に居らしめ、奉ずるに近江三十萬石を以てし、其の餘は之を分領し、以て秀信の長ずるを竢つ。信雄は尾張を領し、信孝は美濃を領し、勝家は長濱を領す。長秀、素より若狹を有し、志賀・高島を幷せ領す。信輝は兵庫・尼崎を幷せ領す。而して秀吉は播磨・丹波・但馬・因幡を領す。秀吉、勝家・長秀・信輝と更〻吏を京師に置く。已にして專ら秀吉に決す。

通釋 河尻鎭吉は甲斐に居た。甲斐が亂れた。丁度其處へ徳川氏の使者が來た。鎭吉は何だか怪しいと思つて之を殺した。鎭吉も亦國人の爲めに殺された。森長可は信濃に居つた。多くの人質をつれて馳せて信濃に入り、全

部之を斬り殺した。前田利家は能登を定め、丹羽長秀は若狹を定めて居た。皆兵をまとめて秀吉と清洲に會議し、三法師は信長の嫡長孫であるので立てゝ跡取とした。名を秀信と改め、安土に居らせ、宛てがふに近江の三十萬石を以てし、其の外の殘りはみんなで分けて領有し、秀信の生長するのを待つことにした。信雄は尾張を領し、信孝は美濃を領し、勝家は長濱を領した。長秀は元から若狹を領有してゐたが志賀・高島を併せ領することゝなつた。信輝は兵庫・尼崎を併せ領した。そして秀吉は播磨・丹波・但馬・因幡を領した。秀吉は勝家・長吉・信輝と更代に役人を京都に置くことにした。併しその内に京都の事は專ら秀吉の手で決められることゝなつた。

語釋 嫡長孫（嫡子の血統である總領の孫。）

秀吉國最富、兵最强。矜貴自持。而秀信幼孩、信雄暗弱、皆不能制馭之。信孝有英氣。曰、我家遭遇變故。而我家奴輩舍長立幼、以爭攫遺地。且吾與信雄同年生。特以月日少後、故有兄弟之名耳。吾有復讐之功。秀吉乃攘而沒之。其簒竊之勢已成矣。不速誅之、後不復可制。乃密與勝家・一益謀討秀吉。又使人說長秀。長秀不肯。秀吉聞之、乃結信雄、急發兵攻信孝于岐阜。岐阜兵寡。長秀勸信孝、出其母及乳母爲質、和之。

訓讀 秀吉、國最も富み兵最も强し。矜貴自ら持す。而して秀信は幼孩、信雄は暗弱、皆之を制馭する能はず。

信孝、英氣あり。曰く「我が家、變故に遭遇す。而して我が家の奴輩、長を舍てゝ幼を立て、以て、爭うて遺地を攫る。且つ吾れ信雄と同年に生る。特だ月日少しく後るゝを以て、故に兄弟の名あるのみ。吾れ讐を復するの功あり。秀吉乃ち攘んで之を沒す。其の簒竊の勢、已に成れり。速に之を誅せずんば、後復制す可からず」と。乃ち密に勝家・一益と、秀吉を討つを謀る。丈人をして長秀に説かしむ。長秀肯ぜず。秀吉、之を聞き、乃ち信雄に結び、急に兵を發して、信孝を岐阜に攻む。岐阜の兵寡し。長秀、信孝に勸めて、其の母及び乳母を出だして質と爲し、之に和せしむ。

通釋 秀吉はその國、最も富み且つその兵最も強かつた。だからグッと高く尊大に構へて居た。そして秀信はまだ幼い子供であるし、信雄は愚かで氣が弱いし皆秀吉を追ひ廻すことは出來なかつた。ひとり信孝はすぐれた氣性を持つてゐた。いふのに「我が家は凶變事故に出會つた。そして我が家の下郎等は年長者を棄てゝ幼い者を立て、そして我れ勝ちに亡父の舊地を摑み取つた。それに余は信雄と同じ年に生れたのである。たゞ生れた月日が少し後れてゐるので兄弟といふ名目がついただけである。余は父の仇を復した手柄がある。それを秀吉は其の功を盜み取つて余の功を無き者にして終つた。彼が亡父の天下を奪ひ盜む勢はもう十分に出來上つて居る。早く之を誅しなければ將來手のつけられないやうになる」と。そこでひそかに勝家・一益と共に秀吉を討つことを謀つた。丈人をやつて長秀に説かしめた。長秀は承知しなかつた。秀吉はそのことを聞いて信雄と聯合し、急に兵を出して信孝を岐阜に攻めた。岐阜の兵は僅かであつた。長秀は信孝に勸めて其の母と乳母とを出して人質として和睦させた。

語釋 兄弟之名（信雄は兄、信孝は弟。）

十一年正月、信雄攻信孝黨北畠具親于篠山陷之、遂與秀吉倶攻一益于長島。二月、勝家出軍于柳瀨。秀吉自赴當之。四月、信孝復起兵、應於勝家・一益。秀吉殺信孝母于安土城下。乳母有子幸田某、在岐阜。母遺之書曰「汝致身於君、大義也。親先子死常道也。汝事三七君、行其大義、以常道自釋、勿以我故懷貳心也」。秀吉招幸田不至。乃磔殺乳母。秀吉遂圍岐阜。信孝戰敗、幸田兄弟力戰死之。

訓讀 十一年正月、信雄、信孝の黨北畠具親を篠山に攻めて、之を陷れ、遂に秀吉と倶に一益を長島に攻む。二月、勝家、軍を柳瀨に出だす。秀吉自ら赴いて之に當る。四月、信孝、復兵を起して、勝家・一益に應ず。秀吉、信孝の母を安土の城下に殺す。乳母に子幸田某あり、岐阜に在り。母、之に書を遺つて曰く「汝、身を君に致すは、大義なり。親、子に先だちて死するは、常道なり。汝、三七君に事へ、其の大義を行ひ、常道を以て自ら釋き、我が故を以て貳心を懷く勿れ」と。秀吉、幸田を招く。至らず。乃ち乳母を磔殺す。秀吉遂に岐阜を圍む。信孝、戰敗れ、幸田兄弟、力戰して之に死す。

通釋 十一年正月、信雄は信孝の一味北畠具親を篠山に攻めて之を陷れ、更らに進んで秀吉と一緒に一益を長島に攻めた。二月、勝家は軍勢を柳瀨に出した。秀吉は自ら出かけて之に當つた。四月、信孝はまた兵を起して勝家・一益に味方した。秀吉は信孝の母を安土の城下で殺した。信孝の乳母に幸田某といふ倅があつてそれは岐

阜に居つた。乳母は手紙をその倅にやつていふのに「お前が命を君に捧げ出すのは立派な道に叶つてゐる。親が子に先きだつて死ぬのは當り前のことである。お前は三七君に事へてその家來としての大義を行ひ、親が子に先き立つのは當り前のこと、自分で思ひ諦め決して私の爲めに二心を抱くやうなことがあつてはならぬぞ」と。秀吉はその幸田を招いた。彼は母の言ひつけ通りに來なかつた。故に秀吉はその乳母を磔にして殺した。秀吉は遂に岐阜を取り圍んだ。信孝は戰ひ敗れ、幸田兄弟は力め戰つて討死した。

語釋 篠山・長島（伊勢）○柳瀨（近江）○幸田某（彦右衞門。）○三七君（信孝の幼名は三七郎。）

當是時、長秀以下諸將皆屬秀吉、爲之距勝家。勝家令佐久間盛政襲殺中川清秀、收兵速歸。盛政狃勝不歸。秀吉令堀尾吉晴及降將稻葉通朝・氏家行廣等備信孝、而馳擊盛政、擒之。勝家曰「盛政不用我言、果取此敗。吾自往決戰。」乃檢其兵、兵已逃亡、在者僅三千。諸將皆勸退。勝家曰「吾嘗以少擊衆、獲勝者數。諸君何捉我也。」家臣毛受勝介曰「往時君所將、皆濃尾驍卒。今領北兵、非素拊循。所以逃亡。摧敗之餘、何堪折衝。臣請假君背幟、僞稱君死。君逃入北莊、徐自爲計。」勝家從之。秀吉縱兵追擊、遇其背幟、大驚、急整隊圍之。勝介大呼曰「柴田勝家死于此。」與其兄皆力戰死。

【訓讀】是の時に當り、長秀以下の諸將、皆秀吉に屬し、之が爲めに勝家を距ぐ。勝家、佐久間盛政をして中川清秀を襲殺し、兵を收めて速に歸らしむ。盛政、勝に狃れて歸らず。秀吉、堀尾吉晴、及び降將稻葉通朝・氏家行廣等をして、信孝に備へしめ、而して馳せて盛政を撃ち、之を擒にす。勝家曰く「盛政、我が言を用ひず。果して此の敗を取る。吾れ自ら往いて決戰せん」と。乃ち其の兵を檢すれば、兵已に逃亡して、在る者僅に三千。諸將皆退かんことを勸む。勝家曰く「吾れ嘗て少を以て衆を撃ち、勝を得ること數なり。諸君何ぞ我を扼むるや」と。家臣毛受勝介曰く「往時、君の將ゐる所は、皆濃尾の驍卒なり。今は北兵を領す。素より拊循するに非ず。逃亡する所以なり。摧敗の餘、何ぞ折衝に堪へん。臣請ふ、君の背幟を假り、僞つて君と稱して死せん。君逃れて、北莊に入り、徐に自ら計を爲せ」と。勝家、之に從ふ。秀吉、兵を縱つて追撃し、其の背幟に遇ひ、大に驚き、急に隊を整へて之を圍む。勝介、大に呼んで曰く「柴田勝家、此に死す」と。其の兄と、皆力戰して死す。

【通釋】この當時、長秀以下の諸將は皆秀吉に屬いて秀吉の爲めに勝家を拒いだ。勝家は佐久間盛政をして中川清秀を襲ひ殺させ、兵をまとめて早く歸らせようとした。所が盛政は勝利に慢心して歸らなかつた。そこで秀吉は一面には堀尾吉晴及び降將稻葉通朝・氏家行廣等をして信孝に備へさせ置き、自分は馳せて盛政を撃つて之を擒にした。勝家が曰ふのに「盛政は余の言葉を用ひなかつた。案の定こんな敗け方をした。余が自ら出かけて決戰しよう」と。そこで其の兵を調べて見ると、兵士はもう逃亡して手元に在るものは僅に三千人であつた。諸將は皆退却を勸めた。勝家がいふのに「余は以前小勢で多勢を討つて度々勝つたことがある。諸君は何故余を引き止めるのか」と。家來の毛受勝介がいふのに「昔君が率ゐて居られましたのは皆美濃・尾張の勇敢な士卒でありまし

た。今は北國の兵を引率されて居ります。これ等の兵士は元々から手柔けた者ではありません。彼等がこんなに逃げ出す譯はそこにあります。ばた／＼に敗北してからでは敵の衝いて來る鋒先きをどうにも持ちこたへることは出來ません。私は何卒君の差し物を拜借し、僞つて君と名乘り、討死致しませう。君は逃れて北莊にお入りなされ、しづかに御自分の計をなされませ」と。勝家は之に從つた。やがて秀吉は兵を放つて追擊し、勝家の差し物に出喰はして吃驚し急に軍隊を整頓して之を取り圍んだ。勝介は大に呼ばはつて曰ふのに「柴田勝家はこゝで討死する」と。彼もその兄も二人共力戰して討死した。

語釋　自爲レ計（自殺すること。）

勝家得レ間走、過二府中一、入見二前田利家一曰「子爲レ我出レ力。不レ知レ所レ謝。吾命窮至レ此。復何言也。吾飢矣。請供レ飯焉」利家供レ之。勝家食畢、借二善馬一而出。利家欲レ從レ之。勝家揮レ之曰「子與二秀吉一善。毋二以レ我爲一也」終歸二北莊一、諭二其將領一、與レ敵有二姻者一、皆遣レ之。願レ留者九人。秀吉至、圍レ城數重。勝家夜宴二將士于天主閣一、慷慨曰「吾欲レ報二先君之恩一、終爲二猴面藤吉所一レ困。豈非レ天哉」其妻信長之妹也。勝家使二之逃去一。妻泣曰「妾自二去秋出二岐阜一、業已委二身於良人一矣。今日之事、固期二於心一。何必逃也」於レ是、夫妻訣飲徹レ曉、終伏レ刃駢死。侍臣文荷者縱二火于閣一殉レ之。

【訓読】勝家、間を得て走り、府中を過ぎ、入つて前田利家を見て曰く「子、我が爲めに力を出だす。謝する所を知らず。吾が命窮して此に至る。復何をか言はん。吾れ饑ゑたり。請ふ、飯を供せよ」と。利家、之を供す。勝家食し畢り、善馬を借りて出づ。利家、之に從はんと欲す。勝家、之を揮して曰く「子、秀吉と善し。我を以て爲す毋れ」と。終に北莊に歸り、其の將領の敵と姻ある者を諭し、皆之を遣る。留るを願ふ者九人。秀吉至り、城を圍むこと數重。勝家、夜將士を天主閣に宴し、慷慨して曰く「吾れ先君の恩に報いんと欲し、終に猴面藤吉の困しむる所と爲る。豈に天に非ずや」と。其の妻は、信長の妹なり。勝家、之をして逃れ去らしむ。妻泣いて曰く「妾、去秋、岐阜を出でしより、業已に身を良人に委ぬ。今日の事、固より心に期す。何ぞ必ずしも逃れんや」と。是に於て、夫妻訣飮して曉に徹し、終に刃に伏して斃死す。侍臣文荷なる者、火を閣に縦ちて、之に殉ず。

【通釈】勝家は隙間を得て落ち延び、府中を過ぎて前田利家に會つて曰ふには「貴公は余の爲めに力を出して吳れた。余は何とお禮を言つて宜いか分らない。余の命は窮まつてこんな有樣に立ち至つた。もう此の上何も言ふことはない。余は今腹が減つて困つてゐる。お願ひだから飯を食べさせて貰ひたい」と。利家は膳部を供へた。勝家は食事を濟ませて善い馬を借りて出かけた。利家は之に從はうとした。勝家は手を振つて曰ふのに「貴公は秀吉と仲が善い。余のことはお構ひなされるな」と。終に北莊に歸り、その大將で敵と姻緣のあるものを諭して皆之を歸した。併し留りたいと願つたものが九人あつた。その內に秀吉がやつて來て、城を五重六重と取り圍んだ。勝家は夜、將士を天主閣で饗應し慷慨して曰ふには「余は先殿樣の御恩に報いようと思つてとう／＼猿面冠者の藤吉の爲めに困しめられることゝなつた。これは天命ではあるまいか（天命である）」と。勝家の妻は信長の

妹であつた。勝家は之を逃げ去らせようとした。すると妻は泣いて曰ふのに「妾は去年の秋、岐阜を出た時からもう此の身は良人に委して居ります。今日の事は（死ぬること）もとより心に覺悟を決めて居ります。どうして逃げることをしませうや」と。そこで夫妻は夜どほし訣れの酒宴をして、終に刃に伏して並んで死んだ。侍臣の中村文荷齋なる者が火を天主閣につけて殉死した。

語釋 府中（越前）

當是時、信雄圍岐阜。城兵潰、信孝出奔內海。信雄使人迫之自殺。五月、秀吉斬佐久間盛政・柴田權六于京師。盛政素虓武、每戰用鐵棓、躬自陷陣。人呼曰鬼盛政。臨刑言曰「我悔不聽修理言。苟聽修理言、則使秀吉如我也。」修理勝家也。六月、一益降秀吉。秀吉放之近江、使信雄取其地、以長秀助己、使之取柴田氏地。池田・堀・森氏、皆有分地。

通釋 是の時に當り、信雄、岐阜を圍む。城兵潰え、信孝、內海に出奔す。信雄、人をして之に迫りて自殺せしむ。五月、秀吉、佐久間盛政・柴田權六を京師に斬る。盛政、素より虓武、戰ふ每に鐵棓を用ひ、躬自ら陣を陷る。人呼んで鬼盛政と曰ふ。刑に臨み言つて曰く「我れ修理の言を聽かざるを悔ゆ。苟も修理の言を聞かば、則ち秀吉をして、我が如くならしめん」と。修理とは、勝家なり。六月、一益、秀吉に降る。秀吉、之を近江

に放ち、信雄をして其の地を取らしむ。長秀、己を助くるを以て、之をして柴田氏の地を取らしむ。池田・堀・森氏、皆分地あり。

〔通釋〕この當時、信雄は岐阜を取り圍んだ。城兵は潰え、信孝は內海に出奔した。信雄は人を遣はし、迫つて自殺せしめた。五月、秀吉は佐久間盛政・柴田權六を京都で斬つた。盛政は元々武勇で、戰爭する每に鐵の棒を用ひ、自身敵陣を陷れた强の者である。人は鬼盛政と呼んでゐた。その刑に臨むときに曰ふのに「我は修理の言ひつけを聽かなかつたのを殘念に思ふ。もし修理の言ひつけを守つたら、秀吉をして今の我のやうにならしめたであらう」と。修理とは勝家の事である。六月、一益は秀吉に降つた。秀吉は之を近江に放ち、信雄をして彼の領地を取らしめた。長秀は自分を助けたといふので、柴田氏の領地を取らしめた。池田・堀・森の諸氏皆分配された土地を領有した。

〔語釋〕內海（尾張）〇虓武（目を怒らすを虓といふ。）

既而秀吉欲激信雄除之。設飛語曰「羽柴將不利北畠氏」。十二年正月、諸將賀正於安土。皆過見信雄。獨秀吉至大津、而不入。信雄怒。諸將和解之、盟于三井寺。信雄將岡田重善・津川義冬・淺井多宮・瀧川雄利、皆驍勇。秀吉先盟招四人、誘以厚利。三人聽之。獨雄利佯聽、臨盟告信雄。信雄驚、馳歸長島、遂議討秀吉。三人以爲不可。信雄曰「吾誅猴奴、易易耳。汝輩何得沮我」。三人稱疾不出。

【訓讀】既にして秀吉、信雄を激して之を除かんと欲す。飛語を設けて曰く「羽柴將に北畠氏に不利ならんとす」と。十二年正月、諸將、正を安土に賀す。皆過ぎて信雄を見る。獨り秀吉、大津に至つて入らず。信雄怒る。諸將、之を和解し、三井寺に盟ふ。信雄の將岡田重善・津川義冬・淺井多宮・瀧川雄利、皆驍勇なり。秀吉、盟に先だち、四人を招き、誘ふに厚利を以てす。三人、之を聽く。獨り雄利佯り聽き、盟に臨んで信雄に告ぐ。信雄驚き、馳せて長島に歸り、遂に秀吉を討たんと議す。三人以て不可と爲す。信雄曰く「吾れ猴奴を誅する、易易たるのみ。汝が輩、何ぞ我を沮むを得ん」と。三人、疾と稱して出でず。

【通釋】左樣斯樣する内に秀吉は信雄を怒らせて之を除かうと思つた。根のない言葉を作つて曰ふのに「羽柴は北畠氏には不爲めである」と。十二年正月、諸將は安土に年始の禮に出かけた。皆信雄の處へ寄つて行つた。たゞ秀吉だけは大津まで來ながら、入見しなかつた。信雄は怒つた。諸將は之を仲直ほりさせ、三井寺で盟ふこととなつた。信雄の大將岡田重善・津川義冬・淺井多宮・瀧川雄利等は皆勇氣があつた。秀吉は盟に先きだつて四人を招き、厚い利を以て之を誘惑した。三人は承知した。たゞ雄利だけは佯つて承知し、愈ゝ盟をする間際に之を信雄に告げた。信雄は驚き馳せて長島に歸り遂に秀吉を討つ相談をした。三人の者は不可と言ひ張つた。信雄が曰ふのに「一猿の奴を誅するのは何でもない事である。お前達はどうして余を止めることが出來ようぞ」と。よつて三人は病氣だといひ立てゝ出勤しなかつた。

三月、信雄伏甲、召三人誅之、分攻其邑、拔松島、予之雄利、求援於徳川公。徳川公之來安土也、信長令之遊界府。聞信長遭害、走歸其國。於是、發兵助信雄。信雄又招池

田信輝及其二壻森長可・堀秀政、秀吉亦誘信輝。信輝子輝政質于長島。信雄還之曰「先考待卿最厚。卿必不負我。我持其質、是疑卿也」。信輝既收其質、乃應秀吉、誂瀧川一益、亦應秀吉、聚兵據木造、以復舊封。織田信包・蒲生氏郷・關萬徹、皆應一益、攻嶺城。城將佐久間正勝、與部將山口重政等、固守距之。敵聞援兵至、解圍去。正勝乃還長島、又守蟹江。

訓讀 三月、信雄、甲を伏せ三人を召して之を誅し、分つて其の邑を攻め、松島を拔き、之を雄利に予へ、援を德川公に求む。德川公の安土に來るや、信長、之をして界府に遊ばしむ。信長の害に遭ふを聞き、走つて其の國に歸る。是に於て兵を發し信雄を助く。信雄、又池田信輝、及び其の二壻森長可・堀秀政を招く。秀吉も亦、信輝を誘ふ。信輝の子輝政、長島に質たり。信雄、之を還して曰く「先考卿を待つ最も厚し。卿必ず我に負かじ。我れ其の質を持するは、是れ卿を疑ふなり」と。信輝既に其の質を收め、乃ち秀吉に應じ、瀧川一益を誂し、亦秀吉に應じ、兵を聚めて木造に據り、以て舊封を復せしむ。織田信包・蒲生氏郷・關萬徹、皆一益に應じ、嶺城を攻む。城將佐久間正勝、部將山口重政等と、固守して之を距ぐ。敵、援兵至ると聞き、圍を解いて去る。正勝乃ち長島に還り、又蟹江を守る。

通釋 三月、信雄は兵士を隱して置いて、三人を呼び出して之を誅し、兵を分けて其の領地を攻め松島を陷

れ、之を雄利に與へ、援助を徳川公に求めた。前に徳川家康が安土に來たとき、信長は家康を界府に遊びに行かせた。信長が殺害に遭つたと聞いて、走つて自分の國に歸つた。こゝに於て兵を繰り出して信雄を助けた。信雄は又池田信輝及び其の二人の婿森長可・堀秀政を招いた。秀吉も亦信輝を誘うた。信輝の子の輝政は長島に人質となつて居た。信雄は之を還してやつて曰ふには「亡父は貴公を一番手厚くあしらつた。貴公は屹度余に背くことはしまい。それを余が人質を留め置くことは貴公を疑ふ譯になる。だからお返しする」と。信輝は既に其の人質を取り戻し、そこで秀吉に味方し瀧川一益を勸めて亦秀吉に内應し、兵を聚めて木造に立て籠り、一益自身の舊領を取り戻さしめるやうにした。織田信包・蒲生氏郷・關萬徹など皆一益に味方して嶺城を攻めた。城將佐久間正勝は部將山口重政等と固く守つて之を拒いだ。敵は我が援兵の來たことを聞いて、圍を解いて立ち去つた。そこで正勝は長島に還り、又蟹江を守つた。

語釋　松島・木造・嶺城（伊勢）〇誂（おだて、誘）〇援兵（徳川氏の援兵。）〇蟹江（尾張）

信雄在清洲。與徳川公、合兵二萬、軍于小牧。秀吉以十二萬人軍犬山。四月、秀吉令信輝・長可襲參河。信雄與徳川公邀擊、獲二將。秀吉亦令筒井定次・九鬼嘉隆攻松島。月餘、雄利與徳川氏將服部正成、固守距之。以定次講和致城而卻。秀吉拔嶺・神戸・利井・竹鼻數城、退軍于大垣。

訓讀　信雄、清洲に在り。徳川公と二萬を合せ、小牧に軍す。秀吉、十二萬人を以て犬山に軍す。四月、秀吉、

信輝・長可をして參河を襲はしむ。信雄、德川公と邀へ擊ちて、二將を獲たり。秀吉も亦、筒井定次・九鬼嘉隆をして、松島を攻めしむること月餘、雄利、德川氏の將服部正成と、固守して之を距ぐ。定次の講和するを以て城を致して卻く。秀吉、嶺・神戶・利井・竹鼻の數城を拔き、退いて大垣に軍す。

通釋 信雄は淸洲にゐた。德川公家康と兵二萬を合はせ小牧に陣取つた。秀吉は十二萬人をつれて、犬山に陣取つた。四月、秀吉は信輝・長可をして參河を襲はしめた。信雄は德川公家康と之を迎へ擊つて、二將（信輝・長可）を討ち取つた。秀吉も亦筒井定次・九鬼嘉隆をして、松島を攻めさせること一ケ月餘にも及んだが雄利は德川氏の將服部正成と共に固く守つて之を拒いだ。所が定次が和睦の相談を持ち込んだので城を明け渡して退却した。秀吉は嶺・神戶・利井・竹鼻の數城を陷れ、退いて大垣に陣取つた。

語釋 神戶（伊勢）○利井・竹鼻（美濃）

六月、信雄使正勝城萱生。一益乃誘降蟹江留守前田種利。種利二子、長種・定利、守前田・下市二壘、山口重政守大野壘。二子皆降。遂招重政曰「汝母在蟹江。不聽則殺之」。重政答曰「吾知受命守城。不知其他。豈倣公等人面獸行乎」。一益與嘉隆、迫以兵艦。重政投炬、燒而走之。敵轉赴下市。又擊走之。信雄與德川公來援、拔前田・下市、走長種、斬定利、大賞重政、遂圍蟹江。七月、一益斬種利以降。信雄宥其死、乃走歸木造。

城將富田知信疑而弗納。一益乃走京師。後死於北陸。八月、秀吉又入尾張、令萬徹・氏郷攻伊勢諸城、佐佐成政起兵于外山、以遙應信雄、攻前田利家。不克。

【訓讀】六月、信雄、正勝をして萱生に城かしむ。一益乃ち蟹江の留守前田種利を誘ひ降す。種利の二子長種・定利、前田・下市の二壘を守る。山口重政、大野の壘を守る。二子皆降る。遂に重政を招いて曰く「汝の母は蟹江に在り。聽かずんば則ち之を殺さん」と。重政答へて曰く「吾れ命を受けて城を守るを知る。其の他を知らず。豈に公等の人面獸行に倣はんや」と。一益、嘉隆と、迫るに兵艦を以てす。重政、炬を投じ、燒いて之を走らす。敵、轉じて下市に赴く。又撃つて之を走らす。信雄、德川公と來り援け、前田・下市を拔き、長種を走らせ、定利を斬り、大に重政を賞し、遂に蟹江を圍む。七月、一益、種利を斬り以て降る。信雄、其の死を宥す。乃ち走つて木造に歸る。城將富田知信、疑ひて納れず。一益乃ち京師に走る。後、北陸に死す。八月、秀吉、又尾張に入り、萬徹・氏郷をして、伊勢の諸城を攻めしむ。佐佐成政、兵を外山に起し、以て遙に信雄に應じ、前田利家を攻む。克たず。

【通釋】六月、信雄は正勝をして、萱生に城を築かしめた。そこで一益は蟹江の留守前田種利を誘つて降參させた。種利の二子長種・定利は前田・下市の二壘を守つてゐた。山口重政は大野の壘を守つて居た。その二子は皆降參した。一益は遂に重政を招いて曰ふのに「お前の母は蟹江にゐる。言ふことを聽かなければ母親を殺すぞ」と。重政が答へて曰ふには「俺は命令を受けて城を守ることだけ知つてゐるのだ。その他の事は知らない。どうして貴公のやうな人間の顏をして獸のやうな行をする者の眞似が出來るか」と。一益は嘉隆と兵艦を以て攻め詰め

た。重政は松明を投げ込んで艦を燒いて之を走らせた。敵は方向を轉じて下市に赴いた。又擊つて之を走らせた。信雄は德川家康と共に援けに來て、前田・下市を陷れ、長種を走らせ、定利を斬り、大に重政を賞し、更に進んで蟹江を取り圍んだ。七月一益は種利を斬り、其の首を持つて降參した。信雄は其の死を宥してやつた。そこで走つて木造に歸つた。城將富田知信は疑つて受け納れなかつた。故に一益は京都に奔つた。後に北陸道で死んだ。八月、秀吉は又尾張に入り、萬徹・氏鄕をして伊勢の諸城を攻めしめた。佐佐成政は兵を外山に起して、はるかに信雄に應援し、前田利家を攻めた。併し克てなかつた。

語釋 ○賞生。前田・下市・大野(尾張) ○外山(越中)

十一月、秀吉以八萬人入伊勢。信雄出而對陣。秀吉使人請和。信雄許之、盟于桑名城下。秀吉陽尊信雄、執臣禮如故。信雄大喜。成政未之知也。欲就德川公協謀以圖秀吉。乃稱疾屛居、潛與壯士百餘人、冒雪入信濃、留侍臣於外山、饋食稟啓如常、誡之曰「度我往還、不過二十日。利家必不能覺。即覺治兵、則我已歸至矣」。於是乘橇兼行。所經皆山谷、絕無人烟。得一樵家入之。樵夫大愕、以爲鬼物。從者曰「吾輩自越中赴深志者、汝爲鄕導、吾重賞汝」。樵夫乃焦柴燎之、導至下諏訪、使健步告德川氏。德川氏乃遣人馬迎之。十二月、至遠江、說曰「願公擧五國兵、吾亦擧越中。兩雄戮力、

鼓行而西、必禽秀吉。徳川氏以其言爲倨、且知北地不便出援、乃辭之。成政遂適尾張、勸信雄再擧兵。信雄不肯。成政失意而歸。

訓讀 十一月、秀吉、八萬人を以て伊勢に入る。信雄出で、對陣す。秀吉、人をして和を請はしむ。信雄、之を許し、桑名城下に誓ふ。秀吉、陽に信雄を尊びて、臣禮を執ること故の如し。信雄、大に喜ぶ。成政未だ之を知らず。徳川公に就き、謀を協せ、以て秀吉を圖らんと欲す。乃ち疾と稱して屛居し、潜に壯士百餘人と雪を冒して信濃に入り、侍臣を外山に留め、餽食稟啓、常の如くせしめ、之を誡めて曰く「我が往還を度るに、二十日に過ぎず。利家必ず覺る能はじ。卽し覺つて兵を治めば、則ち我れ已に歸り至らん」と。是に於て、橇に乘りて兼行す。經る所皆山谷、絕えて人烟なし。一の樵家を得て、之に入る。樵夫、大に愕き、以て鬼物と爲す。從者曰く「吾が輩、越中より深志に赴く者、汝、鄕導を爲せ。吾れ重く汝を賞せん」と。樵夫乃ち柴を焚き之を燎り、導いて下諏訪に至り、健步をして徳川氏に告げしむ。徳川氏乃ち人馬を遣はして之を迎ふ。十二月、遠江に至り、說いて曰く「願はくは公、五國の兵を擧げよ。吾も亦越中を擧げん。兩雄、力を戮せ、鼓行して西せば、必ず秀吉を禽にせん」と。徳川氏、其の言を以て倨と爲し、且つ北地は出援に便ならざるを知り、乃ち之を辭す。成政遂に尾張に適き、信雄に再び兵を擧げんことを勸む。信雄肯んぜず。成政、意を失うて歸る。

通釋 十一月、秀吉は八萬人を率ゐて伊勢に攻め込んだ。信雄は出で、對陣した。秀吉は人をやつて和を請はしめた。信雄は之を許して、桑名の城下で盟をなした。秀吉は表面は信雄を尊び從前の通りに家來の禮を執つてゐた。信雄はそれを非常に喜んだ。成政はまだ和睦のことを知らなかつた。故に徳川公家康の處へ行つて相談を

なし、示し合はせて秀吉を討たうと思つた。そこで病氣だといつて引き籠り、こつそり壯士百餘人と雪を冒して信濃に入り込み侍臣を外山に留め置いて、膳部を運んだり其の他諸事の申し上げることは平常のやうにさせ、之を戒めていふには「余が往つて還るには二十日を出ない。だから利家は屹度覺ることは出來まい。もし覺つて兵を治め、攻め寄せるとしても、もうその時には余は歸つて來てゐるのだ」と。そこで橇に乘つて二日路を一日で馳せた。その通つたところは皆山や谷で絶えて人家などはない。一軒の木こりの家を見つけて、それに入つた。木こりは非常に驚いて化物が來たと思つた。從者が曰ふのに「吾々は越中から深志(松本)に行くものであるが、お前は案内して呉れ。大層褒美を取らせるぞ」と。そこで木こりは粗朶を燒いて一行の者を煖め、案内して下諏訪まで行き、足の達者な飛脚をやつて徳川氏に告げしめた。そこで徳川氏は人馬を遣はして之を迎へた。十二月、成政は遠江に來て、家康に說いて曰ふのに「何卒貴公は領内五國の兵をお擧げなさい。私も亦越中の兵を擧げませう。二人の英雄が力を合せ、攻め太鼓を鳴らして西に出れば屹度秀吉を擒にすることが出來ます」と。徳川氏はその言葉が横柄だとなし、それに成政は北國で援兵を出すには都合が悪いといふことを知つたので體裁よく斷つて終つた。成政は遂に尾張に往き信雄に再擧を勸めた。併し信雄は聞き入れなかつた。成政は失望して歸つて行つた。

語釋　深志(信濃)　○五國(參河・遠江・駿河・甲斐・信濃)　○倨(徳川と比べて兩雄など、言つたから倨といふ。)

信雄叙從三位、任參議。十三年、進正三位、遷大納言。初丹羽長秀以秀吉爲有忠功也、枉意助之。於是、視其勢出織田氏上、則大悔恨、託疾自殺。其子長重猶弱。舊臣相

與謀、欲擧兵繼長秀志。謀頗漏。八月、秀吉北攻成政。成政逆戰、不克降。秀吉乃予越中于前田利家、予越前于堀秀政、返長重、以若狹。十五年、秀吉以長重犯軍法、奪若狹、擯爲松任城主、給五萬石。家臣成田某憤懣、謂其同僚曰「吾欲擧事。誰與我者」。衆莫敢答。成田罵曰「皆非人也」。秀吉聞之、使人殺成田。是歲、秀吉予成政以肥後。肥後盜起。秀吉怒。明年閏五月、成政自赴大坂謝之。秀吉使人迎之尼崎、賜死。

訓讀 信雄、從三位に敍せられ、參議に任ぜらる。十三年、正三位に進み、大納言に遷さる。初め丹波長秀、秀吉を以て忠功ありと爲し、意を枉げて之を助く。是に於て、其の勢、織田氏の上に出づるを視、則ち大に悔恨し、疾に託して自殺す。其の子長重猶ほ弱なり。舊臣相與に謀り、兵を擧げて長秀の志を繼がんと欲す。謀頗る漏る。八月、秀吉、北、成政を攻む。成政逆へ戰ひ、克たずして降る。秀吉、乃ち越中を前田利家に予へ、越前を堀秀政に予へ、長重に返すに若狹を以てす。十五年、秀吉、長重、軍法を犯すを以て、若狹を奪ひ、擯けて松任の城主と爲し、五萬石を給す。家臣成田某、憤懣し、其の同僚に謂つて曰く「吾れ事を擧げんと欲す。誰か我に與する者ぞ」と。衆敢て答ふるなし。成田罵つて曰く「皆人に非ざるなり」と。秀吉、之を聞き、人をして成田を殺さしむ。是の歲、秀吉、成政に予ふるに肥後を以てす。肥後の盜起り、秀吉怒る。明年閏五月、成政自ら大坂に赴き、之を謝す。秀吉、人をして之を尼崎に迎へしめ、死を賜ふ。

通釋 信雄は從三位に敍せられ、參議に任ぜられた。十三年には正三位に進み、大納言に遷された。はじめ丹

羽長秀は秀吉が明智を征伐して忠功のある者と思ひ、不本意作ら之を助けてゐた。こゝに至つて秀吉の勢が織田氏の上に出てゐるのを見て非常に後悔し、殘念に思ひ病氣だと言ひ立てゝ自殺をした。その子の長重はまだ幼かつた。舊臣は相與に謀つて兵を擧げて長秀の志を繼がうと思つた。(秀吉を討つこと)所がその謀が大分漏れた。八月、秀吉は北、成政を攻めた。成政は迎へ戰ひ、敗けて降參した。そこで秀吉は越中を前田利家に與へ、越前を堀秀政に與へ、長重に若狹を返してやつた。十五年、秀吉は長重が軍法を犯したといふので若狹を沒收し斥けて松任の城主となし、五萬石を支給した。長重の家來成田某は憤り悶え、その同役に向つて曰ふには「俺は大事を擧げようと思つてゐる。誰か俺と一緒にやる者はないか」と。誰も答へるものはゐなかつた。成田は罵つて曰ふのに「どいつもこいつも人間ではない」と。秀吉は之をきいて人をして成田を殺さしめた。この年、秀吉は成政に肥後を與へた。所が肥後の賊が秀吉に反抗して起つたので秀吉は怒つた。明年閏五月成政は自ら大坂に行つて之を謝まらうと思つた。秀吉は人をやつて尼崎に迎へさせ死を賜はつた。

語釋　犯軍法(秀吉征西の時、長重、日向に行く。長重の部下に軍法を犯した者があつた。)○松任(加賀)

信雄陞從二位内大臣。秀吉以其據咽喉之地、欲徙之。未果。十八年、秀吉伐北條氏。信雄以兵一萬五千助之、攻韮山。及事平、秀吉封德川氏于關東八州、欲以其舊國五州致於信雄。信雄辭曰「尾張・伊勢吾故地也。得仍居焉足矣。敢膺大封。」秀吉怒其不屑受己封也。乃奪二州、予之己甥秀次、遂信雄于出羽秋田。明年、徙之伊豫。山口

重政等、皆事徳川氏。文祿元年、秀吉召信雄至大坂、予其子秀雄以大野五萬石。信雄退居伏見、削髮稱常眞。常眞之弟次丸、自信長在時、爲秀吉所養。更名秀勝、封之丹波、爲左近衞少將。四年、秀勝卒。無嗣、國除。

訓讀 信雄、從二位、內大臣に陞る。秀吉、其の咽喉の地に據るを以て、之を徙さんと欲す。未だ果さず。十八年、秀吉、北條氏を伐つ。信雄、一萬五千を以て之を助け、韮山を攻む。事平ぐに及び、秀吉、徳川氏を關東八州に封じ、其の舊國五州を以て信雄に致さんと欲す。信雄、辭して曰く「尾張、伊勢は、吾が故地なり。仍ほ居るを得ば、足る。敢て大封に膺らんや」と。秀吉、其の己の封を受くるを屑しとせざるを怒る。乃ち二州を奪ひ、之を己が甥秀次に予へ、信雄を出羽の秋田に逐ふ。明年、之を伊豫に徙す。山口重政等、皆徳川氏に事ふ。文祿元年、秀吉、信雄を召し、大坂に至らしめ、其の子秀雄に予ふるに、大野の五萬石を以てす。信雄退いて伏見に居り、髮を削りて常眞と稱す。常眞の弟次丸は、信長の在時より、秀吉の養ふ所と爲る。名を秀勝と更め、之を丹波に封ず。左近衞少將と爲る。四年、秀勝、卒す。嗣なく、國除かる。

通釋 信雄は從二位內大臣に昇つた。秀吉は信雄が天下の咽首に當る重要の土地（尾張・伊勢）に立て籠つてゐるので、之を他へ移さうと思つた。併しまだそれを果さなかつた。十八年、秀吉が北條氏を伐つた。信雄は兵一萬五千を率ゐて之を助け、韮山を攻めた。事件が平定してから、秀吉は徳川氏を關東八州に封じ、その舊國五國を信雄にやらうと思つた。信雄は辭退して曰ふのに「尾張・伊勢は私の昔からの領地である。從來のまゝ居るこ

とが出來れば十分である。決して廣大な領地を貰はなくとも善い」と。秀吉は信雄が自分の封ずる領地を受けるのを心地よく思はないことを怒つて、そこで二國を奪つて之を自分の甥の秀次に與へ、信雄を出羽に逐つ拂つた。翌年之を伊豫に移した。その家來の山口重政等は皆德川氏に事へた。文祿元年、秀吉は信雄を大坂に呼び寄せ、其の子秀雄に大野の五萬石を與へた。信雄は隱居して伏見に居り、髮を剃つて常眞と稱した。常眞の弟の次丸は信長在世の頃から秀吉の養子となつてゐる。名を秀勝と改め、之を丹波に封じ、左近衞少將となつた。四年、秀勝が死んだ。繼嗣がなくてその國は取り上げられた。

語釋　五洲（參・遠・駿・甲・信。）〇文祿（後陽成天皇の年號。）〇大野（越前）

是歲、蒲生氏鄕卒。氏鄕幼英敏、信長識拔之、予十餘萬石、以女妻之。秀吉又任以方面、累加封、至百萬石、鎭會津。已而悔之。石田三成因譖其有異心、毒之。疾作、不起。孤子秀行嗣。秀吉聞其寡婦織田氏美、欲取之。織田氏不肯。秀吉脅之。家臣交勸其往。織田氏削髮、以死自矢。秀吉怒、慶長三年、託事削其八十二萬石、徙之宇都宮。

通釋　是の歲、蒲生氏鄕、卒す。氏鄕、幼より英敏、信長、之を識拔し、十餘萬石を予へ、女を以て之に妻はす。秀吉、又任ずるに方面を以てす。累に封を加へ、百萬石に至り、會津に鎭せしむ。已にして之を悔ゆ。石田三成因つて其の異心あるを譖し、之を毒す。疾作り、起たず。孤子秀行嗣ぐ。秀吉其の寡婦織田氏の美を聞き、之を取らんと欲す。織田氏肯んぜず。秀吉、之を脅す。家臣交其の往くを勸む。織田氏、髮を削り、死を以

て自ら矢ふ。秀吉怒り、慶長三年、事に託して其の八十二萬石を削り、之を宇都宮に徙す。

通釋 この年蒲生氏郷が歿した。氏郷は幼い時から才能秀でゝ敏く、信長はその人物を知つて拔擢し、十餘萬石を與へ、娘を妻はせた。秀吉は又彼を一方の大將に任じた。だん／＼封を增加して百萬石となり、會津に取り鎭めてゐた。その內に秀吉は之を後悔した。石田三成はそれを利用して、氏郷は謀叛心を持つてゐると、誠しやかに讒言して之に毒を呑ませた。遂に病氣が起つて死んで終つた。孤子の秀行が相續した。秀吉は氏郷の後家の織田氏が美人であると聞いて之を取らうと思つた。所が織田氏が承知しなかつた。秀吉は之を脅した。家來もかはる／＼往くことを勸めた。織田氏は髪を剃つて、死んでも行かぬと誓つた。故に秀吉は怒つて、慶長三年、ある事件にかこつけてその八十二萬石を削り十八萬石となし、之を宇都宮に移した。

語釋 會津（岩代今の若松。）○慶長（後陽成天皇の年號。）○宇都宮（下野）

當是時、秀信年已長、爲中納言。秀吉徙之岐阜、食邑如故。秀吉薨、子秀頼嗣。德川公攝天下政。上杉景勝與石田三成謀除公。五年六月、德川公率諸將攻上杉氏。秀信佚遊奢侈、國用窮竭。以故不能從軍。七月、石田三成擧兵關西、追躡德川公、使人脅秀信曰「岐阜當東下之衝。不從則虀粉矣」。秀信疑懼、欲附三成。老臣木造具康諫曰「公以右府嫡孫、顧役於豐臣氏家奴乎」。秀信猶豫不決。具康等請謀之於前田玄以。

玄以是時爲二京師所司代一。秀信乃遣レ之。玄以曰「速東嚮。」具康馳還、未レ至。近習爭勸二其應一レ西軍。三成又遣二黃金百枚一、啗以二大封一。秀信終與二三成一盟二于澤山一。具康至、嘆恨、因又請レ誘二殺三成一。弗レ聽。終爲二西軍一守二岐阜一。尾張・美濃諸城、因レ是多屬二西軍一。

【訓讀】是の時に當り、秀信、年已に長じ、中納言と爲る。秀吉、之を岐阜に徙す。食邑、故の如し。秀吉、薨じ、子秀頼嗣ぐ。德川公、天下の政を攝す。上杉景勝、石田三成と、公を除かんと謀る。五年六月、德川公、諸將を率ゐて上杉氏を攻む。秀信、佚遊奢侈、國用窮竭す。故を以て軍に從ふ能はず。七月、石田三成、兵を關西に擧げ、德川公を追躡し、人をして秀信を脅さしめて曰く「岐阜は東下の衝に當る。從はざれば則ち虀粉せん」と。秀信、疑懼し、三成に附かんと欲す。老臣木造具康諫めて曰く「公、右府の嫡孫を以て、顧つて豐臣氏の家奴に役せらるゝか」と。秀信、猶豫して決せず。具康等、之を前田玄以に謀らんと請ふ。玄以、是の時、京師の所司代たり。秀信乃ち之を遣はす。玄以曰く「速に東嚮せよ」と。具康馳せ還り、未だ至らず。近習爭つて其の西軍に應ずるを勸む。三成、又黃金百枚を遺り、啗はすに大封を以てす。秀信、終に三成と澤山に盟ふ。具康至りて嘆恨し、因つて又三成を誘殺せんと請ふ。聽かず。終に西軍の爲めに岐阜を守る。尾張・美濃の諸城、是に因つて多く西軍に屬す。

【通釋】この當時秀信は年既に長じて中納言となつてゐた。秀吉は之を岐阜に移した。その食邑は元のやうであつた。（三十萬石）秀吉が薨じ、子の秀頼が跡を嗣いだ。德川公家康が天下の政治を代理してやつてゐた。上杉景

勝は石田三成と家康を除かうと圖つた。そこで五年六月、德川公は諸將を率ゐて上杉氏を攻めた。秀信は遊樂に耽り贅澤で、國の費用が行き詰り缺乏した。これが爲めに軍に從ふことが出來なかつた。七月、石田三成が兵を關西に擧げて德川公の跡をつけ人をして秀信を脅かさせていふには「岐阜は東に下る正面に當つて居る。もし降參しなければ粉微塵にして終ふ」と。秀信は疑ひ恐れて三成に附かうと思つた。家老の木造具康が之を諫めて曰ふのに「君は右大臣殿の嫡孫であり乍ら豐臣氏の家來に使役なされまするか」と。秀信は愚圖々々して決まらなかつた。具康等は之を前田玄以に相談するやうに請うた。玄以は當時京都の町奉行をしてゐた。そこで秀信は具康を玄以のところへ派遣した。玄以がいふのに「早く東に向つて家康に從ひなさい」と。具康は馳せ歸り、まだ岐阜に歸着しなかつた。そのとき近習どもは躍起になつて西軍（三成）に味方するやうに勸めた。三成又黃金百枚を賄賂に贈り、その上に大きな領地を與へ啗はせることにして味方に引き込まうとした。秀信は終に三成と澤山で誓つた。具康がやつて來て、嘆き恨んだが、後の祭、そこで又三成を誘ひ出して だまし討にしようと請うた。併し聞き入れなかつた。終に西軍の爲めに岐阜を守つた。尾張・美濃の諸城はその爲めに多く西軍に屬した。

語釋　澤山（近江、三成の居城。）

既而東軍還至清洲。秀信出兵、距木曾川。具康曰「我兵寡。請堅壁待後援。」弗聽。東軍濟川來戰、追北傅城。秀信分兵守外城。具康曰「寡兵不可分。請專守內城。」又弗聽。城遂陷。具康力戰被創。秀信降、逃于高野。數歲卒。東將福島正則、使人勞問具康。既而

前田氏欲聘之。延以厚祿。辭曰「福島公已知臣矣」。遂就正則、爲其國老。

訓讀 既にして東軍還つて清洲に至る。秀信、兵を出だして木曾川に距ぐ。具康曰く「我が兵寡し。請ふ、壁を堅くして後援を待たん」と。聽かず。東軍、川を濟つて來り戰ひ、北ぐるを追ひて城に傅く。秀信、兵を分ちて外城を守る。具康曰く「寡兵分つべからず、請ふ、專ら內城を守らん」と。又聽かず。城遂に陷る。具康、力戰して創を被る。秀信降り、高野に逃る。數歲にして卒す。東將福島正則、人をして具康を勞問せしむ。既にして前田氏、之を聘せんと欲す。延くに厚祿を以てす。辭して曰く「福島公已に臣を知れり」と。遂に正則に就き、其の國老と爲る。

通釋 その內に東軍は還つて清洲に着いた。秀信は兵を繰り出して木曾川に拒いだ。具康がいふのに「我が兵は小勢である。城壁を堅固にして後援を待つやうに致しませう」と。併し聞き入れなかつた。この時東軍は川を渡つて來り戰ひ、逃げるのを追つかけて城に攻め詰めた。秀信は兵を分けて外側の城を守つた。具康がいふのに「小勢の兵は分けてはなりませぬ。どうぞ一圖に本丸を守りませう」と。又聞き入れなかつた。遂に城は陷つた。具康は力戰して負傷をした。秀信は降參して高野に逃げ込んだ。それから數年後に歿した。東將福島正則は人をして具康を勞ひ問はせた。その內に前田氏が之を招いて用ひようとした。隨分立派な俸祿で之を招いた。具康は辭退して曰ふのに「福島公が既に私を見出されました」と。遂に正則の處へ往つてその家老になつた。

信雄在伏見。德川公之東征、秀雄以疾不從。三成誂信雄。信雄辭以無兵。乃約給金

千枚以募兵。曰「事成復封尾張」。信雄乃應之、請金。乃予銀千枚。信雄曰「尾張可知矣」。召秀雄謀之。秀雄力諫而止。秀雄卒、無嗣。徳川氏收其封、而不問信雄。信雄徙居京師、遂徙大坂。以與秀頼母有中表之親也。初信長妹適淺井長政、生三女。再適柴田勝家。勝家臨死、使人匿三女于一乘谷。秀吉收而育之。皆有容色。秀吉自取其長女。次女嫁京極高次、三女嫁少將秀勝。秀勝卒。更爲徳川氏婦。長女專秀吉寵、生秀頼。母子共居大坂。乃迎信雄、居天滿第。

訓讀 信雄、伏見に在り。徳川公の東征するや、秀雄、疾を以て從はず。三成、信雄に誂す。信雄、辭するに兵無きを以てす。乃ち約して金千枚を給し、以て兵を募らしむ。曰く「事ならば復尾張に封ぜん」と。信雄乃ち之に應じ、金を請ふ、乃ち銀千枚を予ふ。信雄曰く「尾張知るべし」と。秀雄を召して之を謀る。秀雄、力諫して止む。秀雄、卒して嗣なし。徳川氏、其の封を收めて、信雄を問はず。信雄、徙つて京師に居り、遂に大坂に徙る。秀頼の母と中表の親あるを以てなり。初め信長の妹、淺井長政に適き、三女を生む。再び柴田勝家に適く。勝家、死に臨み、人をして三女を一乘谷に匿さしむ。秀吉收めて之を育す。皆容色あり。秀吉自ら其の長女を取る。次女は京極高次に嫁ぎ、三女は少將秀勝に嫁ぐ。秀勝、卒す。更に徳川氏の婦と爲る。長女、秀吉の寵を專にし、秀頼を生む。母子共に大坂に居る。乃ち信雄を迎へて、天滿の第に居らしむ。

〔通釋〕信雄は伏見に居た徳川公が東征する時、秀雄は病氣のために從はなかつた。三成は信雄をおだてゝ味方にしようとした。信雄は手兵がないといつて斷つた。そこで約束して黄金千枚を支給して兵を募らしめることゝなつた。三成が曰ふのに「このことが成功すればまた尾張の大名にする」と。そこで信雄は之に味方して黄金千枚を請うた。よつて三成は銀千枚を與へた。信雄が曰ふのに「金千枚の約束が銀千枚に早替りした所を見ると、尾張をやるといつた約束も知れたもんだ」と。秀雄を呼んで相談した。秀雄は懸命に意見して止めさした。秀雄が死んでから繼嗣がなかつた。徳川氏はその領地を沒收して信雄の事は問題にしなかつた。信雄は京都に移り遂に大阪に移つた。それは秀頼の母の從兄弟關係であつたからである。はじめ信長の妹が淺井長政に嫁入り、三女を生んだ。二度目に柴田勝家の所へ嫁入つた。勝家が死ぬる時、人をしてその三女を一乘谷に匿させた。秀吉は收めて之を養育した。皆別嬪であつた。秀吉は自ら其の長女を娶り、次女は京極高次に嫁入り三女は少將秀勝に嫁入つた。秀勝が死んだ。更に徳川家の嫁となつた。長女は秀吉の寵愛を專にし、秀頼を生んだ。母子ともに大阪に居た。そこで信雄を迎へて天滿の邸に居らせた。

〔語釋〕秀雄卒（年二十八）（嗣なし。）○中表之親（中表は内外の意。父の姉妹の子は外兄弟、母の兄弟の子は内兄弟。秀頼の母淀君は信長の妹が生んだのであるから、信長の子の信雄からすると外親、淀君からすれば内親である。）○三女（柴田の處へ嫁する時につれて行つたつれ子。）○秀勝（秀吉の養子。）○徳川氏之婦（二代將軍秀忠の妻。）

十九年、秀頼傅片桐且元使關東而歸。或譖之於淺井氏。淺井氏乃延信雄、使人說之曰、「且元與關東通謀、圖我母子。吾將待其歸伏甲誅之、遂擧兵也。內兄爲我將。」信

雄驚曰「是大事也。且彼叛狀未見。請熟思之。」淺井氏聞之、弗懌、曰「再請不從、當先除此翁、以防漏泄。」一侍女與信雄有故。捧茗而出、附其耳告之。淺井氏使再請信雄。佯諾曰「事已至此。吾豈固辭。吾之少也、亦將一萬。指揮之方、固所慣熟。今雖老矣、猶能得當方面。」淺井氏大喜、使歸竢報。信雄歸第、謂其下曰「吾豈可再背德川之德哉。」乃走京師、使人馳要且元、警之。且元以故得免。

訓讀 十九年、秀賴の傅片桐且元、關東に使して歸る。或は、之を淺井氏に譖す。淺井氏乃ち信雄を延き、人をして之に說かしめて曰く「且元、關東と謀を通じ、我が母子を圖る。吾れ將に其の歸るを待ち、甲を伏せて之を誅し、遂に兵を擧げんとす。內兄、我が爲めに將たれ」と。信雄驚いて曰く「是れ大事なり。且つ彼れの叛狀、未だ見れず。請ふ、之を熟思せよ」と。淺井氏、之を聞き、懌ばずして、曰く「再び請ひて從はざれば、當に先づ此の翁を除き以て漏泄を防ぐべし」と。一侍女、信雄と故あり。茗を捧げて出で、其の耳に附きて之を告ぐ。淺井氏、再び請はしむ。信雄佯り諾して曰く「事已に此に至る。吾れ豈に固辭せんや。吾の少きとき、亦一萬に將たり。指揮の方は、固より慣熟する所。今老いたりと雖も、猶ほ能く方面に當るを得ん」と。淺井氏、大に喜び、歸つて報を竢たしむ。信雄、第に歸り、其の下に謂つて曰く「吾れ豈に再び德川の德に背くべけんや」と。乃ち京師に走り、人をして馳せて且元を要し之を警めじむ。且元、故を以て免るゝを得たり。

通釋 十九年、秀賴のお守役の片桐且元は關東に使に行つて歸つて來た。或る人が之を淺井氏に讒言した。そ

こで淺井氏は信雄を呼んで人をして之に說かしめて曰ふのに「且元は關東とぐるになつて妾たち親子を亡さうとしてゐます。だから妾はその歸るのを待ち、兵を隱し置いて之を殺し、それから兵を擧げようと思つてゐます。內兒には何卒妾の爲めに大將となつて下されよ」と。信雄は驚いて曰ふのに「これは大事件であります。それに且元の謀叛の樣子がまだ現れて居りません。何卒よくお考へ下さい」と。淺井氏は之を聞いて不機嫌で曰ふには「もう一度賴んで見て承知しなければ先づ第一に此のおやぢを殺して、陰謀の漏れるのを防ぐまでゝある」と。ある腰元が信雄と關係してゐた。茶を捧げてそこを出て信雄の耳に口をあてゝ密告した。やがて淺井氏は又請はしめた。信雄は佯つて承諾して曰ふのに「萬事斯くなつた上はどうして固辭しませうや。私だつて若い時にはこれでも一萬人の大將となつたこともあります。指揮の方法などは勿論熟練して居ります。今は年こそ取つて居りますが、まだ一方面を引き受けて、それに當ること位は出來ます」と。淺井氏は非常に喜び屋敷に歸つて知らせを待たせた。信雄は屋敷に歸つてその下の者に向つて曰ふには「余はどうして二度も德川家の恩顧に背くことが出來ようぞ」と。そこで京都に逃げ、人をして馳せて且元を待ち受けさせ、このことを警戒させた。且元はそんな譯で危く難を免れることが出來た。

語釋　再背（關原の役で一度德川に背いたから再といふ。）

信長ノ弟長益屬シ秀吉ニ、食ム大和二萬石ヲ。爲リ從四位下侍從ト、削テ髮ヲ稱ス有樂ト。以テ淺井氏ノ外叔タルヲ、在リ大坂ニ、與ニ大野治長等、竝ニ輔ケ秀頼ヲ、以テ拒グ東軍ヲ。城中倚賴ス焉。及ンデ和議起ルニ、先ヅ納レテ質ヲ於東ニ、勸メ

淺井氏成和。和成。長益乃赴駿府、請曰「僕在圍中、欲拔歸東軍。而和適成、以得有今日。僕無復所願。獨願於京師・界府之間、得一隙地、以爲終老之計。」德川公優旨慰藉。

訓讀 信長の弟長益、秀吉に屬し、大和二萬石を食む。從四位下、侍從と爲り、髮を削つて有樂と稱す。淺井氏の外叔なるを以て大坂に在り。大野治長等と、並に秀頼を輔け、以て東軍を拒ぐ。城中、倚頼す。和議起るに及んで、先づ質を東に納れ、淺井氏に勸めて和を成さしむ。和成る。長益乃ち駿府に赴き、請うて曰く「僕、圍中に在り、拔いて東軍に歸せんと欲す。和適成り、以て今日あるを得たり。僕復願ふ所なし。獨だ京師・界府の間に於て、一隙地を得、以て終老の計を爲さん」と。德川公、優旨慰藉す。

通釋 信長の弟の長益は秀吉に屬いて大和の二萬石を食んでゐた。從四位下侍從となり、髮を剃つて有樂と稱してゐた。淺井氏の母方の叔父に當るので大阪にゐた。大野治長等と共に秀頼を輔け、東軍を拒いだ。城中の者も依頼して居た。和睦の議が起つてから第一に人質を關東に納れ、淺井氏に勸めて、和睦を成就させた。かくて和睦が成立した。すると長益は駿府に出かけ請うて曰ふには「私は包圍された大阪城に居りましたとき拔け出して東軍に歸順しようと思つてゐました。丁度其の時和睦が成立しまして今日あるを得ました。私は外に願ふところは有りません。たゞ京都と界の間で宜いですから一寸した空地を頂戴し、一生を終る計畫をしたいと思ひます」と。德川公はやさしい言葉で之を慰めた。

語釋 駿府（家康の居城、今の靜岡。）

元和元年、兵再起。長益與少子尙長出奔京師、遂赴關東、遇德川公于尾張、悉告城中虛實。其長子長正稱雲生寺、猶在大坂。請爲元帥。衆不許之。長正曰、吾信長從子、而秀頼從父也。乃爲元帥、何爲不可。今如此。復何望哉。亦出奔京師。及事平、德川氏分長益地、賜芝村于長正、柳本于尙長。無幾何、長益卒。賜信雄以大和宇多郡五萬石。卒于寬永七年。第五子信友嗣。第四子信良、及兄秀雄國除、召至關東、賜上野小幡、食二萬石。信友之後有故削二萬石、徙于丹波柏原。信良之後有故削一萬石、徙于出羽高畠。此四家竝立以至於今、位不過從四位下。然豐臣氏既亡、而織田氏祀、永與德川氏倶存。識者以爲其流澤遠出重盛之忠孝、近由信長之功德也。

訓讀 元和元年、兵再び起る。長益、少子尙長と、京師に出奔し、遂に關東に赴き、德川公に尾張に遇ひ、悉く城中の虛實を告ぐ。其の長子長正、雲生寺と稱し、猶ほ大坂に在り。元帥とならんと請ふ。衆、之を許さず。長正曰く「我は信長の從子にして、秀頼の從父なり。乃ち元帥と爲るも、何ぞ不可と爲さん。今は此くの如し。復何をか望まんや」と。亦京師に出奔す。事平ぐに及び、德川氏、長益の地を分ちて、芝村を長正に、柳本を尙長に賜ふ。幾何もなく、長益、卒す。信雄に賜ふに大和の宇多郡五萬石を以てす。寬永七年に卒す。第五子信友

嗣ぐ。第四子信良、兄秀雄國除かるゝに及び、召されて關東に至り、上野の小幡を賜ひ、二萬石を食む。信友の後、故有つて二萬石を削られ、丹波の柏原に徙さる。信良の後、故有つて二萬石を削られ、出羽の高畠に徙さる。此の四家竝に立つて以て今に至り、位從四位下に過ぎず。然れども豐臣氏既に亡び、而して織田氏の祀、永く德川氏と倶に存す。識者以て其の流澤、遠く重盛の忠孝に出で、近くは信長の功德に由ると爲す。

【通釋】元和元年大坂の兵がまた起つた。長益は少子尙長と京都に出奔し、それから關東に行き、途中德川公に尾張で出會ひ、全部城中の模樣を告げた。その長男の長正は雲生寺と稱し依然として大坂に居た。元帥となり度いと頼んだ。皆の者は之を許さなかつた。すると長正がいふのに「余は信長の甥で秀頼の叔父である。だから元帥になつたとて何處が悪い。然るに今やこのやうに拒絕された。此の上は何を望まうや」と。彼も亦京都に出奔した。事件が平定してから德川公は長益の土地を分けて芝村を長正に柳本を尙長に賜はつた。幾もなくして長益は死んだ。信雄は大和宇多郡の五萬石を賜はつた。信雄は寬永七年に歿した。第五子の信友が相續した。第四子信良は兄の秀雄が死んで國が取り上げられた時に召されて關東に至り、上野の小幡を賜はり二萬石を領した。信友の後は譯があつて二萬石を削られ、丹波の柏原に移された。信良の後は譯あつて一萬石を削られ、出羽の高畠に移された。この長正・尙長・信友・信良の四家は皆立つて今日まで殘つてゐて、その位は皆從四位下に過ぎない。併し豐臣氏は既に亡んで終つたが織田氏の血筋は絕えないで永く德川氏と一緒に殘つた。識者はこれはその先祖のお蔭で、遠くは平重盛の忠孝だつたことにより近くは信長の功德に由るものであると言つてゐる。

【語釋】元和（後水尾天皇の年號。）○虛實（無いこと有ること、即ちその樣子。）○芝村（大和）○信友之後有レ故（信友の孫信武、老臣二人を斬つて自殺したことをさす。）○信良之後有レ故（六世の孫信邦、大縣大貳の件に坐して出羽に移された。）

叙説　本論の大意は、信長が超世の才能を以て、尊王・經略の一枚看板で、荒らまし天下を統一したのを、豐臣德川が次いで大成し、遂に今日の御代となつたのである。だから信長の功勞は決して沒することは出來ぬものであるといふのである。

外史氏曰、往時平安故老、有及親元龜間事。言、其時宮闕墮廢、群兒入頽垣中、摶土爲戲。及織田公來、始有可觀云。

訓読　外史氏曰く、往時、平安の故老、元龜間の事を親るに及ぶものあり。言ふ、其の時、宮闕墮廢し、群兒頽垣の中に入り、土を摶ち戲を爲す。織田公來るに及んで、始めて觀る可き有りと云ふと。

通釋　外史氏が曰ふのに昔京都の老人で元龜時代の事を目擊した者があつた。その老人の言ふところによると、その當時御所は破れ崩れてゐて多勢の子供等が壞れた垣根の内側に入り込み、土の團子を作つて遊んで居た。織田公が來られてから始めて修繕され、やつと見られるやうになつたといふことである。

餘論　以上第一段、皇室の衰微した有樣を叙ぶ。

夫應仁以還、海内分裂、輦轂之下、每爲兵馬馳逐之場。非右府、誰能闢除草萊、以再造王室哉。及朝廷疇其功、擬以征夷之拜、則辭不受。蓋將家與王室、俱極衰頽、名重實輕。不猶所謂大將軍告身僅直一醉者耶。右府志在混同海宇、不欲遽冒虛名爾。

視之彼假關東管領、以誇鄰國者、其器量固有間焉。抑朝廷名器、不足輕重天下豪傑、至於如此。挾焉以令天下、天下未必聳動也。而右府爲之扶植經紀、懃懃不置。是其高義雖謂凌齊桓而駕晉文、可也。

訓讀　夫れ應仁以還、海内分裂し、輦轂の下、毎に兵馬馳逐の場となる。右府に非ざれば、誰か能く草萊を闢除し、以て王室を再造せんや。朝廷、其の功を醻ゆるに及び、擬するに征夷の拜を以てす。則ち辭して受けず。蓋し將家と王室と、倶に衰頽を極め、名重く實輕し。猶ほ所謂大將軍の告身、僅に一醉に直する者のごとからざらんや。右府の志は、海宇を混同するに在り。遽に虚名を冒すを欲せざるのみ。之を彼の關東管領を假り以て隣國に誇る者に視ぶれば、其の器量固より間あり。抑朝廷の名器、天下の豪傑を輕重するに足らざること、此くの如きに至る。挾みて以て天下に令するも、天下未だ必ずしも聳動せざるなり。而るに右府、之が爲めに扶植經紀し、懃懃として置かず。是れ其の高義、齊桓を淩ぎ、晉文を駕すと謂ふと雖も可なり。

通釋　夫れ應仁より以來天下は分れ裂け、天皇の御膝元はいつも兵馬の驅け逐ふ戰場となつて終つた。右大臣(信長)のやうな人でなかつたら誰か草むらを開拓して(亂世を治めること)王室を再興することが出來ようぞ。朝廷は信長の手柄に酬ゆることになつた時、征夷大將軍に任命しようとした。併し辭退して受けなかつた。思ふに當時、室町將軍は皇室と共に衰微を極め、官や位といふ名は大層重く尊かつたけれども、其の實際の權力は輕かつた。所謂「大將軍の辭令書も僅に一杯の酒の醉位の値打しかない」といつたやうなものであつた。信長の志は

天下を混一するにあつた。だから慌て、そんな實力のない虚名を名乘ることを欲しなかつたのである。これを彼の上杉謙信が關東管領の名前を借りてそれで隣國に誇つてゐたのに比べると、その器局度量は勿論大小の隔りがある。それ程まで朝廷の官爵や車服では天下の豪傑を輕重するに足らなかつたのである。(官爵車服を身につけたとて、それは何にもならなかつた。こけ威しに過ぎなかつた)だから之を挾んで天下に號令を出したところで天下の者は必ずしも驚き動くこともなかつたのである。(つまりそれ程朝廷は衰へて居られたのである。)而るに信長はその皇室の傾きかけたのを扶け起し、そのために見積り經營し、どこまでも親切にして止まなかつた。これは彼の立派な尊王の精神から出たことで、その大義は春秋の五覇なる齊の桓公をも凌ぎ晉の文公をも乘り越えてゐるといつても宜しいのである。

語釋 大將軍告身(唐代、官を受ける者の符を告身といふ。今日の辭令書のやうな物、肅宗の時、窮乏であつたので、諸將共に實質の伴はない空名の告身を賜つてゐた。これより以後、官爵が輕くなつて、大將軍の告身一通が僅に一醉に易ふといつた、狀態となつた。信長當時の將軍職もそれ位の程度のものであつた。)〇誇二隣國一(武田氏と談判の時謙信は關東の管領だと言つて威張り、北條討伐の時朱柄麾を持つて指揮したりした。)〇名器(名は官爵、器は乘物や其の他其の身分に附屬した調度類。)〇齊桓晉文(春秋五覇の内。)

叙説 以上第二段、信長が當時、他人の構はなかつた皇室を獨り尊んだ高義を論ず。

當是之時、群雄之割據方隅者、環視傍觀、而莫能出於此。其日夜所務、以代眠食者、曰、戰而已矣。而其所謂戰、徒較勝負於銖兩之間、拏攫搏嚙、以爭尋常。如武田・上杉・北條・毛利、概無不然。

【訓讀】是の時に當り、群雄の方隅に割據する者、環視傍觀して、能く此に出づる莫し。其の日夜務めて以て眠食に代ふる所の者は、曰く、戰のみ。而して其の所謂戰は、徒に勝負を銖兩の間に較し、拏攫搏嚙、以て、尋常を爭ふ。武田・上杉・北條。毛利の多き、概ね然らざるはなし。

【通釋】この當時群雄で一方一隅に割據して居る連中はたゞ周圍から取り卷いて眺め、傍觀してゐるのみで、よく信長のやつたやうな事をなすものとてはなかつたのである。彼等が明け暮れ一生懸命で眠つたり食つたりすることを忘れてやつて居たことは戰爭することだけであつた。そして彼等の所謂戰爭はたゞ瑣細なことから勝負をくらべ、つかみ合ひ打つ噬むといふ譯で、少しばかりの土地を爭つてゐた。武田・上杉・北條・毛利の如き、大抵然うでないものはなかつた。

【語釋】銖兩（極く輕量のこと。十黍が絫、十絫が銖、八銖が錙、二十四銖が兩。）

獨右府以超世之才、籠蓋而取之。其視武田・上杉、猶我藩籬、使其相持不決、日費其財賦、月弊其甲兵、適足以隔閡我東面。而我得以專力經略畿甸。畿甸已定、西面以臨毛利氏。如拉枯摧朽耳。於是、我疆土益大、兵力益强。以强大之我、加疲弊之敵、上杉・武田固不能支我。而北條氏孤立矣。則東國皆可圖也。是其成算夙定於胸中。奚必較區區勝敗哉。猶夫奕碁也。天下群雄、方守角依傍。而右府獨以全局制其勝。可

不ルレ謂ハ二之ヲ超世之才ト一歟。

【訓讀】獨り右府、超世の才を以て、籠蓋して之を取る。其の武田・上杉を視ること、猶ほ我が藩籬のごとく、其をして相持して決せず、日に其の財賦を費し、月に其の甲兵を斃らしめ、適〻以て我が東面を隔閡するに足る。而して我れ以て力を專にし畿甸を經略するを得たり。畿甸已に定る。西面して以て、毛利氏に臨む。枯を拉ぎ朽を摧くが如きのみ。是に於て、我が彊土益〻大、兵力益〻強し。強大の我を以て、疲敝の敵に加ふ。上杉・武田、固より我を支ふる能はず。而して北條氏、孤立す。則ち東國皆圖る可きなり。是れ其の成算、夙に胸中に定る。奚ぞ必ずしも區區の勝敗を較べんや。猶ほ夫の奕碁のごとし。天下の群雄、方に角を守り傍に依る。而して右府は、獨り全局を以て其の勝を制す。之を超世の才と謂はざるべけんや。

【通釋】たゞ信長だけは世にすぐれた才能を以て天下の英雄をひつくるめ、之を取り込んだ。武田・上杉を視ることは丸で自分の垣根のやうに心得二氏をして互に對抗させて、勝敗が決らず、日々、その財貨租稅を浪費せしめ、月々にその部下の甲兵を疲弊させ、却つて信長の東方面の敵を完全に此の二氏によつて隔て塞がしむる結果になつたのである。（二氏が垣になつてゐるので二氏より東の方の敵國はそれを越えて信長を攻める譯に行かぬ）だから信長力を專らにして京都近傍を經營攻略することが出來たのである。かくて京都近傍がすでに平定した。だから西に臨んで毛利氏に向ひ攻めたのである。その勢で以てすれば枯れたものを取りひしぎ、朽ちたものを打ち碎くやうなもので、至つて容易なことであつたのである。そこで毛利氏が平定さへすれば信長の領分は益〻大きく兵力は益〻強くなる譯である。この強大なる味方を以て財賦を費し、甲兵を疲弊せしめてある敵に向ふのである。

さしもの上杉・武田とて、勿論味方を支へることは出來ないであらう。かくて他の英雄が亡べば北條氏は一本立ちになつて終ふ。さうなれば東國は皆取つて終ふことが出來る。以上のやうな算用は早くから信長の胸の中に定まつてゐたのである。どうしてつまらぬ勝敗などを比べ爭ふ必要があつたらうや。（そんな必要はなかつたのである）丁度それは圍碁の樣なものである。天下の群雄は先づ碁盤の隅や片側を取ることを爭つてゐたのである。信長はたゞ碁盤全面に目をつけて全體的に勝を占めたのである。之をどうして世にすぐれた才能といはないで居られやうか。（超世の才と言はざるを得ない）

語釋 財賦（錢財、年貢米。）〇隔閡（隔て塞ぐこと。）

敍說 以上第三段、信長天下經略の大方針（强者を互に戰はせて置いて弱者から片附ける）を述べ、その超世の才能のあることを論ず。

然定數百年分裂之世、如治盤根錯節、必以勦蹶斬斷見功。其間必有大矯拂人心者。而取之甚難者、持之必太急。待將帥、御臣民、不能無猜忍刻厲之病。所以中道遭禍。亦勢之必至、不足深咎也。

訓譯 然れども數百年分裂の世を定むるは、盤根錯節を治むるが如く、必ず勦蹶斬斷を以て功を見る。其の間必ず大に人心を矯拂する者あり。而して之を取るに甚だ難き者は、之を持する必ず太だ急なり。將帥を待ち、臣民を御する、猜忍刻厲の病無き能はず。中道にして禍に遭ふ所以なり。亦勢の必ず至るもの、深く咎むるに

足らざるなり。

【通釋】しかし乍ら數百年來分裂して居つた世の中を平定するのは蟠つてゐる根や入り組んだ節くれを切り治めるやうなもので、必ず鋤で堀り返し、鉈で斷ち切つて始めて修理の功を見ることが出來るのである。さういふ風な荒療治をするのであるから、少々無理が伴ふもので、やつてゐる内に必ず人情に逆ひ戻るやうなことも起つて來る。そしてそのやうに非常に困難して取つたものは之を維持するにも隨分嚴しくするものである。だから自然將帥を待遇したり臣民を制御して行く上に猜疑殘忍苛刻暴厲といつたやうな缺點がない譯に行かないのである。此れが信長の事業半途で禍（明智の禍）に罹つて弑せられた所以なのである。これは必然的にさうなる勢であつたので深く咎めるにも及ばないのである。

【語釋】猜忍（疑ひ深く、薄情なこと。）○刻厲（手きびしいこと。）

【餘論】以上第四段、信長の缺陷は深く咎めるには足らぬことを叙ぶ。三島中州曰く文章補隙法と。

昔周世宗以英明之資、而抱混一之志。不牽衆言、厲精進取。雖半途而沒、而能開趙宋之業。右府之迹、蓋似之矣。而豐臣氏以右府將校、繼其成緒、能就其志。而至於尊王之義、經營四方之略、無一不師右府者。卽德川氏之興、亦不能不因此。以致王室・將家、竝見今日之盛。佐成大業、藩屛四方者、概係右府所置焉。則謂之右府之業亦

何不可。譬之築室。治其蕪穢、鏟其高卑、而又爲之鳩其材木、使後人加之繩墨斧斤、成而居之。嗚呼其勞寧可沒也。

訓讀 昔、周の世宗、英明の資を以て、混一の志を抱く。衆言に牽かれず、精を厲し進み取る。半途にして沒すと雖も、而も能く趙宋の業を開く。右府の迹は蓋し之に似たり。而して豐臣氏、右府の將校を以て、其の成緒を繼ぎ、能く其の志を就す。而して王を尊ぶの義四方を經營するの略に至つては、一として右府を師とせざる者は無し。卽ち德川氏の興る、亦此に因らざる能はず。以て王室・將家並に今日の盛を見るを致す。大業を佐け成し、四方に藩屛たる者、槪ね右府の置く所に係る。則ち之を右府の業と謂ふも、亦何ぞ不可ならん。之を室を築くに譬ふ。其の蕪穢を治め、其の高卑を鏟り、而して又之が爲めに其の材木を鳩め、後人をして之に繩墨斧斤を加へ、成つて之に居らしむ。嗚呼、其の勞寧ぞ沒すべけんや。

通釋 昔五代周の世宗は英邁明敏の生れつきを以て天下を混一する大志を抱いてゐた。だから多勢の者の言ふ事に惑はされず、精を出して進み取つた。不幸事業半途で死んだけれども、しかしその爲めに趙宋天下統一の事業の端緒を開いたのである。信長のやつた事業の跡は之に似て居る。そして豐臣氏は信長の將校から身を起し、信長の仕上げかゝつてゐた緖口を繼いで、能く信長の志を成就せしめた。そして秀吉が皇室を尊び奉つた大義と、四方を經營した策略とに至つては、一として信長を手本としないものはなかつたのである。自體德川氏の興つたのも亦この信長の遺策たる二事（尊王經略）に因らない譯には行かなかつたのである。かくして皇室と將軍家とが兩方とも今日のやうに隆盛を見るやうになつたのである。天下統一の大事業を助け成し諸侯となつて將軍

軍家のために四方で藩屏となつてゐる者は大抵信長が置いた者共である。だからこの天下統一の仕事は信長の事業といつても差支ないのである。たとへて見れば家を作るやうなものである。はじめに荒れた土地を切り拓き、地ならしをして高低をなくし、そして又之が爲めに建築に用ひる材木を集めてやり後の人をして墨繩斧を使つて建て前をこしらへ、それが出來てそこへ住居するといふやうにせしめたものである。あゝ信長の功勞はどうして之を沒却することが出來やうぞ。（信長が一切建築の支度をして秀吉がけづゝて家を建て出來上つた所へ家康が入り込んだのである）

【語釋】周世宗（五代周の第二代。）○趙宋（趙匡胤は周に繼いで天下を取り、國を宋と號した。二百年太平の本を開いた人。）○後人（豐臣、徳川。）

【餘論】以上第五段、徳川盛世の基礎は信長が築いたのであるから、その大功のあることは認めねばならぬと論結す。

日本外史新釋　卷十四終

利册終

昭和五年十二月十五日印刷
昭和五年十二月十八日發行

第十七回配本

昭和漢文叢書
日本外史新釋（利）

不許複製

著作者　賴成一
東京市神田區北神保町十一番地

發行者　辻本卯藏
東京市牛込區榎町七番地

印刷者　竹內喜太郎

東京市神田區北神保町十一番地

發行所　弘道館
電話九段一三六八・一三六九番
振替口座東京八一一五番

印刷所　日清印刷株式會社

次回配本

韓非子新釋　上卷　（目下組版中）

同　　　　　下卷　（目下組版中）

莊子新釋　　下卷　（目下組版中）

